岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 97

百間川原尾島遺跡 4

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査　X

1995

建設省岡山河川工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 97

百間川原尾島遺跡 4

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査　X

1 9 9 5

建設省岡山河川工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会

１．川内・三ノ坪調査区　旧河道２の橋脚列

２．旧河道２出土の広鍬未製品

３．旧河道２出土の石斧柄

巻頭図版２

１．丸田調査区〈10～13Ｃ・Ｄ区〉　弥生時代後期の遺構（北西から）

２．丸田調査区　弥生時代後期の竪穴住居１（北東から）

１．丸田調査区〈21～24Ｃ・Ｄ区〉　弥生時代後期の水田（北西から）

２．川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の水田（南東から）

巻頭図版４

１．丸田調査区　弥生時代後期の井戸２遺物出土状態

２．井戸２

３．丸田調査区　土壙34遺物出土状態（北西から）

１．丸田調査区　弥生時代後期の炉１（北西から）

２．丸田調査区　出土遺物〈(左)鉄剣形銅剣・(中)銅鏃・(右)石包丁〉

１．丸田調査区　溝13〈溝９との合流部〉(北東から)

２．溝13出土の土器

１．丸田調査区　古墳時代の竪穴住居８（南西から）

２．丸田調査区　井戸11出土土器

１．丸田調査区〈10～13Ｃ・Ｄ区〉　中世の遺構（南東から）

２．丸田調査区　中世の土壙墓１（東から）

序

承応３年（1654）７月、ときの藩主池田光政、城下の惨状をみて、「われ等一代の大難」と悲嘆し死を賭して天の加護を祈った。

強気の光政をしてこのように言わしめた洪水は、荒廃田畑11,660石、死者156人、城下の流出家屋1,455軒という大被害でありました。この洪水を契機として、頻繁に起こる旭川の洪水から岡山城下を守ることを目的として築造されたのが百間川であります。

百間川の洪水調節機能により、その被害程度は百間川築造前に比べ大幅に軽減されました。しかし、明治維新以降、山林の伐採と砂鉄採取の振興により、土砂の河床堆積が進行し、度々水禍に見舞われるようになりました。特に明治26年10月の洪水は旭川下流部へ特に甚大な被害をもたらしました。その後、百間川の改修は、昭和元年より内務省直轄改修事業として着手され、戦争による中断をはさみ、戦後、建設省が事業を引き継ぎ、地元の方々をはじめとする関係者のご協力を賜り、昭和49年より抜本的な改修工事を進めてまいっております。今年度におきましては、百間川と平面交差する道路の橋梁化のうち最後の橋となります中島・竹田橋が開通する運びとなっております。

建設省では、昭和51年より岡山県教育委員会に委託し、改修工事に先駆けて遺跡の発掘調査を行ってまいりました。その結果、住居跡や水田跡、多くの出土品が発掘されました。それらは、縄文時代から中世まで幅広い時代にわたっていることが確認されております。これらは、この地が古代から営々と連なる人々の活動の場であったことの証であり、人間活動に適した豊かな風土であったことを雄弁に物語っております。

本書は昭和57年から平成２年に実施された百間川原尾島遺跡の調査結果の一部をまとめたものです。本書が学術および文化の振興に寄与することを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会を始めとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表します。

平成６年９月

建設省岡山河川工事事務所

所長　益　倉　克　成

序

江戸時代に岡山城下を洪水から守るために築造された百間川は、岡山平野を南北に貫流する旭川の東岸から東に分岐し、操山の東端で南に大きく曲がって児島湾に注いでいます。この百間川の中流域は古くからの穀倉地帯であり、とくに緑豊かな自然が残された操山の北側から河川敷にかけては、動植物の宝庫としても知られています。そして、その地下には多くの貴重な遺跡も残されています。

昭和50年、かねてから建設省が計画していた旭川放水路（百間川）の改修工事が、本格的に着手されることが決まりました。岡山県教育委員会は、建設省岡山河川工事事務所と百間川遺跡の取り扱いについて協議を重ね、やむをえず破壊される部分については記録による保存処置をとることとなり、昭和51年度の確認調査に引き続いて昭和52年度から発掘調査に着手しました。

百間川遺跡群の発掘調査は本年で18年をむかえています。その間、縄文時代後期の集落や弥生時代中期の大形掘立柱建物、さらに弥生時代前期から後期の水田など、縄文時代から中世にいたる貴重な遺構・遺物が発見され、全国的にも非常に注目されています。

これらの調査の成果は、これまで調査報告書として順次刊行し、本書で10冊目となりますが、百間川原尾島遺跡の報告書では４冊目にあたります。本書に掲載した調査区からは、弥生時代前期の橋脚列とそこから出土した多くの木製品、弥生時代後期の集落と水田、溝で囲まれた中世の集落など、注目される遺構・遺物も多く発見されています。

この報告書が文化財の保護・保存、さらに今後の研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から種々の御教示と御指導を得、また建設省岡山河川工事事務所をはじめ関係各位から多大なご協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成６年９月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩之助

例　言

1．本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の委託を受け、岡山県教育委員会が1982（昭和57）年度から1990（平成２）年度に発掘調査を実施した、百間川原尾島遺跡の発掘調査報告書である。

なお本書は百間川原尾島遺跡の報告書としては４冊目にあたる。

2．百間川原尾島遺跡は、岡山市原尾島に所在する原尾島遺跡のうち、百間川河川敷に係る範囲をさす。

3．発掘調査は1984年10月以前を岡山県教育庁文化課が、1984年11月以降については岡山県古代吉備文化財センターが担当し、その総面積は6,000㎡である。

4．発掘調査および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（元岡山市犬島中学校校長）
近藤義郎（岡山大学名誉教授）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課）
山本悦世（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手）〈1993年４月から〉
鎌木義昌（岡山理科大学教授）〈1993年２月まで〉
角田　茂（元岡山市岡輝中学校教諭）
水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

5．報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センター職員平井　勝・高田恭一郎が担当し、1993年度に行った。

6．本文の執筆は調査担当者である平井　勝・岡本寛久・高田恭一郎が分担し、文責は各文末に示した。

7．本報告書に係わる自然遺物のうち、一部のものについて鑑定・同定および分析を下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのうちのいくつかについては報文をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

橋脚列の樹種	能城修一（農林省森林総合研究所木材利用部）
棗玉・勾玉の産地分析	藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
土壙墓出土の中世人骨鑑定	池田次郎（九州国際大学）
溝出土の人骨鑑定	浜田　穣（岡山理科大学理学部）
ガラス玉およびガラス滓	苅谷道郎（株式会社ニコン相模原製作所）
種実同定	パリノ・サーヴェイ
木器樹種同定・種子同定	パリノ・サーヴェイ
鉄剣形銅剣の分析	平尾良光・鈴木浩子・榎本淳子（東京国立文化財研究所保存科学部）
土器の胎土分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

鉄滓の分析	和鋼博物館
赤色顔料の分析	本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）
赤色顔料の分析	魚島純一（徳島県立博物館）
獣骨の鑑定	松井　章（奈良国立文化財研究所）

8．本書の編集は平井　勝が担当した。

9．出土遺物ならびに図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）に保管している。

凡　例

1．百間川原尾島遺跡は小字名で調査区を分けているが、これとは別に遺跡全体に20m方眼を組んでいる。上流（北西）から下流（南西）へのびる軸線にはA、B、C等とアルファベットを、それに直行する軸線には6、7、8等と数字を付しており、軸交点の南側の桝目を軸線名に区を付して8C区、25D区等と呼ぶ。

2．本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏6°30′を測る。なお、1／1000遺構全体図の北方位は真北である。

3．本報告書の土層断面図や遺構実測図の高度はすべて海抜高度である。

4．土層図の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』によっているが、数字等記載のない色名はこの限りではない。

5．本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は下記のとおり統一しているが、例外については縮尺率を明記している。

遺構

竪穴住居・建物1／80、井戸・土壙・土壙墓・溝断面1／30

遺物

土器1／4、土製品・石製品・金属製品1／2、木製品1／3、玉類1／1

6．土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径推定が困難なものである。

7．遺物番号は、土器以外のものについては材質を示すため、下記の略号を番号の前に付した。

石製品：S、金属製品：M、土製品：C、木製品：W、玉類：J

8．写真図版のうち、遺物写真の（　）内に番号があるものは、実測図が掲載されていないもので、遺物一覧（観察）表の整理番号（実測図番号）を付している。

9．本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土地理院の1／25000地形図、和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を複製・縮小したものである。

10．本報告書で使用した弥生時代から古墳時代前半期の時期は「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39において採用した、次頁に示す土器編年に基づいている。

編年対比表

時代		遺跡	百間川	雄町(註1)	上東・川入(註2)
弥生時代	前期	津島	百間川前期Ⅰ		
		門田	百間川前期Ⅱ	雄町 1	
			百間川前期Ⅲ	雄町 2	
				船山 3	
	中期	南方	百間川中期Ⅰ	高田	
				雄町 3	
		菰池	百間川中期Ⅱ	船山 5	
				菰池	
				雄町 4	
		前山Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前山東	
				雄町 5	
		仁伍		雄町 6	上東・鬼川市0
	後期	上東	百間川後期Ⅰ	雄町 7	上東・鬼川市Ⅰ
				雄町 8	
			百間川後期Ⅱ	雄町 9	上東・鬼川市Ⅱ
				雄町 10	
		グランド上層	百間川後期Ⅲ	＋	上東・鬼川市Ⅲ
		酒津	百間川後期Ⅳ	雄町 11	才の町Ⅰ
					才の町Ⅱ
古墳時代	前期	王泊六層	百間川古墳時代Ⅰ	雄町 12	下田所
				雄町 13	
			百間川古墳時代Ⅱ		亀川上層
				雄町 14	＋
			百間川古墳時代Ⅲ	雄町 15	川入・大溝上層

註1　正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1　岡山県教育委員会　1972年
註2　柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977年

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査および報告書作成の経緯 …… 5
　第１節　発掘調査の契機 …… 5
　第２節　調査および報告書作成の体制 …… 6
　第３節　調査の経過 …… 10
　第４節　報告書の作成 …… 12
第３章　調査の概要 …… 13
　第１節　丸田調査区 …… 13
　　１．丸田調査区の概要 …… 13
　　２．縄文時代の遺構・遺物 …… 17
　　(1)　焼土土壙 …… 17
　　３．弥生時代前期の遺構・遺物 …… 18
　　(1)　旧河道 …… 18
　　(2)　土壙 …… 25
　　(3)　溝 …… 26
　　４．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 37
　　(1)　水田 …… 37
　　(2)　竪穴住居 …… 40
　　(3)　建物 …… 43
　　(4)　井戸 …… 45
　　(5)　土壙 …… 60
　　(6)　柱穴列 …… 92
　　(7)　炉 …… 93
　　(8)　溝 …… 93
　　(9)　土器溜り …… 112
　　５．古墳時代の遺構・遺物 …… 118
　　(1)　竪穴住居 …… 118
　　(2)　建物 …… 121
　　(3)　井戸 …… 125
　　(4)　土壙 …… 128
　　(5)　鍛冶炉 …… 134

(6) 落ち込み …… 136
(7) 溝 …… 137
6．中世の遺構・遺物 …… 146
(1) 井戸 …… 146
(2) 土壙 …… 155
(3) 土壙墓 …… 168
(4) 落ち込み …… 169
(5) 溝 …… 171
7．その他の遺構および包含層の遺物 …… 179
第2節 従来下調査区 …… 185
1．従来下調査区の概要 …… 185
2．縄文時代の遺構・遺物 …… 185
(1) 土壙 …… 185
3．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 187
(1) 水田 …… 187
(2) 土壙 …… 187
(3) 溝 …… 188
4．古墳時代の遺構・遺物 …… 192
(1) 溝 …… 192
5．中世の遺構・遺物 …… 192
(1) 溝 …… 192
第3節 川内・三ノ坪調査区 …… 194
1．川内・三ノ坪調査区の概要 …… 194
2．弥生時代前期の遺構・遺物 …… 196
(1) 旧河道 …… 196
(2) 土壙 …… 212
(3) 溝 …… 215
3．弥生時代中期の遺構・遺物 …… 220
(1) 土壙 …… 220
(2) 溝 …… 220
4．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 229
(1) 水田 …… 229
(2) 溝 …… 231
(3) 土器溜り …… 235
5．古墳時代の遺構・遺物 …… 236
(1) 土壙 …… 236
(2) 柱穴列 …… 236
(3) 溝 …… 242

6．中世の遺構・遺物 …… 244
(1) 建物 …… 244
(2) 土壙 …… 247
(3) 溝 …… 247
7．包含層の遺物 …… 247
第4章 まとめ …… 248
第1節 遺構について …… 248
第2節 弥生土器について …… 250
1．内面朱付着土器 …… 250
2．器種組成 …… 251
3．煤付着土器 …… 253
4．黒斑 …… 259
付載 …… 266
付載1 百間川原尾島遺跡から出土した弥生時代前期橋脚列の柱の樹種 …… 266
付載2 百間川原尾島遺跡出土の棗玉、勾玉の産地分析 …… 275
付載3 百間川原尾島遺跡出土の一中世人骨 …… 277
付載4 百間川原尾島遺跡出土の人骨について …… 280
付載5 百間川原尾島遺跡出土ガラス玉およびガラス滓 …… 283
付載6 百間川原尾島遺跡出土の種実同定 …… 286
付載7 百間川原尾島遺跡出土の木器樹種同定、種子同定 …… 290
付載8 百間川原尾島遺跡から出土した鉄剣形銅剣についての自然科学的研究 …… 302
付載9 百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析 …… 307
付載10 百間川原尾島遺跡出土の鉄滓の調査 …… 313
付載11 百間川原尾島遺跡出土の赤色顔料について …… 322
付載12 百間川原尾島遺跡出土の赤色顔料の蛍光X線分析結果 …… 324
出土遺物一覧（観察）表 …… 326
1．土器観察表 …… 328
2．石製品一覧表 …… 338
3．土製品一覧表 …… 341
4．金属製品一覧表 …… 343
5．木製品一覧表 …… 345
6．玉類一覧表 …… 347
7．新旧遺構名称対照表 …… 348

図　目　次

第１図　百間川の位置 …… 1
第２図　百間川周辺遺跡分布図（S＝１／50000） …… 2
第３図　グリッドの設定と調査区（S＝１／4000）……11
第４図　10～15C・D区の北壁土層断面（S＝１／60）……13
第５図　19～24C・D区の北壁・中央トレンチ南壁（下段右端）土層断面（S＝１／60）……14
第６図　19～21A区の南壁土層断面（S＝１／60）……15
第７図　焼土土壙 ……17
第８図　旧河道１の北壁土層断面（S＝１／80）……18
第９図　丸田調査区　弥生時代前期の遺構全体図（S＝１／1000）……19
第10図　丸田調査区　弥生時代前期の遺構全体図（S＝１／500）……21
第11図　旧河道１出土遺物(1) ……22
第12図　旧河道１出土遺物(2) ……23
第13図　旧河道１出土遺物(3) ……24
第14図　土壙１・出土遺物 ……25
第15図　土壙２・出土遺物 ……25
第16図　溝１ ……26
第17図　丸田調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S＝１／1000）……27
第18図　丸田調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S＝１／1000）……29
第19図　丸田調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S＝１／500）……31
第20図　丸田調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S＝１／500）……32
第21図　丸田調査区〈10～15C・D〉　弥生時代後期の遺構全体図（S＝１／250）……33
第22図　丸田調査区〈19～24C・D，19・20A〉　弥生時代後期の遺構全体図（S＝１／250）……35
第23図　13～15C・D区の水田土層断面（S＝１／30）……37
第24図　21～24C・D区の水田土層断面（S＝１／30）……38
第25図　島状高まり１・２・３土層断面（S＝１／20）……39
第26図　竪穴住居１・出土遺物 ……40
第27図　竪穴住居２・出土遺物 ……41
第28図　竪穴住居３ ……42
第29図　建物１ ……42
第30図　建物２ ……42
第31図　建物３ ……43
第32図　建物４ ……43
第33図　建物５ ……43
第34図　建物６ ……44
第35図　建物７ ……44
第36図　井戸１・出土遺物 ……45
第37図　井戸２ ……46
第38図　井戸２出土遺物(1) ……47
第39図　井戸２出土遺物(2) ……48
第40図　井戸２出土遺物(3) ……49
第41図　井戸２出土遺物(4) ……50
第42図　井戸２出土遺物(5) ……51
第43図　井戸２出土遺物(6) ……52
第44図　井戸３ ……53
第45図　井戸３出土遺物 ……54
第46図　井戸４・出土遺物 ……55
第47図　井戸５ ……55
第48図　井戸５出土遺物 ……56
第49図　井戸６土層断面 ……57
第50図　井戸６出土遺物 ……58
第51図　井戸７・出土遺物 ……59
第52図　井戸８・出土遺物 ……60

第53図　井戸９ ……60
第54図　井戸９出土遺物(1) ……61
第55図　井戸９出土遺物(2) ……62
第56図　井戸９出土遺物(3) ……63
第57図　井戸９出土遺物(4) ……64
第58図　井戸９出土遺物(5) ……65
第59図　井戸９出土遺物(6) ……66
第60図　井戸９出土遺物(7) ……67
第61図　井戸９出土遺物(8) ……68
第62図　井戸10 ……69
第63図　土壙３ ……69
第64図　土壙３出土遺物 ……70
第65図　土壙４・出土遺物 ……71
第66図　土壙５・出土遺物 ……72
第67図　土壙６ ……72
第68図　土壙７ ……72
第69図　土壙７出土遺物(1) ……73
第70図　土壙７出土遺物(2) ……74
第71図　土壙７出土遺物(3) ……75
第72図　土壙８・出土遺物 ……75
第73図　土壙９・出土遺物 ……76
第74図　土壙10 ……76
第75図　土壙11・出土遺物 ……77
第76図　土壙12・出土遺物 ……78
第77図　土壙13・出土遺物 ……78
第78図　土壙14 ……79
第79図　土壙15 ……79
第80図　土壙16 ……79
第81図　土壙17・出土遺物 ……79
第82図　土壙18 ……80
第83図　土壙19 ……80
第84図　土壙20 ……80
第85図　土壙21・出土遺物 ……80
第86図　土壙22 ……81
第87図　土壙23・出土遺物 ……81
第88図　土壙24・出土遺物 ……81
第89図　土壙25 ……81
第90図　土壙25出土遺物 ……82
第91図　土壙26・出土遺物 ……82
第92図　土壙27 ……83
第93図　土壙28・出土遺物 ……84
第94図　土壙29・出土遺物 ……85
第95図　土壙31・32・33 ……86
第96図　土壙34 ……87
第97図　土壙34出土遺物(1) ……88
第98図　土壙34出土遺物(2) ……89
第99図　土壙34出土遺物(3) ……90
第100図　土壙34出土遺物(4) ……91
第101図　土壙34出土遺物(5) ……92
第102図　土壙35・出土遺物 ……93
第103図　土壙37・出土遺物 ……94
第104図　柱穴列１ ……94
第105図　炉１ ……94
第106図　溝２・３・４・５・６・７ ……95
第107図　溝２・３・４・５・７出土遺物 …96
第108図　溝９〈上〉・10〈下〉 ……96
第109図　溝９出土遺物 ……97
第110図　溝12・出土遺物 ……97
第111図　溝13 ……98
第112図　溝９と溝13・14の合流部 ……99
第113図　溝13出土遺物(1) ……100
第114図　溝13出土遺物(2) ……101
第115図　溝13出土遺物(3) ……102
第116図　溝15・出土遺物 ……103
第117図　溝16・出土遺物 ……104
第118図　溝17・出土遺物 ……105
第119図　溝16・17・19・20・出土遺物 …106
第120図　溝23 ……106
第121図　溝25 ……106
第122図　溝25出土遺物 ……107
第123図　溝27 ……109
第124図　溝28ａ・28ｂ ……109
第125図　溝29 ……109
第126図　溝30 ……110
第127図　溝31 ……110
第128図　溝32 ……110

第129図　溝33 ……110
第130図　溝34 ……110
第131図　溝35・36・37・出土遺物 ……111
第132図　溝38 ……111
第133図　溝39〈2〉・40〈1〉 ……111
第134図　溝41 ……111
第135図　溝43 ……111
第136図　土器溜り1出土遺物 ……112
第137図　丸田調査区　古墳時代の遺構全体図（S＝1／1000） ……113
第138図　丸田調査区〈10～15C・D〉　古墳時代の遺構全体図（S＝1／250） ……115
第139図　丸田調査区　古墳時代の遺構全体図（S＝1／500） ……117
第140図　竪穴住居4 ……118
第141図　竪穴住居5 ……118
第142図　竪穴住居6・出土遺物 ……119
第143図　竪穴住居7 ……119
第144図　竪穴住居7出土遺物 ……120
第145図　竪穴住居8 ……120
第146図　竪穴住居9・出土遺物 ……121
第147図　竪穴住居10・出土遺物 ……122
第148図　建物8・出土遺物 ……123
第149図　建物9 ……124
第150図　建物10 ……124
第151図　建物11 ……124
第152図　建物12 ……124
第153図　井戸11・出土遺物(1) ……124
第154図　井戸11出土遺物(2) ……125
第155図　井戸12・出土遺物 ……126
第156図　井戸13・出土遺物(1) ……127
第157図　井戸13出土遺物(2) ……128
第158図　井戸14・出土遺物 ……128
第159図　井戸15 ……129
第160図　土壙38 ……129
第161図　土壙39 ……129
第162図　土壙40・出土遺物 ……130
第163図　土壙41・出土遺物 ……130
第164図　土壙42 ……131
第165図　土壙43 ……131
第166図　土壙44 ……131
第167図　土壙45 ……132
第168図　土壙46 ……132
第169図　土壙47 ……132
第170図　土壙48・出土遺物 ……132
第171図　土壙49 ……133
第172図　土壙50 ……133
第173図　鍛冶炉1 ……134
第174図　落ち込み1（S＝1／60） ……135
第175図　落ち込み1出土遺物 ……136
第176図　溝44 ……137
第177図　溝45 ……137
第178図　溝46・出土遺物 ……138
第179図　溝47・出土遺物 ……138
第180図　溝48 ……138
第181図　溝49・50 ……138
第182図　溝51 ……138
第183図　溝52 ……138
第184図　溝53・出土遺物 ……139
第185図　溝54・55・出土遺物 ……139
第186図　溝56 ……139
第187図　溝57 ……139
第188図　溝59 ……141
第189図　溝60 ……141
第190図　溝61 ……141
第191図　溝62 ……141
第192図　溝63・出土遺物 ……141
第193図　溝64 ……142
第194図　溝65 ……142
第195図　溝66 ……142
第196図　溝67 ……144
第197図　溝70 ……144
第198図　溝71・72 ……144
第199図　溝73 ……144
第200図　溝74 ……144

第201図　井戸16・出土遺物 ……146
第202図　丸田調査区　中世の遺構全体図（S＝1／1000）……147
第203図　丸田調査区〈10～15C・D〉　中世の遺構全体図（S＝1／250）…149
第204図　丸田調査区　中世の遺構全体図（S＝1／500）……151
第205図　井戸17 ……152
第206図　井戸17出土遺物 ……153
第207図　井戸18 ……154
第208図　井戸18出土遺物 ……155
第209図　土壙51 ……156
第210図　土壙52・出土遺物 ……156
第211図　土壙53 ……157
第212図　土壙54 ……157
第213図　土壙55・出土遺物 ……158
第214図　土壙56 ……158
第215図　土壙57・出土遺物 ……159
第216図　土壙58 ……159
第217図　土壙59 ……160
第218図　土壙59出土遺物 ……161
第219図　土壙60 ……161
第220図　土壙61 ……161
第221図　土壙62 ……161
第222図　土壙63 ……161
第223図　土壙64 ……161
第224図　土壙65・出土遺物 ……161
第225図　土壙66 ……162
第226図　土壙67 ……162
第227図　土壙68（S＝1／60）……162
第228図　土壙69 ……163
第229図　土壙70・出土遺物 ……163
第230図　土壙71 ……164
第231図　土壙72 ……164
第232図　土壙73 ……165
第233図　土壙74 ……165
第234図　土壙75 ……165
第235図　土壙76 ……165
第236図　土壙77・出土遺物 ……166
第237図　土壙78（S＝1／60）……167
第238図　土壙79 ……167
第239図　土壙80 ……168
第240図　土壙墓1 ……168
第241図　土壙墓2 ……168
第242図　落ち込み2・出土遺物 ……169
第243図　落ち込み3・出土遺物（S＝1／100）……170
第244図　溝75・出土遺物 ……171
第245図　溝76・78・出土遺物 ……171
第246図　溝77・出土遺物 ……171
第247図　溝79・出土遺物 ……171
第248図　溝80 ……172
第249図　溝81 ……172
第250図　溝82 ……172
第251図　溝83 ……172
第252図　溝84 ……172
第253図　溝85・出土遺物 ……174
第254図　溝86・出土遺物 ……174
第255図　溝87・出土遺物 ……175
第256図　溝88 ……176
第257図　溝89・90・出土遺物 ……176
第258図　溝91・出土遺物 ……176
第259図　溝93 ……176
第260図　溝94・95 ……176
第261図　溝96 ……178
第262図　溝97 ……178
第263図　溝98 ……178
第264図　溝99 ……178
第265図　その他の遺構出土遺物(1) ……179
第266図　その他の遺構出土遺物(2) ……180
第267図　その他の遺構出土遺物(3) ……181
第268図　包含層出土遺物(1)〈10～13C・D区〉……182
第269図　包含層出土遺物(2)〈10～13C・D区，13～15C・D区〉……183

第270図　包含層出土遺物(3)
〈13～15C・D区，19～25C・D区〉
……184
第271図　従来下調査区　縄文時代の遺構全体図（S＝1／250）……185
第272図　土壙81・出土遺物……185
第273図　18・19H区北壁土層断面（S＝1／60）……186
第274図　従来下調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S＝1／250）
……187
第275図　従来下調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S＝1／250）……187
第276図　土壙82……187
第277図　溝101……188
第278図　溝102・出土遺物……188
第279図　溝105……189
第280図　溝106……189
第281図　溝108……189
第282図　溝109出土遺物……189
第283図　溝110・出土遺物……190
第284図　溝111……191
第285図　溝112・出土遺物……191
第286図　従来下調査区　古墳時代の遺構全体図（S＝1／250）……192
第287図　溝113・出土遺物……192
第288図　従来下調査区　中世の遺構全体図（S＝1／250）……193
第289図　溝114……193
第290図　溝115……193
第291図　溝116……193
第292図　微高地坪掘断面（S＝1／40）…194
第293図　33～36C・D区北壁土層断面（S＝1／80）……195
第294図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代前期の遺構全体図（S＝1／500）…196
第295図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代前期の遺構全体図（S＝1／1000）…197
第296図　旧河道2断面（S＝1／60）……199
第297図　旧河道2出土遺物(1)……200
第298図　旧河道2出土遺物(2)……201
第299図　旧河道2出土遺物(3)……202
第300図　旧河道2出土遺物(4)……203
第301図　旧河道2出土遺物(5)……204
第302図　旧河道2出土遺物(6)……205
第303図　旧河道2出土遺物(7)……206
第304図　旧河道2出土遺物(8)……207
第305図　旧河道2出土遺物(9)……208
第306図　旧河道2出土遺物(10)……209
第307図　橋脚列全体図（S＝1／150）…209
第308図　橋脚列〈北半部〉（S＝1／60）…210
第309図　橋脚列〈南半部〉（S＝1／60）…211
第310図　土壙83……212
第311図　土壙84……213
第312図　土壙85・出土遺物……213
第313図　土壙86……214
第314図　土壙87……214
第315図　土壙88……214
第316図　土壙89……214
第317図　溝120出土遺物〈左〉、溝121・出土遺物〈右〉……215
第318図　溝122〈右〉・123〈左〉……215
第319図　溝122出土遺物……216
第320図　溝124……216
第321図　溝125……217
第322図　溝126……217
第323図　溝127（S＝1／40）……218
第324図　溝127出土遺物……219
第325図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代中期の遺構全体図（S＝1／500）…220
第326図　土壙90……220
第327図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代中期の遺構全体図（S＝1／1000）…221
第328図　溝128出土遺物……223
第329図　溝129……223
第330図　溝130……223

第331図　溝131〈左〉・132〈右〉・出土遺物 ……224
第332図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S＝1／1000）…225
第333図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S＝1／1000）……227
第334図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S＝1／500）…229
第335図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S＝1／500）……229
第336図　大畦土層断面（S＝1／30）……230
第337図　水田層出土遺物 ……230
第338図　34・35D区稲株痕（S＝1／60）……231
第339図　畎畝・島状高まり5土層断面（S＝1／80）……232
第340図　溝139〈左〉・140〈右〉……232
第341図　畎畝上面出土遺物 ……232
第342図　島状高まり4、溝119・120・133・134・135・出土遺物（S＝1／60）……233
第343図　溝136 ……233
第344図　溝136出土遺物 ……234
第345図　溝137・出土遺物 ……234
第346図　溝138 ……235
第347図　土器溜り2（畎畝内）・出土遺物 ……235
第348図　川内・三ノ坪調査区　古墳時代の遺構全体図（S＝1／500）……236
第349図　土壙91 ……236
第350図　川内・三ノ坪調査区　古墳時代の遺構全体図（S＝1／1000）……237
第351図　溝145・146・147、柱穴列3・4・5（S＝1／150）……239
第352図　溝145・146・147・148、柱穴列4・5（S＝1／40）……240
第353図　柱穴列6（S＝1／60）……241
第354図　溝141 ……242
第355図　溝142・143 ……242
第356図　溝144 ……242
第357図　溝145出土遺物 ……243
第358図　溝147出土遺物 ……243
第359図　川内・三ノ坪調査区　中世の遺構全体図（S＝1／500）……244
第360図　建物13 ……244
第361図　川内・三ノ坪調査区　中世の遺構全体図（S＝1／1000）……245
第362図　土壙92・出土遺物 ……247
第363図　溝149 ……247
第364図　包含層出土遺物 ……247
第365図　内面朱付着土器と石杵 ……250
第366図　弥生時代後期の遺構別器種組成…251
第367図　百間川遺跡群の時期別器種組成…252
第368図　弥生時代後期の甕の煤付着類型…254
第369図　煤付着土器(1) ……255
第370図　煤付着土器(2) ……256
第371図　煤付着土器(3) ……257
第372図　煤付着土器(4) ……258
第373図　黒斑を有する土器(1) ……260
第374図　黒斑を有する土器(2) ……261
第375図　黒斑を有する土器(3) ……262
第376図　黒斑を有する土器(4) ……263
第377図　黒斑を有する土器(5) ……264

表　目　次

表1　百間川原尾島遺跡調査一覧 ……10

図 版 目 次

図版1　1　10～13C・D区作業風景（西から）
　　2　13～15C・D区作業風景（北東から）
　　3　10～13C・D区作業風景（南東から）
図版2　1　11C区北壁断面（南から）
　　2　14C区北壁断面（南から）
　　3　14C区北壁断面（南から）
　　4　22C区北壁断面（南西から）
図版3　1　焼土土壙（南西から）
　　2　旧河道1（北から）
　　3　溝1（北東から）
図版4　1　13～15C・D区弥生時代後期の水田（北西から）
　　2　21～24C・D区弥生時代後期の水田（北西から）
図版5　1　23・24C・D区弥生時代後期の水田（北東から）
　　2　19～21A区弥生時代後期の水田（南東から）
図版6　1　10～13C・D区弥生時代後期の遺構（北西から）
　　2　竪穴住居1（北東から）
図版7　1　竪穴住居2（北東から）
　　2　19C・D区弥生時代の遺構（北東から）
図版8　1　20C・D区弥生時代の遺構（北東から）
　　2　20・21C・D区弥生時代の遺構（南東から）
図版9　1　21～24C・D区弥生時代後期の遺構（南東から）
　　2　19～21A区弥生時代の遺構（南東から）
図版10　1　建物1・2（南東から）
　　2　建物3（南西から）
　　3　建物4（北東から）
図版11　1　建物5・6・7（北西から）
　　2　建物5（北東から）
　　3　井戸1（北東から）
図版12　1　井戸2（北東から）
　　2　井戸2の断面（南東から）
　　3　井戸2の遺物出土状況（東から）
図版13　1　井戸3（西から）
　　2　井戸4（西から）
　　3　井戸6（南西から）
図版14　1　井戸7（南西から）
　　2　井戸7の井戸枠出土状態（南西から）
　　3　井戸8（南西から）
図版15　1　井戸9（南西から）
　　2　井戸9の遺物出土状況（北西から）
　　3　井戸10（南東から）
図版16　1　土壙11の断面（西から）
　　2　土壙21（北西から）
　　3　土壙23（東から）
図版17　1　土壙28（北から）
　　2　土壙34〈左〉・35〈右〉（北西から）
　　3　土壙34遺物出土状態（北から）
　　4　土壙35の断面（南西から）
図版18　1　炉1（北西から）
　　2　炉1の断面（南東から）
　　3　溝9（北西から）
図版19　1　溝13（北東から）
　　2　溝9と溝13の合流部の礫床（東から）
　　3　溝13・15・16（北東から）
図版20　1　溝17・18・19・20（北東から）
　　2　溝25（南東から）

3　溝28ａ・28ｂ（北東から）
図版21　1　土器溜り１（北西から）
2　竪穴住居４・５（北東から）
3　竪穴住居６（東から）
図版22　1　竪穴住居７（南東から）
2　竪穴住居８（南西から）
3　竪穴住居８のカマド（南西から）
図版23　1　竪穴住居９（南西から）
2　竪穴住居９の鉄剣形銅剣出土状況（北東から）
3　竪穴住居10（北東から）
図版24　1　建物８（北西から）
2　建物９・10・11（北東から）
3　井戸11（北東から）
図版25　1　井戸11の遺物出土状況（北東から）
2　井戸12の遺物出土状況（西から）
3　井戸12の断面（南西から）
図版26　1　井戸13遺物出土状態（西から）
2　井戸13（北から）
3　井戸14（南から）
図版27　1　井戸15（南東から）
2　井戸15の断面（南東から）
3　土壙42の断面（南西から）
図版28　1　土壙44（西から）
2　溝54・55・土壙49（北から）
3　鍛冶炉１（北西から）
図版29　1　溝45（北東から）
2　溝60・61・63・65・66（北東から）
図版30　1　10～13Ｃ・Ｄ区の中世遺構（南東から）
2　10～13Ｃ・Ｄ区の中世遺構（北から）
図版31　1　井戸16（北から）
2　井戸16の礫出土状態
3　13～15Ｃ・Ｄ区の中世遺構（北西から）
図版32　1　井戸17（南から）
2　井戸17の遺物出土状態（東から）
3　井戸18（北から）
4　井戸18の遺物出土状態（南から）
図版33　1　土壙51（北東から）
2　土壙68（北から）
3　土壙69（西から）
図版34　1　土壙76〈手前〉・77〈向う側〉（西から）
2　土壙墓１の石組（東から）
3　土壙墓１の人骨出土状況（東から）
図版35　1　落ち込み２（北から）
2　溝87遺物出土状況（東から）
3　溝98（北東から）
図版36　1　19Ｈ区弥生時代の遺構〈溝110〉（北東から）
2　18Ｈ区弥生時代の遺構（北西から）
図版37　1　旧河道２（北東から）
2　旧河道２の橋脚列検出状態（北東から）
3　旧河道２の橋脚列周辺の木製品出土状態
4　旧河道２の橋脚列周辺の木製品出土状態
図版38　1　旧河道２の橋脚列（南東から）
2　旧河道２の橋脚列（南から）
3　旧河道２の断面
図版39　1　土壙84（東から）
2　土壙89（南から）
3　溝122〈右〉・123〈左〉（北東から）
図版40　1　溝127（北東から）
2　溝127の断面（北東から）
3　溝127の断面（北東から）
4　土壙90（南東から）
図版41　1　34・35Ｃ・Ｄ区の溝群（北東か

ら）
2　33～36C・D区弥生時代後期の水田（北西から）
図版42　1　34・35D区の稲株痕（北東から）
2　畎畝〈溝138・139〉（北東から）
3　溝133・134・135（北東から）
図版43　1　溝136〈右〉・137〈左〉（北東から）
2　溝136の遺物出土状態（北東から）
3　溝137の遺物出土状態（南西から）
図版44　1　柱穴列3・4・5（南東から）
2　柱穴列5（南東から）
3　柱穴列6（北東から）
図版45　1　溝141〈右〉・142〈左〉（北東から）
2　溝145・146・147（南東から）
3　溝145（南東から）
図版46　1　建物13（南から）
2　土壙92（東から）
3　33～36C・D区作業風景（南東から）
図版47　1　旧河道1出土遺物
図版48　1　旧河道1出土遺物
2　旧河道2出土遺物
3　土壙1出土遺物
図版49　竪穴住居1・井戸1・井戸2出土遺物
図版50　井戸2出土遺物
図版51　井戸2出土遺物
図版52　井戸2・3出土遺物
図版53　井戸3・5・6・7・9出土遺物
図版54　井戸9出土遺物
図版55　井戸9出土遺物
図版56　井戸9出土遺物
図版57　井戸9・土壙3・7出土遺物
図版58　土壙7出土
図版59　土壙7・13出土遺物
図版60　土壙13・23・34出土遺物
図版61　土壙34出土遺物
図版62　土壙34・37・溝13出土遺物
図版63　溝13・17・25出土遺物
図版64　溝25・竪穴住居10出土遺物
図版65　井戸11・12・14・落ち込み1・溝47・63出土遺物
図版66　旧河道1・井戸17・18・旧河道2出土木製品
図版67　旧河道2出土木製品
図版68　1．金属製品
2．石製品(1)
図版69　石製品(2)
図版70　石製品(3)
図版71　石製品(4)
図版72　土製品

第１章　地理的・歴史的環境

百間川の位置する旭川東岸の平野は俗に旭東平野と呼ばれ、岡山市街地が広がる西岸平野とは異なり、穀倉地帯となっている。この旭東平野は西を旭川、北は竜の口山丘陵、そして南は操山丘陵、さらに東は芥子山および山王山丘陵によって区画され、地理的にはまとまりのある地域である。

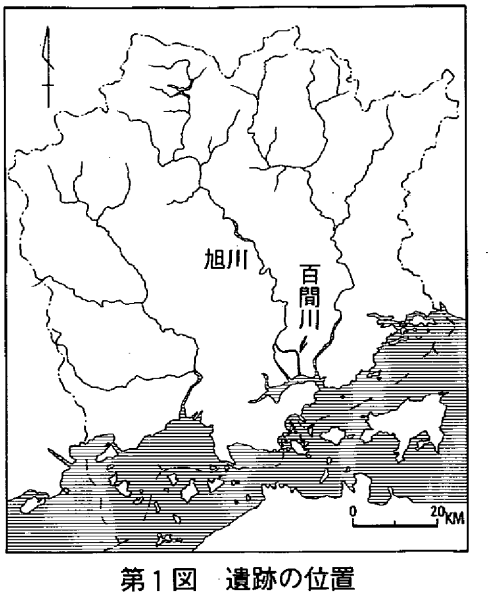
現在の地図で旭川東岸を見ると、実に広い平野部が認められる。しかし、中世まで操山丘陵の南側は海であり、それ以前の可耕地は操山丘陵の北側、南北約３㎞、東西約４㎞の範囲となる。

さて、中世の旭東平野には操山丘陵の東端と芥子山の間から海が少し入りこんでいたと推定されるものの、ほぼ現在の地形は出来上がっていたものと思われる。ではそれ以前はどうなっていたのであろうか。

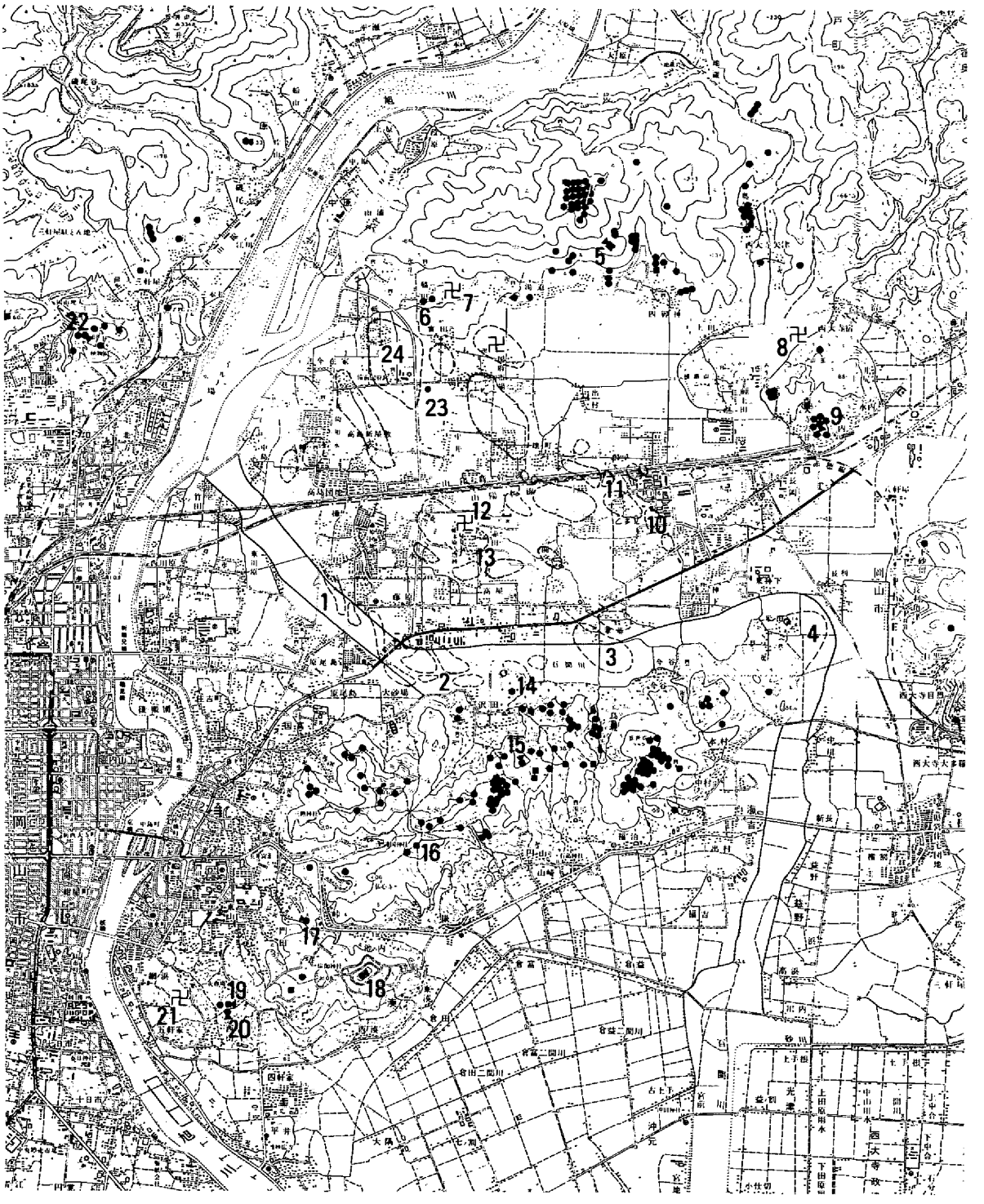
百間川河川敷内のボーリングデーターを見ると、地下９ｍ以下には円礫が認められることから、河原であったと思われ、更新世には旭川の一部が岡山市中原付近から南東方向に向かい、操山丘陵と芥子山の間を南に流れていたものと推定される。その後、この上に土砂が堆積しており、約6000年前とされる百間川原尾島遺跡や沢田遺跡の微高地下の砂層上面の腐食物層が海抜50㎝前後であることから、旭東平野の微高地の基盤は出来つつあったものと考えられる。ところで、この微高地下の砂層は縄文海進最盛期の三角州堆積物であるとされている（註１）。これは旭川が岡山県中・北部で丘陵を深く削りながら多くの土砂を運び、岡山平野で一気に吐き出すことに起因する。すなわち、岡山市中原で一気に吐き出された土砂は、中原付近を頂点とし、東南方向へ緩く傾く扇状地を形成する。その末端は国府市場、雄町、清水付近で、さらに南側は三角州低地となる。この三角州地帯が弥生小海退に伴う浅谷の開削作用を受けて分断されたものが微高地になったとされる（註２）。ただ、微高地は弥生時代以前に形成されていることなど、発掘調査の所見と齟齬をきたすことも少なくなく、今後さらに検討を要するものと考えられる。ともあれ、弥生時代の微高地はさらに洪水などの河川の堆積作用によって高くなるとともに、微高地を分断していた小河川や低位部も埋没し、時代を経るとともに生活の舞台は広がっていった。

旭東平野およびそれを取り巻く丘陵には多くの遺跡が所在するが、先土器・縄文時代の遺跡はなお少ない。このうち先土器時代の遺物は操山丘陵でナイフ形石器などが採集されている（註３）ものの、遺跡の実態は不明である。

縄文時代の遺跡はすべて平野に存在する。もっとも古い遺物は百間川沢田遺跡の旧河道から出土した中期後半の土器であるが、量はわずかである（註４）。これに対して、後期になると質量ともに増加することから、平野部への進出が盛んになったことがうかがえる。特に百間川沢田遺跡では後期から晩期を通じて遺物が認められる。その一つは操山丘陵から北に向かって派生した丘陵裾部から微高地にかけての集落である。時期は後期の後半で、多量の土器など



第１図　遺跡の位置



1．百間川原尾島遺跡　2．百間川沢田遺跡　3．百間川兼基・今谷遺跡　4．百間川米田遺跡
5．備前車塚古墳　6．唐人塚古墳　7．賞田廃寺　8．井寺廃寺　9．山王山古墳　10．乙多見遺跡
11．雄町遺跡　12．幡多廃寺　13．赤田遺跡　14．沢田大塚古墳　15．金蔵山古墳　16．旗振台古墳
17．操山103号墳　18．湊茶臼山古墳　19．網浜茶臼山古墳　20．操山109号墳　21．網浜廃寺
22．一本松古墳　23．中井・南三反田遺跡　24．備前国府推定地

第２図　百間川周辺遺跡分布図（S：1/50,000）

とともに地床炉やドングリ貯蔵穴などが発見された（註５）。さらに、晩期後半の遺物は微高地全体で認められるが、このうち太形蛤刃石斧や石包丁形石器の存在は、すでに水稲農耕を行なっていたことを思い起こさせる（註６）。晩期における拡大は一遺跡内だけでなく、遺跡数にも見て取れる。百間川遺跡群においても原尾島遺跡、今谷・兼基遺跡、米田遺跡で遺物が出土し、さらに雄町遺跡（註７）など平野全体に広がっている。

弥生時代の遺跡は平野部で多く発見されている。この内の多くは縄文晩期から続くものが多いが、これまでのところ前期のもっとも古い時期が欠けており、ここに断絶が認められる。百間川遺跡群では原尾島遺跡、沢田遺跡、今谷・兼基遺跡、米田遺跡で遺構遺物が発見されているが、沢田遺跡では環濠集落が認められた。環濠はおよそ90×100mの規模で、その内側には竪穴住居４軒、円形周溝遺構２基等が検出された（註８）。こうした防禦施設の存在は、旭東平野においても緊張関係が顕在化しつつあったことを物語っている。

弥生時代中期の遺跡は百間川遺跡群に加え、赤田遺跡（註９）、乙多見遺跡（註10）などが知られている。百間川兼基・今谷遺跡では、大形の掘立柱建物を始め多くの遺構や遺物が出土しており、旭東平野における拠点集落のひとつと考えられる（註11）。この遺跡の南側に位置する操山丘陵の谷部からは３個の銅鐸が出土しており（註12）、さらに丘陵上には今谷貝塚があり、これらとの関係が注目される。

弥生時代後期の遺跡は、遺構や遺物がわずかに認められるものを含めると、かなり増加しており、また規模の拡大も著しい。とりわけ百間川原尾島遺跡では多くの住居址が検出されており、中核的集落の一つであったことが窺われる（註13）。こうした微高地上の集落の間には広大な水田が広がっている。水田は小規模であるが前期から認められ、中期には前期の水田を拡大しているもののなお小規模であると思われる。しかし、洪水の砂でおおわれた百間川遺跡群の後期の水田は、原尾島遺跡から今谷遺跡まで約３kmにも及び、中期までとは比較にならないほど飛躍的発展を遂げている。この水田は旭東平野全体に広がっている可能性が高く、こうした豊かな生産力を背景として、古墳時代の幕開けを告げる備前車塚古墳が出現したのであろう。

旭東平野を取り巻く丘陵には多くの古墳が築造されている。その多くは後期に属する小規模な円墳であるが、大形の前方後円墳なども少なからず認められる。竜の口山丘陵には三角縁神獣鏡等13面の鏡を出土した備前車塚古墳（註14）、山王山丘陵には特殊器台形埴輪をもつ宍甘山王山古墳（註15）など、初期の古墳が所在する。操山丘陵にも特殊器台形埴輪をもつ網浜茶臼山古墳や操山109号墳（註16）、湊茶臼山古墳（註17）、金蔵山古墳（註18）の継続的築造が認められる。これら操山丘陵の古墳は旭東平野を基盤とする首長墳であるが、同時に海に面した位置にあり、海上交通との関わりも無視できない。

さて、この地域の古墳はこれまですべて丘陵上に所在していたが、中井・南三反田遺跡では平野で古墳が確認されている（註19）。墳丘は削平されているが、残存する周堀から小規模な古墳が群集していたことが窺われ、今後はこのような古墳も視野にいれた検討が必要である。

古代には備前の国府がおかれていたといわれているが、現在の所それを証明する遺構遺物の出土はない。ただ、官衛関連施設と考えられる倉庫群が検出された百間川米田遺跡（註20）、そして「祓」の儀式を執り行った場所ではないかといわれる溝が検出された百間川原尾島遺跡（註21）の成果からは、国府とあわせて考えたほうが理解しやすい。寺院址は壇上積基檀で整備された賞

田廃寺（註22）や幡多廃寺（註23）にくわえ、井寺廃寺が知られている。

中世の集落は百間川原尾島遺跡や米田遺跡で認められる。原尾島遺跡では溝で囲まれた屋敷と普通の建物とが検出されている（註24）。これに対して米田遺跡は海浜の集落で、立派な建物や井戸とともに、運河と思われる大溝が検出されている（註25）。また今谷遺跡ではハイガイを主体にした貝塚も発見されている。

註

註１　藤原健蔵・白神宏「岡山平野中部の沖積層と海水準変化」『瀬戸内海地域における完新世海水準変動と地形変化』　1986年

註２　註１の文献に同じ

註３　鎌木義昌「第１編　原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市　1962年

註４　岡田博他「百間川沢田遺跡２・百間川長谷遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　1985年

註５　平井勝・岡本寛久他「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　1993年

註６　註５の文献に同じ

註７　高橋護・正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』１　1972年

註８　註５の文献に同じ

註９　出宮徳尚・根木修他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団　1975年

註10　正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』３　1973年

註11　正岡睦夫他「百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　1982年

註12　鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961年

註13　正岡睦夫他「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　1984年
平井勝・宇垣匡雅他「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　1994年

註14　近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻　1986年

註15　宇垣匡雅「吉備の前期古墳－Ⅱ　宍甘山王山古墳の測量調査－」『古代吉備』第10集　1988年

註16　宇垣匡雅「竪穴式石室の研究－使用石材の分析を中心に－」『考古学研究』第34巻第１号・第２号　考古学研究会　1987年

註17　近藤義郎「湊茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻　1986年

註18　西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館　1959年

註19　桑田俊明「中井・南三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92　1994年

註20　井上弘他「百間川当麻遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52　1982年

註21　『所報　吉備』第６号　岡山県古代吉備文化財センター　1989年

註22　出宮徳尚・伊藤晃・水内昌康『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1971年

註23　註10の文献に同じ

註24　註14の文献に同じ

註25　柳瀬昭彦他「百間川米田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74　1989年

第２章　調査および報告書作成の経緯

第１節　発掘調査の契機

岡山平野を南北に貫流する旭川の東岸に所在する百間川遺跡は、国道２号線の百間川橋をはさんでＡ地点とＢ地点の２箇所が周知されていた。1968（昭和43）年、建設省が旭川放水路（百間川）の改修工事を計画していることを知った岡山県教育庁文化課は、建設省岡山河川工事事務所に対し、以下の要望を行った。第１に、改修工事計画予定地には文化財保護法に基づく、周知の遺跡である「百間川遺跡」が所在すること、第２に、事業者である建設省は、文化財保護法に基づく措置、特に1957（昭和32）年６月11日閣議了解になった「文化財保護に関する関係官庁間の連絡強化について」の趣旨にそって、事前に文化財の保護に遺漏のないように計らうこと、の大略二点である。これに対して建設省は、河川内の土地買収交渉及び工事施工の調査計画を進める段階であるとの回答であった。

その後建設省は、計画にそって地元耕作者と土地買収交渉に入り、難航の末1974（昭和49）年に決着をみたことから、1975（昭和50）年10月には河川敷に工事用道路を施工するなどして、本格的工事に入る姿勢を示した。

岡山県教育委員会は、このような改修事業の状況をふまえ、直ちに協議を申し入れ、実情の聴取と、改修事業に伴う百間川遺跡の取り扱いについて協議した。その結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施工することで合意した。

1976（昭和51）年４月には、建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所長名で、文化財保護法第57条の３に先立つ事前協議の文書が提出され、これに基づいて協議を重ねた。そして1976年９月１日付けで、中国地方建設局長より確認調査の依頼文書が提出され、同年11月１日から確認調査を実施するに至った。

確認調査（第１次調査）は、低水路部分の遺跡の確認および古地形の復原と新田サイフォン部分の一部発掘調査で、1976年11月１日から1977（昭和52）年３月31日まで実施した。その結果、岡山市原尾島（第１微高地）、同沢田（第２微高地）、同兼基・今谷（第３微高地）の３箇所に微高地が広がり、そこに遺跡が所在することが判明した。

1977年からは、確認調査の成果を基に建設省の工事計画にそって発掘調査を進め、現在も継続中である。この間、調査の進展とともに各微高地間にも弥生時代後期水田など遺跡の広がりが確認され、また確認調査では海ではないかと考えられていた岡山市米田（旧当麻遺跡）一帯も、遺跡であることが判明するなど、発掘調査対象範囲は著しく増加した。これに加え、縄文時代の遺構・遺物が発見されたことから、調査深度もさらに増すこととなった。（平井）

第２節　調査および報告書作成の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け、昭和52年度から実施しており、現在も継続している。調査開始から発掘調査の主管は岡山県教育庁文化課であるが、昭和59年11月からは発掘調査の実施については岡山県古代吉備文化財センターが担当している。

今回報告する原尾島遺跡は、昭和59・62・63・平成元・２年度に実施したものである。調査員は昭和59年度は８名４班であったが、昭和60年度からは６名３班体制となり、さらに昭和62年度からは３名１班となり現在に至っている。また、報告書の作成は、調査員２名で平成５年度に行なった。

発掘調査と報告書の作成にあたっては、遺跡の保護・保存ならびに調査の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

池葉須藤樹　元岡山市犬島中学校長

近藤義郎　岡山大学名誉教授
岡山県文化財保護審議会委員

出宮徳尚　岡山市教育委員会文化課

山本悦世　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手
（平成５年４月から）

鎌木義昌　岡山理科大学教授
岡山県文化財保護審議会委員
（平成５年２月まで）

角田　茂　元岡山市岡輝中学校教諭

水内昌康　元岡山市桑田中学校長
岡山県文化財保護審議会委員

発掘調査

昭和59（1984）年度（４月１日～10月30日）

岡山県教育庁文化課

課　　長　松元昭憲
参　　事　橋本泰夫
課長代理　逸見英邦
課長代理　吉本唯弘
文化財主幹　佐々木清
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）河本　清
主　　任　古瀬　宏
主　　任　遠藤勇次
文化財保護主査　井上　弘
文化財保護主査　柳瀬昭彦
文化財保護主事　平井　勝
文化財保護主事　岡本寛久
文化財保護主事　江見正己
主　　事　楢原充二
文化財保護主事　平井泰男
文化財保護主事　山本明雄
主　　事　宇垣匡雅

昭和59（1984）年度（11月１日～３月31日）

岡山県教育庁文化課

課　　長　松元昭憲
参　　事　橋本泰夫

課長代理　逸見英邦
課長代理　吉本唯弘
課長補佐(埋蔵文化財係長事務取扱)　河本　清
主任（兼）　遠藤勇次

岡山県古代吉備文化財センター

所長（兼）　松元昭憲
次　長　橋本泰夫

総務課

課　長　佐々木清
主　任　古瀬　宏
主　任　遠藤勇次
主　事　楢原充二

調査課

課　長（兼）　河本　清
文化財保護主査　井上　弘
文化財保護主査　柳瀬昭彦
文化財保護主事　平井　勝
文化財保護主事　岡本寛久
文化財保護主事　江見正己
文化財保護主事　平井泰男
文化財保護主事　山本明雄
主　事　宇垣匡雅

昭和62（1987）年度

岡山県教育庁文化課

課　長　高橋誠記（12月15日まで）
課　長　吉尾啓介（12月16日から）
課長代理　河野　衛
課長補佐(埋蔵文化財係長事務取扱)　伊藤　晃
主　査　藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　橋本泰夫

総務課

課　長　佐々木清
総務主幹　藤本信康
主　任　花本静夫
主　任　岡田祥司
主　事　片山淳司

調査課

調査第一課長　河本　清
第二係長　柳瀬昭彦
文化財保護主任　平井　勝
文化財保護主任　岡本寛久
主　事　高田恭一郎
主　事　阿部泰久

昭和63（1988）年度

岡山県教育庁文化課

課　長　吉尾啓介
課長代理　河野　衛
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）伊藤　晃
主　査　藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　水田　稔

総務課

課　長　佐々木清
総務主幹　藤本信康
主　任　花本静夫
主　任　岡田祥司
主　任　片山淳司
主　事　杉野　正
主　事　嶋田慶彦

調査課

調査第一課長　河本　清
第二係長　柳瀬昭彦
文化財保護主任　平井　勝
文化財保護主任　岡本寛久
主　事　高田恭一郎
主　事　阿部泰久

平成元（1989）年度

岡山県教育庁文化課

課　長　吉尾啓介（11月30日まで）
課　長　鬼澤佳弘（12月1日から）
課長代理　河野　衛
課長補佐(埋蔵文化財係長事務取扱)　伊藤　晃

主　　査　　藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　長瀬日出明

次　　長（第一課長事務取扱）河本　清

総務課

課　　長　　竹原成信

課長補佐（総務係長事務取扱）藤本信康

主　　任　　岡田祥司

主　　任　　平松郁男

主　　任　　片山淳司

主　　事　　杉野　正

主　　事　　嶋田慶彦

主　　事　　大西治郎

主　　事　　渡邊徹也

調査課

課長補佐（第一係長事務取扱）柳瀬昭彦

文化財保護主査　平井　勝

文化財保護主査　藤田耕平

文化財保護主事　高田恭一郎

平成2（1990）年度

岡山県教育庁文化課

課　　長　　鬼澤佳弘

課長代理　　光吉勝彦

課長補佐(埋蔵文化財係長事務取扱)　伊藤　晃

主　　査　　藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　長瀬日出明

次　　長（第一課長事務取扱）河本　清

総務課

課　　長　　竹原成信

課長補佐（総務係長事務取扱）藤本信康

主　　任　　平松郁男

主　　任　　坂本英幸

主　　事　　杉野　正

主　　事　　嶋田慶彦

主　　事　　大西治郎

主　　事　　亀山幸治

主　　事　　渡邊徹也

調査課

課長補佐（第一係長事務取扱）柳瀬昭彦

文化財保護主査　平井　勝

主　　事　　村田秀石

報告書

平成5（1993）年度

岡山県教育庁文化課

課　　長　　渡辺淳平

課長代理　　松井新一

課長補佐(埋蔵文化財係長事務取扱)　高畑知功

主　　査　　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　横山常實

次　　長　　葛原克人

総務課

課　　長　　北原　求

課長補佐（総務係長事務取扱）小西親男

主　　査　　石井　茂

主　　査　　石井善晴

主　　任　　三宅秀吉

主　　事　　宮森久彰

主　　事　　山崎貴彦

主　　事　　滝澤幸隆

主　　事　　山下恵子

調査課

第三課長　　柳瀬昭彦

第二係長　　平井　勝

文化財保護主事　高田恭一郎

最後になりましたが、酷暑・厳寒のなか日々発掘調査・整理作業に従事されました下記の方々に、厚くお礼申し上げます。

赤城久夫　尾松代吉　佐々木和勲　松本友彦　笹田誠　松本包房　橋本基　藤本順一　伍賀芳子
坂本由美子　西崎宏子　藤田光子　難波靖代　中野鈴子　赤木輝吉　遠藤明雄　大森善太郎
岡本汎　小西修　籠井英夫　畑本敏男　石田芙美子　入江美代子　国塩志保里　中村初子
服部勝得　兵藤きよ子　服部美登利　大前仁介　佐野雅男　新開清　永井巳之介　服部弘
松本三郎　成本和繁　出原喜美子　新名定子　津島健子　原年子　原住子　明坂善美
加藤勢津子　石浜常夫　国重正武　西郷安夫　藤原勝治　山田道夫　鈴木順一　吉永京市
楠見静子　西崎知子　野崎千珠子　藤田球江　岡本喜代子　榊原末美　熊本チヨ子　富田孝行
内田賢二　真重貞一　大窄暢毅　岩上太郎　那須鉄雄　河田要二郎

事務所・センター

田中純子　坂本恵里香　長曽律子　青山洋子　窪田浩子　森小代子　土井原弘子　湯浅育子
松本悦子　門田寿子　山本千恵子　井上弘子　大山知子　三垣佐知子　東秀己　遠藤七都子
阿部典子　田中淑子　中野晴美　富士智恵子　出原万千恵　大林洋子　横田多美子　（高田）

第３節　調査の経過

岡山市原尾島に所在する百間川原尾島遺跡は、百間川の河川敷内にある遺跡群としては最上流部に位置し、ほぼ国道２号線の百間川橋付近から北西側の上流部約800m間に広がっている。百間川遺跡群の発掘調査は1976（昭和51）年度から開始され、現在まで継続している。このうち原尾島遺跡については、1977年の新田サイフォン・新田樋門等の建設に伴う調査を皮切に、1981（昭和56）年度までは、低水路掘削幅80mのうちの右岸側の幅40mを主に調査した。この低水路の調査区は終了後掘削され、現在は幅40mの低水路として通水している。

1982（昭和57）年度からは低水路掘削幅80mのうち、すでに調査を終了した幅40mの左岸側の幅20mを主に、藤原橋の橋梁部やその護岸部、あるいは左岸用水路部、そして高水敷護岸部などを調査した。このうち本報告書に掲載する調査区は表１に示すとおりであるが、これは1982年度から1990年度までの調査（調査面積17767㎡）を面積や遺物数を勘案して３分割したうちの一つで、すでに一つは「百間川原尾島遺跡３」として1993（平成５）年度に刊行され、もう一つは「百間川原尾島遺跡５」として1995（平成７）年度に刊行が予定されている。

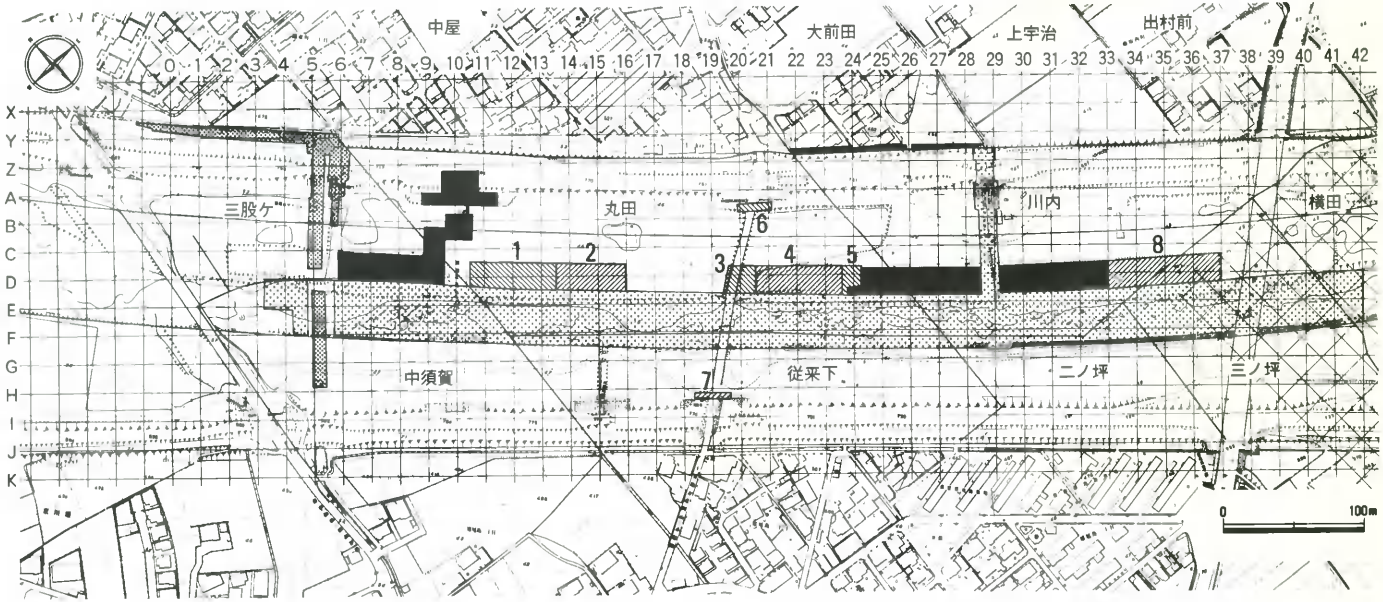
本報告書掲載の調査区は８箇所に分かれている。これらの調査は工事工程に沿って進めているため連続性がなく、近接する調査区であっても調査年次が異なり、また細切れにならざるをえなかった。

調査は1986（昭和61）年度までは１班２人の調査員で２班が、1987（昭和62）年度からは１班３人で１班があたった。調査員１人の１月あたりの調査面積は130㎡であるが、表１の番号１～５の微高地上にあたる調査区は遺構密度が高いため55～95㎡となり、低位部となる６・７では130㎡となる。特に１の調査区では遺構・遺物ともに多いことから、また８では旧河道内の橋脚列の処理に多くの時間を費やした。

調査地区の呼称は、まず小字名を付し、ついで低水路掘削部、高水敷護岸などの工事名称を、さらに遺跡全体に組んだ20m方眼の名称を付して表している。（平井）

表１　百間川原尾島遺跡　調査一覧

番号	地区名	担当者	期間	面積	遺物数
1	丸田、低水路　10～13C・D	平井勝・藤田・高田	1989.9.1～11.15、12.26～1990.5.24	1254	464
2	丸田、低水路　13～15C・D	平井勝・藤田・高田	1989.4.1～9.18	972	84
3	丸田、低水路　19・20C・D	平井勝・藤田・村田	1990.5.9～6.18	422	11
4	丸田、低水路　20・23C・D	平井勝・岡本・高田・阿部	1988.4.1～8.19	1178	80
5	丸田、低水路　23・24C・D	柳瀬・高田・阿部	1988.3.4～3.31	200	0
6	丸田、高水敷護岸（左岸）19～21A	平井勝・藤田・高田	1989.12.12～12.27	190	5
7	従来下、高水敷護岸(右岸)18・19H	平井勝・藤田・高田	1989.11.18～12.7	184	13
8	川内・三ノ坪、低水路33～36C・D	岡本・山本	1984.4.2～1985.1.22、3.12～4.16、5.1～30	1600	21
			計	6000㎡	678箱



今回報告部分

発掘調査報告39（百間川原尾島遺跡１）

発掘調査報告56（百間川原尾島遺跡２）

発掘調査報告88（百間川原尾島遺跡３）

第３図　グリッドの設定と調査区（Ｓ：1/4,000）

（図中の調査区番号は表１の番号に対応する）

第４節　報告書の作成

百間川原尾島遺跡の報告書は、1977（昭和52）年度から1981（昭和56）年度調査地区で２冊、そして1982（昭和57）年度から1990（平成２）年度に調査を実施した地区を３冊に分けて刊行する予定のうちの１冊がすでに刊行されている。本報告書は３分冊のうちの２冊目にあたり、通算で４冊目となる。ちなみに旭川放水路（百間川）改修工事に伴う百間川遺跡群の報告書としては10冊目である。

報告書の作成は担当者２名で1993（平成５）年度に行なった。対象地区は第３図に示すとおり、丸田調査区の10～15Ｃ・Ｄ、19～24Ｃ・Ｄ、19～21Ａ、従来下調査区の18・19Ｈ、川内・三ノ坪調査区の33～36Ｃ・Ｄで、その面積は6000㎡になる。遺構は竪穴住居・井戸・溝・土壙・水田を中心に約550、出土遺物は土器が678箱あり、これに石製品・土製品・木製品・金属製品など452点が加わる。

出土遺物の水洗・注記は発掘調査時にすでに終了しており、４月からただちに整理・復元作業を開始した。遺物量が多いことから、遺物の選別、復元作業を効率的にすすめる必要があり、遺構に伴うものを優先させた。しかし、それらすべてに十分な時間をかけて完了させる見込みがたたなくなったため、さらに優劣をつけざるをえなかった。そのため遺物の内容をできるだけ詳細に把握できるよう努めたものの、遺構によってはやや不十分であったという感じは否めない。ともあれいちおう全資料の検討も行ない、12月には終了した。なお、金属器については脱塩処理の後保存処理を行なった。

整理・復元作業に平行して土器以外の遺物についても、台帳の作成と実測の必要なものの選定作業を行なった。

また、４月からは遺構のトレースを進めたが、調査終了から相当の年月が経過しているため、遺構図面の整理・検討は容易でなく、図面の調整に時間を要することもしばしばであった。遺物のトレースは遺物の実測と遺構のトレースがかなり進んでから開始し、２月に終了した。

遺物の実測は復元作業の終了したものから順次進めていったが、遺物の総量が膨大であるため、遺構も絞られ、かつ完形品を中心にせざるをえなかった。したがって溝、土壙、土器溜り、包含層の遺物についてはその一部を掲載するにとどまった。なお、実測点数は前年度の「百間川原尾島遺跡３」の作業実績とほぼ同じで、土器812点、石器その他の遺物199点であった。

遺物の実測は２月中で終了したが、平行して１月から遺物写真の撮影と、写真の必要な土器の色塗りを行なった。遺物の写真は実測遺物からさらに選定され、土器を中心に300点撮影して２月中に終了した。

３月から割り付け及び原稿の執筆にかかった。本年度から報告書をＡ４版の体裁にするため、割り付けに少し手間取った。原稿の執筆は各担当者が分担しておこなったが、整理作業が遅れがちであったことから、執筆に十分な時間を割くことができなかった。

（平井）

実測風景

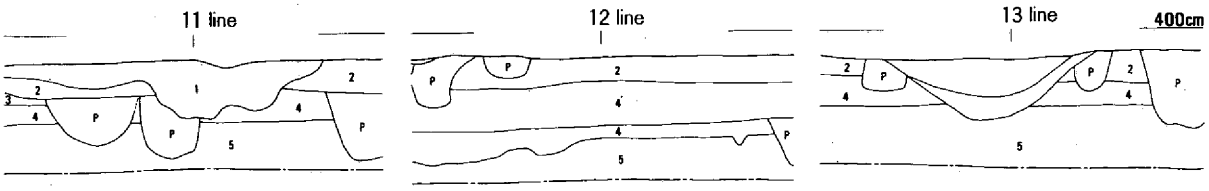
第3章　調査の概要

第1節　丸田調査区

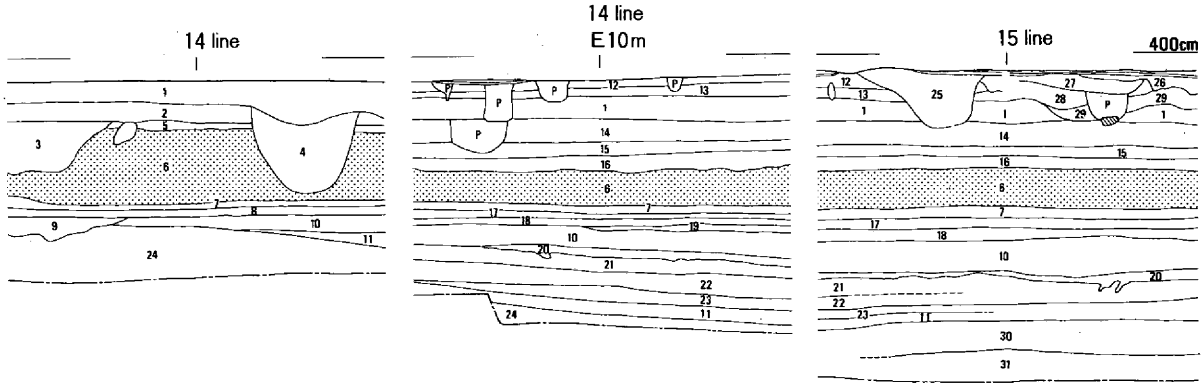
1．丸田調査区の概要

本報告書に掲載する丸田調査区の調査地区は6箇所である。このうち低水路掘削部は5箇所で、10～13C・D区と13～15C・D区は連続しており、また19・20C・D区と20～23C・D区および23・24区も連接してひとまとまりになるが、高水敷護岸（左岸）部の19～21A区は少し離れている。

丸田調査区は百間川原尾島遺跡の中心部を占めており、とりわけ西北側から上流側にあたる三股ケ



1．攪乱　2．灰黄褐色（10YR5/2）砂質土　3．暗灰黄色（2.5Y5/2）土（焼土・炭含む）
4．にぶい黄褐色（10YR5/4）土　4′．にぶい黄褐色（7.5YR5/3）土　5．明黄褐色（2.5Y7/6）土　P．ピット



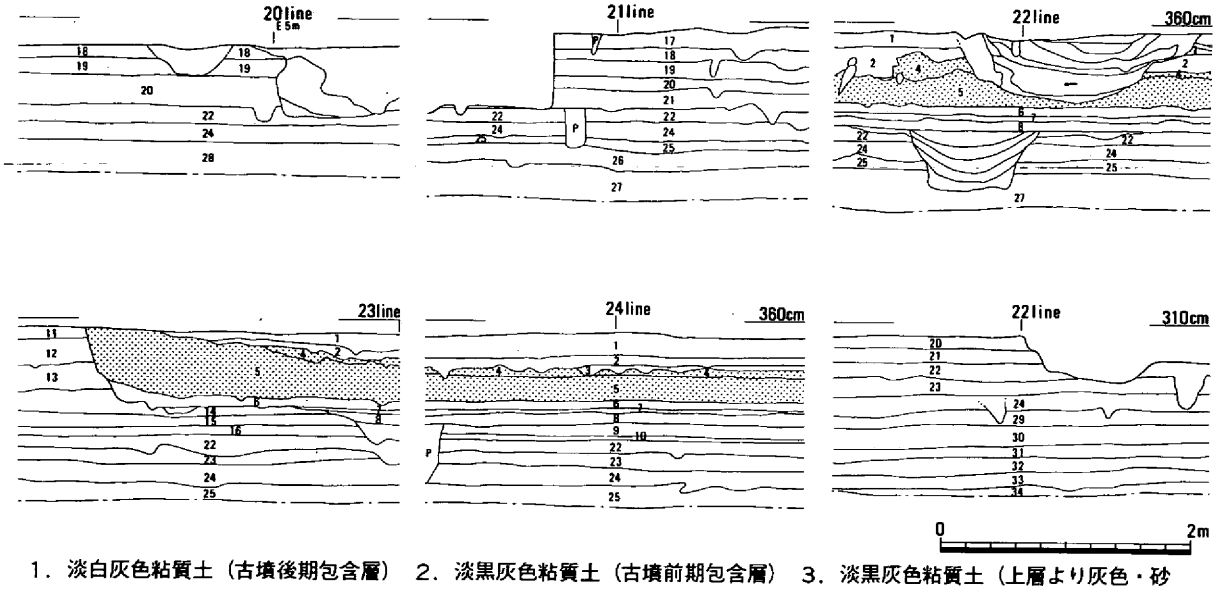
1．オリーブ灰色（2.5GY5/1）微砂粘土　2．褐灰色（10YR5/1）粘質微砂
3．黄灰色（2.5Y4/1）微砂土　4．にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土（オリーブ黒色土混り）
5．黄灰色（2.5Y5/1）微砂土　6．オリーブ黄色（5Y6/3）微砂（洪水砂）　7．灰色（10Y5/1）粘土（弥生後期水田層）
8．明褐灰色（7.5YR7/2）粘土（弥生後期水田層）　9．黄灰色（2.5Y5/1）粘土　10．褐灰色（10YR5/1）粘土　11．オリーブ褐色（2.5Y4/3）土　12．灰色（7.5Y6/1）土　13．灰色（5Y5/1）土（鉄分沈着）　14．灰黄色（2.5Y6/2）微砂　15．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂　16．暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土　17．灰色（7.5Y6/1）粘土　18．灰色（5Y6/1）粘土　19．灰色（7.5Y5/1）粘土　20．灰色（10Y4/1）微砂粘土　21．暗青灰色（5BG4/1）粘土　22．灰色（10Y5/1）粘土　23．灰色（5Y6/1）粘土　24．にぶい黄色（2.5Y6/4）微砂　25．灰オリーブ色（5Y5/3）土　26．黄灰色（2.5Y6/1）粘質微砂　27．灰黄色（2.5Y6/2）粘質微砂　28．灰黄褐色（10YR6/2）粘質微砂　29．オリーブ黄色微砂粘土　30．緑灰色（7.5GY5/1）粘土　31．緑灰色（10GY6/1）粘土（縄文晩期土器含む）

第4図　10～15C・D区の北壁土層断面（S：1/60）

調査区の北東側に広がる微高地には遺構が密集する。この微高地の東側、14から18ラインまでは一旦低位部となるが、22ラインまで再び微高地になる。しかし遺構は少なくなる。22ラインから東側は低位部が広がり、400mあまり東側の百間川沢田遺跡の微高地まで続く。

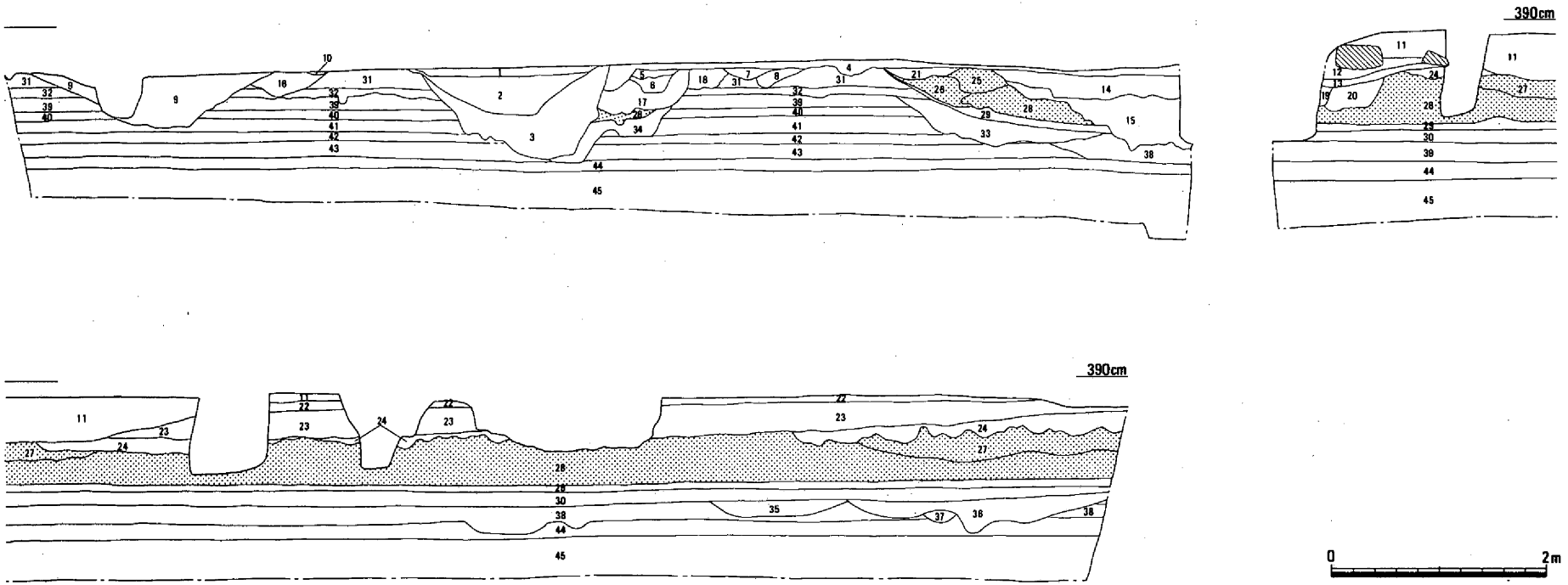
丸田調査区の標高は現地表で4.5mあまりを測る。現地表は水田耕土ないし盛り土であるが、これ以下の層位をみると地区によって様相が異なる。微高地である10～13C・D区では表土を除去すると古墳時代の遺物を含む灰黄色砂質土になるが、場所によってはほとんど削平されていることもある。この層の下には弥生時代の遺物を含む暗灰黄色土ないしにぶい黄褐色土層があり、その下は弥生時代の基盤層である明黄褐色土層になる（第４図、図版２）。

低位部となる14・15C・D区では表土の下に中世の遺物を含む灰色土やオリーブ灰色土層があり、その下は古代と推定される灰黄色微砂層、そして古墳時代と考えられる暗灰黄色粘質微砂層と暗灰黄色粘土層へ続く。さらにこの下は弥生時代後期末の洪水砂であるオリーブ黄色微砂層になるが、14ライン付近では古代から古墳時代と考えられる層は無いか、あっても極めて薄い。洪水砂の直下には弥生時代後期の水田層があるが、同じような灰色粘土層が14ライン付近では二層、14ラインから東へ10m付近では三～四層認められ、これらも水田層と考えられる。この水田層以下は、14ライン付近では弥生時代の基盤層となるにぶい黄色微砂になり、14から15ラインの旧河道に向かって徐々に下がるが、その上には何層にも堆積が認められる。なお、15ライン付近では緑灰色粘土層から縄文時代晩期の土器が出土した。



１．淡白灰色粘質土（古墳後期包含層）　２．淡黒灰色粘質土（古墳前期包含層）　３．淡黒灰色粘質土（上層より灰色・砂質強い）（古墳前期包含層）　４．淡黄灰色粘質微砂（下層より粘性強い）（洪水砂）　５．淡褐灰黄色粘質細砂（洪水砂）　６．暗灰色粘土（弥生後期水田層）　７．暗白灰色粘土　８．褐灰色粘土　９．暗褐色粘質土（鉄分沈着顕著）　10．暗黄灰褐色粘質土（鉄分沈着顕著）　11．黄灰褐色砂質土（炭・焼土粒少含）　12．灰褐黄色土（炭・焼土粒少含）　13．やや暗い灰褐色土（やや粘質，炭・焼土粒少含）　14．暗黄茶灰色粘質土（マンガン沈着顕著）　15．黄褐色粘質土（マンガン沈着）　16．灰褐色粘質土　17．淡暗灰色粘質土（弥生後期包含層）　18．灰黄褐色（10YR5/2）土（弥生後期包含層）　19．灰褐色（7.5YR4/2）土　20．褐色（7.5YR4/3）土　21．灰褐色粘質土　22．灰黄褐色（10YR6/2）土（弥生前期包含層）　23．明淡褐黄色粘質土　24．灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　25．淡褐色粘質土　26．にぶい黄色（2.5Y6/3）土　27．淡黄灰色粘質砂　28．にぶい黄色（2.5Y6/3）土　29．明灰黄色粘質土　30．暗褐灰色粘質土　31．灰黄色粘質土　32．暗灰色粘土　33．淡灰黄色粘質土　34．暗黒灰色粘土

第５図　19～24C・D区の北壁・中央トレンチ南壁（下段右端）土層断面（S：1/60）



1～3．現代溝　4．近・現代土　5～9．近・現代溝　10．灰褐色（7.5YR6/2）粘質砂　11．灰白色（7.5Y7/2）砂（近世溝）　12．灰色（10Y6/1）砂　13．灰白色（N7）粘土　14．灰白色（2.5Y7/1）～灰黄色（2.5Y6/2）粘質微砂（近世溝）（炭・焼土粒含，獣骨含）　15．明緑灰色（7.5GY7/1）～緑灰色（10GY6/1）微砂粘土（炭・焼土粒含）（近世溝）　16．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂（溝）　17．黄灰色（2.5Y6/1）粘質微砂（炭・焼土粒含）（溝）　18．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂（溝）　19．灰色（N5）粘質砂　20．灰色（5Y5/1）粘質砂　21．褐灰色（10YR6/1）粘質微砂　22．黄灰色（2.5Y6/1）砂質土　23．黄灰色（2.5Y5/1）砂質土　24．黄灰色（2.5Y4/1）砂質土　25．灰オリーブ（5Y6/2）粘土混微砂（炭粒含，洪水砂）　26．灰黄色（2.5Y6/2）粘質微砂（炭粒含，洪水砂）　27．灰白色（5Y8/2）砂に黄灰色（2.5Y4/1）砂質土混入（洪水砂）　28．灰白色（5Y8/2）砂　29．灰白（10Y6/1）粘土（弥生後期水田層）　30．灰白色（N7）粘土　31．灰黄褐色（10YR6/2）粘質微砂　32．にぶい黄色（2.5Y6/3）粘質微砂　33．黄灰色（2.5Y6/1）粘質土（炭・焼土粒含）（溝）　34．灰黄褐色（10YR5/2）粘土（炭・焼土粒含）（溝）　35．青灰色（5BG6/1）粘土（溝）　36．灰色（N4）粘質土（溝）　37．緑灰色（10GY6/1）砂質土　38．青灰色（10BG5/1）粘土　39．灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　40．灰オリーブ色（7.5Y6/2）粘質土　41．灰黄色（2.5Y6/2）粘質土　42．浅黄色（2.5Y7/3）粘質土　43．灰黄色（2.5Y6/2）粘質土　44．灰黄色（2.5Y7/2）粘質土　45．緑灰色（10GY5/1）粘質土～粘土

第6図　19～21A区の南壁土層断面（S：1/60）

19～24C・D区の層位も微高地と低位部で異なる。微高地である19～21C・D区では、表土下は弥生時代後期の土器を含むやや暗い灰色粘質土ないし灰黄褐色土層となる。この下には遺物が認められない層が二～三層あり、さらに弥生時代前期の土器を含む灰黄褐色土層へと続く。さらに下は弥生時代の基盤層であるやや明るい褐黄色粘質土層になる（第5図、図版2）。

一方、低位部にあたる22～24C・D区では表土直下は古墳時代後期の遺物を含む淡白灰色粘質土層になり、その下に古墳時代前期の遺物を含む淡黒灰色粘質土層、そして弥生時代後期末の洪水砂層と続く。洪水砂層は約30cm前後の厚さで堆積しており、その下は弥生時代後期の水田層になるが、この水田層は場所によっては二ないし三層に分かれる。水田層以下は厚さ10～15cmの層がほぼ水平に堆積しているが、灰黄褐色土に弥生時代前期の遺物を含む以外は無遺物層である。19～21A区の層位も微高地と低位部で異なるが、その様相は19～24C・D区とほぼ同じである。丸田調査区からは微高地を中心に、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が多く出土したが、中でも弥生時代および古墳時代、そして中世が主体をなす。縄文時代の遺構はわずかで、黄褐色を呈する弥生時代の基盤層中から焼土塊を含む土壙が検出された以外には、旧河道内から晩期の土器片が出土したにすぎない。

弥生時代の遺構は前期から認められ、溝1条と土壙2基のみであるが、旧河道内からは遺物がややまとまって出土している。晩期から前期の遺物を下層に含む旧河道は、中期以降急速に土の堆積が進行し、後期には完全に埋まりその上に水田が形成されている。

中期の遺構はまったく認められないが、後期になると激増する。特に10～13C・D区の微高地には土壙やピットが密集する。これらの土壙の性格については明確にし得ないが、焼土ないし焼土塊や炭を埋土中に含むものが多い。また、多くのピットは建物の柱穴と推定されるが、建物としてまとめることができなかった。竪穴住居は2軒のみで、周辺からは井戸が多く出土している。

12・13C・D区は微高地の端にあたり、溝が数条掘削されているが、南西側は中世以降の河川の氾濫によって大きく抉られている。

14・15C・D区の低位部は水田となり、19～22C・D区で再び微高地となるが、10～13C・D区の微高地に比べると遺構はずいぶん少ない。それでも微高地には建物、土壙、井戸、溝、それに竪穴住居と推定される溝などが検出されており、居住域として利用されていたことは確かである。

19～22C・D区の南東側にあたる22～22C・D区は再び低位部になり水田が広がっているが、そこには島状高まりが認められる。さらに水田層を除去すると、島状高まりにそって浅い溝が掘削されていた。

19～21C・D区の北側へ少し離れて位置する19～21A区では、水田と微高地あるいは島状高まりの一部が検出されており、さらに水田層直下には溝が認められた。

次に古墳時代の遺構・遺物を見てみよう。古墳時代の遺構も弥生時代同様10～13C・D区の微高地に多い。竪穴住居を主体に建物、井戸、溝、土壙などが認められるが、いずれも削平が著しく、住居などは床面までの深さは極めて浅い。この微高地の南東側、14・15C・D区ないし22～24C・D区の弥生時代には水田部であった場所は、数条の溝以外に遺構はない。また、弥生時代の微高地であった19～21C・D区でも遺構は少なく、建物4棟と溝などが認められるにすぎない。

古代の遺構はないが、中世には10～15C・D区に遺構が集中する。10～15C・D区の遺構は溝で区画された中に、多くの柱穴が認められるもので、おそらく建物が建っていたものと推定される。また、井戸や土壙墓なども認められた。

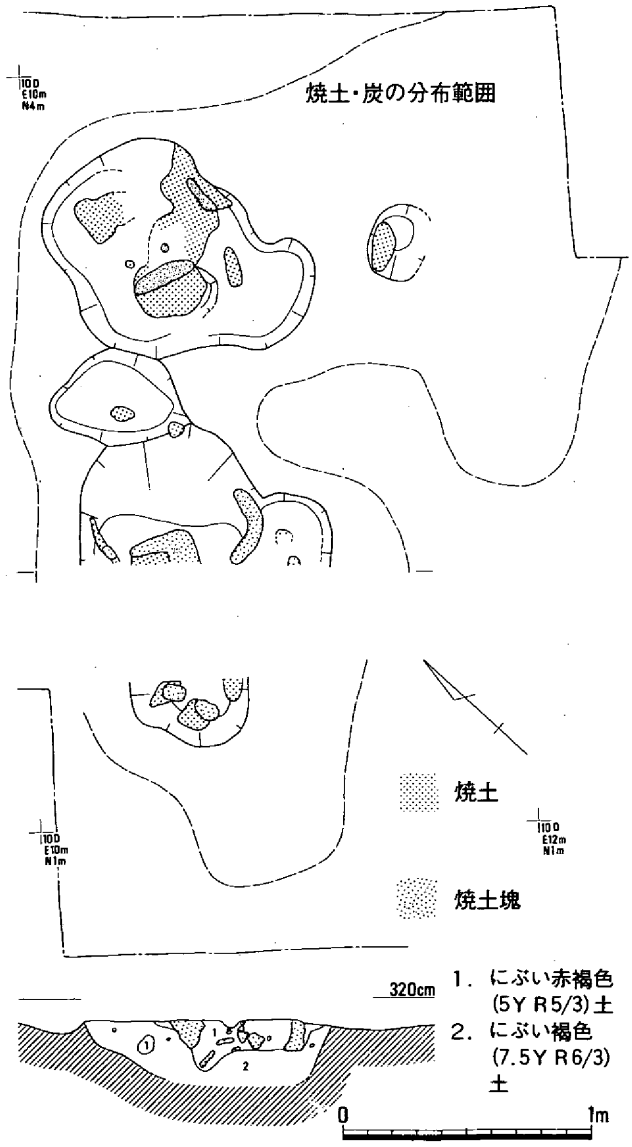
（平井）

2．縄文時代の遺構・遺物

(1) 焼 土 土 壙（第7図、図版3）

10C区において、黄褐色土層以下の遺構確認のためトレンチを入れた結果、断面に焼土が認められたので、約3m×4mの範囲を焼土面まで掘り下げたところ、不明瞭ながら土壙を検出した。その検出面は黄褐色土層上面より20cmあまり下であるが、特に面が認められるわけではなく、焼土や炭の分布密度が特に濃い深さで平坦にしたものである。

土壙は6基が集中しているが、検出面での土質の違いは僅かであるうえに、下部ではさらに不明瞭となるため、形状についてはやや正確さを欠いているやもしれない。平面形は楕円形もあるが多くは不定形で、大きいもので長さ1.1m、幅0.8m、小さいもので長さ30cm、幅20cmを測る。断面の形状は、底にむかって徐々に幅を狭めていくものと思われる。深さは浅いもので15cm、深いもので30cmあまりと考えられる。



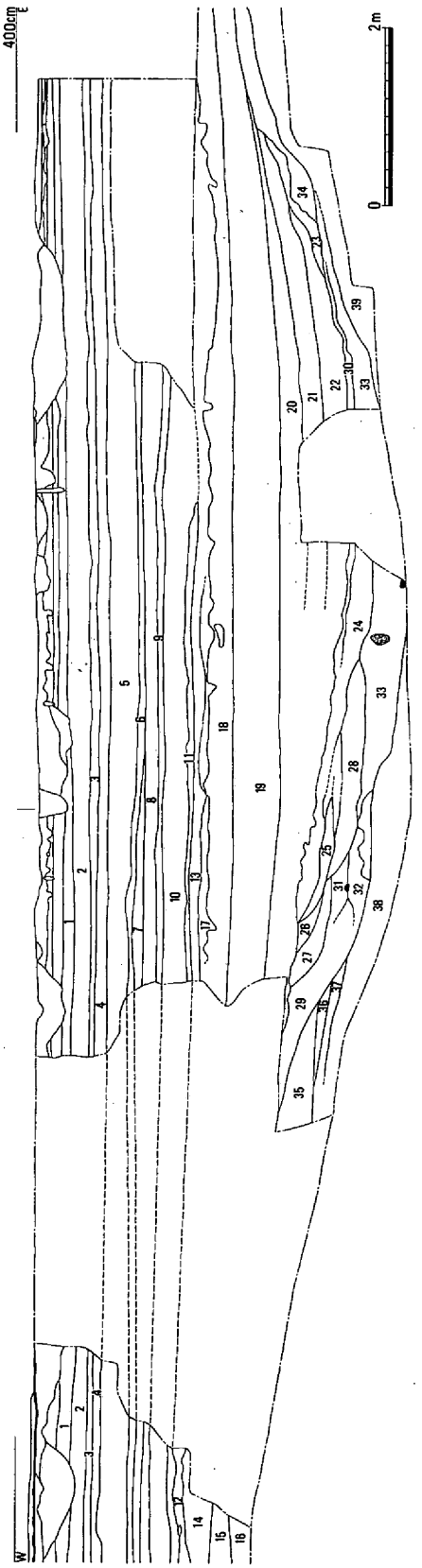
第7図　焼土土壙

土壙内には赤褐色に硬く焼けた塊や焼土が含まれていた。焼土塊は大きいもので25cmあまりもあり、全面ほぼ同じ色調で焼けていることから、炉壁のようなものとは考えられない。胎土に砂粒を含まないが、粘土という感じではなく、粘質の微砂を塊にして焼いたようである。なお、土壙内面が焼けた状態は認められなかった。

土壙の周辺には焼土や炭が分布しており、その範囲はほぼ土壙を中心とするが、東側は東に向かって広がっていく。この焼土や炭の分布は土壙と重なるものの、最大10cm程度の厚みをもっており、土壙検出面よりさらに数cm下まで認められる。したがって焼土の分布が面をもち、そこから土壙が掘込まれているという状況でないため、二者の関係はいまひとつ明確さを欠く。

遺物は土壙内および周辺からも出土していないため時期を確定しがたいが、黄褐色土層はその上面に縄文晩期の土器を含むことから、弥生時代の基盤層とされている。したがって縄文時代にさかのぼるのは確実である。　（平井）

３．弥生時代前期の遺構・遺物



1．灰褐色（7.5YR6/2）微砂　2．灰黄色（2.5Y6/2）微砂　3．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂　4．暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土　5．にぶい黄色（2.5Y6/3）微砂（洪水砂）　6．灰色（10Y5/1）粘質土（弥生後期水田層）　7．灰色（7.5Y6/1）粘土　8．灰色（5Y6/1）粘土　9．灰色（7.5Y5/1）粘土　10．灰オリーブ色（7.5Y5/3）粘質土　11．灰色（10Y4/1）微砂粘土　12．灰色（7.5Y6/1）粘質土　13．緑灰色（5G6/1）粘土　14．灰色（5Y6/1）粘土（弥生前期土器含む）　15．緑灰色（7.5GY5/1）粘土　16．緑灰色（10GY6/1）粘土（縄文晩期土器含む）　17．灰色（5Y5/1）砂　18．暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土（炭・植物遺体含む）　19．暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘土（炭・植物遺体多く含む）　20．オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘質微砂（植物遺体・炭多く含む）　21．オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘土（植物遺体・炭含む）　23．緑灰色（10GY5/1）粘土　24．灰色（10Y6/1）粘質微砂　25．緑灰色（10GY5/1）粘土（炭・植物遺体含む）　26．灰色（10Y5/1）粘質微砂　27．緑灰色（10GY5/1）粘土　28．灰色（10Y6/1）粘質微砂と粘質粗砂の互層（植物遺体・炭多く含む）　29．灰色粘土（7.5Y6/1）　30．灰色（10Y6/1）～緑灰色（10GY6/1）微砂　31．灰色（10Y6/1）粘土　32．灰色（10Y5/1）粘土　33．灰色（10Y6/1）～緑灰色（10GY6/1）粘土と粗砂と炭層の互層　34．灰色（N6）粘質微砂　35．灰色（10Y6/1）粘土　36．灰色（10Y5/1）粘土（炭・植物遺体含む）　37．灰色（10Y5/1）粘土（炭・植物遺体多く含む）　38．緑灰色（10GY6/1）粘土～微砂（ピート層）　39．灰色（10Y6/1）～緑灰色（10GY6/1）粘土と粗砂と炭層の互層（植物遺体多く含む）

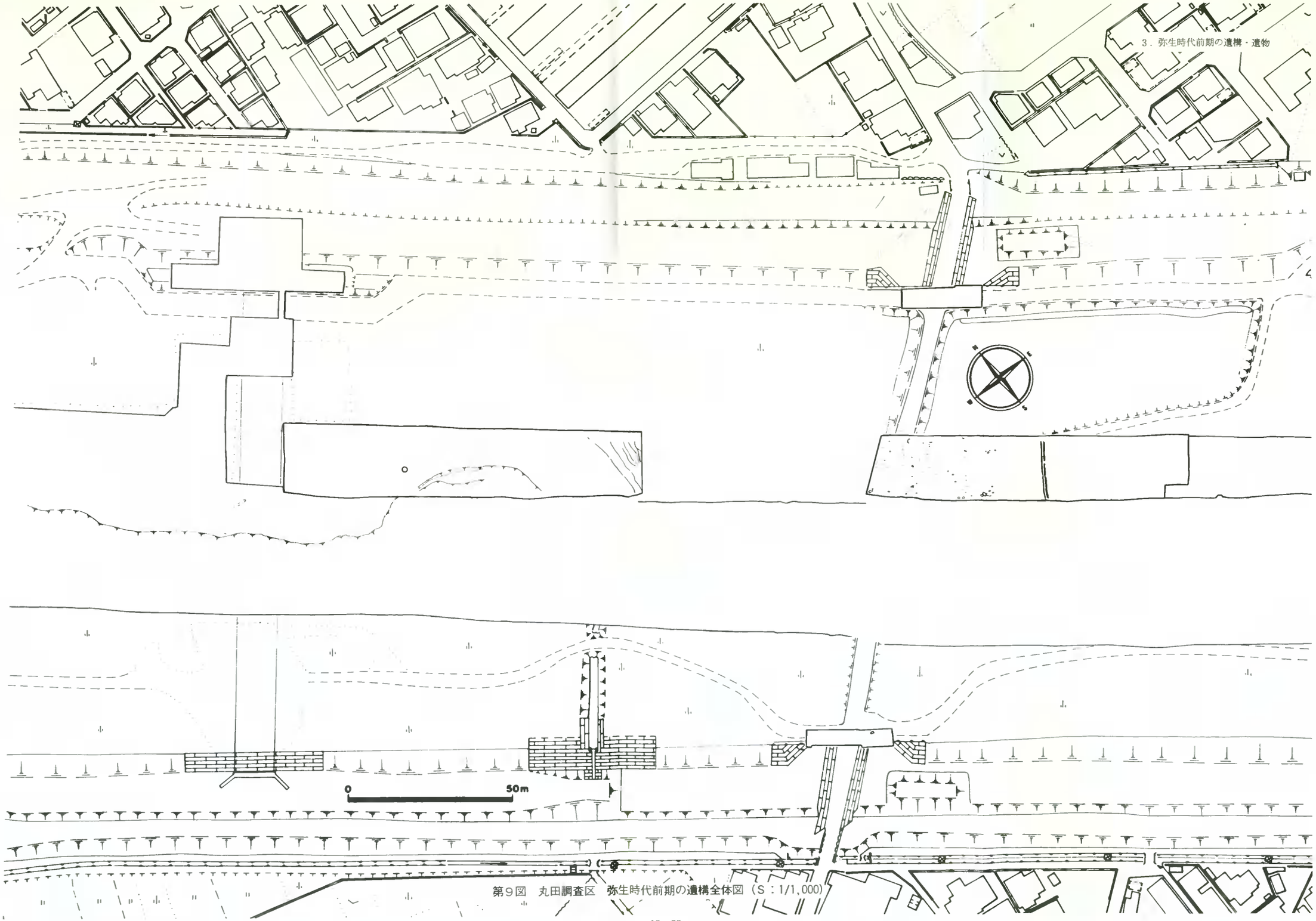
第８図　旧河道１の北壁土層断面（Ｓ：1/80）

(1)　旧　河　道

旧河道１（第８・11～13図、図版３・47・48・66・69）

調査区の東端で検出した自然河道である。これは、15・16Ｃ・Ｄ区をほぼ南北に流走し、さらに調査区外へ延びるもので、『百間川原尾島遺跡２』では「河道」（註１）として報告している。今回は15Ｃ・Ｄ区、すなわち河道の西半部の状況について述べ、東半部については調査年次が異なるため次回に触れる。

河道は幅17m以上、深さ２mを測り、底の標高は－30～０cm前後で現在の湧水層に達している。最底面はほぼ平坦で幅２～３m、そこから東はやや急斜となって肩に至る。一方、西斜面は途中に段とテラス状の平坦面を持ちながら緩やかに立ち上がり、上幅２～３mの自然堤防をもって肩としている。なお、これから西については幅13m前後の浅い凹地が広がり、さらにその先で微高地になることを確認している。標高は自然堤防上面が190cm、凹地の最底面が170cm、微高地上面が290cmである。



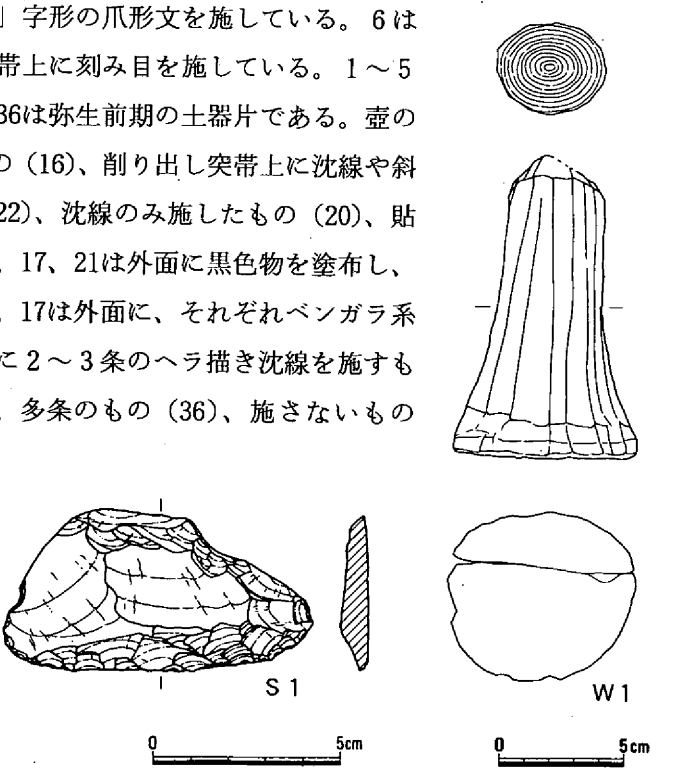
第９図　丸田調査区　弥生時代前期の遺構全体図（S：1/1,000）

第10図　丸田調査区　弥生時代前期の遺構全体図（S：1/500）

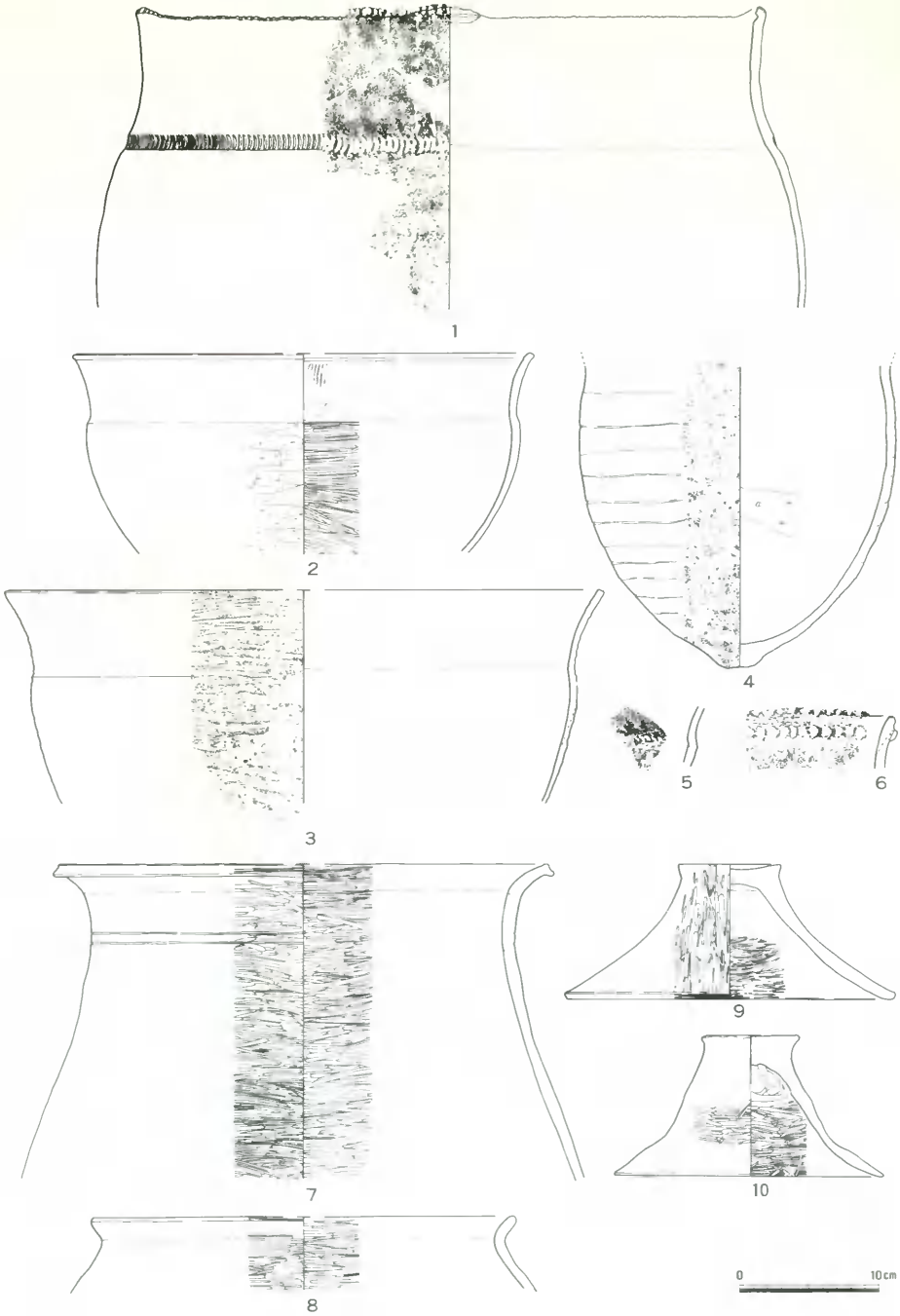
つぎに調査区の北壁断面を示した第8図によると、5層は弥生後期の洪水砂、6層は弥生後期の水田層である。7～10層は13～15C・D区の6層下に一様に堆積する層で、弥生後期の水田耕作土と考えられる。11～14、17～34層が河道の埋土であるが、大別すると上層（11～13、17層）・中層（18～22層）・下層（14、23～34層）の三層に区分することができる。まず上層は、先述の7～10層と比べると不安定な堆積で、17層は粗砂層である。遺物の出土は少ないが、弥生中期の土器片が混じる。また、この上面からは弥生後期の溝21・22が掘り込まれている。中層は、植物遺体を多く含んだ厚い粘土層で安定した堆積をしている。出土遺物は多く、縄文晩期と弥生前期の土器片のほか、S1の石器やW1の木器、人為的に加工したシカやイノシシの獣骨などがある。下層は、砂と粘土を互層あるいは複雑に入り組ませた不安定な堆積で中層同様に植物遺体を含み、14層は西側の凹地上の堆積層につながる。出土遺物は少量で、縄文晩期と弥生前期の土器片があるが、中層に比べると晩期土器片の出土する割合が高い。また、下層とそれ以下との分層は、肩口では容易だったが、底ではいずれも類似した層となり難しかった。なお、16層からも縄文晩期の土器が出土している。

さらに以上の知見から河道の形成・埋没過程を大まかに復元してみたい。まず先行する縄文晩期の河道が存在し、それを踏襲して弥生前期に本河道が形成された。河道の西に広がる浅い凹地も同じ頃に形成されたと考えられる。その後、流水と滞水を繰り返しながら下層が堆積し、やや長い滞水で中層が堆積する。西側の凹地もこの頃までに埋没したようである。上層は弥生中期の堆積で、洪水か流水による粗砂が顕著である。河道がほぼ埋没した頃、その最終流路として弥生後期の溝21・22が形成される。さらにその後、河道と凹地上の低位部を利用して弥生後期水田が拓かれるのである。

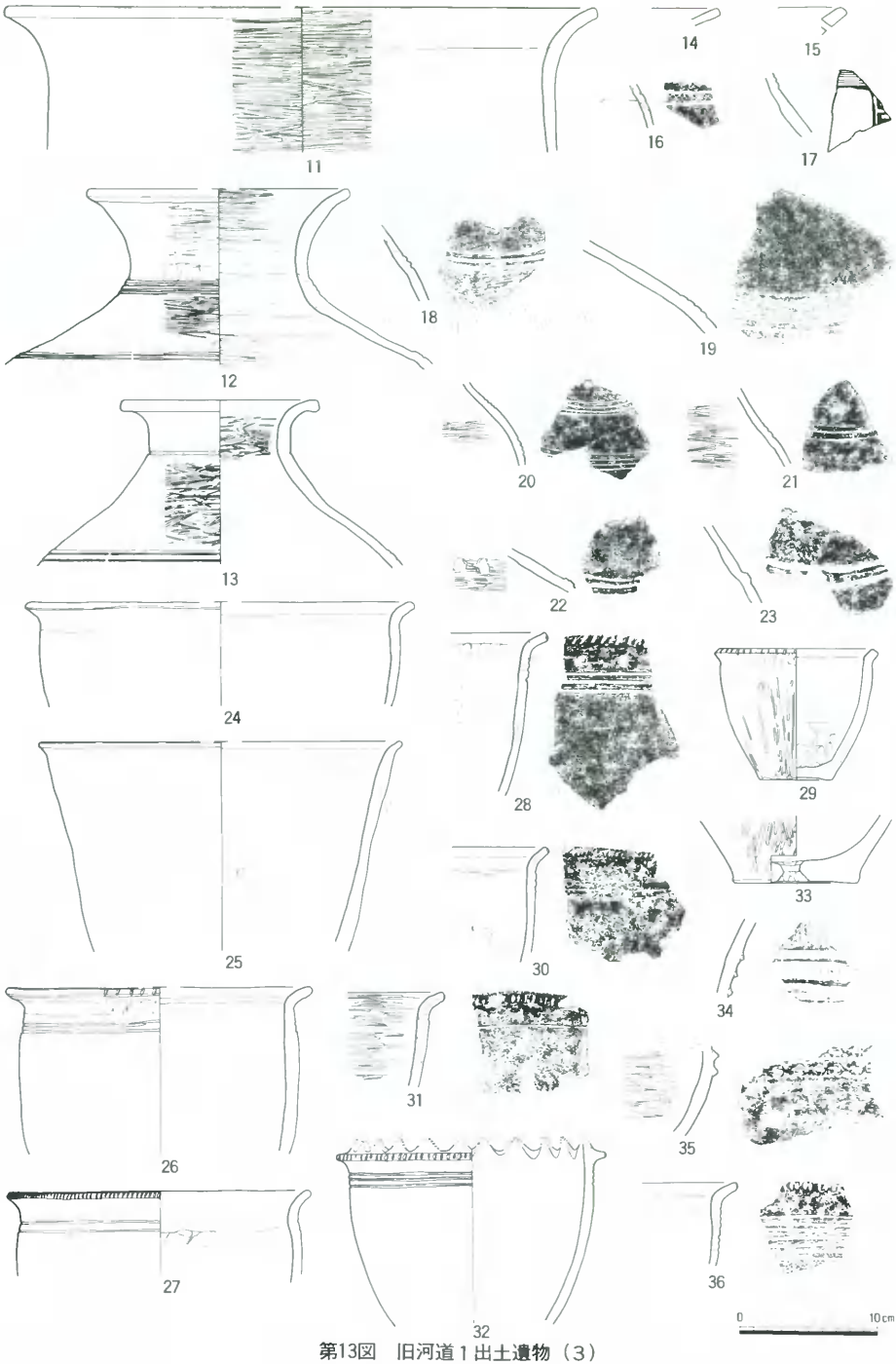
遺物は、縄文晩期と弥生前期の土器、石器、木器、獣骨や種子などで、その出土状況は既述のとおりである。1～6は縄文晩期の土器片で、いずれも深鉢である。1は平坦な口縁端部に刻み目をもち、低い山形突起の内面直下に短い沈線を施す。また、頸部には突起から垂下する2条の爪形文、頸部と胴部の境には逆「C」字形の爪形文を施している。6は口縁端部と、端部から1cm下に貼り付けた突帯上に刻み目を施している。1～5は谷尻式に、6は前池式に分類される。7～36は弥生前期の土器片である。壺の頸や肩、胴部には、削り出し突帯を配したもの（16）、削り出し突帯上に沈線や斜格子文を施したもの（12、13、16～19、21、22）、沈線のみ施したもの（20）、貼付突帯を配したもの（34、35）がある。また、17、21は外面に黒色物を塗布し、さらに14は内外面に、15は口縁端部と外面に、17は外面に、それぞれベンガラ系の赤色顔料を塗彩している。甕は、口縁の下に2～3条のヘラ描き沈線を施すものが多いが（26～28、30）、1条のもの（31）、多条のもの（36）、施さないもの（24、25）もある。32は連続する波状の口縁で、口縁外面直下に突帯を貼り付けるもので、形態的には九州東岸部の下城式の影響を受けたと考えられるが、その製作技法は異なる。以上の前期の土器は、百・前・Ⅱに属するものが多いが、前・Ⅰ・Ⅲも若干含まれる。　（高田）



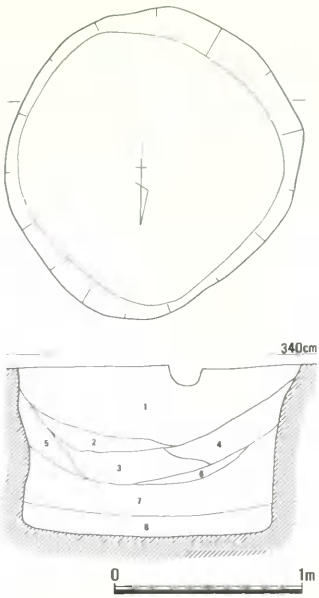
第11図　旧河道1出土遺物（1）



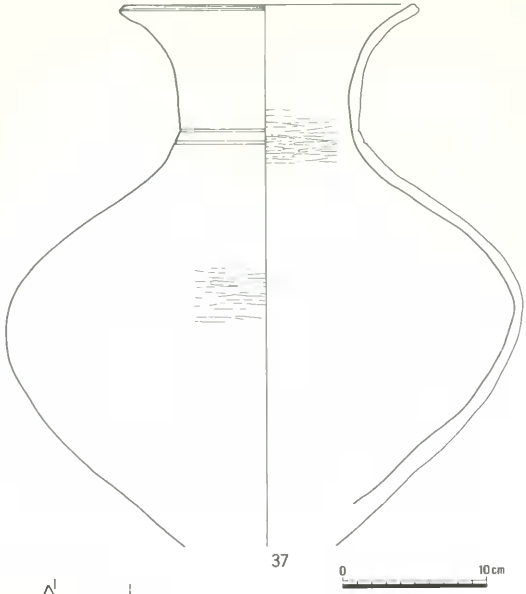
第12図　旧河道１出土遺物（２）

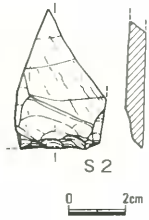


第13図　旧河道１出土遺物（３）



1．灰オリーブ（5Y4/2）土（焼土含む）
2．灰オリーブ色（5Y4/2）土（黄色土含む）
3．焼土　4．暗オリーブ色（5Y4/3）土（黄色土含む）　5．暗オリーブ色（5Y4/3）土　6．暗灰黄色（2.5Y5/2）土　7．黄褐色（2.5Y5/4）土　8．暗灰黄色（2.5Y4/2）土





第14図　土壙１・出土遺物

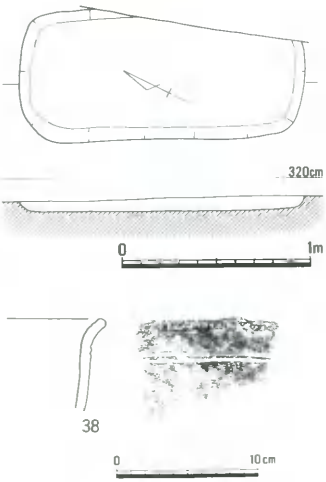
(2)　土　　壙

土壙１（第14図、図版48・70）

12D区の北寄りに位置し、明黄褐色土上面で検出した土壙である。先述した旧河道１の西側の微高地上では唯一の前期の遺構であり、調査区外でも『百間川原尾島遺跡２』報告の数基の土壙が検出されているにすぎない。

土壙の規模は径165cm、深さ90cmを測る。底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、一部では袋状をなす。底の標高は345cmである。埋土は１、２～６、７・８層の３つに大別できる。２～６層は人為的にブロックで埋めた層と考えられ、中でも多量の焼土を充填した４層は特徴的である。

出土遺物には土器と石器がある。土器は少量の小片と、胴張りが強く頸部に２条のヘラ描き沈線を施す37の壺である。また、石器はＳ２のサヌカイト製の削器である。



第15図　土壙２・出土遺物

以上のことから、遺構の時期は、百・前・Ⅱに属するものと考えられる。（高田）

土壙2（第15図）

21D区の西辺中央部に位置し、前期の基盤層の明褐黄色土上面で検出した土壙である。その周辺での前期の遺構の密度は低く、土壙の北部に柱穴が点在するのと、西部に溝1があるのみである。これは22ライン付近から東側にやや低くなることと関係し、土壙の周辺が微高地縁辺部にあたるためである。土壙は東隅を弥生後期の溝23に切られているが、その規模は、長さ150cm、幅70cm、深さ7cmを測り、長軸線を南北からやや西に振っている。底は平坦で、埋土は灰黄褐色粘質土である。詳細は明らかではないが、その平面形態から墓壙の可能性もある。

出土遺物には少量の土器片がある。38は甕で、口縁部を「く」字状に緩やかに折り曲げ、端部には刻み目を施し、口縁部と胴部の境には2条のヘラ描き沈線をめぐらせる。

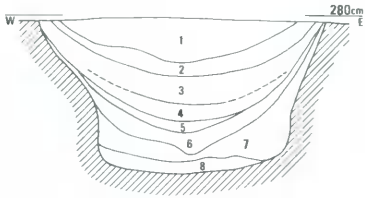
以上のことから、土壙の時期は弥・前・Ⅱと考えられる。（高田）

(3)　溝

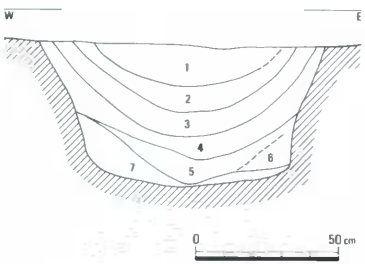
溝1（第16図、図版3）

C・D区の22ライン上に位置し、弥生後期の水田層を除去して検出した溝である。調査区を東北から南西方向に一直線に貫通し、両端は調査区外に延びている。その規模は幅100cm、深さ55cmを測る。底は平坦で、壁は底から一度垂直に立ち上がった後、逆「ハ」字状に広がっている。埋土は7～8層に分かれ、徐々に埋没した状況を示している。また、出土遺物は少量の土器片のみである。

溝の時期については、その流走方向や形態が周辺の弥生後期の遺構と大きく異なることから、それらよりも遡るものと考えられる。（高田）

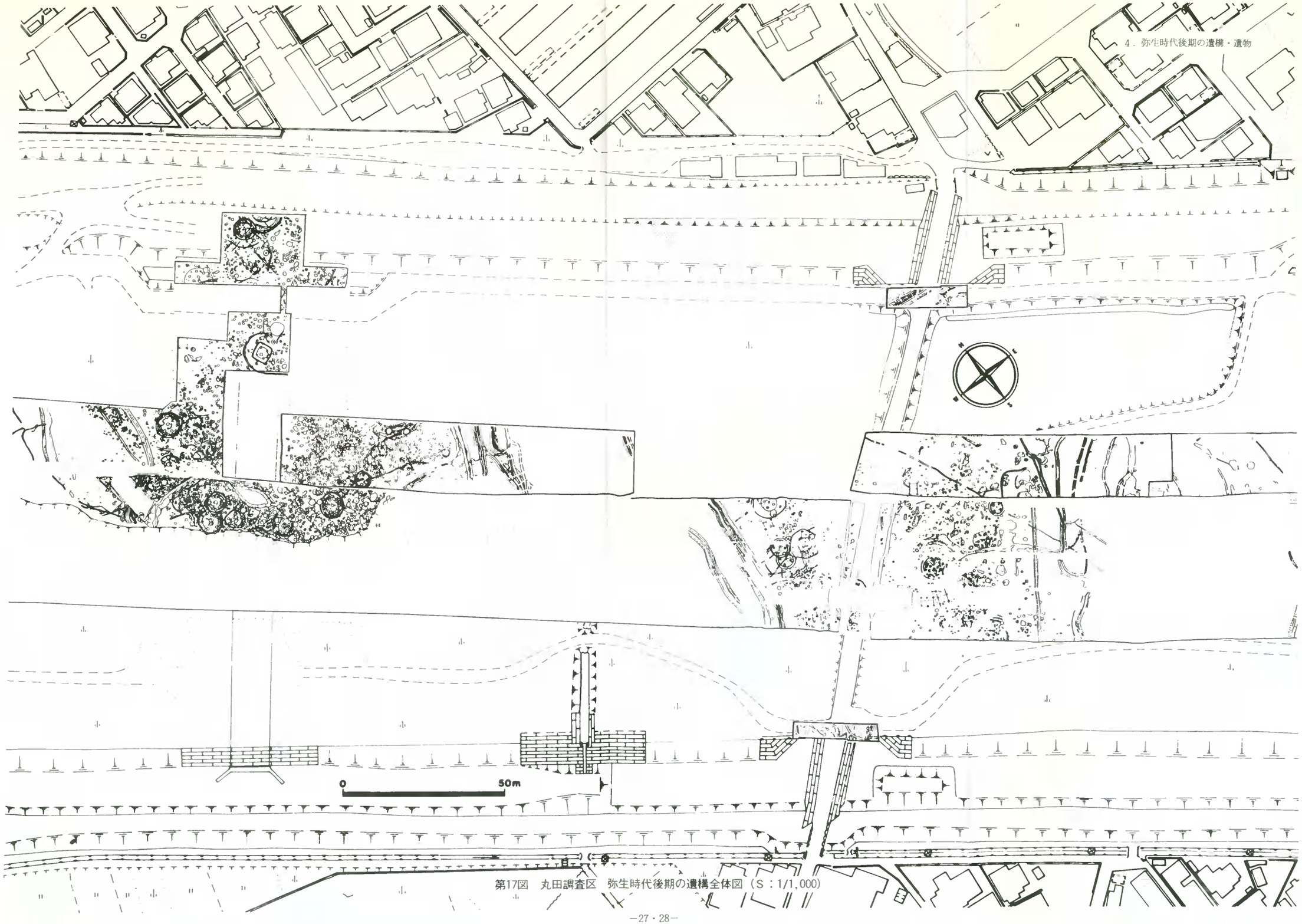


1．褐灰色粘質土　2．褐色黄色粘質土
3．灰褐色粘質土　4．灰褐色粘質土（灰色・粘質強い）
5．褐灰色粘質土　6．灰黒色粘土（炭多く含む）
7．黄灰褐色粘質土　8．暗灰色粘土

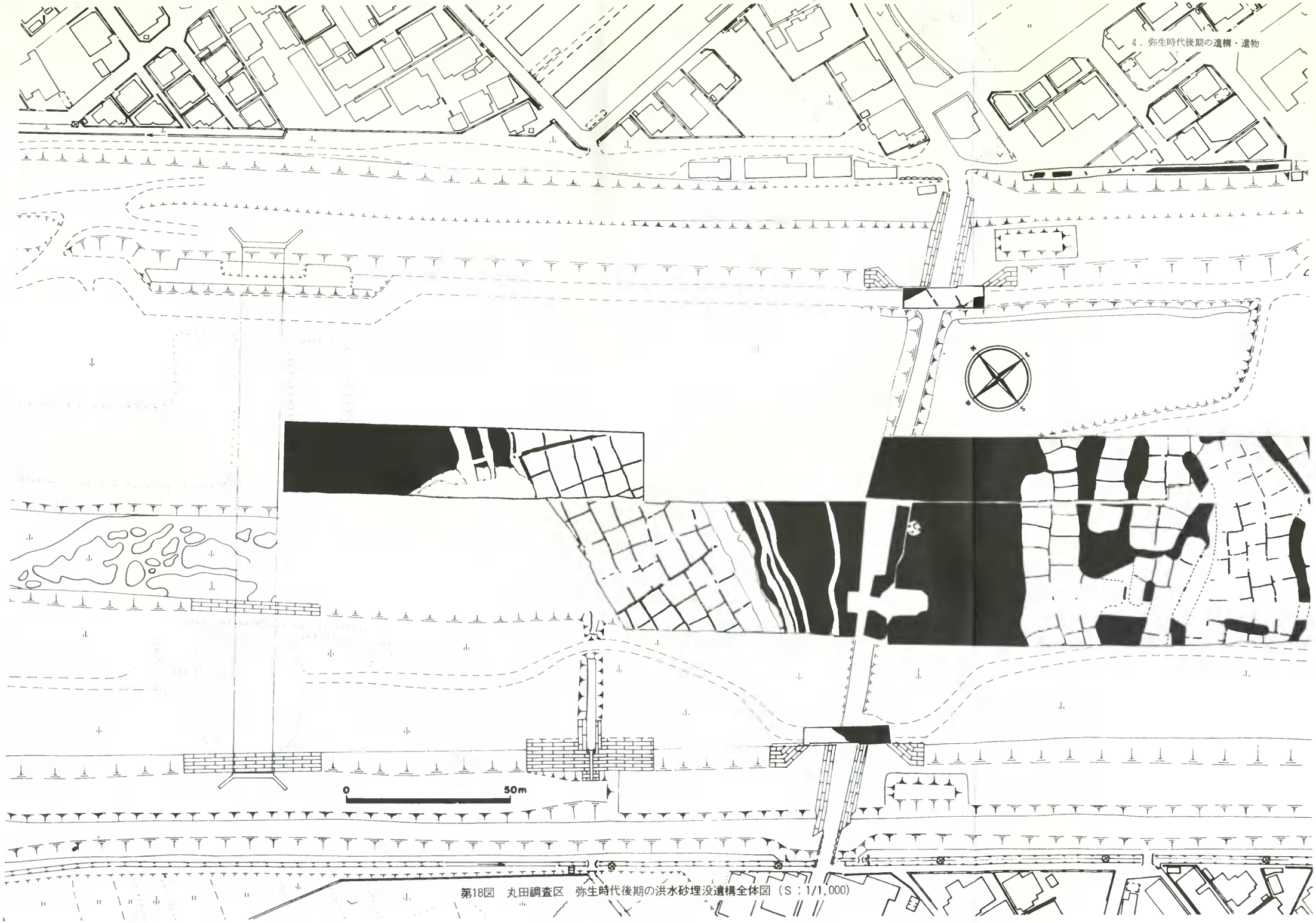


1．淡黄灰色粘質土　2．暗淡黄灰色粘質土
3．灰色粘土　4．暗灰色粘土（炭を多く含む）
5．灰色粘土　6．淡黄灰色粘土
7．淡灰黄色粘土

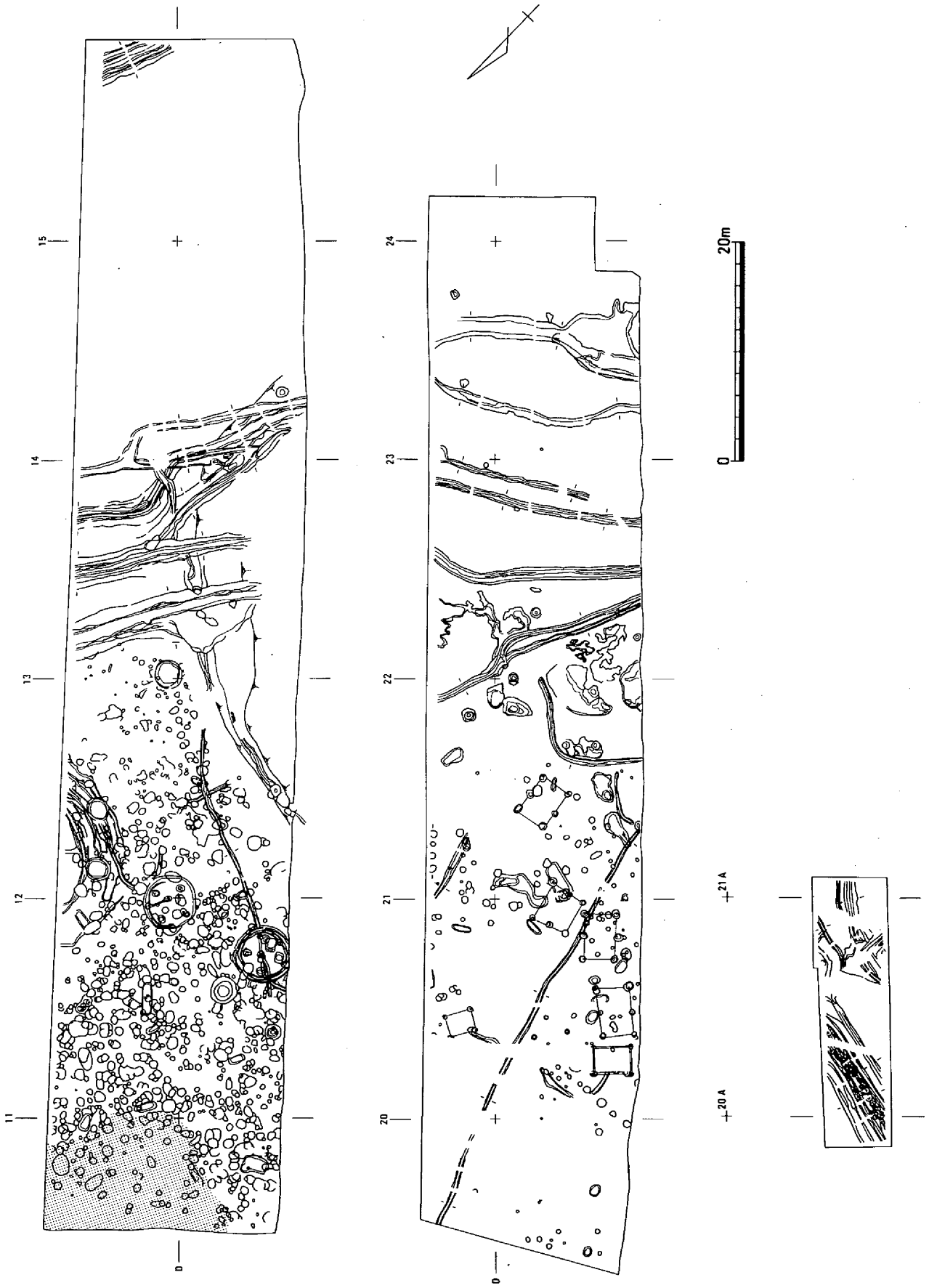
第16図　溝1



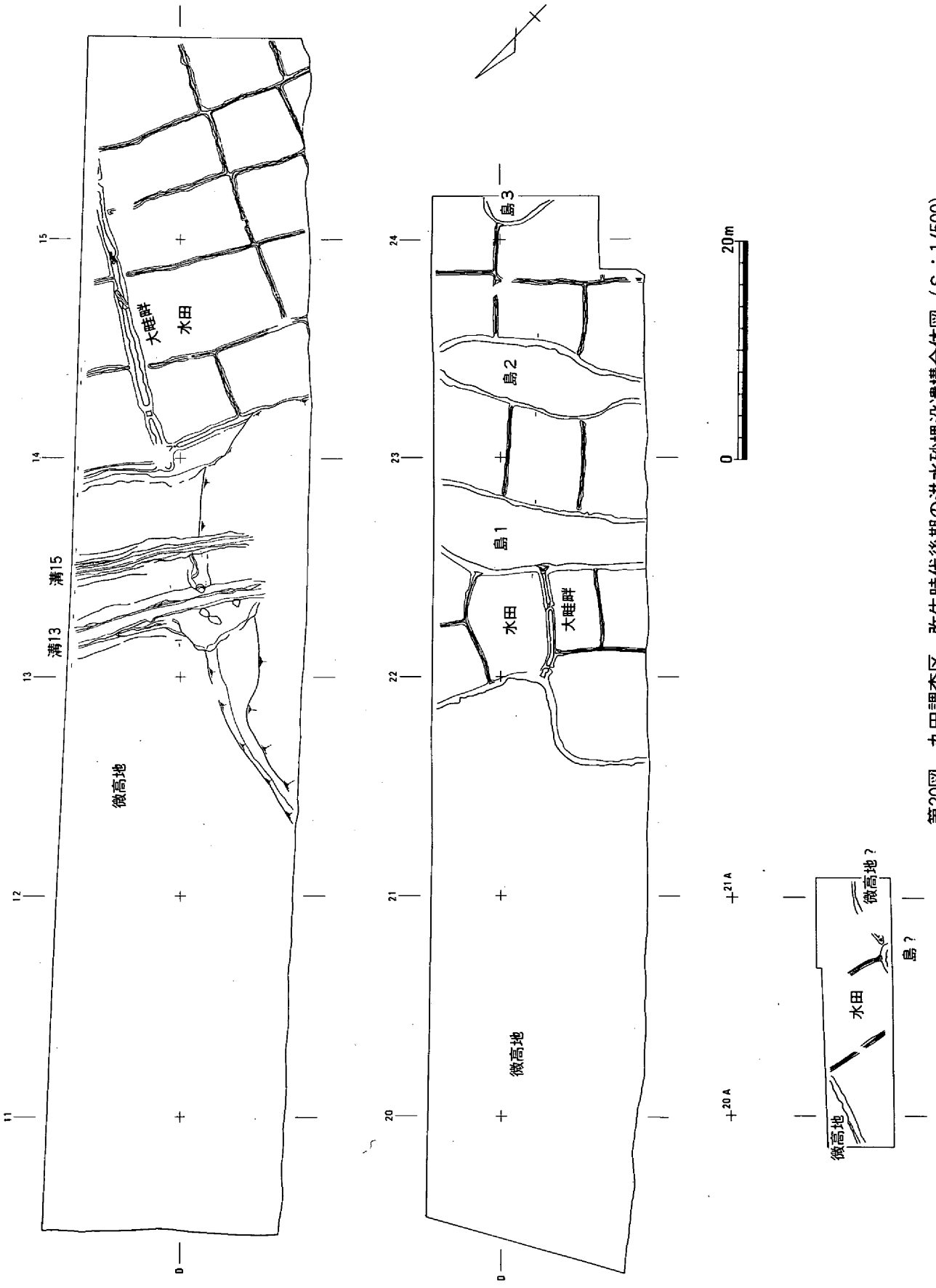
第17図　丸田調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S：1/1,000）



第18図　丸田調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S：1/1,000）

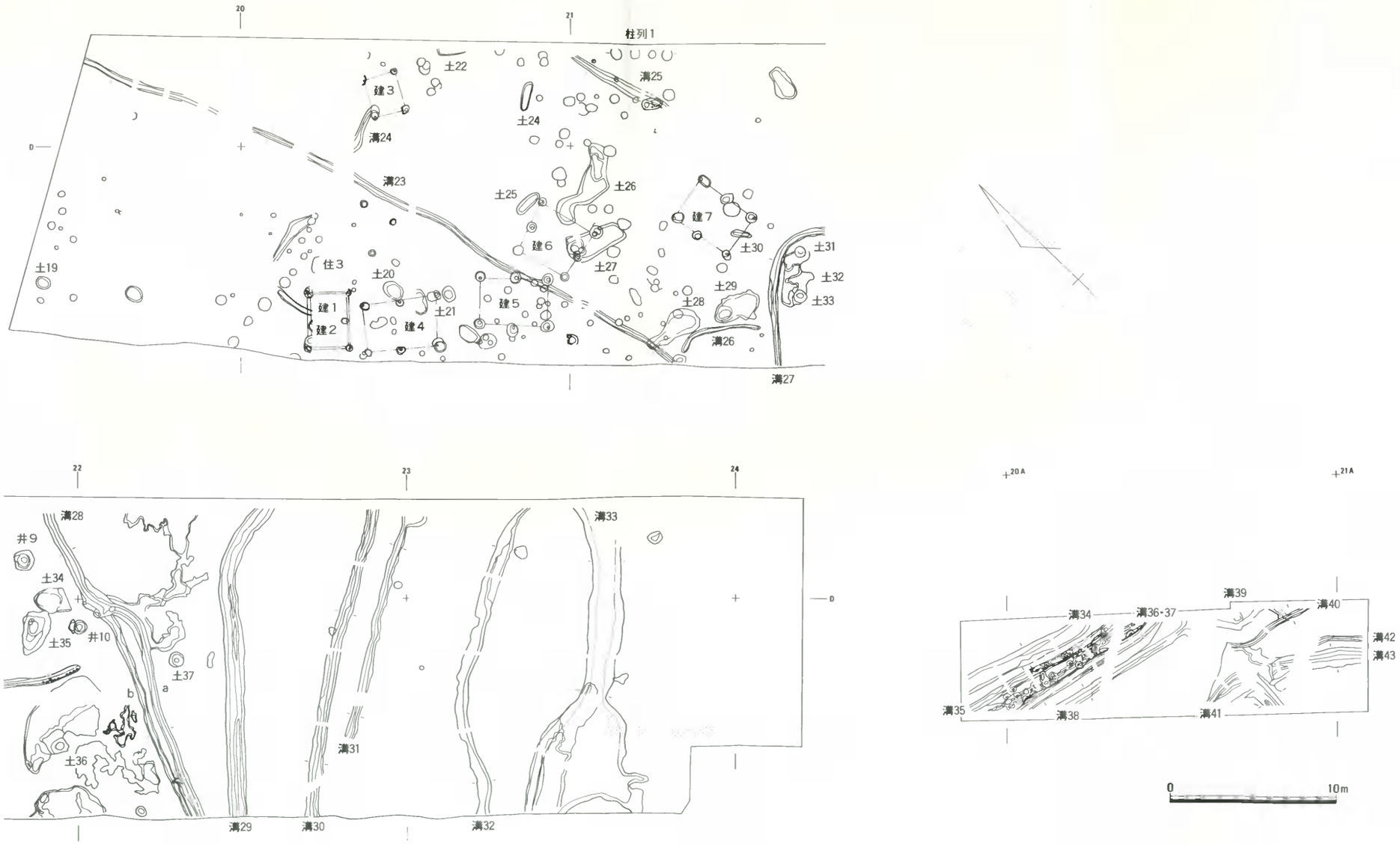


第19図　丸田調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S：1/500）



第20図　丸田調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S：1/500）

第21図　丸田調査区〈10～15C・D〉　弥生時代後期の遺構全体図（S：1/250）



第22図　丸田調査区〈19～24C・D，19・20A〉　弥生時代後期の遺構全体図（S：1/250）

4．弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 水　　田

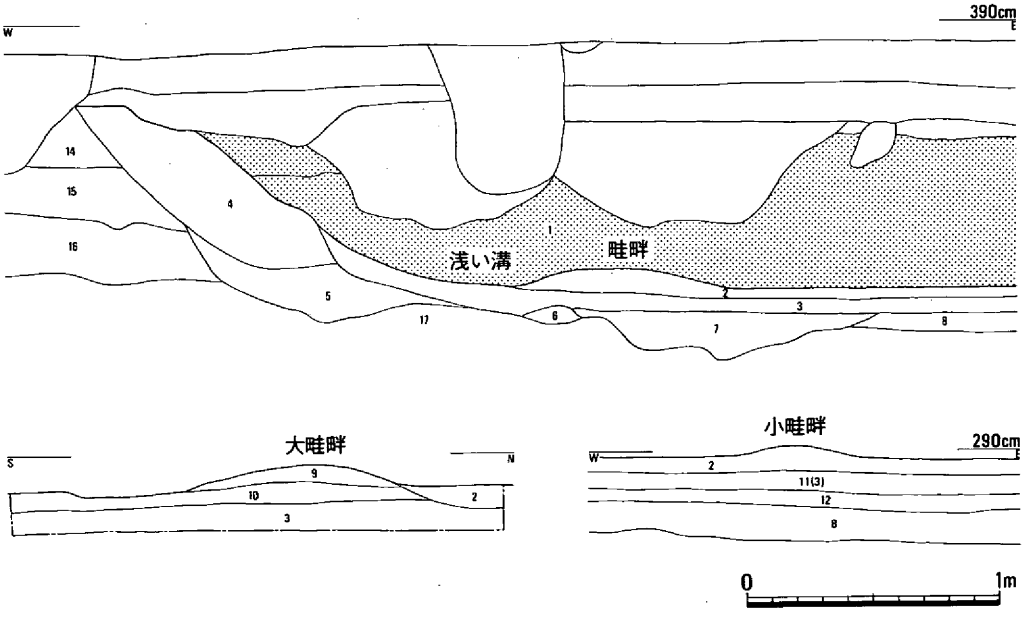
弥生時代後期末の洪水砂で埋没した水田は、丸田調査区の3箇所で検出されている。13～15C・D区の水田は、原尾島遺跡の中心をなす北西側の微高地と、南東側に広がる微高地との間を、ほぼ北東から南西方向に細長く延びる水田の一部である。

21～24C・D区の水田は、原尾島遺跡の東南限にあたる19～21C・D区の微高地の東南側に広がる低位部に形成された水田の一部をなすもので、南東側に広がる沢田遺跡の微高地まで続く。なお、21～24C・D区の水田の北東側に位置する19～21A区の水田も、原尾島遺跡から沢田遺跡間に広がる水田の一部をなすものである。

13～15C・D区の水田（第20・23図、図版4）

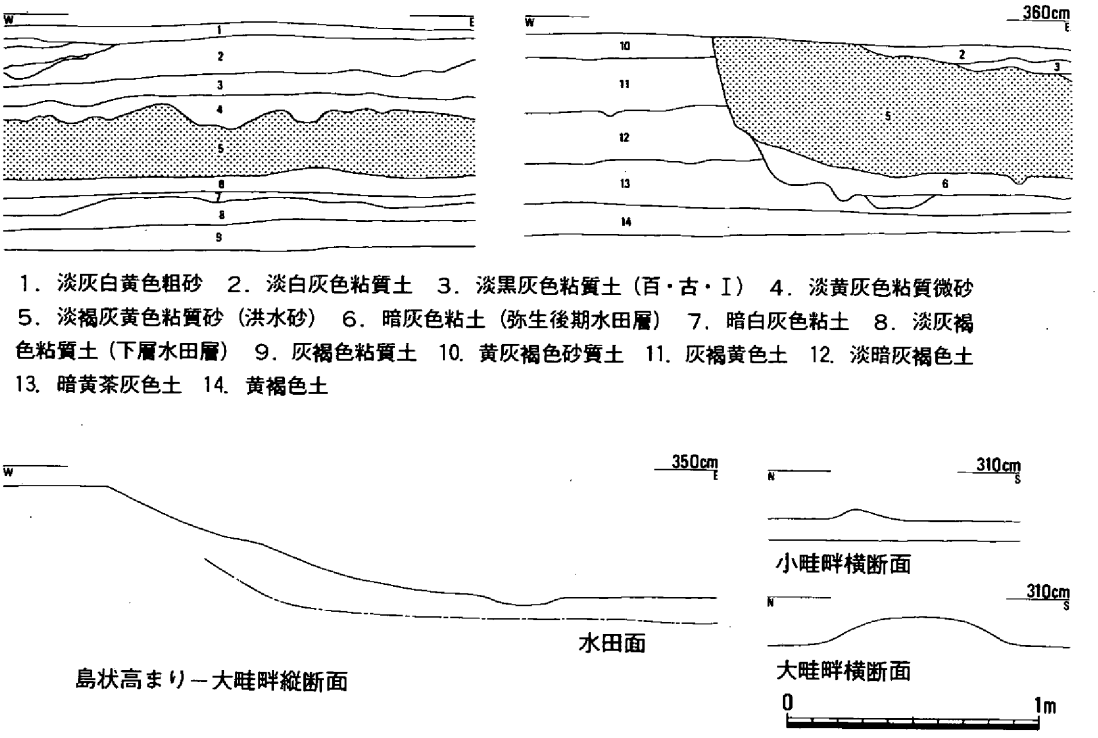
13～15C・D区で検出された水田で、北西側は微高地となるが、その他は調査区外へ広がる。水田は低位部に堆積した厚さ60cmあまりの洪水砂を除去すると検出される。水田の区画は、微高地からほぼ東へ向かって延びる大畦と、それに直行するように設けられた小畦によって、整然とほぼ田の字状になっている。区画された水田の規模は、小さいもので40㎡、大きいもので100㎡を測る。水利を見ると、微高地と微高地に沿って設けられた畦畔との間が浅い溝になっており、下流へ水を送るとともに、大畦と小畦の接する場所に作られた水口から水田へ水を引くこともできる。

水田面は16ライン付近の直下に旧河道があるため少し低くなるが、ほぼ標高2.8m前後にあり、微



1．オリーブ黄色（5Y6/3）微砂（洪水砂）　2．灰色（10Y5/1）粘土（水田層）　3．明褐灰色（7.5YR7/2）粘土　4．灰黄色（2.5Y6/2）粘質土　5．黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　6．褐灰色（10YR5/1）粘土　7．黄灰色（2.5Y5/1）粘土　8．褐灰色（10YR5/1）粘土　9．黄灰色（2.5Y5/1）粘質微砂　10．灰色（N4/1）粘質土　11．明褐灰色（7.5YR7/2）粘土　12．灰色（5Y6/1）粘土　14．灰黄褐色（10YR6/2）粘質微砂　15．灰黄褐色（10YR5/2）微砂粘土　16．にぶい黄褐色（10YR5/3）微砂粘土　17．にぶい黄色（2.5Y6/4）微砂

第23図　13～15C・D区の水田土層断面（S：1/30）



１．淡灰白黄色粗砂　２．淡白灰色粘質土　３．淡黒灰色粘質土（百・古・Ⅰ）　４．淡黄灰色粘質微砂　５．淡褐灰黄色粘質砂（洪水砂）　６．暗灰色粘土（弥生後期水田層）　７．暗白灰色粘土　８．淡灰褐色粘質土（下層水田層）　９．灰褐色粘質土　10．黄灰褐色砂質土　11．灰褐黄色土　12．淡暗灰褐色土　13．暗黄茶灰色土　14．黄褐色土

第24図　21～24Ｃ・Ｄ区の水田土層断面（Ｓ：1/30）

高地との比高は約１ｍを測る。検出された水田の耕作土となる水田層は、厚さ５㎝前後の灰色粘土であるが、その直下には第23図のように場所によって２ないし３層の水田層が認められる。いずれも後期に属するもので、ほぼ後期全般にわたって水田として利用されていたことがうかがわれる。

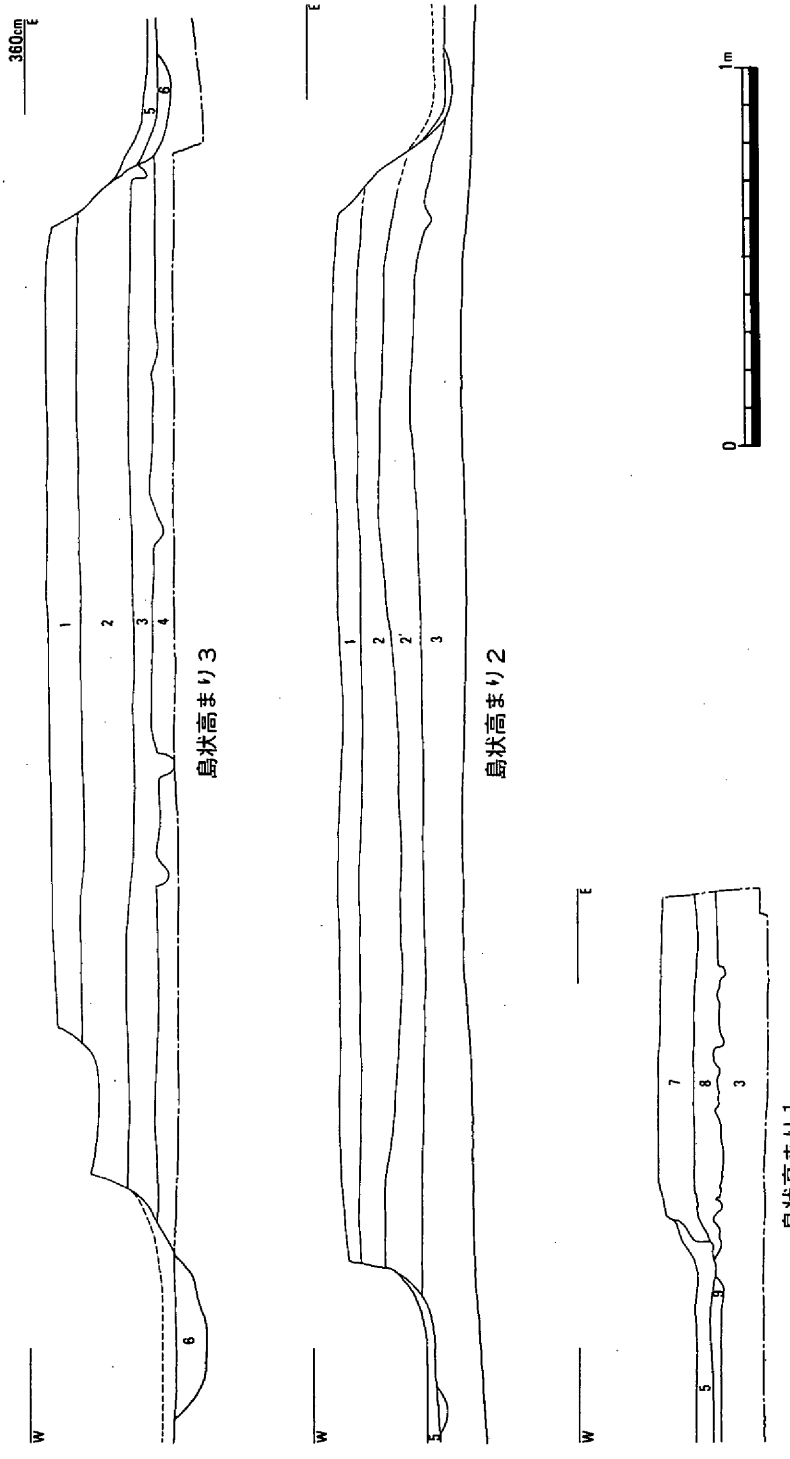
21～24Ｃ・Ｄ区の水田（第20・24・25図、図版４・５）

21～24Ｃ・Ｄ区で検出された水田は、北西側は微高地に接するが、その他は調査区外へ広がっている。田の字状に整然と区画された13～15Ｃ・Ｄ区の水田とは異なり、水田内に形成された島状高まりに規制され、やや不規則な区画となっている。しかし、水田を方形にしようという意識は強く、北西側の微高地も水田の形を整えるためかなり削り込まれている。畦畔は、ほぼ北東から南西方向に細長い島状高まり間および微高地間を結ぶように南東から北西方向に設けており、さらに一部はそれに直行させている。このうち大畦は、微高地から南東方向に延び、島状高まり１に取りつく１条のみで、他はすべて小畦である。畦畔の規模は大畦が幅70㎝、高さ12㎝あまり、小畦は幅20㎝、高さ４㎝前後を測る。水口は大畦に２箇所、小畦は明確ではないが、島状高まりとの接続部に少し認められる。

水田は標高2.9～３ｍ前後にあり、微高地との比高は50㎝を測る。水田層は厚さ８㎝あまりの暗灰色粘土層が一層であった。なお場所によっては暗白灰色粘土層（第24図７）の下に下層水田とされる淡灰褐色粘質土が認められるが、畦畔は確認できなかった。下層水田の時期は中期とされているが、ここでは時期を明確にする資料は得られなかった。

水田の規模は小さいもので30㎡、大きいもので80㎡以上である。

島状高まりは３箇所認められた。このうち島３は今回の報告では一部であるが、『百間川原尾島遺跡３』ですでに続きが報告されており、それと合わせて見ればいずれも細長い形状をしている。土層断面（第25図）を見ると、島状高まりの土は基本的に微高地と同じであり、また、ほぼ水平な堆積状



1．淡黄灰色土（マンガン・鉄分含む）　2．灰黄褐色土（マンガン・鉄分含む）　3．暗灰茶色土（マンガン含む）　4．黄灰色土　5．灰褐色粘質土（弥生後期水田層）　6．灰褐色粘質土（溝）　7．黄灰褐色土（マンガン含む）　8．淡暗黄灰褐色土　9．灰白褐色粘質土（マンガン・鉄分含む）

第25図　島状高まり1・2・3土層断面（S：1/20）

況を示している。また島状高まりに接する水田層直下には浅い溝がめぐっている。

19～21A区の水田（第20図、図版5）

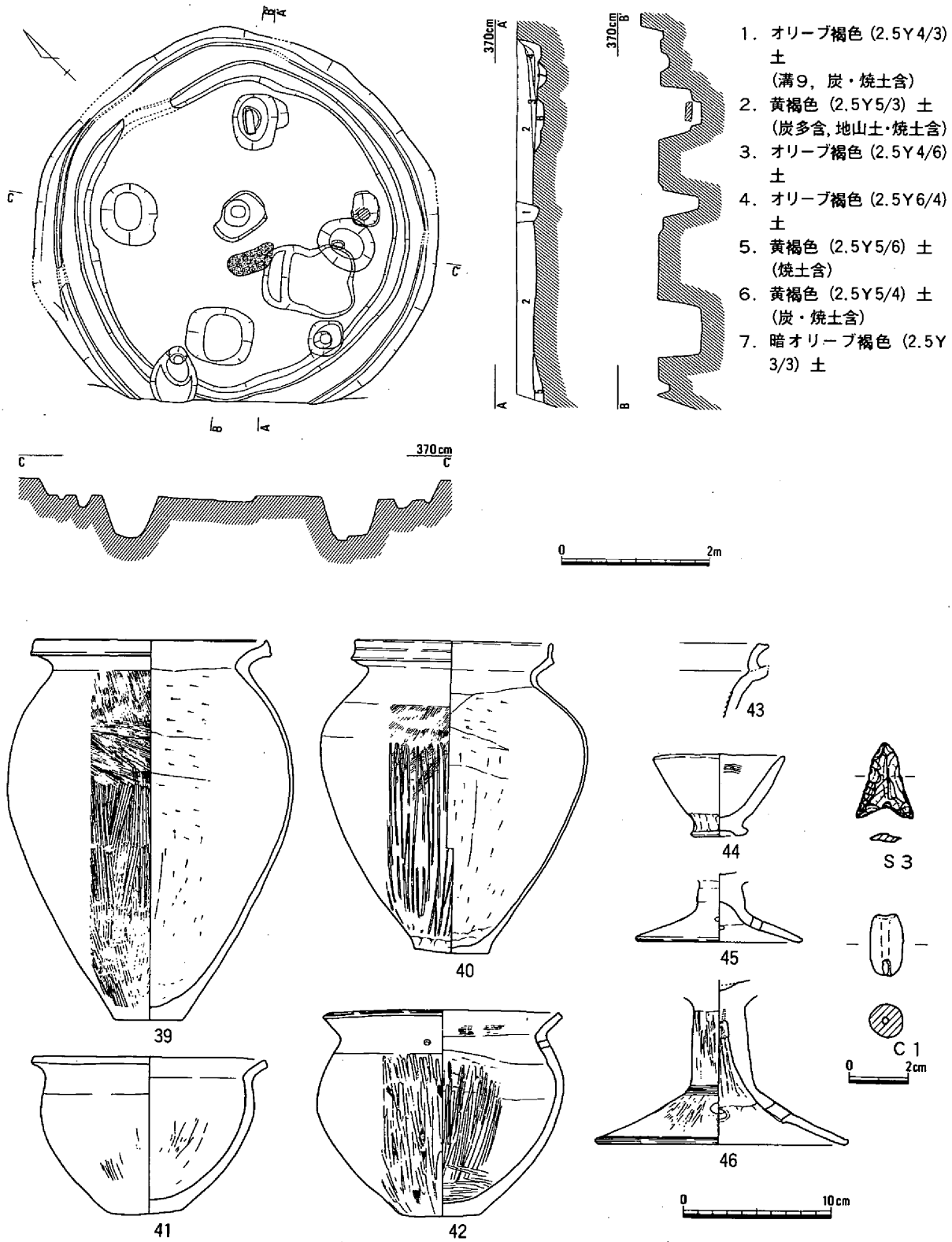
19～21A区で検出された水田であるが、調査範囲が狭いため全体の状況は明確ではない。調査区の北端と南端には微高地ないし島状高まりがあり、その間を結ぶように小畦を南北方向に設けている。

（平井）

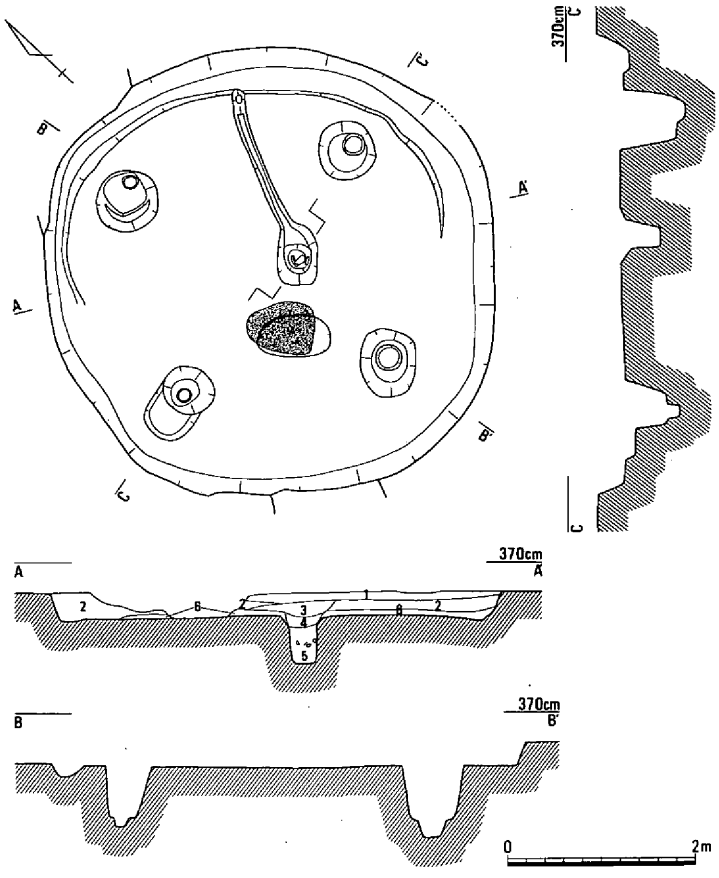
(2) 竪穴住居

竪穴住居１（第26図、図版６・49・71）

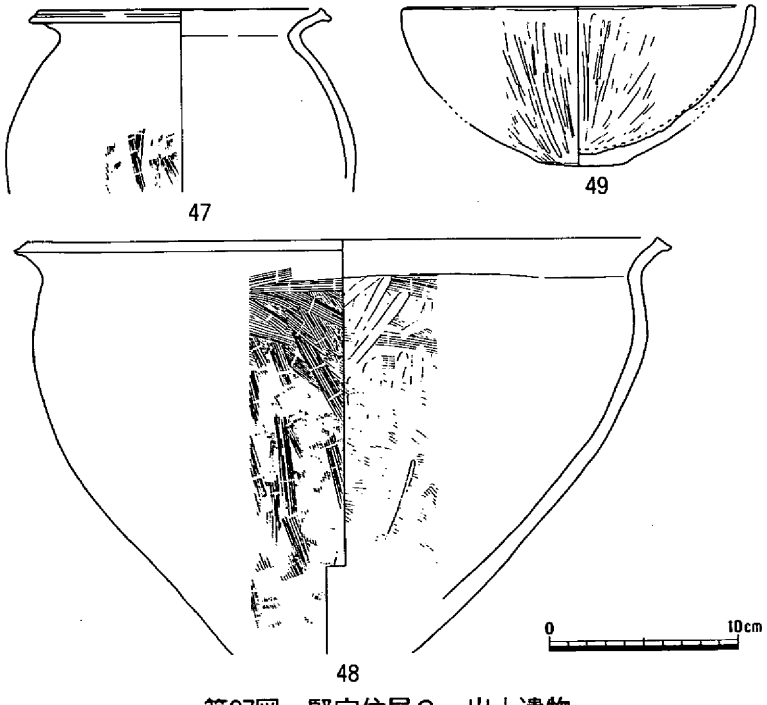
11Ｄ区の中央やや東寄りで検出した竪穴住居で、その北側には井戸１がある。また南西の一部は調



第26図　竪穴住居１・出土遺物



1．黄褐色（2.5Y5/4）土（炭含）　2．黄褐色（2.5Y5/3）土（炭・焼土粒・地山土含）　3．暗灰黄色（2.5Y4/2）土（炭・焼土含）　4．黄褐色（2.5Y5/4）土（地山粒多含）　5．暗灰黄色（2.5Y4/2）土（炭・焼土多含，地山土含）　6．オリーブ褐色（2.5Y4/6）土（炭含，地山土多含）



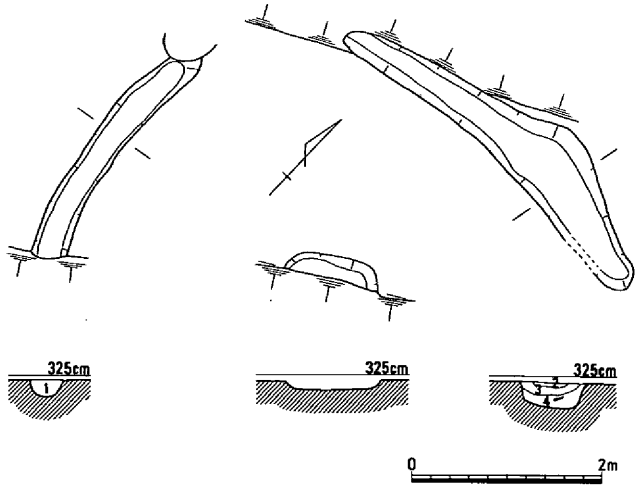
第27図　竪穴住居２・出土遺物

査区外となる。平面形は円形で住居の拡張があり、その最終規模は径5.4m、床面までの深さ25cmを測る。なお、住居廃絶後に後期の溝９が横切っており、第26図の１層に該当している。

最初の住居の柱穴は４本で、南東の１本は楕円形、他は隅丸方形を呈する。規模は長径80～90cm、床面からの深さ60cmで、北東の柱穴では川原石を礎石としていた。壁体溝は内側のもので、径4.5m前後を測る。

拡張後の住居は５本柱と考えられる。北東と北西の柱穴は、最初の住居の柱穴と同時に掘り上げたため明らかではないが、他はほぼ円形で径50～60cm、深さ35～50cmを測る。中央穴は２段に掘られ、当初から踏襲したものと考えられる。上段は75×55cm、深さ７cmの浅い隅丸方形で、さらにその中央を径40cm、深さ50cmの円形に掘りくぼめる。また、その南に近接して65×30cmの不定形の範囲に焼土面がみられた。床面は黄色土の貼床で、その貼床と３層上面には薄い炭層が認められた。

遺物には土器と石器、土製品がある。39、42、46、Ｓ３は最初の住居の柱穴から、他は拡張後の住居の埋土からの出土である。これらの土器の特徴から百・後・Ⅱに住居を拡張し、最終的な廃絶は百・後・Ⅲと考えられる。　（高田）



1．黄褐色（2.5Y5/3）土　2．にぶい黄色（2.5Y6/4）土
3．暗褐色（10YR3/3）土（焼土多含，炭層含）
4．褐色（10YR4/6）土

第28図　竪穴住居３

竪穴住居２（第27図、図版７）

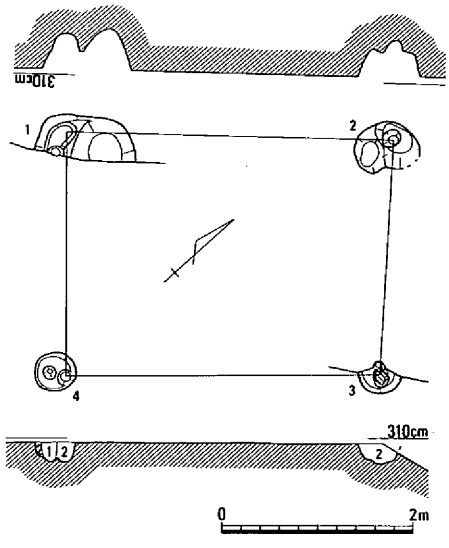
11・12Ｃ・Ｄ区で検出した竪穴住居である。平面形は円形で、規模は径4.9m、検出面からの深さ30cmを測る。住居内には壁にそって溝がめぐるが、北東側しか検出できなかった。柱穴は４箇所あり、いずれもほぼ円形を呈する。いずれの柱穴にも、底には柱にかかる重みで沈み込んだ穴が認められた。

住居のほぼ中央には円形を呈し、径25cm、深さ40cmを測る中央穴が穿たれ、その内部には炭や焼土が多く認められた。この中央穴からは北東方向へ浅い溝が延びており、壁体溝に接して終わる。また中央穴の南西側には楕円形を呈する浅い凹みが認められ、これと重なりながら一部北西側にずれるように硬く焼けた焼土面がある。

遺物は埋土中から少量出土しており、いずれも弥生土器である。この土器の特徴から、住居廃絶の時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

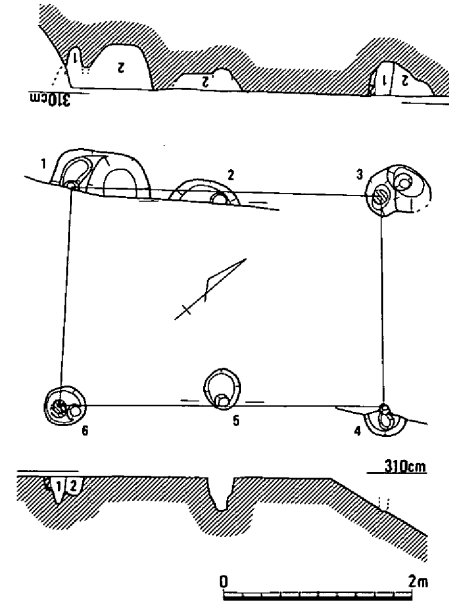
竪穴住居３（第28図）

20Ｄ区の中央やや北寄りに位置し、後期の遺構面で検出した遺構である。北部と南部を近現代の溝で大きく削平されているため、その詳細は不明である。壁体溝と中央穴の一部のみ検出し柱穴は認められなかったが、住居とすれば隅丸方形か円形と考えられる。



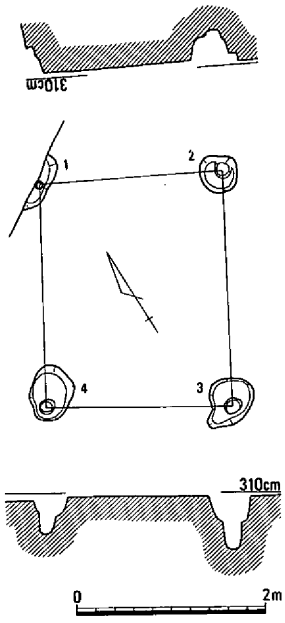
1．灰黄褐色（10YR4/2）土（褐灰色砂混）
2．灰褐色（7.5YR5/2）土（浅黄色土粒含）

第29図　建物１

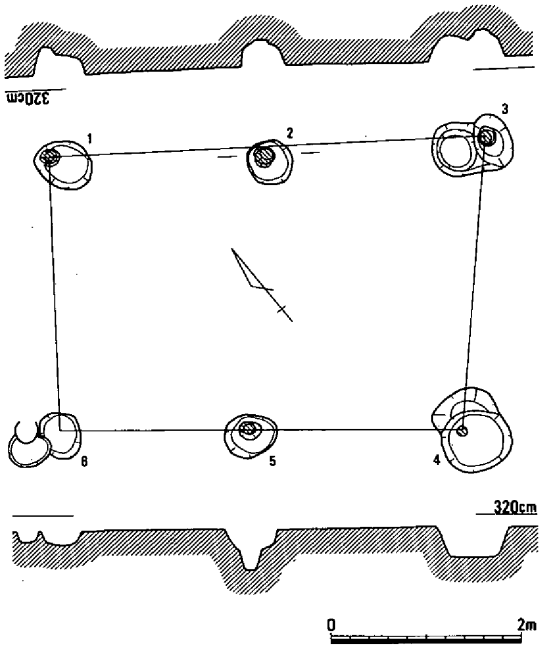


1．灰黄褐色（10YR4/2）土（褐灰色砂混）
2．灰褐色（7.5YR5/2）土（浅黄色土粒含）

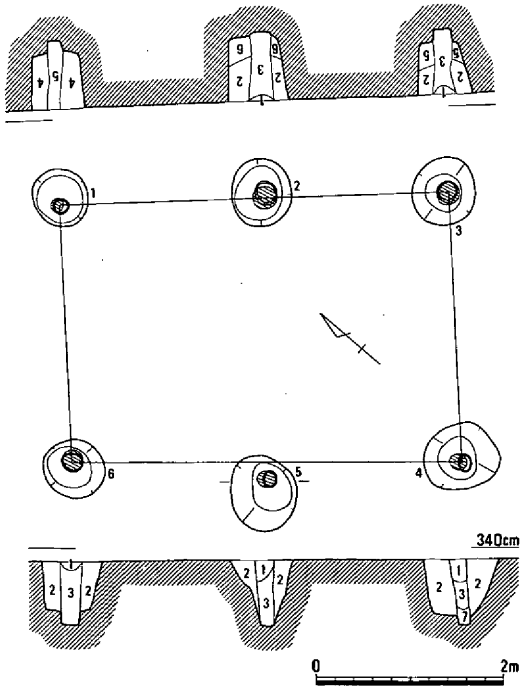
第30図　建物２



第31図　建物３



第32図　建物４



第33図　建物５

1．灰色粘質土
2．黄茶灰色土
（炭・焼土含む）
3．灰黄茶色土
4．黄灰色土
5．灰黄色粘質土
6．暗灰黄色粘質土
7．灰褐色粘土

遺物はそれらの遺構から少量出土しているが、いずれも細片である。住居の時期は、検出状況から後期と考えられる。　（高田）

(3) 建　　物

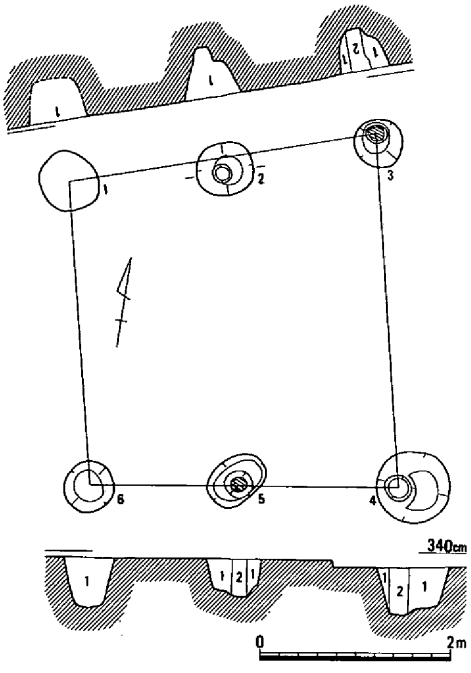
建物１（第29図、図版10）

20Ｄ区の中央やや西寄りに位置する１間×１間の建物である。柱の一部を近現代溝で削平されている。建物は軸線を北東－南西にとり、長辺344cm、短辺260cmを測る。柱穴は後述する建物２と切り合っており、掘り方の形状は不明だが、径45cm前後のほぼ円形を呈するものと考えられる。

出土遺物には後期の土器片がある。竪穴住居と一部切り合っており、検出面から先行すると考えられる。以上の状況から、建物の時期は後期と考えられる。　（高田）

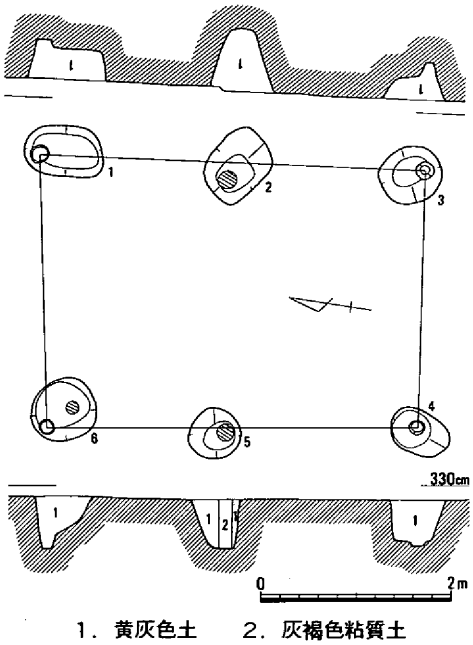
建物２（第30図、図版10）

建物１の立て替えと考えられる建物である。四隅の柱穴は建物１と同じ掘り方内で柱位置を替えており、両長辺間に柱穴２と５を新たに配している。その結果、１間×２間の建物となり、長辺349cm、



１．黄茶灰色土　　２．灰褐色砂質土

第34図　建物６



１．黄灰色土　　２．灰褐色粘質土

第35図　建物７

短辺228cmを測る。柱穴２と５の間はやや短い。柱掘り方は柱穴２が径70cmとなるほかは、径45cmのほぼ円形と考えられる。底にはいずれも柱が沈んでできた凹みが検出され、３、４には柱痕跡が認められた。

土器は少量の細片が出土しており、時期は建物１と同様、後期と考えられる。　（高田）

建物３（第31図、図版10）

20Ｃ区の南西部で検出した１間×１間の建物である。建物は軸線を北東－南西にとり、長辺252cm、短辺196cmを測る。柱掘り方は径40～60cmで、いずれの底にも柱が沈んでできた凹みが検出された。

土器は少量の細片が出土しており、時期は後期と考えられる。　（高田）

建物４（第32図、図版10）

20Ｄ区の中央で検出し、建物１、２の東側に位置する１間×２間の建物である。建物は軸線を北西－南東にとり、北東側の長辺456cm、南西側の長辺424cm、北西側の短辺292cm、南東側の短辺312cmを測る。柱掘り方は径50～75cmのほぼ円形で、柱穴６を除いて柱の痕跡が検出されている。

土器は少量の細片が出土しており、時期は後期と考えられる。　（高田）

建物５（第33図、図版11）

建物４の東側に平行する形で検出した１間×２間の建物であるが、その軸線は一致しない。長辺416cm、短辺280cmを測り、柱掘り方は径60～80cmのほぼ円形である。すべての柱穴で径20cm前後の柱の痕跡が検出され、断面図でも明瞭である。また、底には柱が沈んでできた凹みが認められる。

遺物は土器片が出土しており、その特徴から建物の時期は、百・後・Ⅱと考えられる。　（高田）

建物６（第34図、図版11）

建物５の西側に位置し、20・21Ｄ区にまたがって検出した１間×２間の建物である。軸線を東西からやや東に振っている。その規模は東辺が380cmで、ほかは各辺とも324cmを測り、台形状を呈する。柱の掘り方は径50～75cmのほぼ円形で、柱穴２～６では底に柱が沈んでできた凹みを検出している。

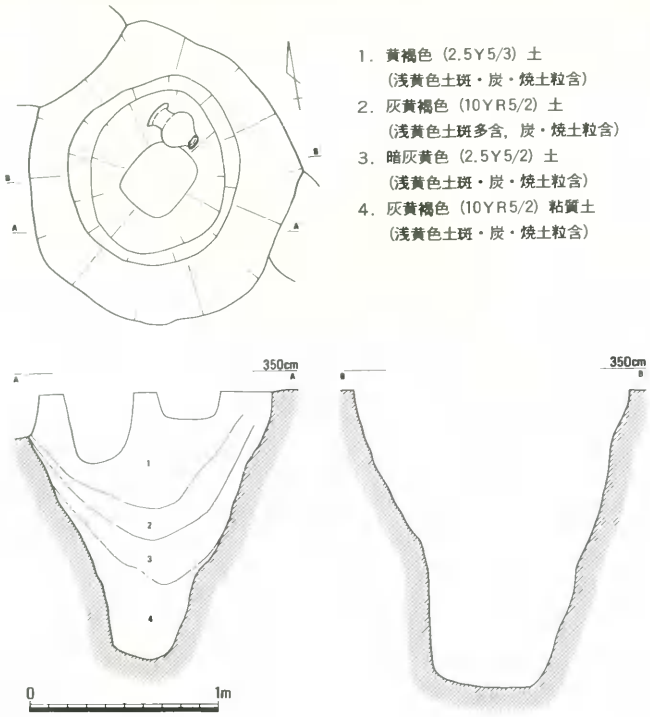
土器は少量の細片が出土しており、時期は後期と考えられる。　（高田）

建物７（第35図、図版11）

建物６の南東に位置する１間×２間の東西棟の建物である。北辺408cm、南辺392cm、西辺292cm、東辺272cmを測り、周辺の建物４、５とほぼ同規模である。柱掘り方は径50～70cmで、円形と長楕円のものがある。また柱穴２を除き、底に柱が沈んでできた凹みを検出している。

土器は少量の細片が出土しており、時期は後期と考えられる。

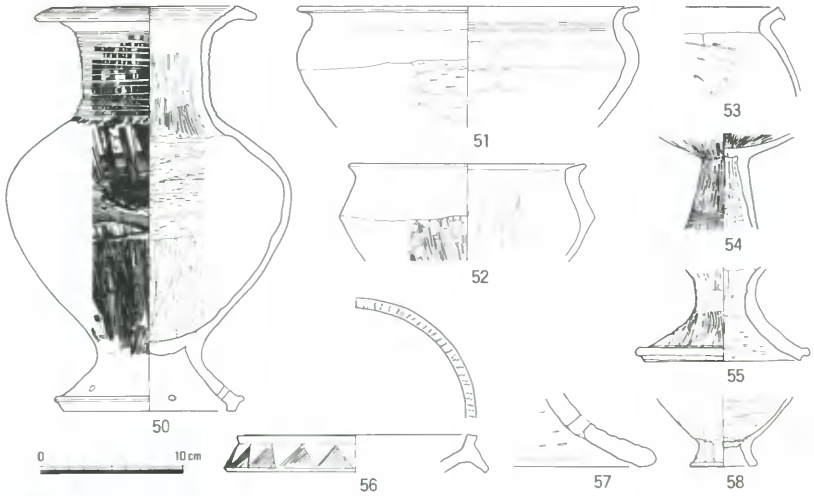
（高田）



(4) 井　　戸

井戸１（第36図、図版11・49・70・71）

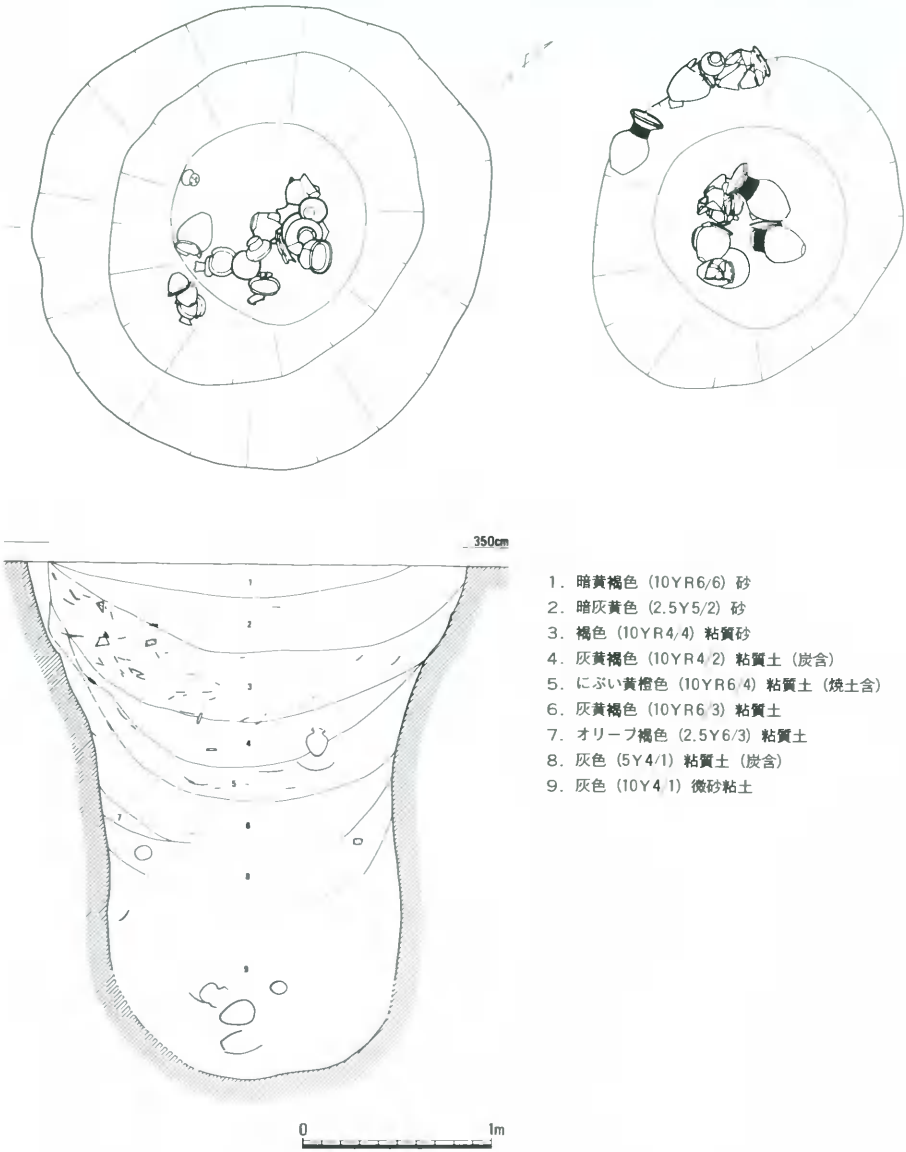
11D区のほぼ中央で検出した井戸である。平面形は径145cmのほ



第36図　井戸１・出土遺物

ぼ円形を呈し、深さは検出面から157cmを測る。底面の標高は181cmである。断面は、井戸の中位までは逆「ハ」字形で、それ以下はほぼ垂直になり、平坦で隅丸方形状を呈する底面に至る。埋土は４層で、いずれの層にも炭・焼土粒と基盤土である浅黄色土をブロック状に含む。その状況は、人為的に短期間で埋めたことを窺わせる。

出土遺物には弥生土器片がある。50は井戸中位の３層中から出土し、口縁をやや下に向けた横位の

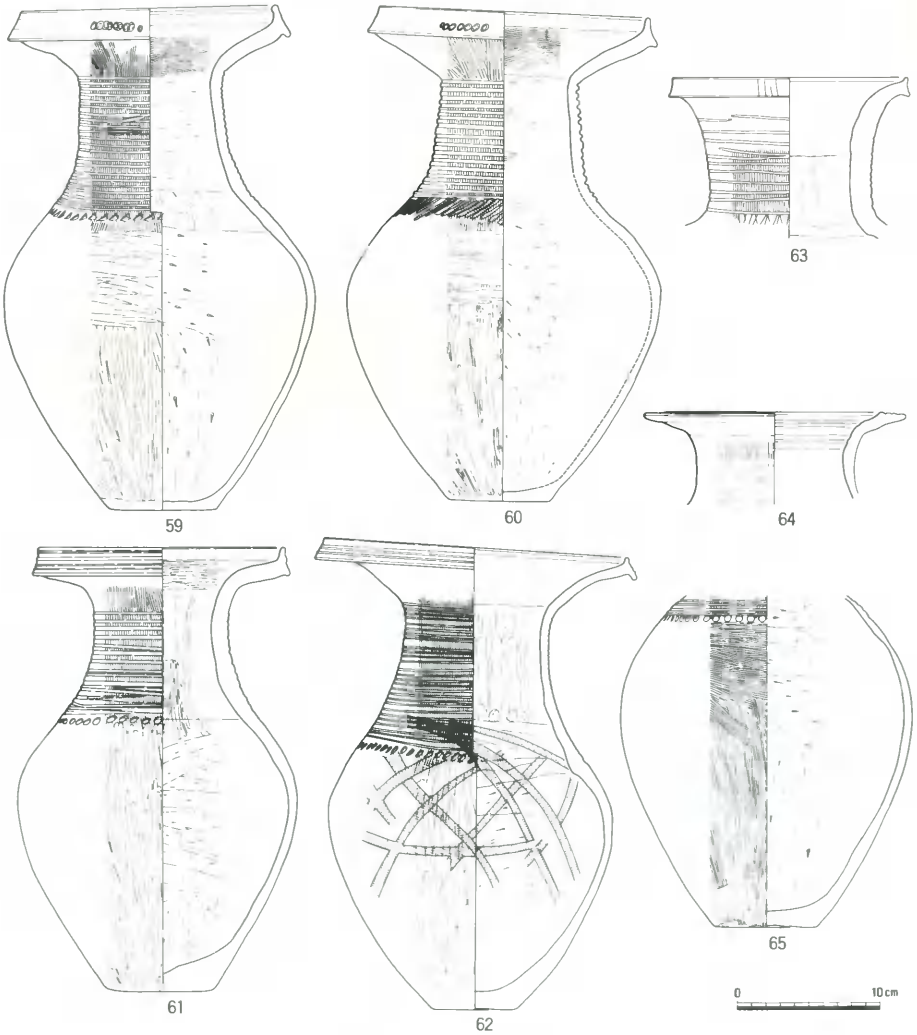


第37図　井戸２

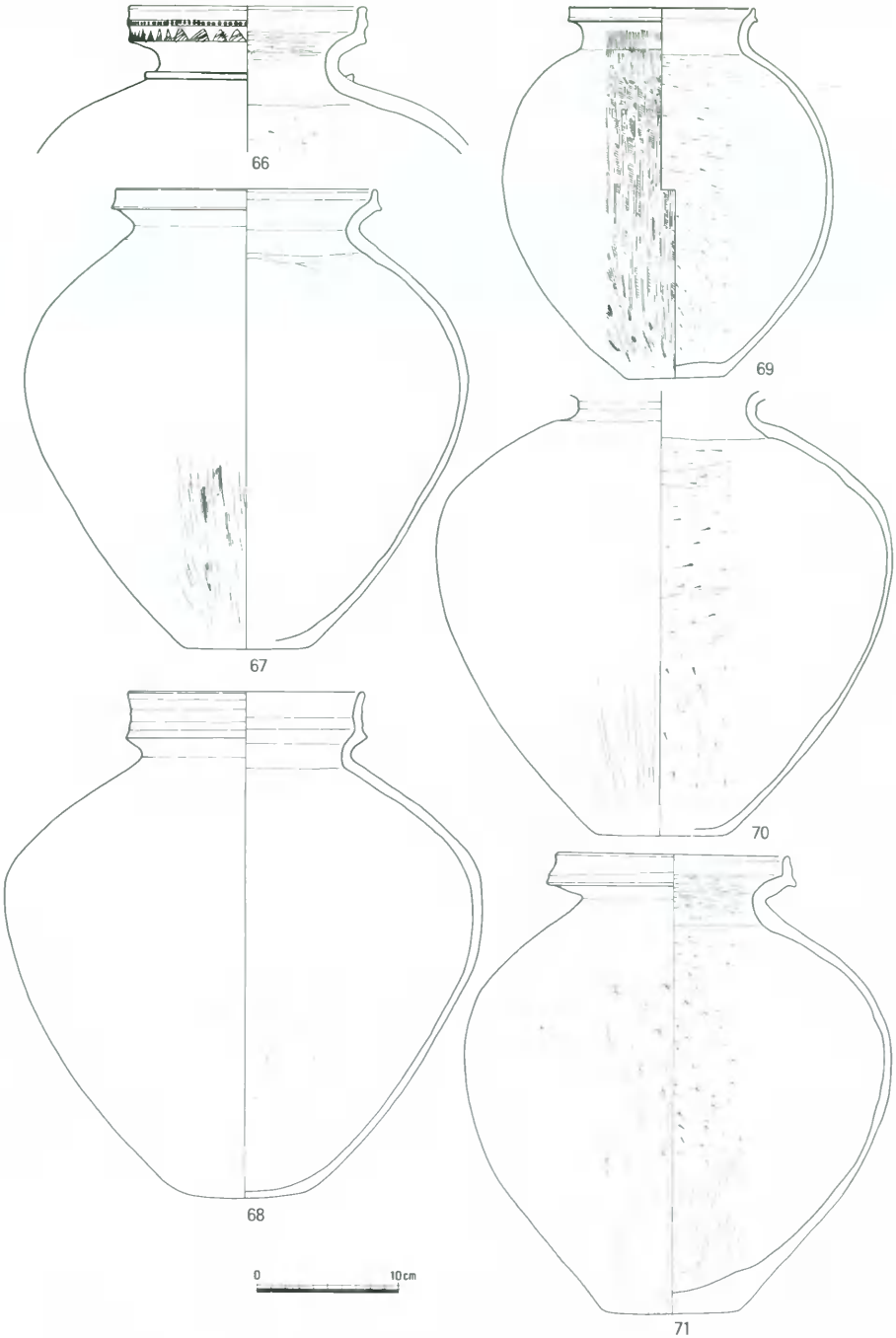
状態で検出した。これらの遺物の特徴は百・後・Ⅱに比定されることから、この時期に井戸は廃棄されたものと考えられる。（高田）

井戸２（第37～43、図版12・49～52）

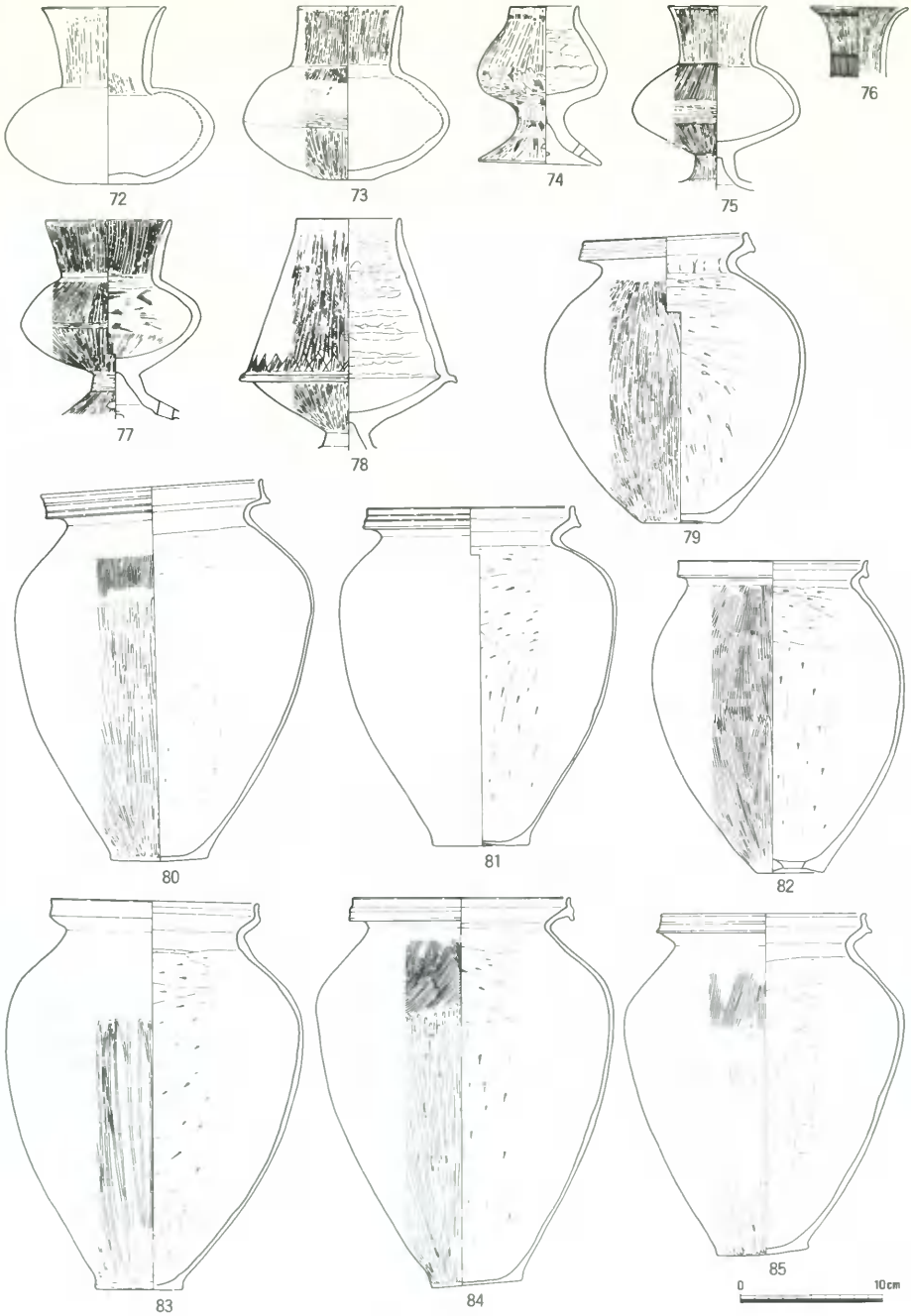
11D区の竪穴住居１の北西側で検出された井戸である。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径2.5m、深さ2.75mを測る。断面形をみると、上部は上の方に向かって開きぎみに立上るものの、下部はほぼ垂直な壁となる。底部は平坦というよりは中央部がやや深くなる。埋土はほぼレンズ状に堆積しているが、底部近くでは灰色微砂粘土が厚くみられる。遺物は１・２層には少なく、３～５層に完形に近いものも含めてまとまっているが、６～８層ではまた少なくなる。９層の遺物は完形品を主体にして



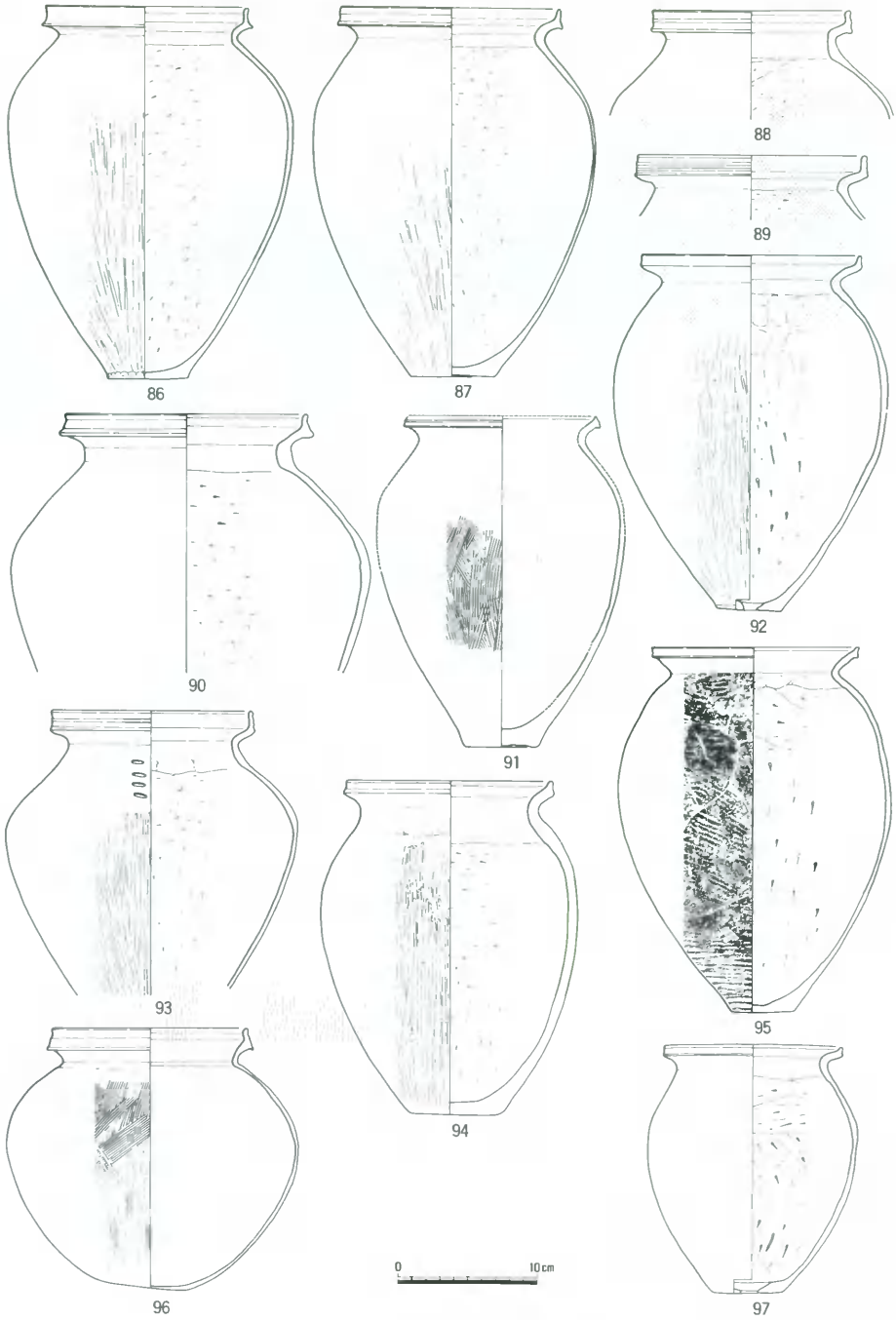
第38図　井戸２出土遺物（１）



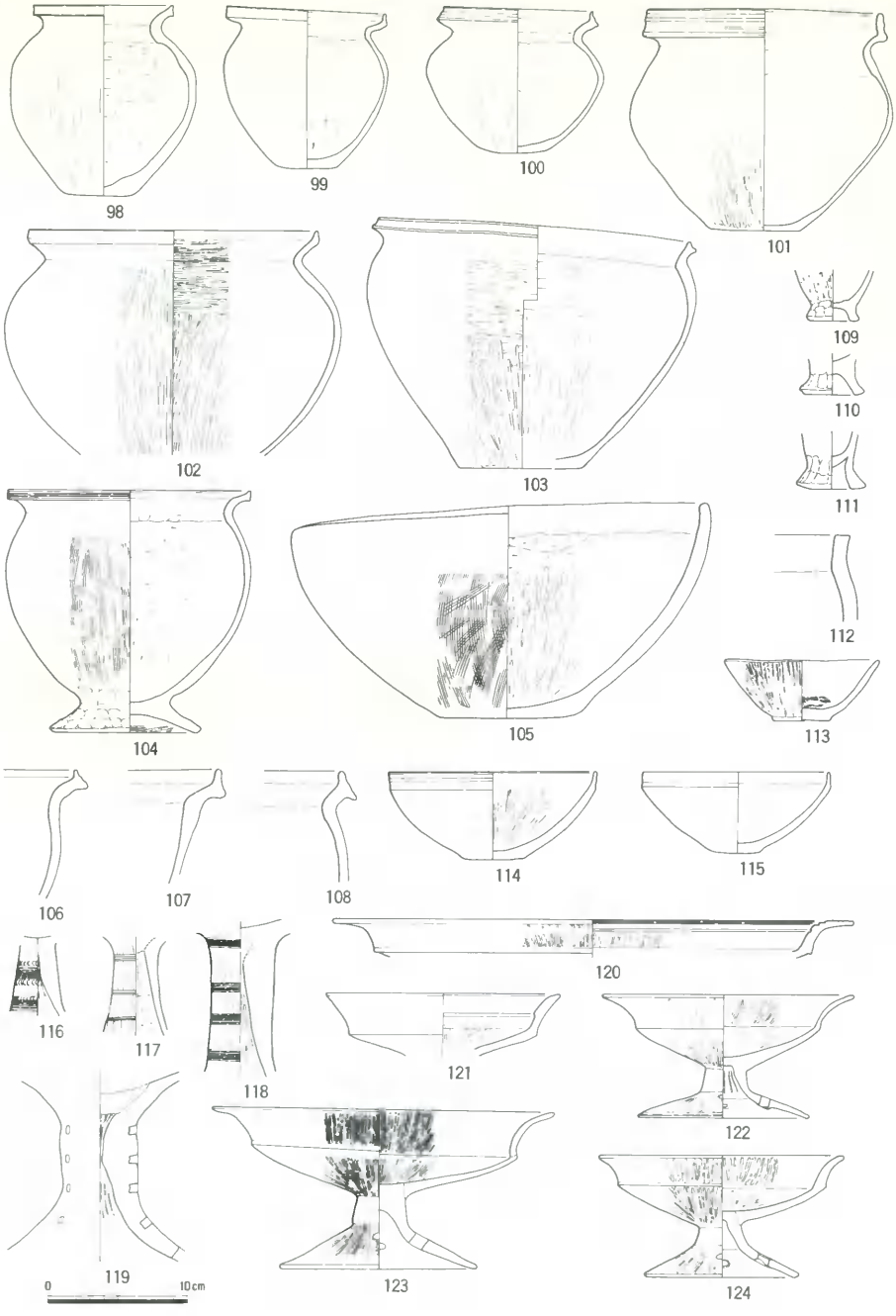
第39図　井戸２出土遺物（２）



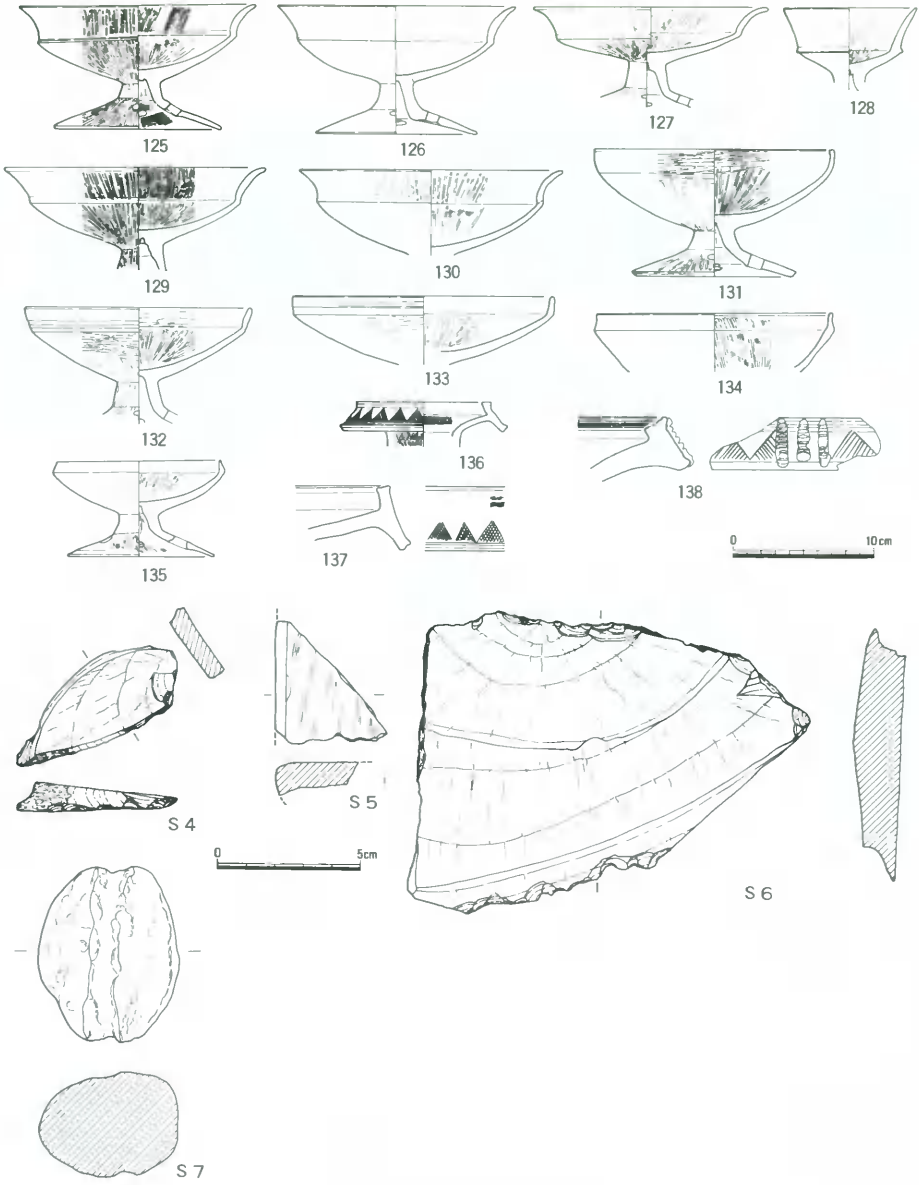
第40図　井戸２出土遺物（３）



第41図　井戸２出土遺物（４）



第42図　井戸２出土遺物（５）



第43図　井戸２出土遺物（６）

おり、上層のような細片まで含むことはない。おそらく下層の遺物は井戸の廃棄に伴う祭祀行為の結果と推定される。これに対し上層の遺物は廃絶後井戸がかなり埋まった段階で廃棄されたものと考えられる。

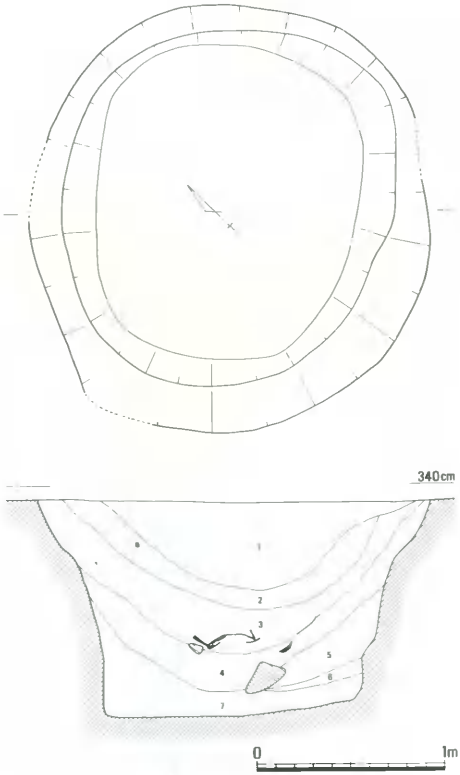
井戸内出土遺物は弥生土器を主体に、石器もわずかに認められる。土器は完形ないし完形に復元できるものが多い。器種は壺、甕、鉢、高杯、器台などがある。壺のなかには62のように胴部に籠目を残すものや、59・60のように上下に拡張された口縁端部外面に記号状の刺突を加えるものがある。また甕にも93のように記号状の刺突を施すものがある。石器は板状の剝片の一側縁に調整を加えた掻器状の石器や砥石、そして板状の石核、厚みのある円礫に敲打による溝をめぐらす石錘が出土した。

井戸廃絶の時期は下層の遺物が示す百・後・Ⅱに近いものと推定され、上層の上器は百・後・Ⅲに属する。（平井）

井戸３（第44・45図、図版13・52・53）

12C区の西部で検出した井戸である。後期の溝２～４の埋没後に掘られている。その平面形は220cm前後のやや楕円形を呈し、深さは検出面から115cmを測る。底面の標高は217cmである。11～13C・D区の後期の井戸底面の標高は、大別して220cm前後と130cm前後かそれ以下に区分できるが、当井戸はその前者に属している。また断面は、上部が逆「ハ」字形で、それ以下はほぼ垂直に落ち込んでいる。底は平坦で、167×140cmの長楕円形を呈す。埋土にはいずれの層にも炭・焼土粒と基盤土のブロックである浅黄色土を含んでいるが特に１層の下面は顕著である。その状況は、井戸の人為的な埋没を窺わせるものである。

出土遺物には土器片があり、概ね百・後・Ⅲに属している。これは当井戸と溝２～４との切り合い関係とも整合している。よって、井戸の廃絶も土器の示す時期に近いものと考えられる。（高田）

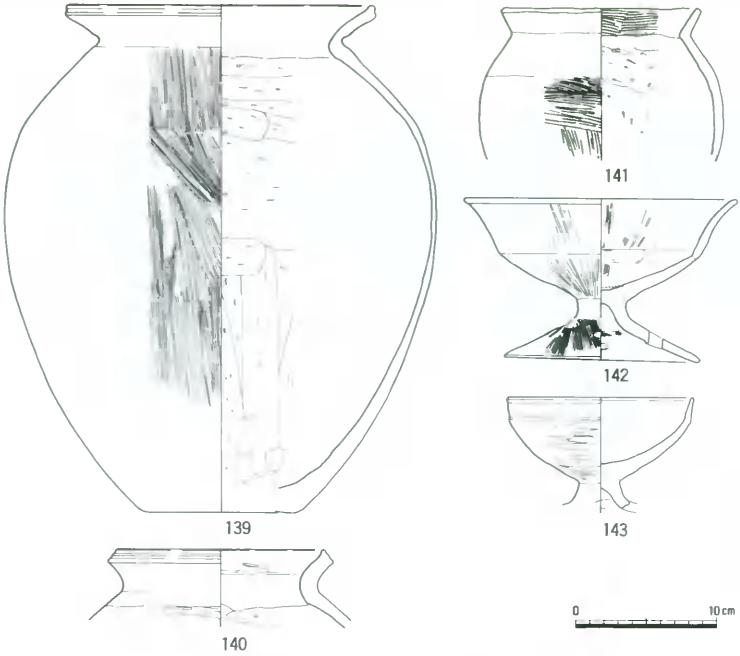


1．灰黄褐色(10YR5/2)土
（炭・焼土粒多含、下面に顕著な炭・焼土層）
2．黄灰色(2.5Y5/1)粘質土(浅黄色土斑・炭・焼土粒含)
3．暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(浅黄色土斑多含、炭・焼土粒含)
4．暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(炭・焼土粒含)
5．黄灰色(2.5Y5/1)粘土(浅黄色小斑多含、炭・焼土粒含)
6．浅黄色(2.5Y7/4)粘土　7．暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土

第44図　井戸３

井戸４（第46図、図版13）

12C区のほぼ中央で検出し、先述した井戸３の東南3.5mに位置する井戸である。これも後期の溝５～７の埋没後に掘られている。その平面形は226×196cmの楕円形を呈し、深さは検出面から103cmを測る。底面の標高は225cmで、調査区内の後期の井戸では最も浅く、井戸３に近い。また断面は、中位まで逆「ハ」字形で、それ以下はほぼ垂直に落ち込んでいる。底は平坦で、170×149cmの長楕円形を呈す。埋土には炭と基盤土のブロックを含み、その埋没状況は人為的なものを窺わせる。



第45図　井戸３出土遺物

出土遺物は少量の弥生土器片のみであり、図示した土器は後期に属する。また、溝５～７との切り合い関係から、井戸の掘削・廃絶は溝よりも新しく考えられる。さらに形態、規模、埋土の状況等で井戸３との類似性が指摘できる。（高田）

井戸５（第47・48図、図版53）

12C区のほぼ中央で検出した井戸である。北半を中世以降の洪水に、南半を後期の溝12によって削られているため、その平面形は不定形だが現状で径１ｍ前後を測る。深さは検出面から170cmを測り、底面の標高は131cmである。壁の傾斜は急で、上部で若干広がるものの、ほぼ底に向かって直線的に落ち込んでいる。埋土は上層ほど砂質で、５層以下は粘質土～粘土となる。

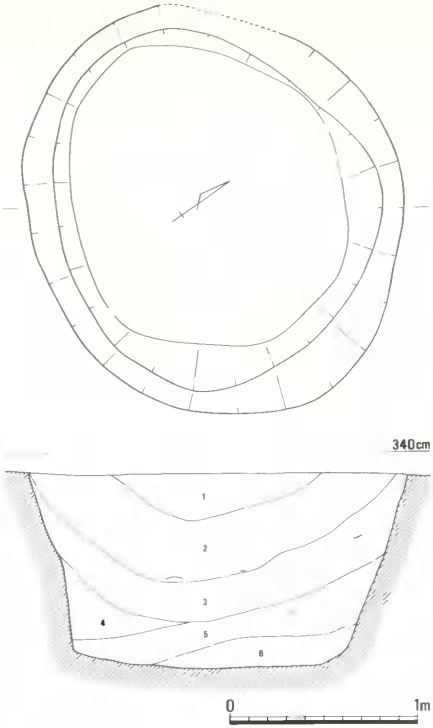
出土遺物には弥生土器片があり、時期は百・後・Ⅱと考えられる。（高田）

井戸６（第49・50図、図版13・53）

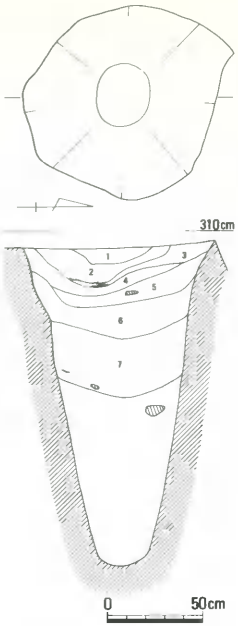
12D区で検出された井戸であるが、大部分は調査区外である。井戸の断面図は調査区北壁にかかった状況であるが、それから規模を推定すると径1.5m以上と推定される。埋土はいずれの層にも炭を含むが、特に11層は薄い炭層で、その直下の12層には多くの炭を含む。遺物は９・10層から集中的に出土しており、断面では南東方向から廃棄されたような土器片の流れが認められた。

遺物はすべて弥生土器である。器種は壺、甕、鉢、高杯、器台、それに製塩土器が認められる。157の壺は口縁部をくの字状に外反させ、端部を丸く収めるもので、例は少ない。

出土遺物の時期は百・後・Ⅰと考えられ、井戸廃絶の時期もこれに近いものと思われる。（平井）

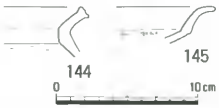


1．オリーブ褐色（2.5Y4/3）土（炭・焼土含）
2．オリーブ褐色（2.5Y4/3）土（地山土多含）
3．暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）土（炭含）
4．オリーブ褐色（2.5Y4/6）土（地山土含）
5．暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）土（炭含）
6．暗黄褐色（2.5Y7/6）粘質土（黄灰色土含）



1．褐灰色（7.5Y4/1）土
2．にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土
3．褐灰色（10YR4/1）粘質微砂
4．にぶい黄色（2.5Y6/4）粘質微砂
5．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
6．黄褐色（2.5Y5/3）粘土
7．黄灰色（2.5Y5/1）粘土

第47図　井戸５



第46図　井戸４・出土遺物

井戸７（第51図、図版14・53・68）

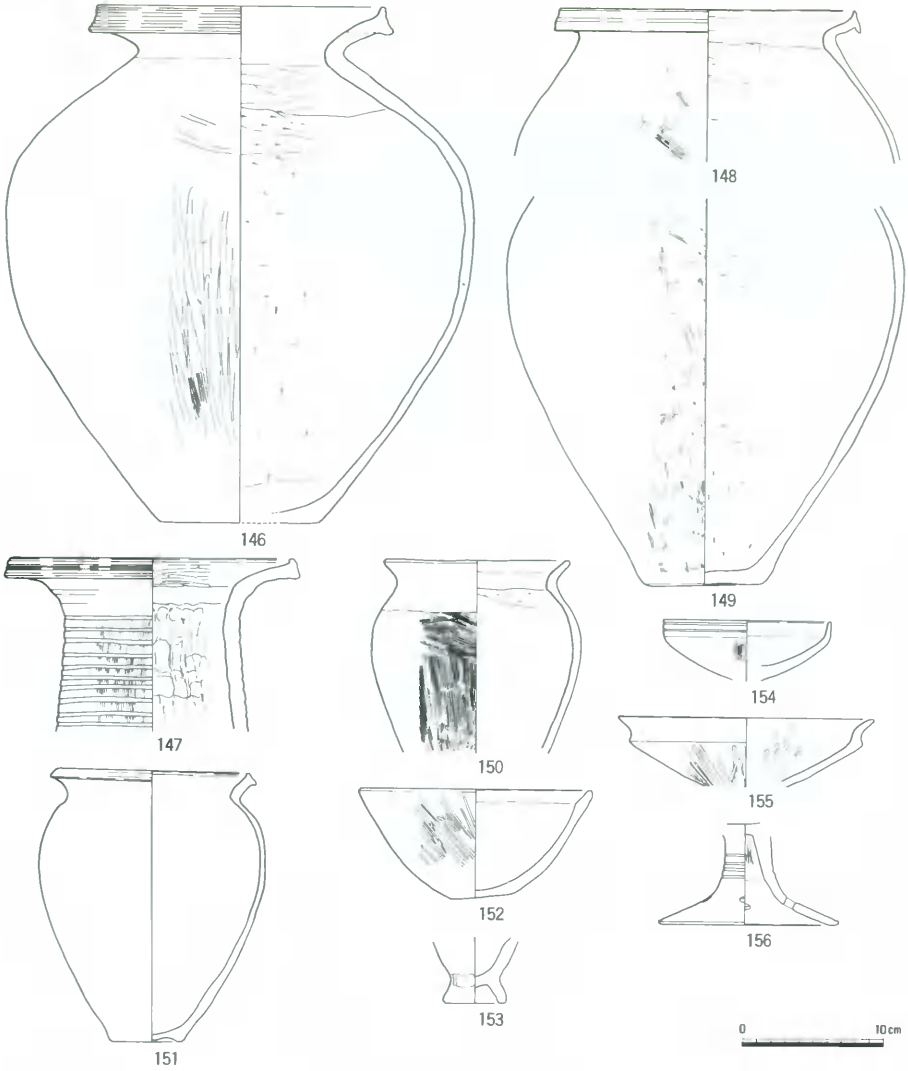
12・13C・D区で検出された井戸である。平面形は円形を呈し、規模は径2.6m、深さ2.1mを測る。断面形を見ると壁はほぼ垂直に立上がるが、北東側の下部は外側に抉れ、上端より広くなる。底は平坦で、中央よりやや北西寄りに井戸枠が半分残存する。この井戸枠は径75cmあまりで、丸太を半截して内部を刳り抜いたものである。

埋土は検出面近くまで大別五層の厚い層が堆積しており、このうち５層には礫が認められた。上部の北西側には凹地が形成され、焼土塊や焼土、および土器の細片が廃棄されていた。

遺物は少なく弥生土器と石器が出土した。石器は打製石包丁の破片で、短辺側には抉りが認められる。井戸廃絶の時期は土器から百・後・Ⅲと考えられる。（平井）

井戸８（第52図、図版14）

14D区で検出された井戸で、おそらく微高地からわずかに離れた低位部にあたる場所と考えられる



第48図　井戸５出土遺物

が、中世以降に上部が削平されているため明確でない。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.9m、深さ1.15mを測る。内部は底部にむかって徐々にすぼまり、底部はほぼ平坦である。

埋土は三層に分かれる。遺物は少なく、３層に弥生土器がわずかに認められた。時期は後期前半と考えられる。（平井）

井戸９（第53～61図、図版15・53～57）

21Ｃ区の微高地で検出された井戸である。平面形はやや角張る円形で、規模は径1.35m、深さ1.45mを測る。断面を見ると、底は平坦で、下半部はほぼ垂直に壁が立上るものの、上半部は開きながら

立上る。埋土は大きく三層に分けられる。下層にあたる５・６層は土器を含まないが植物遺体などが認められ、井戸廃絶後の自然堆積によるものと考えられる。これに対し中層から上層にかけての２～４層には炭や焼土とともに大量の土器が投棄されており、人為的な廃棄行為によって堆積した層である。最上層の１層には炭や焼土をわずかに含むものの、遺物は認められず、わずかな凹みに自然に堆積したものと考えられる。

遺物はすべて弥生土器である。器種は壺、台付壺、甕、鉢、台付鉢、高杯、器台および製塩土器がある。壺は各種の形態が認められ、長い頸部に沈線をめぐらし、その下端に突帯を貼付けるもの（176・178）、やや長い無文の頸部下端に突帯を貼付けるもの（175・177）、長い頸部に沈線をめぐらすもの（179～183・185～187）、やや長い頸部に沈線をめぐらすもの（184）、長い頸部に文様をもたないもの（189・192）、やや長い頸部に文様をもたないもの（188・190・191・193～199）、頸部の立上りはなく、頸部が細くしまるもの（201～203）、内湾する胴部から短い口縁が立上るもの（200）、外開きのやや長い口縁をもち、脚台が付くもの（204・205）がある。なお199は胴部上半に記号状の刺突が施されている。

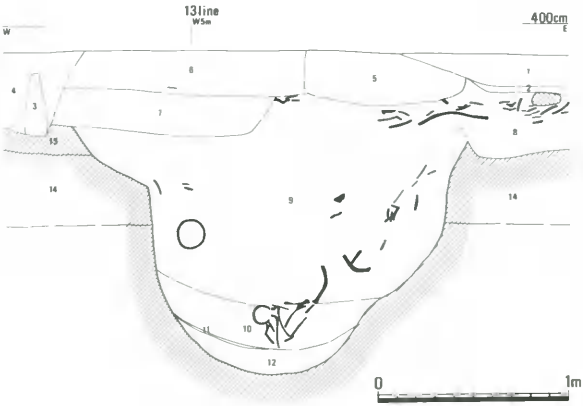
甕はいずれも倒卵形の胴部に、くの字状に外反する口縁部が付く器形である。口縁端部は上下に拡張するものと、しないものとがあるが、いずれも端面は退化した凹線ないし強い横ナデによる凹部がめぐる。208は口縁部内面に３個の刺突が認められる。

鉢は大型のもの（258・260）と、小型のもの（243～251・253～255・259）とがある。小型のものには口縁部がくの字状に外反するもの（247など）と、上方に立上ったまま終るもの（255など）とがある。また口縁下に円孔を穿つもの（243～245・254）や、底部に穿つもの（255）もある。

256は台付鉢で、口縁下に円孔が２個１対穿たれる。

高杯は緩やかに立上る底部に外反する口縁部が付く杯部をもつもの（261～263・265・267・275・276）、浅い椀状の底部に短く立上る口縁部が付くもの（270・271）、そして椀状の杯部をもつもの（257・268・269）とがある。なお278は飾られた高杯である。

器台はいずれも鼓形に上下が開くもので、280は少し拡張された口縁部端面に棒状浮文と内部を斜



1．
2．　(近世溝)
3．黄灰色(2.5Y6/1)砂質土
4．灰黄色(2.5Y6/2)砂質土　(中世柱穴)
5．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土(中世土壙)
6．淡黄色(2.5Y8/4)砂(古墳時代包含層)
7．にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(住9)
8．黄褐色(2.5Y6/4)土(弥生後期土壙)
9．褐色(10YR4/1)土(炭含)
10．暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(炭含)
11．炭層
12．黄灰色(2.5Y5/1)粘質土(炭多含)
13．褐色(10YR4/4)土
14．明黄褐色(2.5Y7/6)土

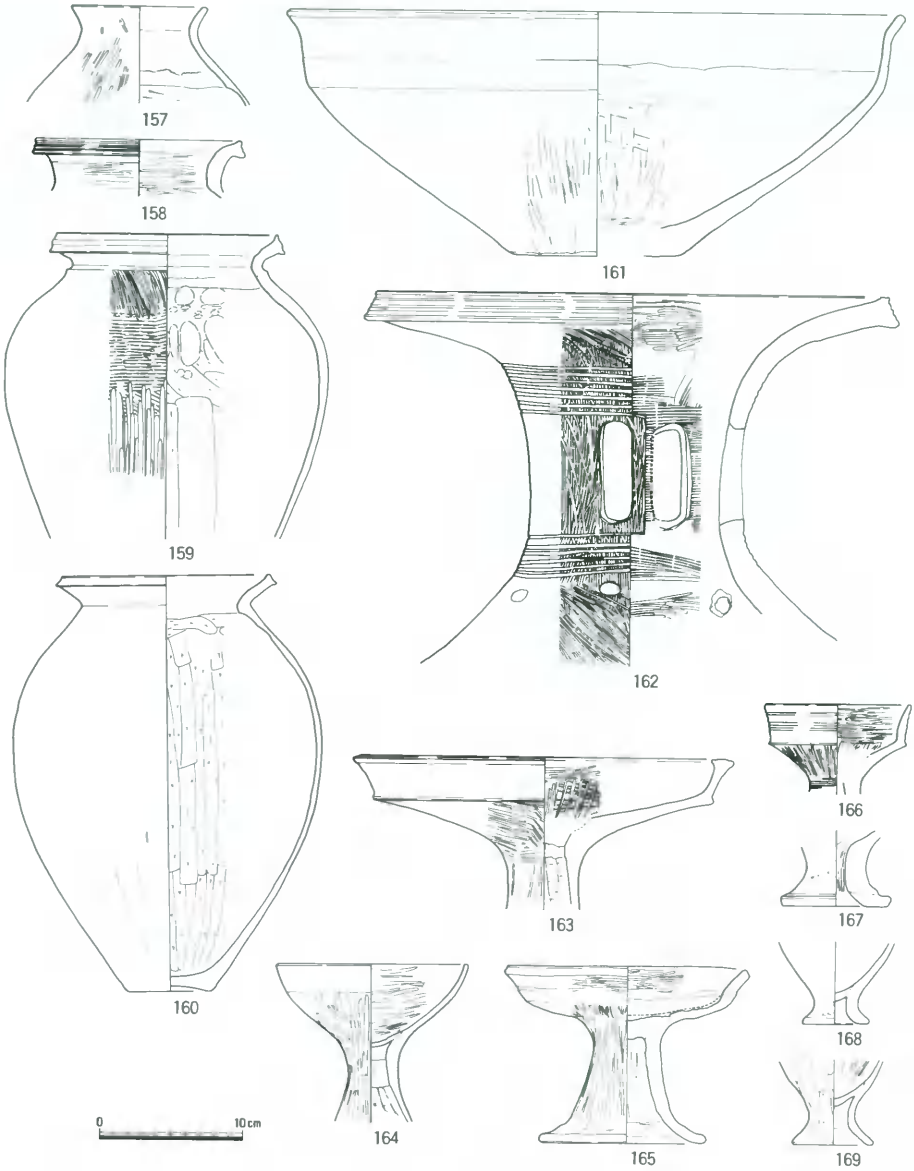
第49図　井戸６土層断面

線で埋めた山形文が施されている。

出土土器の時期は百・後・Ⅱと考えられ、井戸廃絶もその時期に近いものと推定される。（平井）

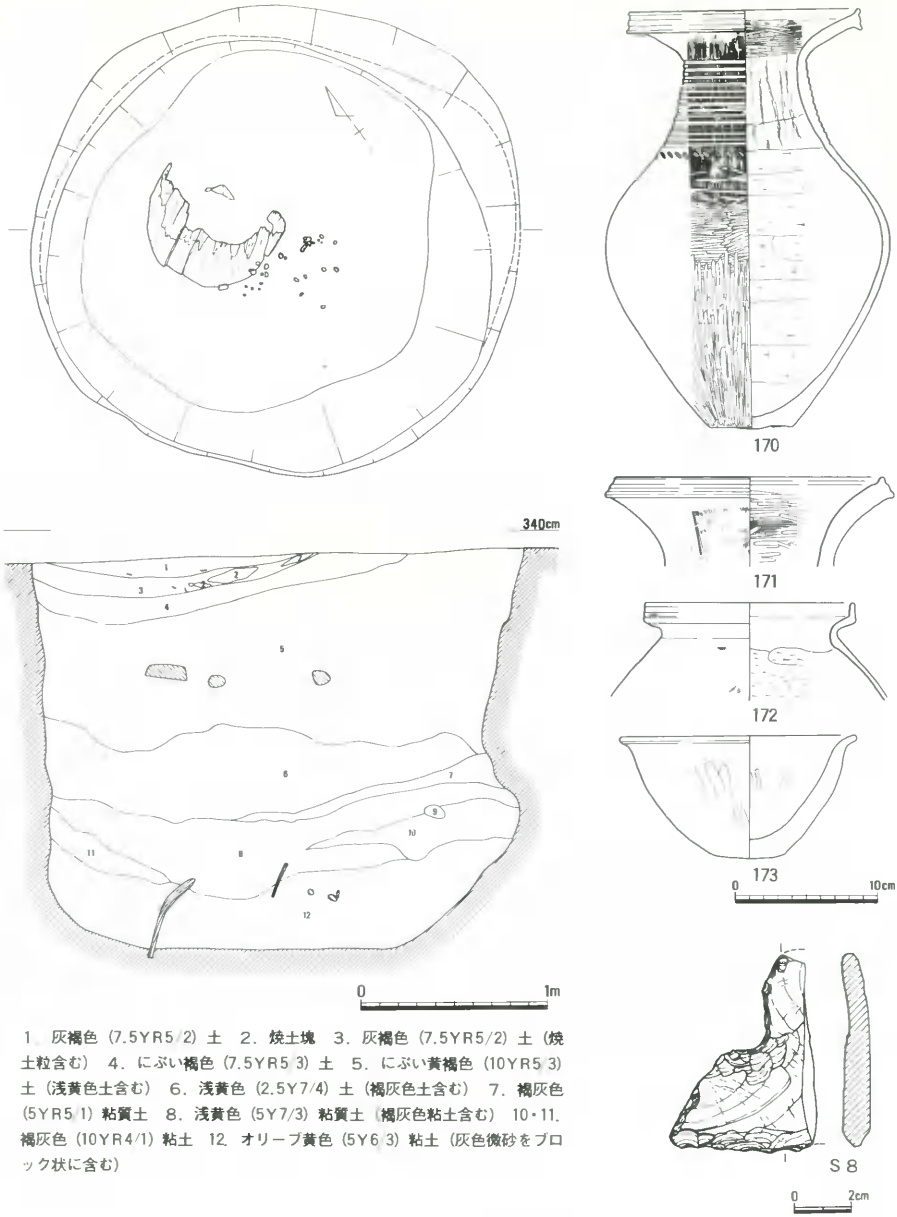
井戸10（第62図、図版10）

21・22Ｄ区の微高地端部で検出された井戸である。平面形は円形を呈し、規模は径1.65m、深さ



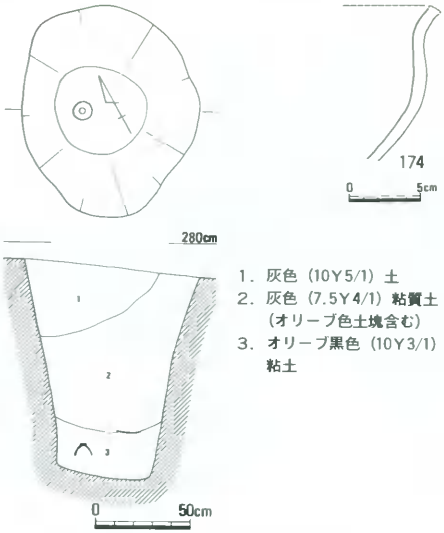
第50図　井戸６出土遺物

1.75mを測る。断面形は、上端近くの壁が開きぎみに立上るものの、それ以下は底部に向かって徐々に幅を減じながら、ほぼ垂直に下る。底部は平坦である。埋土は二層に大別される。底部から上部近くまで井戸の大部分を埋めつくす5層は淡灰色細砂であるが、遺物はほとんど含まない。上部の凹地



1．灰褐色（7.5YR5/2）土　2．焼土塊　3．灰褐色（7.5YR5/2）土（焼土粒含む）　4．にぶい褐色（7.5YR5/3）土　5．にぶい黄褐色（10YR5/3）土（浅黄色土含む）　6．浅黄色（2.5Y7/4）土（褐灰色土含む）　7．褐灰色（5YR5/1）粘質土　8．浅黄色（5Y7/3）粘質土（褐灰色粘土含む）　10・11．褐灰色（10YR4/1）粘土　12．オリーブ黄色（5Y6/3）粘土（灰色微砂をブロック状に含む）

第51図　井戸7・出土遺物



第52図　井戸８・出土遺物

地に堆積した１～４層は微砂と粘土で、遺物をわずかに含む。

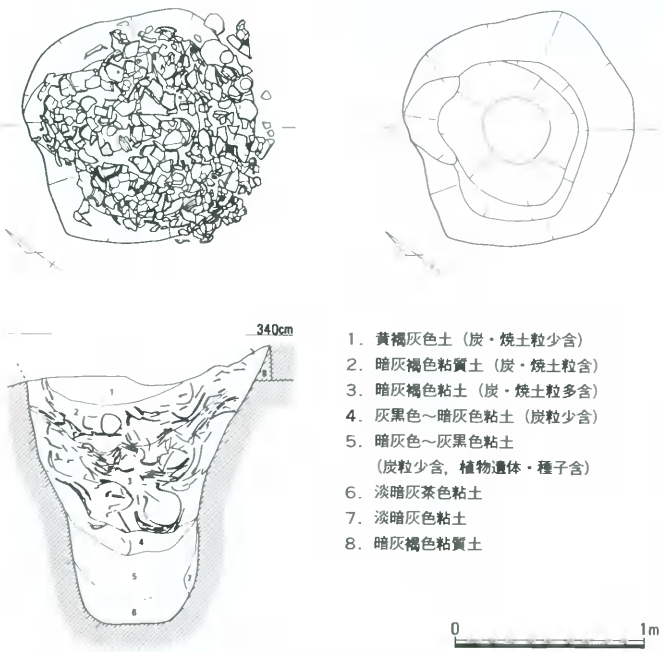
遺物はすべて弥生土器の細片で、後期に属する。　（平井）

(5)　土　　壙

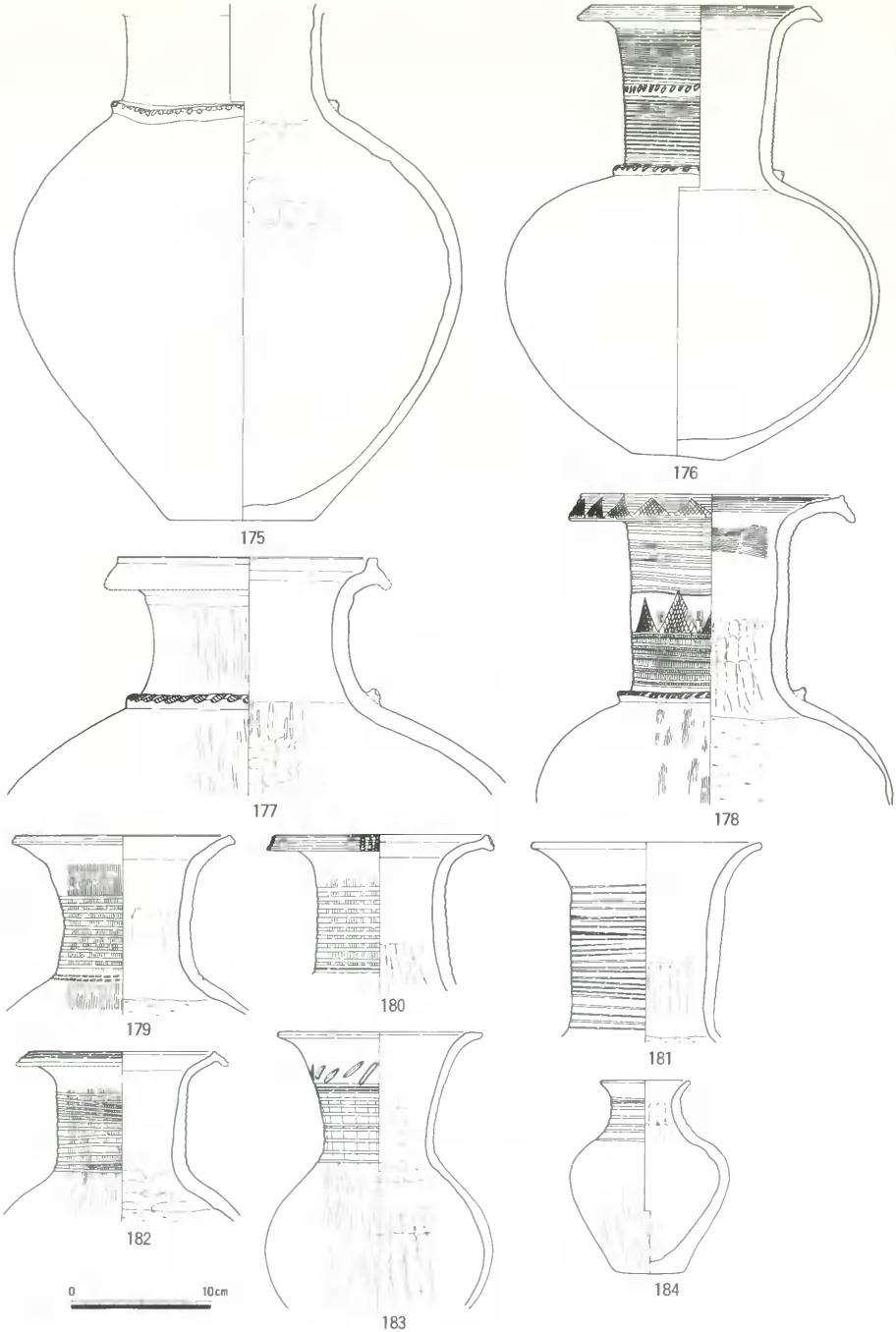
土壙３（第63・64図、図版57）

10C区の土器溜り１の下から検出された土壙である。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長さ1.9m、幅１m、深さ48cmを測る。底部は北側が少し高くなるものの、ほぼ平坦である。壁は急傾斜で立上る。埋土は灰黄褐色土である。

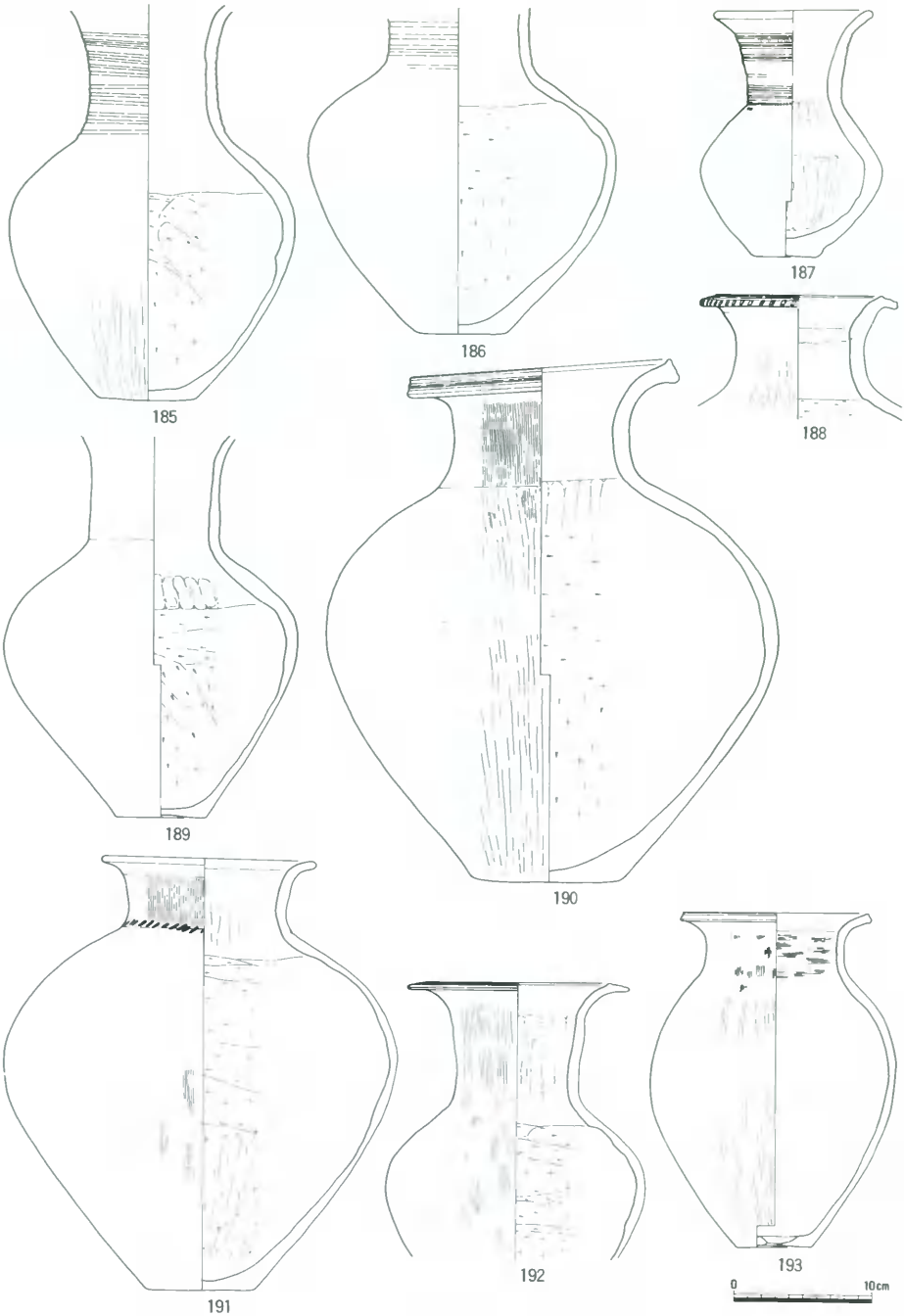
遺物はすべて弥生土器で、壺、甕、鉢、高杯などの器種が認められる。282はタマネギ形の胴部になる壺で、２条の突帯間には棒状浮文が施される。284の甕の口縁部



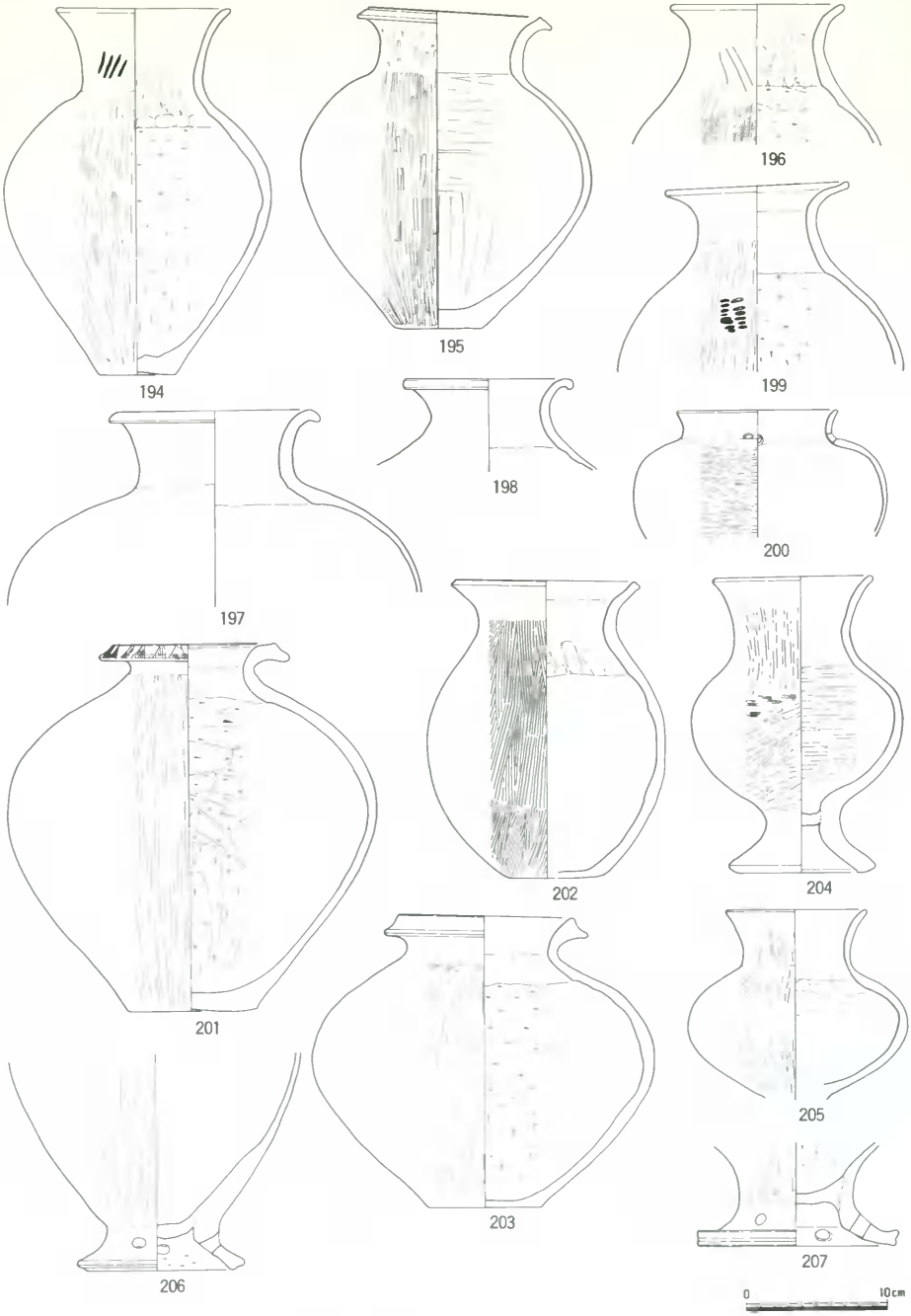
第53図　井戸９



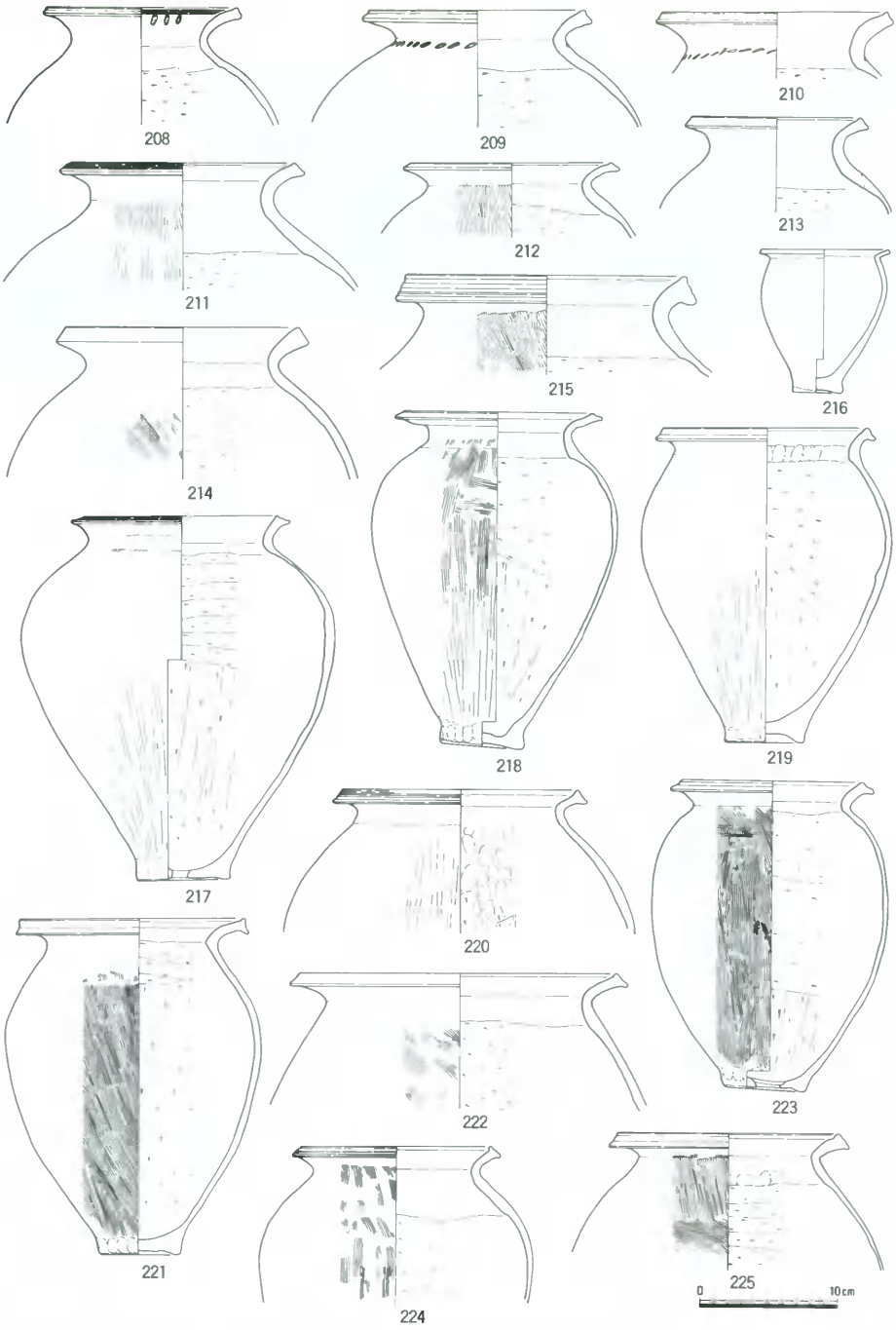
第54図　井戸９出土遺物（１）



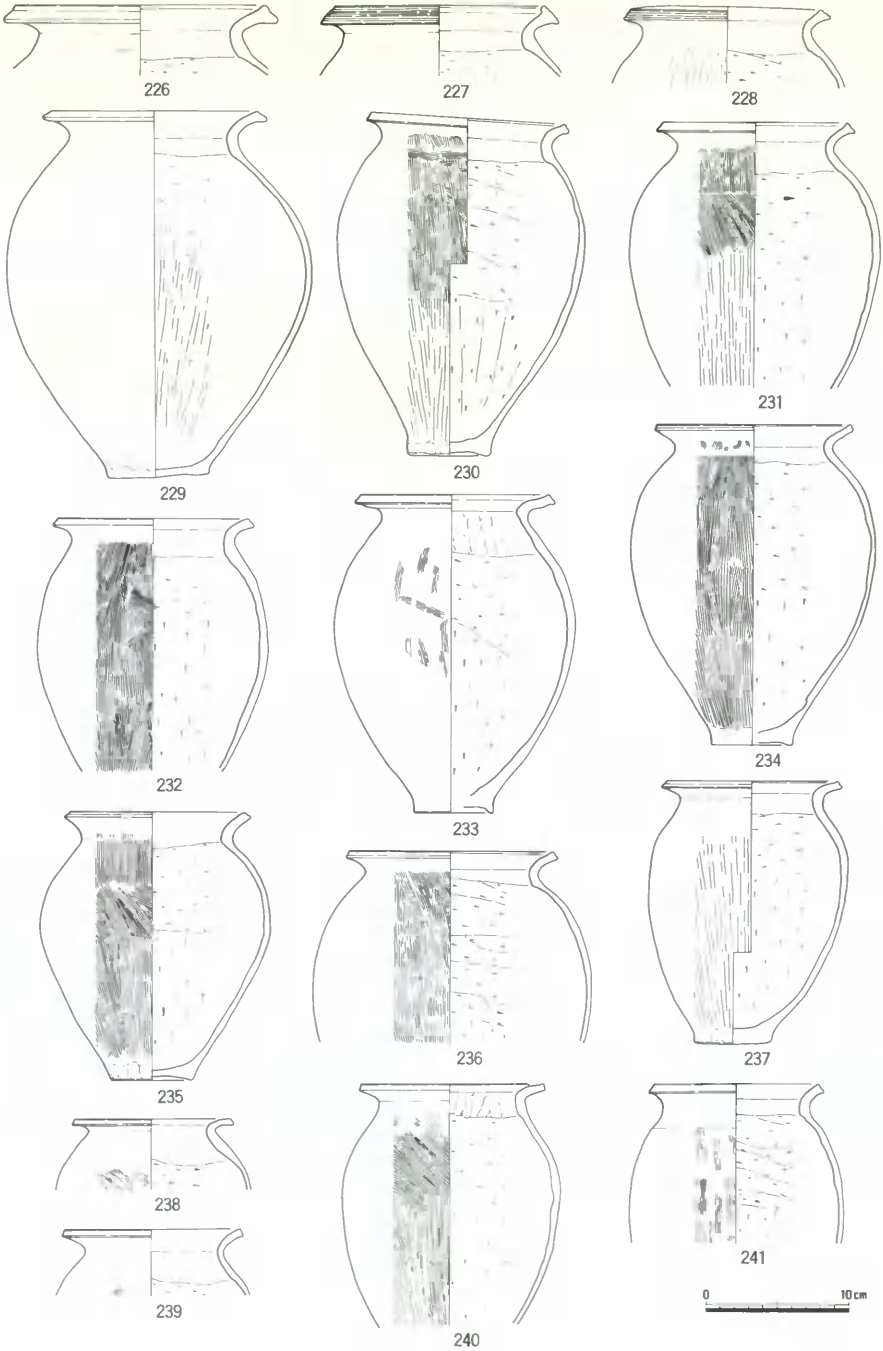
第55図　井戸９出土遺物（２）



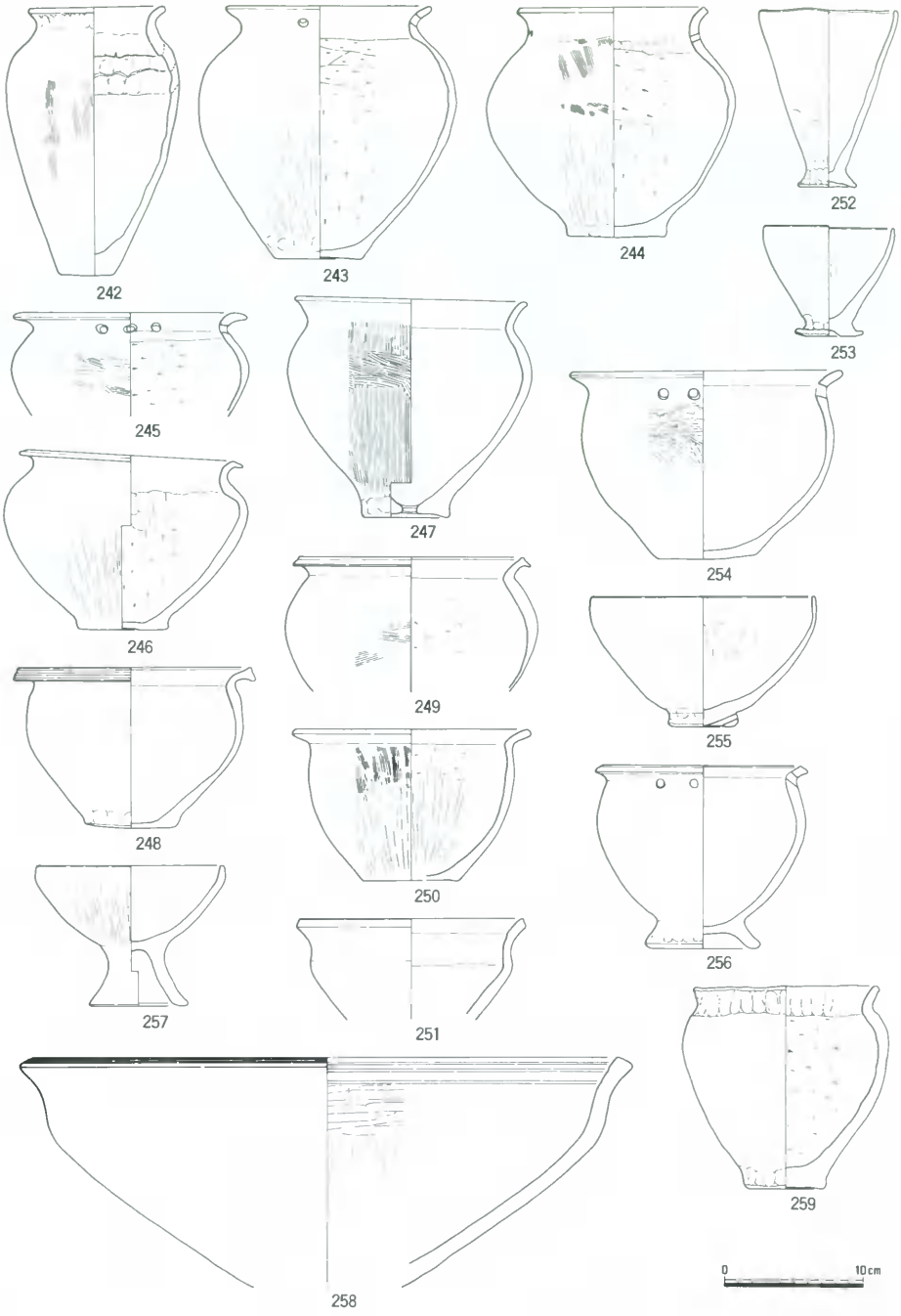
第56図　井戸９出土遺物（３）



第57図　井戸９出土遺物（４）

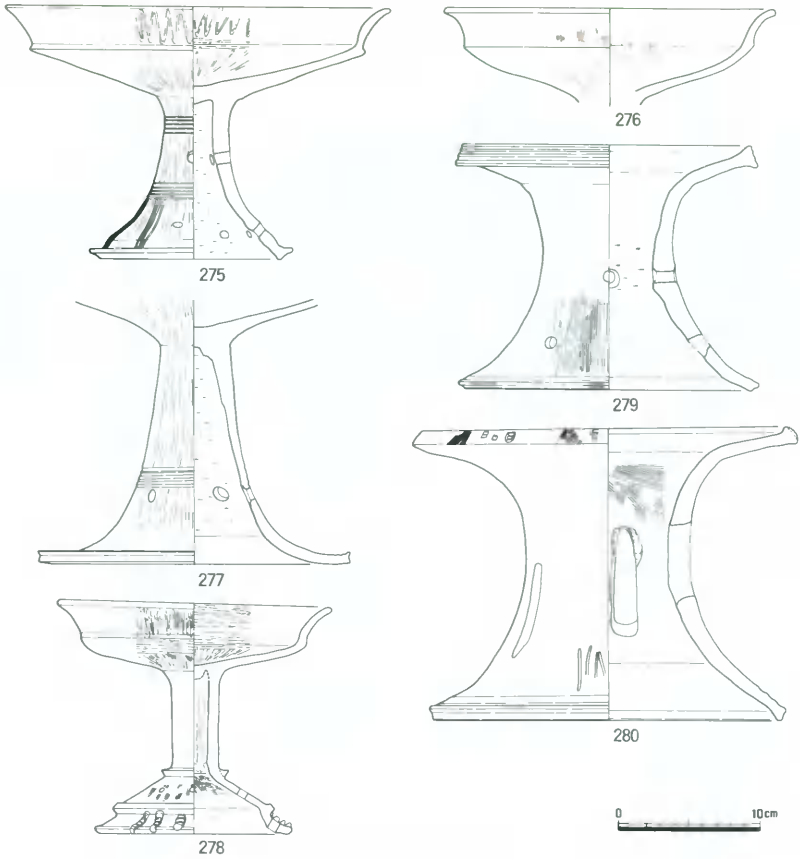


第58図　井戸９出土遺物（５）



第59図　井戸９出土遺物（６）

第60図　井戸９出土遺物（７）



第61図　井戸９出土遺物（８）

外端面にはヒビ割れを補修した粘土が認められる。296は製塩土器で、内面は刷毛調整がみられる。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

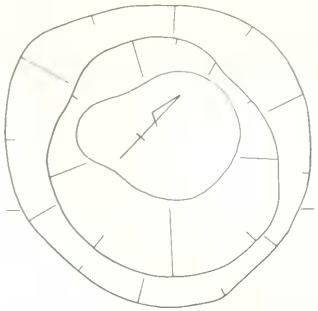
土壙４（第65図）

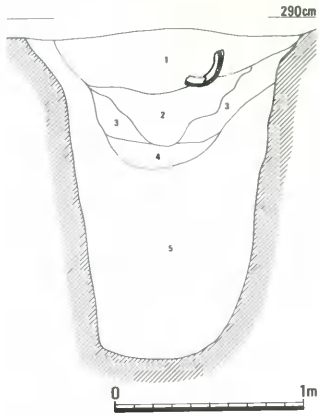
10Ｄ区の土器溜り１の下から検出された土壙である。長軸の両端を他の遺構に切られているため、平面形は明確ではないが、おそらく隅丸の長方形状を呈すると考えられる。規模は残存部での長さ1.85m、幅68cm、深さ38cmを測る。底部の平面形は上面の形状に沿うが、やや不整形になる。埋土はにぶい黄褐色土である。

遺物は少なく、すべて弥生土器である。図示し得たのは甕が２点で、いずれも胴部からくの字状に外反する口縁部をもつが、297は口縁端部を少し上下に拡張させ、その端面に退化した凹線をめぐらし、298は端部を横ナデによって丸く収める。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

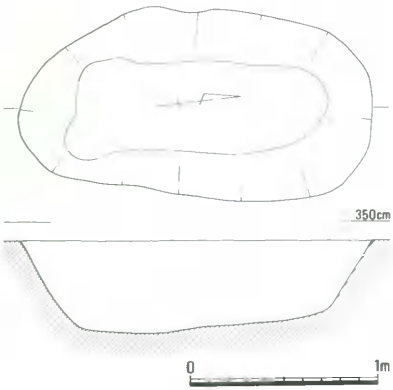
土壙５（第66図）

10Ｄ区で検出された土壙である。平面形は隅丸の長方形状を呈するが、北東側の隅は半円状に突出している。これはこの部分の底部に柱痕と考えられる円形の浅い穴が認められることから、切り合い





第62図　井戸10



第63図　土壙３

関係が明確でないまま両方の遺構を掘り下げた結果とも考えられる。規模は長さ2.26m、幅1.36m、深さ42cmを測る。底部は凹凸があるが、全体としてはほぼ平坦である。壁は急傾斜で立上る。埋土は断面で四層に分けられるが、４層はブロック、１層はわずかな凹みのみに堆積したもので、全体に認められるのは２・３層である。

遺物は少量の弥生土器と土錘が出土した。299は頸部に接する胴上端に線刻状の刻目をめぐらしている。Ｃ２は土錘で、端には紐通しの円孔が穿たれている。

時期は百・後・Ⅳと考えられる。

（平井）

土壙６（第67図）

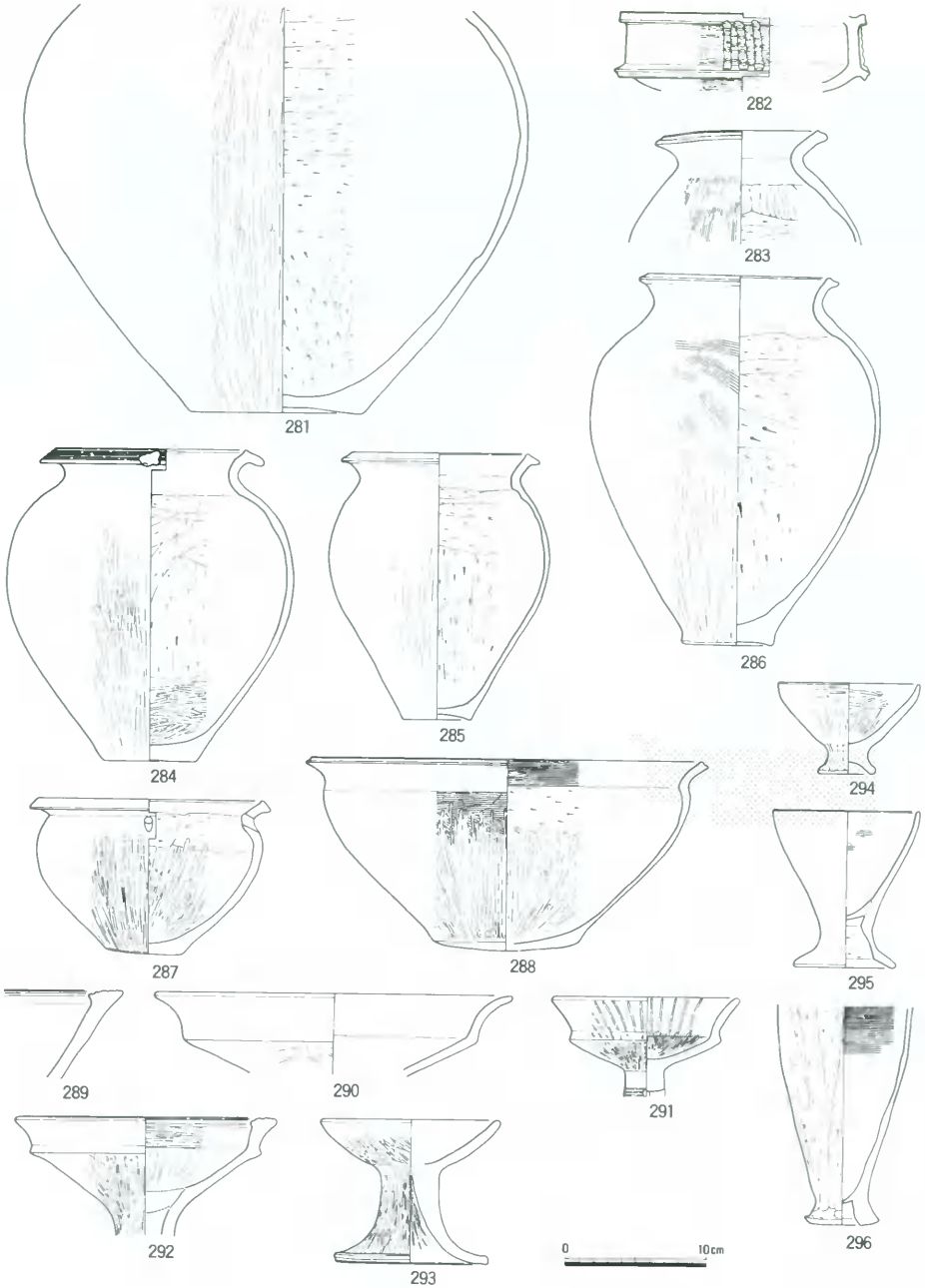
10Ｃ区で検出された土壙である。平面形は大略長楕円形を呈するが、底部は長軸方向にあまり広がらないため楕円形になる。規模は長さ1.32m、幅70cm、深さ46cmを測る。底部はほぼ平坦で、長軸側の壁はやや緩やかに立上るが、短軸側は急傾斜で立上る。埋土は中央部がやや凹むように三層の堆積が認められるが、このうち２層は炭である。

遺物はほとんど出土していないが、検出面から後期に属すると考えられる。（平井）

土壙７（第68～71図、図版57～59）

10・11Ｃで検出された土壙である。平面形は大略隅丸の長方形を呈するが、北側より南側の短辺が少し狭い。規模は長さ1.66m、中央幅85cm、深さ52cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土はにぶい黄褐色土で、炭とともに遺物を多量に含んでいた。

出土した遺物はすべて弥生土器で、完形に復元できるものもある。器種は壺、甕、鉢、高杯などが認められるが、なかでも甕が主体になる。壺はわずかで、甕に類似した器形を呈する300・301と無頸の322のみである。甕は倒卵形の胴部にくの字状に外反する口縁部がつくもので、その多くは口縁端



第64図　土壙３出土遺物

部を拡張するが、丸く収めるもの（314・318）もある。鉢は胴部が大きく開きながら立上り、くの字状に外反する口縁部をもつ大型のもの（320）と、小型のもの（323）、そして甕と類似した器形を呈するもの（321）と、さらに脚台が付くもの（319）とがある。320は口縁部外面にヒビ割れを補修した粘土が認められる。高杯もわずかである。杯部と脚部の接合はいずれも杯部に脚部を差し込んでいる。その他製塩土器（324）もある。

時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

土壙8（第72図）

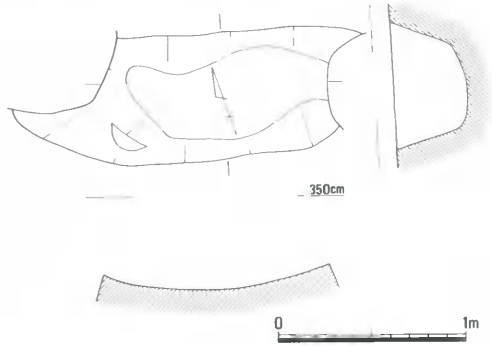
11C区で検出した土壙である。平面形は隅丸の長方形を呈すると考えられるが、北西端のピットと切り合い関係が明確でなく、同時に掘り下げたため、本来の形状は明確でない。規模は長さ1.8m、幅77cm、深さ26cmを測る。底部は北西端のピットを除けば平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は炭や焼土を多く含む灰黄褐色土で、土器をわずかに含んでいた。

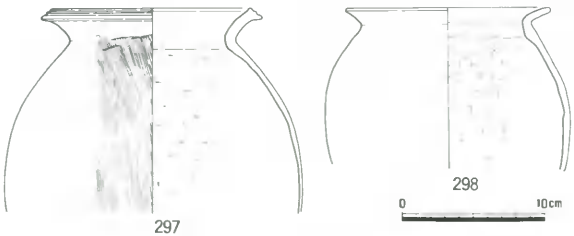
遺物は少量の弥生土器で、時期は百・後・Ⅲと考えられる。（平井）

土壙9（第73図、図版71）

11D区で検出した土壙である。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.52m、幅66cm、深さ40cmを測る。底部は中央部がわずかに凹み、壁は急傾斜で立上る。埋土は炭や焼土を多く含む暗灰黄色土で、遺物をわずかに含んでいた。

出土遺物は石錘で、やや扁平な楕円形を呈する円礫の長軸中央に、敲打による溝をめぐらす。土壙の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）





第65図　土壙4・出土遺物

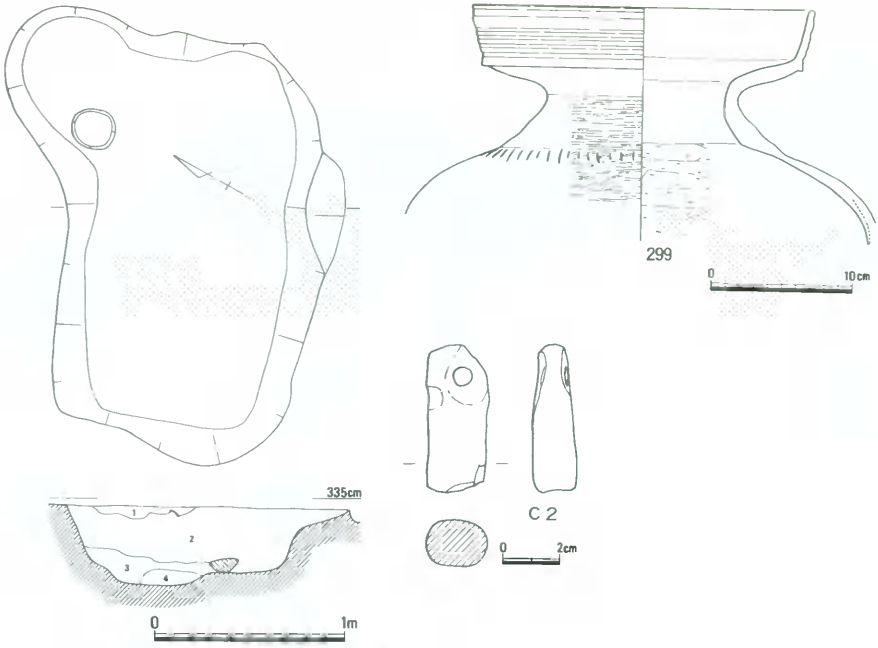
土壙10（第74図）

11C区で検出された土壙である。平面形はやや不整形な長楕円形を呈すると思われるが、南端は他の遺構に切られており明確でない。規模は残存部長さ1.22m、幅60cm、深さ47cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は灰黄褐色土である。

遺物はほとんど認められなかったが、検出面から後期と考えられる。（平井）

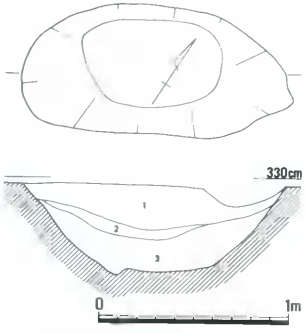
土壙11（第75図、図版16）

11C区で検出した土壙である。平面形はやや不整形であるが大略隅丸の長方形を呈する。しかし土壙内は凹凸が著しく、いくつかのピットが重なり合ったようにも見えるが、土層を見ると一つの遺構である。規模は長さ1.76m、幅91cm、深さ59cmを測る。底部は平坦な部分が少



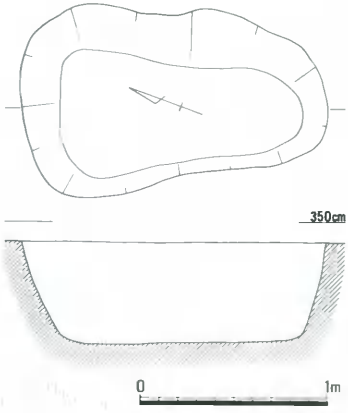
１．黄褐色(2.5Y5/3)土　２．黄褐色(2.5Y5/4)土
３．灰黄褐色(10YR4/2)土　４．黄褐色(2.5Y5/6)土

第66図　土壙５・出土遺物

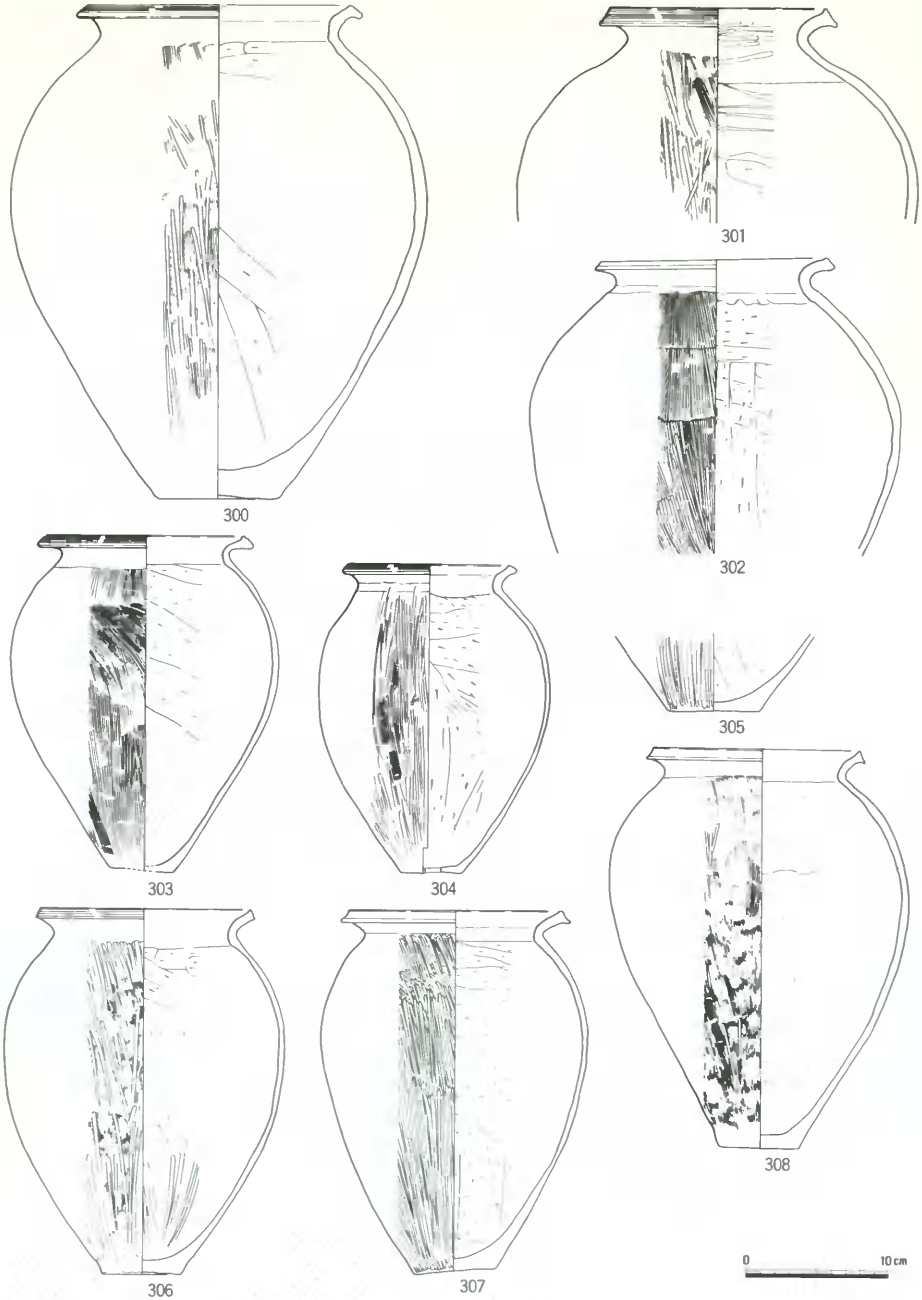


１．黄褐色（2.5Y5/4）土　２．炭
３．オリーブ褐色（2.5Y4/4）土

第67図　土壙６

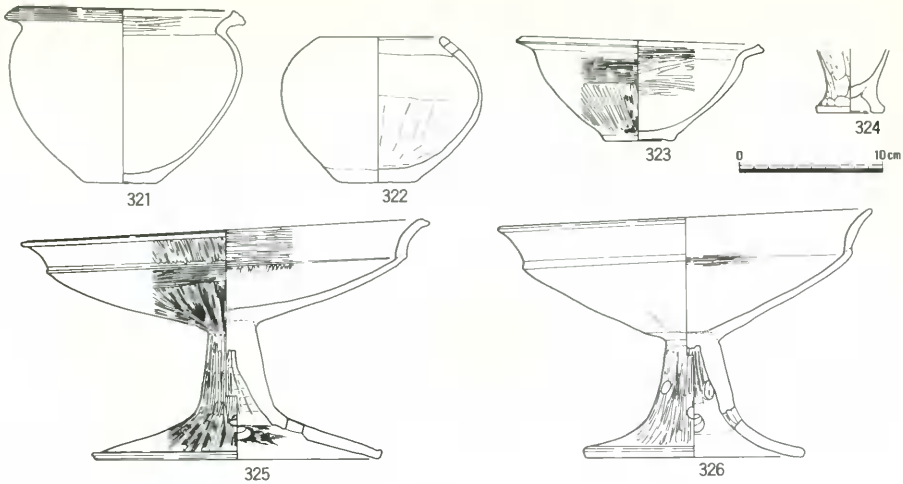


第68図　土壙７



第69図　土壙７出土遺物（１）

第70図　土壙７出土遺物（２）



第71図　土壙７出土遺物（３）

なく、ピットが４箇所穿たれている。壁は急傾斜で立上る。埋土は大きく二層に分かれる。上層にあたる１～６層には炭や焼土を多く含み、また６層には多量の赤色顔料が混在していた。下層にあたる７層には弥生時代の基盤層である浅黄色土が混在しており、礫も含んでいた。

遺物はいずれも弥生土器で、どの層にも細片が含まれていた。器種は甕、台付鉢、高杯がある。329の甕は口縁部外面にヒビ割れを補修した粘土が２箇所認められる。

時期は百・後・Ⅱと考えられる。　（平井）

土壙12（第76図）

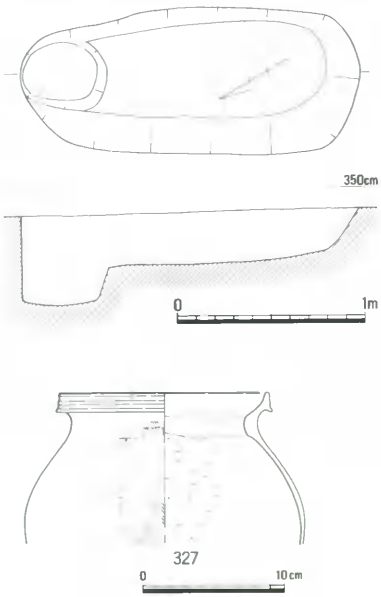
11C区で検出した土壙である。平面形は長方形を呈する。底部は平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は炭を多く含む黄褐色土である。

遺物はすべて弥生土器で、高杯と鉢が認められる。高杯（334・335）は杯部が深く、短い脚がつく。鉢（336）は小さな脚がつく。

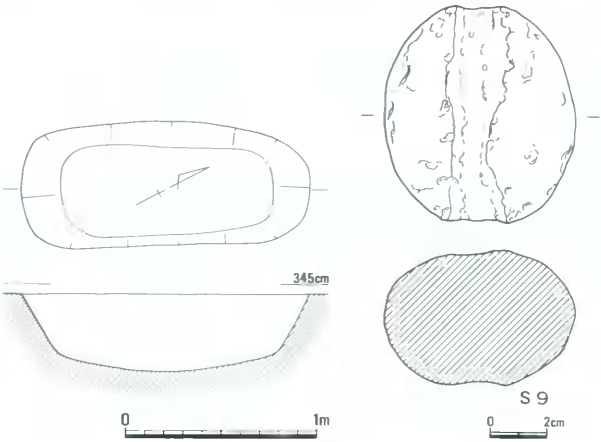
時期は百・後・Ⅲと考えられる。　（平井）

土壙13（第77図、図版59・60・70）

11D区で検出した土壙である。平面形はやや歪んだ楕円形になると思われるが、南端は他の遺構に切られている。二つの遺構が切り合っているようにも見えるが、土器の出土状況や土層から同一のものと判断した。底部は北側が浅く、南側はピット状に深くなる。規模は長さ1.02m、幅65cm、深さ34cmを測る。埋土は



第72図　土壙８・出土遺物

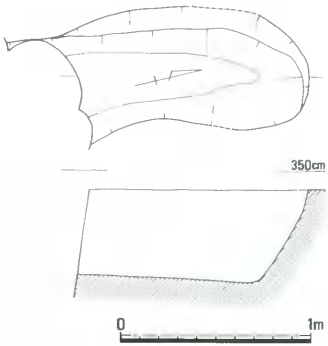


第73図　土壙９・出土遺物

焼土や炭を多く含むにぶい黄褐色土である。

遺物は、弥生土器が北側の浅い底部に接してほぼ完形で１個体、そして一段底部が深くなる境に完形が１個体と破片が認められた。338は胴部の肩に篦による絵画様の線刻があるが、何を描いているのか不明である。なお土器以外に石器の破片が１点（Ｓ10）出土しており、削器ないし石包丁の刃部と考えられる。

時期は百・後・Ⅲと考えられる。　（平井）



第74図　土壙10

土壙14（第78図）

11Ｄ区で検出した土壙である。平面形はやや歪んだ長楕円形を呈する。底部は東端に向かって徐々に高くなるが、西側は平坦である。なお底部には３箇所小さなピットが穿たれている。壁は緩やかに立上る。埋土は炭や焼土を多く含むにぶい黄褐色土である。規模は長さ1.32m、幅54cm、深さ15cmを測る。

遺物は出土しなかったが、検出面から後期と考えられる。　（平井）

土壙15（第79図）

11Ｄ区で検出した土壙である。平面形はやや歪んだ楕円形を呈する。南側の一部は他の遺構に切られている。底部はほぼ平坦であるが、南壁に接して小さなピットが１箇所穿たれている。規模は長さ1.67m、幅69cm、深さ21cmを測る。埋土は浅黄色土を含む灰黄褐色土である。

遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出面から後期と考えられる。　（平井）

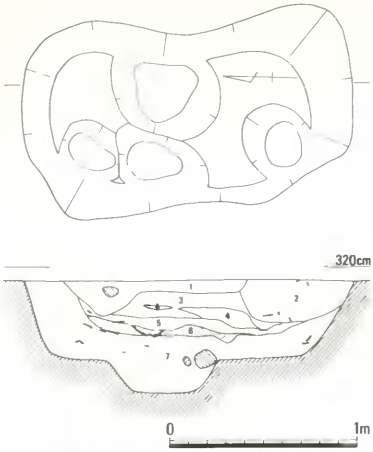
土壙16（第80図）

12Ｃ区で検出した土壙で、いくつかのピットが重なり合っているようにも見えるが、調査時に切り合いの線は見えなかった。北端は他の遺構に切られている。底部にはピットが４箇所穿たれている。埋土はオリーブ褐色土である。

遺物がなかったため詳細な時期は不明であるが、検出面から後期と考えられる。　（平井）

土壙17（第81図）

12Ｄ区で検出された土壙である。平面形は隅丸の長方形を呈する。西側の一部を他の遺構に切られている。規模は長さ1.62m、幅61cm、深さ18cmを測る。底部はほぼ平坦であるが、ピットが２箇所穿



1．にぶい黄灰色（10YR6/3）土
2．にぶい黄褐色（10YR5/3）土
3．にぶい黄褐色（10YR5/3）土に炭を多く含む
4．焼土塊　5．灰黄褐色（10YR5/2）土
6．赤色顔料（ベンガラ）に炭を含む
7．灰黄褐色（10YR5/2）土に浅黄色土含む

たれている。壁は急傾斜で立上る。埋土は黄褐色土である。

遺物はすべて弥生土器で、甕、鉢、高杯、器台が認められる。343は器台の脚端で、外面には退化した凹線がめぐる。時期は百・後・Ⅱである。　（平井）

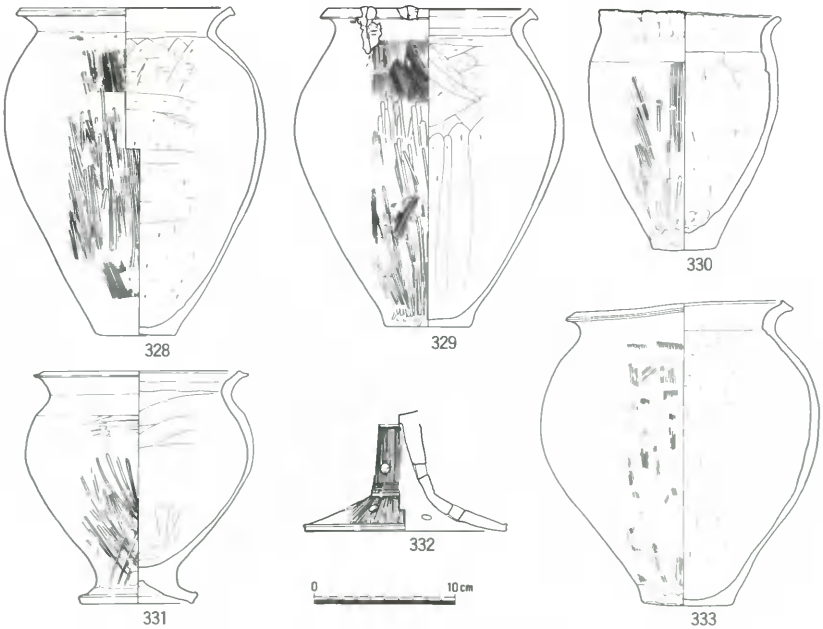
土壙18（第82図）

13C区の溝15下で検出した土壙である。平面形は長楕円形を呈する。壁は上端からほぼ垂直に下がり、底部近くで外に広がるため一部袋状になる。底部は西側がやや深くなっている。埋土は大きく三層に分かれる。下層にあたる5層が粘土である以外はいずれも砂である。

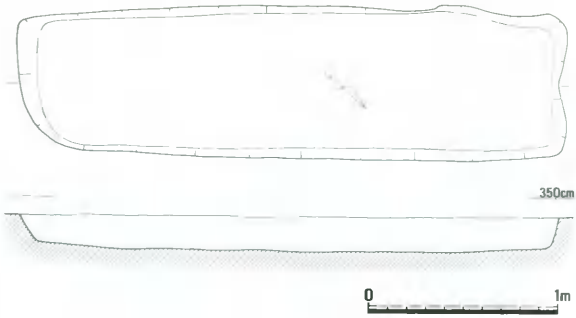
遺物が出土しないため詳細な時期は不明であるが、検出面から後期と考えられる。　（平井）

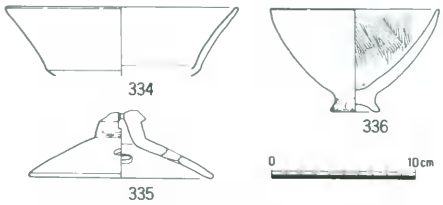
土壙19（第83図）

19D区で検出された土壙である。平面形はやや楕円形を呈する。底部は中央がやや深く、壁際が少し高く



第75図　土壙11・出土遺物





第76図　土壙12・出土遺物

なる。壁は急傾斜で立上る。規模は長さ91cm、幅74cm、深さ20cmを測る。埋土は大きく二層に分かれる。上層は１～３層で、焼土や炭を多く含む。とりわけ２層は薄い焼土面をなし、３層は厚く焼土が堆積していた。下層は５層で、焼土や炭を含むが上層ほどではない。なお４層は５層中にブロックで入っており、全体に広がるものではない。

遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが、検出面から後期と考えられる。

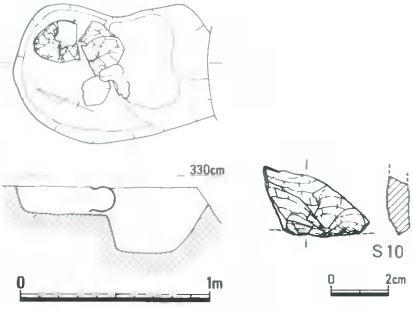
（平井）

土壙20（第84図）

20Ｄ区で検出された土壙である。平面形は楕円形を呈する。底は中央部が深く、壁際に向かって徐々に浅くなる。壁は緩やかに立上る。規模は長さ1.34m、幅93cm、深さ26cmを測る。埋土は三層に分かれ、遺物は２層に含まれていた。

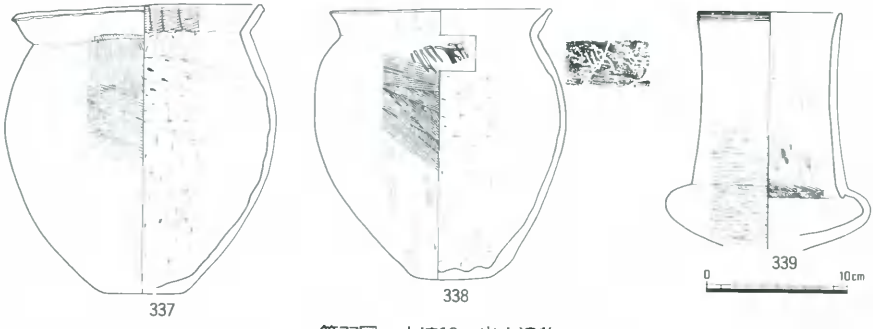
時期は出土した弥生土器片と検出面から後期と考えられる。

（平井）

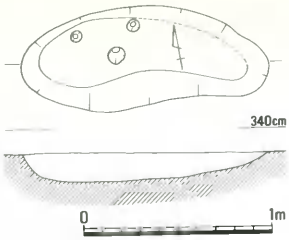


土壙21（第85図、図版16）

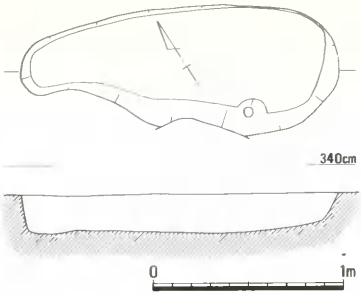
20Ｄ区で検出された土壙で、北西側は側溝で削られている。平面形は長楕円形を呈すると思われ



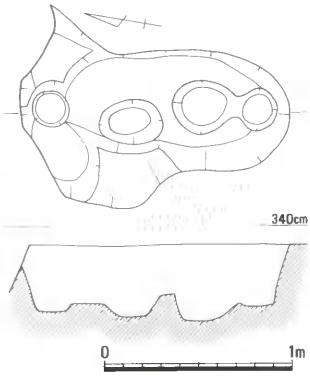
第77図　土壙13・出土遺物



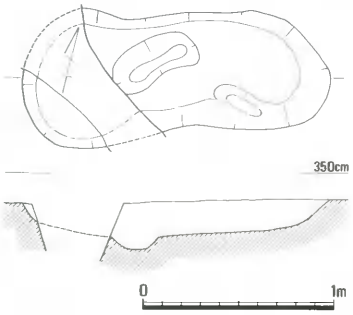
第78図　土壙14

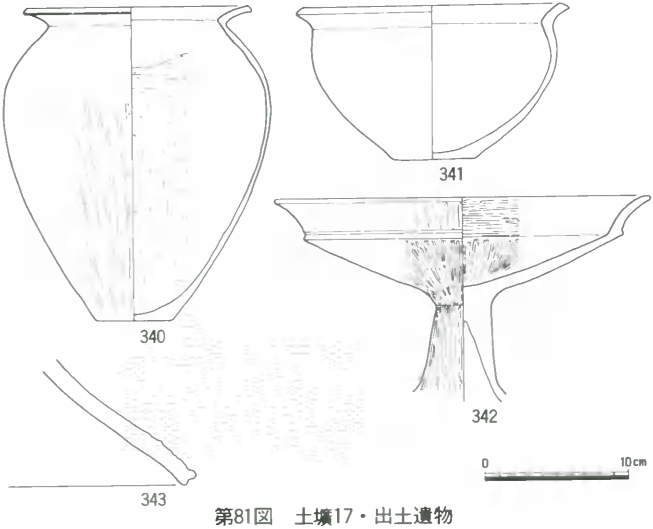


第79図　土壙15

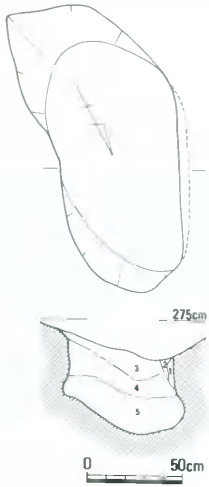


第80図　土壙16



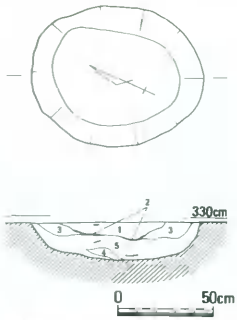


第81図　土壙17・出土遺物



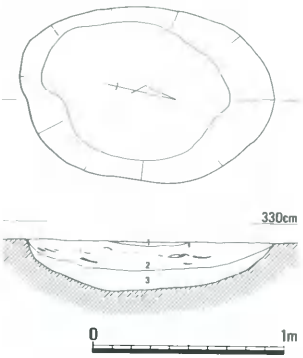
1．緑灰色（10GY4/1）砂
2．にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
3．褐灰色（10YR5/1）砂
4．黄灰色（2.5Y5/1）砂
5．灰色（N4/1）粘土

第82図　土壙18



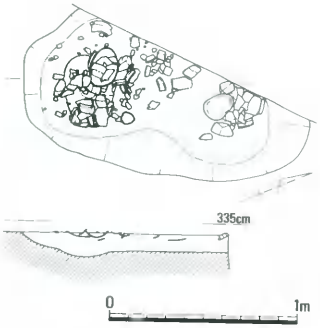
1．灰褐色（7.5YR4/2）土（焼土・炭含）
2．暗灰黄色（2.5Y4/2）焼土
3．橙色（7.5YR7/6）焼土
4．黄褐色（2.5Y5/3）土
5．灰褐色（7.5YR4/2）土（焼土・炭含）

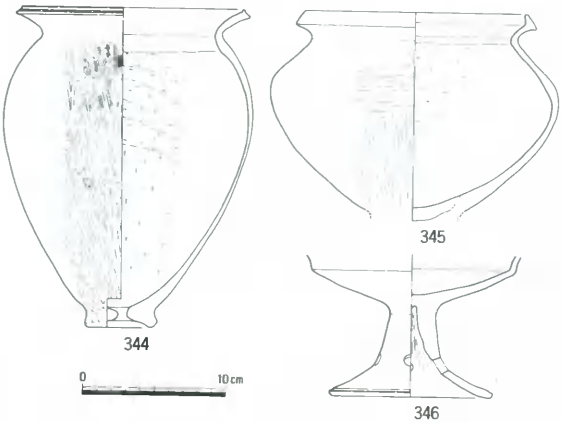
第83図　土壙19



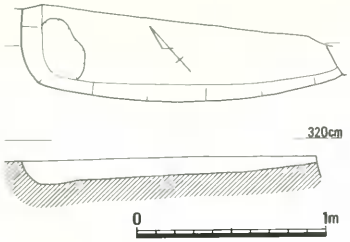
1．灰黄褐色（10YR5/2）土
2．暗褐色（10YR3/3）土
3．にぶい黄褐色（10YR4/3）土

第84図　土壙20

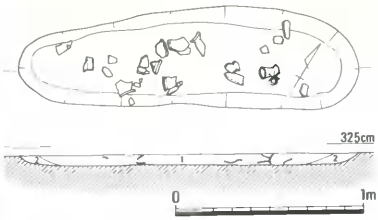




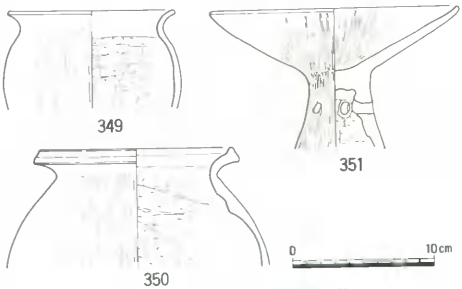
第85図　土壙21・出土遺物



第86図　土壙22



1．灰褐色粘質土　2．褐灰色粘質土



第88図　土壙24・出土遺物

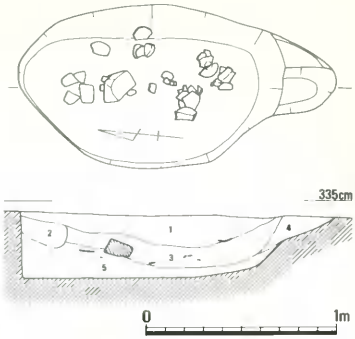
る。底部はほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。埋土は炭を多く含む茶黄灰色土で、上部には遺物を含む。規模は長さ1.56m、現存幅66cm、深さ12cmを測る。

出土遺物はすべて弥生土器である。344は甕で、底部は高台状につまみ出している。また底部には焼成後の穿孔がみられる。345は台付鉢、346は高杯である。

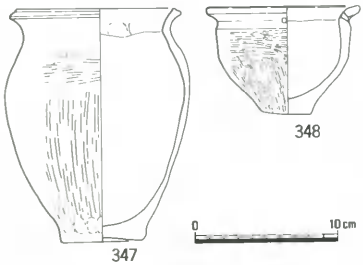
土器の時期は百・後・Ⅱと考えられるので、土壙の時期もそれに近いものと思われる。　（平井）

土壙22（第86図）

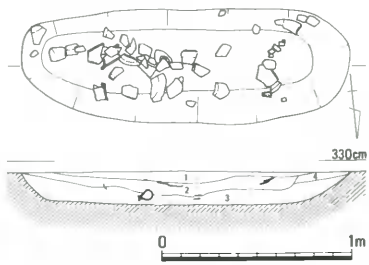
20C区で検出された土壙で、北東側は側溝によって削られている。平面形は長方形を呈すると推定される。規模は現存長1.64m、現存幅44cm、深さ10cmを測る。底部はほぼ平坦であるが、南東側に向かってわずかに高くなる。壁は急傾斜で立上る。埋土は焼土・炭を含む灰褐色粘質土である。



1．茶黄灰色土（炭含む）　2．灰色粘土（石英・長石多く含む）　3．茶黄灰色土（炭・焼土多く含む）　4．黄茶灰色土　5．暗黄灰色土

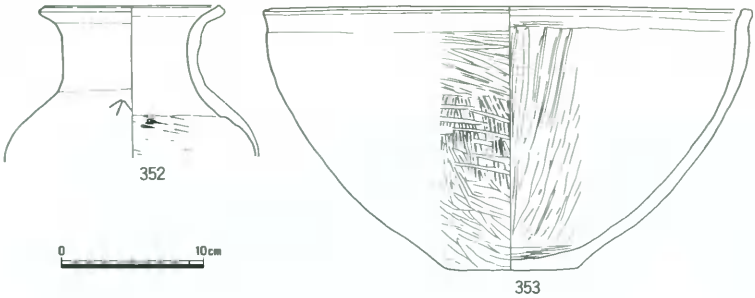


第87図　土壙23・出土遺物

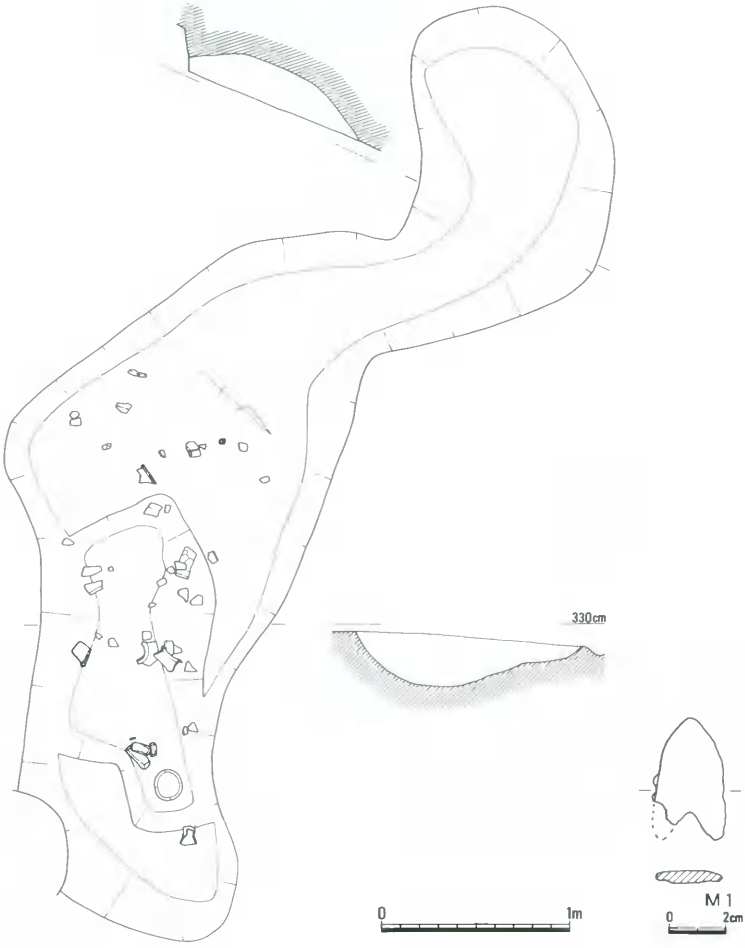


1．暗黄茶色土　2．暗黄茶色土（炭・焼土多く含む）　3．黄茶灰色土　4．茶灰色土

第89図　土壙25



第90図　土壙25出土遺物



第91図　土壙26・出土遺物

遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出面から後期と考えられる。（平井）

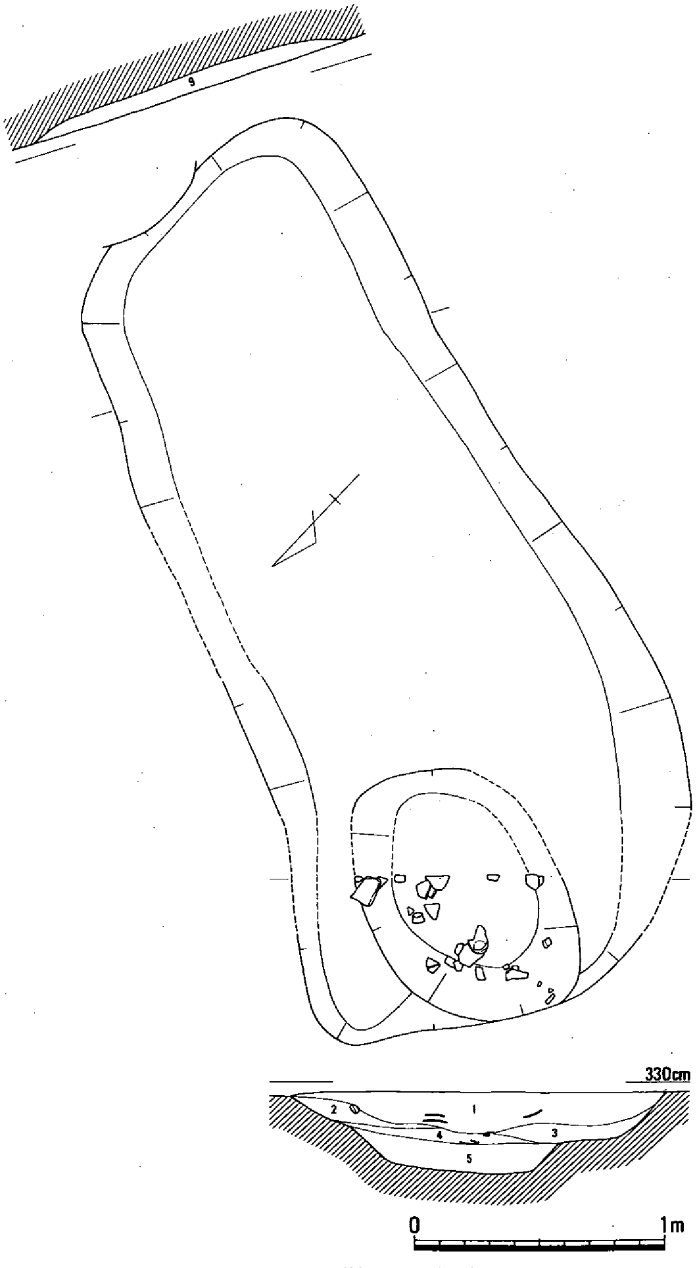
土壙23（第87図、図版16・60）

20D区で検出した土壙である。平面形はやや歪んだ長楕円形を呈する。規模は長さ1.67m、幅87cm、深さ33cmを測る。土壙は南北に長い楕円形の穴に、小さな穴が南端に取り付いたような形状で、大きな穴の底部は平坦であるが、小さな穴の底部は明瞭でない。小さな穴の壁は底部から土壙上端に向かって緩やかに立上る。大きい穴の壁は、北側から東側で垂直に立上るが、そのほかの場所ではやや緩やかに立上る。埋土には炭や焼土を含み、遺物や礫も認められる。

出土遺物はすべて弥生土器で、図示し得たのは甕と鉢である。348の鉢は口縁下に円孔が穿たれている。

時期は百・後・Ⅱと考えられる。

（平井）



1．淡黄灰色土（焼土・炭含む）
2．黄灰色土（焼土・炭多く含む）
3．黄灰色土（炭含む）　4．炭
5．暗黄灰色土（焼土・炭含む）

第92図　土壙27

土壙24（第88図）

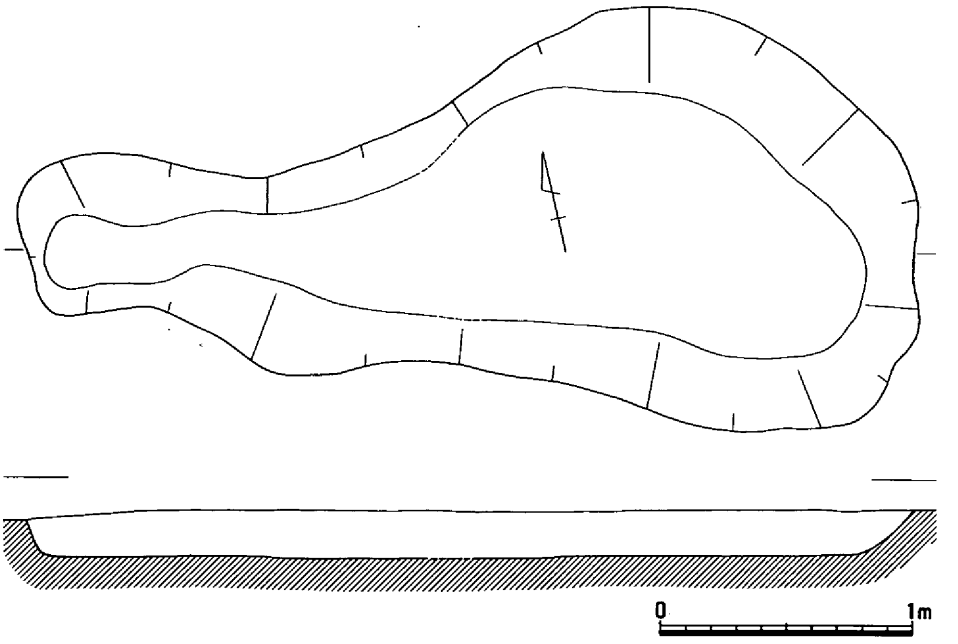
20C杭の南隅で検出した土壙である。平面形はやや歪んだ長楕円形を呈し、長軸を東北－南西にもつ。その規模は長径180cm、短径53cmで、検出面からの深さは3cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。埋土は二層に分かれるが、壁際の2層から遺物は出土していない。

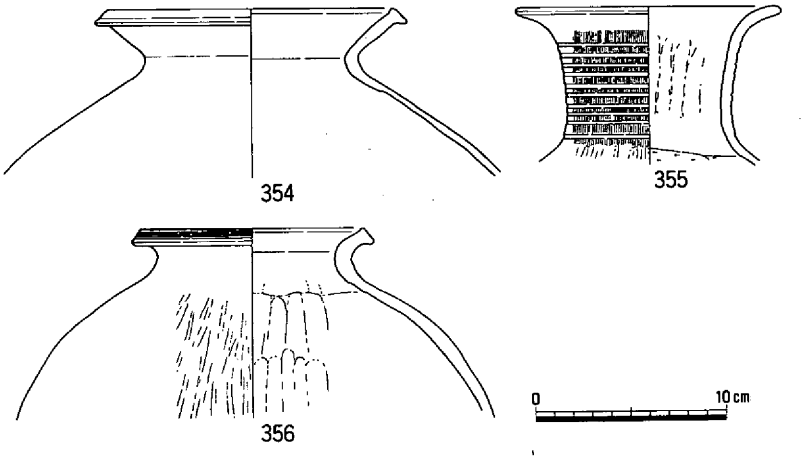
出土遺物はいずれも後期の土器片である。中には、破片となった段階で二次的な火を受けたと考えられるものがある。351は高杯で、その杯部は直線的に広がり、口縁端部を若干上向きに収めたものである。以上から、土壙の時期は百・後・Ⅱと考えられる。

（高田）

土壙25（第89・90図）

20D区の西隅で建物6の北側に接して検出した土壙である。平面形は長楕円形を呈し、長軸を東西にもつ。その規模は長径172cm、短径58cmで、検出面からの深さは28cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がり、東側がややきつい。埋土は三層に分かれ、遺物は各層から出土している。





第93図　土壙28・出土遺物

遺物はいずれも後期の土器片である。352は長頸壺で、肩部のやや上位にヘラ状工具による沈線文が施される。土壙の時期は百・後・Ⅱと考えられる。　（高田）

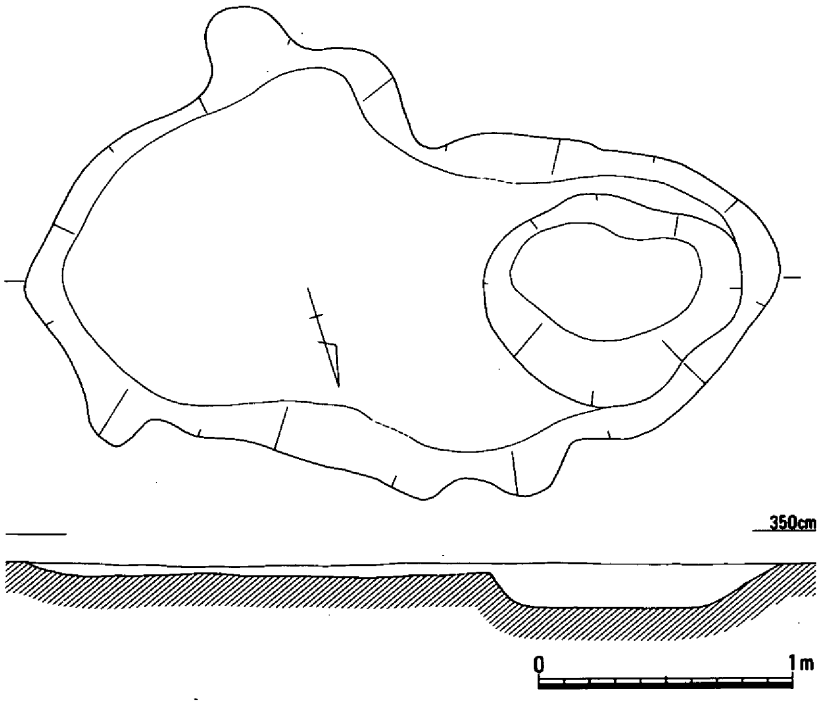
土壙26（第91図、図版68）

21D杭の南側で検出した土壙である。平面形は不定形で、長軸525cm、最も狭い場所で58cm、広い場所で170cmを測る。底面はほぼ平坦だが、東部に一段低い部分があり、その比高差約10cm、検出面からの深さ28cmである。壁の傾斜は比較的緩やかで、埋土は炭と焼土を含む淡灰黄色土である。また底面のほぼ中央には、径60cm前後の範囲に焼土を含む炭の面が検出された。

遺物には土器と鉄器があり、東部の一段低い部分を中心に出土している。鉄器は鏃で一段低い部分の底面に接して出土した。土器は図示していないが、いずれも後期のものである。土壙の時期は百・後・Ⅱと考えられる。　（高田）

土壙27（第92図）

土壙26の南側に近接して検出した土壙で、建物6に切られている。平面形は160×360cmのやや歪んだ隅丸長方形で、長軸を東西にもつ。底はほぼ平坦だが、西隅に80×110cmの一段低い部分があり、その比高差は12cmを測る。検出面からの深さは、東側で7cm、西側の最深部で34cmである。壁は東側で緩やかに、西側で急斜に立ち上がる。埋土は4層が最厚5cmの顕著な炭層で、一段低い部分のほぼ上面に堆積する。この周辺の1～3層も焼土と炭を含むことから、何らかの生産に伴う焼土と炭の廃棄



場であった可能性が高い。

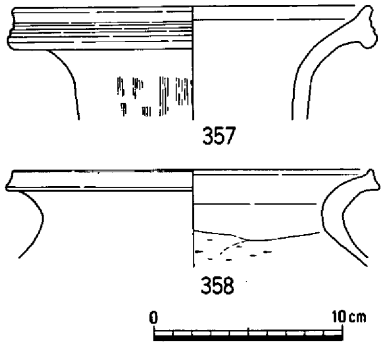
遺物はいずれも後期の土器片で、炭層周辺からの出土が多い。土壙の時期は百・後・Ⅱと考えられる。

（高田）

土壙28（第93図、図版17）

21D区のほぼ中央で検出した土壙で、溝26の北側に位置する。また、溝23と切り合いがあり、それよりも新しい。平面形は不定形で、長さ355cm、最も広い場所で幅160cm、深さ18cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。埋土は黄褐灰色土で、部分的に炭と焼土の薄い層を含んでいる。

遺物には土器片があり、その時期は百・後・Ⅱに属している。（高田）



第94図　土壙29・出土遺物

土壙29（第94図）

土壙28の東１ｍで検出し、不定形な平面形をもつ土壙である。その規模は、長さ297cm、最も広い場所で幅162cm、深さ５cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。底面はほぼ平坦で東隅に一段深い部分があり、その深さは17cmである。埋土は淡褐灰色土で、上部ほど炭と焼土を多く含んでいる。

遺物には土器片があり、その時期は百・後・Ⅱに属している。（高田）

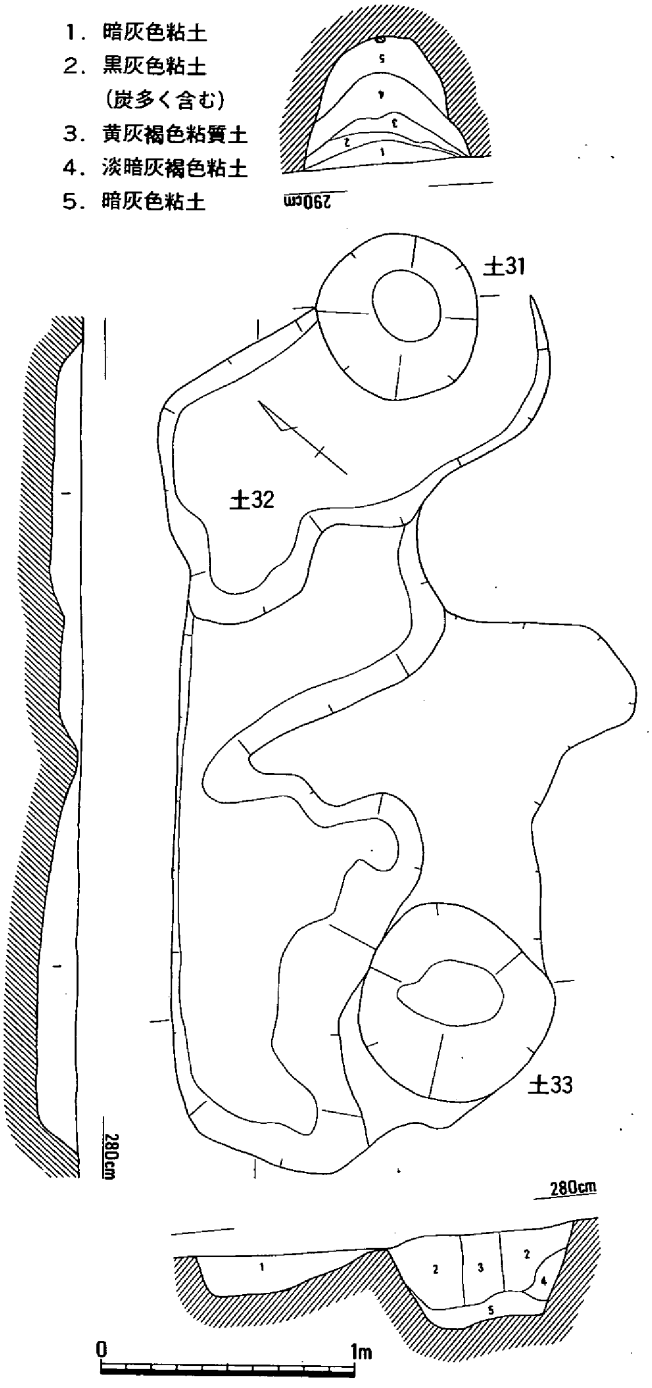
土壙30

21C区のほぼ中央で検出した土壙である。その北側を中世の溝100に切られるが、長さ122cm、幅45cm、深さ12cmを測る細長いものである。底はほぼ平坦で壁は急斜に立ち上がる。埋土は炭・焼土を含むやや暗い黄褐色土層である。

遺物には土器片があり、その時期は百・後・Ⅱと考えられる。（高田）

土壙31・32・33（第95図）

21D区の中央やや東寄りに位置し、弥生後期水田層下で検出した土壙群である。土壙32は長さ345cm、幅180cmを測る不定形なもので、底が３段に落ち込む。各段の深さはそれぞれ２cm、10cm、15cmである。21・22C・D区の微高地と島１に挟まれた水田層下には、土壙32のような深さ15cm前後の不定形な土壙が集中している。いずれも淡灰色粘質土を埋土とし、その検出状況から後期水田に近い時期のものと考えられ、開田に伴う掘削跡の可能性がある。



第95図　土壙31・32・33

土壙31・33は、検出状況から土壙32よりも新しく考えられる。土壙31は径54㎝、深さ53㎝で、底面の標高228㎝を測る。１層は後期水田耕作土が沈下したもの、２層は炭を多含し、３・４層は基盤土を含む人為的な埋土である。土壙33はほぼ円形を呈し、径80㎝、深さ35㎝で径15㎝の柱痕がある。

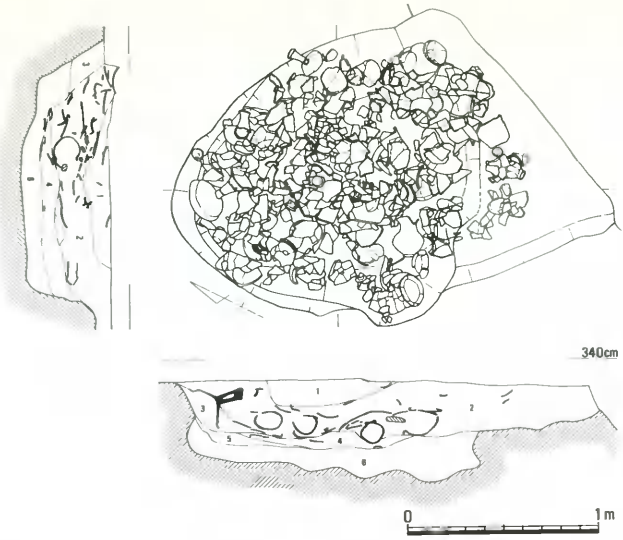
遺物は土壙31から少量の弥生土器片が出土している。以上のことから、いずれの土壙もその時期は後期と考えられる。

（高田）

土壙34（第96～101図、図版17・60～62・68・71）

21Ｃ杭の南隅、井戸９の南1.5ｍに位置し、一部を土壙35と接する土壙である。その上部は井戸９の上部とともに一連の土器溜りを形成しており、それらを除去して検出している。平面形は、東南部を後期水田に削られて不明だが、歪な卵形で長さ232㎝、幅150㎝を測る。底は２段に掘られ、東南部分が浅くなり、検出面からの深さはそれぞれ55㎝、23㎝で、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は大きく三層に分けられる。１～３層は炭・焼土と大量の土器を含むもので、上部の土器溜りに続く。４、５層はいずれも焼土を多く含む炭層で、特に４層は製塩土器の胴部細片を多含する。６層は土器をほとんど含まないもので、一段低い部分に堆積している。これらの状況は、５層以上が人為的な埋土と考えられ、北側からの投棄を窺わせるものである。

遺物は、土器と石器、鉄器が出土している。大量の土器はいずれも後期のもので、その内容は井戸９に近似する。また、全面の半分以上あるいは一部にタール状の炭化物を付着した土器が図示したものの50％を越えている。この炭化物はほとんどが土器の外面に付着するが、内面に付くものも若干数みられる。さらに、二次的な焼成がみられるものも、約13％程度認められた。なお、Ｓ11は花崗岩製の石錘、Ｍ２は鉈と推定される鉄片であ



1．茶灰色粘質土（焼土・炭含む）　2．黄灰褐色土（焼土・炭含む）
3．黄褐色土（焼土・炭含む）　4．炭（焼土多く含む）
5．炭（焼土含む）　6．淡暗黄灰褐色土（焼土・炭含む）

第96図　土壙34

る。時期は、土器の特徴から百・後・Ⅱと考えられる。（高田）

土壙35（第102図、図版17・71）

土壙34の西に接して検出した土壙である。北側を古墳後期の溝61に削られるが、平面形は一方のやや尖った卵形を呈している。その規模は、長さ295cm、幅170cm、最深部で53cmを測る。底は平坦面を持ちながら数段に落ち込み、壁は急斜に立ち上がる。埋土は、中位に焼土を多く含む顕著な炭層が認められ、その他も炭、焼土を含んでいる。さらに2層からは製塩土器片が大量に出土している。

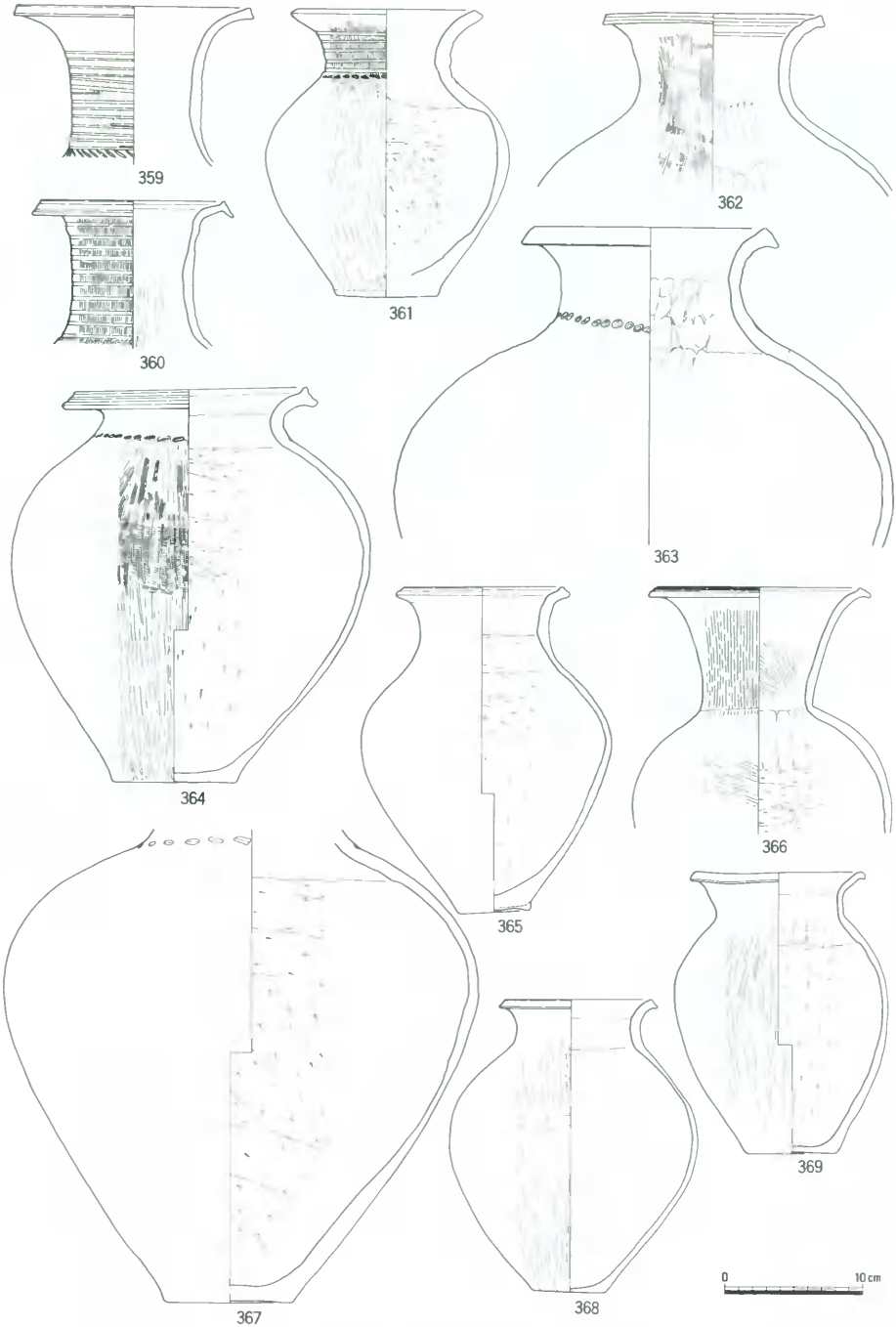
遺物には土器と石器があるが、土壙35に比べるとその出土は少ない。しかし、製塩土器の出土割合は約80％にも達し、比較的残りの良い脚部で123個体を数えている。脚端部はヘラ状工具で切り取ったもの（420）と、上から押さえ付けたため平坦面をもつもの（421）がある。それらの脚径は平均で5.2cmを測る。

以上のことから、この土壙の性格は製塩活動に伴う廃棄場と考えられ、周辺の状況から井戸9、土壙34、35の東にその作業場が推定される。時期は、百・後・Ⅱと考えられる。（高田）

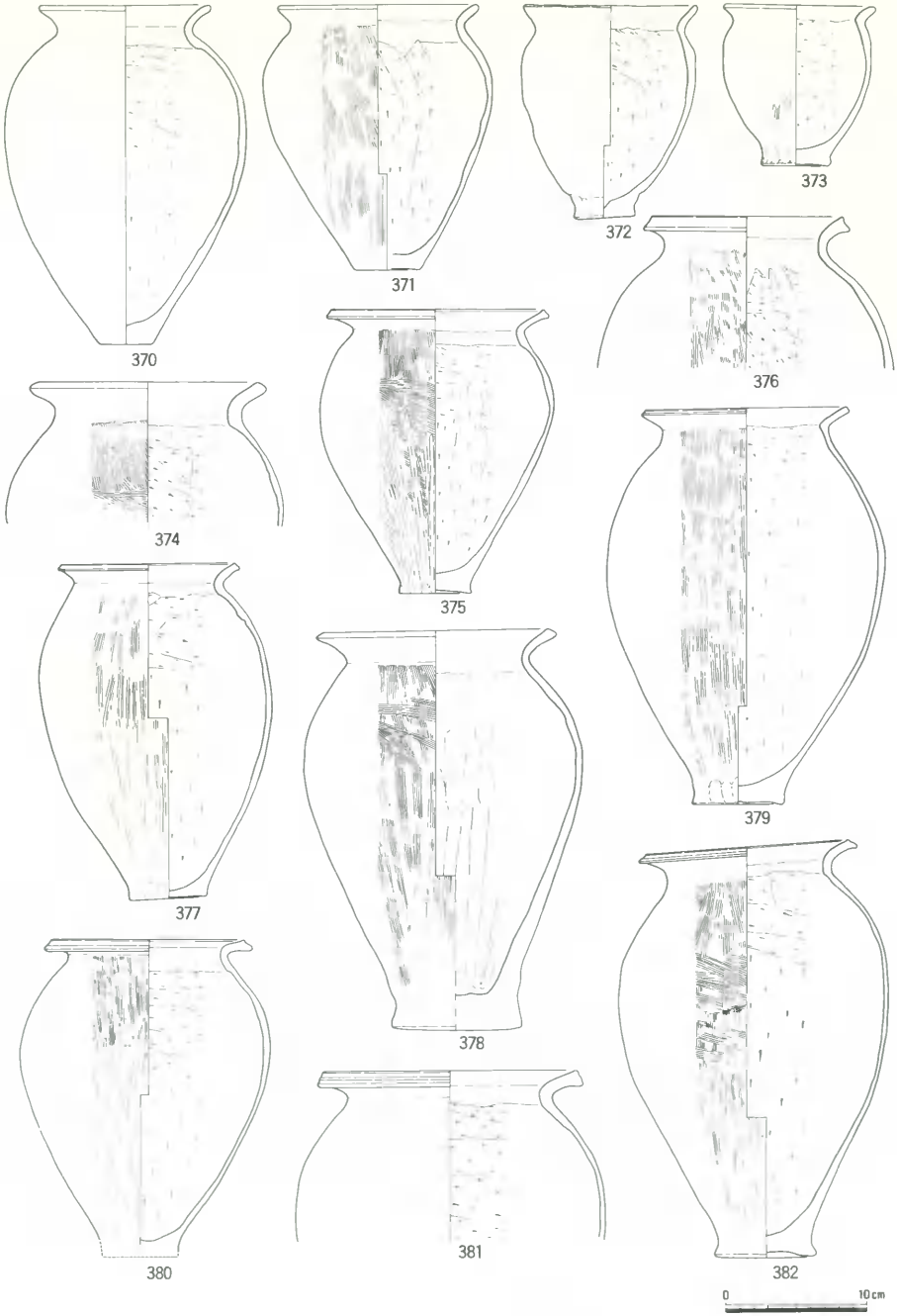
土壙36

22D区の南部に位置し、土壙31～33と同様、後期水田層下で検出した土壙である。平面形はやや歪な円形を呈し、径100cm、深さ45cmを測る。底は平坦で、壁は逆「ハ」字状に急斜となって立ち上がる。埋土は三層でいずれも粘土～粘質土であり、人為的に埋没させた状況を示す。

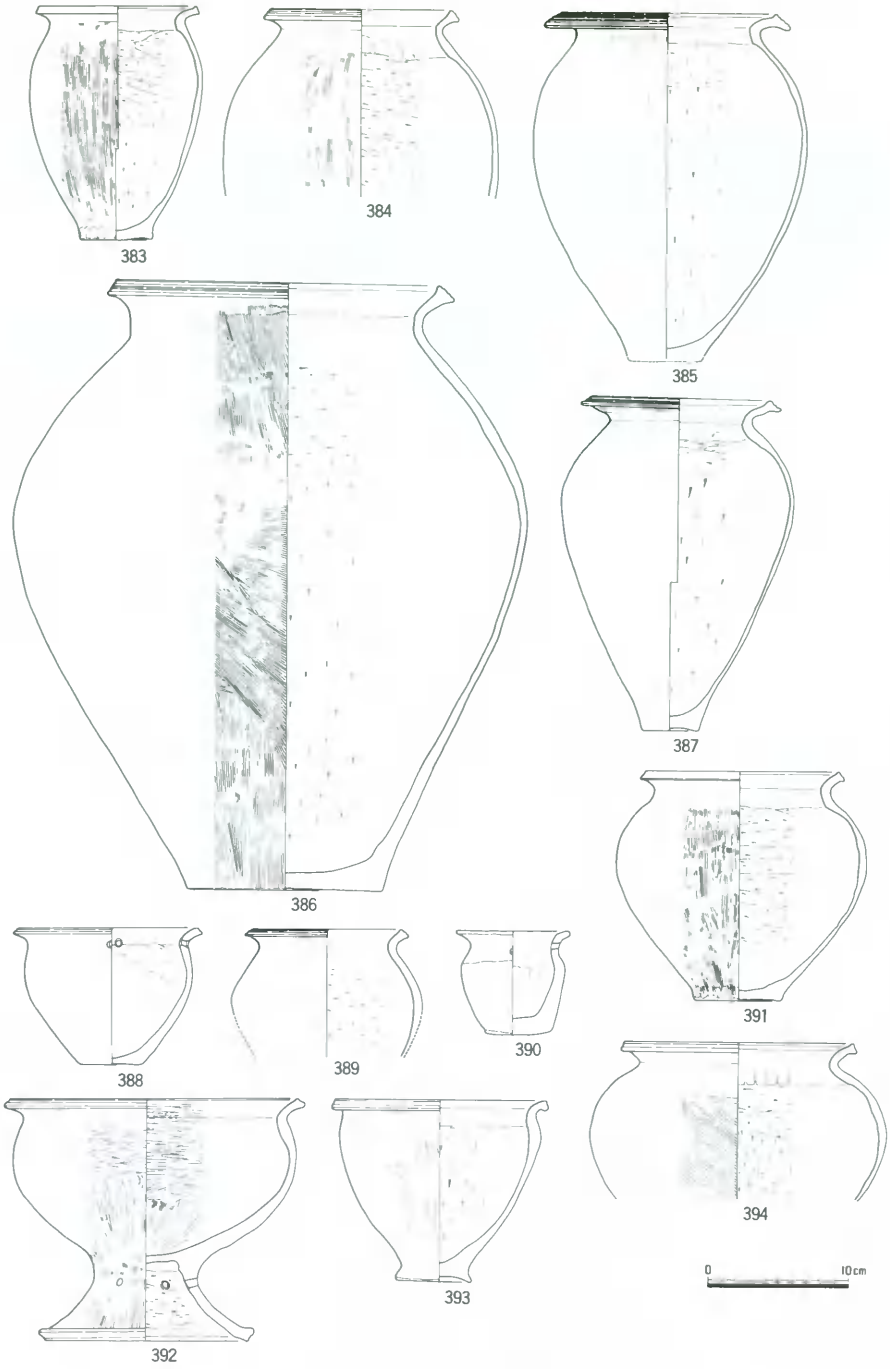
出土遺物はないが、その検出状況から後期と考えられる。（高田）



第97図　土壙34 出土遺物（１）

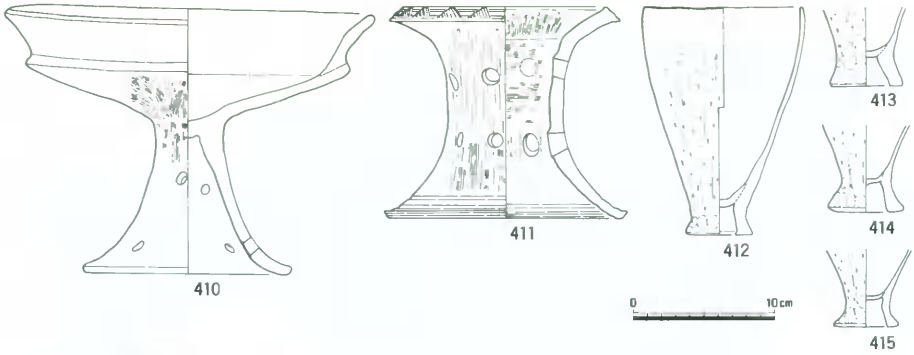


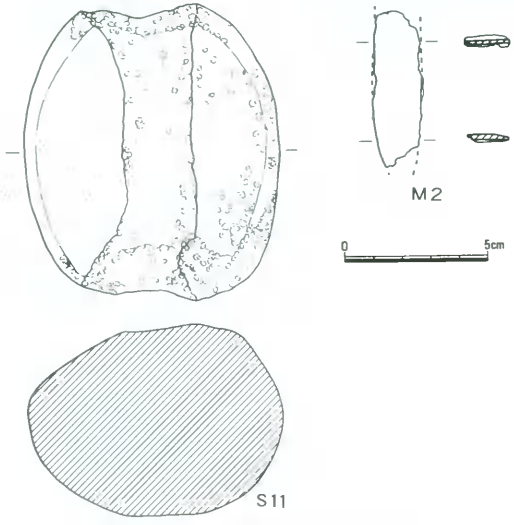
第98図　土壙34出土遺物（2）



第99図　土壙34出土遺物（３）

第100図　土壙34出土遺物（4）





第101図　土壙34出土遺物（５）

土壙37（第103図、図版62）

22Ｄ区の北部に位置し、後期水田層下で検出した土壙である。平面形は円形を呈し、径90cm、深さ56cmを測る。断面形はすり鉢状で、径25cmの平坦な底にむかって屈曲部をもちながら急斜に落ち込んでいる。

出土遺物は弥生土器片で、いずれも底や壁に接した状態での出土である。422は肩部近くで出土した台付直口壺で、口縁端部を外方につまみ出し、ややしもぶくれの胴部をもつ。口縁と胴部の境の屈曲部には凹線を、胴部の最大径よりやや下には沈線を施す。脚部は柱状部から屈曲して裾部を広げ、円孔を５箇所に配している。遺物の時期は百・後・Ⅱと考えられる。（高田）

(6)　柱　穴　列

柱穴列１（第104図）

21Ｃ区の調査区北東端で検出された柱穴列である。柱穴は北西から南東方向に４個が並ぶものの、調査区内にはそれに対応する柱穴はない。調査区外へ対応する柱穴が存在する可能性もあり、現状では柱穴列として報告しておく。

柱穴列はほぼ1.1m間幅で並ぶ。柱穴１は柱痕跡が確認できなかったが、柱穴２は土層断面に明瞭に認められた。また柱穴３・４には柱の痕跡と考えられる小さな凹みが認められた。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、検出面から後期と考えられる。　（平井）

(7) 炉

炉1（第105図、図版18）

11C区内で検出された炉である。平面形はやや歪んだ円形を呈する。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。規模は径41cm、深さ8cmを測る。炉の内面は全体が赤褐色に良く焼けているが、とくに壁は数cmの厚さで焼けていた。埋土は灰褐色土で、土器の細片をわずかに含んでいた。

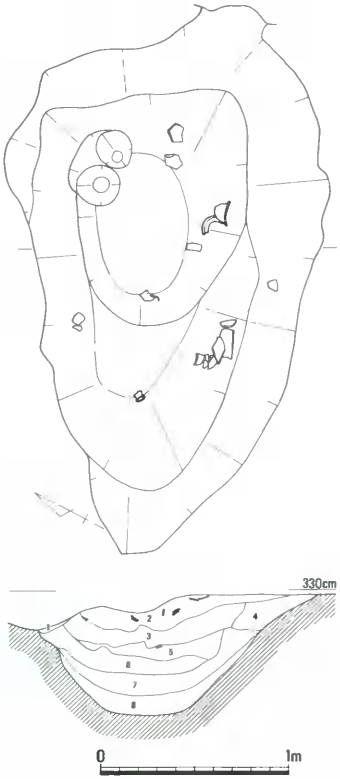
時期は土器の細片と検出面から後期と考えられる。（平井）

(8) 溝

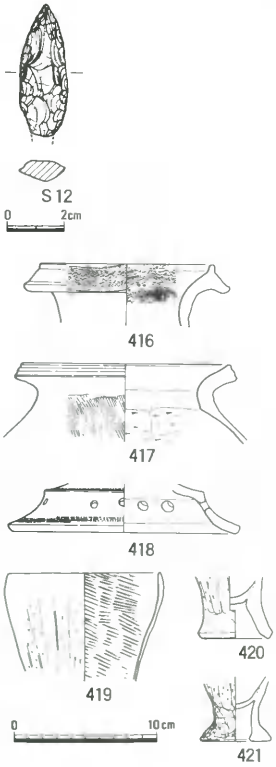
溝2・3・4・5・6・7

（第106・107図、図版71）

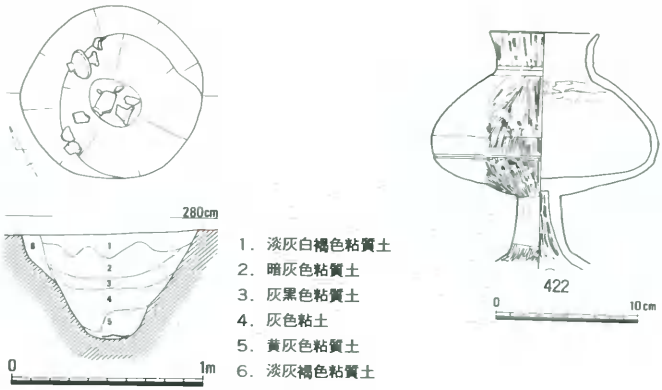
11・12C区にまたがって検出した溝群で、12C区北隅付近に扇の先を持つような弧状に流走をする。それぞれは複雑な切り合いをもつが、検出状況から溝6より溝4が新しく、さらに溝4よりも



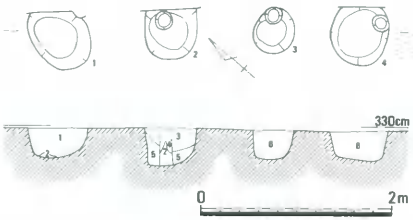
1．淡暗灰色粘質土
2．茶灰色粘質土
（焼土・炭・細礫・土器多く含む）
3．灰茶黄色粘質土（焼土・炭含む）
4．淡暗茶灰黄色粘質土
（焼土・炭多く，土器・細礫含む）
5．暗茶灰褐色粘質土（炭・焼土多く含む）
6．炭（暗灰色粘土及び粘質砂混る，焼土多く含む）
7．炭（焼土含む）
8．淡暗灰茶色粘質土（炭・焼土含む）



第102図　土壙35・出土遺物

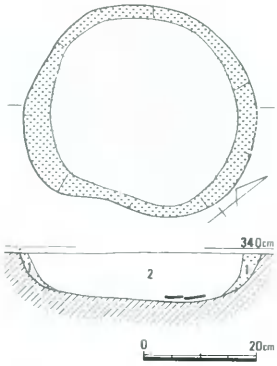


第103図　土壙37・出土遺物



1．褐灰色粘質土　2．灰色粘土　3．暗褐灰色粘質土
4．褐灰色粘質土　5．褐灰黄色粘質土　6．暗褐灰色土

第104図　柱穴列１



1．黄橙色（7.5YR7/8）焼土
2．灰褐色（10YR6/2）土

第105図　炉１

溝５が新しいことを確認している。埋土に差異はほとんどみられず、オリーブ褐色土と黄褐色土である。溝の規模は、幅25～80cmで30cm前後のものが多く、検出面からの深さは20cm前後を測る。溝底の標高は296～320cmを前後し、その流走方向は不明だが、溝５のみ西から東への流水が考えられる。また断面形は、溝５が「U」字形を呈するほかは、低い逆台形状である。以上のことから、溝５は他の溝と性格を異し、竪穴住居２の東に端を発することと合わせ、その関連施設の可能性がある。

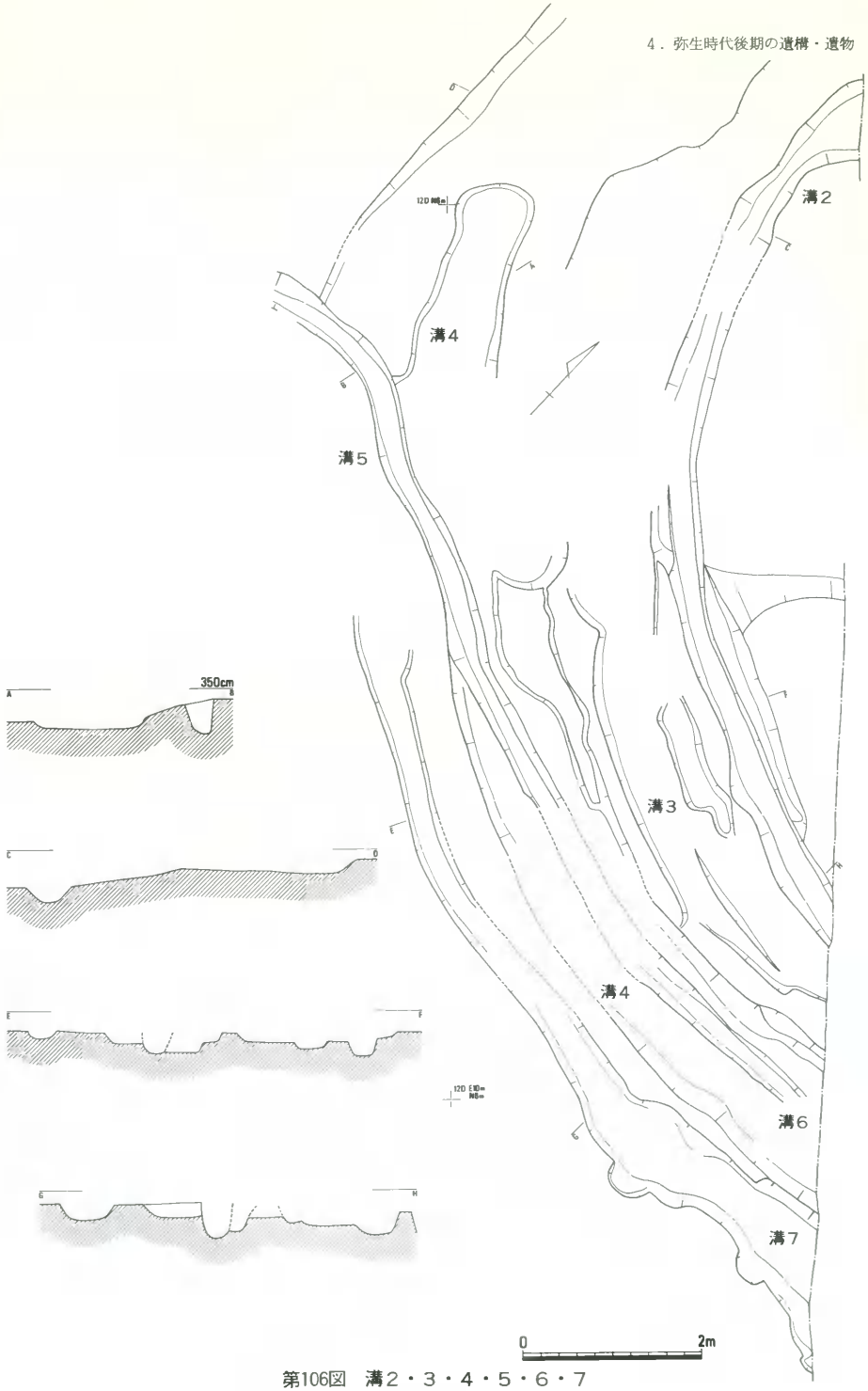
遺物には土器と石器がある。土器は各溝から出土し、いずれも後期に属している。溝５から出土したS13はサヌカイト製の石鏃である。

溝の時期は百・後・Ⅱと考えられ、井戸３との切り合い関係とも整合する。　（高田）

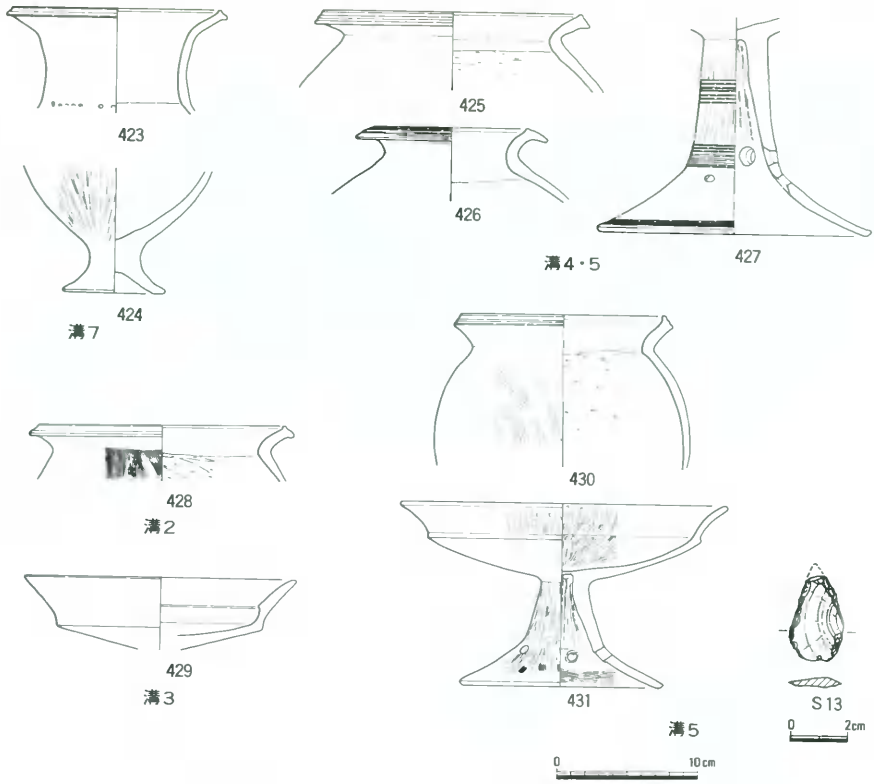
溝８

12C区の西隅で検出した溝で、竪穴住居２の東に近接する。平面形は中ほどで折れ曲がり、その規模は長さ370cm、幅35cm、深さ７～８cmを測る。埋土は黄褐色土で、その流水方向は不明である。

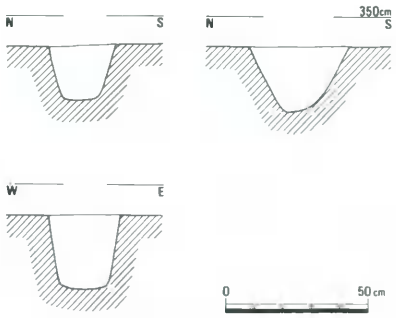
出土遺物には少量の土器片があり、検出状況から後期と考えられる。　（高田）



第106図　溝2・3・4・5・6・7



第107図　溝２・３・４・５・７出土遺物

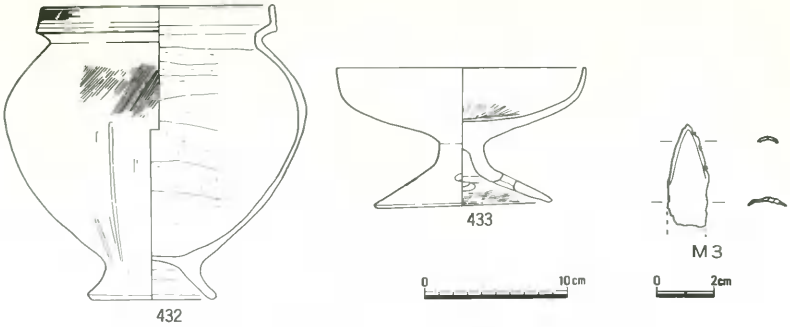


第108図　溝９〈上〉・10〈下〉

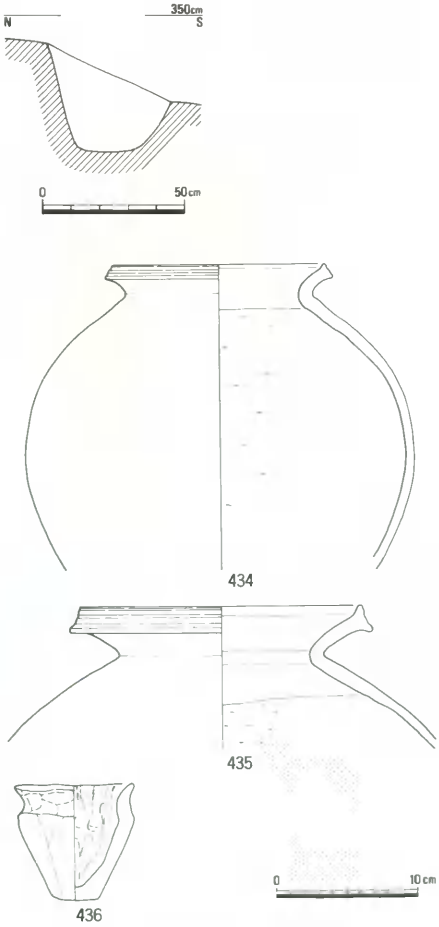
溝９（第108・109・112図、図版18・68）

11～13D区を西から東に流走する溝である。溝は11D区の竪穴住居１上で後述の溝10と交差、合流する。さらに12D区で溝11と交差し、北西から南東にやや方向を変えたのち、13D区で溝13に注ぎ込んでいる。また、その東は調査区外に延び、『百間川原尾島遺跡２』の「竪穴式住居16」の壁に接する「溝15」に接続する可能性が高い。

溝の断面形は、11D区付近で「U」字形、12区付近で「V」字形を呈し、幅35cm、検出面からの深さは20cm前後を測る。その標高は西端で320cm、溝11との交差地点付近で314cm、溝13との合流部で300cmとなり、西から東への流水を裏付けている。また、溝13との合流部では約30cmの落差をもって溝13に注ぎ込み、落水による凹みがみられる。埋土は炭・焼土を含むオリーブ褐色土で、溝10・11との違い



第109図　溝９出土遺物



第110図　溝12・出土遺物

はない。

遺物には土器と鉄器がある。432は台付鉢で、口縁部を上方に拡張して外面に擬凹線文を施し、器壁は胴下半を薄く仕上げている。433は高杯で、内湾ぎみにゆるく立ち上がる口縁をもつ。裾部は、短い脚部からゆるく屈曲して「ハ」字状に広がり、円孔を４箇所に配す。また、Ｍ３は鉈の先と考えられる鉄器である。

溝の時期は百・後・Ⅲに比定される。(高田)

溝10（第108図）

11Ｄ区のほぼ中央で検出した溝である。竪穴住居１上で溝９と交差し、さらに合流すると考えられるが、住居と同時に掘り上げたためその切り合い関係と合流部の状況は明らかではない。壁はほぼ垂直で平坦な底をもち、その断面形は「U」字形を呈す。幅は25cmで、検出面からの深さは26cmを測る。埋土はオリーブ褐色土で、少量の弥生土器片が出土している。なお、溝は蛇行しながら調査区外に延びており、『百間川原尾島遺跡２』の「竪穴式住居16」の壁に接する「溝16」に接続する可能性が高い。

時期は検出状況から、後期と考えられる。

（高田）

溝11

12Ｄ区で溝９と交差する南北方向の溝である。その南側は近現代用水と中世以降の洪水に

削られているため不明だが、長さ4mを検出している。幅は30cmを測り、深さは溝9よりも若干浅く、その断面形は「U」字形を呈する。埋土は炭・焼土を含むオリーブ褐色土である。

出土遺物はないが、その形態、埋土等の検出状況の類似から、溝9と同時か、近接した時期に機能したものと考えられる。（高田）

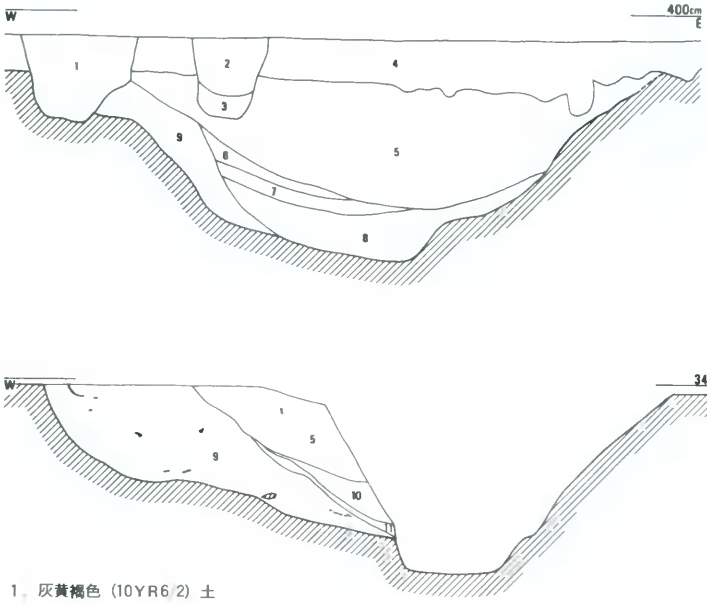
溝12（第110図）

12D区のほぼ中央を東西に流走する溝である。中世以降の洪水によって削平された平坦面で検出し、長さは8.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、幅45cm、深さは検出面から38cmである。埋土はオリーブ褐色土で、弥生土器片が出土している。

時期は、百・後・Ⅱと考えられる。（高田）

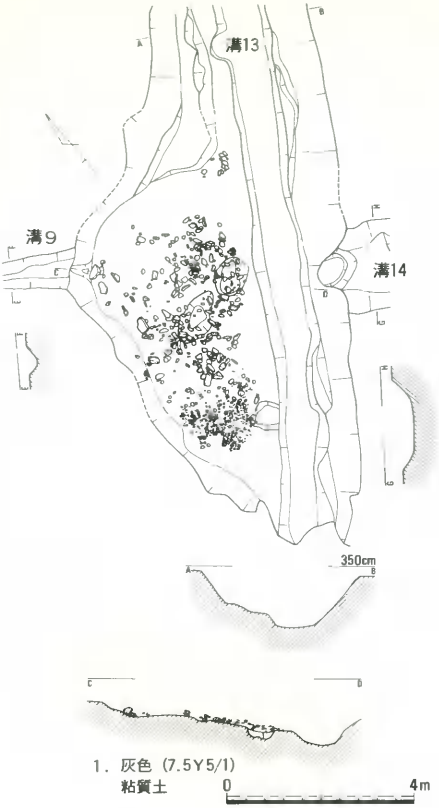
溝13（第111～115図、図版19・62・63・68・70・71）

13C・D区を東北から南西に流走する溝である。溝の北側は調査区外に延び、南側は中世以降の洪水によって大きく削平されている。また南半には西岸を大きく張り出してテラス状をした部分があり、溝9が合流している。その対岸には後述する溝14が合流する箇所がある。溝の規模は幅4.4m、検出面からの深さ135cmを測る。中央には、幅110cmで深さ30cm前後の一段深い掘削部分があり、壁はそこから段をもって急斜に立ち上がる。南半のテラス部分は6×3.5mを測り、底には10～15cmの厚さ



1. 灰黄褐色（10YR6/2）土
2. 灰黄褐色（10YR5/2）土
3. 明黄褐色（2.5Y6/6）砂質土
4. にぶい黄橙色（10YR7/3）砂　5. オリーブ黄色（5Y6/4）微砂　6. 灰オリーブ色（5Y6/2）微砂
7. 灰黄色（2.5Y6/2）砂（焼土・礫を多く含む）　8. 灰オリーブ色（7.5Y6/2）微砂　9. オリーブ黄色（5Y6/3）砂　10. 灰色（7.5Y6/1）粘質微砂　11. 灰白色（10Y8/1）微砂

第111図　溝13



第112図　溝9と溝13・14の合流部

に礫がある。その大きさは1～35cmで、10～15cm前後の円礫が多い。なお、礫を取り除いた底は凹凸があり、溝底に向かって緩やかに傾斜している。

埋土は微砂と砂で、5～8・10・11層と9層に大別できる。5層は弥生後期末の洪水砂と考えられ、他は流水時の堆積の可能性が高い。また9層は、溝の西肩とテラス上に堆積しており、当初の溝の堆積と考えられる。

出土遺物には弥生土器と土師器、石器、金属器、土製品がある。土器は流水による影響を受け、鉄分を付着したものが多い。器種には壺、甕、鉢、高杯、台付直口壺、器台、手捏ね土器がある。437は長頸壺で肩から胴部にかけて「籠目」をもつ。また、451と452は褐色の胎土に角閃石を含むものである。石器は花崗岩製の敲石、石錘と、サヌカイト製の削器、石庖丁、石鏃である。また金属器には鉈、土製品は土錘である。

以上のことから、まずテラスをもつ溝が掘削され、その埋没後ほぼ同一流路を踏襲して新たな溝が掘削されたが、やがてそれも後期末の洪水砂で廃絶したものと考えたい。出土土器の時期幅も概ねこれを裏付けるものであろう。

（高田）

溝14（第112図）

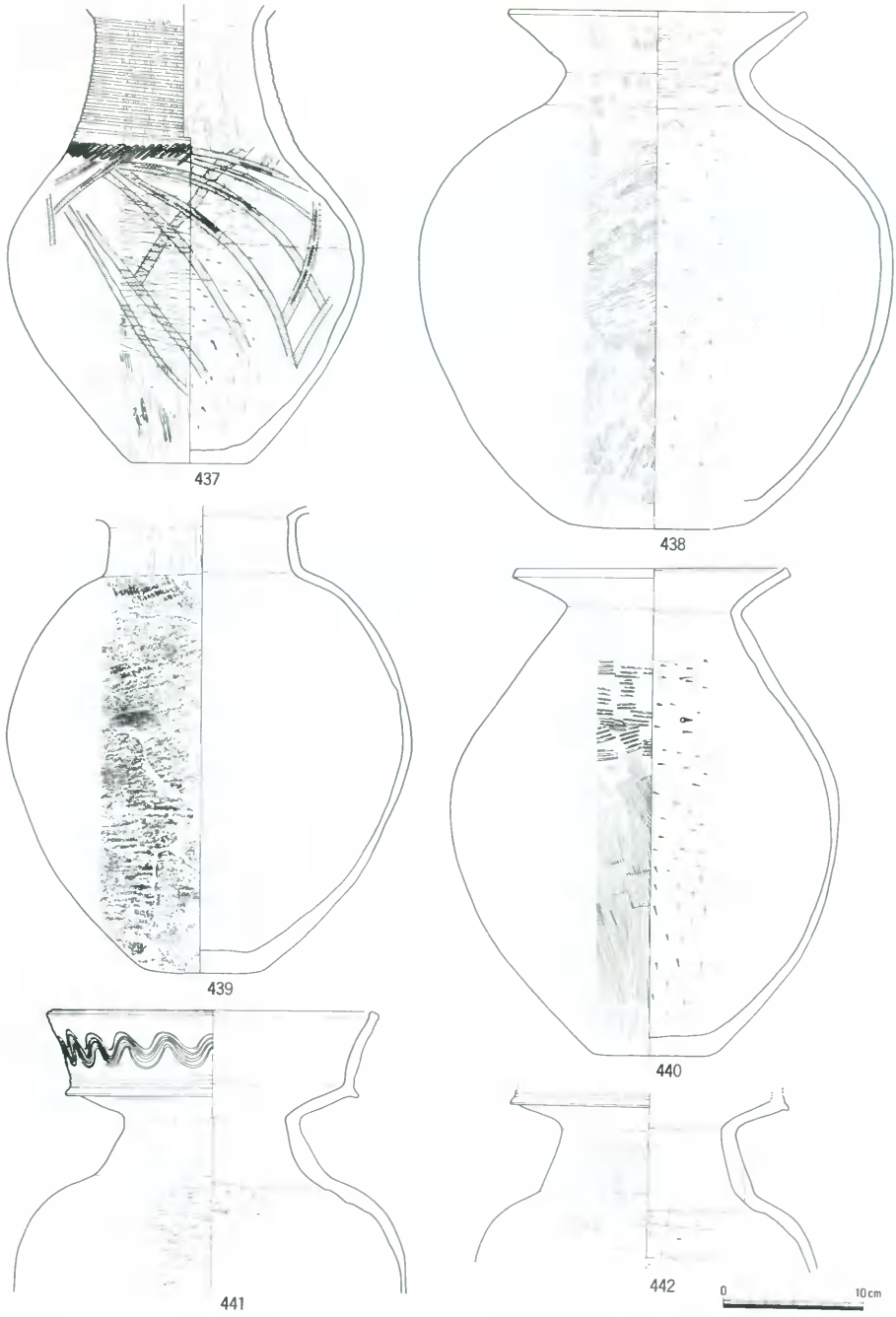
13D区に位置し、溝13と溝15との間で検出した溝である。溝はそれぞれの溝に直角に接し、その規模は長さ3m、幅1.9m、検出面からの深さ30～50cmを測る。底の標高は溝13と接する部分で274cm、溝15と接する部分で295cmである。また、溝13と接する部分は約20cmの落差をもって2段に落ち込んでいる。埋土はオリーブ黄色微砂で、弥生後期末の洪水砂である。その性格は、中世以降の洪水による削平を大きく受けているため不明な部分が多いが、溝13と溝15をつなぐ溝で、主に溝15から溝13へ水を流す役割を担ったものと考えられる。

出土遺物はないがその検出状況から、溝13、15と同時に機能し、弥生後期末の洪水で廃絶したものと考えられる。

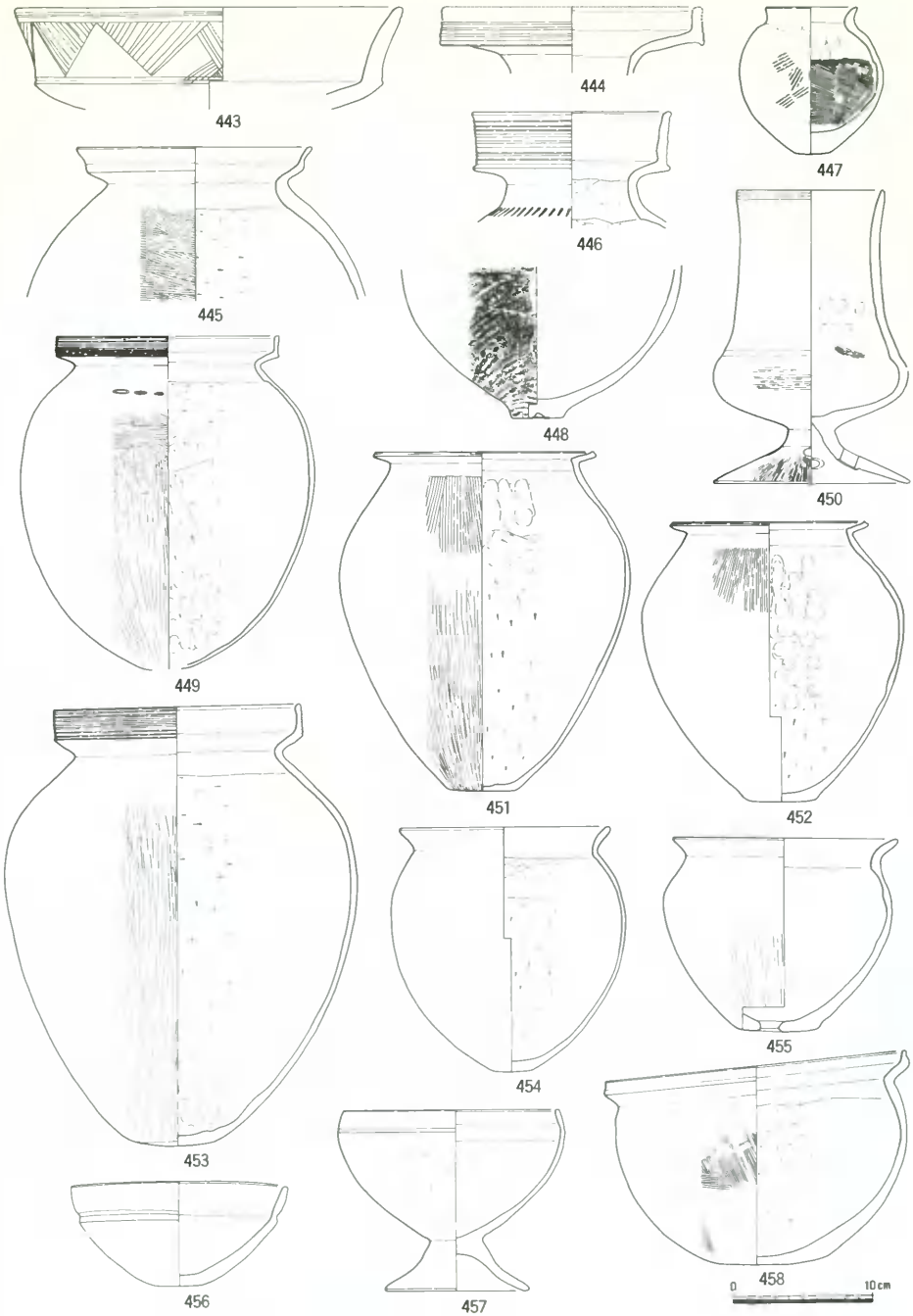
（高田）

溝15（第116図、図版19）

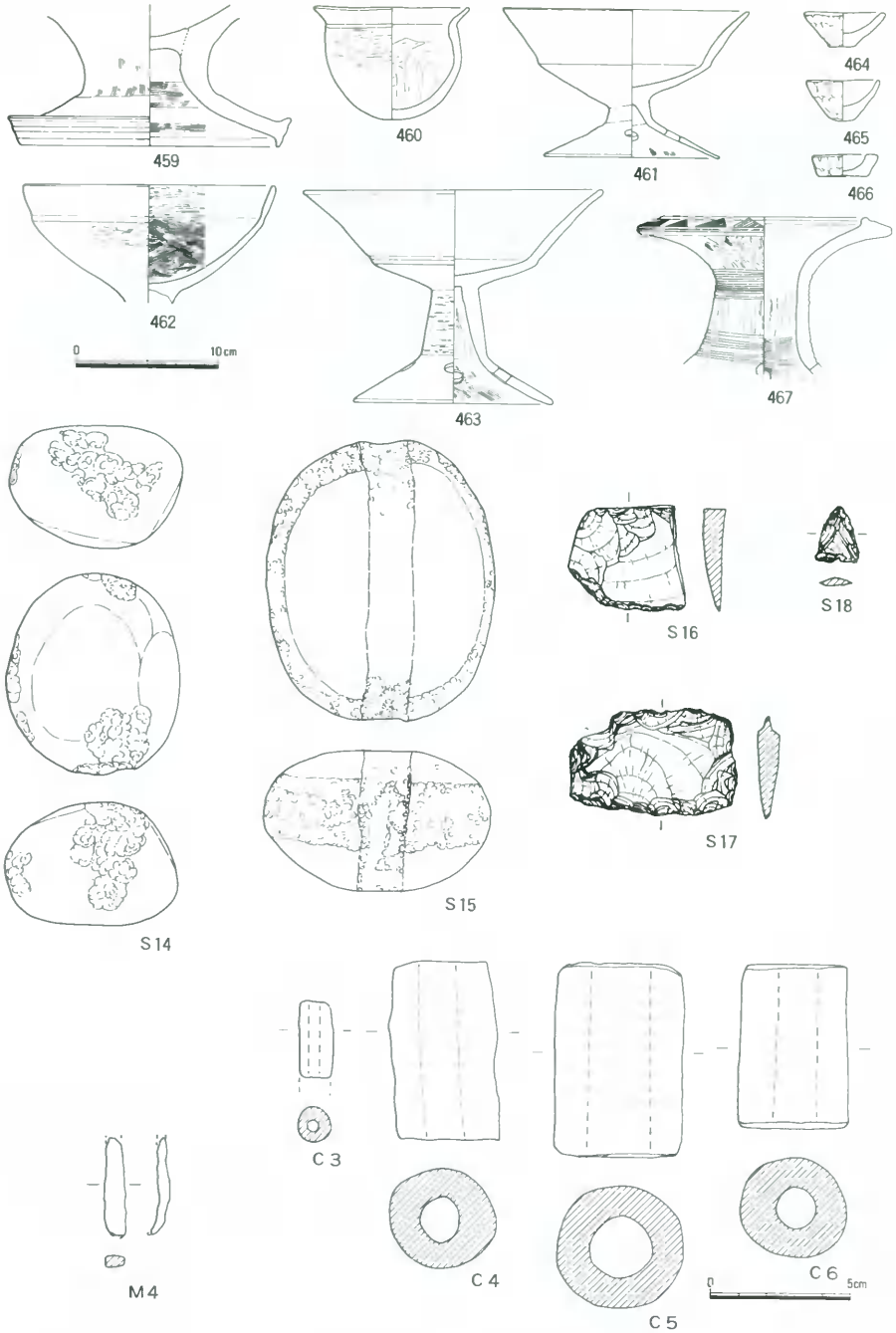
13・14C・D区を東北から南西に直線的に流走する溝で、溝13に平行する。Dライン付近の西側では溝14が接し、東側では溝18が接している。その北側は調査区外に延び、南半の上部を中世以降の洪水に削平されている。溝の規模は、調査区の北壁断面で幅380cm、深さ128cmを測り、斜面は3段に落



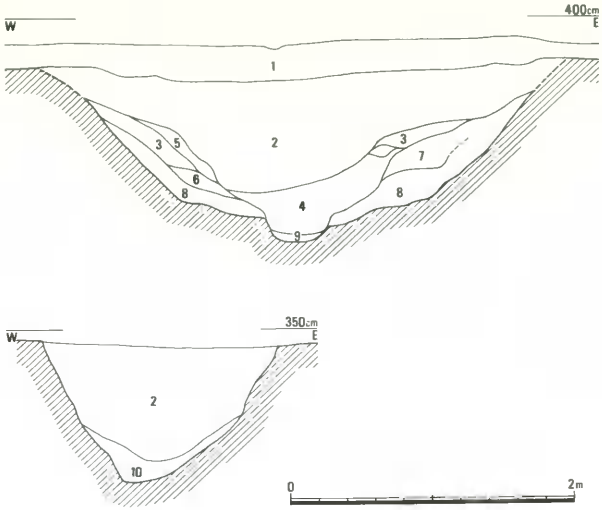
第113図　溝13出土遺物（１）



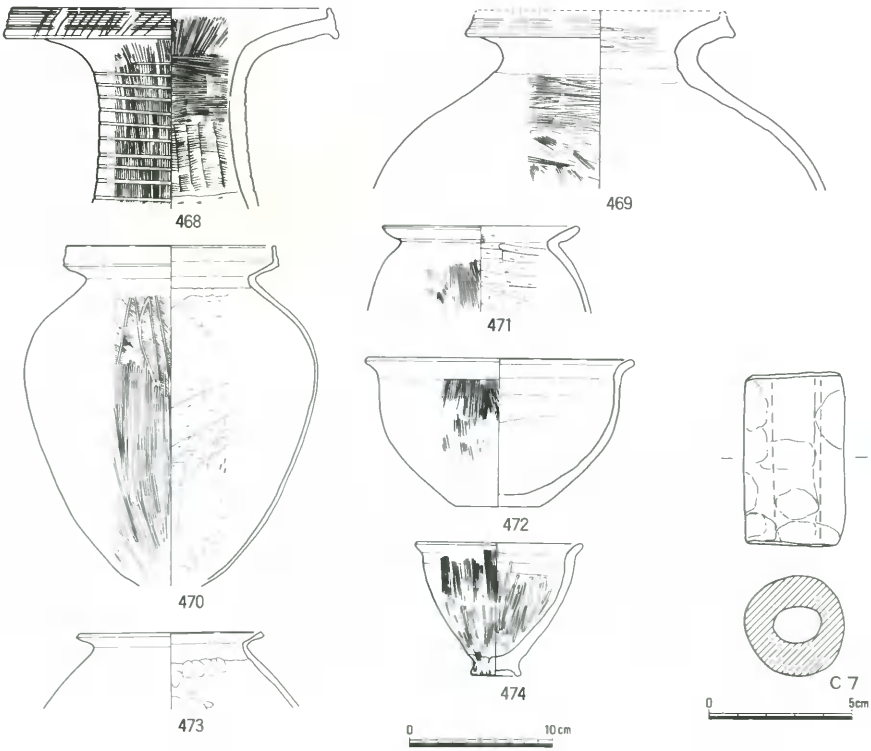
第114図　溝13出土遺物（2）



第115図　溝13出土遺物（３）



1．淡黄色（2.5Y8/4）砂
2．オリーブ黄色（5Y6/4）微砂
3．オリーブ黄色（5Y6/3）微砂
4．灰色（5Y5/1）微砂
5．褐灰色（10YR5/1）粘質土
6．にぶい黄褐色（10YR5/4）土（焼土・炭多く含む）
7．にぶい黄色（2.5Y6/4）微砂
8．にぶい黄色（2.5Y6/3）微砂
9．浅黄色（5Y7/4）粘質土
10．灰色（5Y4/1）粘土



第116図　溝15・出土遺物

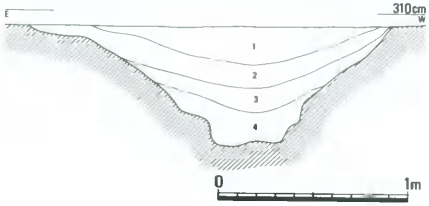
ち込む。埋土は、底に堆積した粘土層と、その上部の微砂層に大別できる。上部の微砂層は弥生後期末の洪水砂で、断面図の1層のように溝肩までを覆って堆積している。なお5～8層は後述する溝16の埋土と考えられる堆積である。

遺物には土器と土製品がある。溝の北半分を溝16とともに掘り上げたため遺物の混入がみられるが、470・473の甕が溝の埋没時期を示していると考えられる。473は強く屈曲する口縁部で端部に面をもち、頸部直下の内面には指頭圧痕を残す。その胎土は、角閃石を多く含むチョコレート色である。この特徴は讃岐産の甕に類似することから、その地域からの搬入品と考えられる。

以上のことから溝の時期は、百・後・Ⅳに比定される。　（高田）

溝16（第117・119、図版19）

13・14C・D区で検出した溝で、南半はその上部を中世以降の洪水で削平されている。溝は、Dライン付近まで溝15との同一流路を東北から南西方向に流れ、そこで向きを変えて直線的に南流する。



1．にぶい黄褐色（10YR6/3）微砂質土（炭・焼土含む）
2．灰褐色（7.5YR5/2）粘質微砂（炭・焼土含む）
3．褐灰色（7.5YR6/1）微砂粘土（炭・焼土含む）
4．黄灰色（2.5Y4/1）粘土（にぶい黄色微砂粘質土含む）

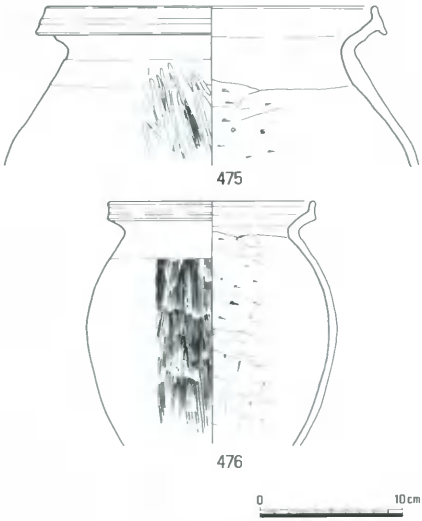
その規模は、Dライン付近で幅190cm、検出面からの深さ62cmを測る。溝の斜面は、平坦な底から垂直に立ち上がった後、「ハ」字状に大きく広がる断面形を呈する。埋土は大別して、上部の砂質土（1・2層）と下部の粘質土（3・4層）に区分できる。以上の検出状況から、溝16の埋没後にその流路を一部踏襲して、直線的な溝15が掘削されたことが窺われる。

遺物には弥生土器片があり、溝の時期は百・後・Ⅲと考えられる。　（高田）

溝17（第118・119図、図版20・63）

13・14C・D区に位置し、その北半を微高地上で、14D杭以南を後期水田層下で検出した溝である。北部は調査区外に延び、南端は溝16と接するが、上部を中世洪水で削平されているため、切り合い関係は明らかでない。溝は北東から南西に流れた後、13C区隅で南北に向きを変え、さらに14D杭付近で流れを戻して南流する。それはあたかも溝16、溝19bと並流するかのようである。その規模は調査区の北壁断面で幅285cm、深さ125cmを測る。斜面は3段に落ち込み、最下段の断面形は底の平らな「U」字形を呈する。第118図の3層は、溝の廃絶後の凹みに堆積した弥生後期末の洪水砂である。また6層は顕著な炭層で、溝の埋没過程で大量の炭の人為的な廃棄が行なわれたと考えられる。

遺物には弥生土器片がある。図示した完形の



第117図　溝16・出土遺物

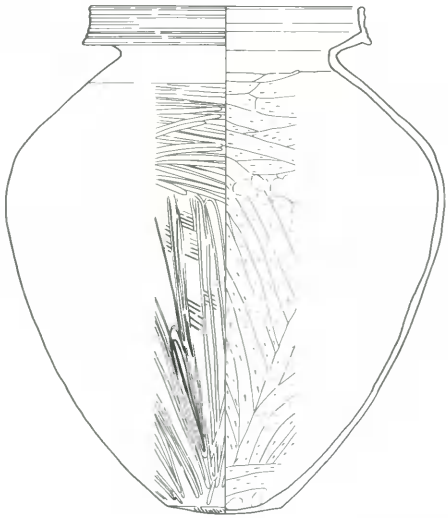
甕477は、５・６層中から横位の状態で出土したもので、炭の廃棄との関連が指摘できる。

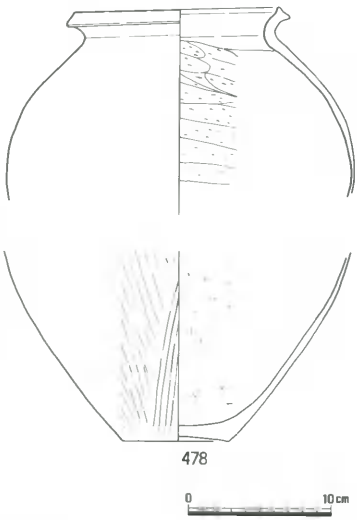
以上のことから溝は、後期水田の開田前には廃絶し、後期末の洪水砂で完全に埋没したものと考えられる。（高田）

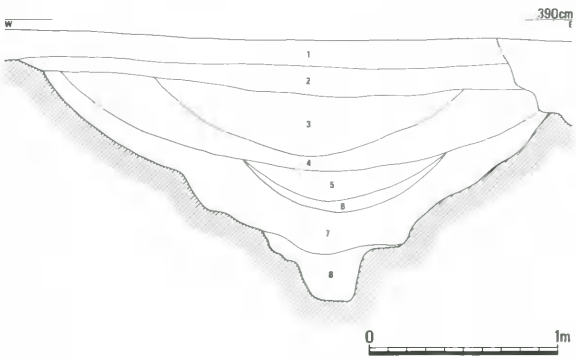
溝18（図版20）

13C区の南隅で検出した、北西－南東方向に流走する溝である。他の溝と同時に掘り上げた部分があるため不明な点が多いが、検出時の規模は幅70cm、深さ40cmを測る。断面形は「U」字形～逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘質微砂で、底面には浅黄色微砂が薄く堆積する。この溝は溝16、17の埋没後に掘削され、14D杭の北側では後期水田層下で検出することを確認している。

出土遺物は少量の弥生土器片のみである。その検出状況から、溝15の東岸から取水し、微高地端で水田に給水した溝と考えられる。その機能は一時的なもので、洪水時にはすでに廃絶していたもので

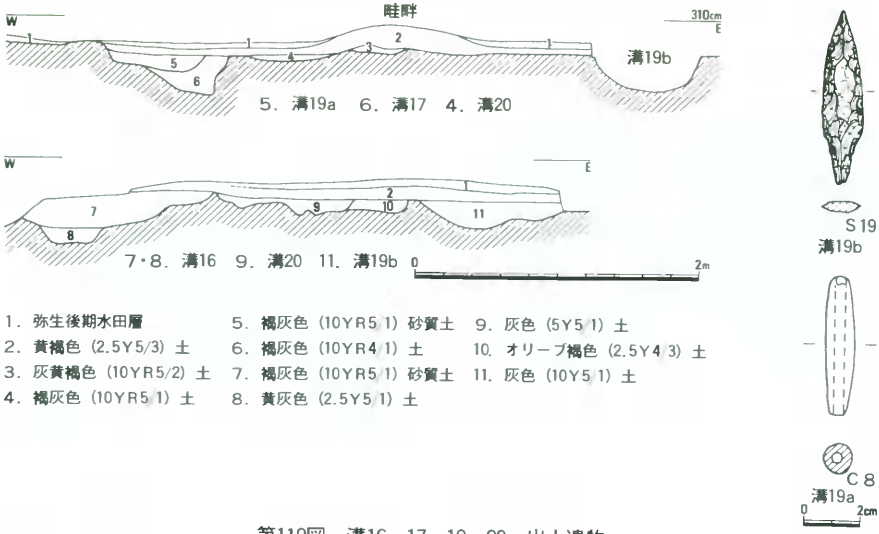






1．オリーブ灰色（2.5GY5/1）
2．褐灰色（10YR5/1）粘質微砂
3．オリーブ黄色（5Y6/3）微砂
4．灰オリーブ色（5Y6/2）粘質微砂（炭・焼土含む）
5．灰褐色（7.5YR5/2）粘質微砂（炭・焼土含む）
6．炭
7．灰褐色（7.5YR5/2）粘質土（炭・焼土含む）
8．褐灰色（10YR4/1）粘土（にぶい黄色土粒・炭・焼土多く含む）

第118図　溝17・出土遺物



1．弥生後期水田層
2．黄褐色（2.5Y5/3）土
3．灰黄褐色（10YR5/2）土
4．褐灰色（10YR5/1）土
5．褐灰色（10YR5/1）砂質土
6．褐灰色（10YR4/1）土
7．褐灰色（10YR5/1）砂質土
8．黄灰色（2.5Y5/1）土
9．灰色（5Y5/1）土
10．オリーブ褐色（2.5Y4/3）土
11．灰色（10Y5/1）土

第119図　溝16・17・19・20・出土遺物

あろう。（高田）

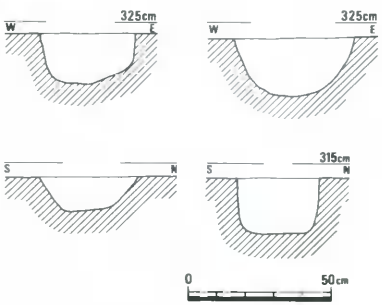
溝19ａ・19ｂ（第119図、図版20・71）

14ライン付近で検出した東北から南西に流走する溝で、14C区では微高地に沿った後期水田の畦畔下に位置し、それ以南の溝19ａは微高地と畦畔に挟まれた水田層下に位置する。溝は14D杭から５ｍ北で分岐し、そのまま南流する溝19ａと、大きく東に張り出した後に南流する溝19ｂの２条に分かれる。またそれらの南半は、溝16・17・20と複雑に切り合っており、溝17よりも溝19ａが新しいことを確認している。検出時の溝の規模は、幅100cm、深さ20cm前後を測り、底の標高は19ｂが若干低く、壁はいずれも急斜に立ち上がる。

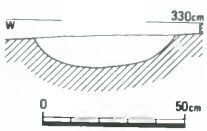
遺物は、少量の弥生土器片とサヌカイト製の石鏃、土錘が各１点出土している。溝の時期は、検出状況から後期と考えられる。（高田）

溝20（第119図、図版20）

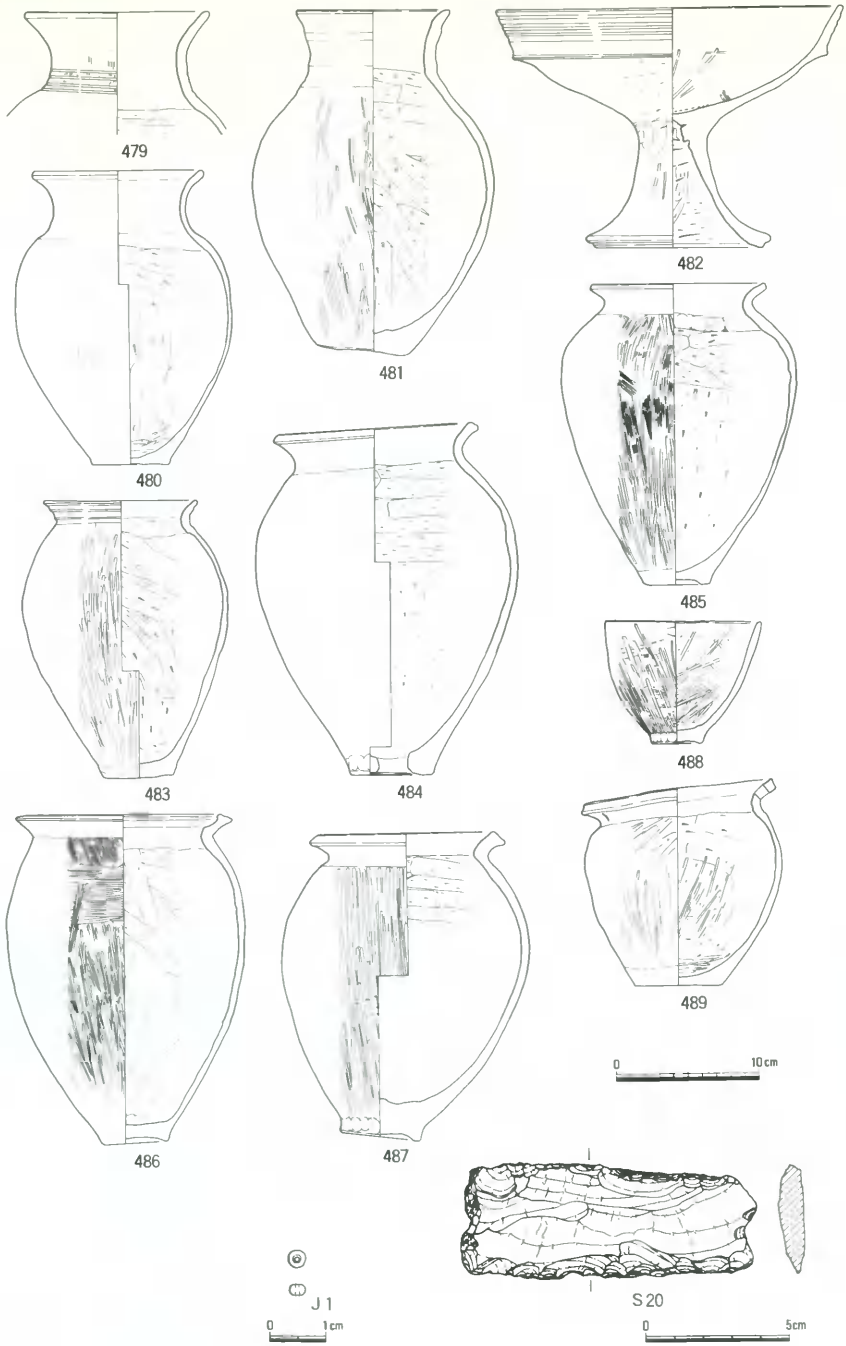
14C・D区の水田層下で検出された浅い溝である。溝は微高地に接する低位部に掘削されており、ほぼ南北に流走する。北側は溝19に切られている。規模は幅50～90cm、深さ10cmあまりである。百間川遺跡群では、微高地や島状高まりに接する水田層下には浅い溝が掘削されていることが多く、本例もその一つで



第120図　溝23



第121図　溝25



第122図　溝25出土遺物

あろう。

時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝21・22

15Ｃ区の水田層下で検出した溝で、旧河道が完全に埋没した後掘削されている。２条の溝は平行して、ほぼ南北方向に流走する。規模は溝21が幅192㎝、深さ36㎝、溝22は幅60㎝、深さ19㎝を測る。

遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出面から後期と考えられる。（平井）

溝23（第120図）

19～21Ｃ・Ｄ区の微高地で検出した溝で、ほぼ南北方向に流走する。規模は幅34～45㎝、深さ15～25㎝を測る。溝の断面はほぼＵ字形を呈する。埋土は黒灰色土である。

時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝24

20Ｃ区の微高地で検出された長さ３ｍあまりの溝で、ほぼ東西方向に流走する。規模は幅34㎝、深さ26㎝を測る。埋土は灰黄褐色土である。

時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝25（第121図、図版20・63・64・68）

21Ｃ区内で検出された溝でほぼ南北に流走する。溝の南端は立消え状態である。規模は幅50㎝、深さ10㎝を測る。内部には遺物が多量に廃棄されていた。埋土は褐灰黄色粘質土である。

遺物は弥生土器とともに石器と玉が出土した。土器は壺、甕、鉢、高杯が認められる。479～481の壺は短い頸部に緩やかに外反する口縁部がつくもので、479はさらに頸部に４条の沈線がめぐる。484の甕は底部に焼成後の穿孔が認められる。489の鉢は口縁部に円孔が穿たれている。482の高杯は口縁部の外面に沈線が数条施されている。

石器は石包丁が１点のみである。完形で、両短辺には抉りが施されている。玉はガラス製の小玉で、１点出土した。

土器の時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

溝26

21Ｃ区で検出した溝である。溝は南東から北西方向へ流走するが、全長５ｍあまりで両端とも途切れる。規模は幅50㎝、深さ８㎝を測る。埋土は淡褐灰色土である。

時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝27（第123図）

21Ｄ区の微高地端部に接した低位部で検出された溝である。溝は微高地に接し、南西側では北東から南西方向に流走するが、北東側は南東に大きく曲がる。この南東に向きを変えた部分の南東側には杭穴状の小ピットが列をなしていた。溝の規模は幅35㎝、深さ８㎝を測る。埋土は暗灰褐色粘質土である。

時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝28ａ・28ｂ（第124図、図版20）

21・22Ｃ・Ｄ区の微高地から低位部にかけて検出された溝である。溝はほぼ南北に流走するが、北側は微高地上を南北に掘削しており、微高地端部付近で少し東へ屈曲し再び南へ延びる。この溝28ａが東へ屈曲するのは不自然であるが、それは本来ほぼ直線的に掘削されていた溝28ｂをそこで付け変

えたためと考えられる。規模は28ａが幅45～60cm、深さ15～20cm、28ｂが幅30cm前後、深さ５cm前後を測る。埋土は28ａが暗灰色粘土、28ｂは淡灰色粘土である。

時期は低位部の後期末の水田層下で検出していることから、それ以前でしかも後期の中に収まる。

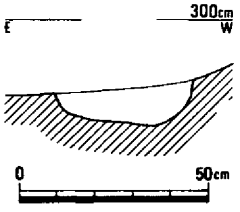
（平井）

溝29（第125図）

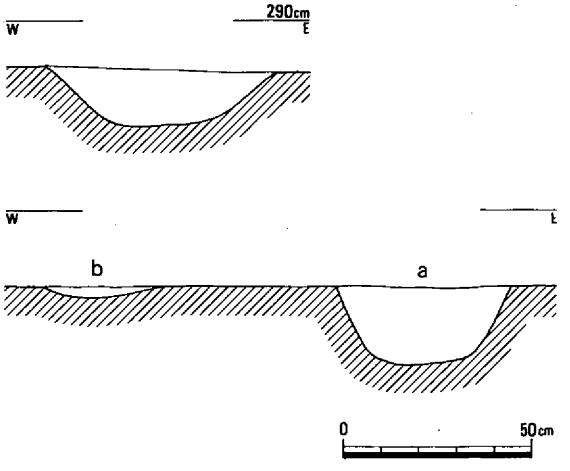
22Ｃ・Ｄ区の水田層下で検出された溝である。溝はほぼ北東から南西方向に流走するが、北東端は少し東へ曲る。この溝は溝30とともに島状高まり１の下端に沿って掘削されている。規模は幅85～95cm、深さ15cm前後を測る。埋土は灰白色粘土である。

時期は弥生後期末の水田より古く、しかも後期の中に収まるものと考えられる。

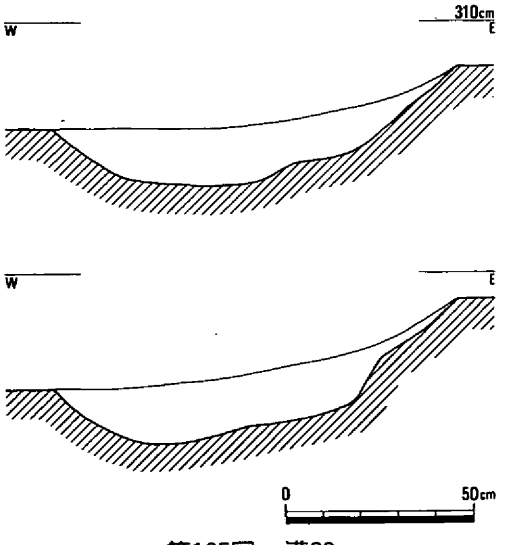
（平井）



第123図　溝27



第124図　溝28a・28b



第125図　溝29

溝30（第126図）

22Ｃ・Ｄ区の低位部で検出された溝である。溝は溝29とともに島状高まり１に沿って掘削されており、ほぼ北東から南西に流走する。規模は幅55cm前後、深さ６～10cmを測る。埋土は灰白色粘土である。

時期は弥生後期末の水田より古く、しかも後期の中に収まるものと考えられる。　（平井）

溝31（第127図）

22・23Ｃ・Ｄ区の低位部で検出された溝である。溝は北東から南西方向に流走するが、南西端は立消えになる。規模は幅40cm前後、深さ５cm前後を測る。埋土は灰白色粘土である。

時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝32（第128図）

23Ｃ・Ｄ区の低位部で検出された溝である。溝は溝33と同様に、島状高まり２に接して掘削されており、水田層下で検出した。ほぼ北東から南西に流走するが、南西側は少し蛇行する。規模は幅65～95cm、深さ５cm前後を測る。埋土は灰褐色土である。

時期は弥生後期末の水田より古く、しかも後期の中に収まるものと考えられる。　（平井）

溝33（第129図）

23Ｃ・Ｄ区の低位部で検出された溝で、溝32とともに島状高まり２の下端をめぐっている。溝は北東から南西に流走するが、南西側は西に

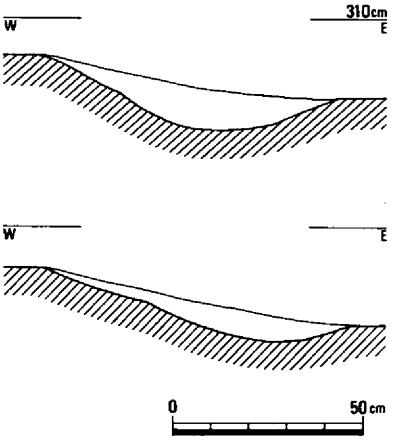
少し蛇行する。規模は幅2.4m前後、深さ3cm前後を測る。埋土は暗灰色粘質土である。

時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）

溝34・35・36・37・38（第130～132図）

19・20A区の微高地端部から低位部にかけて検出された溝群である。溝群はほぼ東西方向に平行して流走する。最も北側の微高地にそっているのが溝34で、規模は幅75cm前後、深さ8cmを測る。埋土は褐灰色粘質土である。この溝のすぐ南側に平行して流走するのが溝35で、規模は幅50cm前後、深さ8cmを測る。さらに南側には溝36・37が流走する。溝36は底部に小ピットが多く穿たれている。規模は幅65cm前後、深さ20cmを測る。溝37の規模は幅45cm、深さ10cmを測る。溝38は最も南側に位置する。規模は幅45cm、深さ12cmを測る。

時期は弥生後期末の水田層下で検出していることから後期と考えられる。　（平井）

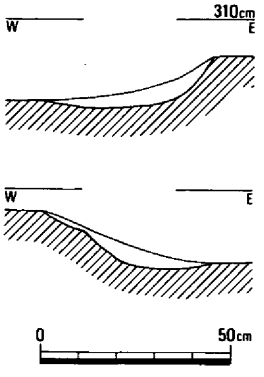


第126図　溝30

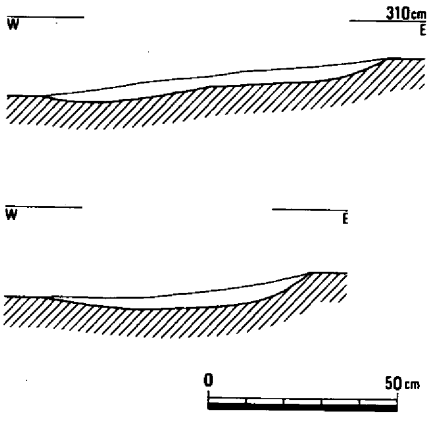
溝39・40（第133図）

20A区の低位部で検出した溝である。溝は調査区内にかかっているのが一部であるため形状は不明であるが、蛇行しながら北西から南東方向へ流走すると考えられる。溝40はほぼ東西方向へ流走するが、東端近くで溝39と重なる。規模は溝39で64cm、深さ25cm、溝40は幅27cm、深さ7cmを測る。

時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）



第127図　溝31

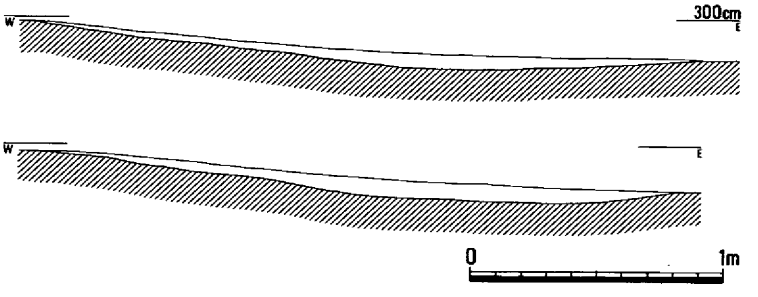


第128図　溝32

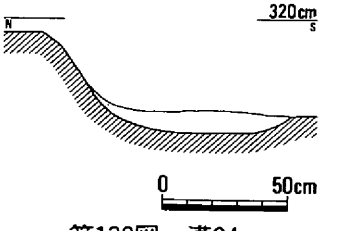
溝41（第134図）

20A区で検出した溝である。溝は島状高まりに沿って掘削されており、水田層下で検出した。規模は幅70cm、深さ15cmを測る。埋土中には炭や焼土を含む。

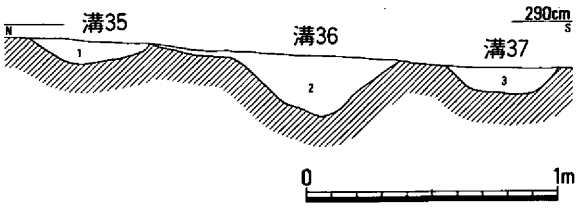
時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）



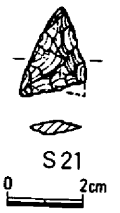
第129図　溝33



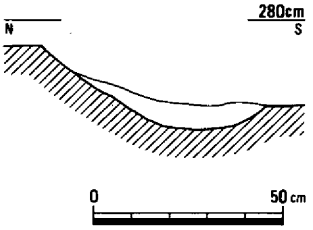
第130図　溝34



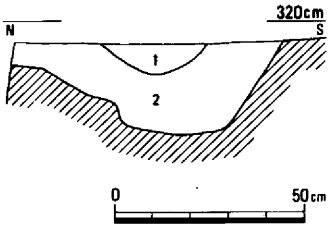
1．褐灰色（10YR4/1）粘性土
2．褐灰色（10YR4/1）粘性土
3．灰色（10Y4/1）粘土



第131図　溝35・36・37・出土遺物

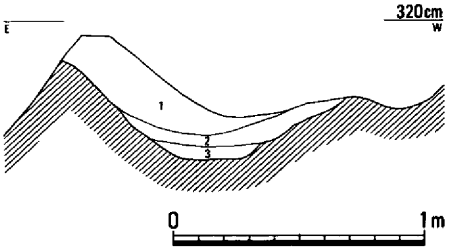


第132図　溝38



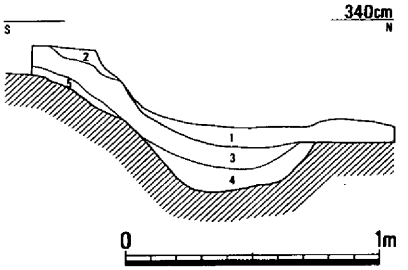
1．黄灰色（2.5Y5/1）粘土（炭・焼土粒含，溝）
2．緑灰色（10G5/1）粘土（炭粒含，溝）

第133図　溝39〈2〉・40〈1〉



1．褐灰色（10YR6/1）粘質土（炭・焼土粒少含）
2．灰色（7.5Y6/1）粘土（炭・焼土粒少含）
3．緑灰色（10G5/1）粘土（炭・焼土粒少含）

第134図　溝41



1．黄灰色（2.5Y6/1）粘質土（水田耕土，炭・焼土粒含）
2．灰黄褐色（10YR5/2）微砂質土（炭・焼土粒含）
3．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂（炭・焼土粒含）
4．緑灰色（10G5/1）粘土（炭・焼土粒含）
5．灰黄褐色（10YR6/2）粘質微砂（炭・焼土粒含）

第135図　溝43

溝42

20・21A区で検出した溝である。溝は微高地に沿って掘削されており、ほぼ南東から北西方向に流走する。規模は幅27cm、深さ5cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質微砂である。

時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝43（第135図）

20・21A区で検出した溝である。溝は微高地の下端に沿って掘削されており、ほぼ南東から北西方向に流走する。規模は幅70cm、深さ16cmを測る。埋土中には炭や焼土を含む。

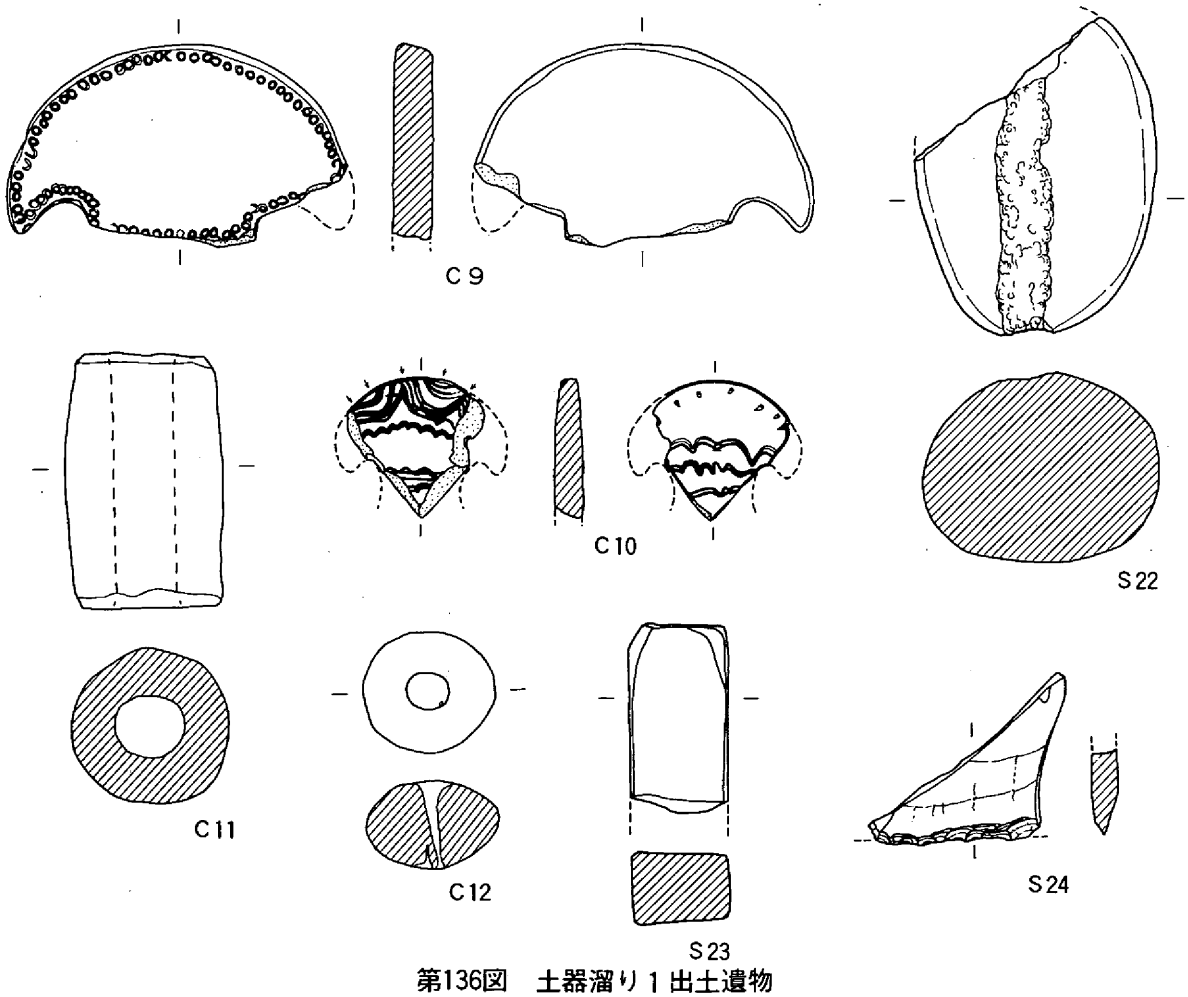
時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

(9) 土 器 溜 り

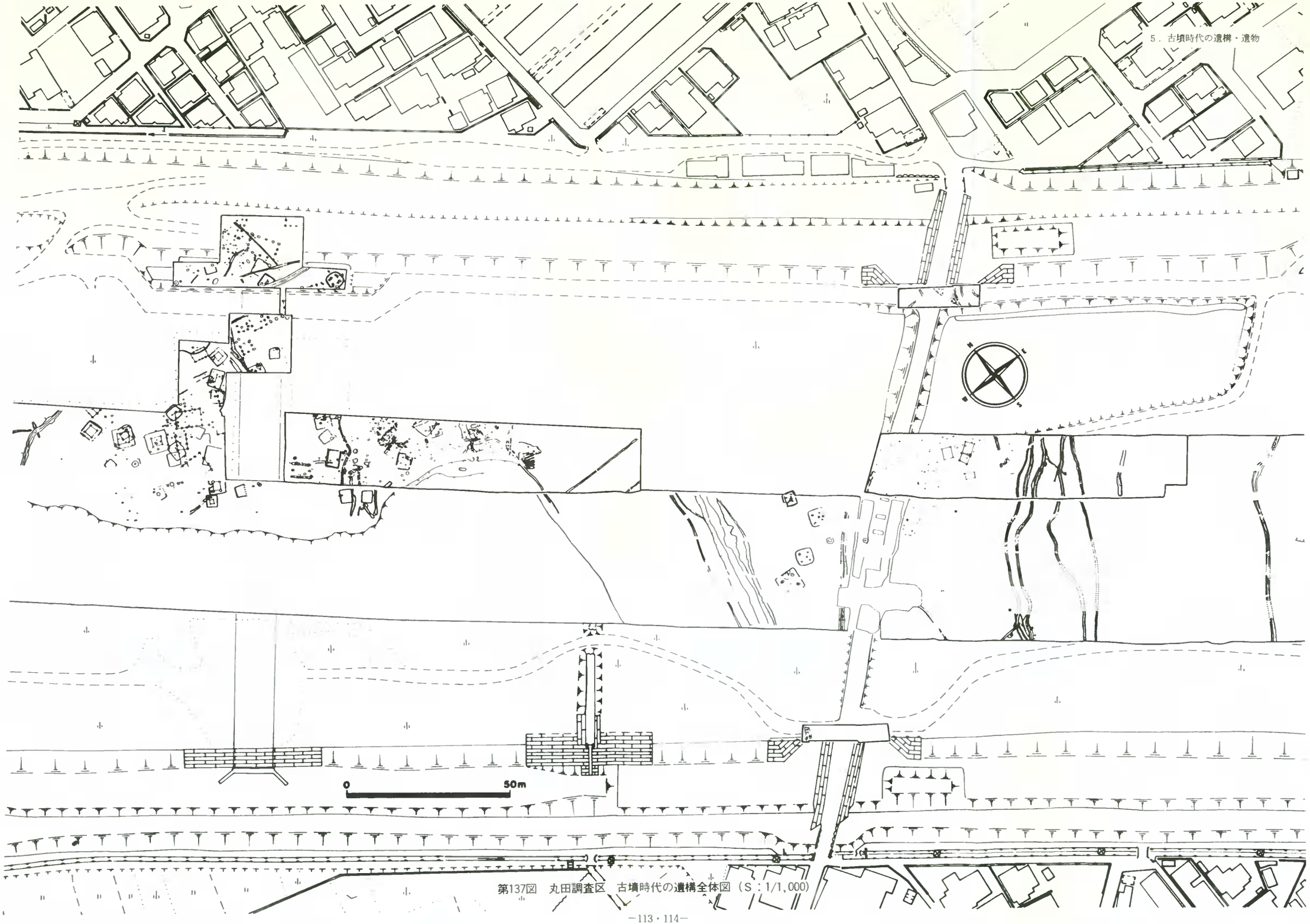
土器溜り１（第136図、図版21・69・72）

10・11Ｃ・Ｄ区で検出された土器溜りである。耕作土を除去すると古墳時代の層になるが、この段階ですでに大量の土器が覗いており、うず高く土器が積まれていることをうかがわせた。後期の遺構検出面まで掘り下げた段階で、北西から南東方向に10m、北東から南西方向に15mの範囲に土器が広がることが明確になった。なお土器溜りの下はとくに掘り込まれている状況は認められなかった。

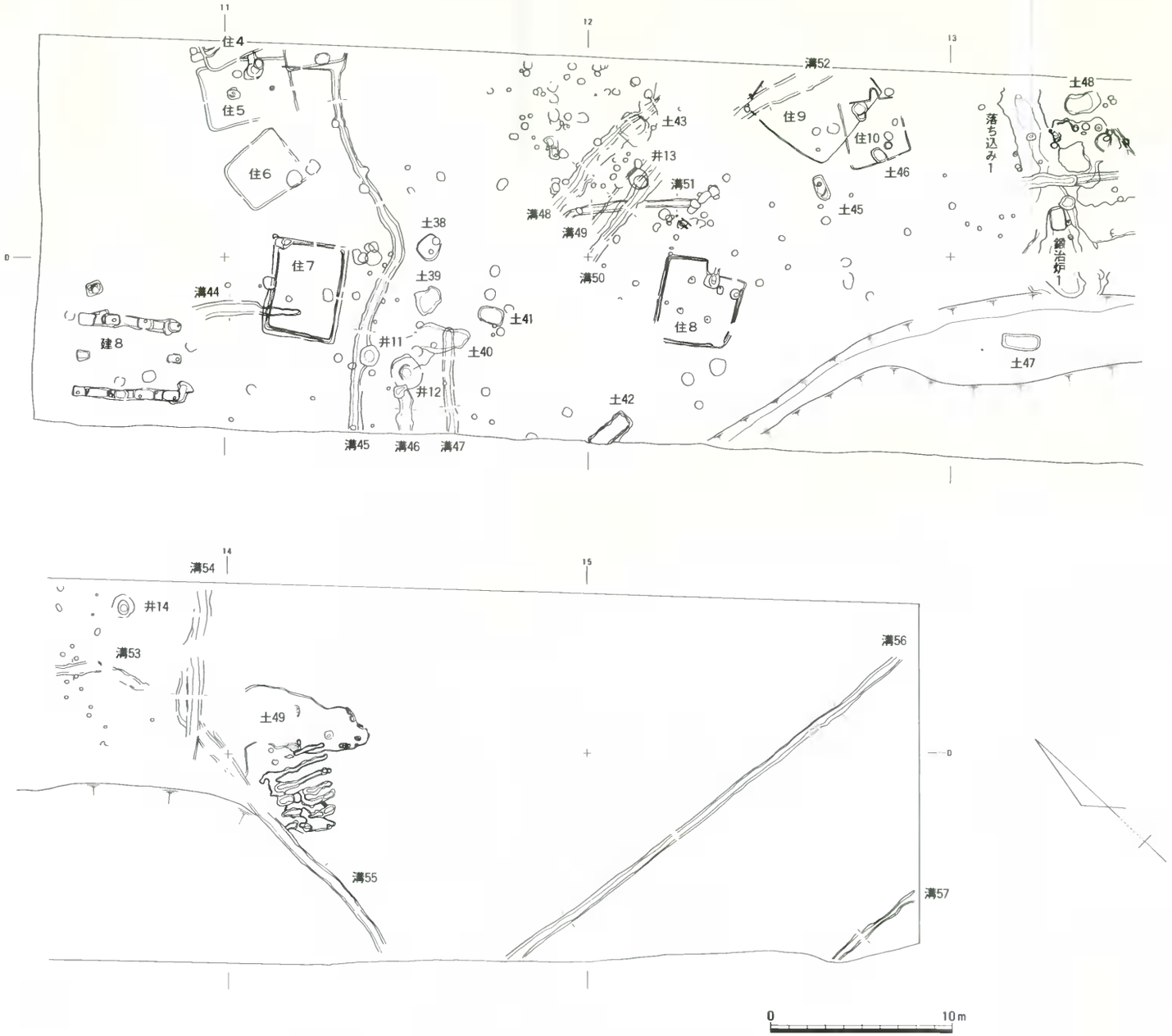
土器溜りの土器は百・後・Ⅱの土器を中心に、後期全般にわたっていた。これらの土器は二次的に火を受けて赤褐色になったもの、あるいは被熱による剝離が認められた。また高温で焼けて形が変形しているものなど、熱（火）による影響を受けているものが目立った。この土器溜りの場所は周辺に比べて著しく遺構が少なく、百・後・Ⅱ以後はもっぱら土器廃棄場所として利用されたのであろう。この土器廃棄場が後世になっても高まりとなって地表に現われていたことは、古墳時代や中世の遺構が集中するこの地区にあって、全く遺構が認められないということから推定されよう。　（平井）



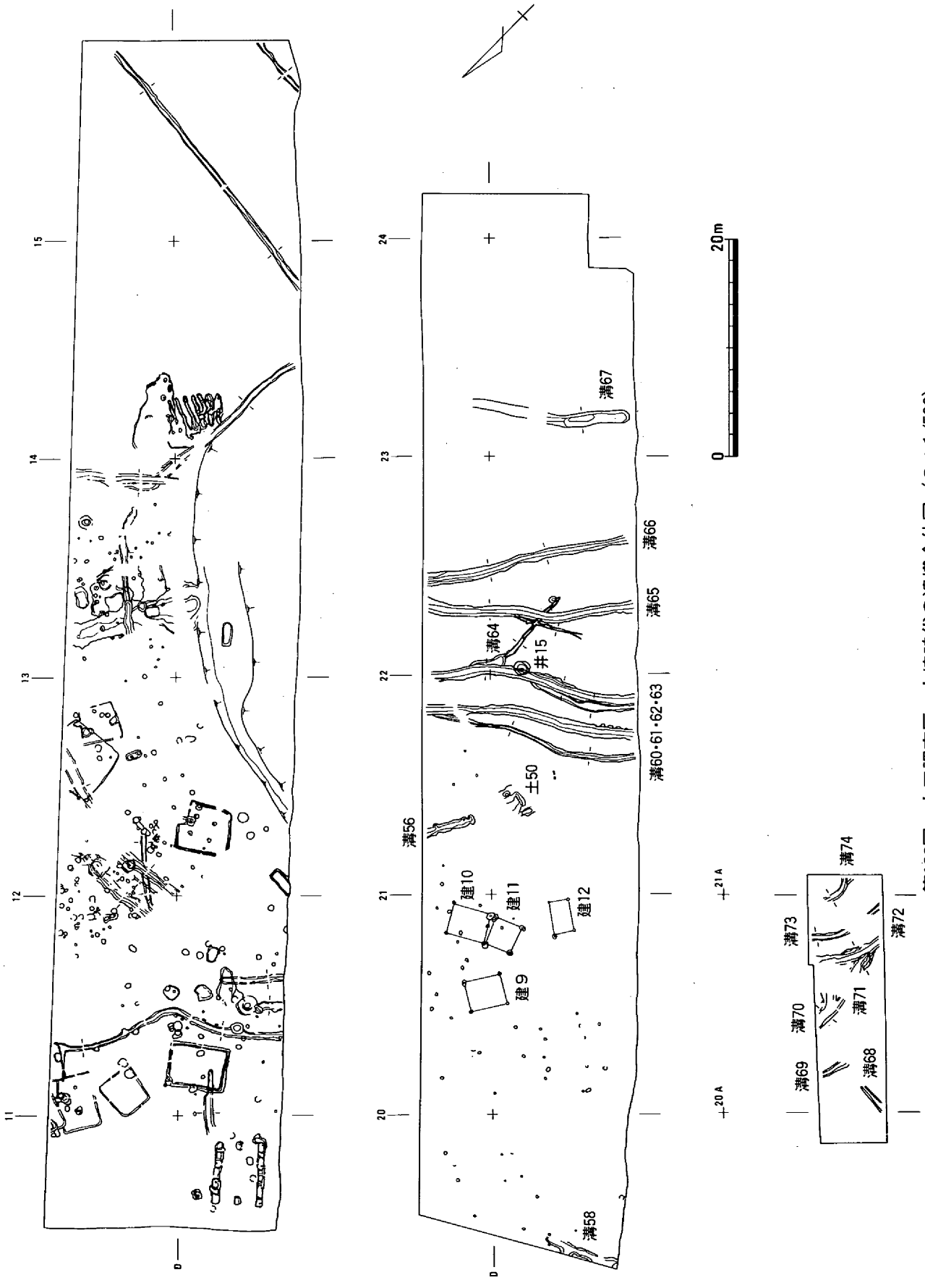
第136図　土器溜り１出土遺物



第137図　丸田調査区　古墳時代の遺構全体図（S：1/1,000）



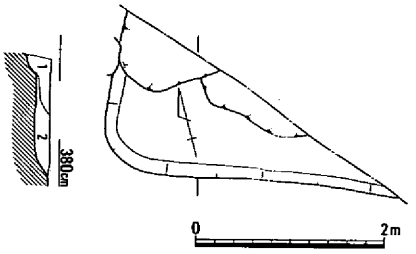
第138図　丸田調査区〈10～15C・D〉　古墳時代の遺構全体図（S：1/250）



第139図　丸田調査区　古墳時代の遺構全体図（S：1/500）

５．古墳時代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居



１．攪乱土　２．にぶい黄色（2.5Y6/4）微砂（炭・焼土含む）

第140図　竪穴住居４

竪穴住居４（第140図、図版21）

11D杭の北10.5mに位置する遺構である。その過半を調査区外にもつものと考えられ、検出規模は東西長3.2m、南北長1.7m、深さ16cmを測るに過ぎない。また遺構の北部は後世の攪乱を受けている。底面がほぼ平坦であることと、周囲に竪穴住居を検出していることから、本遺構も竪穴住居の一部であると考えられる。

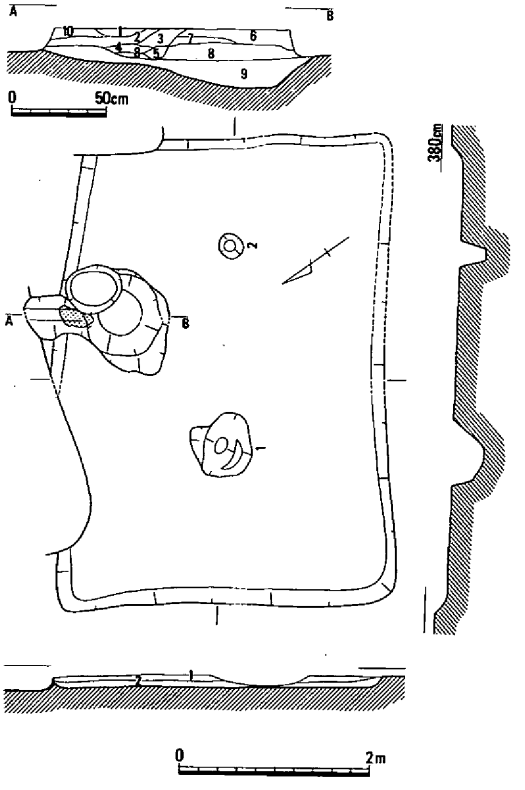
出土遺物には少量の土器片があるが、住居の時期を決する資料はない。ここでは、その埋土と検出面から古墳時代と考えておく。　（高田）

竪穴住居５（第141図、図版21）

10・11C区で検出し、11D杭の北７mに位置する竪穴住居である。平面形は長方形を呈し、先述の竪穴住居４に東北辺の一部を切られている。規模は北西－南東間で494cm、北東－南西間で350cmを測る。床面はやや凹凸があり、検出面からの深さは14cmである。柱穴は２本で、それぞれの形態と規模が若干異なる。柱穴１は不定形なもので、60×70cm、床面からの深さ33cm、柱穴２は円形を呈し、径25cm、深さ28cmを測る。埋土はいずれもにぶい黄色微砂で、柱穴間の距離は212cmである。東北辺の中央やや東よりにはカマドがつくられている。カマドの上部構造は残存せず、燃焼部の下部と住居外に延びる煙道の一部を確認した。燃焼部の下部は85×110cmの範囲に凹み、床面からの深さは28cmである。この凹みと煙道の境には31×44cmの範囲に被焼面が広がり、煙道の壁は部分的に焼けて固くなっている。

出土遺物は少量の土器片のみで、住居の時期を決する資料はない。ここでは、埋土と検出面、カマドの存在から百・古・Ⅲ以降と考えておきたい。　（高田）

１．灰オリーブ色（5Y6/2）微砂（炭・焼土含む）
２．黄灰色（2.5Y6/1）微砂（炭・焼土多く含む）
３．灰オリーブ色（5Y6/2）微砂（炭・焼土含む）
４．焼土
５．にぶい黄色（2.5Y6/3）微砂（炭・焼土含む）
６．にぶい黄色（2.5Y6/3）微砂（炭・焼土含む）
７．黄灰色（2.5Y6/1）微砂（炭・焼土多く含む）
８．浅黄色（5Y7/4）微砂（炭・焼土含む）
９．灰オリーブ色（5Y5/2）微砂（炭・焼土含む）
10．浅黄色（7.5Y7/3）微砂（炭・焼土含む）

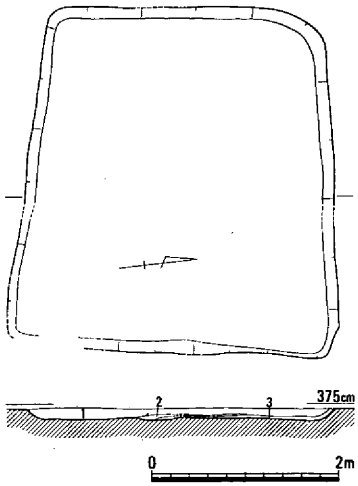


１．灰黄色（2.5Y6/2）粘質微砂
２．にぶい黄色（2.5Y5/3）微砂（炭・焼土含む）

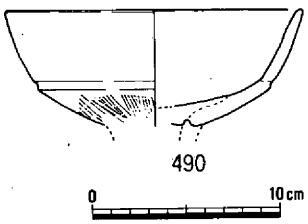
第141図　竪穴住居５

竪穴住居６（第142図、図版21）

11C区の東隅で検出した竪穴住居で、竪穴住居５と７の間に位置するが、その軸線はいずれとも異なる。平面形はやや隅丸の台形を呈し、その規模は西辺３



1．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂
2．炭（焼土粒含む）
3．灰黄褐色（10YR6/2）粘質微砂（炭・焼土粒少し含む）



第142図　竪穴住居６・出土遺物

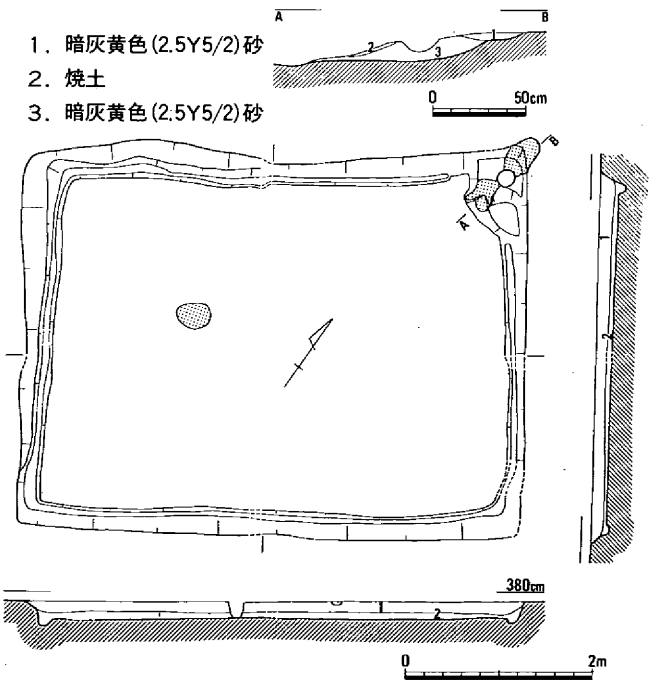
m、東辺3.5m、東西3.7mを測る。床面はやや凹凸があり、壁は急斜に立ち上がる。検出面からの深さは10～15cmである。埋土は上下２層で、住居中央の上層下面には、２～４cmの厚さに炭層が堆積する。なお、床面を精査したが柱穴や壁体溝等の施設は確認していない。

出土遺物には少量の土器片がある。住居の時期は、埋土と検出面等から百・古・Ⅲ前後と考えられる。　（高田）

竪穴住居７（第143・144図、図版22）

11C・D区に位置し、11D杭の西2.5mで検出した竪穴住居で、溝44を切っている。また、その東側には溝45が、南1.5mには井戸11がある。平面形は長方形を呈し、規模は北西－南東４m、南西－北東5.3m、検出面から床面までの深さ20cm前後を測る。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がった後、その上部で外方に広がる。壁体溝は壁に接してめぐるもので、床面からの深さ５cmを測るが、北隅に一部途切れる箇所があり、カマドが設けられている。カマド本体は残存せず、その下部と煙道の一部を検出するのみだが、いずれも被熱して変色している。床面に柱穴はなく、中央やや東よりに25×35cmの範囲の被熱面を確認している。埋土は上下２層で、下層と壁体溝の堆積は同一である。

出土遺物は土師器の甑（491）と甕（492）、須恵器の杯（493）、土錘（C13）がある。住居の時期は、その埋土と検出面、遺物の特徴等から５世紀の終わり頃と考えられる。　（高田）



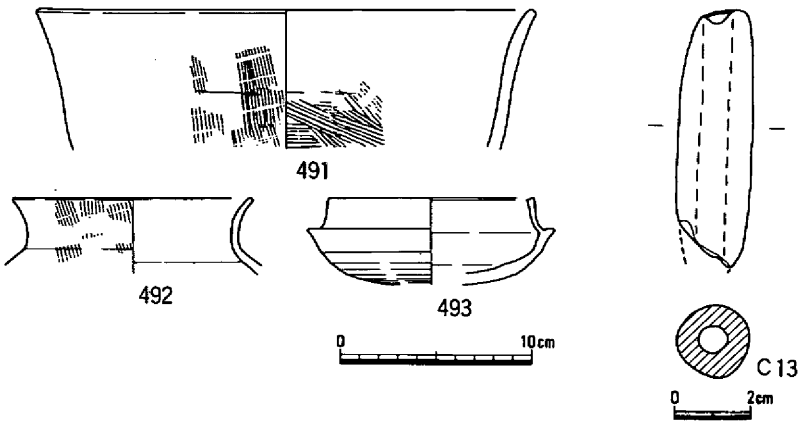
1．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂
2．焼土
3．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂

1．暗灰黄色（2.5Y5/2）砂　2．暗灰黄色（2.5Y5/2）微砂にオリーブ褐色土混る

第143図　竪穴住居７

竪穴住居８（第145図、図版22）

12C区で検出された竪穴住居である。平面形は方形を呈するが、東辺の中央より北西側が外側へ80cm程度拡張されているため、変則的な方形である。規模は北東から南西間で５m、南東から北西間で4.2m、深さ７cmあまりを測る。住居内には壁に接して溝がめぐるが、東辺の南東側や南側の隅には認められなかった。柱穴は４本で、このうち２と４には柱痕跡が認められた。柱間隔は１と２、３と４の間が1.6m前後、１と３、２と４の間が1.8m前後である。東辺の中央にはカマドがつくられている。カマド本体の部分は残存していなかったが、楕円形に



第144図　竪穴住居7 出土遺物

凹んだ燃焼部の底部が認められた。この凹みに堆積した土のうち4層には焼土や灰を含むが、底部に接する5・6層には全く含まれていなかった。また、ほぼ中央には細長い礫を立てて置いており、支脚として使用されたものと考えられる。煙道は先端部が他の遺構で切られているが、残存部分の壁面はわずかに焼けていた。

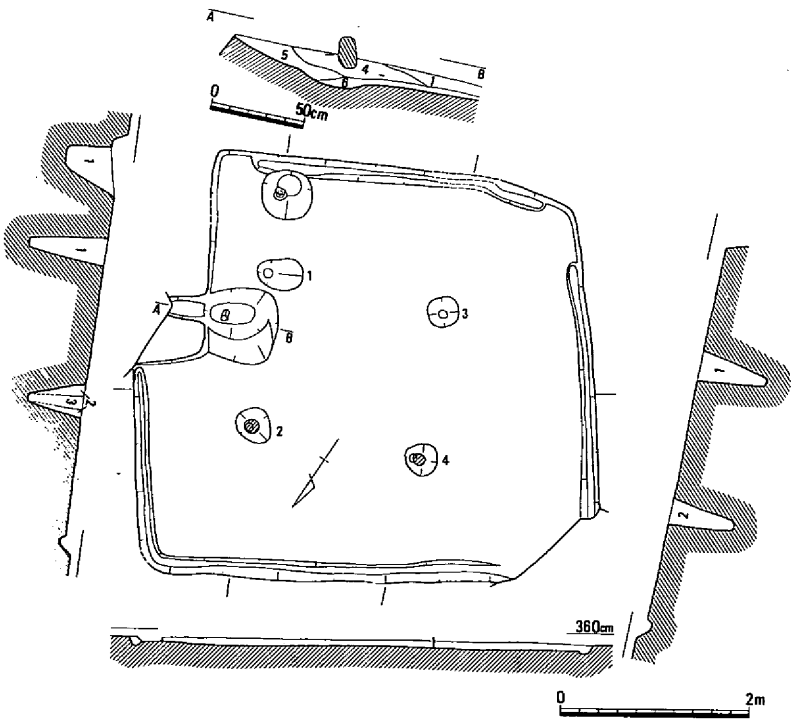
住居内には遺物があまりなく、また細片であるため詳細な時期については明確にし得ない。ただこの地域でカマドが出現するのは百・古・Ⅲ以後であり、本住居の時期もそれに従っておく。（平井）

竪穴住居9（第146図、図版23・68）

12C区で検出された竪穴住居で、竪穴住居10と一部重なる。また住居の北東側は調査区外となる。平面形は方形を呈する。規模は南北間が5.5m、東西間は5.6mを測る。検出面から床面までの深さは20cmあまりで、壁は急傾斜で立上る。南辺の中央からやや東寄りには壁に接して方形の土壙が掘られている。柱穴は床面を精査したが、検出することができなかった。

遺物は銅剣が床面から出土した以外には、鉄製品および土器の細片がわずかに出土した。鉄製品は包丁状を呈し、身部と考えられる部分は明瞭ではないが、刃部らしく仕上げられている。銅剣は鉄剣形銅剣と分類されるもので、短い茎に1孔、基端部に2孔の円孔が穿たれている。先端を少し欠くが残存長20.7cm、幅3.1cmを測る。

時期は明瞭にし得ないが、竪穴住居10の下で検出されたことから古墳時代の初頭頃と推定される。（平井）

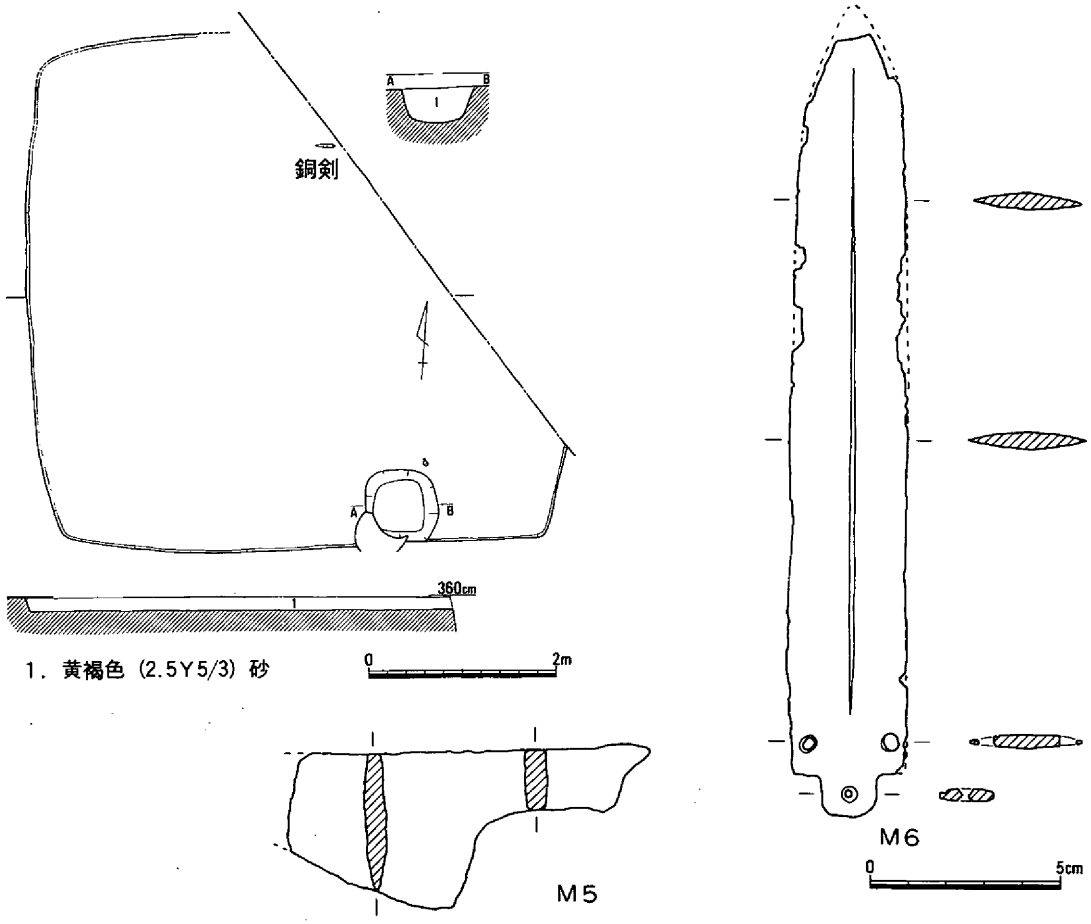


1．暗灰黄色（2.5Y5/2）砂（黄色土含む）　2．灰黄色（2.5Y6/2）砂質土
3．黄褐色（2.5Y5/3）砂　4．黄褐色（2.5Y6/4）砂（焼土・炭多く含む）
5．にぶい黄褐色（10YR5/3）砂　6．にぶい黄色（2.5Y6/4）砂

第145図　竪穴住居8

竪穴住居10（第147図、図版23・64）

12C区で検出された住居で、竪穴住居9の上に重なる。残存状況が悪く、検出面から底面までの深さはほとん



第146図　竪穴住居９・出土遺物

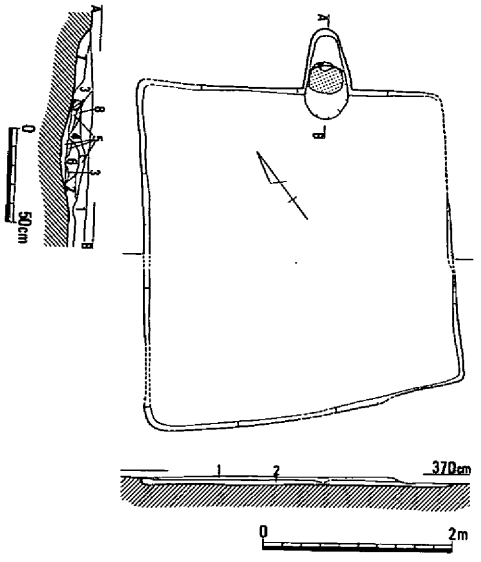
どない。住居の平面形は方形を呈するが、北西辺に比べて南東辺が短く、少し台形をなしている。規模はいちばん長い北西辺が3.7m、北東辺3.2m、南東辺３m、南西辺3.3mを測る。住居内は精査したが、柱穴などは検出されなかった。北東辺の中央からやや東寄りにはカマドが認められた。カマドは焚口から燃焼部にかけてわずかに凹ませている。燃焼部の底部は良く焼けており、この奥側、凹みの立上った場所には礫が置かれており、支脚と考えられる。この支脚から奥側はあまり焼けておらず、煙道部は住居の端から外へ60cm張り出したところで緩やかに立上って終る。このカマドの構造を見るかぎり、カマドに土器を置く位置は住居外になり、住居の壁ないし屋根はかなり外側に出さなければならないであろう。

遺物はすべて土師器である。479と498の甕は口縁端部をわずかに拡張し、その上端面は平坦に仕上げている。497は口縁部外面に円形の刺突が１個施されている。499は甑で、把手が一対つく。胴部下端近くには穴が一対穿たれている。土器の時期は百・古・Ⅲと考えられる。　（平井）

(2) 建　　物

建物８（第148図、図版24）

10Ｃ区で検出された布掘りの３間×２間の建物である。主軸を南東から北西方向にとる建物で、規模は桁行5.25m、梁行４mを測るが、各柱間隔は不規則で、およそ1.6～２m間にある。柱掘方は桁行の列が溝状に掘られた中にさらに一段長方形に掘り下げているのに対し、梁行の列は単独で長方形に



1．灰黄色（2.5Y6/2）砂質土　2．にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土　3．にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土　4．灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（焼土含む）　5．焼土　6．黄灰色（2.5Y6/1）砂質土（焼土と炭含む）　7．にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土（焼土含む）　8．黄灰色（2.5Y5/1）砂質土（炭含む）

掘り下げている。柱掘方の底には柱の痕跡を残すものが多く、それから柱の太さを推定すると径約20cmと考えられる。

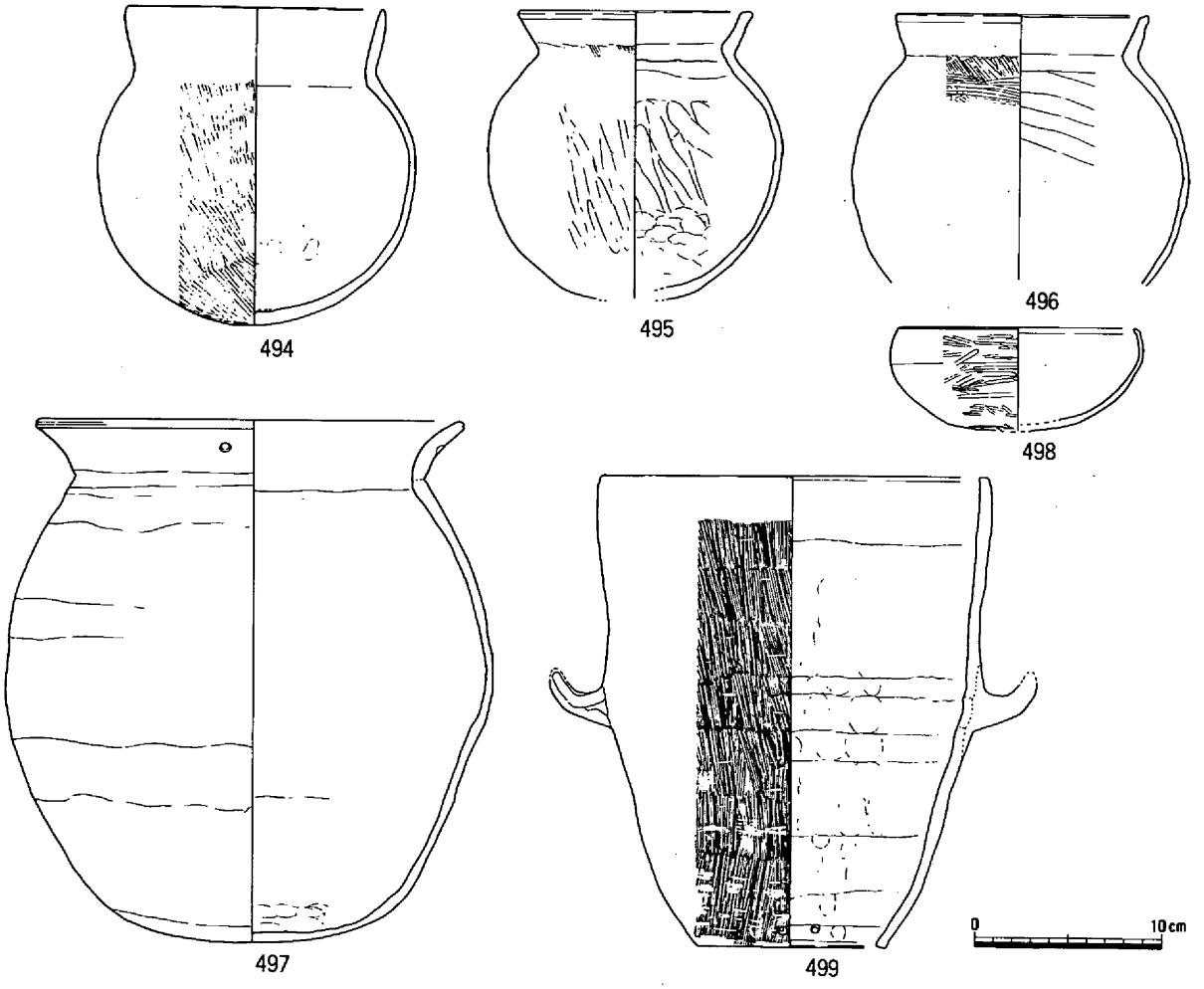
柱掘方内からはわずかに須恵器が出土した。須恵器は杯の口縁部破片で、天井部と口縁部の境には明瞭な段がめぐり、口縁端部は内傾する面をもつ。

時期は5世紀末から6世紀初頭を前後するものと考えられる。（平井）

建物9（第149図、図版24）

20C・D区にまたがって検出した1間×1間の建物である。その長軸は東北－南西方向にとり、規模は南北346cm、東西278cmを測る。柱穴の掘り方は楕円形で、長径35cm前後、深さ20cm前後である。また柱穴3の底面には、柱の沈みによる凹みが認められた。埋土はいずれも黄灰色粘質細砂である。

柱穴内からの出土遺物は少量の土器片のみで、弥生



第147図　竪穴住居10・出土遺物

土器片とともに土師器片がある。建物の時期は、検出面と柱穴の埋土等から、古墳時代と考えられる。（高田）

建物10（第150図、図版24）

20C区の南隅で検出した1間×1間の建物である。長軸線を東西よりやや北にとり、その規模は南北282cm、北辺380cm、南辺402cmを測る。柱穴の掘り方は円形と楕円形で、径20～45cm、深さ5～15cmを測る。埋土は他の建物と同様、黄灰色粘質細砂である。建物10の柱穴3は、後述の建物11の柱穴2と切り合い関係にあり、建物10の柱穴が新しいことを確認している。

柱穴内からの出土遺物は少量の土器片のみで、時期の判る資料はない。建物の時期は、検出面と柱穴の埋土等から、古墳時代と考えられる。（高田）

建物11（第151図、図版24）

建物10の南で検出した建物で、建物10とはその一部が重なっている。長軸線は東西にとり、その規模は南北260cm、北辺250cm、南辺274cmを測る。柱穴の掘り方は円形と楕円形で、径30～65cm、深さ16～53cmを測り、柱穴2がやや深い。埋土は他の建物と同様、黄灰色粘質細砂である。

1間×1間の柱穴の並びをもつことと、その上部を後世の削平で欠いていると考えられることから、竪穴住居の主柱穴の可能性もあるが、周辺に古墳時代の竪穴住居が存在しないことから、ここでは建物としておきたい。

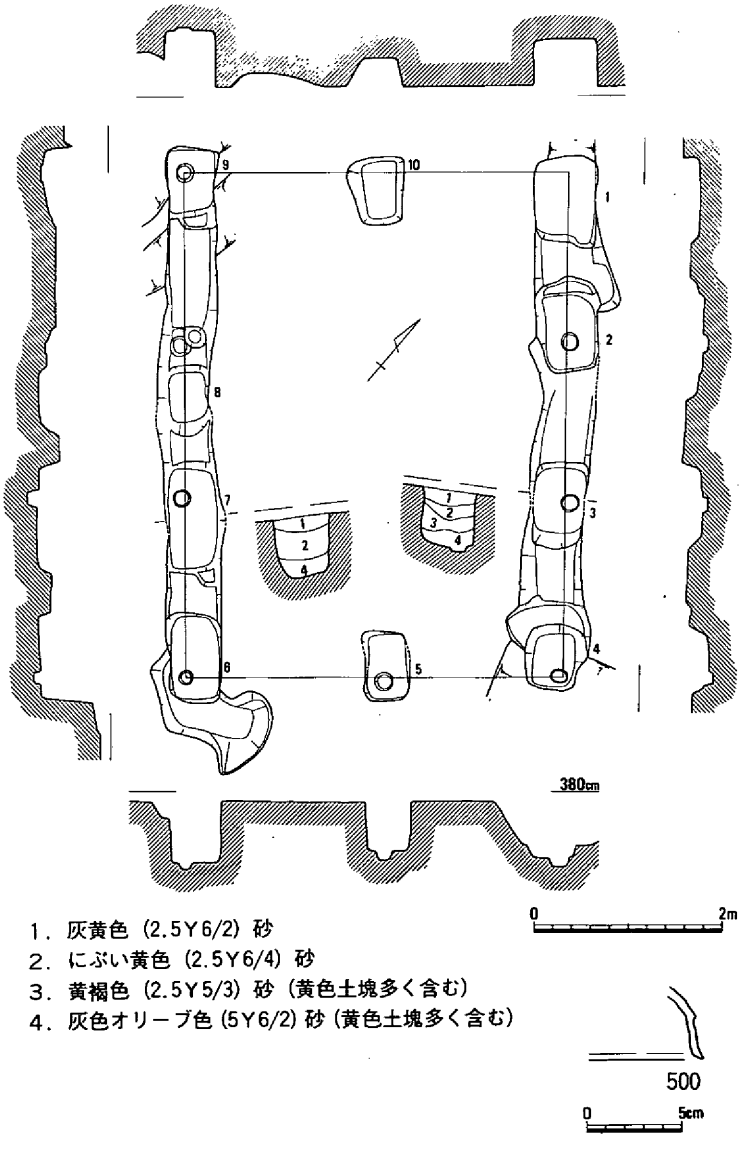
柱穴内からの出土遺物は少量の土器片のみで、時期の判る資料はない。建物の時期は、検出面と柱穴の埋土等から、古墳時代と考えられる。（高田）

建物12（第152図）

20D区の東部で検出した1間×1間の建物である。長軸線を東南－北西にとり、その規模は南北180cm、北辺300cm、南辺284cmを測る。柱穴の掘り方は円形と楕円形で、径20～35cm、深さ10cm前後を測る。埋土は他の建物と同様、黄灰色粘質細砂である。

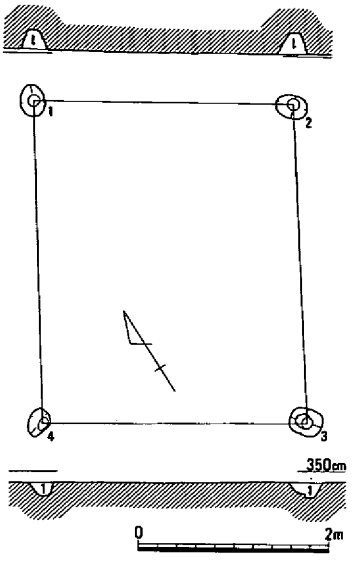
この建物は、建物10・11と軸線が異なり、建物9とは長軸線がほぼ90度振るものである。

柱穴内からの出土遺物は少量の



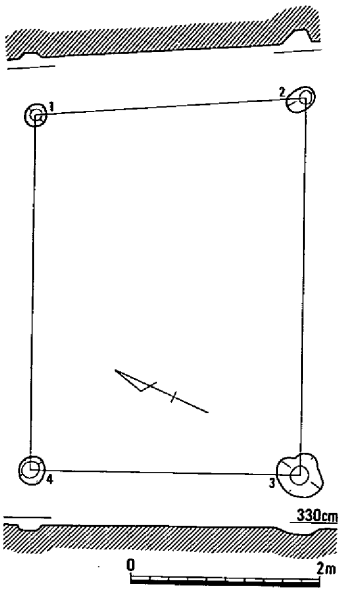
1．灰黄色（2.5Y6/2）砂
2．にぶい黄色（2.5Y6/4）砂
3．黄褐色（2.5Y5/3）砂（黄色土塊多く含む）
4．灰色オリーブ色（5Y6/2）砂（黄色土塊多く含む）

第148図　建物8・出土遺物

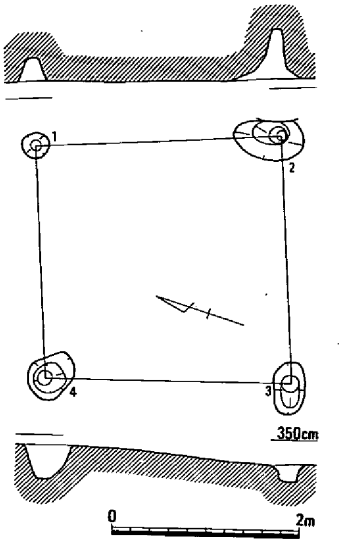


1．黄灰色粘質細砂

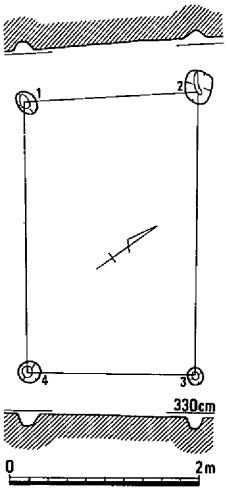
第149図　建物９



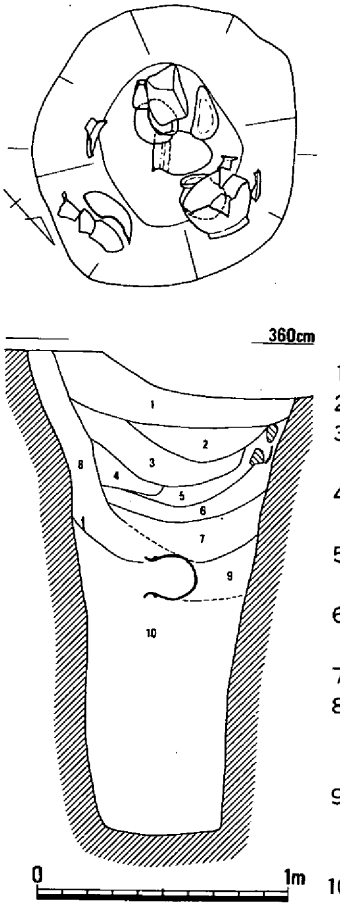
第150図　建物10



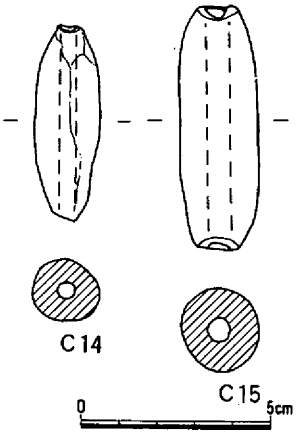
第151図　建物11



第152図　建物12



1．褐灰色(10YR5/1)砂
2．明黄褐色(2.5Y7/6)砂
3．にぶい黄橙(10YR6/4)粘質砂
4．にぶい黄褐色（10YR5/3)粘質砂(焼土含む)
5．にぶい黄褐色（10YR5/4)粘質土(炭含む)
6．灰黄褐色（10YR4/2)粘質土(炭含む)
7．黒褐色(10YR3/2)土
8．黄灰色(2.5Y5/1)粘質土（にぶい黄色土多く含む，炭・焼土含む)
9．暗緑灰色（10G3/1）粘質土（にぶい黄色土多く含む，炭・焼土含む)
10．灰色（N41）粘質土(炭含む)



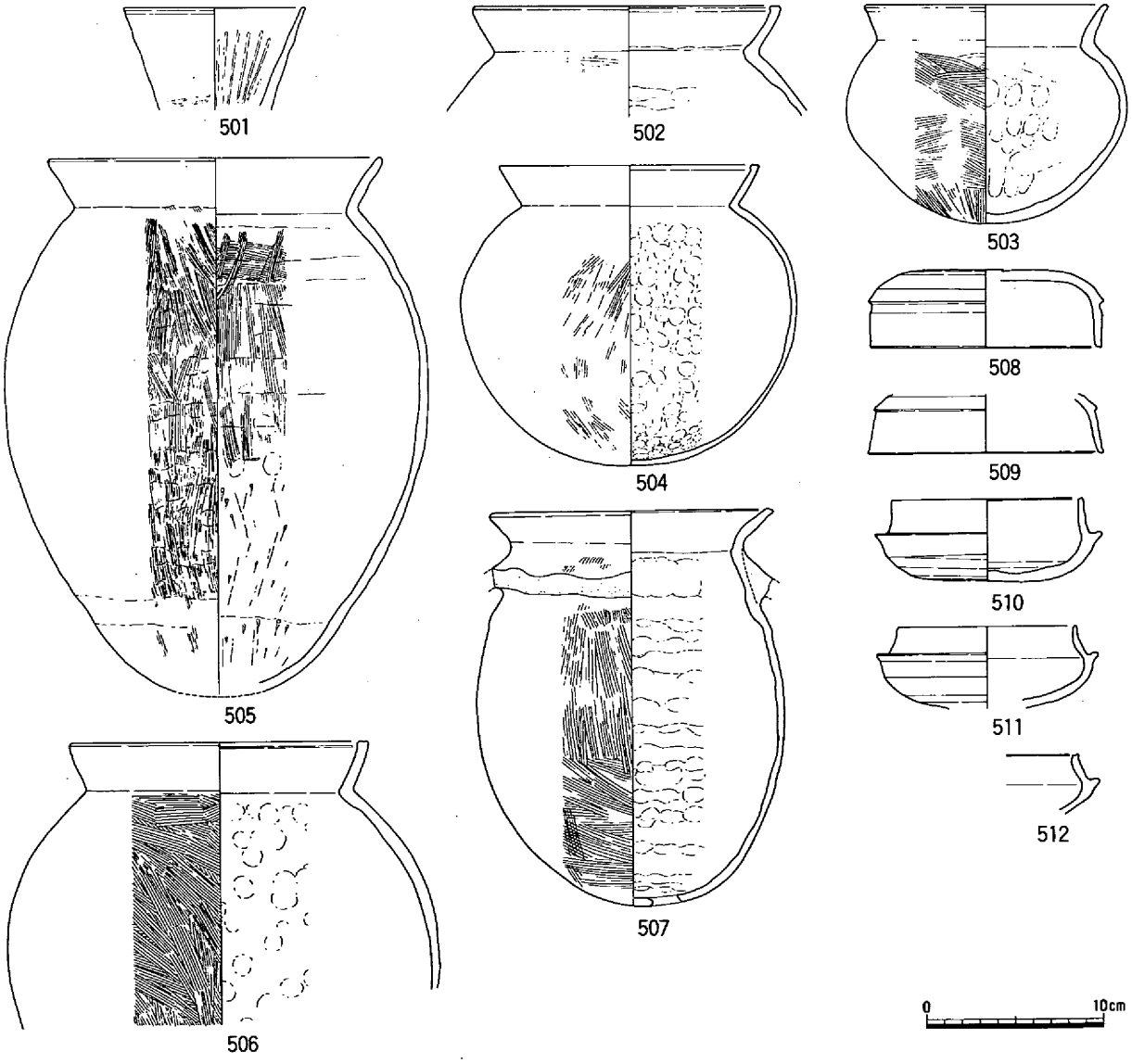
第153図　井戸11・出土遺物（１）

土器片のみで、弥生土器片とともに土師器片があるが、時期の判る資料はない。建物の時期は、検出面と柱穴の埋土等から、古墳時代と考えられる。（高田）

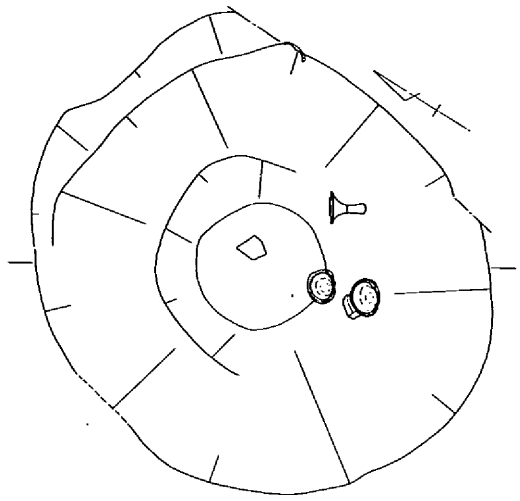
(3) 井　　戸

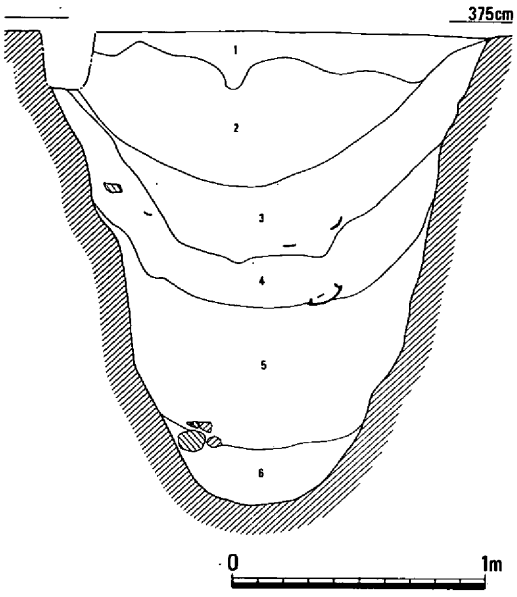
井戸11（第153・154図、図版24・25・65）

11D区で検出された井戸である。平面形はほぼ円形を呈する。規模は径1.04m、深さ1.96mを測る。井戸の底はほぼ平坦で、壁は垂直ぎみに立上るが、上部近くではやや傾斜が緩やかになる。埋土は大きく二層に分かれる。下層は灰色の粘質土が厚く堆積しており、炭を含むものの、遺物はほとんど認められない。これに対し、九層に分かれて堆積する上層には、焼土や炭を多く含むとともに、土器も多く出土した。土器は土師器と須恵器が認められる。土師器は壺（501）と甕（502～506）と羽釜（507）がある。甕は口縁部がくの字状に外反するもの（503・505）と、くの字状に外反するが内湾ぎみに立上り、端部をわずかに拡張するもの（502・504・506）とがある。須恵器は杯と蓋である。いずれも口縁端部に面をもつが、511は丸く収めている。



第154図　井戸11出土遺物（2）





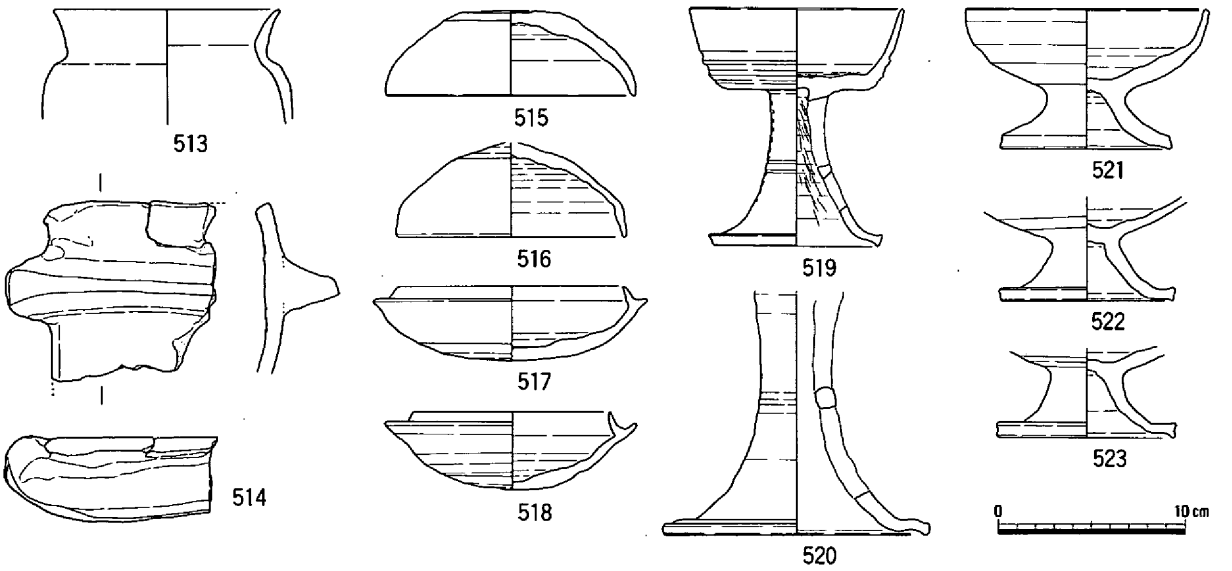
1．灰黄色（2.5Y6/2）粘質微砂
2．褐灰色（10YR5/1）粘質微砂
3．炭
4．オリーブ褐色(2.5Y 4/3) 粘質土
5．暗灰黄色(2.5Y 4/2) 粘質土（明黄褐色土多く含む）
6．黄褐色（2.5Y5/4）粘土

時期は5世紀の終わり頃と考えられる。　　（平井）

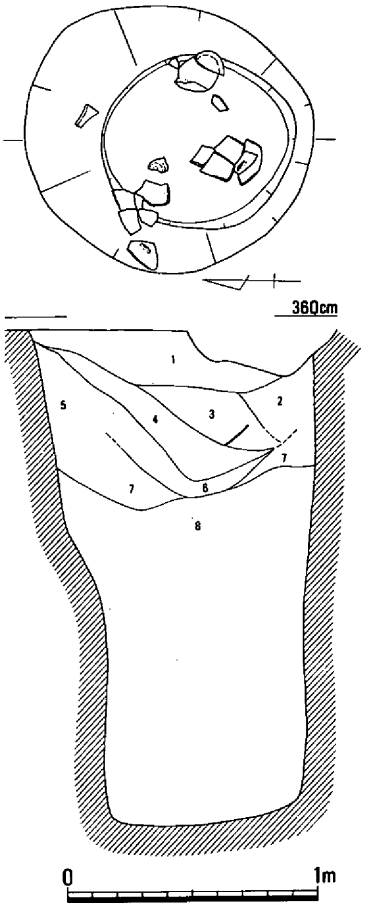
井戸12（第155図、図版25・65）

11D区で検出された井戸で、東側は他の遺構に切られている。平面形はほぼ円形を呈する。底部は上面に比べてずいぶん小さく丸みをもつ。壁はやや緩やかに立上るが、途中で段を形成する。規模は径1.8m、深さ1.9mを測る。埋土は大きく二つの層に分けられる。下層は5・6層で、礫を少し含むものの、遺物はほとんど認められない。これに対し、1～4層からなる上層は、砂質で遺物を含む。また3層は炭の大量廃棄によって形成されたものである。

出土遺物は土師器と須恵器がある。514は鰭状のものが貼り付けられており、カマドの破片と考えられる。須恵器には杯、蓋、高杯がある。519と520の高



第155図　井戸12・出土遺物

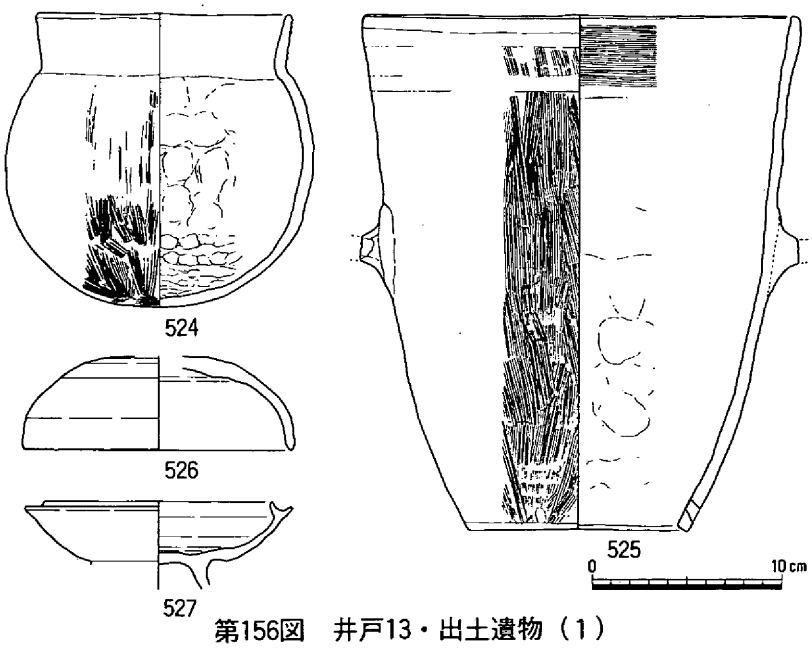


杯は脚に長方形の透かしが上下２段認められる。時期は６世紀の終わり頃と考えられる。（平井）

井戸13（第156・157図、図版26・71）

12Ｃ区で検出された井戸である。平面形はやや楕円形を呈する。底部は平坦で、南側の壁はほぼ垂直に立上るが、北側の壁は中位で少し段が形成され、ここから上はやや外に開きぎみに立上る。規模は長軸で1.15m、深さ1.98mを測る。埋土は大きく二層に分かれる。下層は８層のみで、炭や焼土を含んでいる。上層は１～７層からなり、炭や焼土を多く含む。なお遺物は上層に含まれる。

出土遺物は土師器と須恵器および石器である。土師器は球形の胴部にわずかに外反しながら立上る口縁部がつく甕（524）と、口縁部より胴下半部の径が少し狭まる筒状の甑（525）である。須恵器は杯（526）と高杯（527）である。



第156図　井戸13・出土遺物（１）

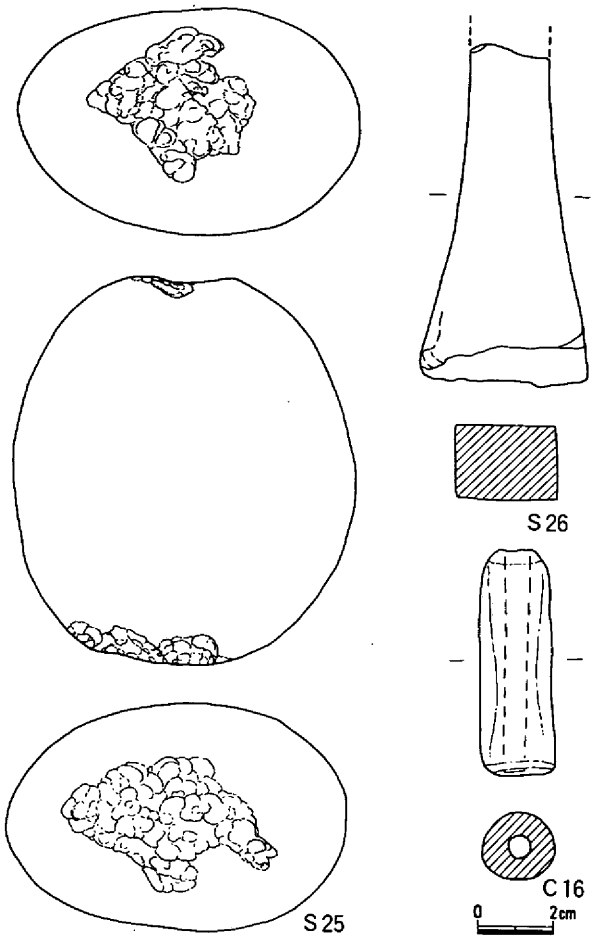
石器は楕円形の円礫の両端に敲打痕が残る敲石（Ｓ25）と砥石（Ｓ26）である。

時期は６世紀の後半である。（平井）

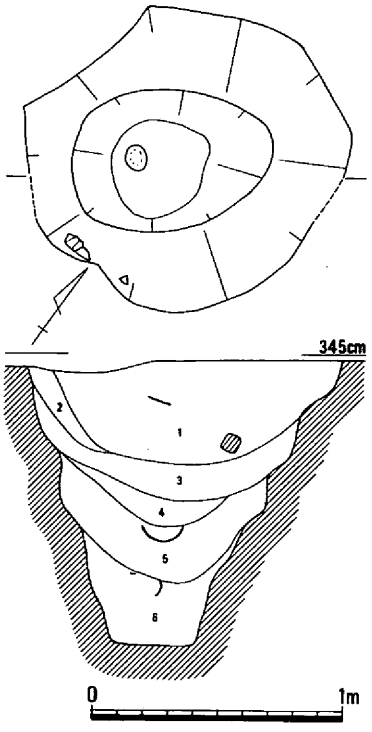
井戸14（第158図、図版26・65）

13Ｃ区の中央からやや南東よりで検出した井戸で、微高地の縁辺部に位置する。平面形は、不整円形を呈し、その規模は径125cm前後、検出面からの深さ111cmを測る。底面は径35cm前後のほぼ円形で、その標高は232cmである。壁の傾斜は急で、階段状になりながら平坦な底面に向って幅を狭めている。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器の土器片がある。このうち量的には土師器が多いが、いずれも前期に属するものである。須恵器は各層から出土しており、この特徴から井戸の時期を求める



第157図　井戸13出土遺物（２）



1．暗灰黄色(2.5Y4/2)土
2．暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)土
3．オリーブ褐色(2.5Y3/3)土
4．灰オリーブ(5Y5/3)粘質土
5．オリーブ褐色(2.5Y4/3)土
6．黄灰色(2.5Y4/1)粘土

と、６世紀末～７世紀初頭頃と考えられる。

（高田）

井戸15（第159図、図版27）

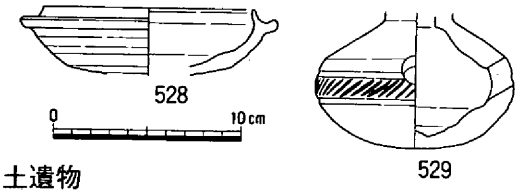
22D杭の南西2.5mに位置し、弥生後期末の洪水砂上面で検出した井戸である。一部を古墳後期の溝63で削られているが、その平面形は不整円形を呈する。規模は径140cm前後、検出面からの深さ130cmを測る。底面は長径35cmの楕円形で、標高は198cmである。断面は上部が逆「ハ」字形を呈し、下部はほぼ垂直に、平坦な底面まで落ち込んでいる。埋土は大別すると、上層（１・２層）、中層（３～８層）、下層（９～12層）となる。上層は井戸埋没後の上部の凹みに堆積したもので、１層は古墳後期の包含層、２層は同初頭の包含層の落ち込みと考えられる。中層はいずれも炭や焼土を多く含んだ堆積で、洪水砂と思われる淡黄色微砂斑がみられ、人為的な埋土と考えられる。また下層は徐々に堆積した状況を呈し、９層は暗灰色粘土と淡灰色砂の互層の埋土である。

出土遺物には少量の弥生土器と土師器片があるが、いずれも小片であり、時期の判る資料はない。よって、検出状況と埋土のあり方から井戸の時期を求めると、弥生後期末の洪水砂埋没後、おそらく古墳初頭に掘削され、短期間に廃絶したものと考えられる。　（高田）

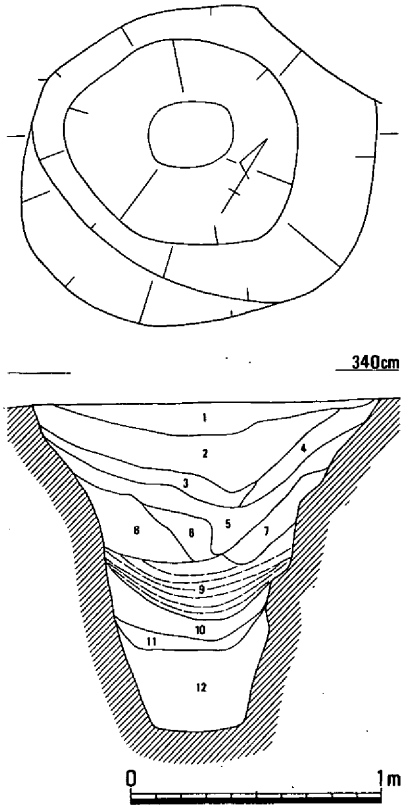
(4)　土　　壙

土壙38（第160図）

11C区で検出された土壙で、北側の一部は他の遺構に切られている。平面形は隅の丸い五角形状を呈している。規模は



第158図　井戸14・出土遺物



第159図　井戸15

最も幅広いところで1.4m、深さ5cmを測る。底部は平坦で、西寄りに浅い小ピットが穿たれている。埋土は灰黄色砂質土である。

時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）

土壙39（第161図）

11D区で検出された土壙である。平面形は不定形であるが、東西に長い。規模は長さ1.69m、幅1.41m、深さ8cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立上る。また底部に接して礫が認められた。

時期は遺物がないため明確でないが、検出面から後期と考えられる。

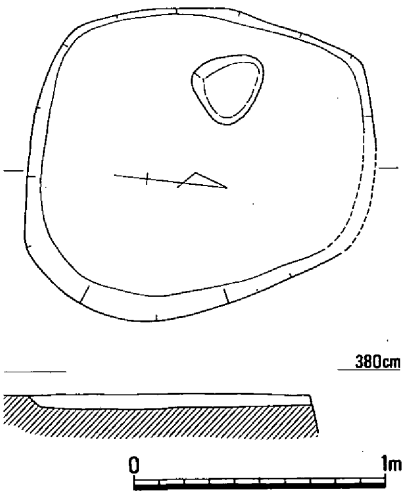
（平井）

土壙40（第162図）

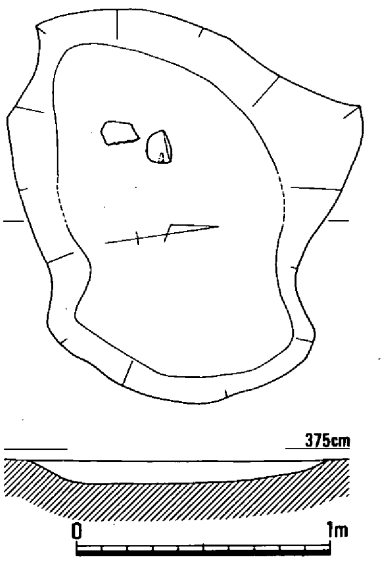
11D区で検出された土壙であるが、北西端の輪郭は明瞭でない。平面形は細長い不整形な形状をしている。底部は丸みをもち、壁は底部とほぼ同じ傾斜で、緩やかに立上る。規模は長さ3.6m、幅1.62m、深さ16cmを測る。埋土中には炭や焼土を多く含む。

遺物はわずかで、土師器が出土した。口縁部はくの字状に外反するが、やや内湾ぎみに立上る。

時期は出土した土器から、5世紀後半頃と考えられる。　（平井）



第160図　土壙38

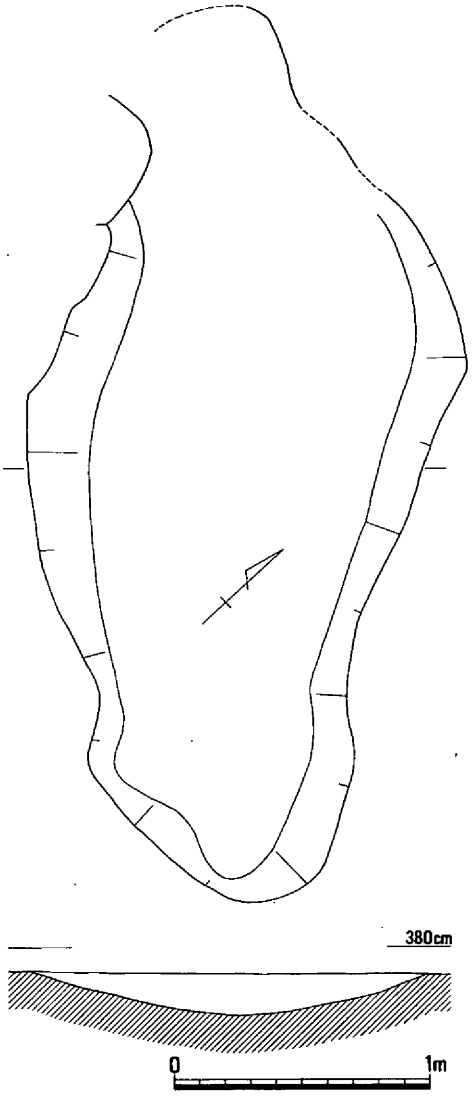


黄灰色（2.5Y5/1）砂質土

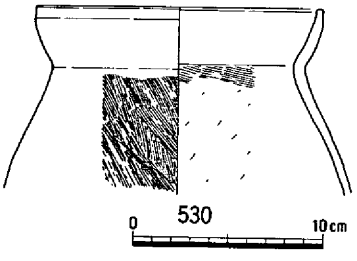
第161図　土壙39

土壙41（第163図）

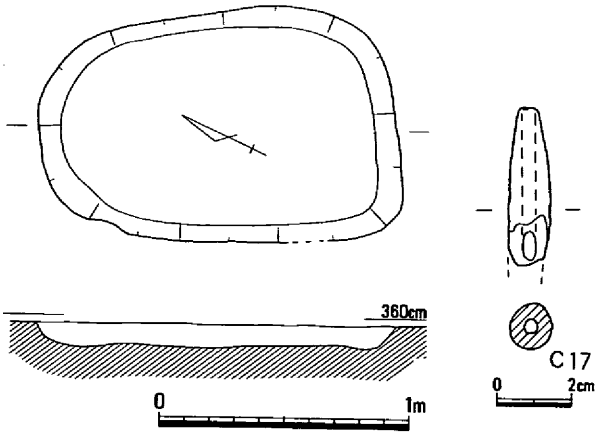
11D区で検出された土壙である。平面形は隅の丸い長方形を呈するが、南東側より北西側が狭くなっている。規模は長さ1.42m、幅94cm、深さ9cmを測る。埋土は灰黄色砂質土である。



褐灰色（10YR5/1）砂質土（炭・焼土多含）



第162図　土壙40・出土遺物



第163図　土壙41・出土遺物

遺物は土錘が1点出土した。

時期は埋土と検出面から古墳時代と考えられる。

（平井）

土壙42（第164図、図版27）

12D区で検出された土壙で、西端は調査区外となる。平面形は長方形を呈する。底部はほぼ平坦で、壁際には幅15cm、深さ10cm前後の溝をめぐらす。壁はほぼ垂直に立上るが、どちらかといえば、上端より底部側が広くなるようである。規模は現存長2.6m、幅1.1m、深さ75cmを測る。埋土は下層に弥生時代の基盤層となる黄色土を多く含む層（5層）が厚く堆積しており、その上に四層認められる。

時期は検出面および土器の細片から古墳時代後期と考えられる。（平井）

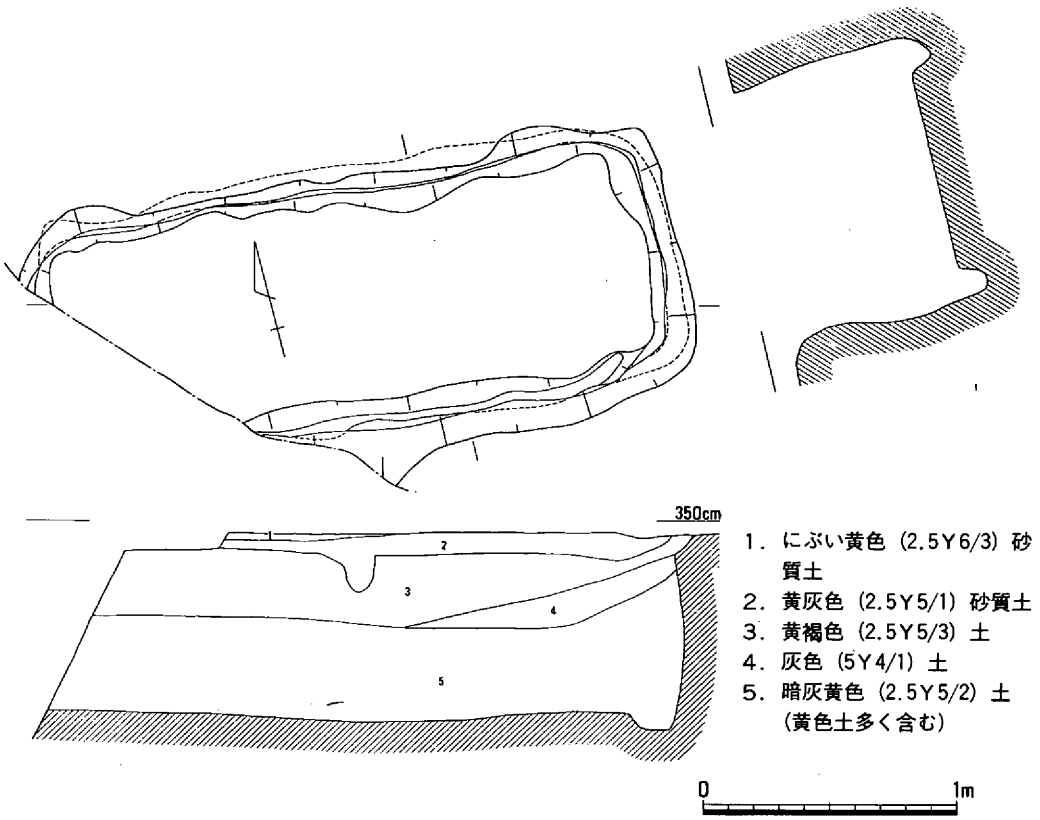
土壙43（第165図）

12C区で検出された土壙である。平面形は不定形であるが、東西方向に長い。規模は長さ2.6m、幅1.9m、深さ10cmを測る。底部は土壙の中心より西側よりがわずかに凹んで最も深くなり、壁は緩やかに立ち上る。埋土は灰オリーブ色微砂である。

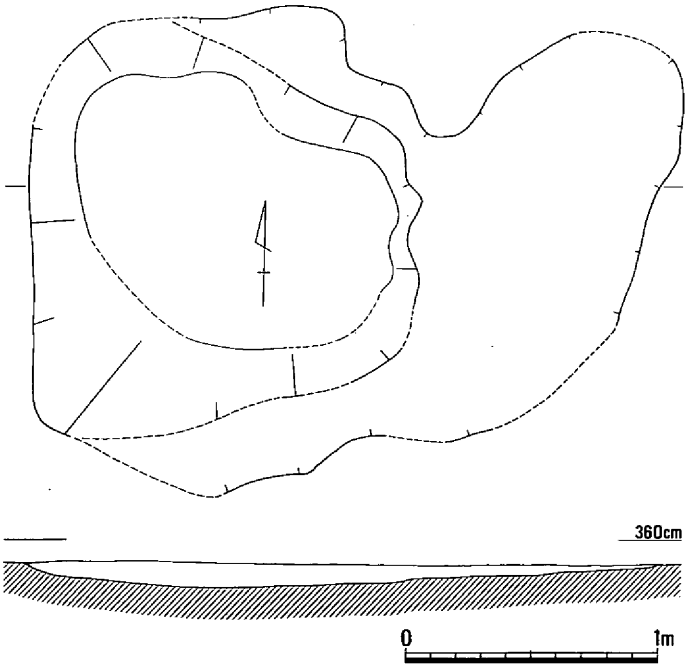
時期は検出面から古墳時代と考えられる。　（平井）

土壙44（第166図、図版28）

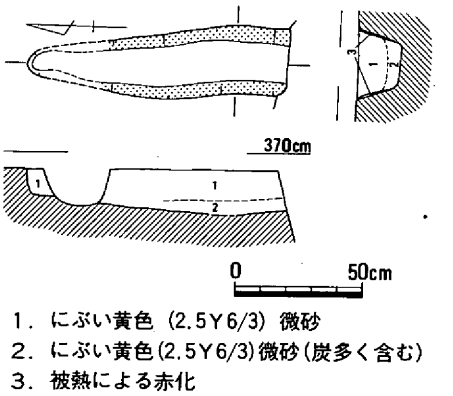
12C区で検出された土壙であるが、南端は他の遺構に切り取られ、また北端近くもピットにより切り取られている。全体の形状は明確でないが、細長い溝状を呈するものと考えられる。規模は現存長1.03m、幅27cm、深さ16cmを測る。土壙は底部が平坦で、壁は急傾斜で立上るが、長軸方向では底は南側が深くて、北側がやや浅くなる。壁は北端を除いてよく焼けており、底部には敷かれたか、あるいはこの場所で焼かれたものかは不明であるが、多量



第164図　土壙42



第165図　土壙43



第166図　土壙44

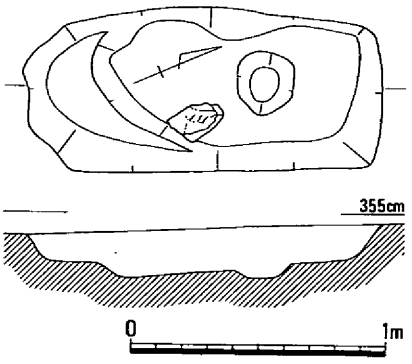
の炭が認められた。

時期は検出面ないし埋土から古墳時代と考えられる。　（平井）

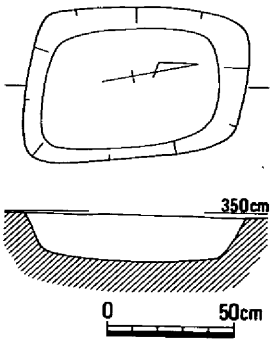
土壙45（第167図）

12Ⓒ区の竪穴住居９の南側で検出した土壙である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ137cm、幅65cm、深さ18cmを測る。底部は２段に掘り込まれ、南壁に接して一段高い面がある。最下部は南側が若干低くなり、その中央には径25cm、深さ６cmの円孔が穿たれている。また底面の直上からは長さ20cmの角礫が出土している。埋土は炭と焼土が多く含むにぶい黄色砂質土である。

出土遺物には少量の土器片があるが、時期の判る資料はない。土壙の時期は、検出面と埋土から古墳時代と考えられる。（高田）



第167図　土壙45

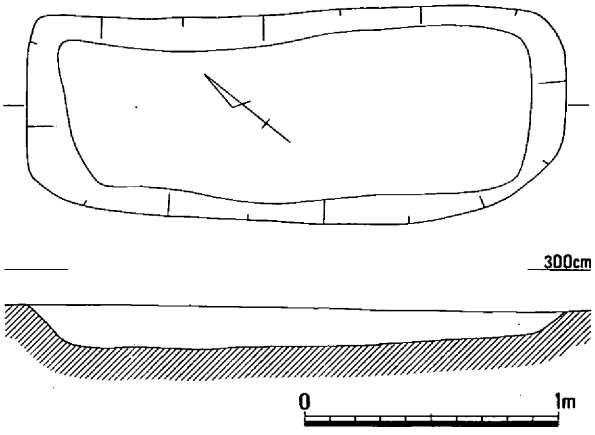


第168図　土壙46

土壙46（第168図）

12C区の竪穴住居10の下で検出した土壙である。平面形はやや歪な隅丸長方形を呈し、規模は長さ85cm、幅60cm、深さ19cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がり、埋土は黄褐色砂である。

出土遺物には少量の土器片があるが、時期を決する資料はない。土壙の時期は、検出状況と埋土から、古墳時代で竪穴住居10の百・古・Ⅲより古いものと考えられる。（高田）



第169図　土壙47

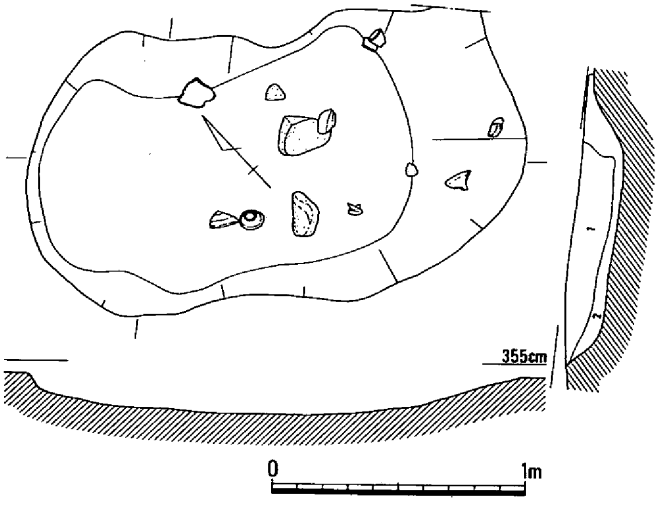
土壙47（第169図）

13C区の北部に位置し、中世以降の洪水で削平された後の平坦面で検出した土壙である。平面形はほぼ長方形を呈し、長軸を北西－南東方向にもつ。その規模は長さ210cm、幅83cm、深さ17cmを測る。底部はほぼ平坦だが、若干北西側に傾いている。壁は急斜に立ち上がり、埋土は暗灰黄色砂質土である。

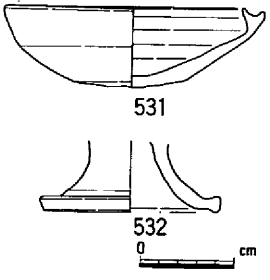
出土遺物には少量の弥生土器、須恵器片があるが、時期を決する資料はない。土壙の時期は古墳時代後半期と考えられる。（高田）

土壙48（第170図）

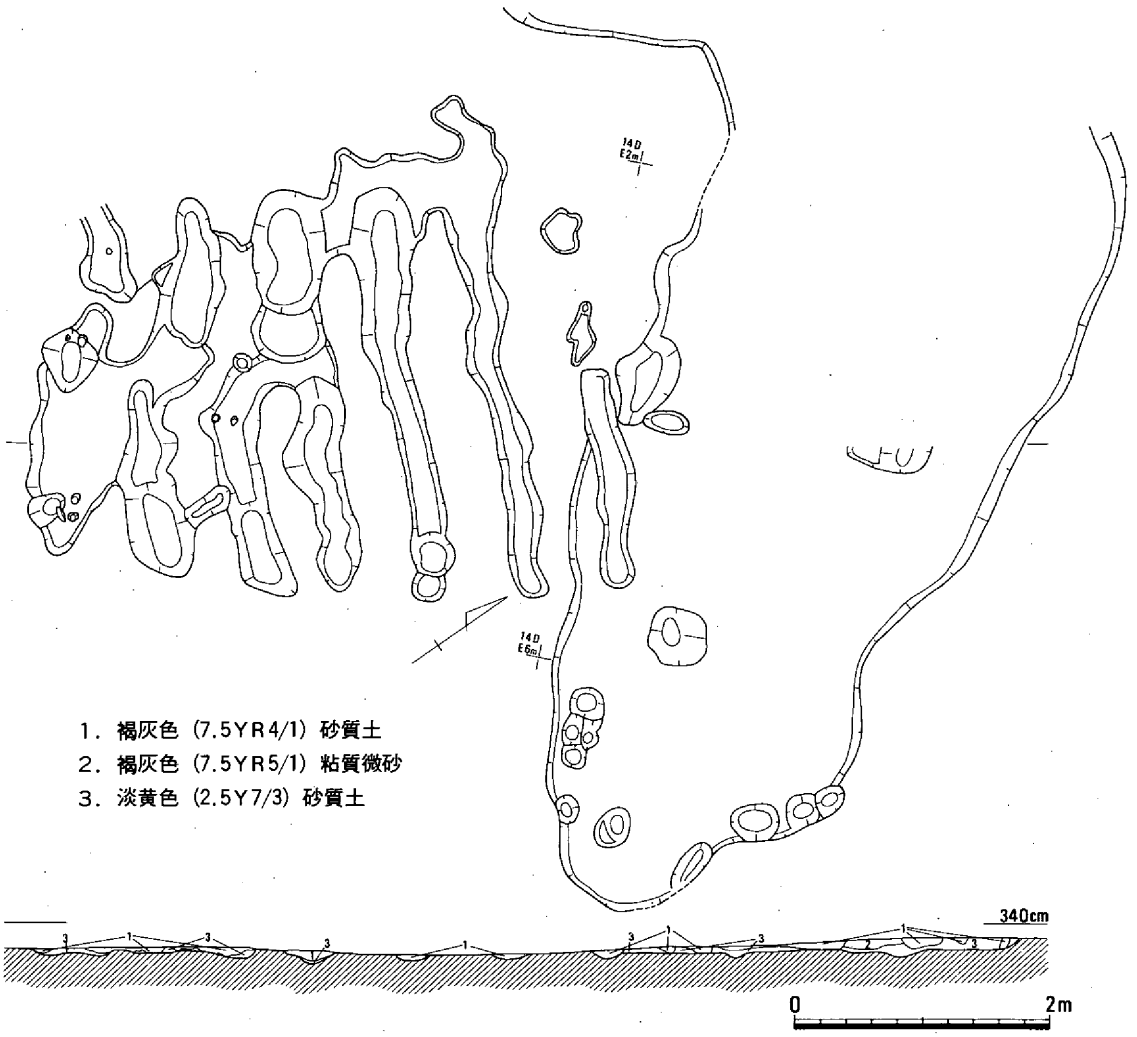
13C区のほぼ中央に位置し、落ち込み1の北に接して検出した土壙で



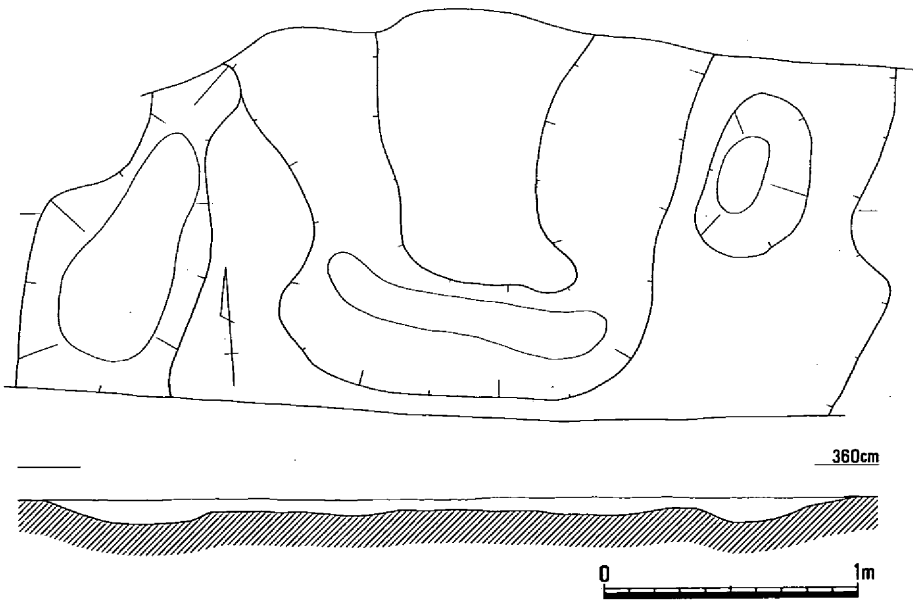
1．褐灰色（10YR4/1）土（焼土・炭多く含む）
2．灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土



第170図　土壙48・出土遺物



第171図　土壙49



第172図　土壙50

ある。平面形は歪な分銅形を呈し、その規模は長さ200cm、幅99～105cm、深さ18cmを測る。底部はほぼ平坦で、南東側の壁は緩やかだが、他は急斜に立ち上がる。埋土は落ち込み１とほぼ同様の堆積土である。

出土遺物には少量の弥生土器、土師器、須恵器片がある。土壙の時期は、図示した須恵器の特徴から６世紀末～７世紀初頭頃と考えられる。（高田）

土壙49（第171図、図版28）

14Ｄ杭の東側に広がる不定形な土壙で、弥生後期末の洪水砂の上面で検出した。その平面形態の違いから南と北の２種に分けられる。

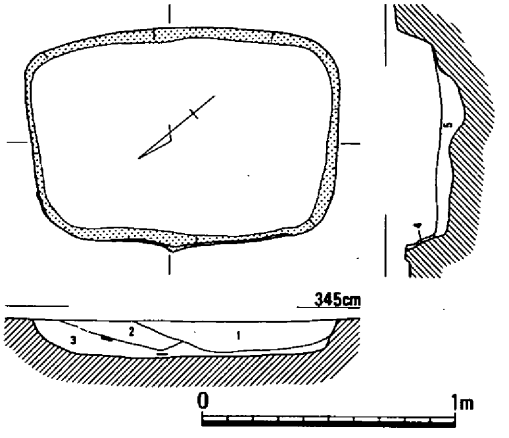
北側の広く浅い土壙は長さ７ｍ、幅3.3ｍ、深さ15cmを測り、底面には顕著な凹凸がみられた。埋土は褐灰色粘質微砂と淡黄色砂質土である。南側の櫛歯状に連続して並ぶ細長い落ち込みは、東端をほぼ揃えた４ｍ×５ｍの範囲にあり、幅25～40cm、深さ３～13cm、落ち込み間の幅20～50cmを測る。またそれらの方向は、弥生後期の微高地端と90度の位置にあり、おそらく掘削当時の微地形と関係があると思われる。埋土は褐灰色砂質土で、一部の下層には淡黄色砂質土が認められる。断面図をみると、北側の土壙と、南側のものとは切り合い関係にあり、後者の方が新しい。また北側の土壙上にも細長い落ち込みが続いていたことが判る。遺構の性格は、その形状から何らかの耕作痕とするにとどめたい。

出土遺物には少量の土器片がある。土壙の時期は、その検出状況から古墳時代初頭に近いものと考えられる。（高田）

土壙50（第172図）

21Ｄ区の東北部で検出した土壙である。周囲を近現代の用水路で削られている。平面形は不定形で、残存規模は長さ340cm、幅160cm、深さ10cm前後を測り、底部は凹凸が激しく、数箇所に深みがある。壁は緩やかに立ち上がり、埋土は暗灰色粘土である。

出土遺物には少量の弥生土器片がある。土壙の時期は、検出状況と埋土から、古墳時代に属するものと考えられる。（高田）



１．褐灰色（10ＹＲ6/1）砂質土　２．褐灰色（10ＹＲ5/1）砂質土　３．灰黄褐色（10ＹＲ4/2）粘質微砂（焼土・炭多く含む）　４．被熱による赤化（炉壁）　５．褐灰色（5ＹＲ1/5）土（炭・焼土多く含む）

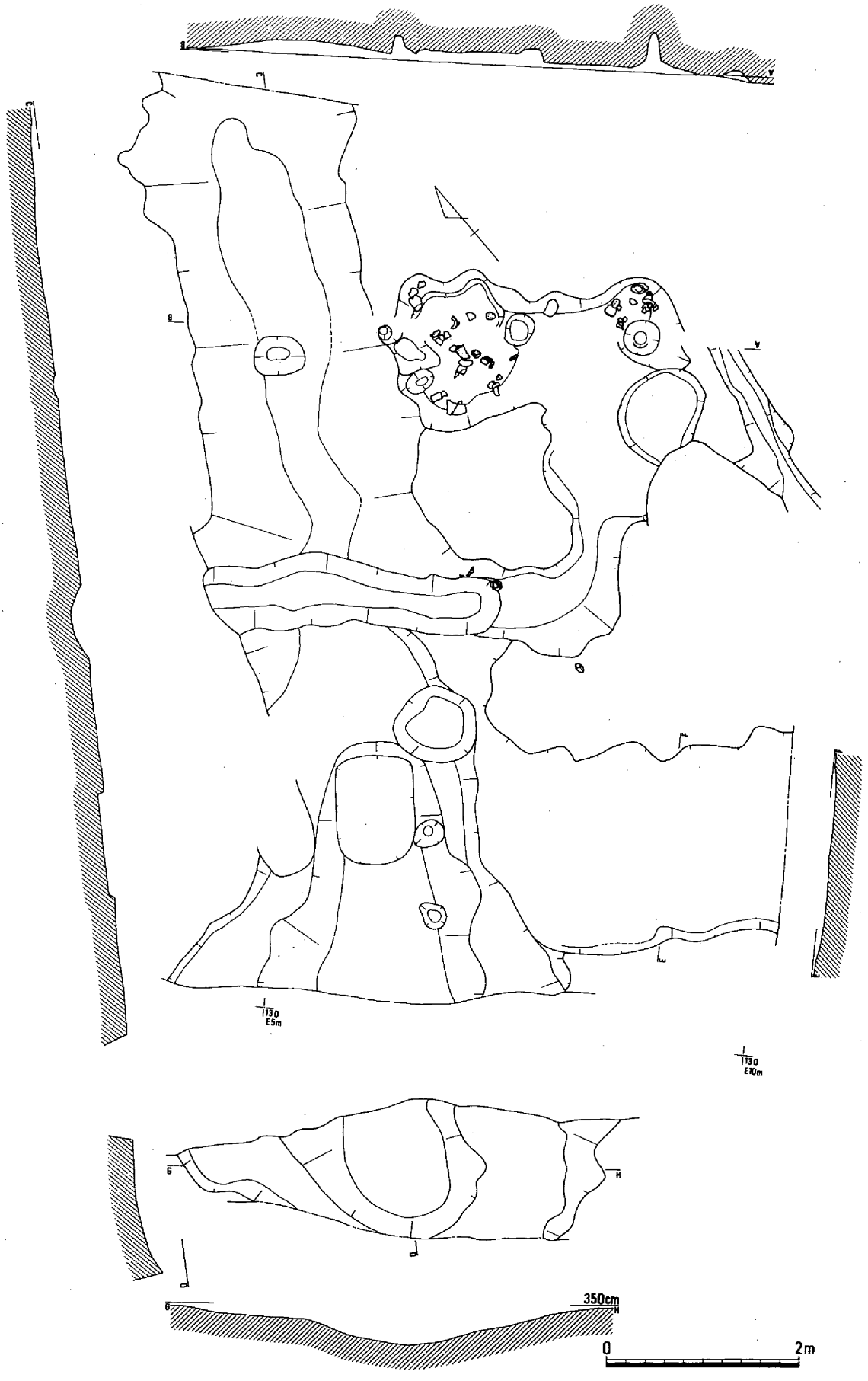
第173図　鍛冶炉１

(5) 鍛　冶　炉

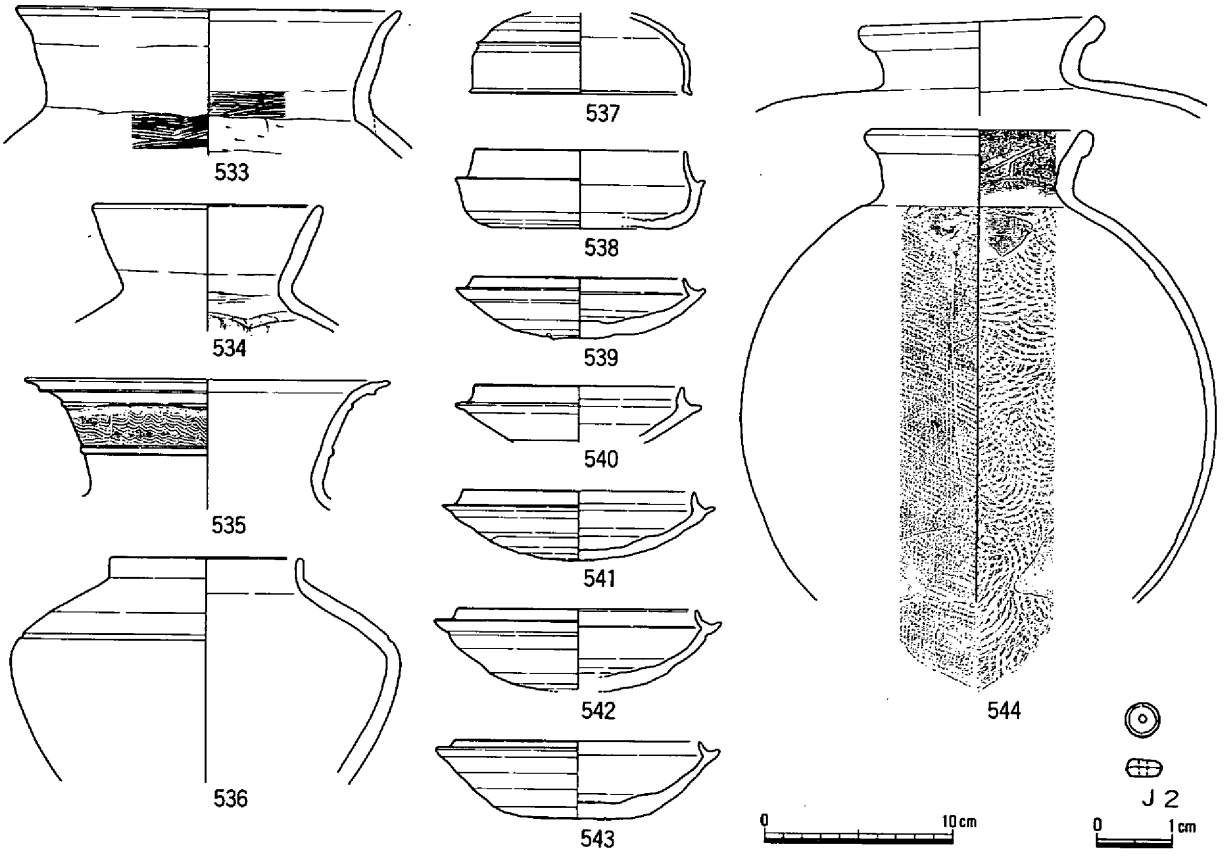
鍛冶炉１（第173図、図版28）

13Ｃ区で検出された鍛冶炉で、落ち込み１の上に重なる。平面形は長方形を呈する。規模は長さ1.25ｍ、幅96cm、深さ96cmを測る。ほぼ垂直に立上る炉壁は１～２cmの厚さで良く焼けている。しかし平坦な底部はわずかに赤化している部分もあるが、ほとんど焼けた痕跡は認められなかった。横断面を見ると、底面の下にさらに炭や焼土を多く含む褐灰色土の掘り込みが認められたが、その底部は凹凸が著しい。

時期については検出面や、埋土中に含まれていた土器の細片から古墳時代の後期と考えられるが、詳



第174図　落ち込み１（S：1/60）



第175図　落ち込み１出土遺物

細な時期は不明である。　（平井）

(6) 落ち込み

落ち込み１（第174・175図、図版65）

13C・D区に広がる浅い落ち込みである。これは、弥生後期末の洪水砂で埋没した溝13・14上の凹みと考えられ、ほぼ溝幅内に収まるが、一部に周囲からの溝状の流れ込みをみる。落ち込みの範囲は12m×６mで、北端は溝13とともに調査区外に延びると考えられ、南側は中世以降の洪水に削平されている。底面は凹凸が激しく、検出面からの深さは15～40cmを測る。底には所々柱穴状の円孔が穿たれるが、新しい時期のものも含まれるようである。埋土は褐灰色粘質微砂で、これは後期の堆積土と近似する。また、落ち込みのほぼ中央には、その埋没後に先述の鍛冶炉が築かれている。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器片とともに、多数の鉄滓と滑石製の臼玉Ｊ２がある。遺物はほぼ全面から出土しているが、東北部の凹みからは須恵器がまとまって出土している。図示した土器は、土師器の甕（533）と直口壺（534）、須恵器の甕（535）、短頸壺（536）、杯蓋（537）、杯身（538～543）、横瓶（544）である。中でも535は、精緻な胎土をもつ古式須恵器である。これらの時期は、５世紀代から７世紀にかかるものであるが、７世紀の初頭をその下限としている。よって落ち込みの最終的な埋没時期はそれに近いものと思われる。　（高田）

(7) 溝

溝44（第176図）

10・11D区で検出された溝で、ほぼ北西から南東方向に流走する。溝は全長６ｍあまりで、幅85㎝、深さ10㎝を測る。南東端は細くなって終わるが、北西端は途切れる。埋土はオリーブ黄色微砂である。時期は検出面から古墳時代と考えられる。（平井）

溝45（第177図、図版29）

11C・D区で検出された溝で、北東から南西方向に流走するが、途中少し蛇行する。規模は幅40～65㎝、深さ７～15㎝を測る。底部は多少凹凸を有する場所もあるが、ほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。埋土はオリーブ黄色微砂である。

時期は検出面から古墳時代と考えられ、さらに井戸11に切られていることから５世紀後半以前と推定される。（平井）

溝46（第178図）

11D区で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。溝は全長2.5ｍあまりで、幅65㎝、深さ10㎝を測る。北東端は井戸12に切られて終わるが、南西端はさらに調査区外へ続くものと考えられる。溝の底部は幅広く丸みをもっており、壁は緩やかに立上る。埋土は焼土や炭を多く含む褐灰色砂質土である。

遺物は須恵器の高杯が出土した。時期は６世紀と考えられる。（平井）

溝47（第179図、図版65）

11D区で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。溝は全長６ｍ、幅55㎝、深さ10㎝を測る。北東端は途切れるが、南西端は調査区外へ延びると考えられる。底部は狭いが平坦で、壁は緩やかに立上る。埋土は暗灰黄色土である。

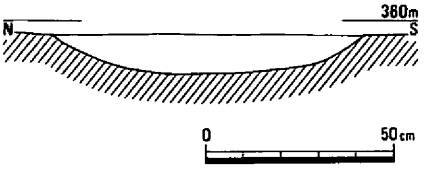
遺物は須恵器の杯が出土している。杯は口縁部が長く立上り、端部は内傾する面をもつ。時期は５世紀末ないし６世紀初めと考えられる。（平井）

溝48（第180図）

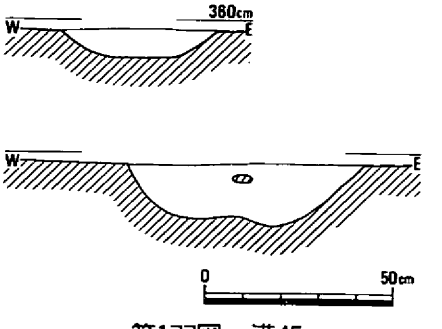
11・12C区で検出された溝で、近接して平行に並ぶ３条のうちの北端に位置する。溝はほぼ東から西方向に流走するが、全長８ｍあまりで、その両端は途切れてしまう。規模は幅1.05ｍ、深さ15㎝を測る。底部は中央寄りやや北よりが最も深くなり、壁は緩やかに立上るが、南側は一旦少し立上がった後、わずかに傾斜をもつもののやや広い平坦面を形成する。埋土は炭や焼土を含む灰黄褐色土である。時期は検出面から古墳時代と考えられる。（平井）

溝49（第181図）

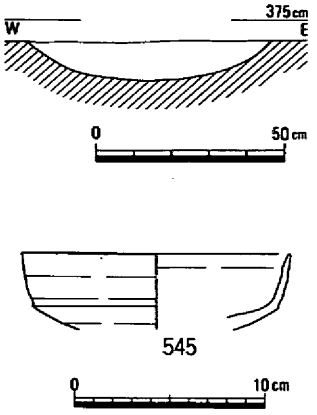
11・12C区で検出された３条の溝のうちの１条で、南側を流走する溝50とは接している。溝は東から西へ



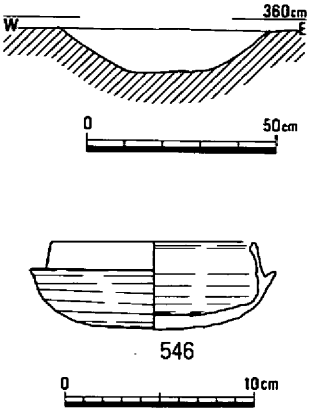
第176図　溝44



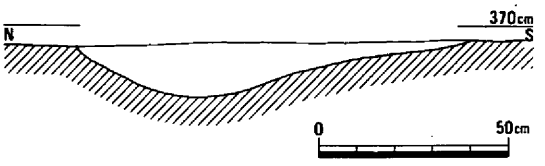
第177図　溝45



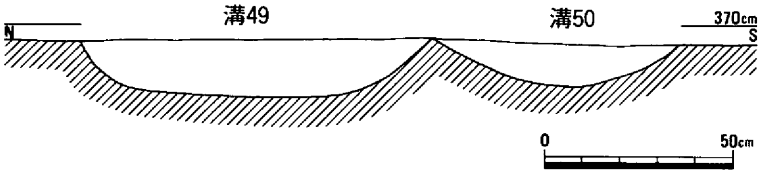
第178図　溝46・出土遺物



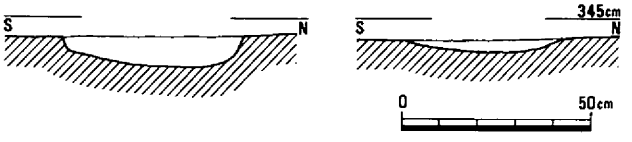
第179図　溝47・出土遺物



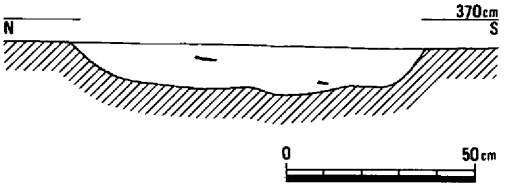
第180図　溝48



第181図　溝49・50



第182図　溝51



第183図　溝52

流走するが、全長5mあまりで両端とも途切れる。規模は幅95cm、深さ15cmを測る。底部は幅広くほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。埋土は炭や焼土を含む灰黄褐色土である。

時期は検出面および埋土から古墳時代と考えられる。　（平井）

溝50（第181図）

12C・D区で検出された溝で、3本が平行に流走するうちの1条である。溝は東から西方向に流走し、全長6mあまりを測るが、その両端は途切れる。規模は幅65cm、深さ10cmを測る。底部は丸みをもち、壁は緩やかに立上る。埋土は浅黄色微砂である。

時期は検出面から古墳時代と考えられる。　（平井）

溝51（第182図）

11・12C区で検出された溝で、溝49と50とはX字状に交差する。溝は南東から北西方向へ流走するが、全長7mあまりで両端とも途切れる。規模は幅40～50cm、深さ3～6cmを測る。埋土はにぶい黄色微砂土である。

時期は検出面および埋土から古墳時代と考えられる。　（平井）

溝52（第183図）

12C区で検出された溝で、東から西方向へ流走する。溝の東端は調査区外へ延びると考えられるが、西端は途切れる。しかし、方向、埋土などから溝49あるいは50と繋がる可能性がある。規模は幅95cm、深さ12cmを測る。底部は多少凹凸があるものの、ほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。埋土は灰黄褐色微砂である。時期は検出面から古墳時代と考えられる。　（平井）

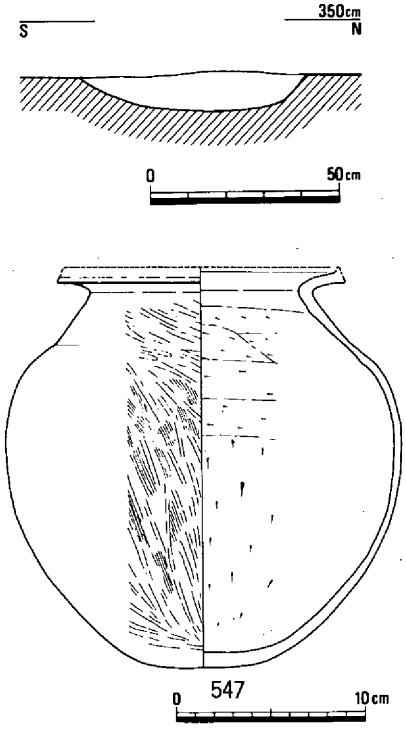
溝53（第184図）

13C区で検出された溝で、ほぼ南東から北西方向に流走する。溝は途切れながら、北西側は落ち込

み1と重なるあたりまで、南東側は溝54近くまでの、全長11mを確認した。規模は幅60cm、深さ10cmを測る。埋土は浅黄色砂質土である。

遺物は土師器が出土した。時期は百・古・Ⅱと考えられ、溝もおおむねそれに近いと推定される。

（平井）



第184図　溝53・出土遺物

溝54（第185図、図版28）

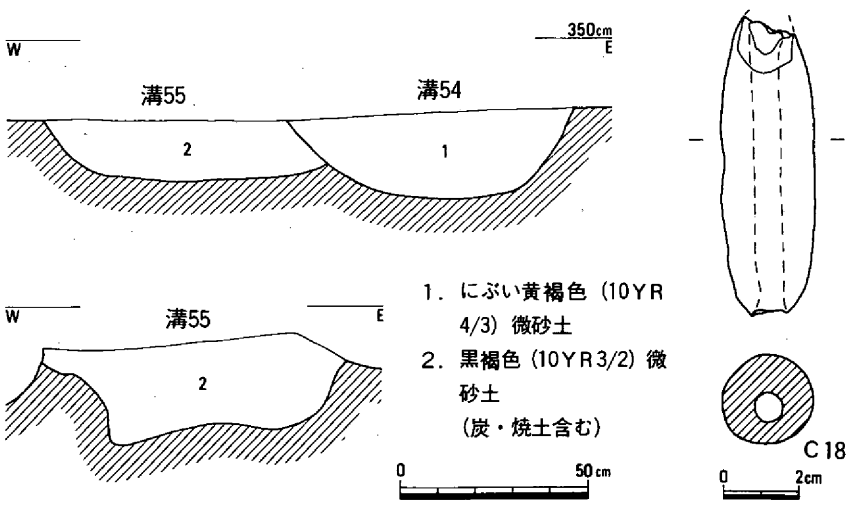
13C・D区で検出された溝で、調査区を横断するように北東から南西方向に流走する。溝は全長10mを測り、北東側は調査区外へ延びるが、南西側は中世以降に大きく抉られ途切れている。規模は幅75cm、深さ23cmを測る。

時期は検出面から古墳時代と考えられる。　（平井）

溝55（第185図、図版28）

13・14C・D区で検出された溝で、溝54と一部重なりながら北東から南西方向に流走するが、南西側の微高地端部近くになると、微高地端部にそって向きを南に変える。さらに南側は調査区外へ延びるものと考えられる。規模は幅80～90cm、深さ15～25cmを測る。底部は多少凹凸を有する場所もあるが、ほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。埋土には炭や焼土を含んでいた。

遺物としては土錘が出土した。完形に近いが、端をわずかに欠損する。

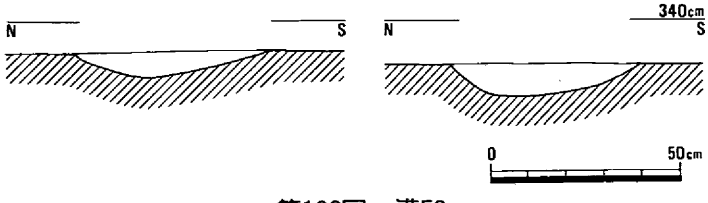


第185図　溝54・55・出土遺物

溝の時期は検出面および埋土から古墳時代と考えられるが、溝54よりは古い。　（平井）

溝56（第186図）

14・15C・D区で検出された溝で、東から西へ流走する。溝は全長27mにわたって検出され、東端は後世の攪乱によって一部途切れているが、おそらく両端とも調査区外



第186図　溝56

第187図　溝57

へ延びると考えられる。規模は幅50cm、深さ8cmを測る。埋土は灰褐色微砂粘土である。

時期は検出面および埋土から古墳時代と考えられる。（平井）

溝57（第187図）

15D区で検出した溝である。流走方向は東西で、その両端は調査区外に延びている。規模は幅52cm、深さ5cmと浅く、検出長は9mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、埋土は灰褐色粘質微砂である。

出土遺物は摩滅の著しい小片のみである。時期は、溝56と平行することや、検出面とその埋土等から古墳時代と考えられる。（高田）

溝58

19D区で検出した溝で、調査区端に位置する。北部と西部は調査区外に延びると考えられることと、近現代の用水路による削平のため、その残りは悪い。東北から南西に流水すると考えられ、規模は幅70cm以上、深さ15cm、検出長は7.2mを測る。底は凹凸が激しく、東北から南西に向かって徐々に深くなり、南西端で約30cm落ち込む。壁は急斜に立ち上がり、埋土は灰褐色土である。

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器小片がある。時期は、検出面と埋土から古墳時代と考えられる。（高田）

溝59（第188図）

21C区で検出した溝で、土壙50の北東に位置する。流走方向は東北－南西方向で、その北部は調査区外に延びると考えられる。規模は幅66cm、深さ12cmと浅く、検出長は4.5mを測る。壁は凹凸な底から緩やかに立ち上がり、埋土は暗灰色粘土である。

出土遺物には少量の弥生土器片がある。溝の時期は、検出状況と埋土から、古墳時代に属するものと考えられる。（高田）

溝60（第189図、図版29）

21C・D区を東北から南西に緩やかに蛇行しながら流走する溝である。その北半を微高地上で、南半を弥生後期末の洪水砂上面で検出した。その両端は調査区外に延びると考えられる。また東北端で溝61と切り合いがあり、溝61よりも新しい。規模は北半で幅30cm、深さ22cm、南半で幅47cm、深さ23cmを測る。断面形は、北半が平坦な底の「U」字形、南半が平坦な底で上部が逆「ハ」字形を呈す。これら南北での違いは、両者の掘削面の堅さによるものと考えられる。

出土遺物には少量の弥生土器、土師器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土や溝61よりも古いことなどから、古墳時代初頭に属するものと考えられる。（高田）

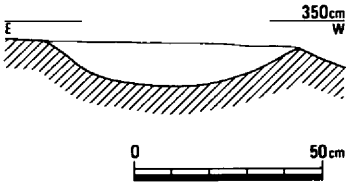
溝61（第190図、図版29）

21C・D区を東北から南西に緩やかに蛇行しながら流走する溝である。その北半を微高地上で、南半を古墳時代初頭の灰黒色土上面で検出している。両端は調査区外に延び、南側は『百間川原尾島遺跡2』の「溝78」につながると考えられる。規模は北半で幅75cm、深さ30cm、南半で幅112cm、深さ30cmを測る。壁は平坦な底から急斜に立ち上がるが、北半は垂直に近い。なお後述する溝63・65・66とは、ほぼ同様の流走方向、規模、埋土をもつことから、これらの密接な関係が窺われる。

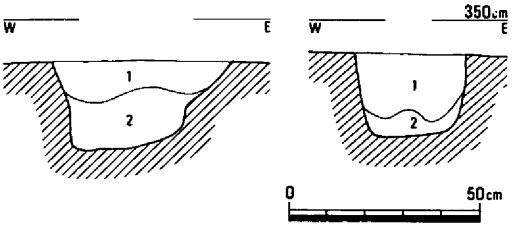
出土遺物には、弥生土器と少量の土師器、須恵器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土、溝63・65・66との関係から6世紀後半と考えられる。（高田）

溝62（第191図）

22D区に位置する溝で、溝63の南半と重なりながら流走している。その検出面は弥生後期末の洪水砂上面で、南側は調査区外に延びると考えられる。規模は幅94cm、深さ15cmを測り、壁は平坦な底から急斜に立ち上がる。埋土は淡灰色粘質微砂である。出土遺物には少量の弥生土器片がある。溝の時期は、その検出状況から古墳時代と考えられる。（高田）

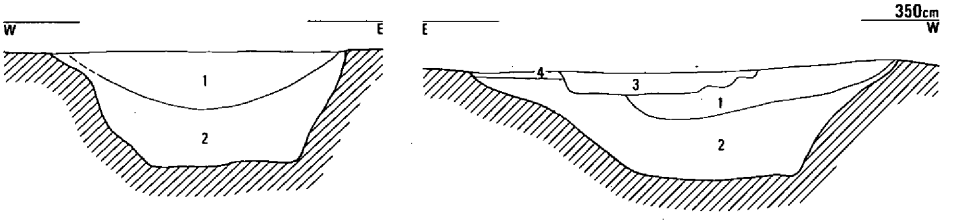


第188図　溝59

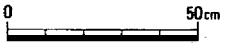


1．淡灰色粘質微砂　2．灰黒色粘質微砂

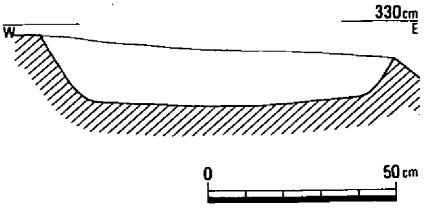
第189図　溝60



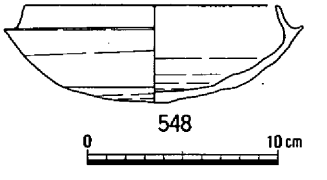
1．灰色微砂粘土　2．淡暗灰褐色微砂粘土（炭・焼土多く含む）
3．灰白褐色微砂　4．淡灰褐色微砂

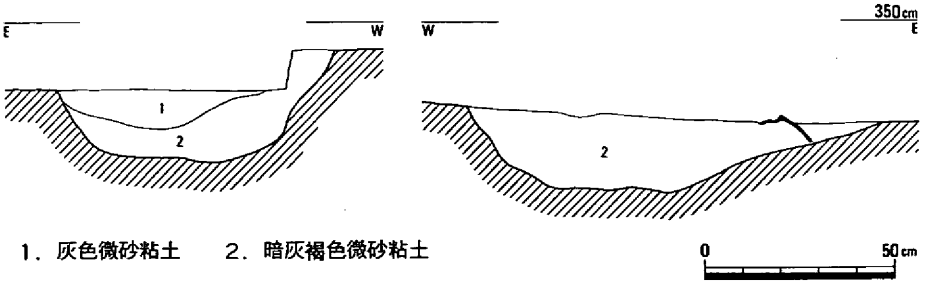


第190図　溝61



第191図　溝62





1．灰色微砂粘土　2．暗灰褐色微砂粘土

第192図　溝63・出土遺物

溝63（第192図、図版29・65）

22ライン付近を東北から南西に緩やかに蛇行しながら流走する溝である。22Ｄ杭の南西で井戸15を、さらにその南で溝62を切っている。溝は古墳時代初頭の灰黒色土上面で検出したが、本来はその上層の灰色微砂粘土層途中から掘り込まれたものと考えられる。その両端は調査区外に延び、南側は『百間川原尾島遺跡２』の「溝79」につながる可能性が高い。規模は幅90cm、深さ30cmを測る。底は流水による凹凸がみられるもののほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

出土遺物には、少量の弥生土器、土師器、須恵器片がある。溝の時期は、図示した須恵器の杯身から６世紀後半と考えられる。（高田）

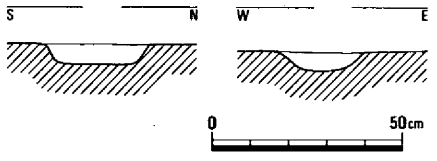
溝64（第193図）

22Ｄ区の北隅に位置し、弥生後期末の洪水砂上面で検出した、「十」字に交差する溝である。後述する溝65にその一部を切られている。この地は微高地と島に挟まれた弥生後期水田上にあたることから、洪水砂の凹みに流れ込む溝という性格が考えられる。規模は幅25cm前後、深さ５cmを測り、その埋土は古墳時代初頭の堆積とされる灰黒色土である。

溝の時期は、土師器の細片と埋土から古墳時代初頭と考えられる。（高田）

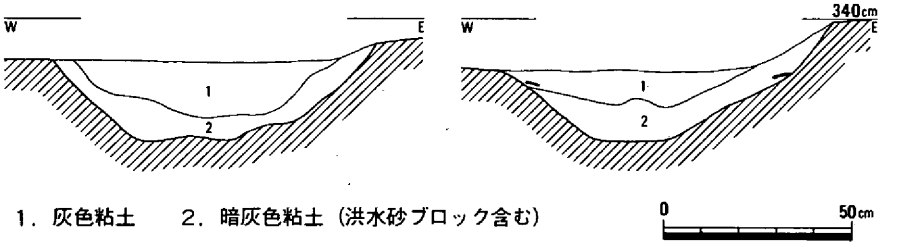
溝65（第194図、図版29）

22Ｃ・Ｄ区を東北から南西に緩やかに蛇行しながら流走する溝である。溝は古墳時代初頭の灰黒色土上面で検出したが、本来はその土層の灰色微砂粘土層途中から掘り込まれたものと考えられる。その両端は調査区外に延び、南側は『百間川原尾島遺跡２』の「溝80」につながる可能性が高い。規模は幅85cm、深さ32cmを測る。底は流水による凹凸がみられ、壁は急斜に立ち上がる。

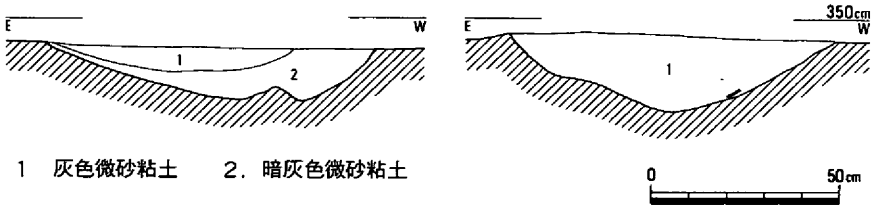


第193図　溝64

出土遺物には、少量の弥生土器、土師器、須恵器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土や他の溝との関係から、６世紀後半と考えられる。（高田）



第194図　溝65



第195図　溝66

溝66（第195図、図版29）

22C・D区を東北から南西に流走する溝である。溝は、北端を古墳時代初頭の灰黒色土上面で、その他の大部分を弥生後期の島１の上面で検出している。その両端は調査区外に延び、南側は『百間川原尾島遺跡２』の「溝81」につながると考えられる。規模は幅85cm、深さ20cmを測る。底は流水による凹凸がみられ、壁は他の溝61・63・65と比較すると緩やかに立ち上がる。

出土遺物には、少量の弥生土器、土師器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土や他の溝との関係から、６世紀後半と考えられる。（高田）

溝67（第196図）

23C・D区を東北から南西に流走する溝である。弥生後期末の洪水砂上面で検出し、その東端は弥生後期の島の肩に一致する。溝の両端は不明瞭となって終わり、調査区外には延びないようである。規模は幅120cm、深さ30cmを測る。西壁は緩やかだが、東壁は急斜に立ち上がり、底は部分的に深くなっている。埋土は黄褐色粘質微砂で、その上層には灰黒色土の堆積がみられる。

出土遺物には少量の弥生土器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土から古墳時代と考えられる。（高田）

溝68

20A区に位置し、調査区の東隅を東西に流走する溝である。弥生後期末の洪水砂上面で検出したもので、その東端は調査区外に延びると考えられる。規模は長さ3.2m、幅50cm、深さ10cm前後を測る。断面形は半円形を呈し、埋土は褐灰色砂質土である。

出土遺物には少量の土師器と須恵器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土から古墳後期と考えられる。（高田）

溝69

20A区に位置し、南北に流走する溝である。弥生後期末の洪水砂上面で検出したもので、その北端は調査区外に延びると考えられる。近現代用水の削平を受けているため、その規模は長さ2.7m、幅60cm、深さ15cm前後を測るに過ぎない。壁は急斜に立ち上がり、埋土は褐灰色砂質土である。

出土遺物には少量の弥生土器と須恵器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土から古墳後期と考えられる。（高田）

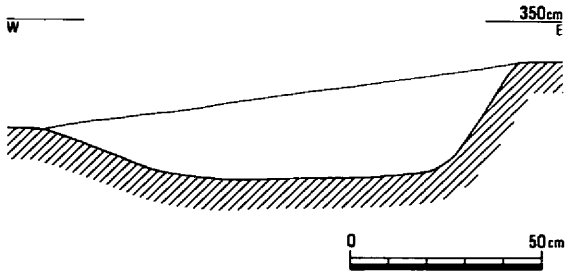
溝70（第197図）

20A区のほぼ中央を南北に流走する溝で、弥生後期末の洪水砂上面で検出した。北端は調査区外に延びると考えられ、南端は二股に分かれる。その一方は後述の溝71につながる可能性がある。近現代用水の削平を受けているため、その規模は長さ3.5m、幅125cm、深さ20cm前後を測るに過ぎない。底はほぼ平坦で、壁は一度垂直に立ち上がった後、逆「ハ」字状に大きく広がっている。埋土は灰色粘質微砂である。

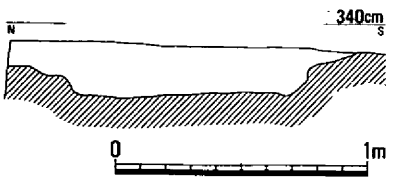
出土遺物には少量の弥生土器と土師器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土から古墳時代と考えられる。（高田）

溝71（第198図）

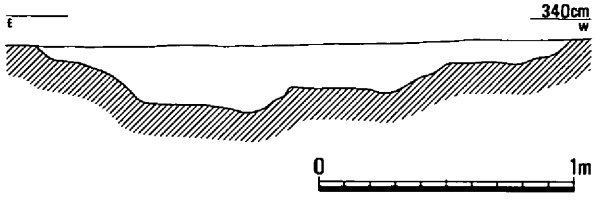
20A区の溝70の南側に位置し、南北に流走する溝である。その大部分を弥生後期末の洪水砂上面で、南端のみを弥生後期の島の上面で検出している。溝72と重なるが、埋土に差異はみられず、南端は調査区外に延びると考えられる。近現代用水の削平を受けているため、その規模は長さ３m、幅



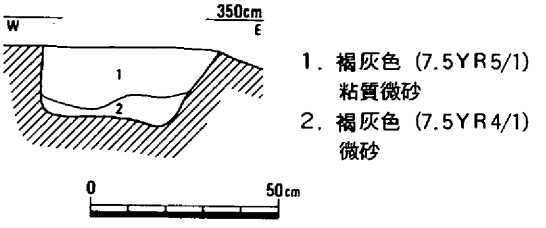
第196図　溝67



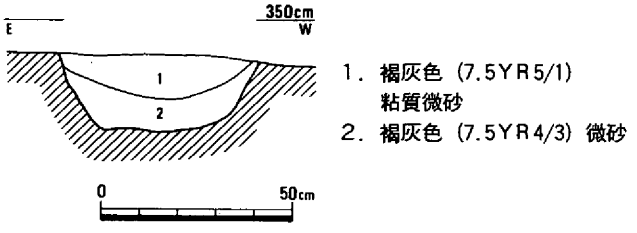
第197図　溝70



第198図　溝71・72



第199図　溝73



第200図　溝74

125cm、深さ20cm前後を測るに過ぎない。底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。埋土は灰色粘質微砂である。

出土遺物には少量の弥生土器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土から古墳時代と考えられる。（高田）

溝72（第198図）

20A区に位置し、北東から南へ湾曲しながら流走する溝である。弥生後期末の洪水砂上面で検出し、その両端は調査区外に延びると考えられる。溝71と重なるが、埋土に差異はみられない。規模は長さ6m、幅90cm、深さ20cm前後を測る。底は流水による凹凸があるもののほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質微砂である。

出土遺物には少量の弥生土器片がある。溝の時期は、検出状況とその埋土から古墳時代と考えられる。（高田）

溝73（第199図）

20A区に位置し、北東から南へ湾曲しながら流走する溝で、溝72にほぼ平行する。弥生後期末の洪水砂上面で検出し、その両端は調査区外に延びると考えられる。近現代の削平を受けているため、規模は長さ6.5m、幅55cm、深さ20cm前後を測るに過ぎない。底は流水による凹凸があるもののほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

出土遺物には少量の弥生土器、土師器片と鉄滓がある。溝の時期は、検出状況とその埋土から古墳時代と考えられる。（高田）

溝74（第200図）

21ライン上の調査区南東隅に位置し、北から南へ弧を描いて流走する溝である。その北半は弥生後期末の洪水砂上面で、南半は弥生後期の島の上面で検出した。また溝の南端は調査区外に延びると考

えられる。規模は長さ2.7m、幅55cm、深さ20cm前後を測る。底は流水による凹凸があるもののほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

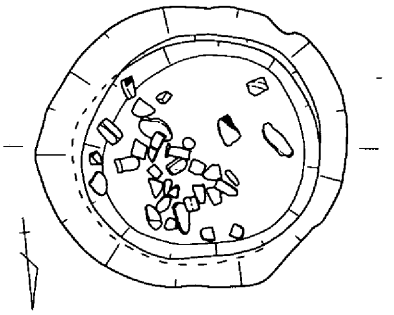
出土遺物には少量の弥生土器、土師器片と鉄滓がある。溝の時期は、検出状況とその埋土から古墳時代と考えられる。（高田）

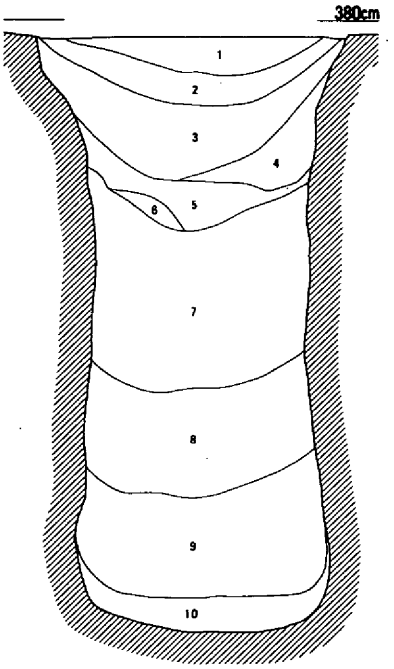
６．中世の遺構・遺物

(1)　井　　戸

井戸16（第201図、図版31）

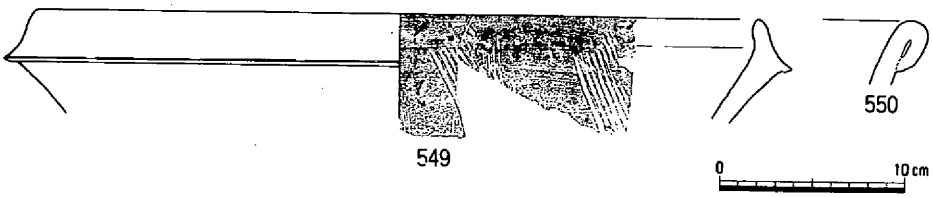
11D区の北部に位置し、溝77・78の東側で検出した素掘りの井戸である。平面形は円形で、その規模は径120cm、検出面からの深さ233cmを測る。壁は最上部が逆「ハ」字状に開くものの、以下はほぼ垂直に落ち込み、下半で少し袋状となる。井底はほぼ平坦で径80cmの円形を呈し、標高は138cmである。１～９層は、炭・焼土と基盤土のブロックを含む人為的な埋土と考えられ、何も含まない10層と



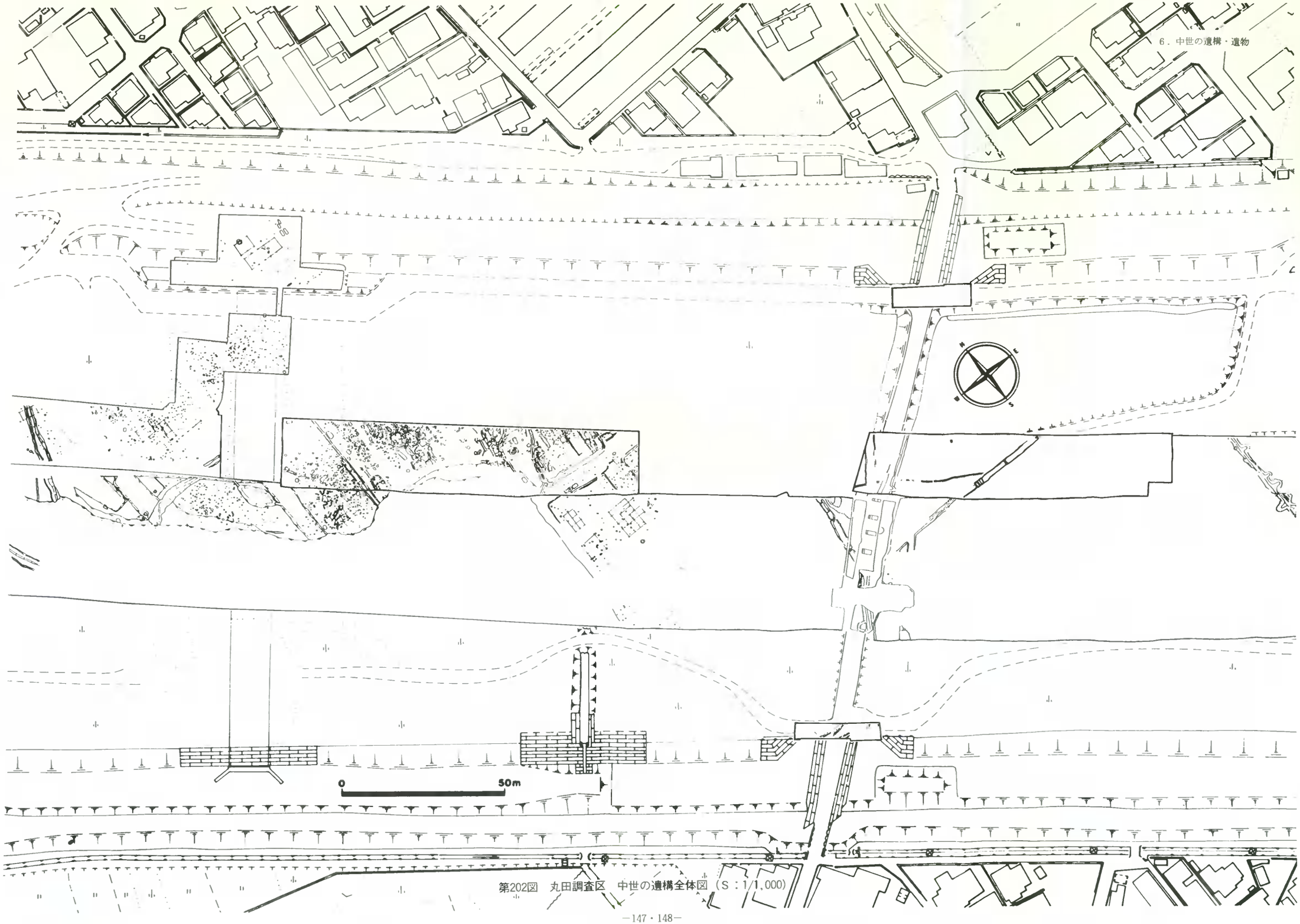


1．灰黄褐色（10YR5/2）粘質微砂
（にぶい黄色土斑含，炭・焼土粒含）
2．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂
（にぶい黄色土斑含，炭・焼土粒含）
3．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土
（にぶい黄色土と暗オリーブ灰色土多含，炭・焼土粒含）
4．灰黄褐色（10YR4/2）粘質微砂
（にぶい黄色土小斑含，炭・焼土粒含）
5．黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
（にぶい黄色土斑含，炭・焼土粒含）
6．黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
（暗オリーブ灰色土多含）
7．灰色（10Y5/1）粘質土
（にぶい黄色土斑多含，炭・焼土粒含）
8．灰色（10Y4/1）粘土
（炭・焼土粒含）
9．暗緑灰色（7.5GY3/1）粘土
（炭粒含，植物遺体含）
10．灰色（10Y5/1）粘土

0　50cm

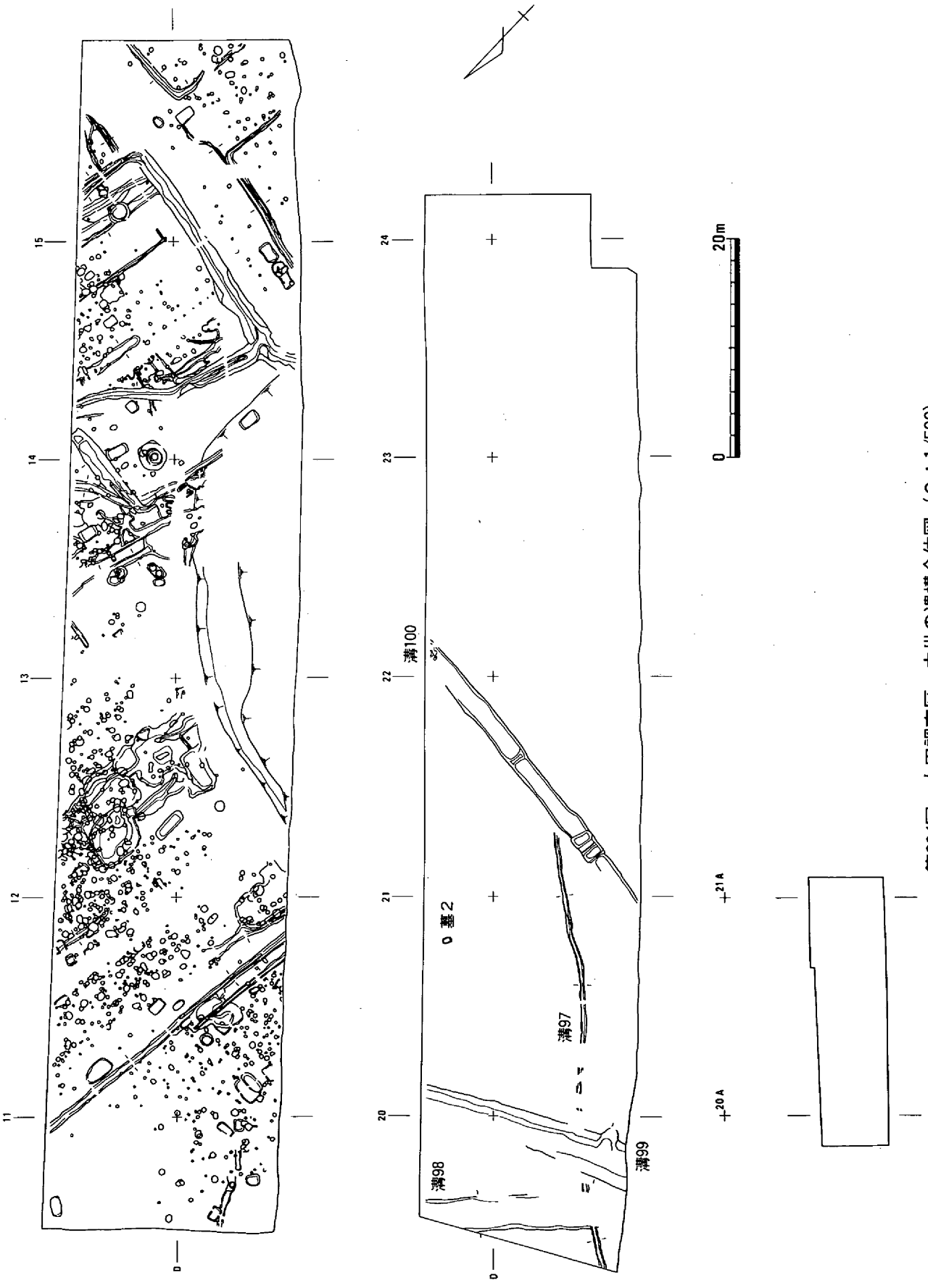


第201図　井戸16・出土遺物



第202図　丸田調査区　中世の遺構全体図（S：1/1,000）

第203図　丸田調査区〈10～15C・D〉　中世の遺構全体図（S：1/250）

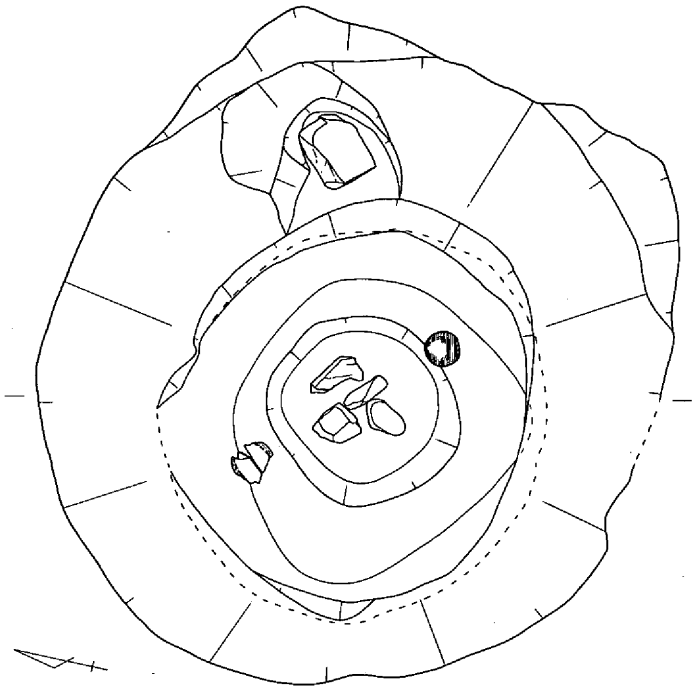


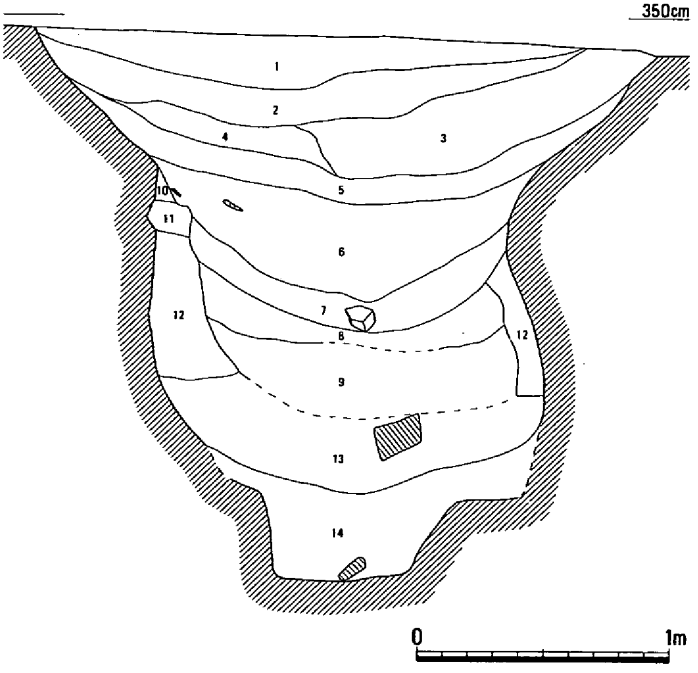
第204図　丸田調査区　中世の遺構全体図（S：1/500）

は対照的である。

遺物は土器、獣骨、種子、鉄滓で、主に9層から出土している。またこれらとともに5～15cmの大きさの川原石の出土が目立っている。土器には備前焼と亀山焼があり、図示したのは備前焼の摺鉢と甕の口縁部である。獣骨は数個体のネズミとカエルで、種子はモモである。ネズミとカエルは、それを食したものかどうかは判らない。

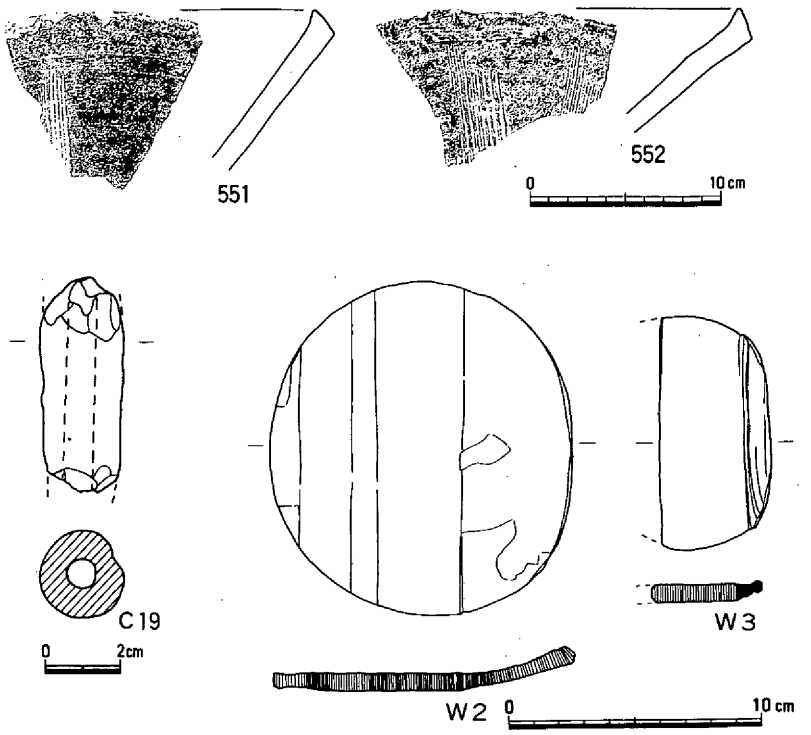
井戸は屋敷地内の一角に設けられたものと考えられ、周辺には数多くの柱穴がみられる。しかし建物としてまとめられず、井戸との関係も明らかではない。





1．灰黄褐色（10YR6/2）砂質土
（浅黄色微砂斑含，炭・焼土粒含）
2．灰黄褐色（10YR5/2）土
（炭・焼土粒含）
3．にぶい褐色（7.5YR5/3）～にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土（浅黄色微砂斑・暗灰黄色土斑多含，炭・焼土粒含）
4．灰褐色（7.5YR5/2）粘質土
（炭・焼土粒少含）
5．褐灰色（7.5YR5/1）粘質土
（炭・焼土粒含）
6．黄灰色（2.5Y5/1）粘土
（炭・焼土粒少含）
7．灰褐色（7.5YR5/2）粘土
8．灰オリーブ色（5Y6/2）粘土
（褐色粘質土ブロック多含，炭粒少含）
9．緑灰色（5G5/1）粘土
（炭粒少含）
10．灰褐色（7.5YR6/2）粘質微砂
11．にぶい褐色（7.5YR5/3）粘質土
12．浅黄色（5Y7/4）微砂
13．灰色（10Y6/1）粘土
（炭粒・植物遺体含）
14．暗緑灰色（5G4/1）粘土

第205図　井戸17



第206図　井戸17 出土遺物

井戸の時期は室町時代と考えられる。　（高田）

井戸17（第205・206図、図版32・66）

14D区の北に位置し、溝83・84の南東側で検出した井戸である。平面形はほぼ円形で、その規模は径245cm、検出面からの深さ217cmを測る。壁は上部が大きく逆「ハ」字状に開くものの、以下はほぼ垂直かやや袋状に落ち込んで底となる。なお、この大きく開いた壁の東部には段が設けられ、扁平な角礫が置かれていた。水を汲み上げる際の足場のようなものが考えられよう。井底は2段に掘り込まれ、上段は120×125cmの隅丸方形状で、さらに径75cm、深さ33cmの円孔を穿って下段としている。この底はほぼ平坦で径60cmの円形を呈し、標高は126cmである。また底面に接する4個の川原石を検出した。

埋土は新（1～9層）・旧（10～14層）二時期の井戸の埋没状況を示している。10～12層は上部の壁の崩落によると考えられる堆積である。特に12層は弥生後期末の洪水砂と酷似している。掘り方の規模から井側等の構造物が存在した可能性もあるが、抜き取られたものか、検出をしていない。1～9層は、最初の井戸が埋没したか、埋没しつつある段階に掘り直されたと考えられる井戸の堆積である。新旧の井戸の底の比高差は約65cmと推定される。

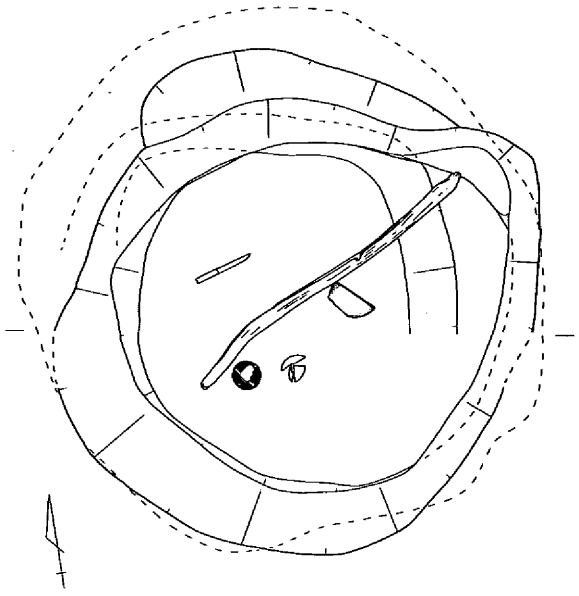
遺物には土器、土製品、木器、鉄滓があり、1～9層からの出土が多い。土器は備前焼の摺鉢（551・552）、土師質高台付椀、瓦器片等である。またC19は土錘、W2・3は曲物の底板か蓋である。

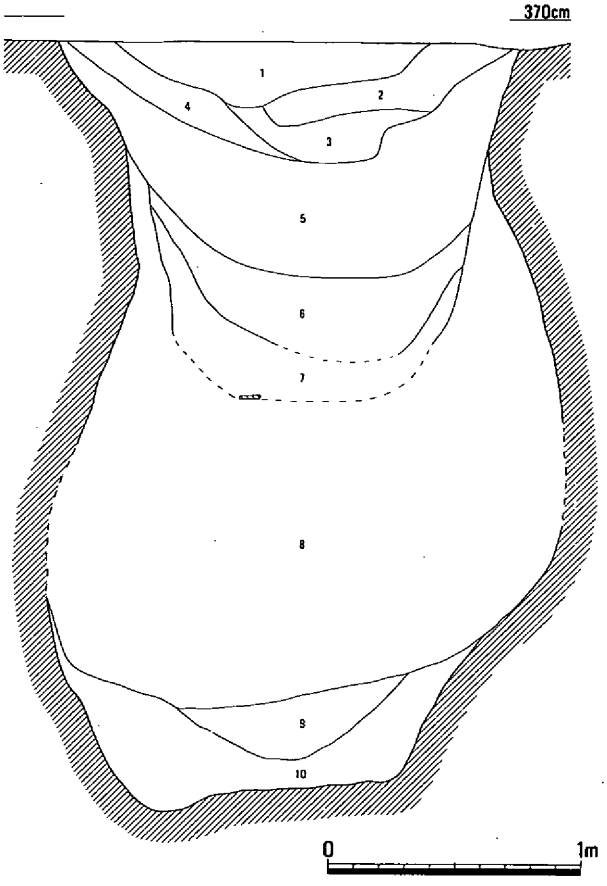
井戸の廃絶の時期は、室町時代と考えられる。　（高田）

井戸18（第207・208図、図版32・66・68）

15C区の東隅に位置し、溝87の北、溝91の西で検出した井戸である。溝89と土壙78と切り合い関係にあり、それらよりも新しい。井戸の掘り下げでは、脆弱な壁の崩落が予測されたために一時中断をし、周囲を旧河道の西肩面まで下げた段階で再開したため、中位の土層の分層をし得なかったことを記しておく。

平面形は歪な円形を呈し、その規模は径180cm、深さ305cmを測る。壁は上部が逆「ハ」字状で、中位は大きく広がって袋状となり、再びすぼまって底となる。井底は一辺135cm程度の隅丸方形を呈し、その標高は55cmである。なお、井戸の規模から井戸枠等の構造物が存在した可能性もあるが、抜き取られたものかどうかは確認できなかった。





1．灰色（5Y5/1）土
2．暗灰黄色（2.5Y5/2）土（黄褐色土含）
3．暗灰黄色（2.5Y5/2）土
4．黄灰色（2.5Y5/1）土（炭含）
5．灰色（5Y4/1）粘質土と黄褐色（2.5Y5/6）粘質土混合
6．黒色（N２）微砂粘土
7．暗緑灰色（7.5GY4/1）微砂粘土
8．灰色（N５）粘質土～粘土（ラミナ状の炭層顕著）
9．緑灰色（10GY5/1）粘土（炭層・植物遺体含）
10．緑灰色（10GY5/1）粘土

第207図　井戸18

遺物には、少量の土器と木器、金属器があり、８層からの出土が多い。土器は備前焼の甕（553）、土師質の小皿（554）のほか、常滑焼、瓦器片等がある。また木器は、曲物の底板か蓋（Ｗ４・６）、札と考えられる薄板の加工品（Ｗ５）があり、金属器は刀子（Ｍ７）である。刀子は木柄の残る完形品で、遺存状態は良好であった。その全長は26.7㎝、刃部長は16.9㎝を測る。

井戸の周辺には多数の柱穴と、東西あるいは南北に流走する溝がある。これらの溝は屋敷地を区画するもので、井戸もその一角に設けられたと考えられるが、その有機的な関係は明らかでない。

井戸の時期は、室町時代と考えられる。（高田）

(2) 土　　壙

土壙51（第209図、図版33）

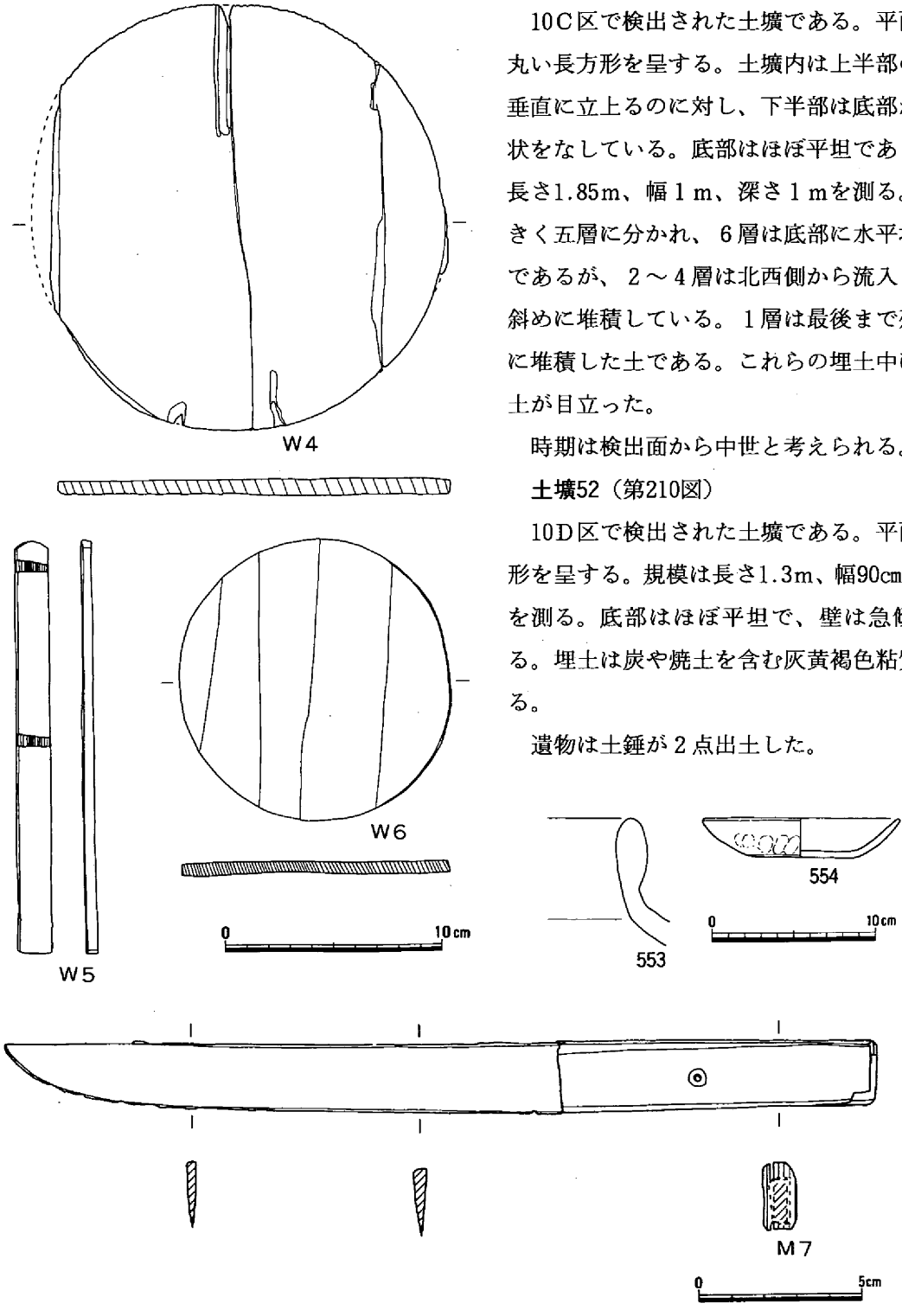
10C区で検出された土壙である。平面形は隅の丸い長方形を呈する。土壙内は上半部の壁がほぼ垂直に立上るのに対し、下半部は底部が広がる袋状をなしている。底部はほぼ平坦である。規模は長さ1.85m、幅1m、深さ1mを測る。埋土は大きく五層に分かれ、6層は底部に水平堆積した土であるが、2～4層は北西側から流入した土で、斜めに堆積している。1層は最後まで残った凹みに堆積した土である。これらの埋土中には炭や焼土が目立った。

時期は検出面から中世と考えられる。（平井）

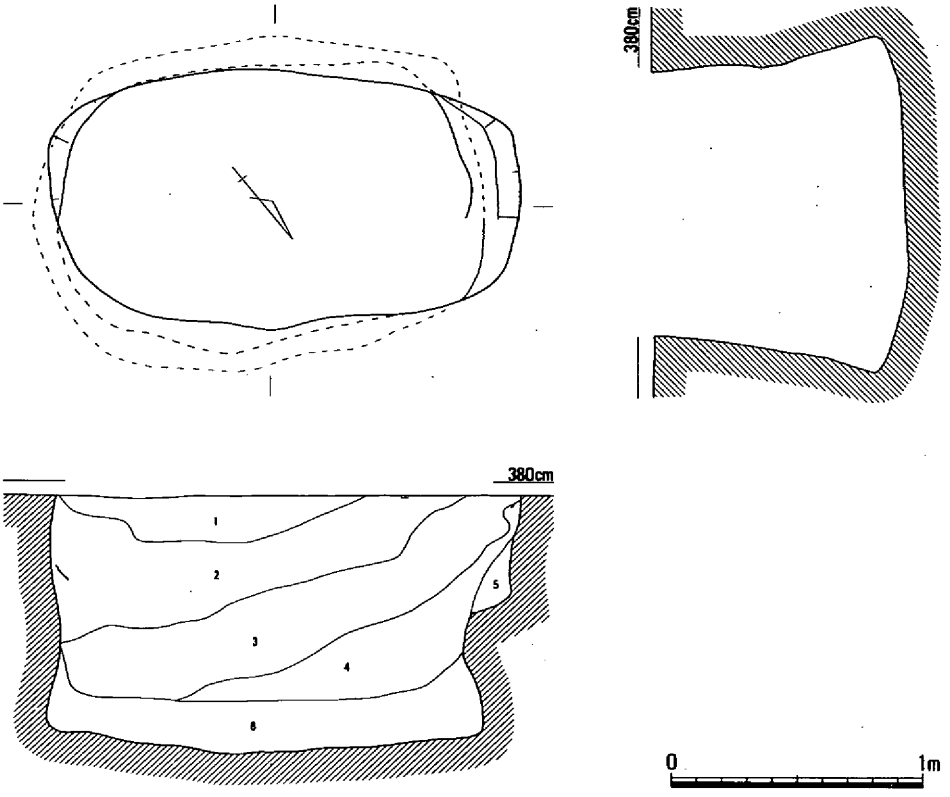
土壙52（第210図）

10D区で検出された土壙である。平面形は長方形を呈する。規模は長さ1.3m、幅90cm、深さ27cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は炭や焼土を含む灰黄褐色粘質微砂である。

遺物は土錘が2点出土した。

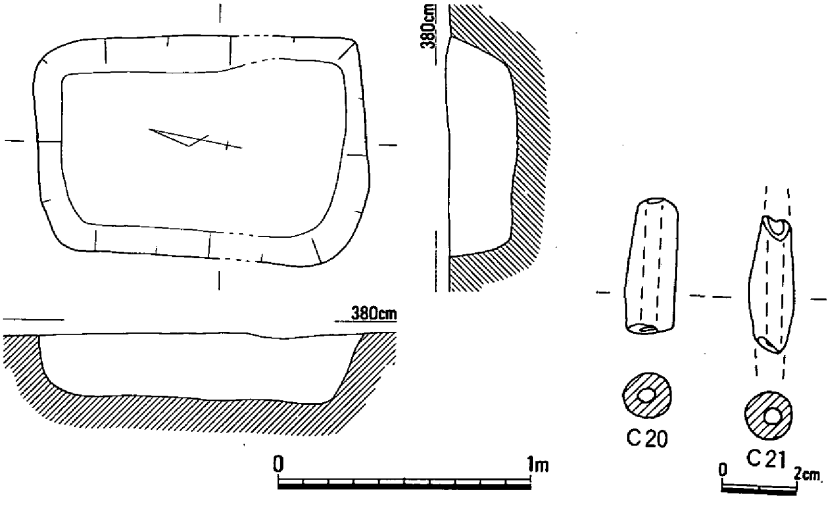


第208図　井戸18出土遺物



1．黄灰色（2.5Y5/1）粘質微砂（明黄褐色土ブロック多含，炭・焼土粒含）
2．黄灰色（2.5Y4/1）粘質微砂～粘質土（明黄褐色土ブロック多含，炭・焼土粒含）
3．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土（明黄褐色土ブロック多含，炭・焼土粒含）
4．黄灰色（2.5Y4/1）粘質土（明黄褐色土ブロック含，炭・焼土粒含）
5．灰黄褐色（10YR5/2）粘質微砂
6．暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土（明黄褐色土ブロックやや多含，炭・焼土粒含）

第209図　土壙51



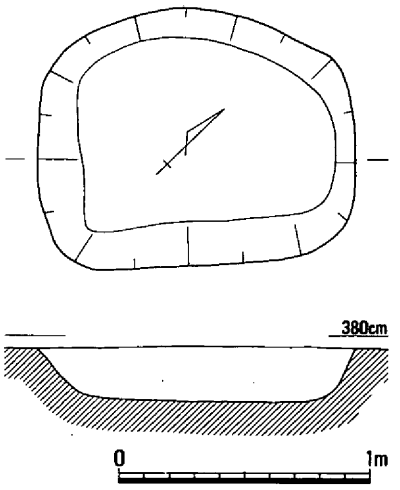
第210図　土壙52・出土遺物

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

土壙53（第211図）

10D区で検出された土壙である。平面形は北西側が弧を描く隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.26m、幅1.04m、深さ21cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は焼土や炭を含む暗灰黄色砂質土である。

時期は検出面から中世と考えられる。（平井）

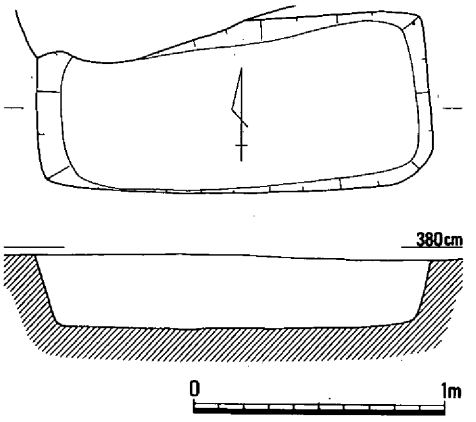


第211図　土壙53

土壙54（第212図）

10D区で検出された土壙であるが、北西端は他の遺構に切られている。平面形は長方形を呈する。検出時は土壙墓ではないかと考えていたが、人骨は残存しておらず、それを裏付けるものがないことから土壙としておく。規模は長さ1.56m、幅68cm、深さ28cmを測る。底部は平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は明黄褐色土が混在する暗灰黄色土である。

時期は検出面から中世と考えられる。（平井）



第212図　土壙54

土壙55（第213図）

11D区で検出された土壙である。平面形を見ると、長楕円形と隅丸長方形の土壙が一部重なりあっているように思えるが、断面を観察すると一つの土壙である。南側の長楕円形の土壙は、北側の隅丸長方形を呈する浅い土壙の底部からさらに深く掘り下げている。埋土中には炭や焼土を多く含む。

遺物は土師器、備前焼、白磁が出土した。土師器は椀と小皿で、557には暗文が施されている。558は備前焼の壺と考えられる。

時期は出土した遺物から13世紀前半頃と考えられる。（平井）

土壙56（第214図）

11D区で検出された浅い土壙である。平面形は長方形を呈すると考えられるが、南西側は他の遺構に切られており、全体の形状は明確にし得ない。規模は長さ1.37m、幅1.13m、深さ8cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は炭や焼土を含む灰黄色微砂質土である。

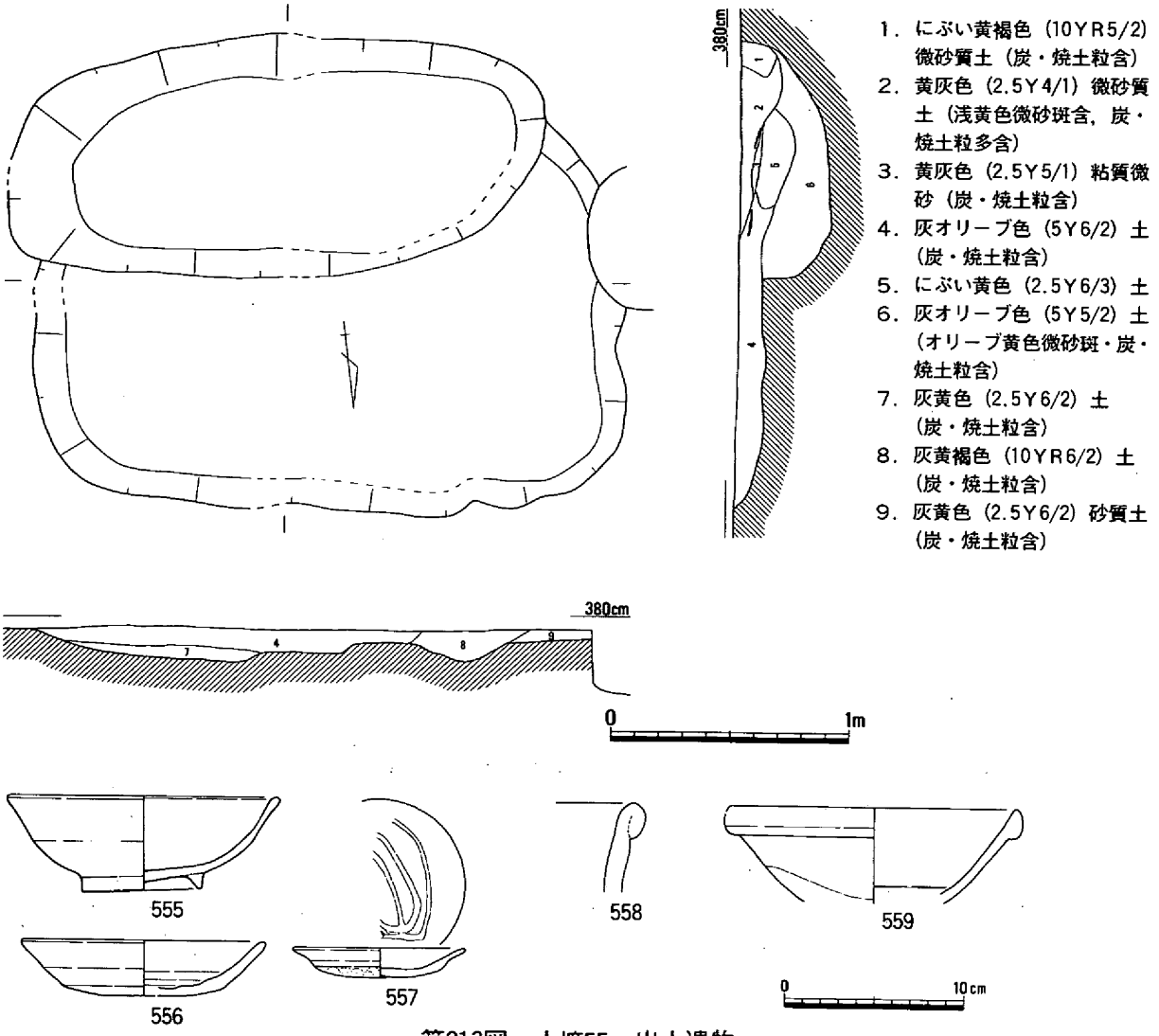
時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

土壙57（第215図）

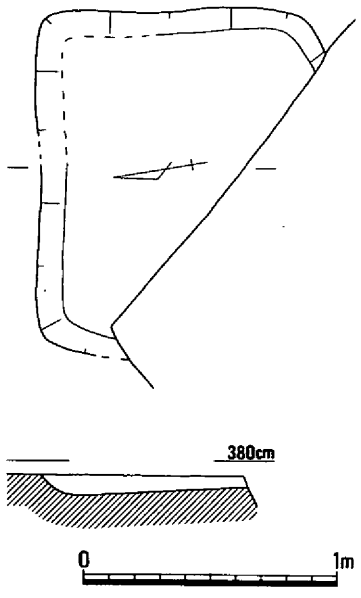
11C区で検出された土壙である。平面形は南側の幅が広く、北側の幅が狭い長楕円形状を呈する。規模は長さ2.8m、幅1.48m、深さ10cmを測る。底部は多少高低差はあるが、ほぼ平坦で、壁はやや急傾斜で立上る。

遺物は土師器や土錘がわずかに出土した。560は土師器の小皿で、土壙底部に接して出土した。土錘は細長い紡錘形を呈すると考えられるが、約半分は欠損している。

時期は中世と考えられる。（平井）



第213図　土壙55・出土遺物



第214図　土壙56

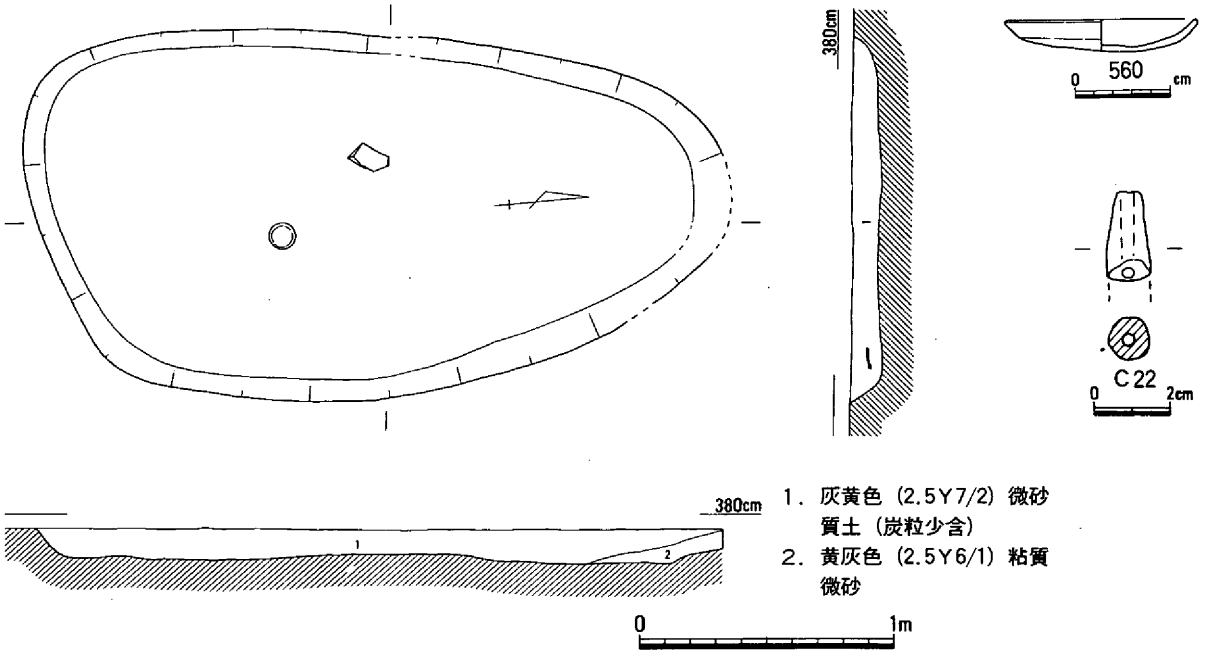
土壙58（第216図）

11D区で検出された土壙である。平面形は隅丸の長方形を呈する。規模は長さ1.16m、幅57cm、深さ16cmを測る。底部は北側が深く、南側に向かって徐々に高くなる。壁は急傾斜で立上る。埋土は炭や焼土を含む灰黄色土である。

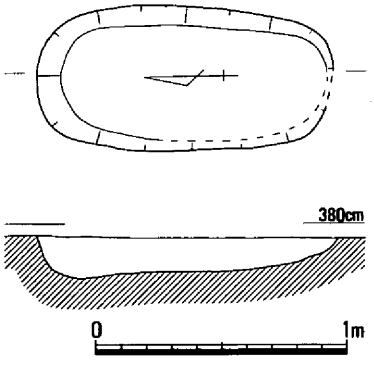
時期は検出面および埋土から中世と考えられる。　（平井）

土壙59（第217・218図）

11D区で検出された土壙で、北端東側は一部他の遺構に切られている。平面形は不定形で、南北に長い土壙の南側が西へ大きく張り出した形状を呈している。土壙の中央部が最も深く、北側から東側ではそのまま壁が立上るのに対し、南側から西側では少し立上ったところで平坦部を形成し、さらに少し立上る。埋土には炭や焼土を含んでいた。



第215図　土壙57・出土遺物



第216図　土壙58

遺物は少量であるが、土師器や備前焼が出土した。561は土師器の土鍋で、外面には指頭圧痕が粘土帯にそって残り、その上を荒い刷毛で調整している。562は備前焼の摺鉢で、口縁部の拡張はあまり著しくない。

時期は鎌倉時代と考えられる。（平井）

土壙60（第219図）

11C区で検出された土壙で、検出面からの深さはわずかである。平面形は長方形を呈する。規模は長さ1.46m、幅93cm、深さ5cmを測る。底は平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は明黄褐色土を混在する黄灰色砂質土である。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

土壙61（第220図）

11C・D区で検出された土壙である。平面形は長楕円形を呈する。規模は長さ1.22m、幅64cm、深さ7cmを測る。底部は平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は炭や焼土を含む灰黄褐色土である。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

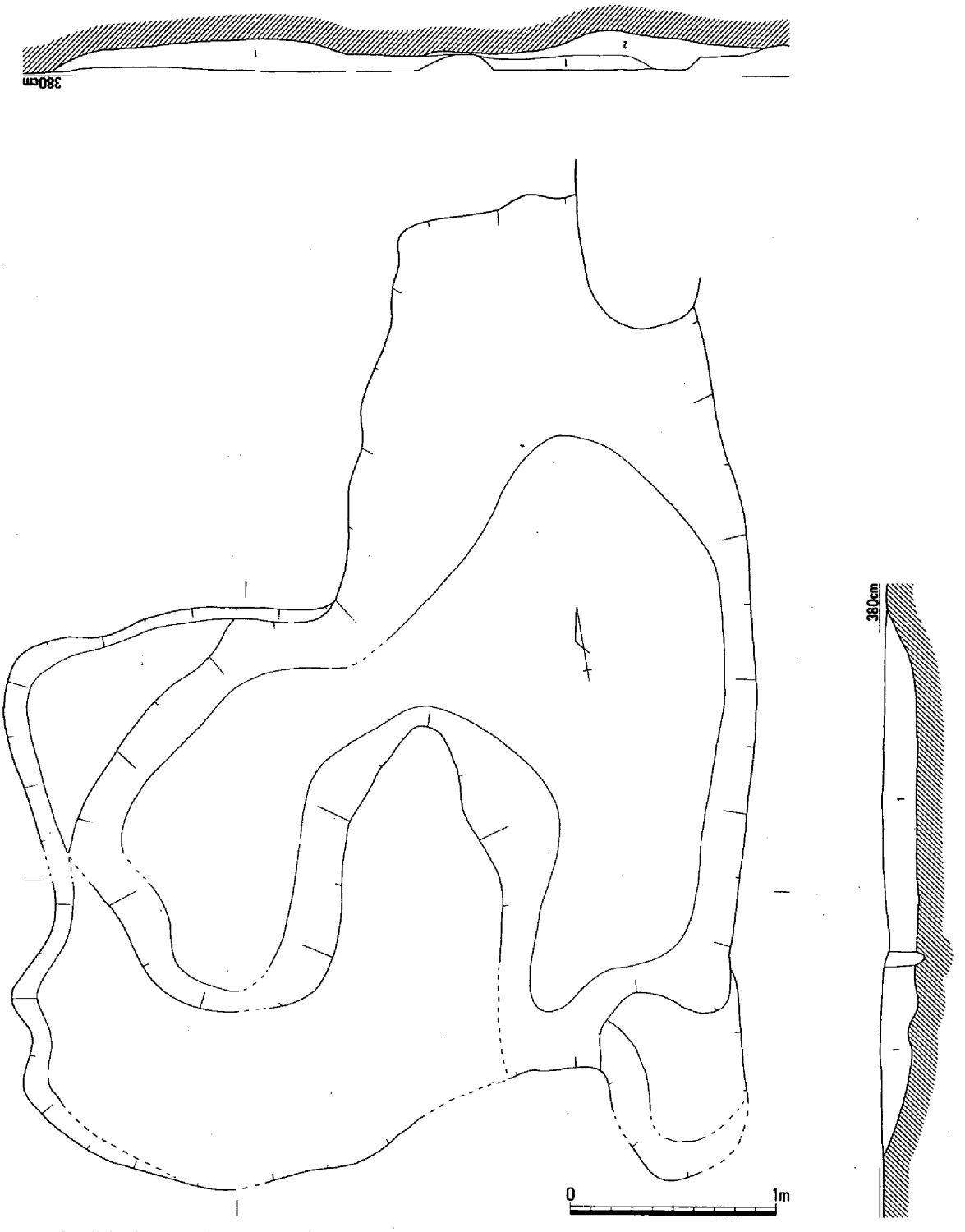
土壙62（第221図）

11C区で検出された土壙で、南西側は一部他の遺構によって切られている。平面形は北西側の狭い短辺に向かって斜めに掘り込むためやや不規則な長方形状を呈する。規模は長さ1.33m、幅76cm、深さ14cmを測る。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立上る。埋土は炭や焼土を含む褐灰色砂質土である。

時期は検出面および埋土に含まれていた土器の細片から中世と考えられる。（平井）

土壙63（第222図）

11D区で検出された土壙で、南西側は調査区外になる。平面形はやや変形した楕円形と推定され



1．暗灰黄色（2.5Y5/2）微砂質土（炭・焼土粒含）　2．灰黄褐色（10YR4/2）土（炭・焼土粒含）

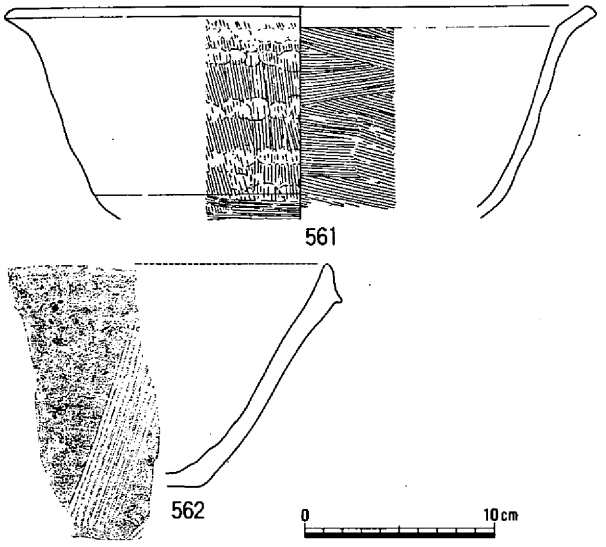
第217図　土壙59

る。土壙の底部は平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は炭や焼土を含む暗灰黄色土である。

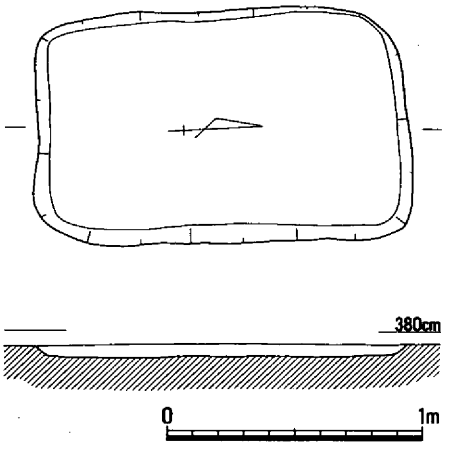
時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

土壙64（第223図）

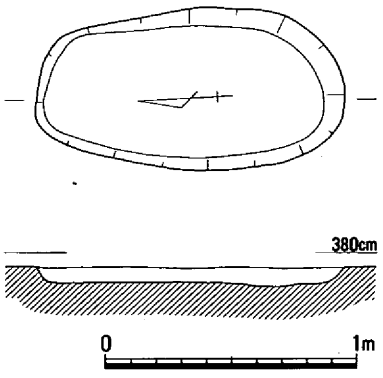
11C区で検出された土壙である。平面形は検出面で方形を呈するが、底部は長方形になる。規模は



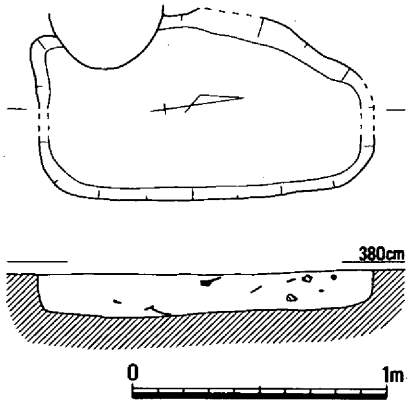
第218図　土壙59出土遺物



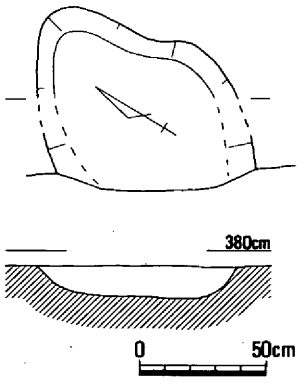
第219図　土壙60



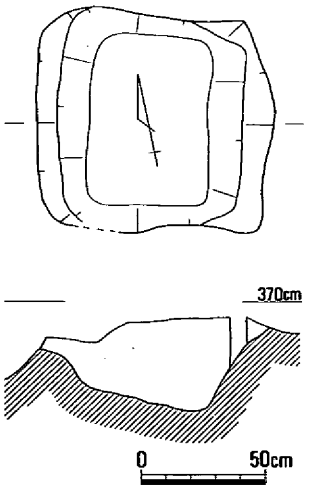
第220図　土壙61



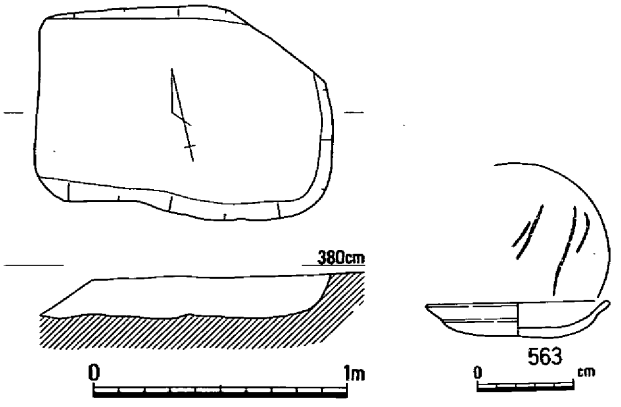
第221図　土壙62



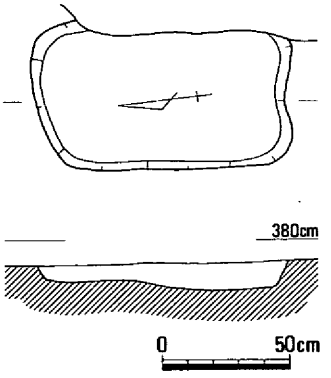
第222図　土壙63



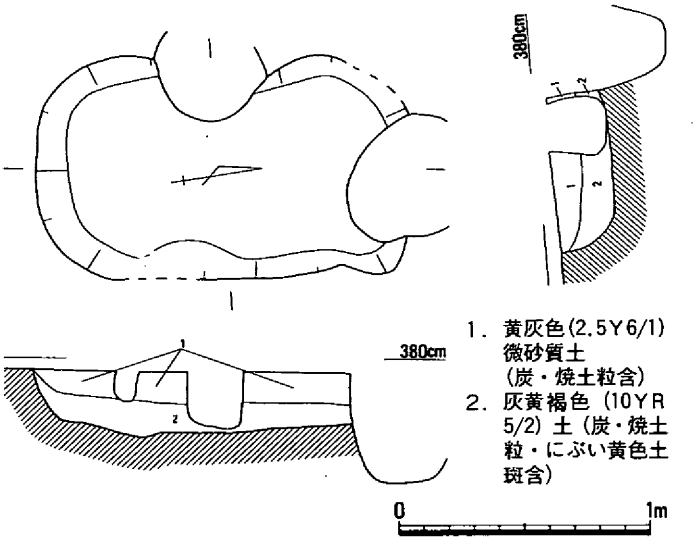
第223図　土壙64



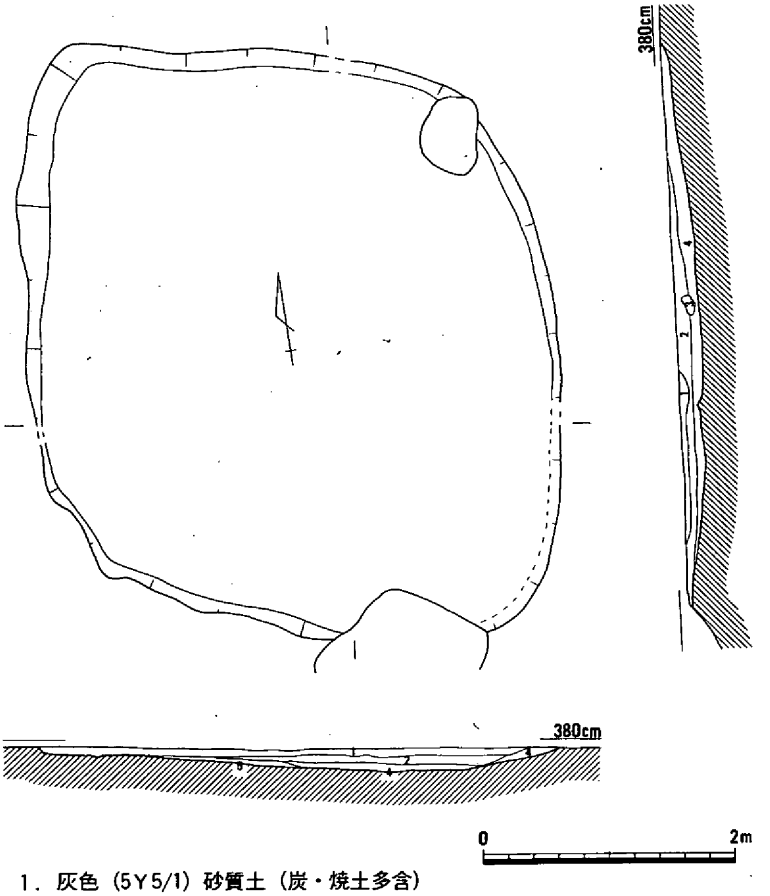
第224図　土壙65・出土遺物



第225図　土壙66



第226図　土壙67



1．灰色（5Y5/1）砂質土（炭・焼土多含）
2．灰色（5Y6/1）砂質土（鉄分・マンガン多含）
3．にぶい黄色（2.5Y6/4）砂　4．浅黄色（5Y7/3）砂
5．黄灰色（2.5Y6/1）砂質土（マンガン多含）

第227図　土壙68（S：1/60）

検出面で東西が94cm、南北86cm、深さ38cmを測るが、底部は南北66cm、東西46cmになる。底部は西側より東側が深くなるが、凹凸はない。壁は急傾斜で立上る。埋土は焼土や炭を含む灰黄褐色土である。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。　（平井）

土壙65（第224図）

11Ｃ区で検出された土壙で、西端部および北東角は他の遺構に切られている。規模は残存長1.18m、幅84cm、深さ16cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は焼土や炭を含む褐灰色砂質土である。

遺物は瓦器の小皿が出土した。内面には暗文が認められる。時期は室町時代と考えられる。（平井）

土壙66（第225図）

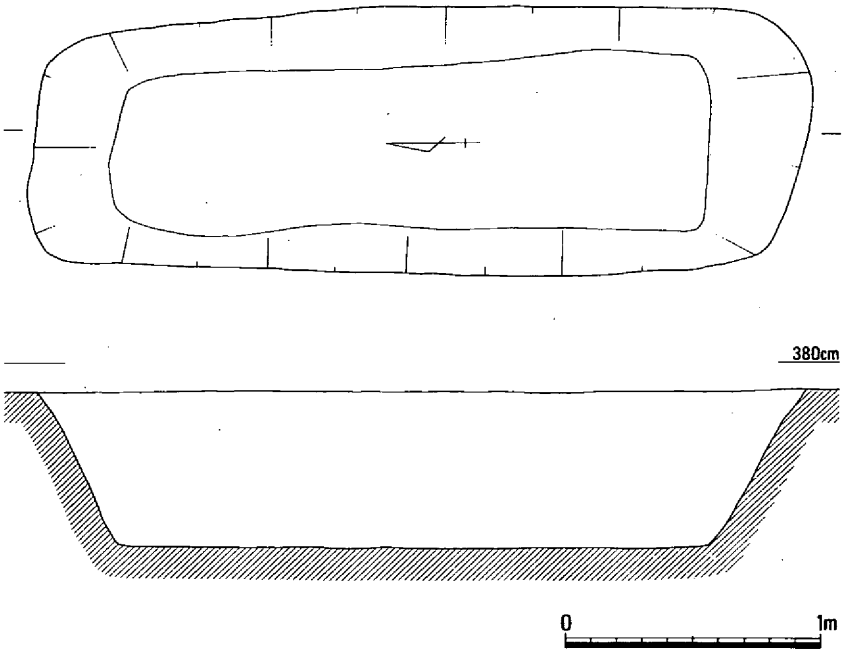
11Ｃ区で検出された土壙で、東側は他の遺構によって切られている。平面形は隅の丸い長方形を呈する。規模は長さ１m、現存幅55cm、深さ10cmを測る。底部は北側より南側が深くなっており、壁は急傾斜で立上る。埋土は焼土を含む黄灰色砂質土である。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。　（平井）

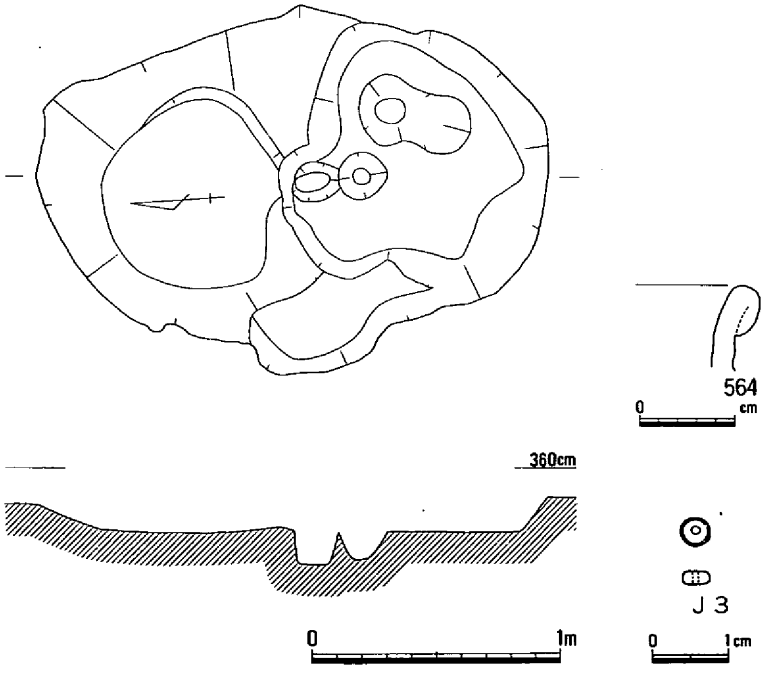
土壙67（第226図）

12C区で検出された土壙で、北端および西側の一部は他の遺構によって切られている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.48m、幅88cm、深さ26cmを測る。底部は多少凹凸があるが、ほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は二層に分かれ、いずれにも炭や焼土を含む。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。　（平井）



第228図　土壙69



第229図　土壙70・出土遺物

土壙68（第227図、図版33）

12C区で検出された浅い土壙で、南側および北東端の一部は他の遺構に切られている。平面形はやや不整形な方形を呈する。規模は東西2.1m、南北2.3m、深さ10cmを測る。底部は中央から南東よりが最も深く、壁際に向かって徐々に浅くなる。壁の立上りも緩やかで、全体として皿状になっている。埋土は三層からなっている。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。　（平井）

土壙69（第228図、図版33）

12C・D区で検出された土壙である。平面形は長方形を呈する。底部は平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は明黄褐色土をブロックで含む暗灰黄色土である。規模は長さ3.06m、幅1.07m、深さ62cmを測る。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。　（平井）

土壙70（第229図）

13C区で検出された土壙である。平面形は楕円形状を呈する

が、いくつかの土壙やピットが重なったようにも見える。しかし、埋土は同じであり、切り合い関係も認められなかったことから、一つの遺構とした。規模は長さ2.04m、幅1.44mを測る。

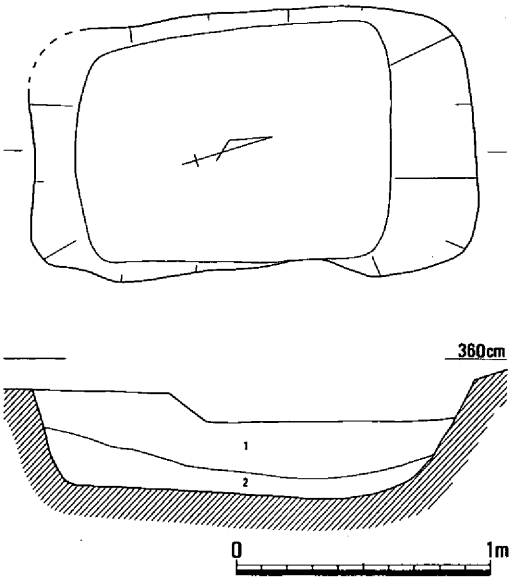
遺物は備前焼および滑石製の臼玉１点が出土した。時期は室町時代と考えられる。　（平井）

土壙71（第230図）

13Ｃ区で検出された土壙である。平面形は長方形を呈する。規模は長さ1.72m、幅１m、深さ38cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は二層に分かれ、下層には土壙を掘り下げた時の黄色土を多く含む。

時期は検出および埋土から中世と考えられる。

（平井）



1．灰オリーブ色（5Y5/3）土
2．灰オリーブ色（7.5Y4/2）土（黄色土粒多含）

第230図　土壙71

土壙72（第231図）

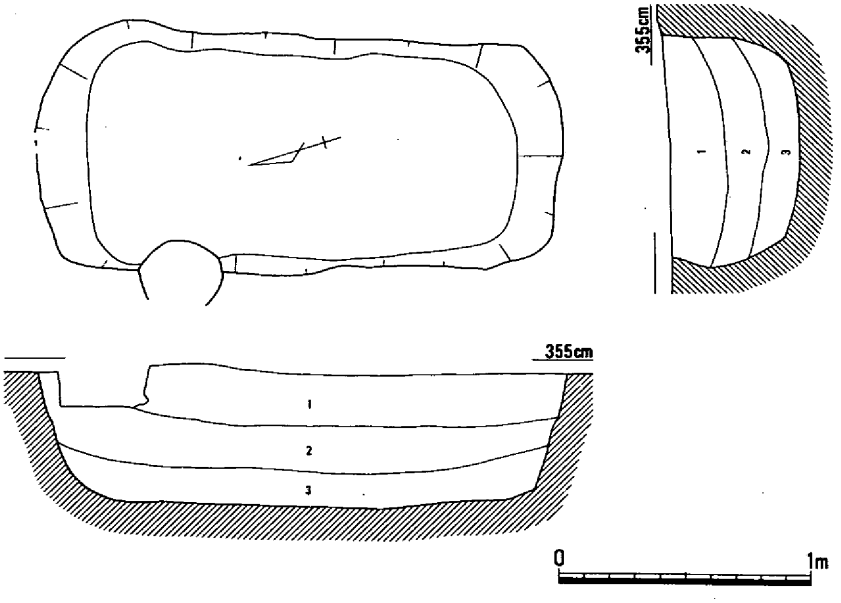
14Ｃ杭の北５ｍで検出した土壙で、北端を溝84に切られている。平面形はやや隅丸の長方形を呈し、軸線を南北からやや西に振っている。規模は長さ209cm、幅88cm、深さ53cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は垂直近くに立ち上がる。埋土は三層で、いずれも水平に堆積している。

遺物には少量の土器片と鉄滓がある。時期は、検出面と遺物から中世と考えられる。　（高田）

土壙73（第232図）

14Ｄ区の北部に位置し、中世洪水で削平された後の平坦面で検出した土壙である。平面形はやや隅丸の長方形を呈し、軸線を南北にもつ。規模は長さ190cm、幅101cm、深さ20cmを測る。底部はほぼ平坦で、東西の壁は垂直に、南北の壁は急斜に立ち上がる。埋土は、上層の微砂と底面に薄く堆積した粘土からなり、いずれも炭と焼土を含む。

遺物には少量の土器片がある。時期は、検出状況と埋土から中世と考えられる。　（高田）

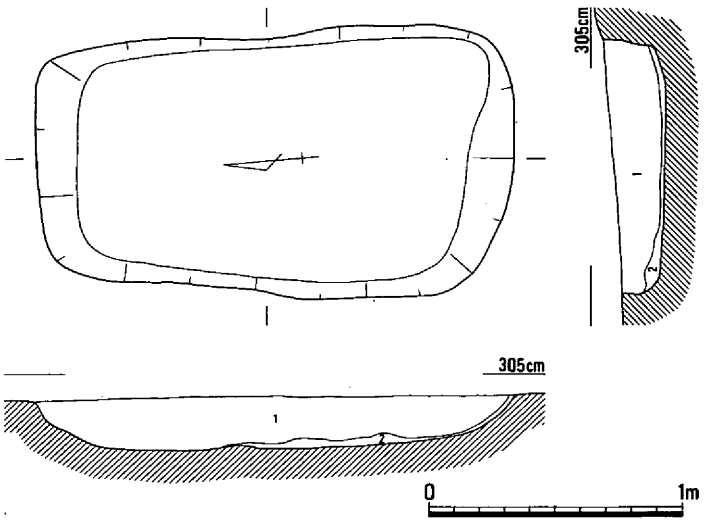


1．灰黄色（2.5Y6/2）粘性微砂　2．灰黄褐色（10YR6/2）砂質土
3．褐灰色（10YR5/1）粘質土

第231図　土壙72

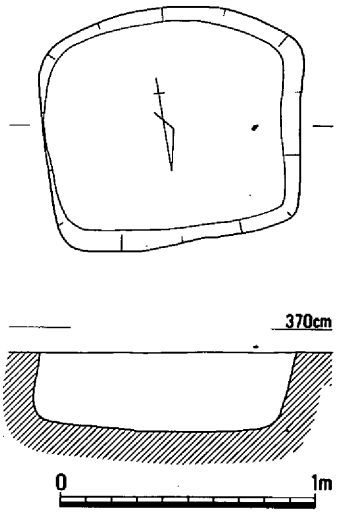
土壙74（第233図）

14Ｃ区の中央やや西寄りで検出した土壙である。平面形はほぼ方形を呈し、規模は100×95cm、深さ30cm

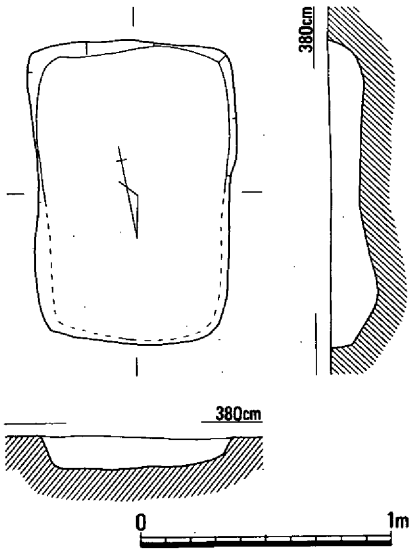


1．黄褐色（2.5Y5/3）微砂（青灰色粘土含，炭・焼土粒少含）
2．青灰色（5BG6/1）粘土（炭・焼土粒少含）

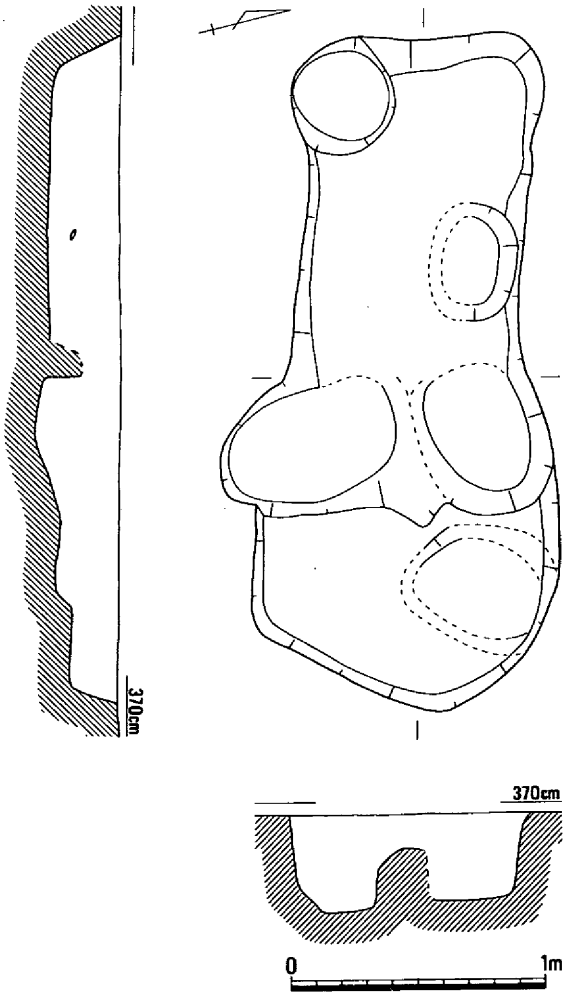
第232図　土壙73



第233図　土壙74



第234図　土壙75



第235図　土壙76

を測る。底部はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は暗オリーブ色土で、炭と焼土を含む。

遺物には少量の土器片がある。時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

土壙75（第234図）

14C区の中央やや東寄りで検出した土壙である。平面形は長方形を呈し、軸線をほぼ南北にもつ。規模は長さ120cm、幅75cm、深さ13～19cm

を測る。底部はやや凹凸があり、壁は垂直近くに立ち上がる。埋土は灰白色粘質微砂である。

遺物には少量の土器片がある。時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

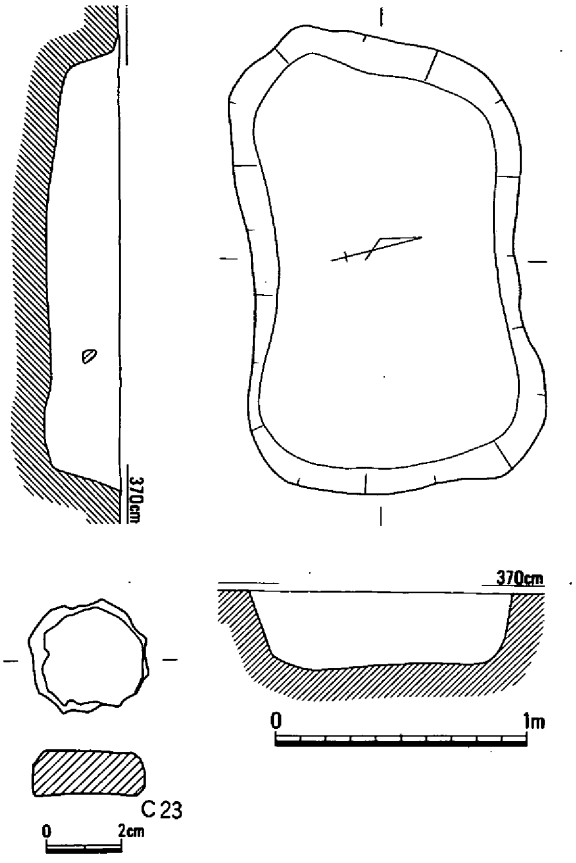
土壙76（第235図、図版34）

14D区で検出した土壙である。土壙77と近接し、さらにその軸線を同一にする。平面形は歪な隅丸の長方形を呈し、軸線をほぼ東西にもつ。規模は長さ268cm、幅76～131cm、深さ30cmを測る。底部には、径40～70cmの円～楕円孔が５箇所に穿たれ、壁は垂直近くに立ち上がる。埋土は灰白色砂質土で、炭と黄色土ブロックを含んでいる。

遺物には少量の土器片がある。時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

土壙77（第236図、図版34）

14D区で検出した土壙である。平面形は歪な隅丸の長方形を呈し、軸線をほぼ東西にもつ。規模は長さ180cm、幅95cm、深さ30cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は垂直近くに立ち上がる。埋土は灰白色砂質土で、炭と黄色土ブロックを含んでいる。



第236図　土壙77・出土遺物

遺物は少量の土器片と円盤状土製品がある。検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

土壙78（第237図）

15C区の西部で検出した土壙で、井戸18と溝89～91に切られている。調査区外に広がるため、その全容は明らかではないが、平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられる。規模は北西－南東長9.5m、南西－東北長4.3m、深さ15cm前後を測る。底面はほぼ平坦だが、径20～35cmの円孔が穿たれ、東西方向の浅い溝93も掘削されている。壁は南壁が急斜に、西壁が緩やかに立ち上がり、埋土は灰白色粘質微砂で、炭を含む。

遺物には少量の土器片がある。時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

土壙79（第238図）

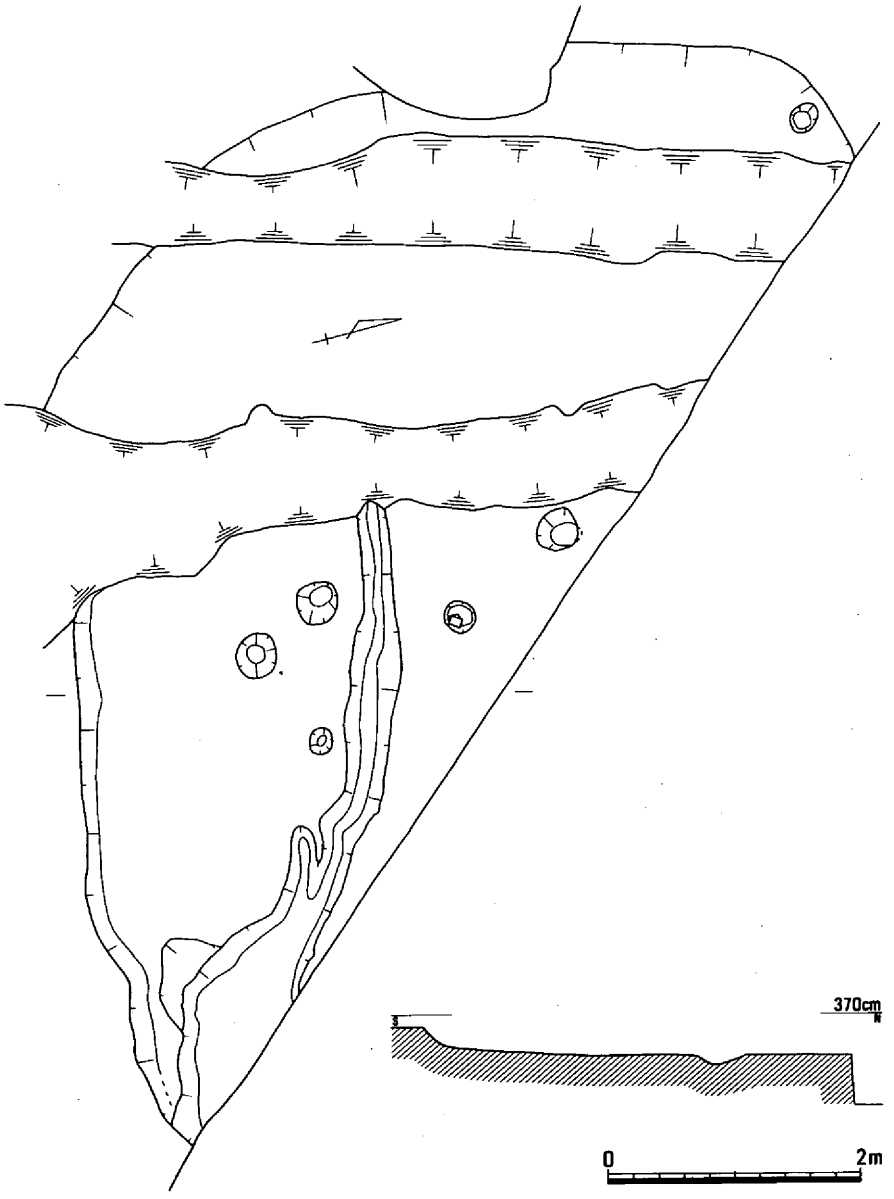
15C区で検出した土壙である。平面形は卵形を呈し、軸線をほぼ東西にもつ。規模は長さ105cm、幅77cm、深さ27cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。埋土は砂と砂質土のブロックを一気に充填しており、人為的な堆積である。

遺物には少量の土器片がある。時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

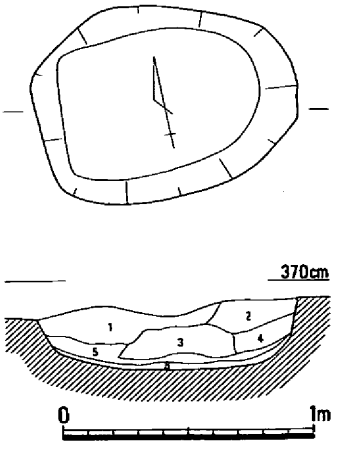
土壙80（第239図）

15D区で検出した浅い土壙である。平面形は長方形を呈し、軸線を南北にもつ。規模は長さ160cm、幅97cm、深さ５～８cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がるようである。埋土は浅黄色微砂で、炭を含んでいる。

遺物には少量の土器片がある。時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

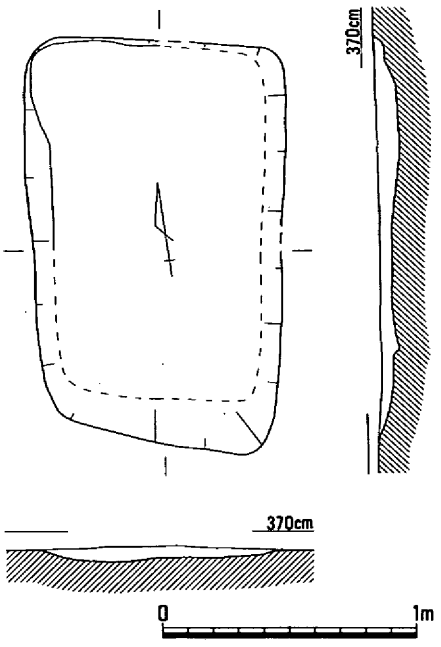


第237図　土壙78（S：1/60）



1．明黄褐色(7.5YR7/6)砂とオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂の混合
2．灰黄色(2.5Y6/2)砂質土
3．黄灰色(2.5Y6/1)砂
4．黄灰色(2.5Y5/1)砂
5．浅黄色(2.5Y7/4)砂質土
6．灰黄色(2.5Y6/2)砂質土

第238図　土壙79



第239図　土壙80

(3) 土　壙　墓

土壙墓1（第240図、図版34）

12C区のほぼ中央で検出した土壙墓で、その東半を落ち込み3で切られている。平面形は東辺がやや湾曲するものの、隅丸長方形を呈する。規模は長さ92cm、幅59cm、深さ40cmを測り、ほぼ平坦な底から壁が垂直に立ち上がる。埋土は暗灰黄色砂質土である。

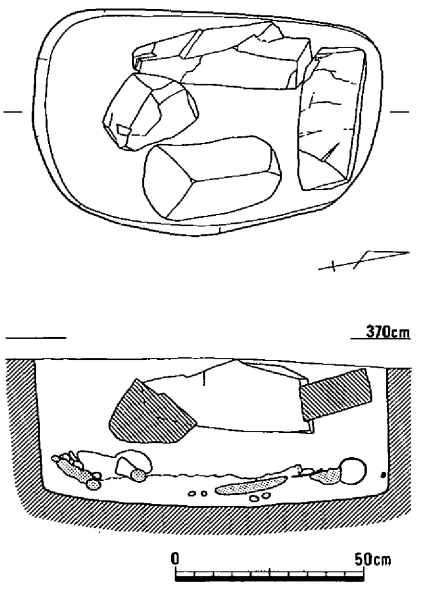
土壙内の上部には、長さ20～50cm、厚さ10～18cmを測り、平坦面をもつ4個の角礫がある。四角く並ぶが、平坦面の向きと礫底のレベルが一定していないことから、原位置を移動しているものと思われる。人骨はこの角礫を除去して検出したもので、頭を北に、左を下にして両手両足を折り畳んだ横臥屈位で埋葬されていた。体を土壙壁にほぼ接し、底面からは1～5cm浮いての出土である。遺存状態は比較的良好だが、肋骨と脊椎骨についてはほとんど土質化していた。その性別と年齢は、男性で壮年前半と推定される（付載3）。

遺物には少量の弥生土器、土師器、土師質高台付椀片があるが、副葬品等の出土はない。

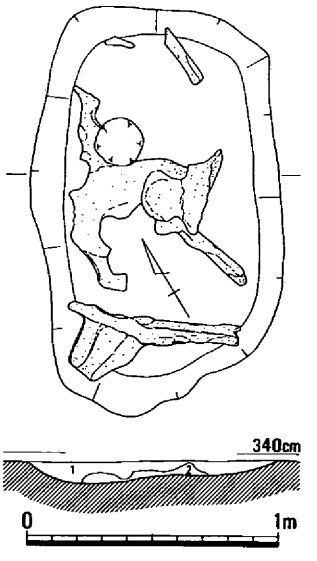
以上のことから土壙墓は、遺体を土壙内に直に埋納し、土砂で埋積した後、その上部に角礫を配したもので、時期は検出面と埋土から中世と考えられる。また人骨は、中世人の形質的な資料として貴重なものとなろう。（高田）

土壙墓2（第241図）

20C区の南端で検出した土壙墓である。平面形は歪な長方形を呈し、規模は長さ163cm、幅100cm、深さ6～9cmを測る。底はほぼ平坦だが、やや西側に傾いている。埋土は灰白色粘土で、底面には人



第240図　土壙墓1



1．灰白色粘土　2．人骨

第241図　土壙墓2

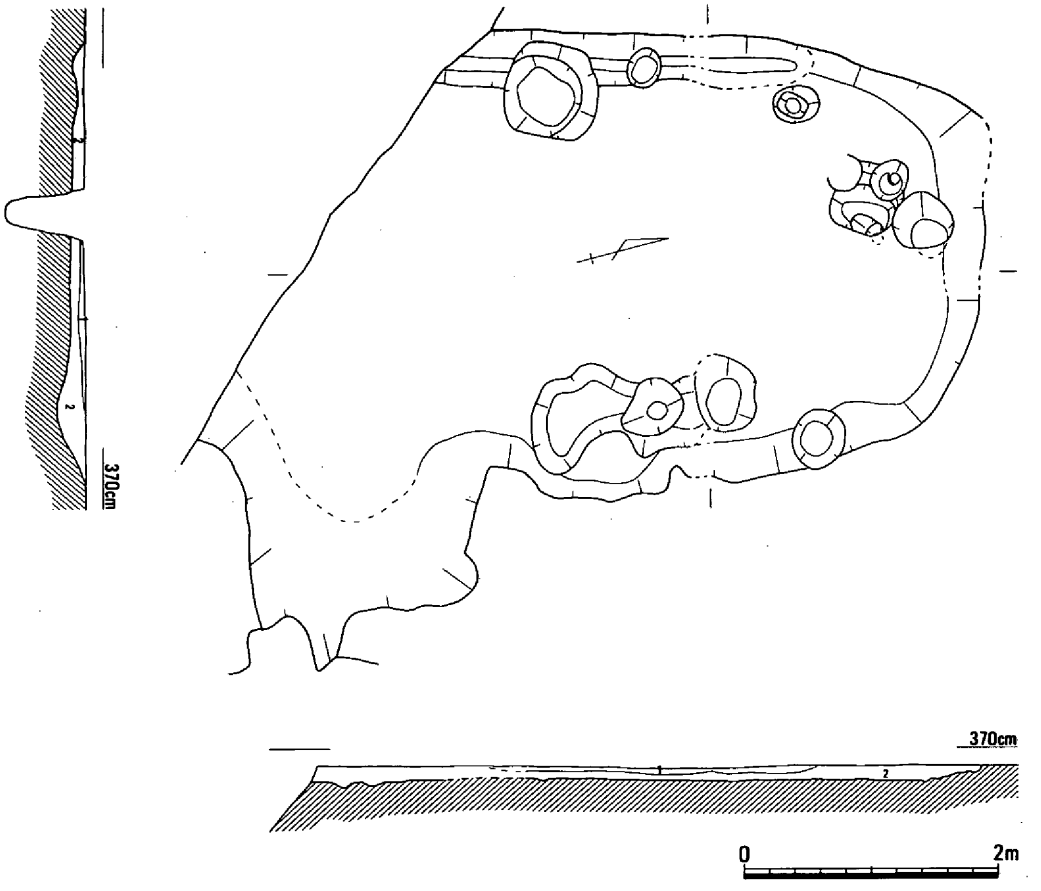
骨片が広がっている。ほとんど土質化しているため、その形状、大きさ、部位等は不明である。長軸方向を南北からやや西に振ることから、頭位は北にあるものと考えられる。

遺物は少量の土器片があるが、時期の判る資料はない。検出面と埋土から中世と考えたい。(高田)

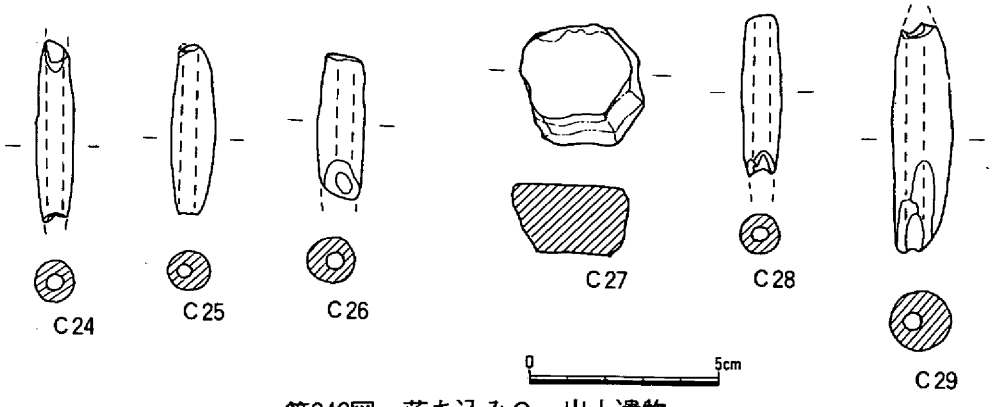
(4) 落ち込み

落ち込み２（第242図、図版35・72）

12C・D区で検出された浅い凹みで、南西側は調査区外へ延びる。平面形は南北に長軸をむける長方形に、南東辺の南寄り側の一部が東へ張り出しているような形状を呈する。底部は多少凹凸が認め



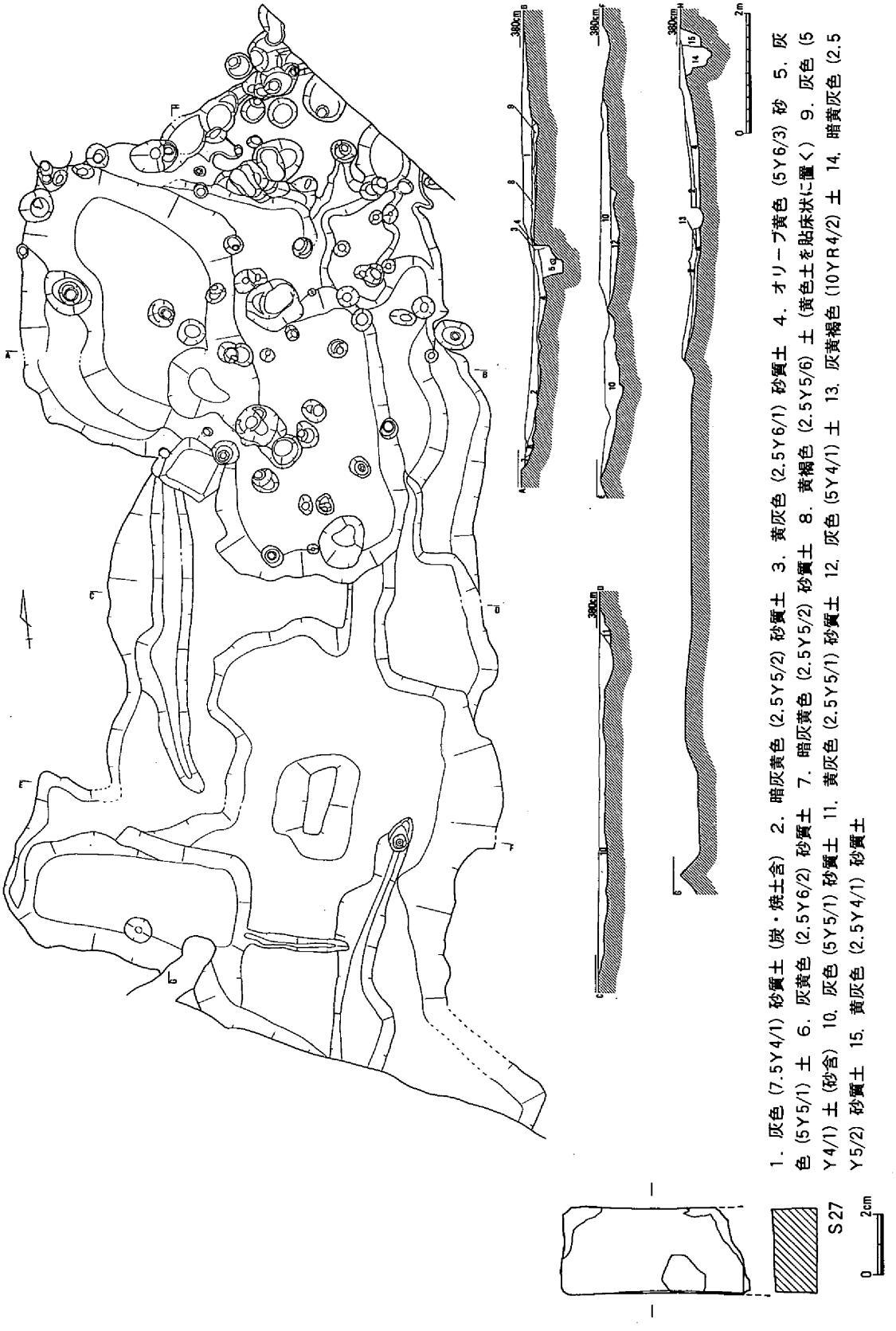
1．浅黄色（7.5Y7/2）微砂（灰オリーブ色粘質微砂混）　2．にぶい黄色（2.5Y6/3）微砂（浅黄色粘質土ブロック含，炭・焼土粒含，下面に炭層）



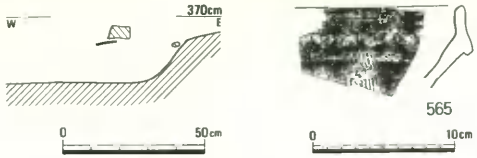
第242図　落ち込み２・出土遺物

られ、壁は緩やかに立上る。また底部には大小のピットが穿たれている。埋土は二層に分かれるが、このうち２層には炭や焼土を含み、その下面は炭の層が認められた。

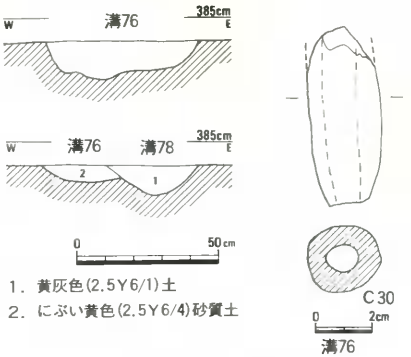
時期は埋土および検出面から中世と考えられる。　（平井）



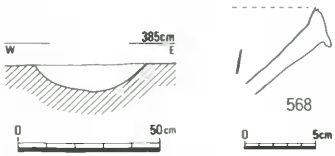
第243図　落ち込み３・出土遺物（Ｓ：1/100）



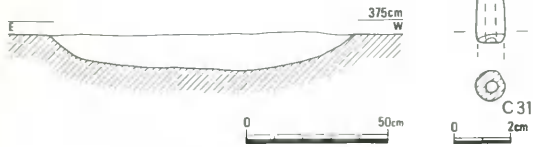
第244図　溝75・出土遺物



第245図　溝76・78・出土遺物



第246図　溝77・出土遺物



第247図　溝79・出土遺物

落ち込み3（第243図、図版71）

11・12D区で検出された浅い凹みである。ほぼ南北に長い凹みであるが、南側は中世以後の氾濫によって削られ、北側は調査区外へ延びる。平面形同様、土壙内も不定形な掘り込みで、底部も凹凸が著しい。また、北半部にはピットが集中している。

遺物は砥石が1点出土した。砥石は長方形で約3分の1は欠損していると思われる。時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

(5)　溝

溝75（第244図）

10D区で検出された溝で、ほぼ北西から南東方向に流走する。溝の北西端は調査区外へ延び、南東側は5mほどで一旦途切れた後また2mほど検出され、その先は消えてしまう。規模は幅30～60cm、深さ15cmを測る。底部は平坦で、壁は急傾斜で立上る。

遺物は備前焼の摺鉢が出土した。時期は室町時代と考えられる。（平井）

溝76（第245図）

10・11C・D区で検出された溝で、溝77と平行にほぼ南北に流走する。溝は北端、南端ともに調査区外へ延び、また南半は溝78が上に重なる。規模は長さ27m、幅54cm、深さ13cmを測る。底部は多少凹凸が認められるが、ほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。

遺物は土師器と土錘が出土した。567は土師器の土鍋である。時期は室町時代と考えられる。（平井）

溝77（第246図）

11D区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝の南端は調査区外へ延びるが、北端は11mほどで終る。規模は幅40cm、深さ10cmを測る。底部は丸みをもち、壁はやや緩やかに立上る。埋土は黄灰色土である。

遺物は備前焼の摺鉢が出土した。溝の時期は室町時代と考えられる。（平井）

溝78（第245図）

11D区で検出された溝で、溝76の南半部を重なりながら南北に流走する。溝の南端は調査区外へ延びるが北端は12mあまりで終る。規模は幅30cm、深さ10cmを測る。底部は中央部が最も深く、ほとんど平坦部をもたないまま壁がやや緩やかに立上る。

遺物は備前焼の甕が出土した。口縁端部は折り返してやや幅の広い玉縁をつくり出している。溝の時期は溝76より新しいが、出土遺物から近世まで下ることはないと考えられる。（平井）

溝79（第247図）

11D区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝の南端は調査区外へ延びるが、北端は８ｍあまりで途切れる。規模は幅1.05m、深さ13cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立上る。埋土は黄灰色粘質微砂である。

遺物は土錘が出土した。遺構の時期は中世と考えられる。（平井）

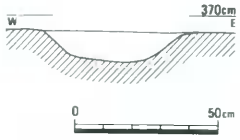
溝80（第248図）

11C区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。北端は調査区外へ延びるが、南端は７ｍほどで終る。規模は幅50cm、深さ10cmを測る。底部は平坦で、壁はやや緩やかに立上る。埋土は炭や焼土を少し含む灰黄褐色土である。

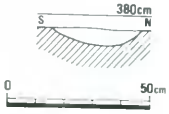
時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

溝81（第249図）

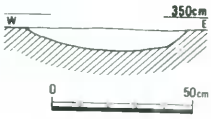
13C区で検出された溝で、ほぼ東西に流走する。溝の東端は調査区外へ延びるが、西端は３ｍあまりで終る。規模は幅30cm、深さ６cmを測る。底部は弧を描き、壁はやや緩やかに立上る。埋土はにぶい黄色粘質微砂である。



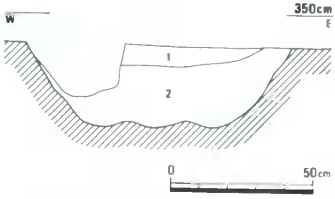
第248図　溝80



第249図　溝81

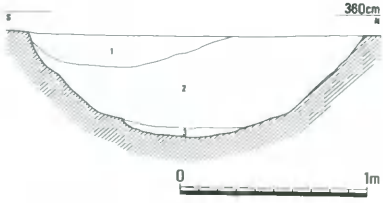


第250図　溝82



1．灰黄色（2.5Y6/2）粘質微砂（炭・焼土粒少含）
2．黄灰色（2.5Y5/1）粘質微砂（炭・焼土粒少含）

第251図　溝83



1．灰色（5Y5/1）粘性微砂
2．黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
3．灰色（10Y4/1）粘土（炭粒含）

第252図　溝84

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

溝82（第250図）

13C区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝の北端は調査区外へ延び、南端は中世以後の氾濫によって削られている。溝は北半部で幅60cm、深さ7cmであるが、南半部は急激に広くなり幅は3m前後を測る。埋土は黄灰色砂質土である。

時期は検出面と埋土から中世と考えられる。（平井）

溝83（第251図）

13C区で検出された溝で、北東部は北東から南西方向へ流走するが、南西部は南へ曲がる。溝の北東端は調査区外へ延びるが、南端は中世以後の氾濫によって削られている。規模は幅94cm、深さ28cmを測る。埋土は二層に分かれるが、いずれにも炭や焼土粒を含む。

時期は検出面ないし埋土から中世と考えられる。（平井）

溝84（第252図）

13・14C区で検出した溝で、直線的な東西溝の西端に南北溝が取り付く。溝の東端は調査区外に延び、南端は近現代用水と中世以降の洪水に削られて不明である。規模は東西溝が幅1.83cm、深さ53cmであるのに対し、南北溝は幅40cm、深さ15cmを測るに過ぎない。溝底は数段に落ち込み、壁は急斜に立ち上がる。一定方向の流水は考え難く、屋敷地等を区画する掘割りのような機能が推定される。

遺物は少量の土器片と鉄滓が出土している。土器には備前焼と土師質高台椀等がある。以上のことから溝の時期は、中世と考えられる。（高田）

溝85（第253図、図版72）

14C・D区を北から南にやや蛇行して流走する溝である。その北端は調査区外に延び、南端は溝87と直角に合流する。溝底は、北半が1つであるのに対し、南半は2つとなり、掘り直しが考えられる。規模は北半で幅85cm、標高327cm、南半で幅170cm、標高315cm～317cmを測る。底はやや凹凸があり、壁は急斜に立ち上がる。溝87・91とともに屋敷地を区画する溝と考えられる。

遺物は、備前焼（569～571）、常滑焼、東播系の鉢、土師質高台椀、瓦、土錘（C32・33）、円盤状土製品（C34～36）等が出土している。以上のことから溝の時期は、室町時代と考えられる。（高田）

溝86（第254図）

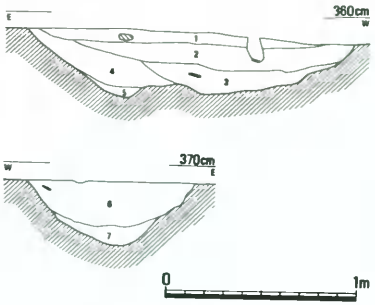
14C区の中央やや南よりで検出した浅い溝状の遺構である。南北に延び、その北端は調査区外に続くものと考えられる。規模は長さ7m、幅100cm、検出面からの深さ13cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰白色粘質微砂である。

遺物には、備前焼や土師質高台椀等の土器片がある。以上のことから溝の時期は、室町時代と考えられる。（高田）

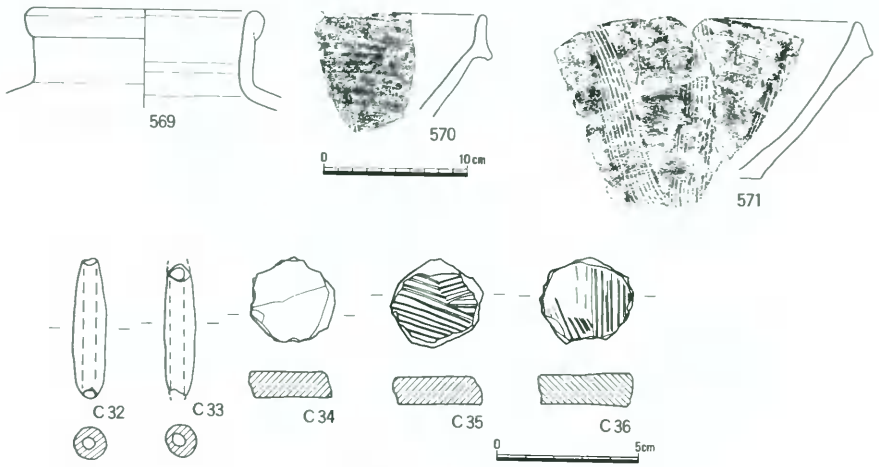
溝87（第255図、図版35・72）

14・15C・D区を東西に流走する溝である。東端は溝91に接続し、14C区のほぼ中央では北側から直角に溝85が合流する。また、溝の西端は調査区外に延びると考えられる。なお溝の上部には、ほぼ同一流路で近世溝があり、大量の土器と礫を出土している。

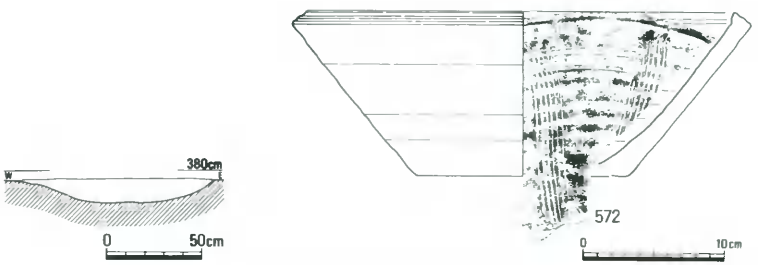
溝の規模は幅150～200cm、標高310～316cmを測り、東から西への流水が考えられる。埋土は褐灰色粘質土で、壁は急斜に立ち上がるが、南壁はやや緩やかとなる。溝85・91とともに屋敷地を区画する溝と考えられ、区画外よりもその内部の遺構密度が高くなることを指摘できる。



1．灰黄褐色（10YR5/2）粘質微砂
2．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂
3．黄灰色（2.5Y5/1）粘土
4．灰褐色（7.5YR5/2）粘質土
5．褐灰色（7.5YR5/1）粘質土
6．灰白色（7.5Y7/2）粘性微砂
7．灰色（7.5Y6/1）微砂粘土



第253図　溝85・出土遺物

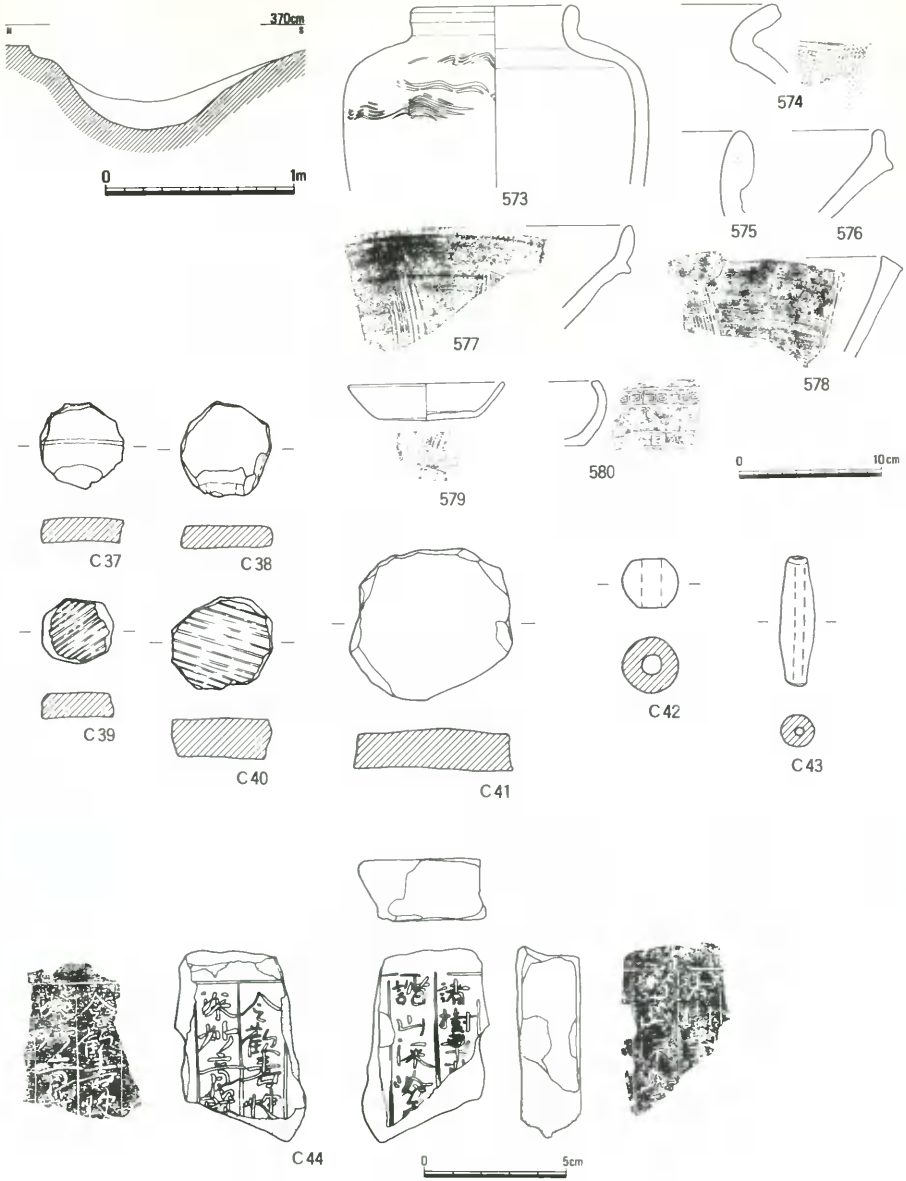


第254図　溝86・出土遺物

遺物は土器片と土製品が出土している。土器は、備前焼の壺（573）、甕（575）、摺鉢（576～578）、亀山焼の甕（574）、土師質の小皿（579）、瓦質の火舎（580）等である。土製品には、円盤状土製品（C37～41）と土錘（C42・43）がある。また特筆すべき遺物として、上部の近世溝から出土したC44の瓦経片がある。上面と一方の側面を残して他は欠落し、大きさは縦6.8㎝、横4.6㎝、厚さ2.2㎝で

縦の罫線間は1.6cmを測る。表裏に書かれた経文は法華経である。瓦経の出土としては県内では6例めで、近隣では岡山市沢田出土の瓦経がある。同じ法華経を書写していることと、その規格の類似性が指摘されている（註2）。

遺物には時期幅が認められるものの、概ね室町時代に機能した溝と考えられる。（高田）

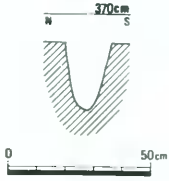


第255図　溝87・出土遺物

溝88（第256図）

14・15Ｃ区の北６ｍで検出した溝である。南北に流走するもので、15Ｄ杭の北で東西の溝と直交し、その北端は調査区外に延びると考えられる。規模は、南北溝で長さ10m、幅16cm、検出面からの深さ24cm、東西溝で長さ1.5m、幅13cm、深さ４cmを測る。断面形は「Ｖ」字形を呈し、埋土は灰オリーブ色土である。

遺物は少量の中世土器片等がある。溝の時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）



第256図　溝88

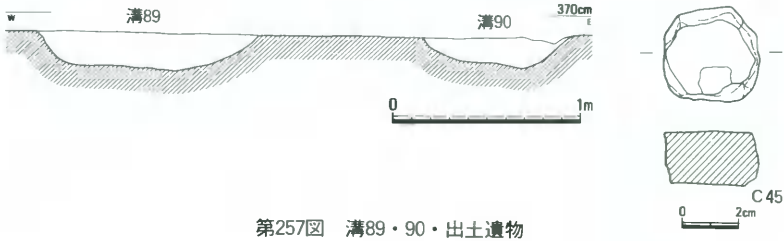
溝89（第257図）

15Ｃ区の東部に位置し、溝90に平行する溝で、井戸18に切られている。その北端は調査区外に延び、南端は溝87に接している。規模は幅120cm、検出面からの深さ19cmを測る。底面はほぼ平坦で、井戸より北の西壁際には浅い溝がある。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰色粘質微砂である。

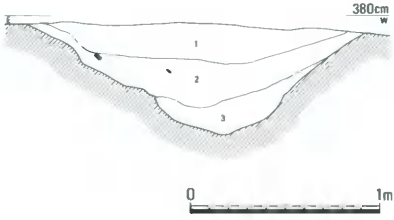
遺物は少量の中世土器片がある。溝の時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

溝90（第257図）

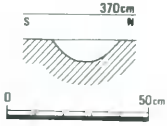
15Ｃ区の東部に位置し、溝89に平行する溝である。その北端は調査区外に



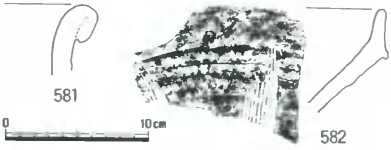
第257図　溝89・90・出土遺物



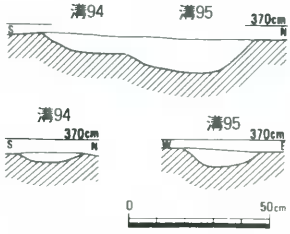
1．にぶい黄色（2.5Y6/4）粘質微砂
2．にぶい黄色（2.5Y6/3）微砂粘土
3．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土



第259図　溝93



第258図　溝91・出土遺物



第260図　溝94・95

延び、南端は溝87に接している。規模は幅78cm、検出面からの深さ15cmを測る。底面はやや凹凸があり、壁は急斜に立ち上がる。埋土は溝89と同様、灰色粘質微砂である。

遺物は少量の中世土器片と円盤状土製品がある。溝の時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。（高田）

溝91（第258図）

15C区の東部に位置し、南北に流走する溝である。その北端は調査区外に延び、南端は溝87に接続する。規模は幅177cm、検出面からの深さ59cmを測り、標高は300cmで溝87よりは若干深い。底面はやや凹凸があり、断面形は「V」字形を呈する。

遺物は備前焼の甕（581）と摺鉢（582）、土師質高台付椀等の土器片がある。以上のことから溝の時期は、室町時代と考えられる。（高田）

溝92

15C区の土壙78の底面で検出した浅い溝である。東西に流走するが、その東端は調査区外に延びると考えられる。規模は長さ5.5m、幅24～75cm、検出面からの深さ5cm前後を測る。埋土は土壙78と同様、灰白色粘質微砂である。埋土に差異がないこと、ほぼ土壙底面に収まるとみられることから、土壙78に伴う溝と考えられる。

遺物はないが、その検出状況から中世と考えられる。（高田）

溝93（第259図）

15C区の中央やや東南部に位置し、土壙78を切って東西に流走する溝である。規模は長さ3.8m、幅23cm、検出面からの深さ7cmを測る。壁は急斜に立ち上がり、埋土はオリーブ黒色土である。

遺物は少量の中世土器片がある。溝の時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。（高田）

溝94（第260図）

15D区に位置し、屋敷地の東北角を画する溝と考えられる。溝95と切り合い、その西端は15ライン付近で消滅する。規模は、東西で長さ9.8m、幅63cm、深さ12cm、南北で長さ6.1、幅34cm、深さ5cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰オリーブ色砂質土である。埋土における溝95との差異はなく、その先後関係は確認できない。

遺物は少量の中世土器片等がある。溝の時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。（高田）

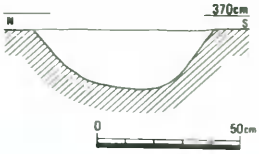
溝95（第260図）

14・15D区を東西に流走する溝である。東端は土壙80に切られることを確認しているが、後世の撹乱が激しいため不明な点が多い。また西端は調査区外に延び、『百間川原尾島遺跡2』の「溝88」につながる可能性が高い。規模は幅50cm、深さ13cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。埋土は灰オリーブ色砂質土である。この溝は屋敷地の北端を画するものと考えられ、『百間川原尾島遺跡2』の中世の建物や井戸との関連が指摘できよう。

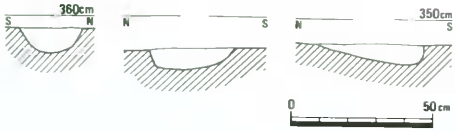
遺物は少量の中世土器片等がある。溝の時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。（高田）

溝96（第261図）

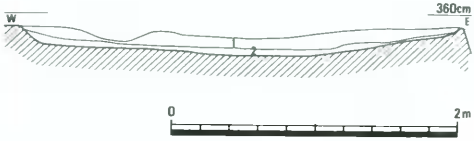
15C・D区に位置し、屋敷地の北西角を画する溝と考えられる。溝94とは6.3m離れてほぼ対照的な位置にあり、溝95の延長線上にもあたる。また、その両端は調査区外に延びると考えられる。規模は幅63cm、深さ21cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。埋土は溝94・95と同様に灰オリーブ色砂質土である。



第261図　溝96

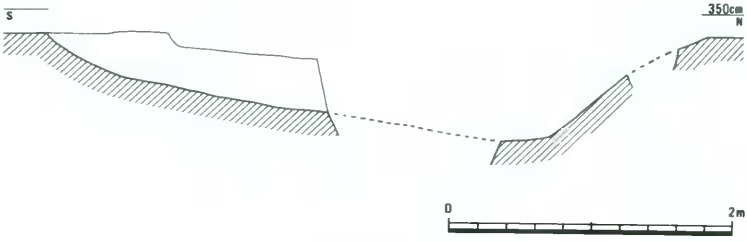


第262図　溝97



1．にぶい黄褐色(10YR5/2)粘質土　2．灰黄色(2.5Y6/2)土

第263図　溝98



第264図　溝99

遺物は少量の中世土器片等がある。溝の時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。　（高田）

溝97（第262図）

19～21D区で検出された溝で、ほぼ北西から南東へ流走する。溝の北西端は調査区外へ延びるが、南東端は40mあまりで途切れる。また途中は溝98および溝99によって切られている。規模は幅20～35㎝、深さ6～9㎝を測る。埋土は灰黄色砂である。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。　（平井）

溝98（第263図、図版35）

19C・D区で検出された浅くて幅の広い溝で、北東から南西方向に流走する。溝の北東端は調査区外へ延び、南西端もおそらく調査区外へ延びるものと考えられるが、撹乱のため明確にし得ない。規模は幅3.1m、深さ18㎝を測る。溝の底部は中央がやや深く、壁際に向かって少しづつ浅くなる。壁はやや緩やかに立上る。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。　（平井）

溝99（第264図）

19・20C・D区で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。溝の全長は19mあまりである

が、両端は調査区外へ延びる。北東側の北岸部は攪乱されているため明確ではないが、南西側の南岸部には瘤状の拡張部が認められる。このような拡張部がつく溝は、百間川遺跡群の中世の溝に時々認められるが、機能については不明である。溝の規模は幅４ｍ前後、深さ70cmを測る。第264図は拡張部の断面で、溝の底部より拡張部の底部の方が少し深くなっているが、溝は中央が最も深く、壁際に向かって少しづつ浅くなる。壁はやや緩やかに立上る。埋土はオリーブ灰色粘質土である。

時期は検出面および埋土から中世と考えられるが、溝97よりは新しい。（平井）

溝100

19・20Ｃ・Ｄ区で検出された溝状の遺構で、ほぼ東西に流走する。東端および西端は調査区外へ延びる。溝は深さが一定ではなく、東端から12m付近で底が一旦高くなり、また深い部分が８ｍあまり続いた後、今度は土壙状の深みが南北方向に２基並び、その西側はまた溝になる。これらの遺構は一つ一つが独立して機能していたものとは考えられないが、性格については不明である。

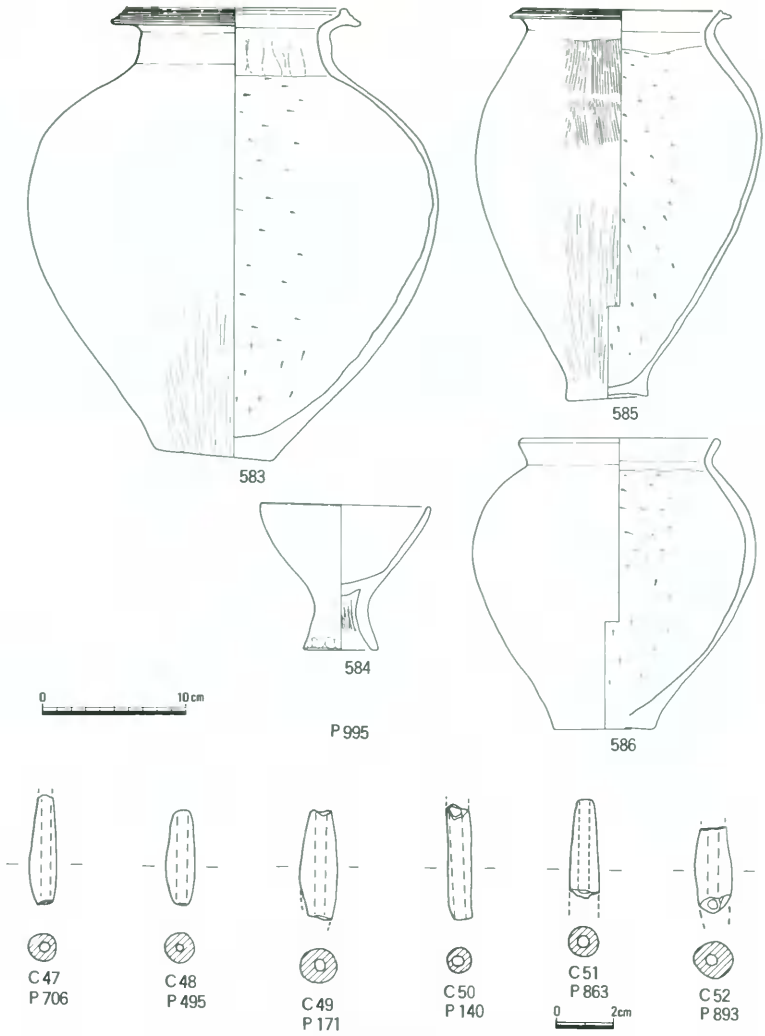
時期は中世と考えられるが、埋土などから近世にさしかかる可能性もある。（平井）

７．その他の遺構および包含層の遺物

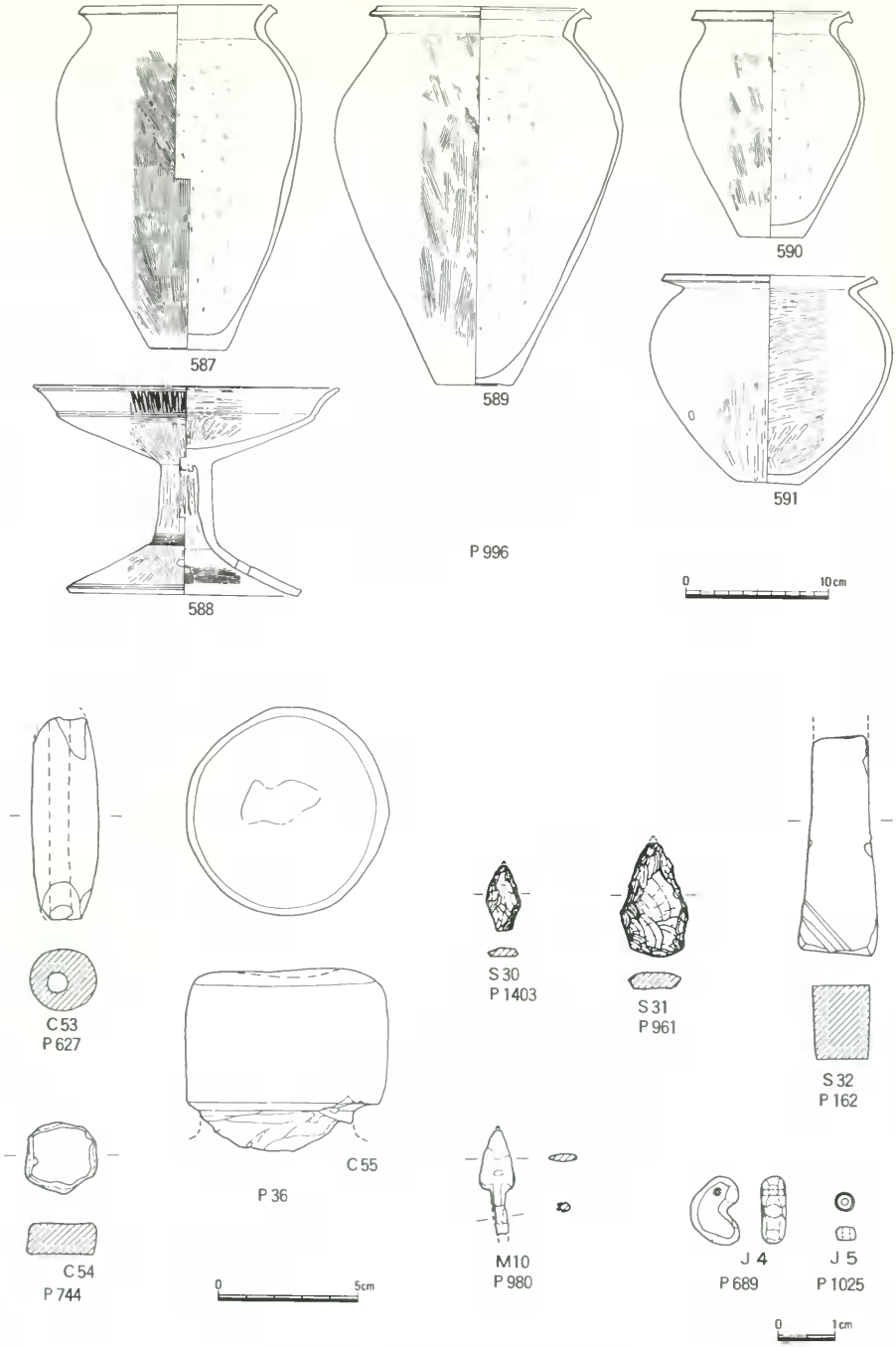
ここに図示した（第265～267図、図版68・71）その他の遺構出土遺物はすべて10～15Ｃ・Ｄ区で検出されたものである。Ｐ995出土の弥生土器は百・後・Ⅱに属する。Ｐ996出土の弥生土器は百・後・Ⅱと考えられる。Ｐ36出土のＣ55は弥生時代後期の土製品で、円柱状の中央が溝状に凹むが半分は欠損している。Ｐ980出土のＭ10は弥生時代後期の銅鏃、Ｐ689出土のＪ４はヒスイの勾玉、Ｐ1025出土のＪ５はガラス製の小玉である。土壙49出土のＭ８は弥生時代後期の銅鏃である。Ｐ195から砥石（Ｓ28）、土錘（Ｃ46）、石錐（Ｓ29）などが出土した。Ｐ162からは砥石（Ｓ32）が出土した。Ｐ744から出土した土製円板（Ｃ54）は中世と考えられる。

包含層出土遺物としては石鏃（Ｓ33・Ｓ34・Ｓ51）、石錐（Ｓ35・Ｓ36）、楔形石器（Ｓ37）、石錘（Ｓ38・Ｓ41）、磨製石斧（Ｓ42）、打製石包丁（Ｓ50）、敲石（Ｓ52）、砥石（Ｓ43～45・Ｓ47・48）、石製紡錘車（Ｓ46）、メノウ製棗玉（Ｊ６）、板状鉄斧（Ｍ11）、土錘（Ｃ56～88）などがある。このうち土錘は、多くのものが細長くて中央部が少しふくらむものであるが、Ｃ57・Ｃ58・Ｃ59のように竹輪状を呈するもの、また楕円形の中央に溝をめぐらすもの（Ｃ87）なども認められる。（平井）

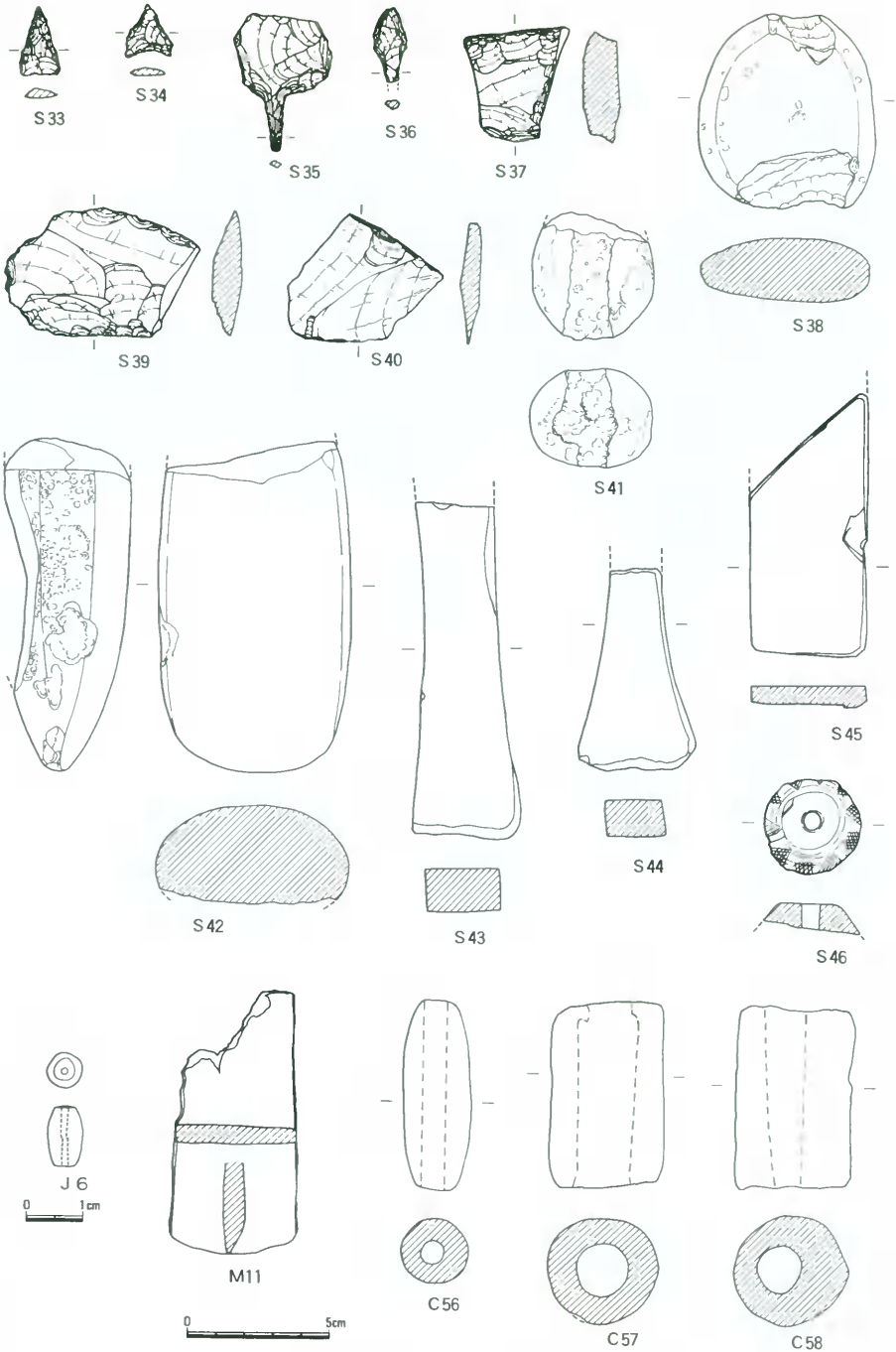
第265図　その他の遺構出土遺物（１）



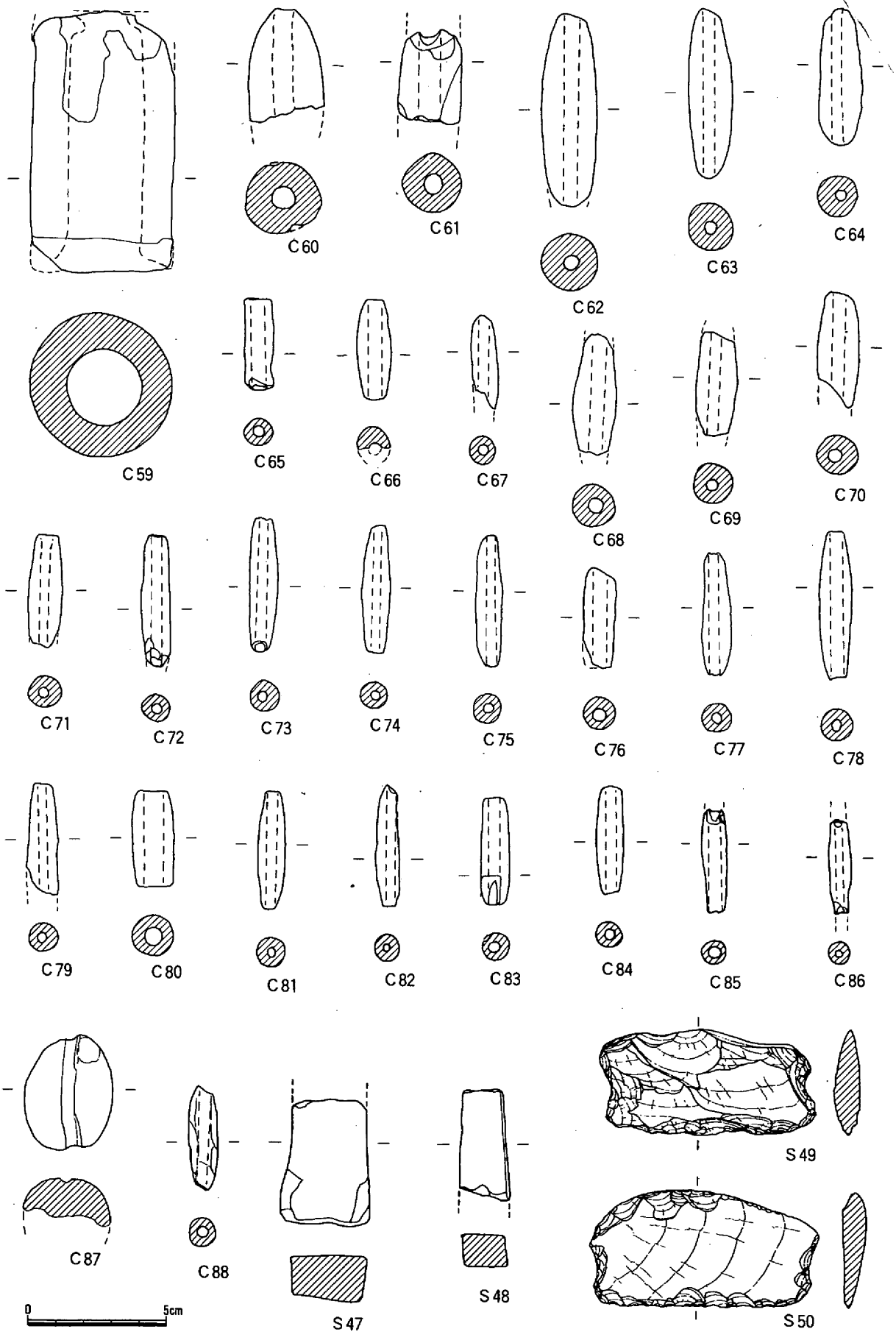
第266図　その他の遺構出土遺物（２）



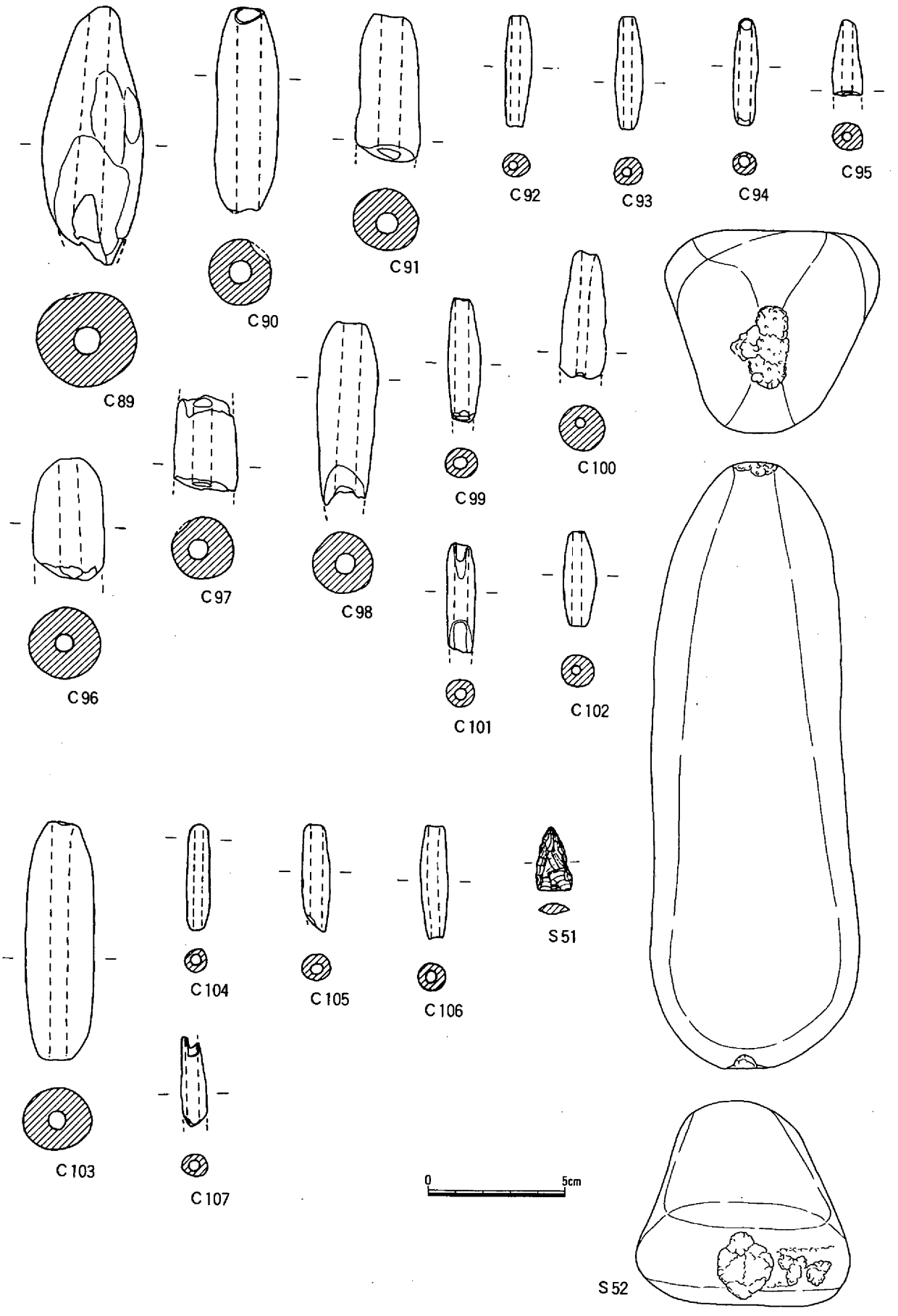
第267図　その他の遺構出土遺物（3）



第268図　包含層出土遺物（１）〈10～13C・D区〉



第269図　包含層出土遺物（2）〈10～13C・D区，13～15C・D区〉



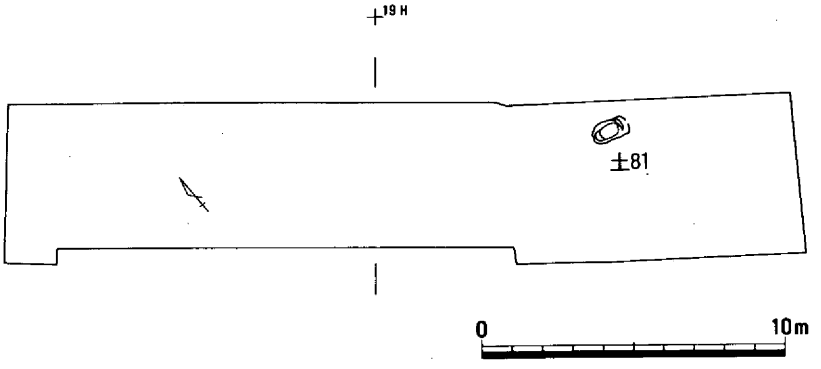
第270図　包含層出土遺物（３）〈13～15Ｃ・Ｄ区，19～25Ｃ・Ｄ区〉

第2節　従来下調査区

1．従来下調査区の概要

従来下調査区は、丸田調査区の南西側にあたる。調査の範囲は右岸側高水敷護岸のうち、河川敷を北東から南西方向に通る市道およびその両側で、北西から南東方向へ長さ26m、幅5mの細長い部分である。

調査区は北西側が低位部、南東側が微高地にあたる。微高地では弥生時代後期を中心に、縄文時代から中世にいたる遺構・遺物が多く検出されている。これに対し、低位部では洪水砂で埋没した弥生時代後期の水田、および水田層下で検出した後期の溝などを中心に、古墳時代や中世の遺構がわずかに検出されている。（平井）



第271図　従来下調査区　縄文時代の遺構全体図（S：1/250）

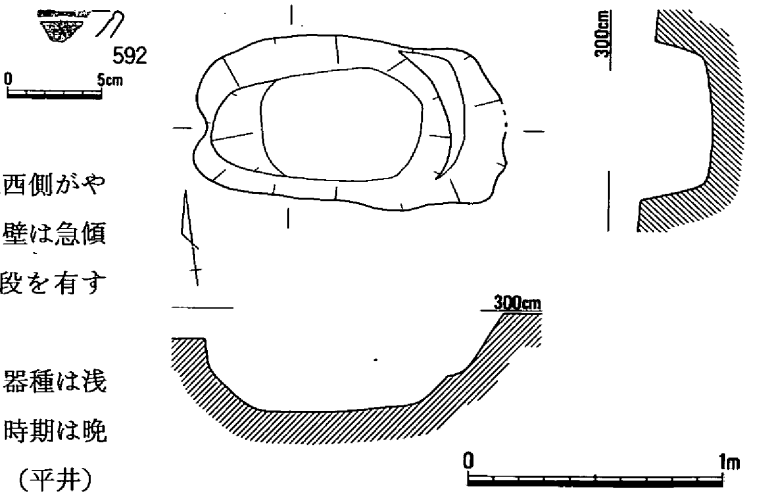
2．縄文時代の遺構・遺物

(1) 土　　壙

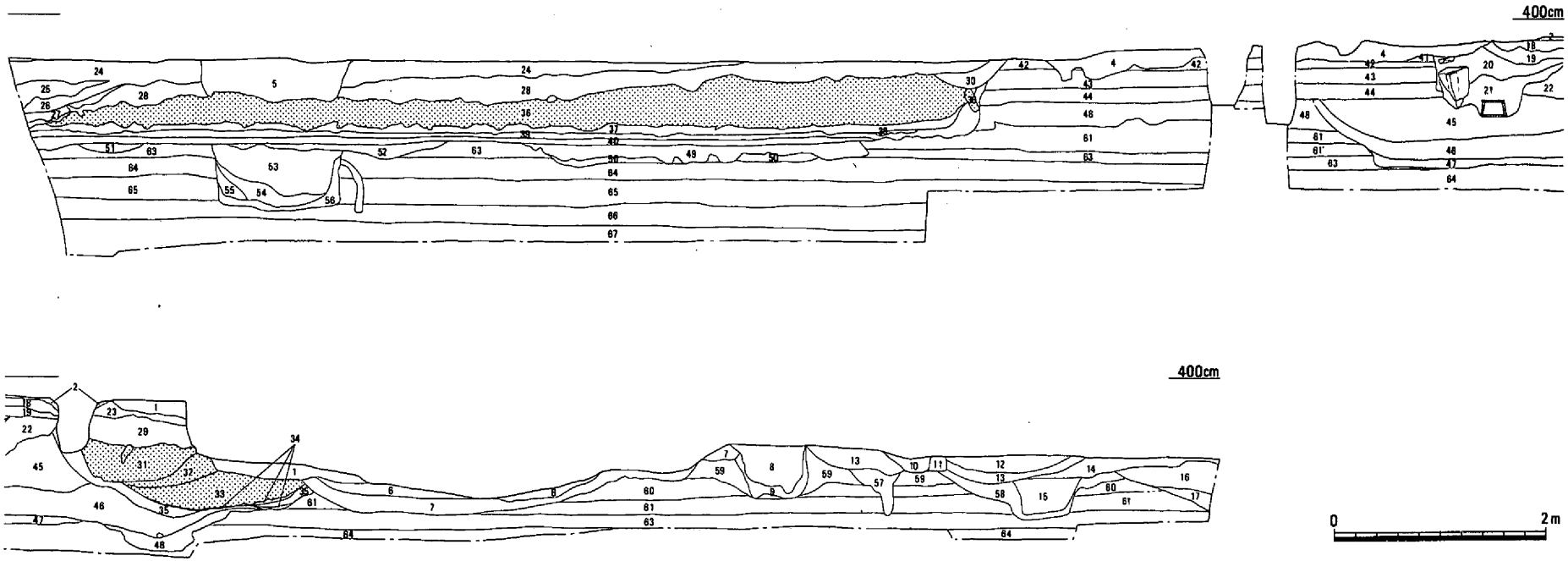
土壙81（第272図）

19H区で検出された土壙である。平面形はやや角張った長楕円形を呈する。規模は長さ1.2m、幅65cm、深さ25cmを測る。底部は西側がやや深くなるものの、ほぼ平坦である。壁は急傾斜で立上るが、西と東側の壁は少し段を有する。

遺物は縄文土器の細片が出土した。器種は浅鉢で、口縁部内面には沈線がめぐる。時期は晩期の後半と考えられる。（平井）

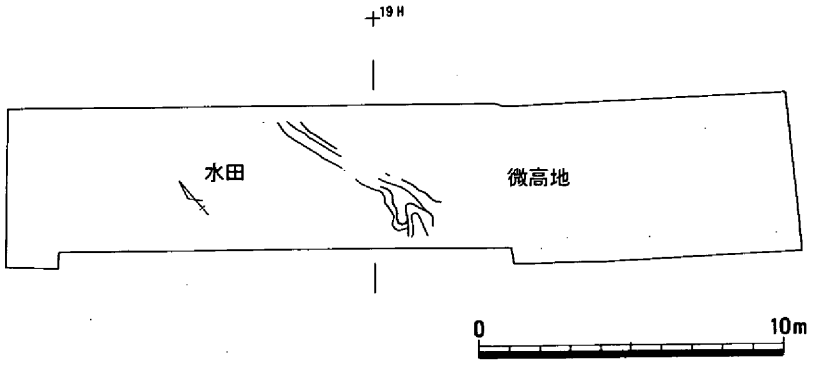


第272図　土壙81・出土遺物

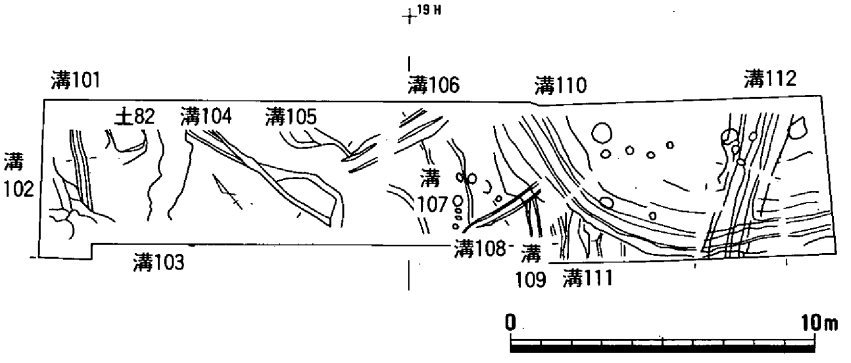


1～5．近・現代土　6～15．近・現代溝　16．灰色（10Y6/1）粘質砂（粗砂混，鉄分沈着，溝118）17．緑灰色（10G5/1）粘土（粗砂混，溝118）18．灰黄褐色（10YR5/2）微砂（マンガン沈着）　19．灰色（10Y6/1）粘質微砂　20．褐灰色（10YR6/1）砂（溝114）21．緑灰色（5G6/1）粘土（溝114）22．灰色（10Y6/1）粘質微砂（灰白色微砂混，鉄分沈着，溝115）23．浅黄色（7.5Y7/3）微砂　24．黄灰色（2.5Y6/1）微砂質土　25．明褐灰色（7.5YR7/1）微砂（溝113）26．黄灰色（2.5Y6/1）粘質微砂（明褐灰色微砂混，溝113）27．明褐灰色（7.5YR7/2）微砂（溝113）28．黄灰色（2.5Y5/1）微砂質土　29．灰褐色（5YR5/2）砂質土　30．オリーブ灰色（7.5Y5/1）微砂　31．黄灰色（2.5Y6/1）微砂（洪水砂，溝111）32．黄灰色（2.5Y6/1）粘質微砂（洪水砂，溝111）33．オリーブ灰色（2.5GY6/1）微砂（洪水砂，溝111）34．灰白色（10Y7/2）微砂（洪水砂，溝111）35．灰褐色（5YR4/1）粘質土（溝110）36．灰黄色（2.5Y6/2）微砂（洪水砂）　37．褐灰色（10YR5/1）微砂粘土（弥生後期水田層）　38．緑灰色（5G5/1）粘土　39．褐灰色（10YR6/1）粘質微砂　40．明褐灰色（7.5YR7/1）粘質微砂　41．灰オリーブ色（7.5Y6/2）砂質土（マンガン沈着）　42．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質微砂（マンガン沈着，炭・焼土粒少含）　43．にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土（マンガン沈着，炭・焼土粒少含）　44．黄褐色（2.5Y5/3）砂質土（マンガン沈着，炭・焼土粒少含）　45．黄灰色（2.5Y5/1）粘質微砂（溝106）46．褐灰色（5YR6/1）粘質土（溝106）47．緑灰色（10G5/1）粘質土（溝106）48．灰黄褐色（10YR5/2）粘質微砂（溝106）49．黄灰色（2.5Y6/1）～灰黄色（2.5Y6/2）粘質土（溝105）50．灰褐色（7.5YR5/2）粘質土（溝105）51．灰色（10Y5/1）粘質土（溝101）52．褐灰色（10YR6/1）粘質土（溝104）53．灰オリーブ色（7.5Y5/2）砂質土（にぶい黄色粘質土と暗緑灰色粘土塊で充填，炭・焼土粒少含，土壙82）　54．緑灰色（5G5/1）粘質土（青灰色粘土と灰黄色粘質土塊で充填，炭・焼土粒少含，土壙82）　55．灰オリーブ色（7.5Y5/2）粘質土（炭・焼土粒少含，土壙82）　56．暗緑灰色（10G4/1）粘土～緑灰色（5G6/1）粘土（灰黄色（2.5Y6/2）粘質土塊含，炭・焼土粒少含，土壙82）　57．黄灰色（2.5Y5/1）粘質微砂　58．オリーブ灰色（5GY5/1）粘土（溝112）　59．暗灰色（2.5Y5/2）粘質土　60．灰黄褐色（10YR6/2）粘質土　61．浅黄色（2.5Y7/4）粘質砂　61．灰褐色（5YR5/2）粘質土　63．灰褐色（5YR4/2）粘質土　64．にぶい黄褐色（2.5Y6/4）砂質土～にぶい褐色（7.5YR5/3）粘質土　65．灰オリーブ色（10Y5/2）粘質土　66．緑灰色（10GY5/1）粘質土　67．緑灰色（10GY6/1）粘質砂

第273図　18・19H区　北壁土層断面（S：1/60）



第274図　従来下調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S：1/250）



第275図　従来下調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S：1/250）

3．弥生時代後期の遺構・遺物

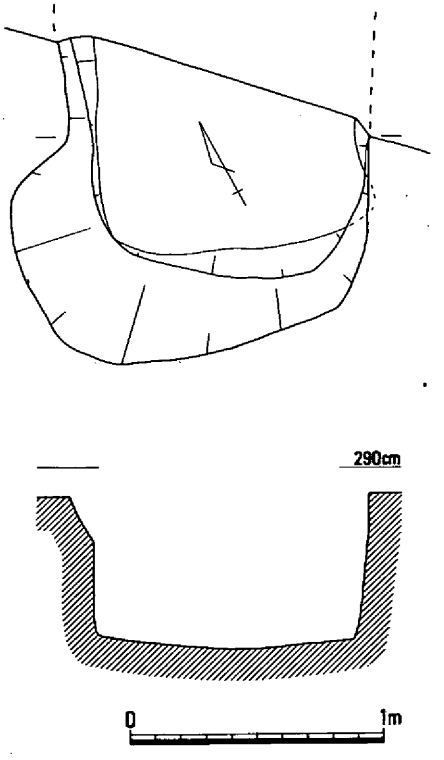
(1)　水　　田

調査区の北西側で弥生後期の洪水砂で埋没した水田が検出された。これは北側の低水路調査区から続く水田の一部と考えられる。南東側の微高地上は近現代の削平が著しいが、残りの良い部分で田面との比高差は約50cmである。田面に畦畔は検出されず、小さな凹凸が全面にみられた。田面の標高は、298cm前後である。水田層は褐灰色微砂粘土で厚さ5～9cmを測り、その下層にも厚さ10cm前後の水平堆積が認められた。このことから少なくとも二時期以上の水田が営まれていたと考えられる。　（高田）

(2)　土　　壙

土壙82（第276図、図版36）

18H区のほぼ中央付近に位置し、弥生後期水田層下で検出された土壙である。一部を溝104に切られている。遺構は調査区外にも続くためその全容は不明であるが、平坦な底面と



第276図　土壙82

ほぼ垂直に立ち上がる壁の形態から墓壙とも考えられる。埋土は粘土と粘質土の塊を充填している。

時期は検出状況と遺構の切り合い等から後期以前と考えられる。（高田）

(3) 溝

溝101（第277図、図版36）

18H区の北部中央付近に位置し、弥生後期水田層下で検出した溝である。長さ2.7mを測り、北東から南西に延びるが流水方向は不明である。埋土は灰色粘質土で、規模は幅35cm、深さ20cm前後を測る。

出土遺物はないが、検出状況から後期以前と考えられる。（高田）

溝102（第278図、図版36・68）

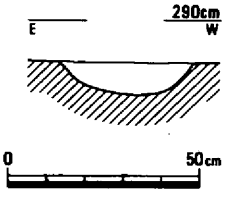
18H区のほぼ中央、調査区の西隅で弥生後期水田層除去後に検出した溝状の落込みである。大部分は調査区外に延びるものと考えられ、その東肩側の一部を検出したにすぎない。肩から3mまでは凹凸のある底面で緩やかに深さを増し、そこからは急斜となって底に落ち込む。最底面はほぼ平坦となり、深さは検出面から1.1m以上を測る。

出土遺物には少量の土器片のほか、使用による摩耗の顕著なサヌカイト製の石包丁S53がある。

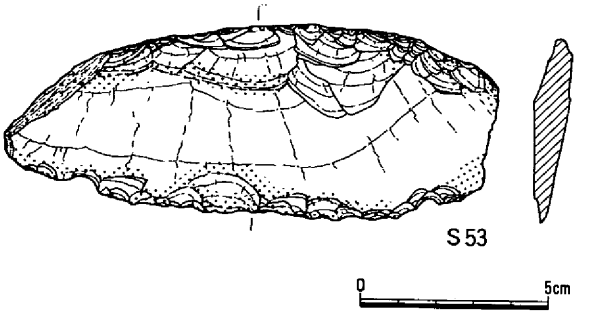
時期は検出状況等から後期以前と考えられる。（高田）

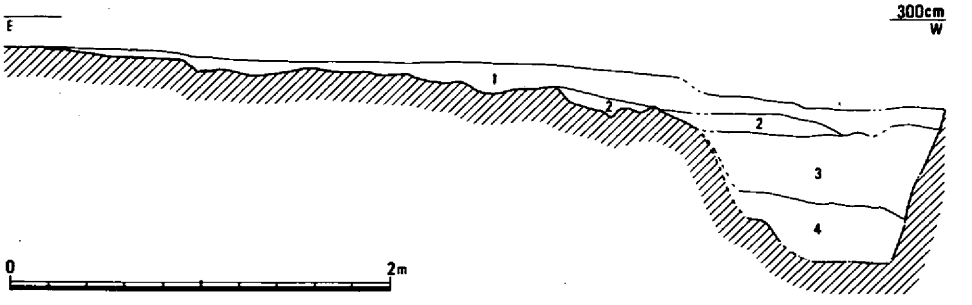
溝103（図版36）

18H区の北部中央付近に位置し、弥生後期水田層下で検出した溝状遺構である。溝101に平行するが流水方向は不明である。埋土は他の多くの水田層下検出遺構と同様に灰色粘質土で、規模は幅100cm、深さ2～3cm前後と浅いものである。



第277図　溝101





1．暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性土　2．黄灰色（2.5Y5/1）粘性土
3．灰色（N5）粘土　4．緑灰色（7.5GY5/1）粘土

第278図　溝102・出土遺物

出土遺物は少量の土器片のみで、時期は検出状況から後期以前と考えられる。（高田）

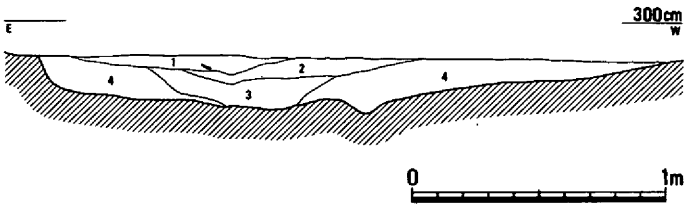
溝104（図版36）

18H区の北部中央付近に位置し、弥生後期水田層下で検出した南北に流走する溝である。溝の規模は幅40cm、深さ6cm前後を測り、埋土は褐灰色粘質土である。第279図の1～3層はこの溝の埋土にあたると考えられることから、溝105埋没後に掘削され、さらに溝106に続く可能性がある。

出土遺物はないが、以上のことから時期は後期と考えられる。（高田）

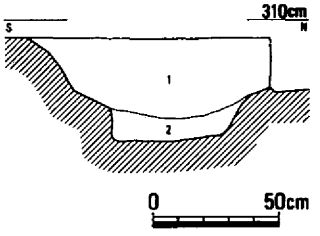
溝105（第279図、図版36）

18H区の北東部に位置し、弥生後期水田層除去後に検出した溝である。溝は南北に流走し、その規模は幅250cm、深さ20cmを測る。底面はやや凹凸で、両岸から部分的にテラス状の張り出しがみられる。



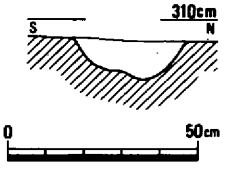
1．暗灰黄色(2.5Y5/2)微砂粘土　2．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
3．黄褐色(2.5Y5/3)粘質土　4．灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂

第279図　溝105

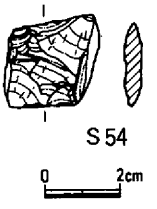


1．灰褐色（5YR4/2）粘質土（炭・焼土粒含）
2．褐灰色（5YR4/1）粘質土（炭・焼土粒含）

第280図　溝106



第281図　溝108



第282図　溝109・出土遺物

出土遺物は少量の土器片のみで、先述の溝104に切られると考えられることから、溝の時期は後期以前であろう。（高田）

溝106（第280図、図版36）

19H杭の南に位置し、弥生後期水田の微高地端を約20cm掘り下げて検出した溝である。溝の西端は水田層下で検出している。その規模は幅100cm、深さ40cmを測る。底は平坦で、壁は一度垂直に立上ったあと急斜となって肩になる。また、この溝は後述の溝110から分岐することを調査区の北壁断面で確認している。溝底のレベルでは溝110よりも25cm浅い。

これらの検出状況から溝の時期は、溝110と同様に百・後・Ⅱと考えられる。（高田）

溝107（図版36）

19H区の北西部で溝106の南に位置し、弥生後期水田の微高地端を掘り下げて検出した遺構である。溝106との切り合いはみられず、土壙になる可能性もある。その規模は幅120cm、深さ10cmで、検出長300cmを測る。底は平坦だが、径20～40cm、深さ5～35cmの小穴が並んでいた。遺構の埋土は灰色粘質土である。

出土遺物は少量の土器片のみで、時期は検出状況から後期以前と考えられる。（高田）

溝108（第281図、図版36）

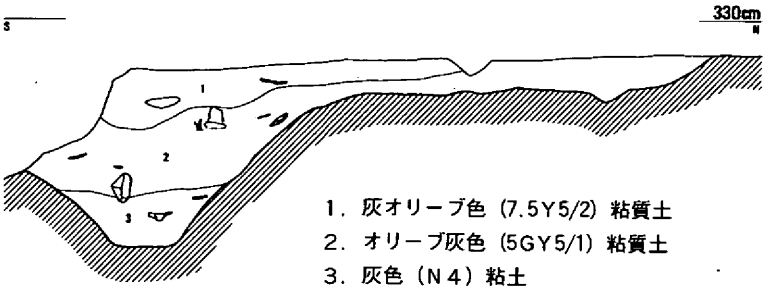
19H区の北西部に位置し、微高地を弥生後期水田層除去レベルまで掘り下げて検出した溝で、東西に流走する。その規模は幅30cm、深さ10cmを測り、底は丸く壁は急斜に立ち上がる。埋土は灰色粘質土である。

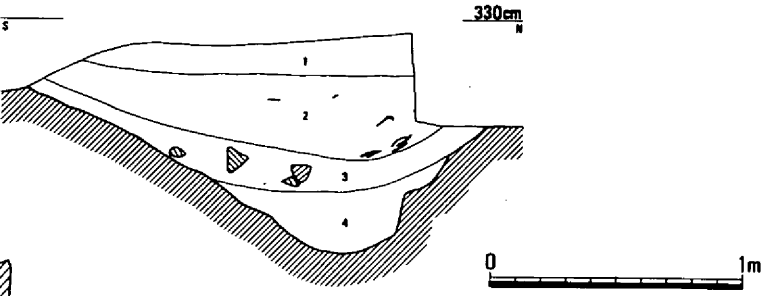
出土遺物は少量の土器片のみで、その時期は検出状況から後期以前と考えられる。（高田）

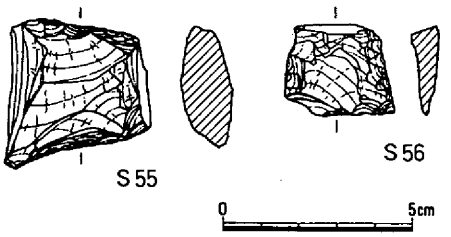
溝109（第282図、図版36）

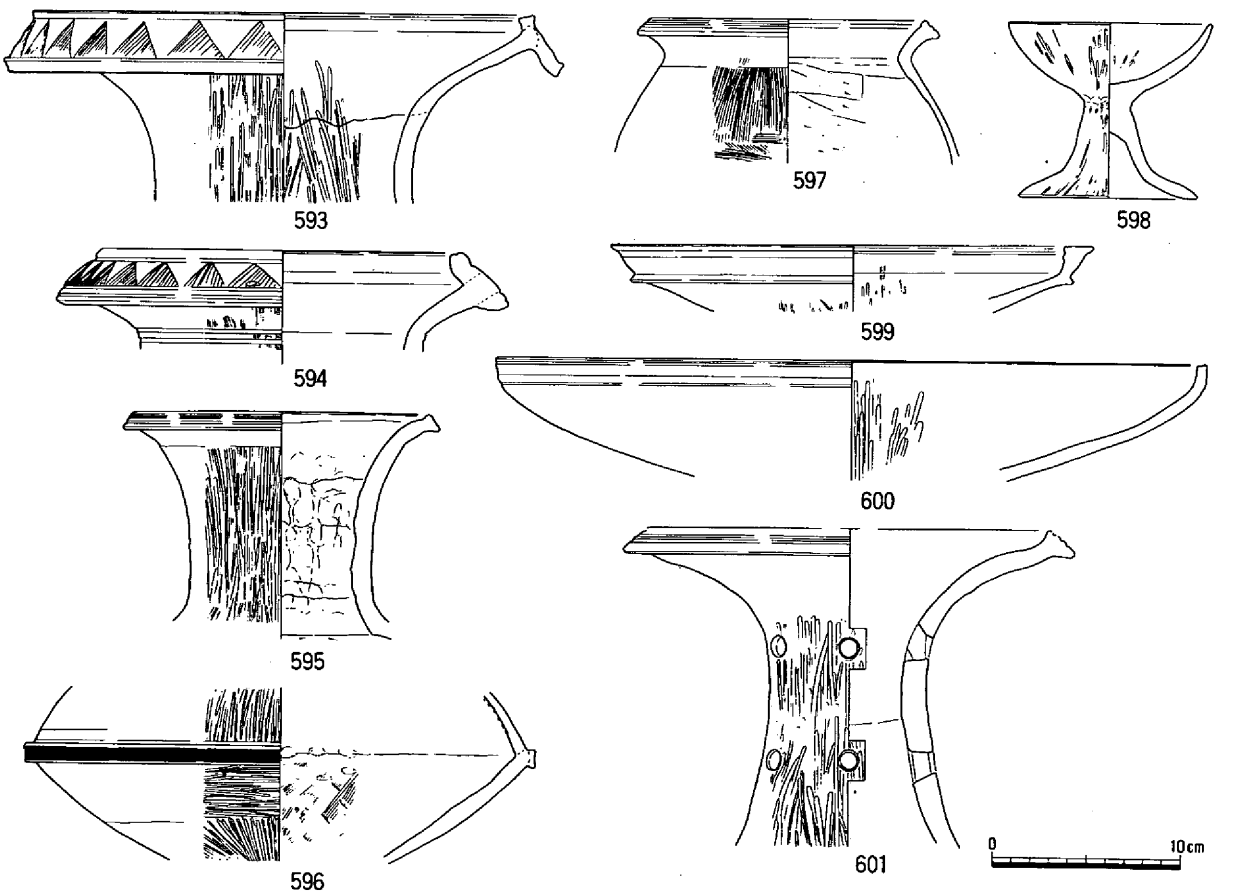
19H区の北西部に位置し、微高地を弥生後期水田層除去レベルまで掘り下げて検出した溝である。北東から南西に流走するが、流水方向は不明である。その規模は幅40cm、深さ６cmを測り、埋土は灰色粘質土である。

出土遺物はＳ54のサヌカイト









第283図　溝110・出土遺物

製の楔形石器のみである。溝の時期は検出状況から後期以前と考えられる。（高田）

溝110（第283図、図版36・69）

19H区の北寄りに位置し、調査区西半の微高地上を北から東へ大きく弧を描きながら流走する溝である。微高地上の他の遺構と同様、近現代の削平を激しく受けている。残りの良好な部分では幅300cm、深さ80cmを測るが、本来はさらに大規模な溝と考えられる。溝内は底から30cmと65cm前後に段を有し、そこからテラス状の平坦面を大きく張り出し、さらに急斜に立ち上って肩となる。

出土遺物には土器と石器があり、主に溝内の中位から出土している。また、これらの遺物とともに自然の角礫の出土も目立っている。593～595は長頸壺である。593と594は口縁端部を上下に拡張し、外面にヘラ描きの鋸歯文を配す。596は直口壺の胴部で、突帯上に赤色顔料を塗彩している。598～600は高杯で三種三様の杯部の形態を示す。598は椀形の杯で脚とを別作りしている。599は浅い杯部で、口縁部を外方に拡張して上面に凹線を施している。600は大形の杯で、上方に立ち上げた口縁部外面にヨコナデによる凹線を施している。また、S55とS56はサヌカイト製の楔形石器である。

以上のことから溝の時期は、古い様相の土器が混じるものの、概ね百・後・Ⅱと考えられよう。

（高田）

溝111（第284図、図版36）

19H区の北西部に位置し、微高地端を東北から南西に流走する溝である。溝の大部分は近現代の削平を受け、加えて溝110と同時に掘り下げたためにその残りは悪い。最も良好な調査区の北壁断面でみると、溝内は二段に掘り込まれ、その規模は幅250cm、深さ70cmを測る。底は丸く、底から10cmの高さで段差を持ち、緩やかに傾斜して立ち上がっている。また、第284図は調査区の南側における溝の最下部の断面を示す。埋土は灰褐色粘質土である。

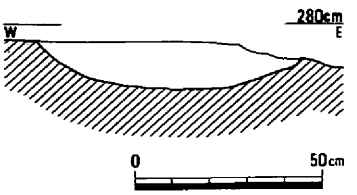
出土遺物は少量の土器片のみだが、北壁断面では溝の埋土の上層に約60cmの洪水砂の堆積が認められることから、弥生後期水田と同時期に給排水路として機能し、洪水によって水田とともに廃絶した溝と考えられる。（高田）

溝112（第285図、図版36）

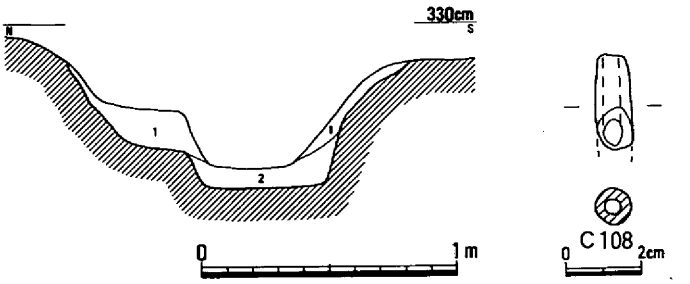
19H区の西寄りに位置し、東北から南西に流走する溝である。溝の上面は他の微高地上の遺構と同様に、近現代の削平を大きく受けている。溝内は二段に掘り込まれ、平坦な底面から一度垂直に立ち上がり、さらに急斜となって肩となる。溝の規模は幅200cm、深さ65cmを測る。この断面形態は百間川遺跡群の弥生後期に多くみられるもので、本調査区でも溝106などがある。

出土遺物には少量の弥生土器片と土錘C108がある。この溝は溝110と切り合い関係にあり、後出することを確認していることから、その時期は弥・後・Ⅱ以降と考えられる。

（高田）

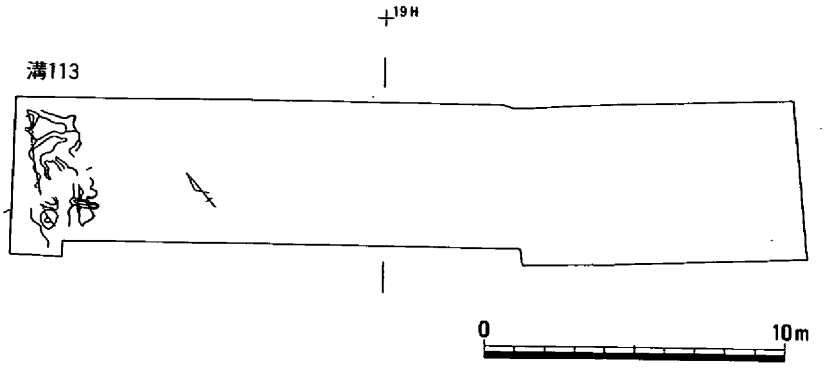


第284図　溝111

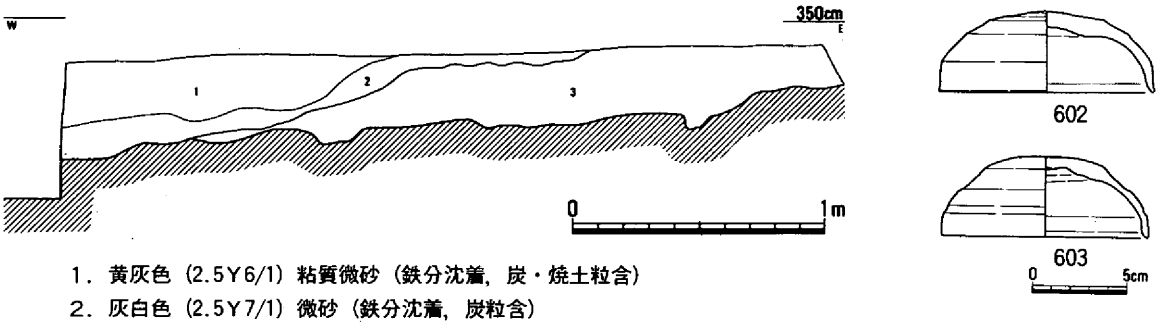


1．暗緑灰色（5G4/1）微砂粘土
2．オリーブ黒色（5GY2/1）粘土

第285図　溝112・出土遺物



第286図　従来下調査区　古墳時代の遺構全体図（S：1/250）



1．黄灰色（2.5Y6/1）粘質微砂（鉄分沈着，炭・焼土粒含）
2．灰白色（2.5Y7/1）微砂（鉄分沈着，炭粒含）
3．褐灰色（10YR6/1～5/1）粘質微砂（灰白色微砂混）

第287図　溝113・出土遺物

4．古墳時代の遺構・遺物

(1)　溝

溝113（第287図）

18H区で検出された溝と考えられる遺構であるが、調査区の端に位置するため全体の様相は明確にし得なかった。遺構は西に向かって少しづつ深くなり、底部は凹凸が著しい。埋土は三層に分かれ、底部同様、西に向かって下がっていく。

遺物は須恵器が出土した。図示したものはいずれも蓋である。時期は６世紀末から７世紀初頭頃と考えられる。

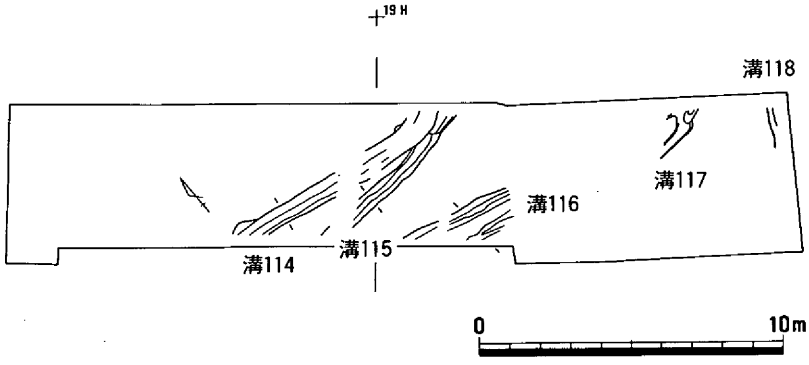
（平井）

5．中世の遺構・遺物

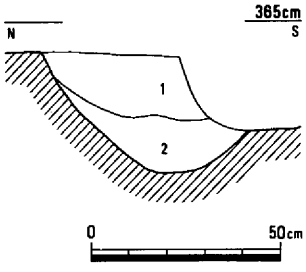
(1)　溝

溝114（第289図）

18・19H区で検出された溝で、ほぼ東西方向に流走する。溝の西端および東端は調査区外へ延びる。また東端では溝115を切っている。規模は幅65cm、深さ30cmを測る。

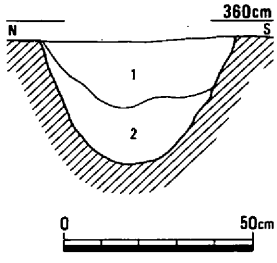


第288図　従来下調査区　中世の遺構全体図（S：1/250）



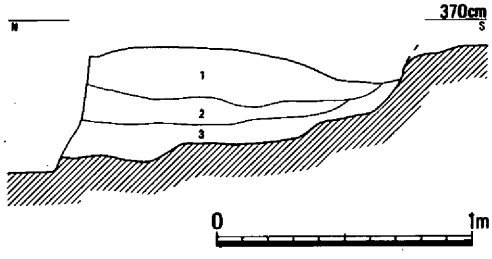
1．浅黄色(2.5Y7/3)微砂
（鉄分・マンガン沈着）
2．褐灰色(7.5YR6/1)粘質微砂
（鉄分沈着）

第289図　溝114



1．灰色(5Y6/1)粘質微砂
（炭・焼土粒含）
2．褐灰色(10YR5/1)粘質微砂
（炭・焼土粒含）

第290図　溝115



1．灰黄色（2.5Y6/2）粘質土（黄灰色（2.5Y5/1）粘質土ブロック充填）
2．灰黄色（2.5Y7/2）粘質土（鉄分沈着）
3．灰色（N6）粘土（鉄分沈着）

第291図　溝116

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

溝115（第290図）

18・19H区で検出された溝で、ほぼ東西に流走する。東端は一部溝114に切られるが、東西両端とも調査区外へ延びる。規模は幅50cm、深さ34cmを測る。埋土には炭や焼土を含む。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

溝116（第291図）

19Hで検出された溝で、ほぼ東西に流走する。溝の西端は調査区外へ延びるが、東端は3.5mあまりで消えてしまう。規模は明確にし得ないが、幅は1.5m以上はあり、深さは40cmを測る。埋土は三層に分かれ、ほぼ水平に堆積している。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

溝117

19Hで検出された溝である。溝の東端は調査区外へ延びるが、西端は２mあまりで消える。規模は幅30cm、深さ５cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土である。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

溝118

19Hで検出された溝と考えられる遺構であるが調査区の東端に一部が係っただけである。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。（平井）

第3節　川内・三ノ坪調査区

1．川内・三ノ坪調査区の概要

川内・三ノ坪調査区は低位部が大部分を占め、百間川沢田遺跡との境に近く旧河道が存在する。今回報告する調査区は、33ラインから37ラインまでの80mで、幅は20mである。旧河道は縄文時代以来のもので、35ラインから37ラインまでの間に位置している。河道の東の微高地では縄文時代後期の土器片が集中して出土していることから、この頃から人間の活動領域に入ったものと考えられる。微高地部分は集落の中心からは離れていたようで、住居は検出されず、土壙も少なかった。むしろ、生産の場として利用されていたようで、用水路と考えられる溝が多く検出された。

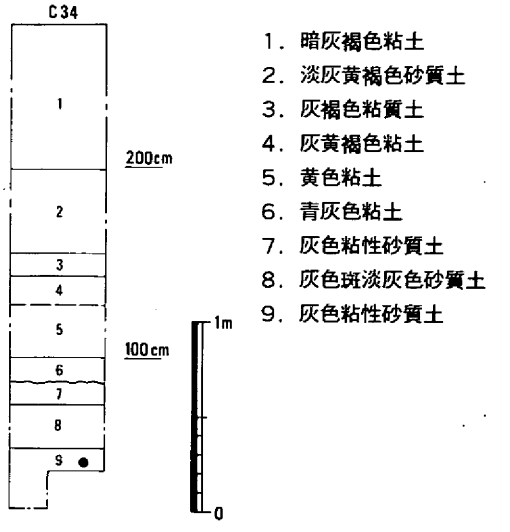
弥生時代前期に入ると、旧河道に人の手が加えられて用水路としての整備がなされ、また、用水を遠方より引いて、河道の上を樋を使って渡す技術なども導入されるようになり、本格的な水田耕作が開始される。弥生時代中期になると、ほとんど水路のみになるため、より生産の場として土地利用が限定されてきている。弥生時代後期になると、一本ないし二本の主要な水路を畎畝として残して全面が水田化される。やがてここを大洪水が襲い、すべてが厚い砂層の下に埋もれることとなる。

洪水の後の古墳時代前期の遺構は、土壙1基と溝1条にすぎないが、古墳時代後期になると、この調査区一帯に柱穴列遺構が集中して設けられる。柱穴列遺構の性格については今だ明確にできないが、柱ないしは杭が打ち込まれていたことは確かで、なんらかの区画施設であったことは想像される。この地区が土地利用の上で何らかの境界にあたっていたことを考えさせる。

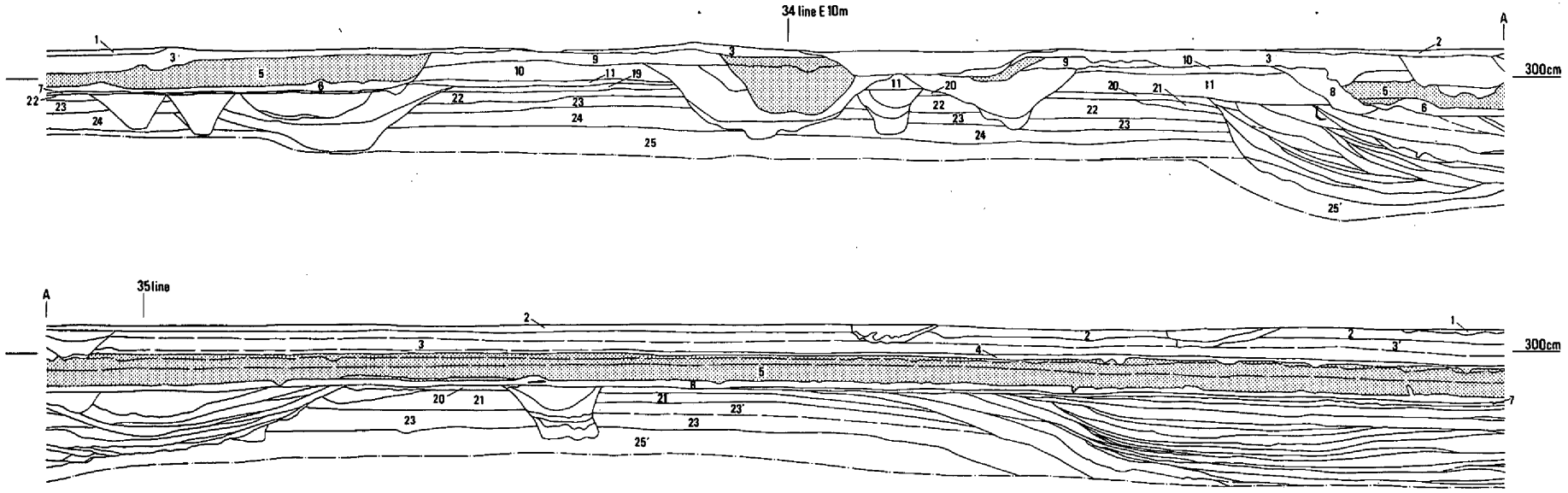
古墳時代に続いて遺構が検出されるのは中世の鎌倉時代である。中世の遺構は、建物1棟と土壙1基、それに溝1条と、きわめて少ない。建物は小規模で、棟の方向が現在の周辺の地割りと等しいことから、農作業小屋のようなものと考えられ、調査区一帯は水田であったとみてよい。

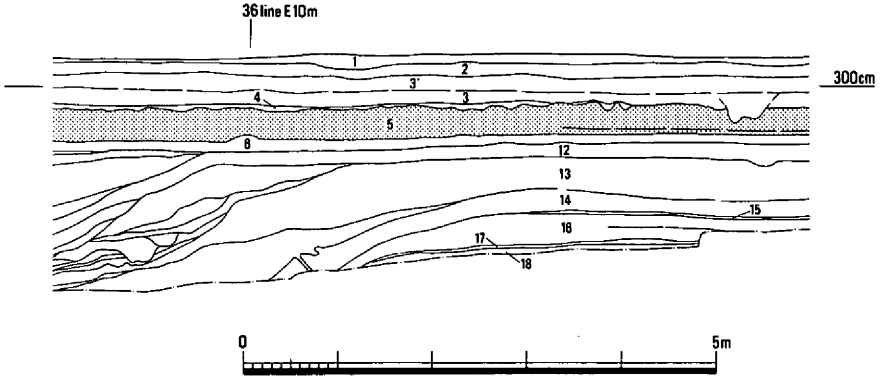
第293図がこの調査区の土層断面図である。5層が百間川遺跡群の鍵層となる砂層で、弥生時代末期に発生した大洪水の堆積層である。この堆積層によって地形の起伏がならされ、以後は水平堆積層が続く。洪水砂層の下の6層は水田の耕作土である。水田は微高地を削平して作られたと考えられ、それ以前の弥生時代前期、中期の堆積層は水平であったと思われる。

この地区の地形の形成過程と年代を調べるため34C区において坪掘りを実施した。第292図がその土層図であるが、海抜90cmで砂質土層との不連続面が現れる。この層より下は砂質土層が続き、植物の腐食物を含んでいる。第292図の丸印（海抜45cm）から出土した木片の放射性炭素による年代測定を1985年に広島大学文学部地理学教室の藤原健蔵・白神宏両氏によって実施していただいたところ、BP6005 $^{+105}_{-100}$年という結果を得た。（岡本）



第292図　微高地坪掘断面（S：1/40）





1．淡灰黄褐色細砂
2．淡灰色粘質土
3．灰色粘性砂質土
3'．黄灰色粘性砂質土
4．暗灰色～灰黒色粘性土
5．淡灰褐色微砂（洪水砂層）
6．灰色粘土（水田層）
7．淡灰色粘土
8．灰褐色粘質土
9．淡黄灰色粘土
10．黄灰色粘質土
11．灰褐色粘質土
12．暗灰色細砂
13．暗褐灰色細砂
14．淡青灰色粘性微砂
15．暗青灰色粘性微砂
16．灰白色粘質土
17．灰黒色粘土
18．青灰色粘土
19．淡黄灰色粘質土
20．褐灰色粘質土
21．灰黄褐色粘質土
22．灰褐色粘質土
23．褐灰色粘質土
23'．灰褐色粘質土
24．淡黄灰色～暗褐灰色粘質土
25．淡黄灰色粘質土
25'．灰黄緑色～灰青緑色微砂

第293図　33～36C・D区北壁土層断面（S：1/80）

2．弥生時代前期の遺構・遺物

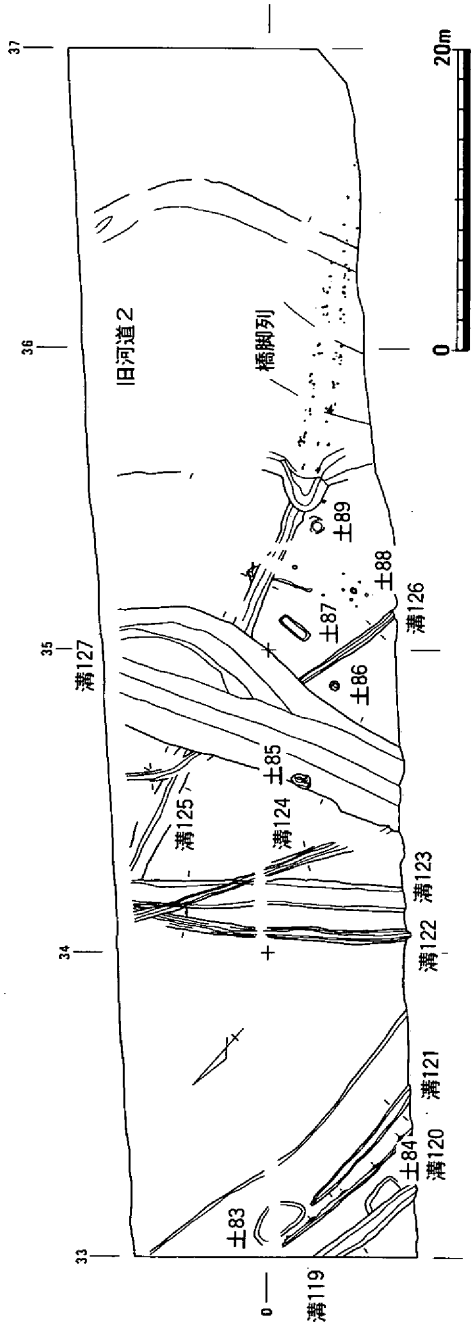
(1) 旧　河　道

旧河道２（第296～309図、図版37・38・66・67・68・71）

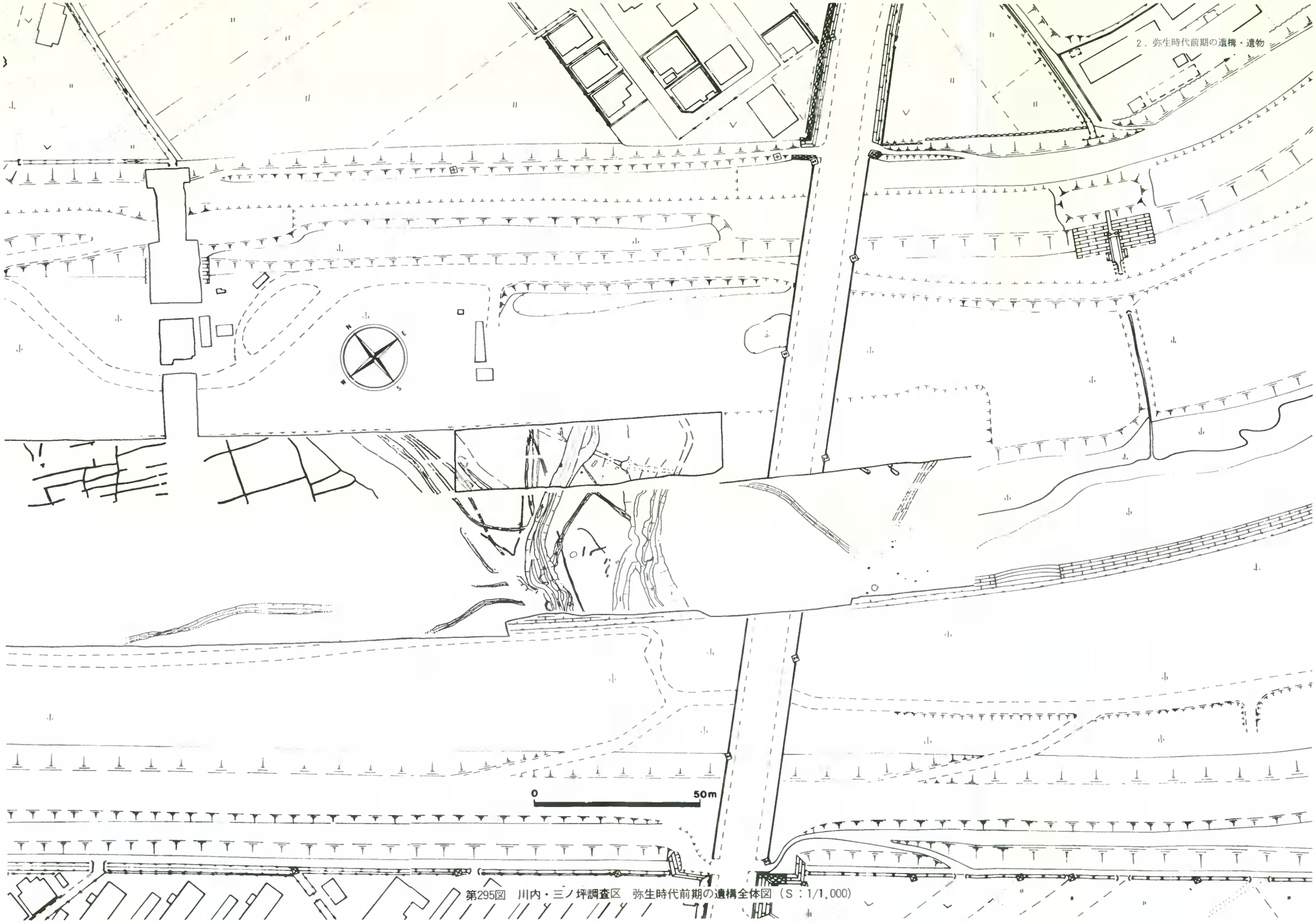
35ラインと36ラインの中間あたりから37ライン近くにかけて存在している。第294図に示したのは弥生時代前期後葉の段階の河道で、この時期には横断して橋が設けられるなど、すでに人間の手が加えられ、用水路としての機能をもつようになってきている。しかし、河道の存在はそれ以前の縄文時代まで遡り、河幅もより広かったと想定される。諸般の事情から旧河道の全掘は不可能であったが、発掘した範囲内からは晩期の土器の出土が知られ、さらに、東岸の微高地からは縄文時代後期の土器片が散在して検出されたことなどから、縄文時代後期あたりには確実に存在していたものと考えられる。おそらく、縄文時代前期から始まった旭東平野の沖積化の進行によって、徐々に微高地が形成され、その周辺に残された河道とみることもできよう。

第296図は旧河道２の土層断面図である。これにしたがって、旧河道の時代的な変化を追ってみたい。１層は弥生時代後期の水田耕土層で、２層も水田耕土層下に一面にひろがっているため、この２層は共に水田の造成にともなって形成された層と考えられる。図では溝の中心部分で１層が落ち込んで厚くなっているが、第293図の調査区北壁の土層断面では２層（図では６層）の底面が明瞭な不連続面となっていて、水田が旧地形を削平して作られたことが明らかである。このため、４・５層の堆積している幅130cm、深さ42cmの旧河道の最後の名残である溝は、水田造成直前の遺構ということになり、弥生時代後期に入る可能性が強い。

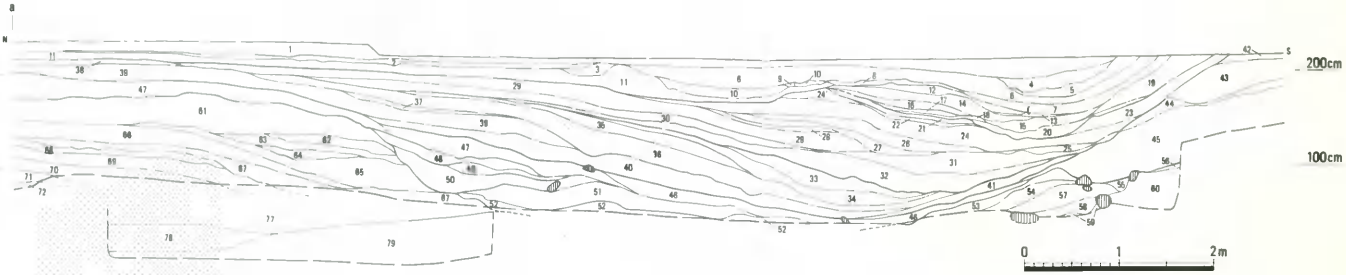
次に確認される不連続面は23・24層の上面である。この面と５層との間には粘質土や粘性砂質土が重なり、底部の20層は粗砂・細砂層となっている。自然な堆積でこの不連続面に至ったのではなく、溝の改修によって掘り直されたものであろう。12層も微砂層であり、この段階での細分も可能である。４層から22層までの間で出土したことが明らかな土器は607・612・614であり、したがってこの段階は弥生時代中期に対応するとみられる。この段階での溝

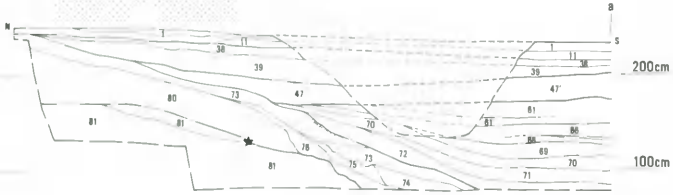


第294図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代前期遺構全体図（S：1/500）



第295図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代前期の遺構全体図（S：1/1,000）



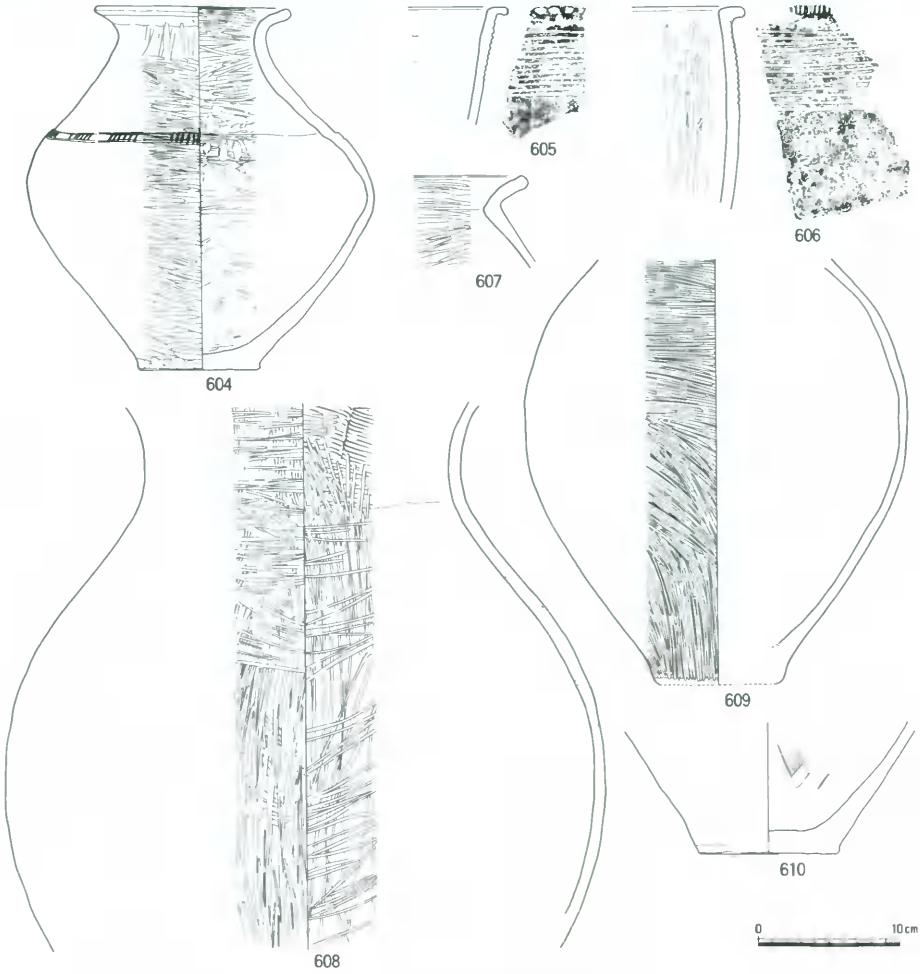


1．淡灰色粘性微砂質土
2．灰黒色粘性砂質土
3．淡灰緑色粘性砂質土
4．灰黒色粘性砂質土
5．淡灰色粘性砂質土
6．淡緑灰色粘性砂質土
7．淡灰色粘性砂質土
8．暗灰色粘土斑緑灰色粘性砂質土
9．淡緑灰色粘性砂質土
10．暗灰色粘質土
11．緑灰色粘性砂質土
12．淡灰色粘土斑灰緑色微砂
13．淡青灰色微砂斑暗灰色粘質土
14．淡灰色粘性砂質土
15．灰黒色粘質土
16．淡緑灰色粘性砂質土
17．淡緑灰色粘質土
18．淡灰色微砂
19．淡青灰色粘性砂質土
20．淡青灰色粗砂・細砂
21．淡灰色粘土
22．灰色粘質土（砂薄層）
23．灰色粘性微砂
24．灰色～暗灰色粘性砂質土（砂薄層・腐植物）
24'．灰色粘性砂質土
25．淡青灰色粘性砂質土
26．淡青灰緑色粗砂・細砂（腐植物）
27．淡緑灰色～暗灰色粘性砂質土（砂薄層・腐植物）
28．淡青灰色粘質土
29．緑灰色～灰色粘性砂質土（腐植物）
30．青灰色粘性砂質土
31．暗灰色粘性微砂（細砂塊・腐植物多）
32．暗灰色微砂斑粘質土（粗砂小塊・腐植物多）
33．暗灰色粘性微砂・淡青灰色細砂互層（腐植物）
34．暗灰色粘性微砂・淡青灰色細砂互層（腐植物多）
35．淡青灰色～灰色粘性砂質土（腐植物）
36．暗灰色粘性砂質土・淡青灰色細砂互層（腐植物）
37．青灰色粘質土（砂薄層）
38．褐灰色粘質土
39．青灰色粘性微砂（砂薄層）
40．青灰色細砂・暗灰色粘性砂質土互層（腐植物）
41．灰色粘性砂質土
42．灰緑色粘性微砂
43．緑灰色粘質土
44．灰色粘性砂質土
45．灰青緑色微砂
46．暗灰色粘性砂質土・青灰色細砂互層（腐植物多）
47．暗灰色粘性砂質土・青灰色細砂互層（腐植物多）
47'．青灰色粘性砂質土
48．暗灰色粘性微砂（細砂薄層・腐植物多）
49．暗灰色粘性砂質土・青灰色細砂互層（腐植物）
50．暗灰色粘性砂質土・青灰色細砂互層（腐植物多）
51．淡青灰色細砂（腐植物少）
52．暗灰色粘性砂質土（細砂薄層・腐植物）
53．暗灰色粘性砂質土・青灰色細砂互層（腐植物多）
54．暗灰色粘性砂質土・青灰色細砂互層（腐植物多）
55．灰色粘性砂質土
56．灰色粘土
57．暗灰色粘性砂質土
58．青灰色粘性微砂
59．灰色粘性微砂
60．灰色粘性砂質土
61．青灰色細砂（底暗灰色粘性砂質土薄層）
61'．青灰色粘性微砂（淡青灰色粘土薄層互層）
62．青灰色細砂
63．暗灰色粘性砂質土・青灰色細砂互層（腐植物）
64．青灰色細砂
65．青灰色細砂（腐植物薄層）
66．青灰色細砂・暗灰色粘性砂質土互層
67．青灰色細砂（腐植物薄層互層）
68．青灰色粗砂・細砂（腐植物薄層互層）
69．青灰色粗砂・細砂
70．青灰色粗砂・細砂
71．青灰色粗砂・細砂
72．青灰色粗砂・細砂
73．暗灰色粘質土（炭粒・土器片点々）
73'．暗灰色粘性微砂（青灰色細砂薄層互層）
74．青灰色細砂（腐植物薄層互層）
75．暗灰色粘質土（炭小粒多）
76．灰色～青灰色粘性微砂（炭小粒点々）
77．青灰色粗砂・細砂（粘土薄層互層・腐植物多）
78．暗灰色粘性砂質土（細砂大塊・腐植物）
79．暗灰色粘性砂質土（腐植物多）
80．灰色～灰青緑色粘質土（炭大粒点々・底から縄文時代晩期突帯文土器出土）
81．灰青緑色粘質土
81'．淡灰青緑色粘性微砂（微高地基盤層）
81''．灰色～灰青緑色粘性微砂（炭粒点々）

第296図　旧河道２断面（Ｓ：1/60）

は幅370㎝、深さ90㎝を測るが、10層の堆積部分まで含めれば、幅は580㎝となる。ちなみに、第325図はこの段階より一時期古い24層除去時の溝の姿を示し、厳密には弥生前期終末の状況と考えられる。

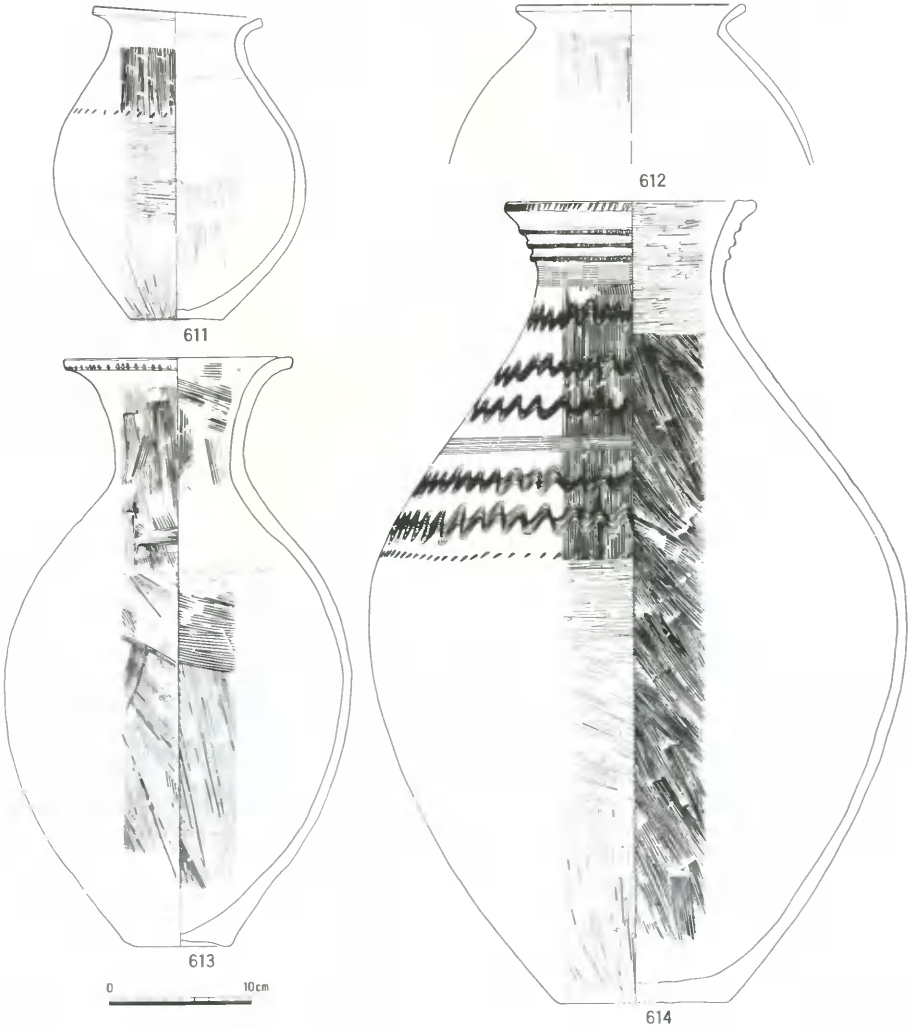
23層より下は弥生時代前期の厚い堆積層である。ほとんどの層が砂層ないしは粘性砂質土層で、腐植物を多量に含む層が多い。盛んであった流水の様を思い起こさせると同時に、季節変化や人為的な水流調節でひんぱんに繰り返された通水と滞水の結果とも考えられる。24層の底面もそうであるが、この段階でもいくつかの不連続面が確認される。その中で、もっとも重要なものが61～65層と48・50層との境界面で、この面が南側では42～45・53層と23～26・41・46層との境界面に続くと推測される。この段階で河道に大規模な手が加えられて用水路としての整備がなされ、自然河道から人工の水路に転換させられたと思われる。この最初の用水路の規模は、幅が950㎝、深さは200㎝と推測され



第297図　旧河道２出土遺物（１）

る。後述する橋脚の上端部を検出したのはこの断面図の底面であったが、橋脚列はこの用水路よりさらに北へ長く延びているため、用水路よりさらに古い段階のものと考えられる。発掘調査時には細かい分層は不可能であったので確実性に欠けるが、一部の木器が出土したのもこの底面で、W７～10・W14・15はこの最初の用水路に伴うものと判断している。また、土器では、606がこの段階で出土している。

さらに自然河道であった時代を遡ると、もう一つの重要な境界面に行き当たる。それは73・76層と80・81層との境である。73層は炭粒や土器片を点々と含み、その土器の年代は弥生時代前期の百・前・Ⅲ期であった。73層の河道斜面にあたる部分では点々で図に示したように炭層が薄く認められ

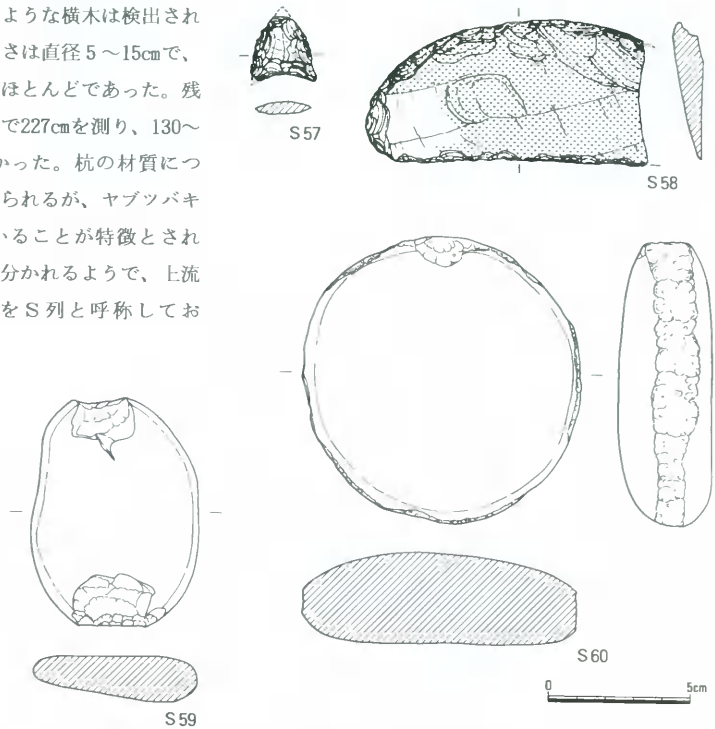


第298図　旧河道２出土遺物（２）

た。これに対して、80層にも炭の大粒が点々と含まれていたが、層の底、星印で示した地点からは縄文時代晩期の突帯文土器が出土した。これらのことからすれば、おそらくこの境界面は縄文時代と弥生時代を分ける面であったと考えられる。73層が前期の後葉とすると縄文時代晩期との間にかなりの時間差が考えられるが、74～76層が河道の底へ厚く堆積しているのであろうか。また、23層から42～45・53～60層を除いて73層までがすべて百・前・Ⅲ期とすれば、弥生時代中期の堆積と比べて異常に厚く、この要因が何であったか今後検討していかなければならない。弥生時代の初期の段階での河道の幅は20ｍに達する。

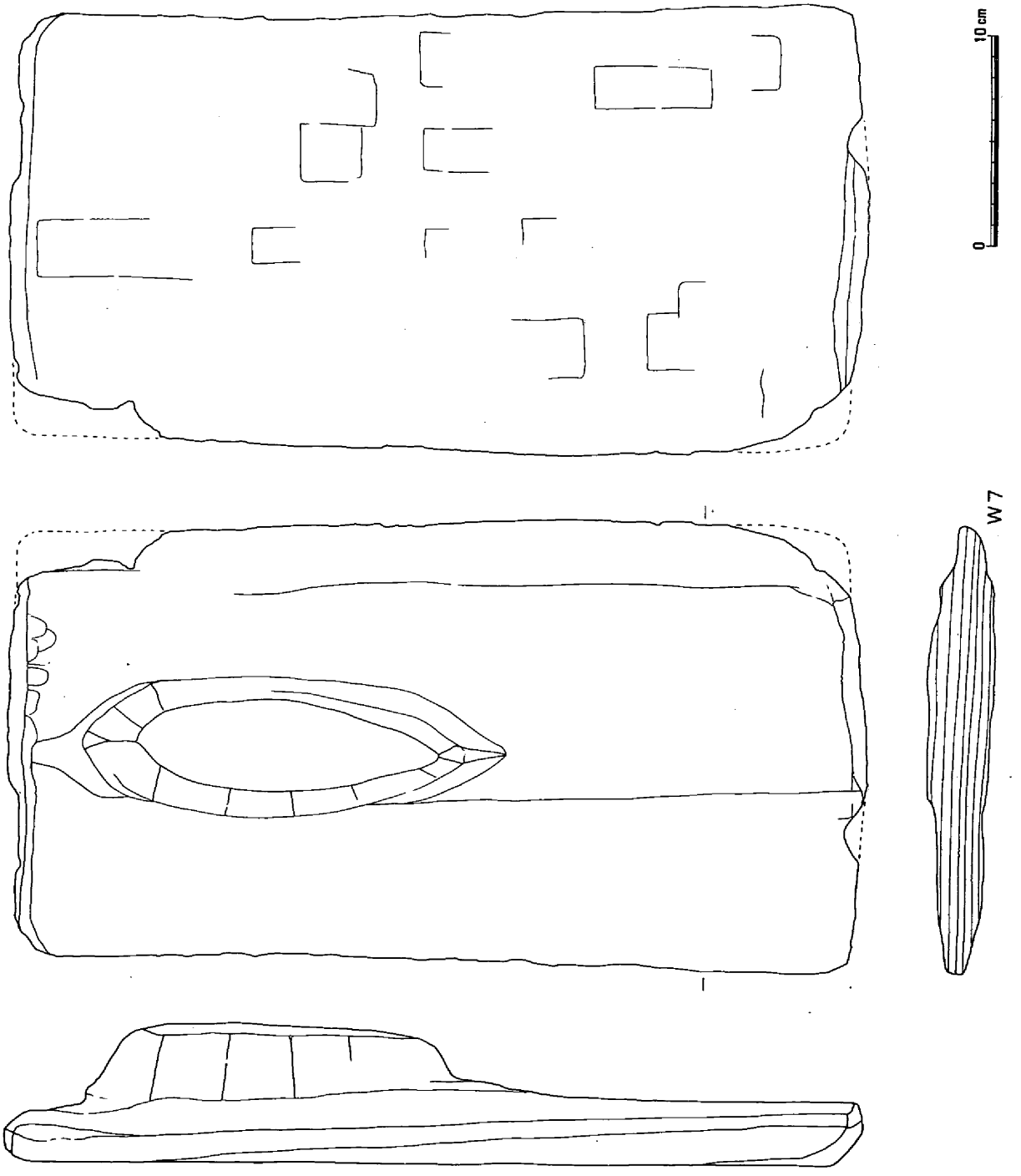
河道の南岸の土層について検討すると、43・45層が第293図の13層に対応すると考えられる。この層は弥生時代前期には微高地の基盤層になっていたとみられ、縄文土器を含むようである。したがって、42～45・53層と23～25・31・41・46層との境界面が縄文時代と弥生時代との境と考えられる。第293図によると、13層の下では厚い淡色の層と薄い暗色の層が交互に堆積していて、『百間川原尾島遺跡２』では、ここより縄文時代晩期中頃の土器の出土が報告されている。このような互層の状況は繰り返された大洪水によって生じたと思われる。淡色層が洪水堆積層、暗色層が植物の繁茂した旧地表層と考えたい。このような洪水の繰り返しによって河道が埋没していったのであろう。

旧河道２では、35Ｄ区から36Ｄ区にかけて、調査区の南端に近く橋脚列を検出した（第307～309図）。橋脚列の南端部分は調査区外に続く可能性があるが、検出部分の全長で21ｍに達する。ほぼ直線状に杭が立ち並び、河道を横断している。立杭に渡したような横木は検出されなかった。杭の太さは直径５～15㎝で、12㎝前後のものがほとんどであった。残存した長さは最長で227㎝を測り、130～150㎝のものが多かった。杭の材質については付載で述べられるが、ヤブツバキが多くを占めていることが特徴とされる。杭列は２列に分かれるようで、上流側をＮ列、下流側をＳ列と呼称してお

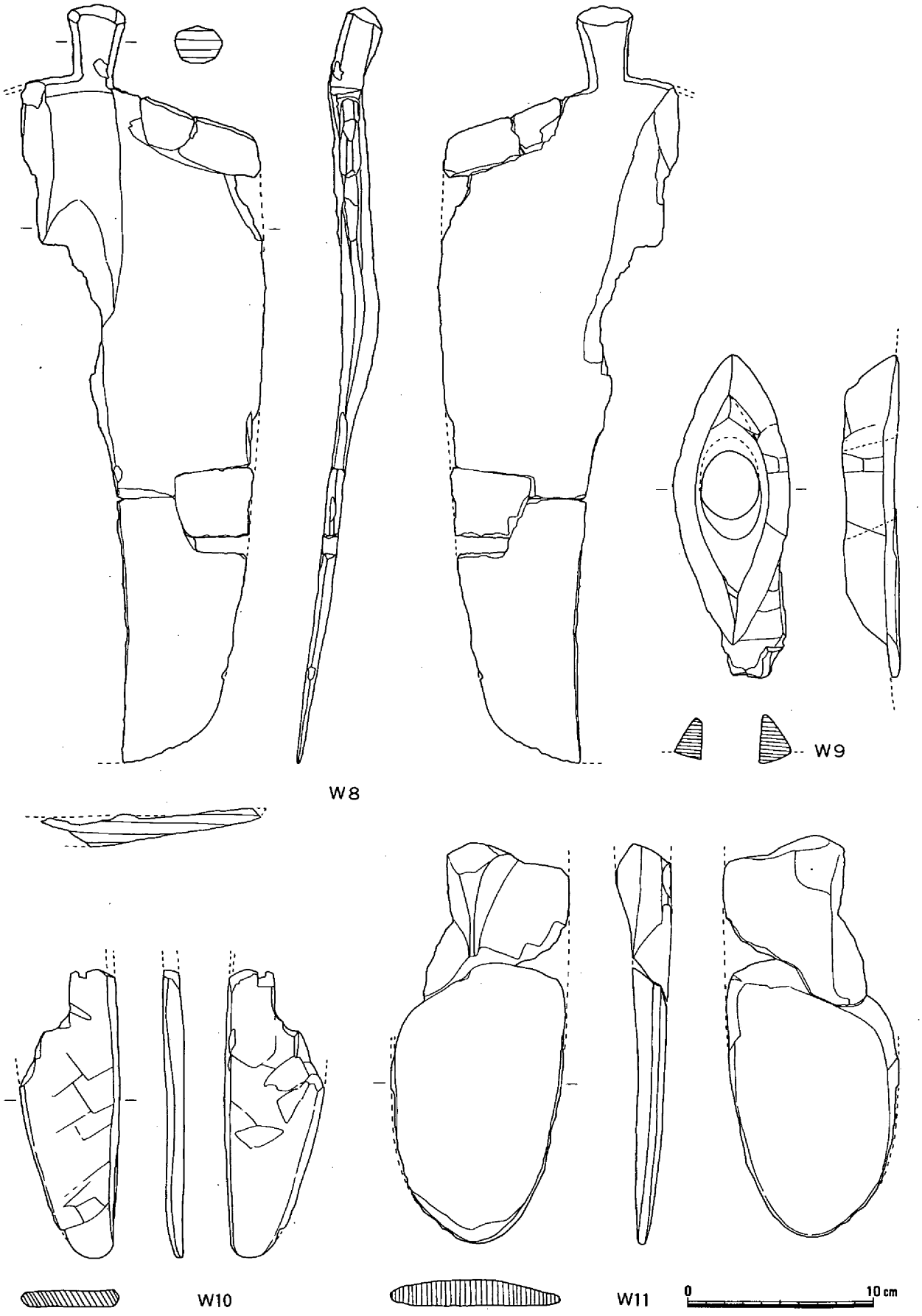


第299図　旧河道２出土遺物（３）

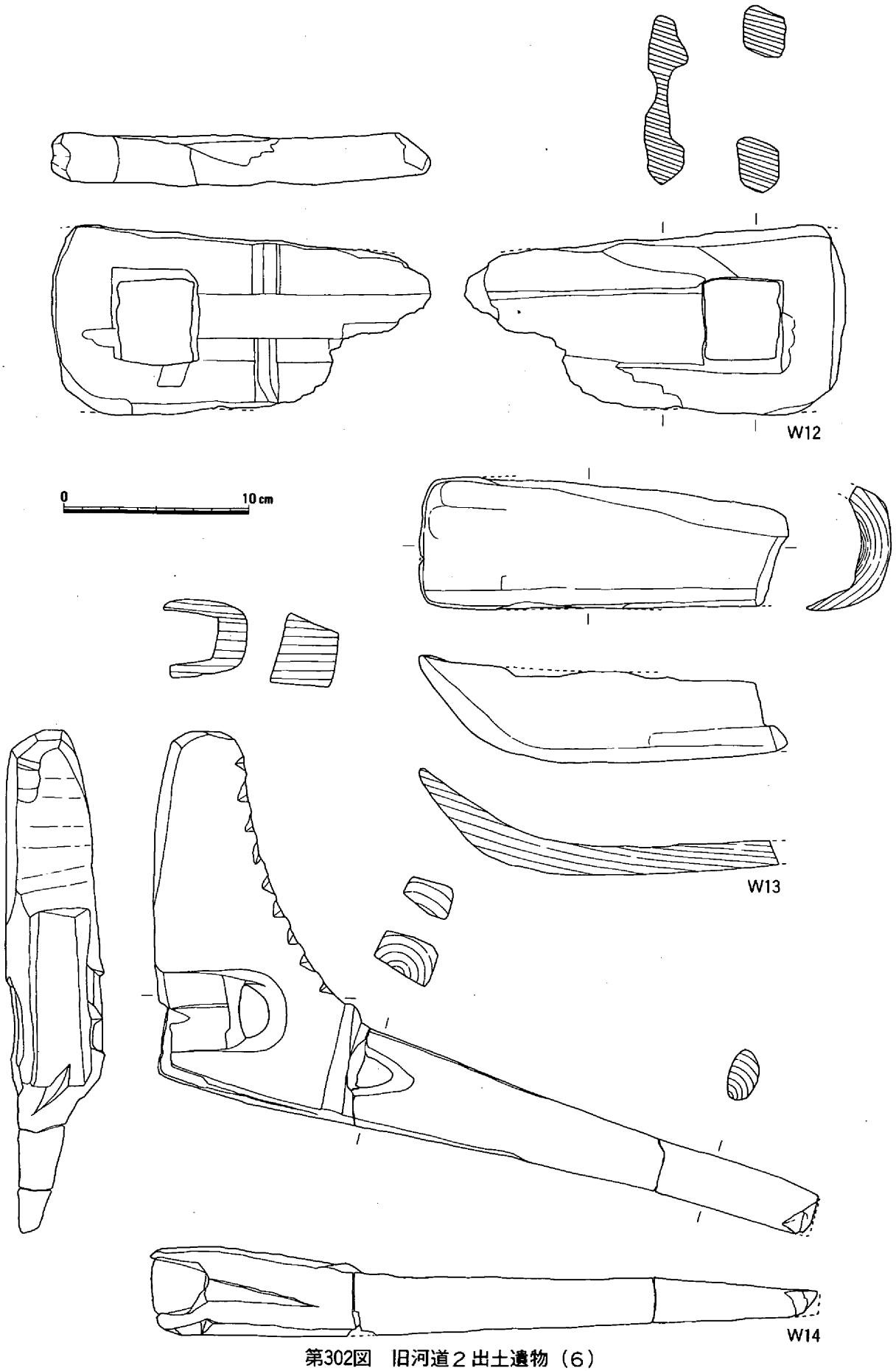
く。それぞれの杭列を観察すると、ある間隔をおいて杭の密集が認められ、その密集部分がＮ列とＳ列で対応しているのが判る。例えば、Ｎ１・２杭とＳ１・２杭、Ｎ32～35杭とＳ32～35杭というように、杭の数についても近似している。このことから、Ｎ列とＳ列を対とし、この２列の杭列を一体として一つの橋と考えたい。杭の密集部分の間隔は心々で測ると、北端のＮ１・２杭とＮ３～９杭間が1.8mである以外は、すべて２ｍとなり、この値はＳ列も同様である。杭の多くは垂直に打ち込まれ、大きな傾斜を示すものはみられなかったが、Ｎ１杭とＮ２杭、Ｓ１杭とＳ２杭，Ｎ23杭とＮ24杭、Ｓ24杭とＳ25杭など、上方で交差するように打ち込まれていると思われる対の杭があり、これらについ



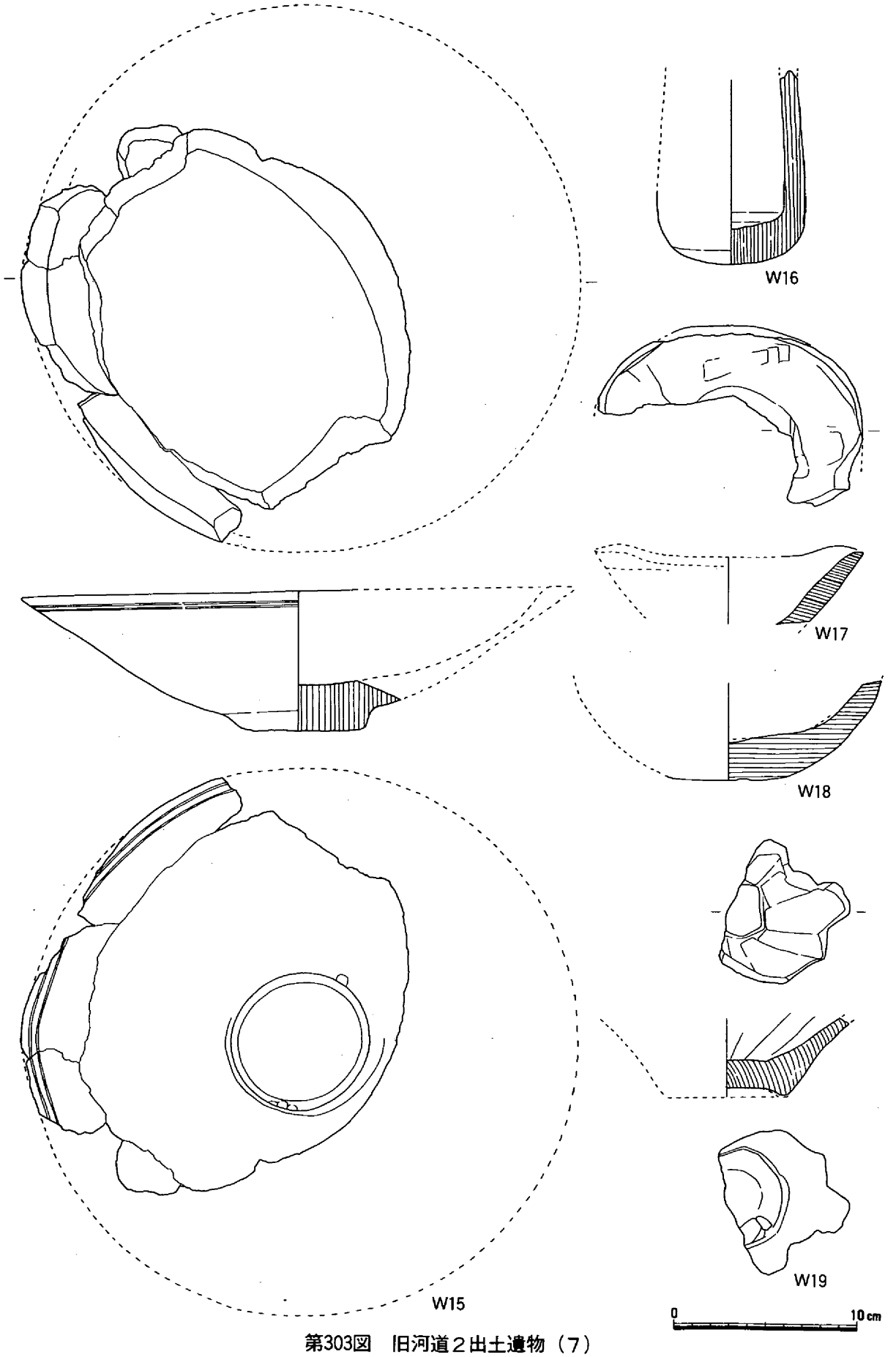
第300図　旧河道２出土遺物（４）



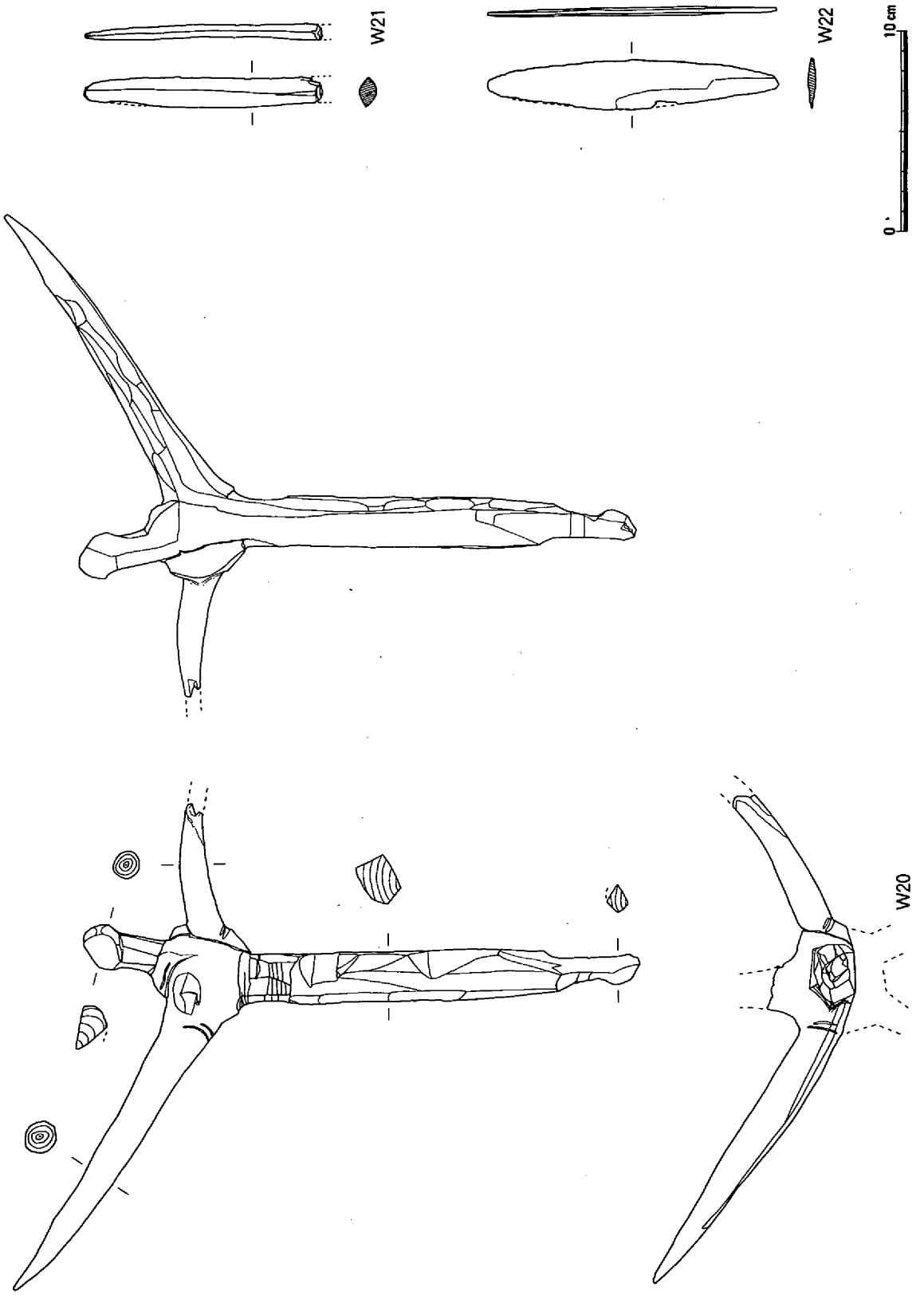
第301図　旧河道２出土遺物（５）



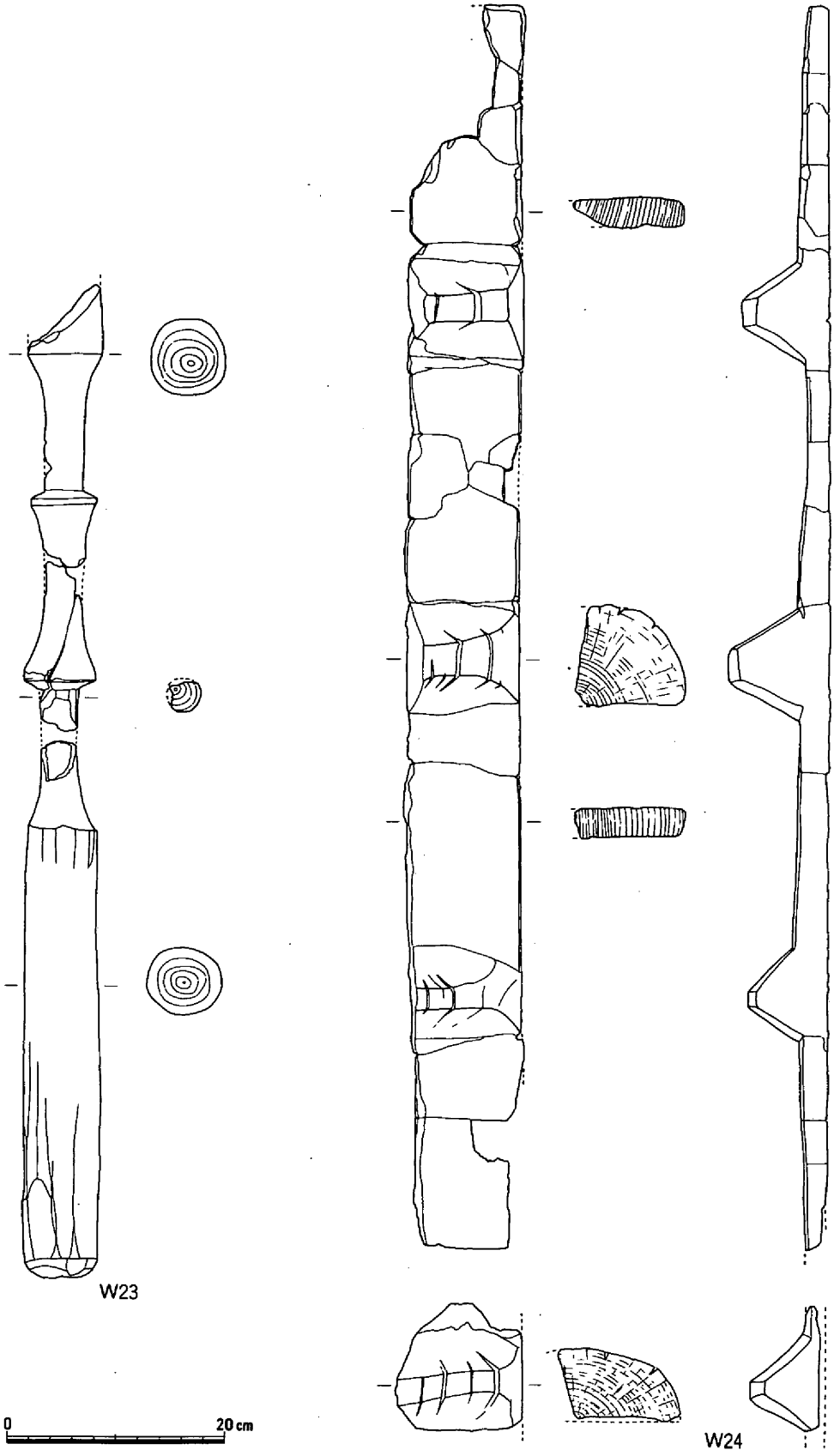
第302図　旧河道２出土遺物（６）



第303図　旧河道２出土遺物（７）



第304図　旧河道２出土遺物（８）

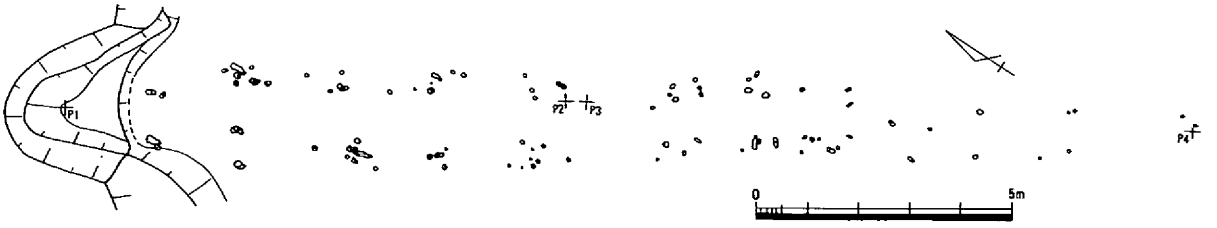


第305図　旧河道２出土遺物（９）

第306図　旧河道２出土遺物（10）

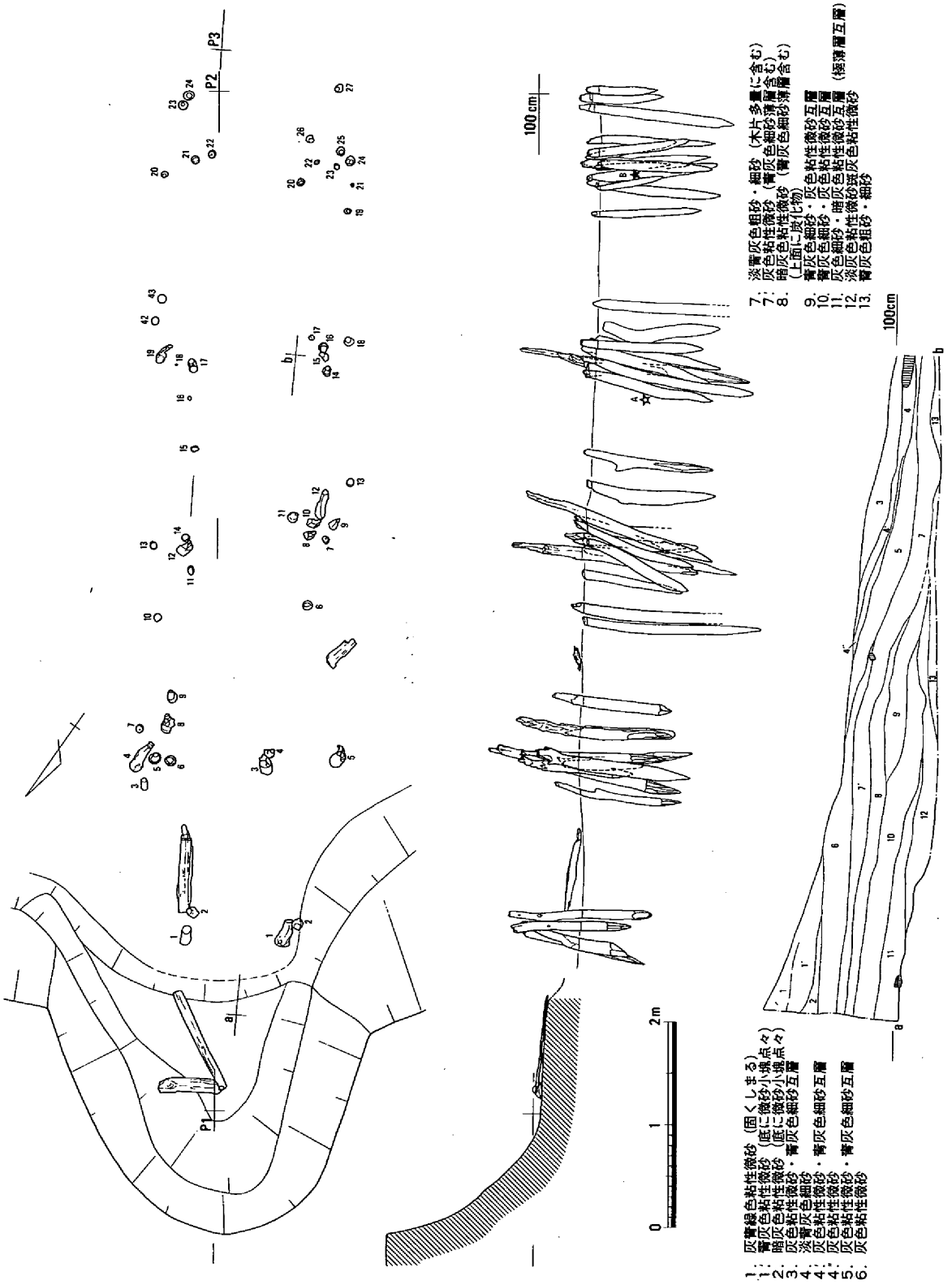
ては交差した又の部分に横木を架けたのではないかと想像される。ただ、Ｎ１杭とＮ２杭やＳ１杭とＳ２杭などは横木が杭列と平行する方向ではなく、直交する方向、すなわち、Ｎ１杭とＮ２杭でできた又とＳ１杭とＳ２杭でできた又とにかけて横木を渡したのではないかと考えられる。このように考えると、Ｎ列とＳ列で杭の密集部分が対応していることは、横木を杭列と直交する方向で渡すためではなかったかと思われてくる。適当な間隔をおいて杭列と直交するように架かった横木を想像すると、そこに見えてくるのは橋であり、井堰のようなものではない。

ここで問題になるのが溝125の存在である。溝125の流路は34Ｃ区からまっすぐに延びてちょうど橋の北側の取り付き部分に突き当たる。反対の南側に眼を転じると、『百間川原尾島遺跡２』の「溝163」が検出されている（第295図）。もし、この二つの溝が同一の溝として一連のものであったとしたら、その間を繋ぐ杭列は橋であり、その上

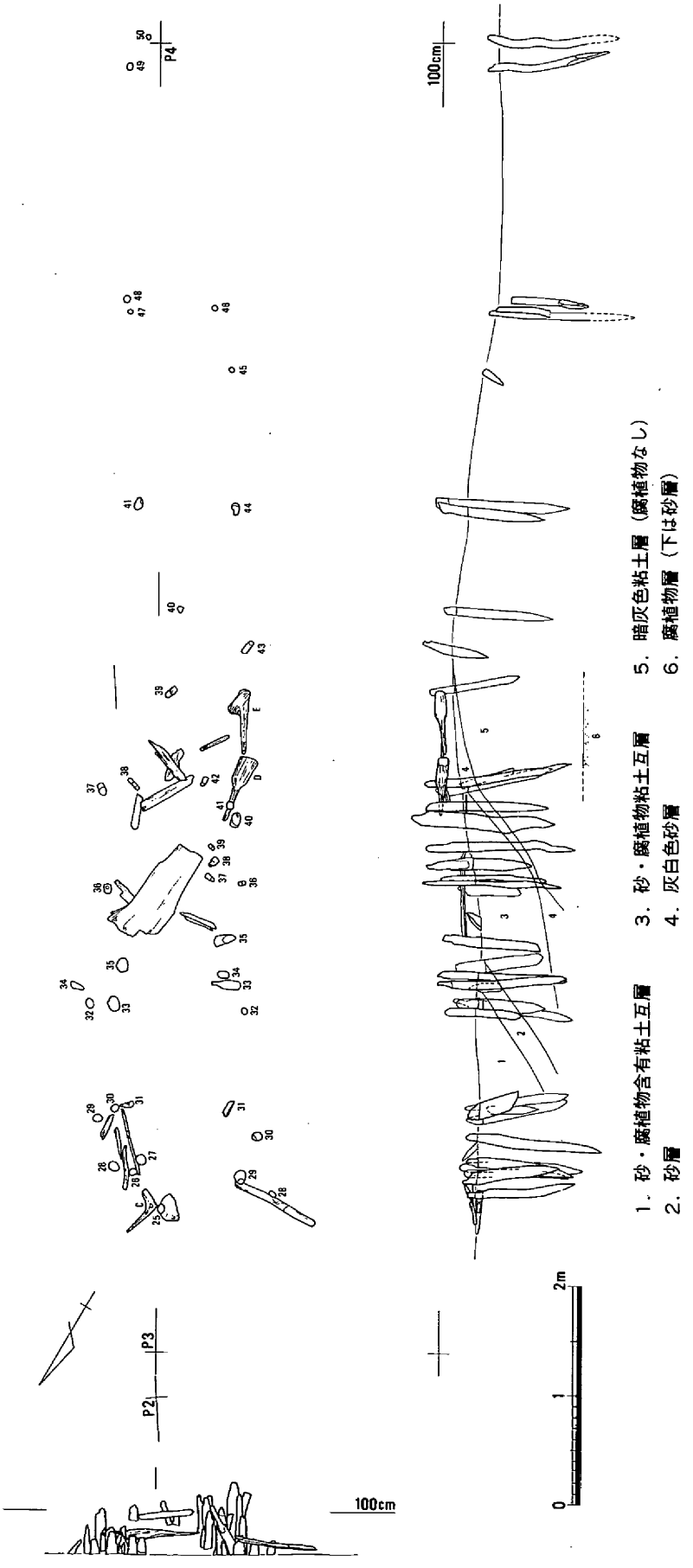


第307図　橋脚列全体図（Ｓ：1/150）

には丸太を刳り抜いた樋が渡されていたに違いない。弥生時代前期に、遠隔の上流部で枝分けした水を水路を長く引いて下流域に運ぶ用水を作り、川を渡す樋まで構築していたとすると、その技術の高さは驚きである。『百間川原尾島遺跡２』の三ノ坪調査区の弥生時代中期の遺構で、「井堰２・３」と



第308図　橋脚列〈北半部〉（S：1/60）



第309図　橋脚列〈南半部〉（S：1/60）

された杭群と「溝174～176」の関係も同じ状況を呈していることから、これについても再検討の必要があるのではなかろうか。杭の直径が10cm前後と細く、また、橋脚としては所々に密集しすぎるという疑問もないことはないが、井堰としても、杭が貧弱なのは同様で、しかも、構造の上から考えて、2列とも直立していることは15mもある河道の井堰としてありえないことと思われる。橋脚列の北側の抉れ部分は溝と樋の良好な接合を図るためで、南端の杭列が第296図の縄文時代と考えられる53～60層の上面で検出されたことも納得できる。

橋脚列の周辺からは多くの木器が出土し注目される。杭列の検出面からは広鍬の未製品であるW7や石斧の柄の未製品（第309図E）と製品W14（第309図C）が出土し、杭の断面を調べるトレンチの中から杵W23（第308図B）や梯子W24（第308図A）・鍬W25などが掘り出された。また、604の百・前・Ⅱ期の完形の壺もここから出土している。（岡本）

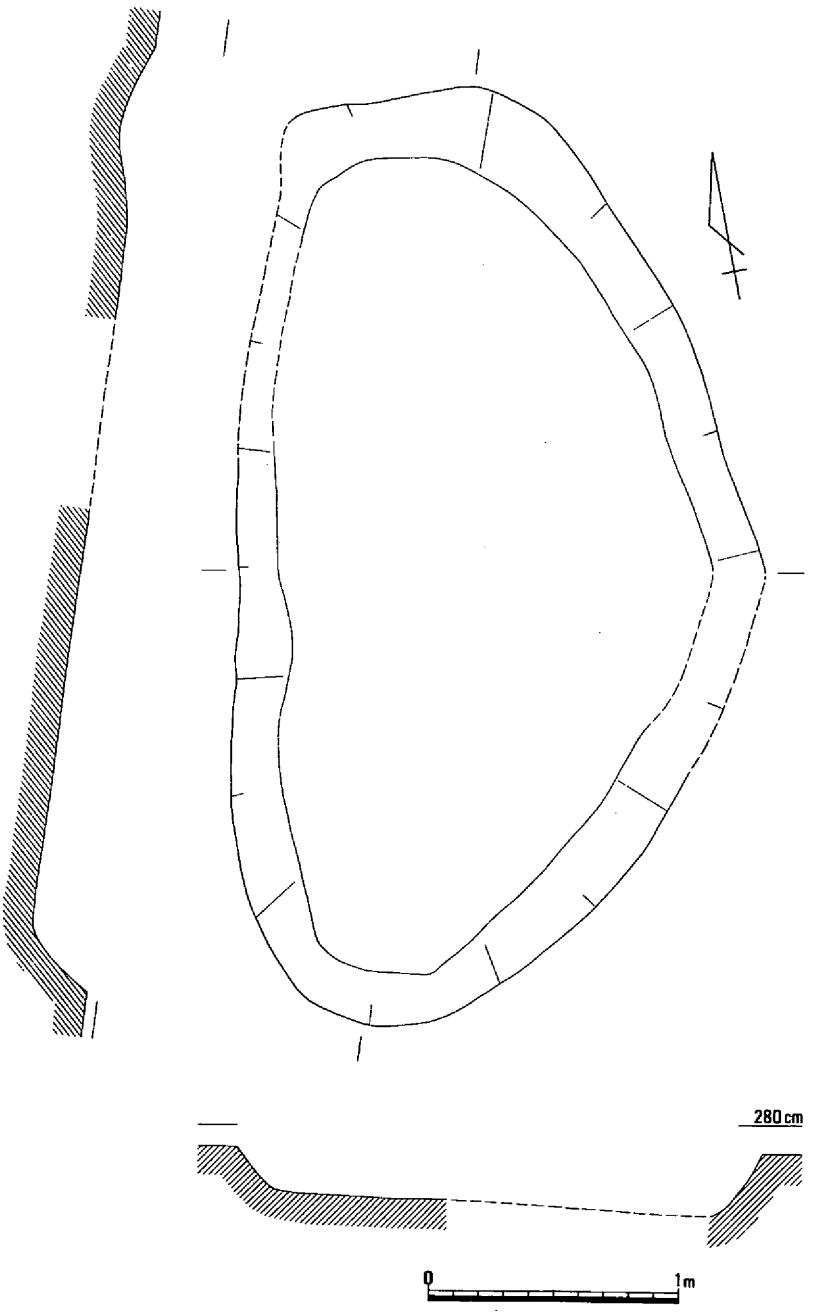
(2) 土　　壙

土壙83（第310図）

33Ｄ区の北西隅に位置し、一部33Ｃ区にかかる。中央部分をトレンチによって破壊した。不整形な蛹形の大形土壙である。規模は長径375cm、短径210cm、深さ34cmを測る。壙壁の傾斜はあまり急ではない。底部は広い平坦面となるが、北縁から東縁にかけて窪んでいる。埋土は灰褐色粘質土で、底部では薄い灰白色粘土層が認められた。遺物は出土しなかったが、検出面からみて弥生時代前期の遺構と考えている。（岡本）

土壙84（第311図、図版39）

33Ｄ区の西半にあり、土壙83とは1.3m離れている。溝119によって一部破壊を受けている。不整形な隅丸長方形の平面形をもつ大形の土壙である。規模は長軸293cm、短軸162cm、深さ32cmを測る。壙壁の傾斜はあまり急ではなく、底部への移りも滑らかである。底部は少し凹凸をもつものの、広い平坦面となっている。埋土は２層に分かれ、上層は褐灰色粘質土、下層は灰色粘土である。埋土をはじめとして、全体の感じは土壙83とよく類似している。近接していることからも同時期の遺構である可能性が強い。土壙84からは縄文時代晩期ではないかとみられる土器の小片が１片のみ出土し、あるいは、縄文時代の遺構である可能性も考えられるが、ここでは、弥生時代前期の遺構としておく。（岡本）



第310図　土壙83

土壙85（第312図）

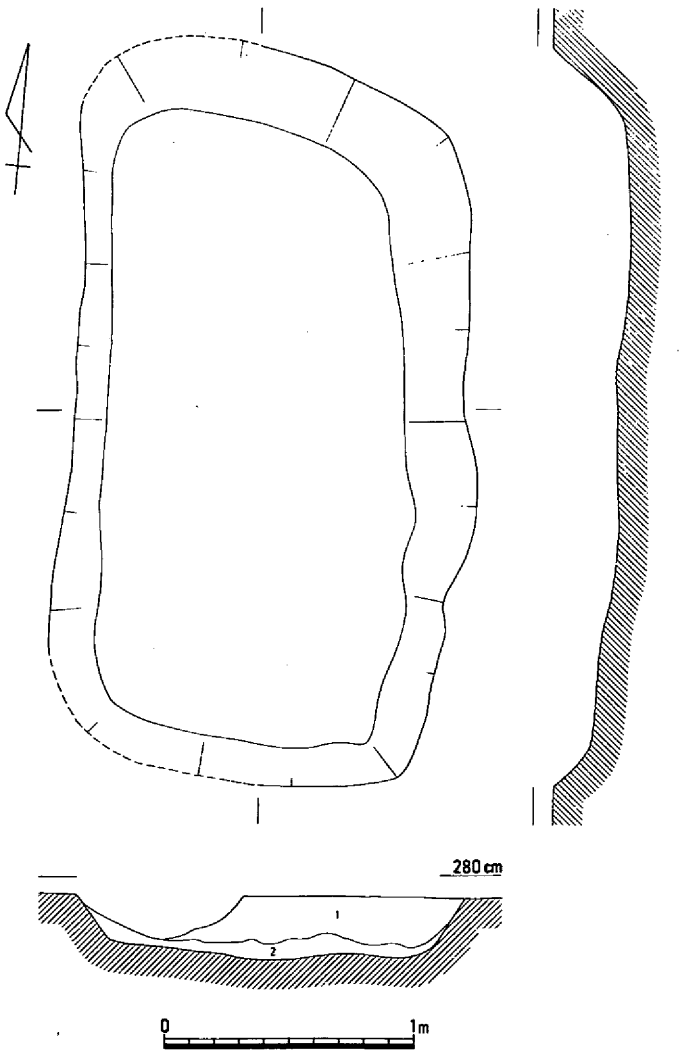
34D区に位置し、溝127の溝壁から検出された。遺構の時期から判断して溝127に伴うものではなく、大きく破壊をうけたものである。平面形は楕円形と想定され、長径132cmを測る。壙壁の傾斜は一様ではなく、北側では抉り込んだようになっている。底部には二つの穴があり、北側の穴は長径62cm、深さ69cm、南側の穴は長径57cm、深さ72cmである。出土遺物として百・前・Ⅲ期の甕がある。逆L字形の口縁に刻目を入れ、胴部上端に11条のヘラ描き沈線を巡らせる。（岡本）

土壙86（第313図）

34D区の東端近くで検出された。溝130によって上部を一部破壊されている。平面形はほぼ円形で、長径67cm、深さ83cmを測る。壙壁の傾斜は急で、途中に屈曲部をもち、これより下はさらに垂直に近くなる。底部はかすかな凹面となっている。底面の長径は34cmである。形態から考えて井戸ではないかとも思われるが、底面の海抜は165cmと高く、涌水砂層までは達していない。出土遺物はなかったが、検出面から考えて弥生時代前期の遺構と判断される。（岡本）

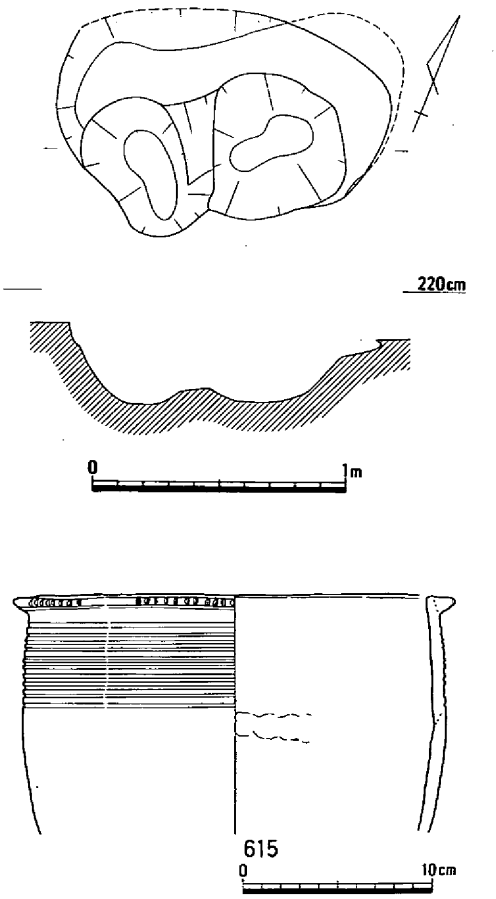
土壙87（第314図）

35D区の北西隅で検出された。平面形は細長い隅丸長方形を呈するが、北西隅は大きく湾曲している。土壙の規模は長軸220cm、短軸69cm、深さ10cmを測る。残

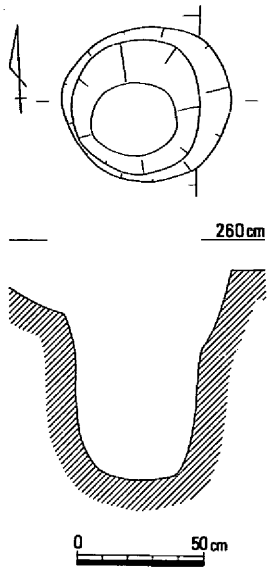


1．褐灰色粘質土　2．灰色粘土

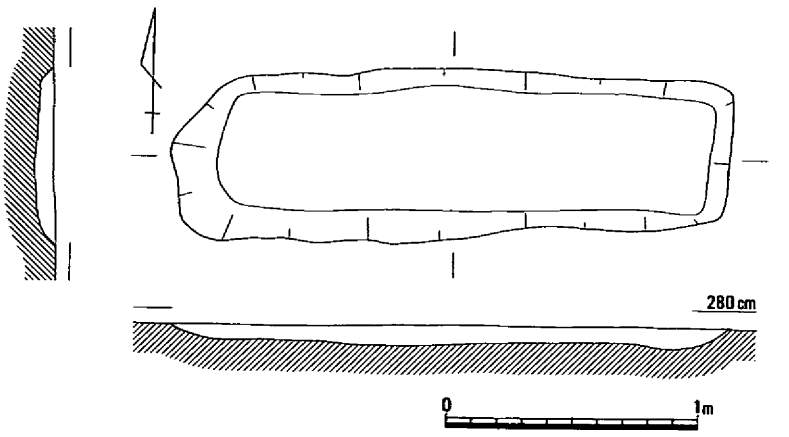
第311図　土壙84



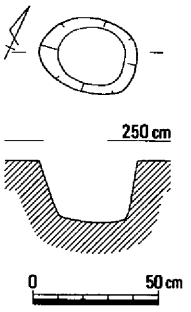
第312図　土壙85・出土遺物



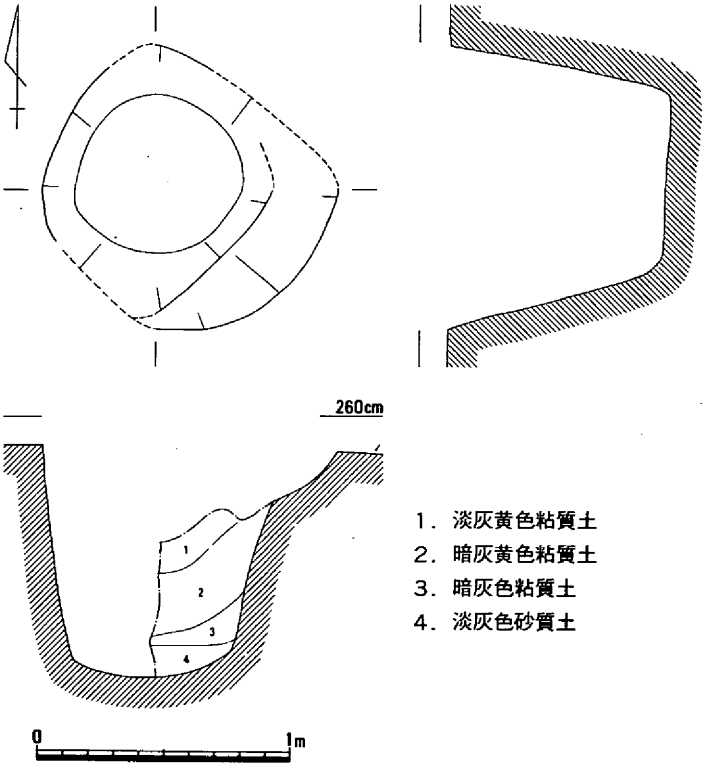
第313図　土壙86



第314図　土壙87



第315図　土壙88



第316図　土壙89

りが浅いこともあるが、壙壁の傾斜は緩く、底部との境は明瞭ではない。底部は、わずかな凹凸はあるものの、ほぼ平坦面となるが、中軸部分が2㎝程度低い。底面は長軸194㎝、短軸50㎝を測る。主軸の方向は東西方向である。暗褐色粘質土で埋まっていた。遺物は出土していない。弥生時代前期の遺構ではないかと判断しているが、中期の遺構である可能性もある。形態だけから考えると土壙墓と思われるが、それを証明する物証に欠ける。土壙87は島状高まり5の上に位置しているが、これは単なる偶然と思いたい。（岡本）

土壙88（第315図）

35D区で検出された小形の土壙である。この土壙の周りに柱穴状の小穴が取り巻くように検出され、あるいは住居の中央穴かと考えたが、小穴はうまくまとまらなった。柱穴の平面形は楕円形で、長径38㎝、短径29㎝、深さ25㎝を測る。出土遺物はなかった。（岡本）

土壙89（第316図、図版39）

35D区に位置する。溝132によって上部を破壊されている。検出面での平面形は不整形な楕円形を呈し、長径111cmを測るが、20cm掘り下げると方形になって縮小し、長軸92cmとなる。土壙の深さは89cmで、底部の海抜は160cmを測る。壙壁の傾斜は急で、底部はほぼ平坦な面となる。底面の長径は67cmである。埋土は順序良い堆積を示し、徐々に埋まったことを思わせる。この土壙も井戸とするには浅いように考えられる。出土した土器片は百・前・Ⅲ期かとみられる。（岡本）

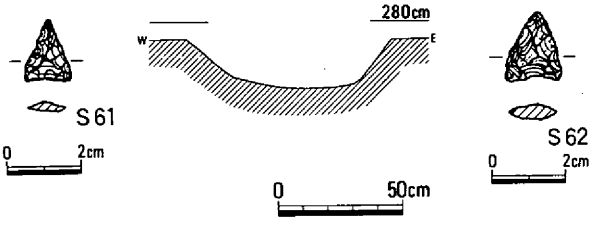
(3) 溝

溝119（第342図）

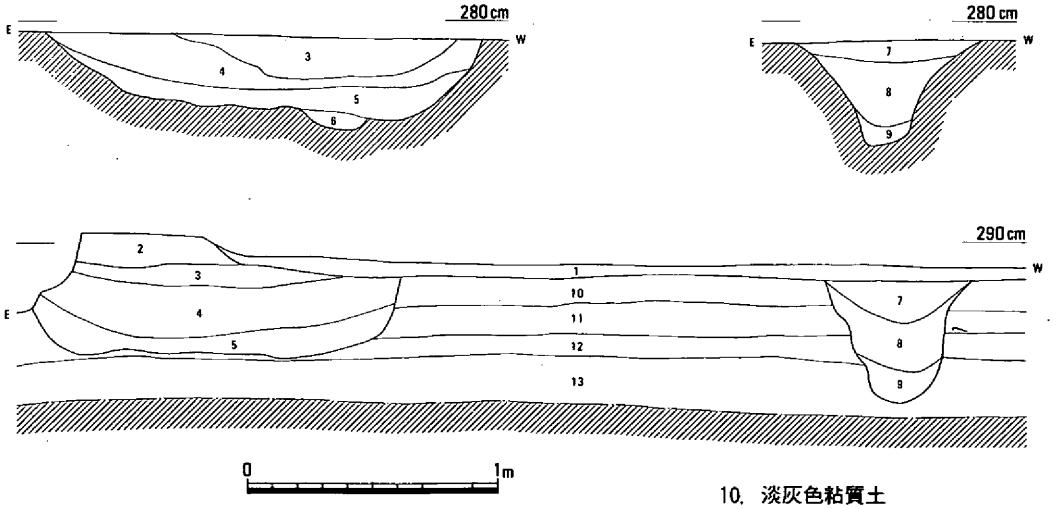
33D区に位置し、島状高まり4の下から検出された。直線的な溝で、北から南に流れていたと考えられる。規模は幅100～135cm、深さは30cmを測る。溝壁の傾斜は緩く、底部との境は明瞭でない。底部はかすかな凹面となる。断面形は皿状を呈する。南端の底面の海抜は256cmである。埋土は暗褐灰色粘質土で、粘性は弱く、焼土を含んでいる。（岡本）

溝120（第317・342図）

33D区にあり、溝119と平行している。島状高まり4の下から検出された。弥生時代後期の溝135によって東半分を破壊されている。溝の幅は不明で、深さは残存部分で12cmを測る。溝壁の傾斜はかなり急で、底部は平坦面となる。中央部分の底面の海抜は278cmである。埋土は暗灰色粘質土であるが、粘性は弱く、砂を混じえている。遺物として小形の平基の石鏃が出土している。（岡本）

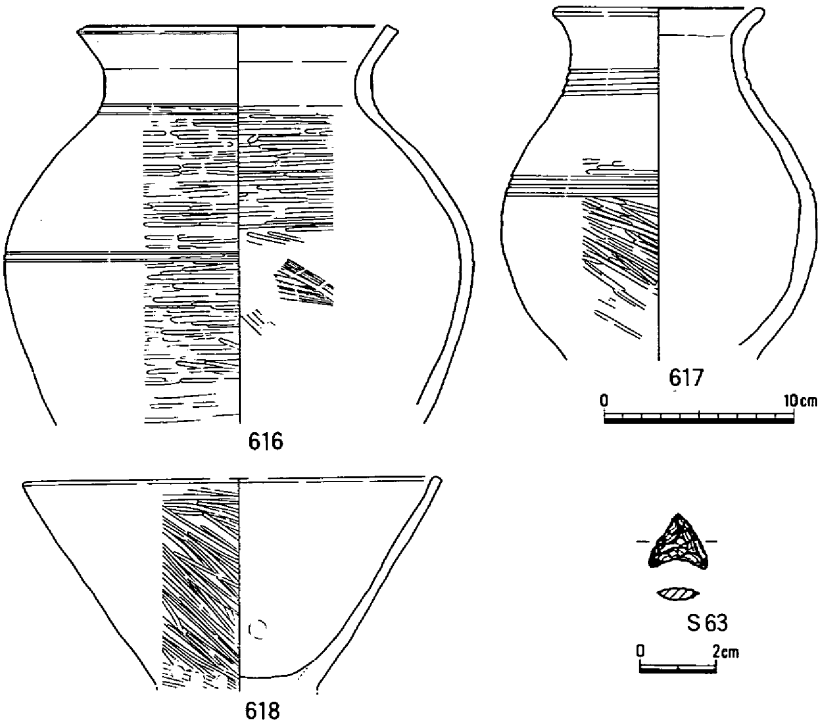


第317図　溝120出土遺物〈左〉，溝121・出土遺物〈右〉

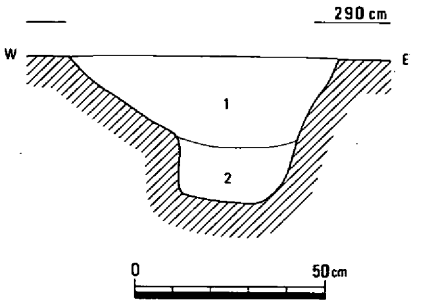


1．灰色粘土
2．淡黄灰色粘質土
3．淡灰色粘質土
4．淡褐灰色粘質土
5．灰色粘土
6．淡灰色粘土
7．淡灰色粘質土
8．淡褐灰色粘質土
9．灰色粘土
10．淡灰色粘質土
11．淡灰色粘質土
12．淡灰色粘質土
13．淡灰色粘質土

第318図　溝122〈右〉・123〈左〉



第319図　溝122出土遺物



1．暗褐灰色粘質土　　2．灰色粘土

第320図　溝124

溝121（第317図）

33D区で検出された。南から延び、土壙83の近くでなくなる。底部は北から南に傾斜している。最大幅は82cm、深さは22cmである。溝壁の傾斜は急で、底部は凹面となる。断面形は椀形を呈する。南端の底面の海抜は251cmを測る。この溝は、33C区から33D区に続く低い段と平行しているようで、その距離は3mである。高さ3～8cm程度のこの段は、弥生時代前期の水田の東端の線と平行しているようで、その間には3条の溝が検出されていて、前記の溝119もその一つである。おそらく、前期の水田の造成と併行して水路が設けられたと思われ、溝121も用水路の一つだったのではなかろうか。遺物としては石鏃と土器片がある。土器片は前期か中期かはっきり判らない。（岡本）

溝122（第318・319図、図版39）

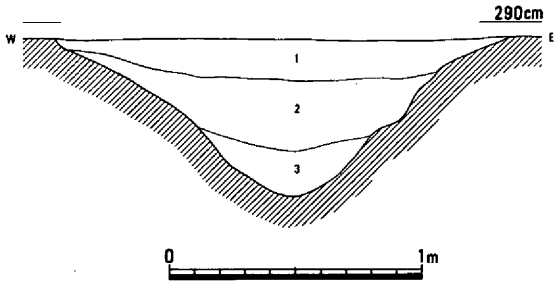
34C区から34D区にまっすぐ延びるが、わずかに湾曲する。調査区北壁の土層観察によれば、溝123・124によって破壊を受けているため、これらの溝よりは時期が古い。底面の海抜は北端が222cm、南端は218cmとほとんど傾斜がないが、地形や隣接する溝の例から、北から南に流れていたと考える。規模は幅67～88cm、深さ50cm前後を測る。溝壁の傾斜は急で、底部は狭い平坦面か凹面になり、断面形はV字形を呈する。埋土は3層からなる。遺物がかなり出土している。図示した土器のうち、壺は器高が高くて、頸部と腹部にヘラ描きの沈線を2～3条巡らす。百・前・Ⅲである。（岡本）

溝123（第318図、図版39）

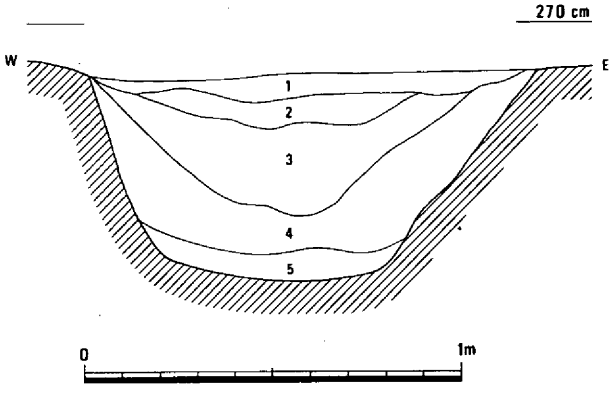
34C区から34D区と直線的に続く。溝122と溝124を切っていることから、三つの中ではもっとも新しい。規模は幅160～190cm、深さ28～37cmを測る。溝壁は湾曲し、なだらかに底部に続く。底部には凹凸が多く、平坦な面にはなっていない。埋土は3層からなる。底面の海抜は北端で246cm、南端で248cmとなり、ほとんど傾斜はないに等しい。遺物として百・前・Ⅲの土器がある。（岡本）

溝124（第320図）

34C区から34D区にかけて検出された。直線的な溝である。溝122を破壊し、溝123と溝127によって破壊されている。幅75～90cm、深さ46cmを測る。溝壁の傾斜はかなり急で、途中から垂直に近く落ち

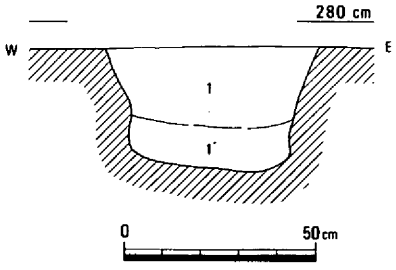


1．暗褐灰色粘質土　　3．暗灰色粘土
2．暗灰黄褐色粘質土

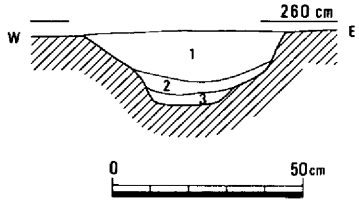


1．褐灰色砂質土　　4．青褐灰色粘土
2．暗褐灰色粘質土　　5．青灰色粘土
3．暗褐灰色粘質土

第321図　溝125



1．暗褐灰色粘質土　　1'．暗灰色粘質土



1．褐灰色粘質土　　2．黄褐灰色粘質土
3．暗灰色粘質土

第322図　溝126

る。断面形をみると、上半は椀形で、下半は箱形を呈する。底部は平坦な面をもつ。底面の海抜は北端で240cm、南端で234cmを測り、わずかに南へ傾斜しているようである。百・前・Ⅲ期の土器片が出土している。（岡本）

溝125（第321図）

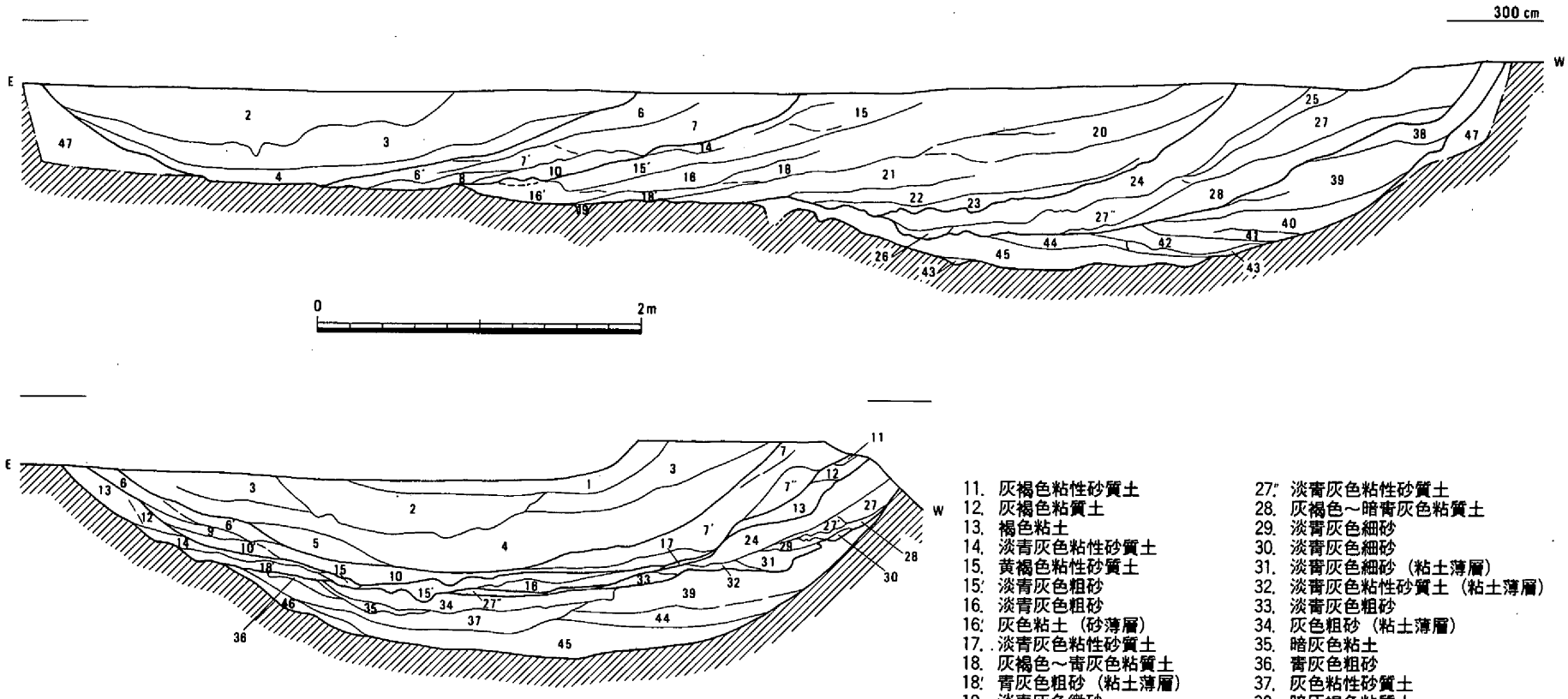
34C区から35C区を通り35D区に至って橋脚列の北端に達する。旧河道の項の考察によれば、この橋に樋が架けられ、さらに南に流れていくと考えられる。きわめて重要な用水路であったとみられる。調査区北壁の土層観察（第293図）によれば溝122・123に切られ、また、溝126・127にも破壊されている。周辺の溝のなかではもっとも古い溝となる。規模は幅が85～200cm、深さは47～63cmを測る。溝壁の傾斜は急であるが、底部の形状は溝127の北と南で異なる。第321図の上が北側で、底部は凹面となり、断面形はV字形を呈する。下は南側で、底部は平坦面となり、断面形は台形となる。底面の海抜は北端で219cm、南端で197cmを測る。周辺の他の溝と比べるとかなり傾斜しているということができる。埋土は下流の方が層が増える。百・前・Ⅲの土器が出土している。（岡本）

溝126（第322図）

34C区から34D区、35D区と続く。溝127によって破壊を受けている。規模は幅40～90cm、深さ20～40cmを測る。溝の形状は溝127を挟んで北と南でいくらか相違している。北側の断面は第322図の上段で、断面形は箱形を呈する。南側は下段で、溝壁の傾斜はやや緩く、底部は狭い平坦面のため、断面形は台形となる。底面の海抜は北端が235cm、南端が237となり、水平に近い。（岡本）

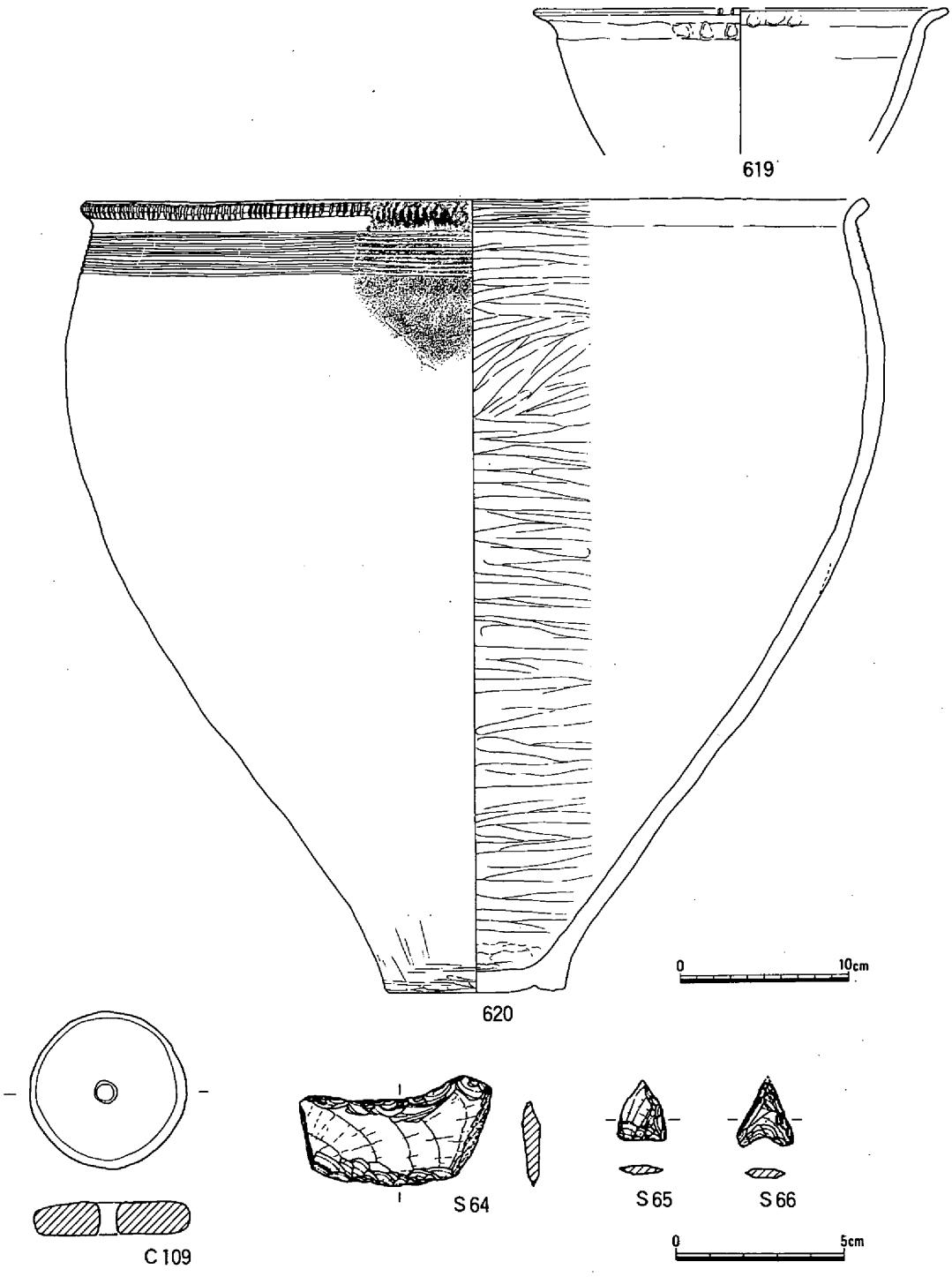
溝127（第323・324図、図版40）

34C区から35C区、34D区にわたる大溝である。ただ、C区側の部分は長年月にわたる改修の結果



1．灰褐色粘質土
2．灰褐色～青灰色粘土
3．黄褐色～淡青灰色粘質土（底砂）
4．灰黄褐色～淡青灰色粘質土（底砂）
5．青灰色粘土
6．灰褐色粘質土
6′．青灰色粘質土（砂薄層）
7．黄褐色粘質土
7′．淡青灰色細砂（粘土互層）
7″．灰褐色粘性砂質土
8．淡青灰色粗砂（粘土互層）
9．灰白色細砂（粘土薄層）
10．淡青灰色粗砂（粘土互層）
10′．淡青灰色細砂（粘土薄層）
11．灰褐色粘性砂質土
12．灰褐色粘質土
13．褐色粘土
14．淡青灰色粘性砂質土
15．黄褐色粘性砂質土
15′．淡青灰色粗砂
16．淡青灰色粗砂
16′．灰色粘土（砂薄層）
17．淡青灰色粘性砂質土
18．灰褐色～青灰色粘質土
18′．青灰色粗砂（粘土薄層）
19．淡青灰色微砂
20．灰褐色～淡青灰色粘性砂質土
21．淡青灰色粘土（細砂互層）
22．淡青灰色細砂（粘土互層）
23．淡青灰色細砂（粘土薄層）
24．灰褐色～青灰色粘土
25．灰褐色～淡青灰色粘性砂質土
26．暗灰色粘質土
27．暗灰褐色～淡青灰色粘質土
27′．灰褐色粘質土
27″．淡青灰色粘性砂質土
28．灰褐色～暗青灰色粘質土
29．淡青灰色細砂
30．淡青灰色細砂
31．淡青灰色細砂（粘土薄層）
32．淡青灰色粘性砂質土（粘土薄層）
33．淡青灰色粗砂
34．灰色粗砂（粘土薄層）
35．暗灰色粘土
36．青灰色粗砂
37．灰色粘性砂質土
38．暗灰褐色粘質土
39．青黒色～暗灰色粘土（微砂薄層）
40．青灰色粘土（微砂薄層）
41．淡青灰色粘土
42．青灰色粘土（暗灰色粘土小塊）
43．淡青灰色微砂
44．青灰色粘土
45．暗青灰色粘土（土器片多）
46．灰色粘土
47．暗褐色粘質土

第323図　溝127（S：1/40）



第324図　溝127出土遺物

であり、最初期の溝はD区の幅程度であったと考えられる。この溝は弥生時代中期末まで用水路として利用されていて、前期の段階の溝は34層より下の部分にあたる。溝127は第323図の上段から明らかなように、前期には大きく蛇行していたものが、その後の北側壁の掘削を伴う改修によって、やがてまっすぐになったものである。前期の段階では、幅５m、深さ1.3mと推定される。埋土は何層にも分けられ、複雑な様相を呈するが、前期の段階の埋土はおおむね粘土層である。前期には速い流水はなかったようである。このことからすれば、34層や36層は中期の可能性がある。　（岡本）

３．弥生時代中期の遺構・遺物

(1)　土　　壙

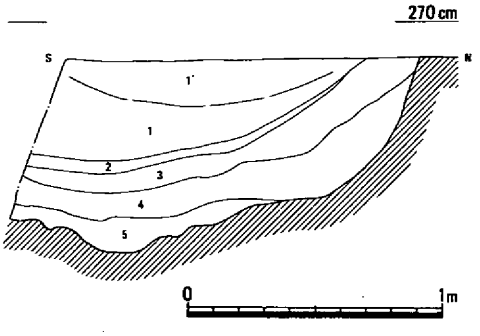
土壙90（第326図、図版40）

35Ｄ区に位置する。調査区の南端で検出され、かなりの部分はすでに消失してしまっていた。検出部分で13ｍの長さがあり、幅は170cmである。溝かとも考えたが、既報告部分にはこの遺構と続く部分は存在せず、細長い土壙と判断した。壙壁の傾斜は急で、湾曲し、底部に至る。底部は平坦ではなく、凹凸に富み、東側では段構造を示す部分も認められるようである。土壙の深さは96cmを測る。埋土を観察するとレンズ状の順序よい堆積を示すが、層の厚さには変化があり、１層は一気に埋没したようである。３層には炭が含まれている。遺物として土器片とサヌカイト片が少し出土している。土器の示す年代は百・中・Ⅰ期である。　　（岡本）

(2)　溝

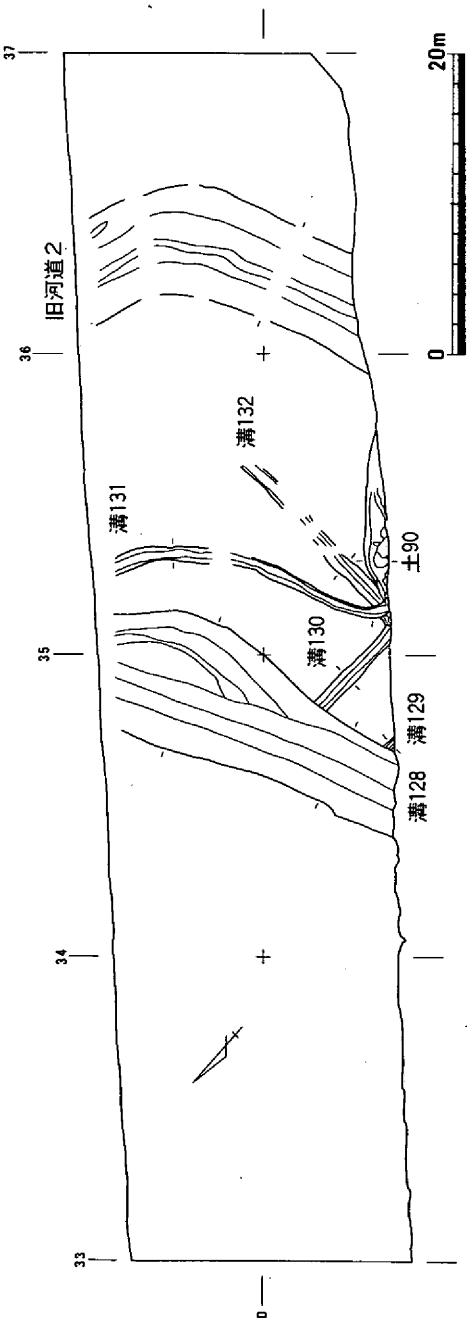
溝128（第323・328図）

34Ｃ区と34Ｄ区に位置し、一部35Ｃ区にかかる。前期に掘削された用水路、溝127の中期に属する部分を指す。第323図の33層より上の部分にあたる。時間的に継続する溝とはいっても、第323図の土層図中に太線で表したように、いくつかの不連続面が存在し、度重なる改修のあったことが知られる。この溝ははじめは35Ｃ区から34Ｄ区へと蛇行していたが、北半部分が徐々に西へ寄り、最終的には直線状の溝となっている。最終段階の規模は、幅が365～410cm、深さは82cmを測る。埋土は観察すると、砂ま

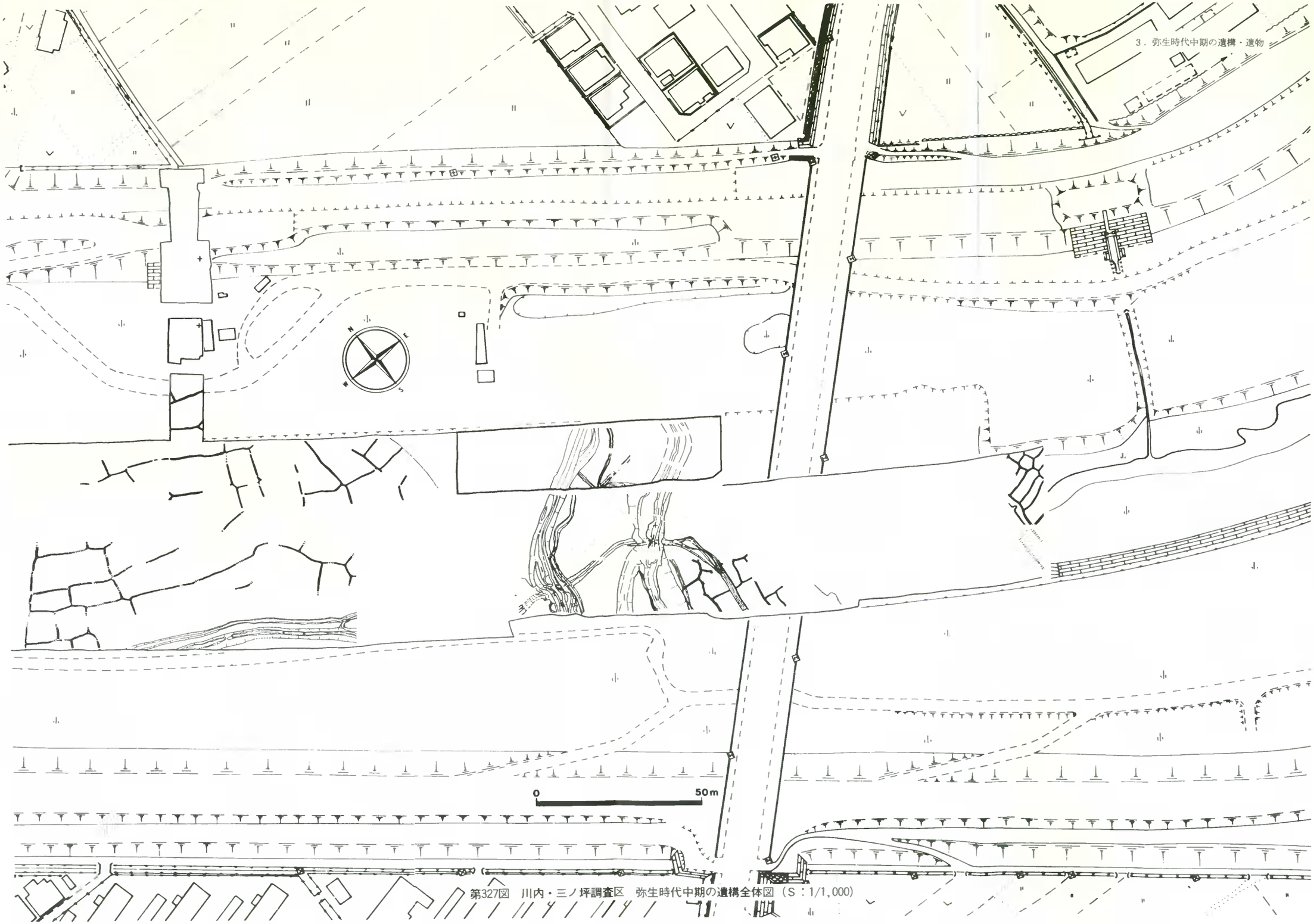


1．褐灰色粘質土　　3．青灰色粘土
1'．暗褐灰色粘質土　　4．淡青灰色粘土
2．淡褐灰色粘質土　　5．青灰色粘土

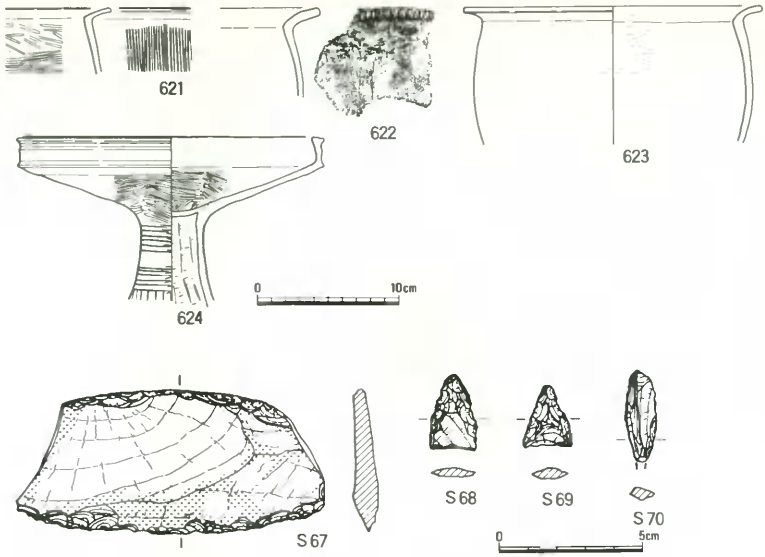
第326図　土壙90



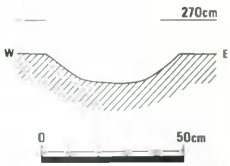
第325図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代中期遺構全体図（Ｓ：1/500）



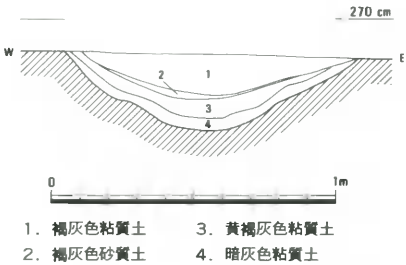
第327図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代中期の遺構全体図（S：1/1,000）



第328図　溝128出土遺物



第329図　溝129



第330図　溝130

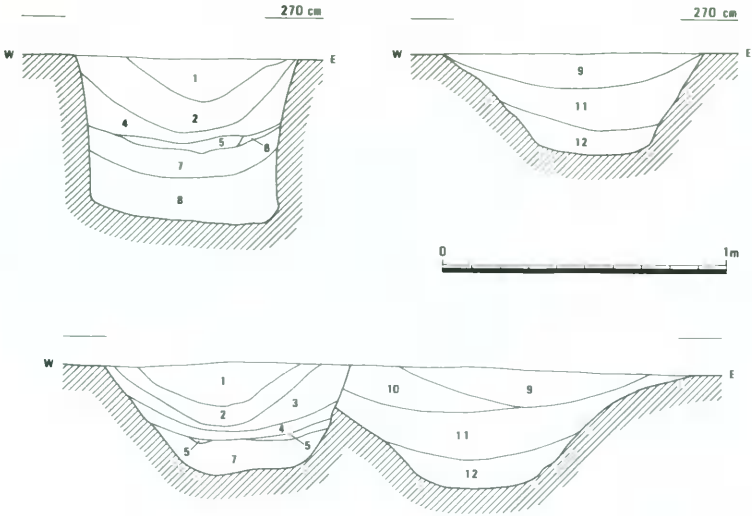
たは砂質土と粘質土とが交互に重なり、粗砂や細砂の層が繰り返し認められるなど、盛んであった流水の様を思い起こさせる。仮定ではあるが、下流に井堰が設けられ、その開閉に伴って第323図のような複雑な土層堆積が生じた可能性が考えられる。かなりの遺物が出土したが、ごく一部を図示した。土器の時期は百・中・Ⅰから百・中・Ⅲまでの中期全期間に及び、後期の土器かと思われるものもわずかに認められた。　（岡本）

溝129（第329図）

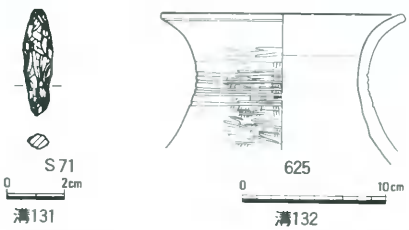
35D区にある。調査区の南端でわずか80cmばかりを検出したにとどまる。幅47cm、深さ11cmを測る。溝壁の傾斜は緩く、底部はかすかな凹面となる。遺物の出土はなかったが、溝128から発しているようにみられることと、4.3m離れて平行している溝130の時期から判断して、弥生時代中期の遺構と考えてよかろう。　（岡本）

溝130（第330図）

34D区から35D区へ直線的に延びる。幅80～107cm、深さ33cmを測る。溝壁の傾斜は緩く、底部は凹



1．暗褐灰色粘質土
2．黄褐灰色粘質土
3．黄褐灰色粘質土（含炭）
4．暗灰色粘質土
5．暗灰色細砂
6．黄褐色粘質土
7．暗褐灰色粘質土
8．灰黒色粘質土
9．褐灰色粘質土
10．黄褐灰色粘質土
11．暗灰色粘質土
12．暗灰色粘土



第331図　溝131〈左〉・132〈右〉・出土遺物

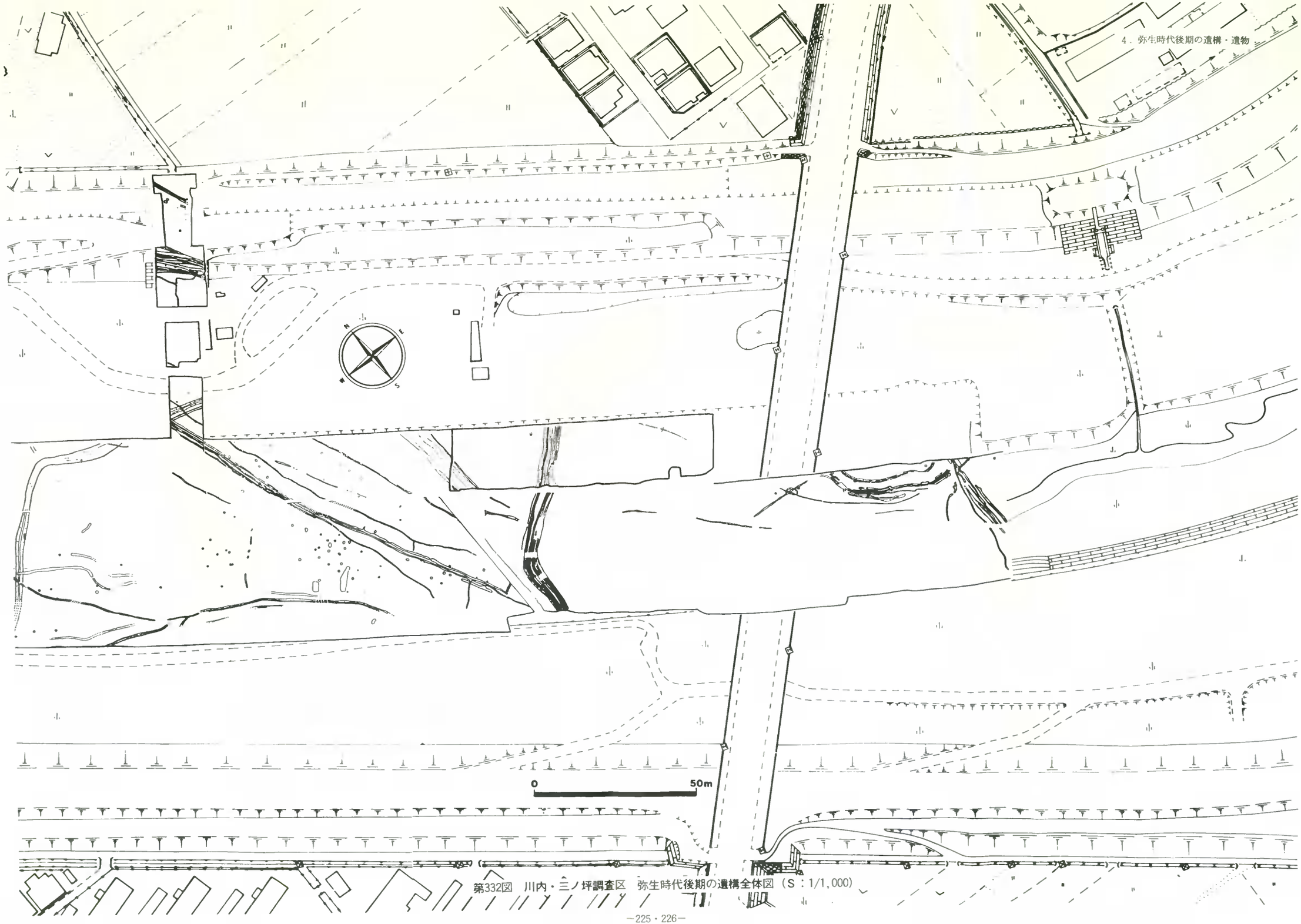
面となり、平坦面はもたない。埋土を観察すると、２層が砂質土であり、３層にも細砂の塊や炭が含まれるため、水が流れていたものと考えられる。溝128から発しているようにみられ、出土遺物として百・中・Ⅲ期の高杯形土器の破片があるなど、弥生時代中期の遺構と考えられる。『百間川原尾島２』の「溝161」に続くか。　（岡本）

溝131（第331図）

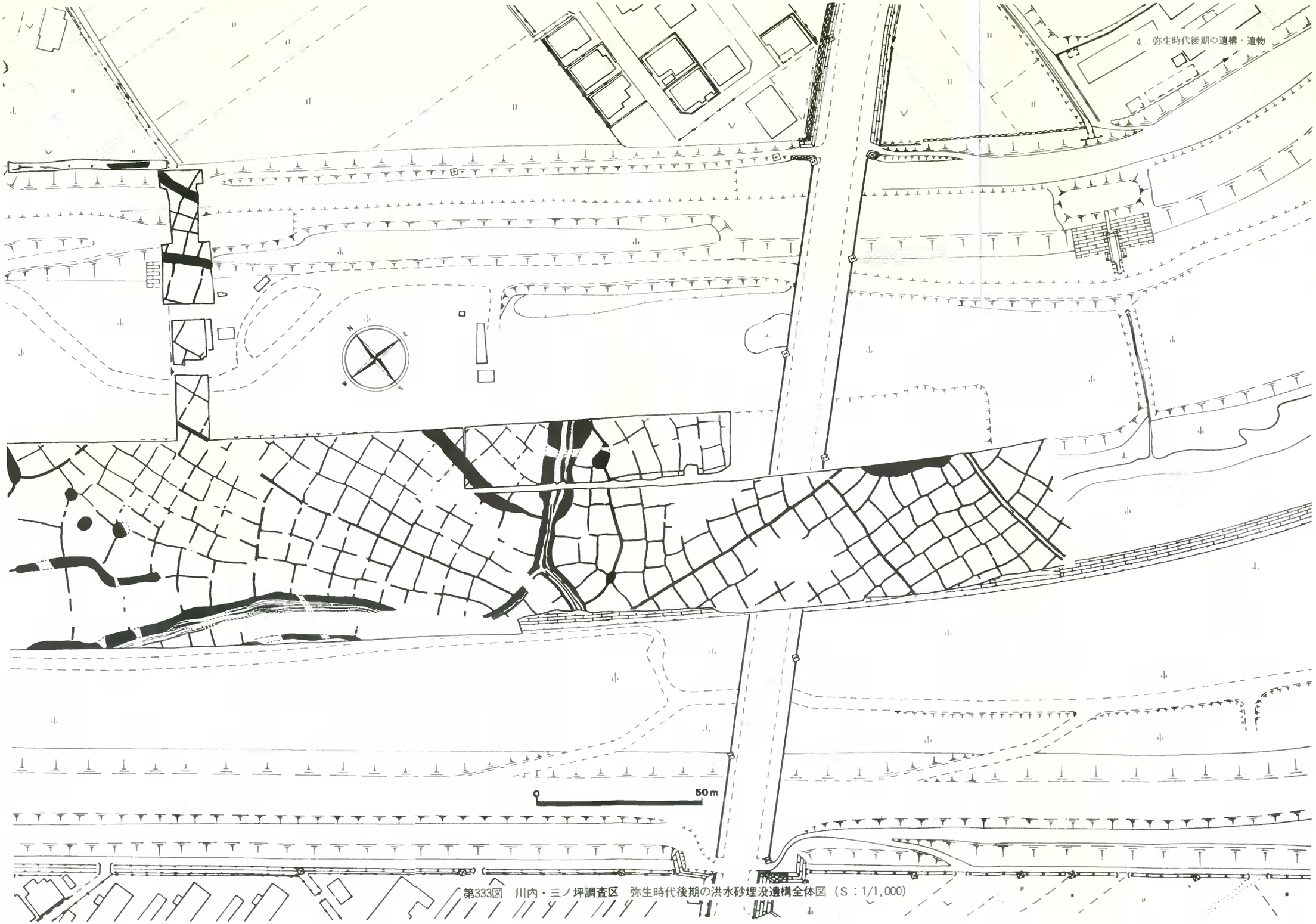
35Ｃ区から35Ｄ区へ蛇行しながら流れる。幅60～115cm、深さ60cmを測る。北端の底部の海抜高は192cm、南端では216cmで、この調査区内では北に傾斜している。溝壁の傾斜は垂直に近く、底部は凹面となるが、北端部分での断面形は図のように箱形を呈する。埋土は細分される。ほとんどが粘土層であるが、中間に砂層があり、水流に変化のあったことが考えられる。弥生時代前期の土器を出土しているが、中期の土器の出土した溝132を破壊しているため中期の遺構と判断される。　（岡本）

溝132（第331図）

35Ｃ区と35Ｄ区に位置する。より東の旧河道部分では検出できなかった。直線的な溝で、検出部分では溝底の傾斜は認められない。幅80～110cm、深さ43cmを測る。溝壁の傾斜は急で、底部は少し窪んだ凹面となる。溝131に切られている。百・中・Ⅰ期らしい土器が出土している。　（岡本）



第332図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S：1/1,000）

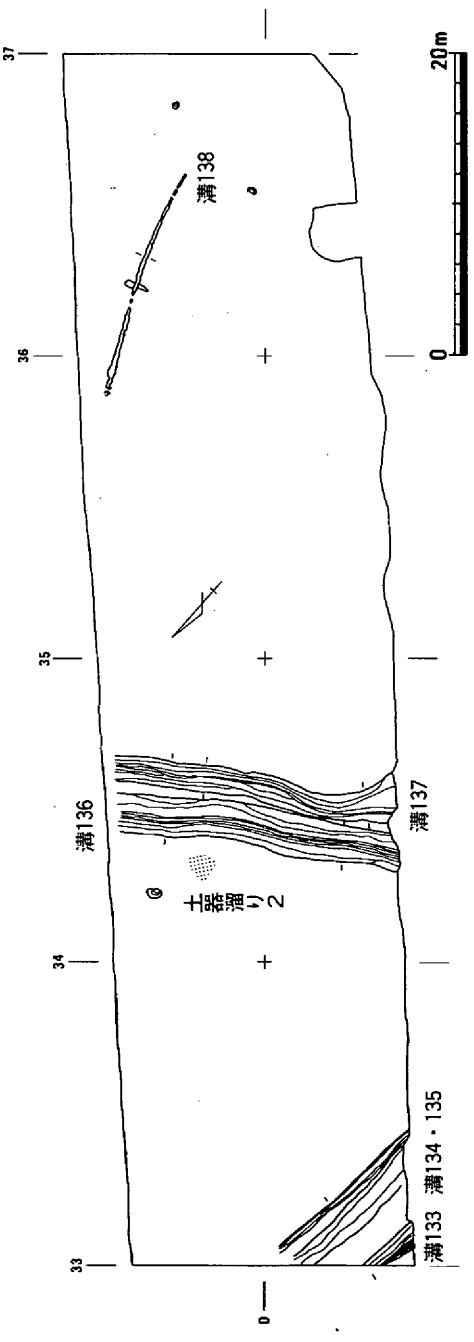


第333図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S：1/1,000）

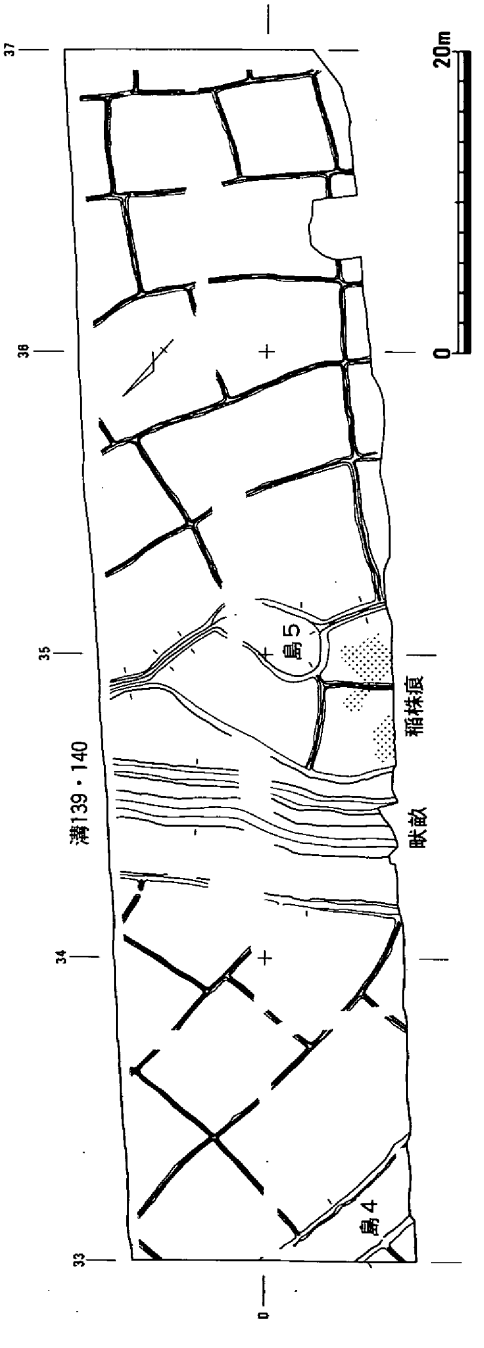
4．弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 水　　田（第333～342図、図版4・42）

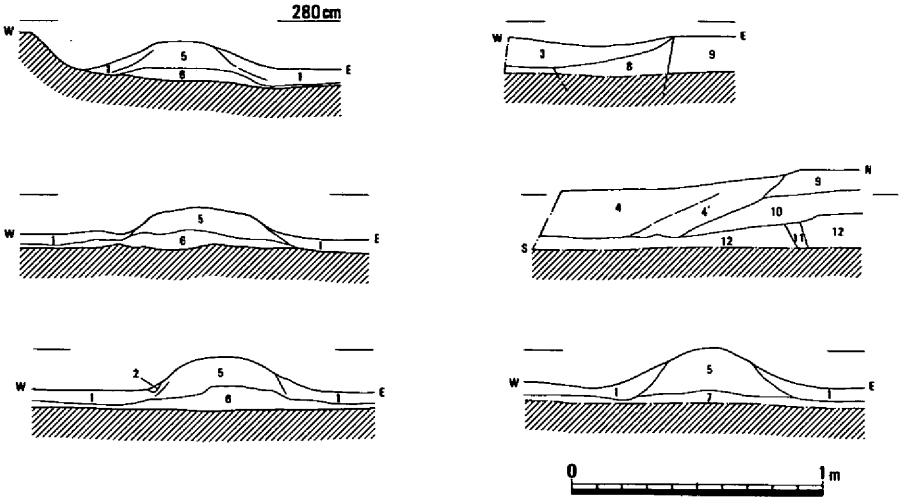
川内・三ノ坪調査区では全面にわたって弥生時代後期の水田が検出された。今回報告する調査区の中央より西の34C・34D区に水路をともなった幅9～13mの畎畝が存在し、この畎畝を境として、その東と西では水田の小畦の方向が異なっている。弥生時代後期の水田は大畦で大きく区画され、その中を小畦によって碁盤目に細分されるが、畎畝も大畦と同じ役目を果たしていたとみられる。ただ、大畦に対して小畦は直角に取り付くが、今回報告する畎畝の場合は小畦が斜めに取り付いている。畎畝内の水路は、後述するように、水田開墾以前から存在した水路を改修して利用したものである。つ



第334図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の遺構全体図（S：1/500）



第335図　川内・三ノ坪調査区　弥生時代後期の洪水砂埋没遺構全体図（S：1/500）

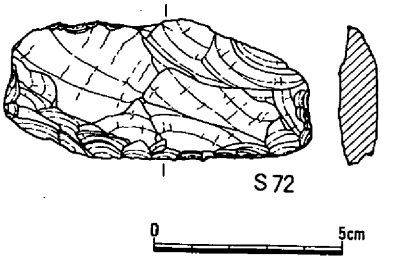


1．灰色粘土（水田層）
2．淡黄灰色砂質土（稲株）
3．暗灰色粘質土
4．暗灰色粘質土
4'．暗灰色粘質土（褐色味）
5．淡黄灰色粘質土
6．淡黄灰色粘質土（砂まじり）
7．暗灰色粘質土
8．暗褐灰色粘質土
9．黄褐色粘質土
10．黄褐色粘質土（12より暗灰色がかる）
11．暗褐灰色粘質土
12．黄褐色粘質土

第336図　大畦土層断面（S：1/30）

まり、水田の設計のなかに旧来の水路を残すようになったため、このような畎畝と小畦の関係が生じたと考える。

畎畝から西側の水田は南北方向の区画をもち、南北方向の小畦はまっすぐ続くのに対し、東西方向の小畦はくい違いをみせる。これは、地形が東に向かって高くなっていることと、畎畝との間にできる区画をある大きさに保つためと思われる。水田1区画の面積は34～119㎡を測る。田面の海抜高は286～292cmである。この水田には区画と同じく南北方向に細長く延びる島状高まり4が存在する。

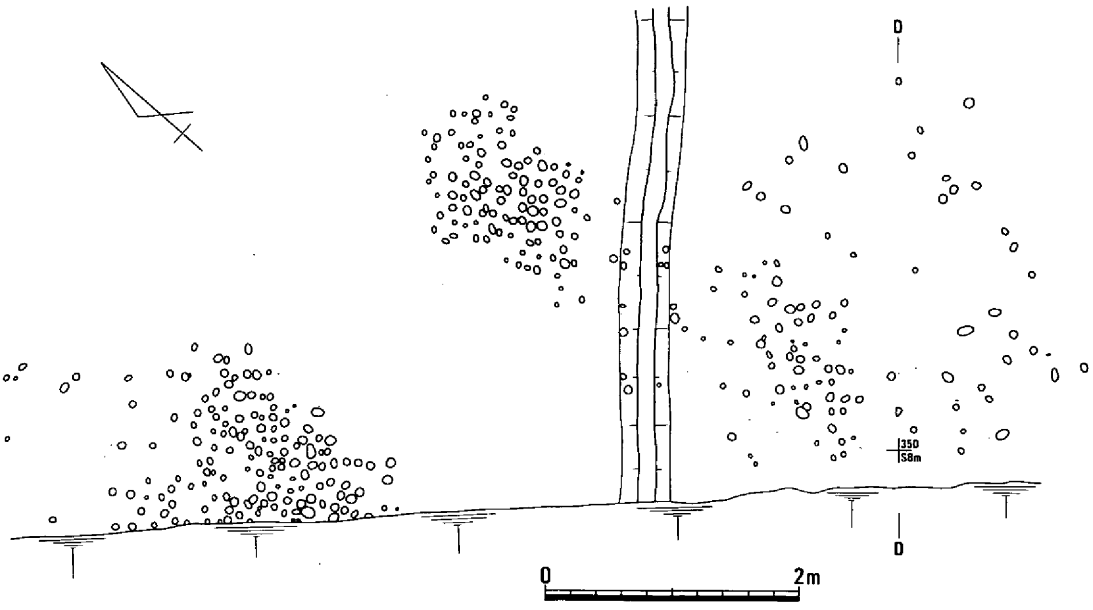


第337図　水田層出土遺物

島状高まり4は第342図にその断面を示しているが、弥生時代後期や前期の遺構がその中に認められ、水田の造成に伴って新たに盛られたのではなく、旧来の地形を削り残して造られた遺構である。幅4m前後、高さ38cmを測る。

畎畝から東側の水田は、畎畝付近では島状高まり5が存在することもあって不規則な区画を呈しているが、東へ向かうと方形の区画となり、小畦の方向は北東から南西方向に向く。この方向の小畦はまっすぐに続くが、南東から北西方向の小畦はくい違っている。水田1区画の面積は36～78㎡で、田面の海抜高は238～268cmを測る。旧河道のある36ラインと37ラインの中間付近がもっとも低いが、これは現在までの堆積土による圧力で地盤沈下したためであろう。

島状高まり5は長径8m、短径4.5mの不整形な楕円形をしている。高さは26cmである。第339図に畎畝から島状高まり5にかけての断面図を掲載しているが、これによれば島状高まり5も水田の造成時に削り残されたものであることが判る。削り残した後で、高まりの斜面に粘土を貼って整形してい



第338図　34・35D区稲株痕（S：1/60）

るようである。

島状高まり5からは南北に大畦が出ている。大畦は幅が60～70cm、高さは10～15cmと低く、大畦としては小型である。第336図は大畦の断面で、左が北の大畦、右が南の大畦で、「島状高まり」との接続部を含んでいる。この観察によると、大畦はまず芯になる部分が作られ、その上に高く粘土を盛り上げて大畦が完成する。その後に田面一面に均等に粘土を入れたようである。

畎畝のすぐ東、島状高まり5の南側の水田面に、第338図に示したような稲株の痕跡を検出した。長径5～10cmの淡灰褐色微砂の詰まった円形ないしは楕円形の穴が所々密集していて、小畦の上にも検出された。『百間川原尾島2』のような整然とした列は確認できなかったが、その気で見れば小畦と直行する列をまばらに認めることができる。穴を掘り上げると、底部の片寄るものがある。茎はさまざまな方向を向いていたように見えるが、全体としては南西方向の物が多い。

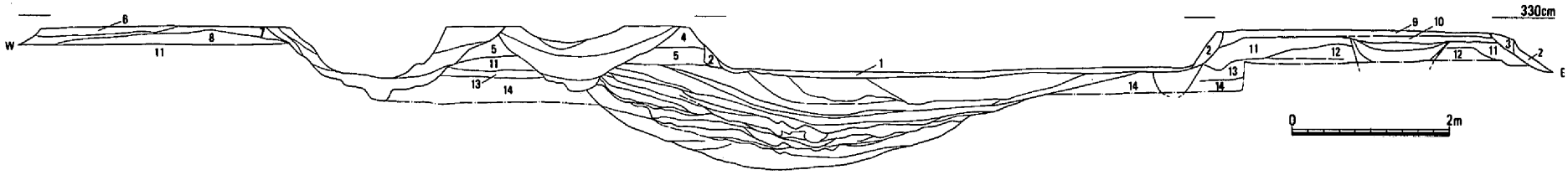
水田層からは主に弥生時代後期の土器片が出土するが、第337図の打製石包丁も出土している。なお、第341図に示すように、畎畝の上面からも打製の石包丁が出土している。

この水田の時期であるが、水田層からは百・後・Ⅲの土器が出土し、畎畝内の土器溜り2からは百・後・Ⅱの土器が一括出土し、さらに、水田造成以前の遺構と考えられる溝137の中程から百・後・Ⅳの完形に近い土器が出土したため、百・後・Ⅳと考えられる。畎畝内の洪水砂で埋没した溝139・140が水田の最後の段階で改修されたものとし、溝136・137が水田に伴うと考え直せば百・後・Ⅲの時期となる。（岡本）

(2)　溝

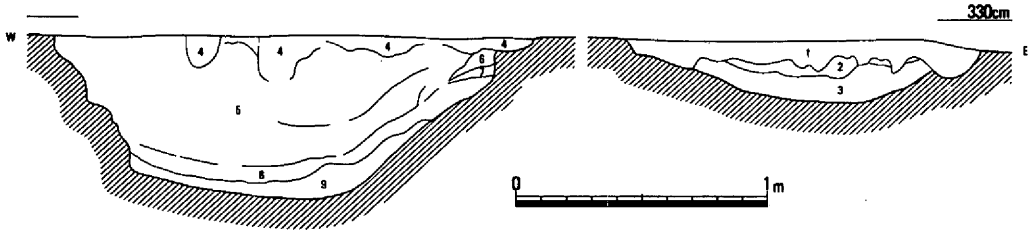
溝133（第342図、図版42）

33D区にある島状高まり4の西側裾から25cmほど離れて平行して走る。水田層を除去して検出された。第342図の2層が対応する。幅80cm、深さ19cmを測る。枝分かれしたり、段をもったりして形には変化がある。また、溝底も凹凸があり、通常の溝とは異なるようである。島状高まりの周辺にはこの



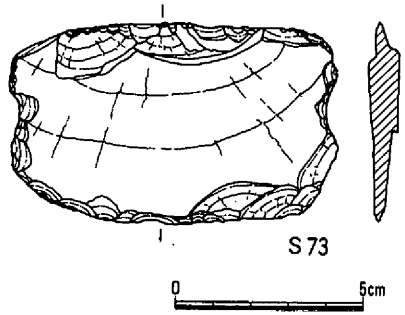
1．灰色粘土（水田層）
2．暗褐灰色粘土
3．褐灰色粘土
4．褐灰色粘土
5．灰褐色粘質土（砂粒多）
6．褐色粘土（底に炭・焼土）
7．黄褐灰色粘土
8．褐灰色粘土（5に類似・砂粒無）
9．黄褐色粘土
10．灰褐色粘土
11．灰褐色粘土
12．灰褐色粘土
13．黄褐色粘土
14．暗灰黄褐色粘土

第339図　畝畝・島状高まり5土層断面（S：1/80）

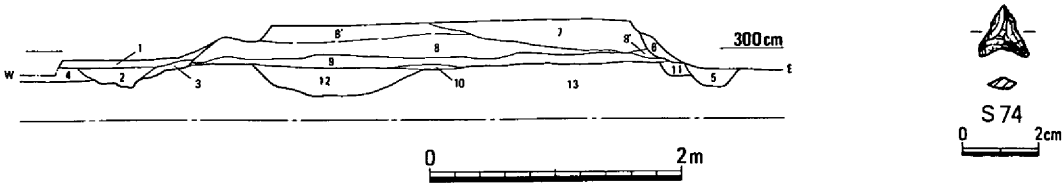


1．暗黄灰色粘質土
2．黄灰色微砂
3．淡褐灰色粘質土
4．暗黄灰色粘質土
5．黄灰色細砂
6．黄灰色粘質土
7．黄灰色細砂
8．黄灰色細砂（5より粗く，粘性強し）
9．暗灰色粘性砂

第340図　溝139〈左〉・140〈右〉



第341図　畝畝上面出土遺物



1．灰色粘土（水田層）
2．暗灰色粘質土（溝133）
3．黄灰色粘質土
4．暗灰色粘質土（粗粒）
5．暗灰色粘質土（溝135）
6．黄褐灰色粘質土（含砂）
7．黄褐灰色粘質土（溝134）
8．暗黄灰色粘質土
8′暗黄灰色粘質土（8より粗粒）
9．黄灰色粘質土
10．灰黄褐色粘質土
11．暗灰色粘質土（溝120）
12．暗褐灰色粘質土（溝119）
13．暗褐色粘質土

第342図　島状高まり4，溝119・120・133・134・135・出土遺物（S：1/60）

ような溝状遺構が掘られているのが一般的で、水田の開墾に伴う遺構と解釈されている。溝133も同様の遺構であろう。したがって水田と同時期である。（岡本）

溝134（第342図、図版42）

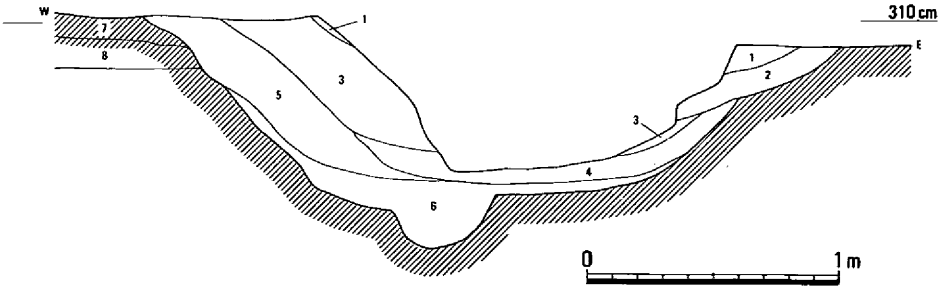
33D区の島状高まり4の中に位置する。第342図の7層にあたる。溝の東部分は水田の開墾により破壊されている。現存で幅130～180cm、深さ28cmを測り、皿状の断面形を呈する。溝133や溝135よりは古い遺構と考えられるが、百・後・Ⅳの土器が出土し後期末と考えられる。（岡本）

溝135（第342図、図版42）

やはり33D区に位置し、溝133と対称するように島状高まり4の東側裾に10cm離れて走っている。水田層を除去して検出された。幅60cm、深さ12cmを測る。埋土は暗灰色粘質土で、水田層の土とよく類似している。溝133と同じ性格の溝状遺構と考えられる。（岡本）

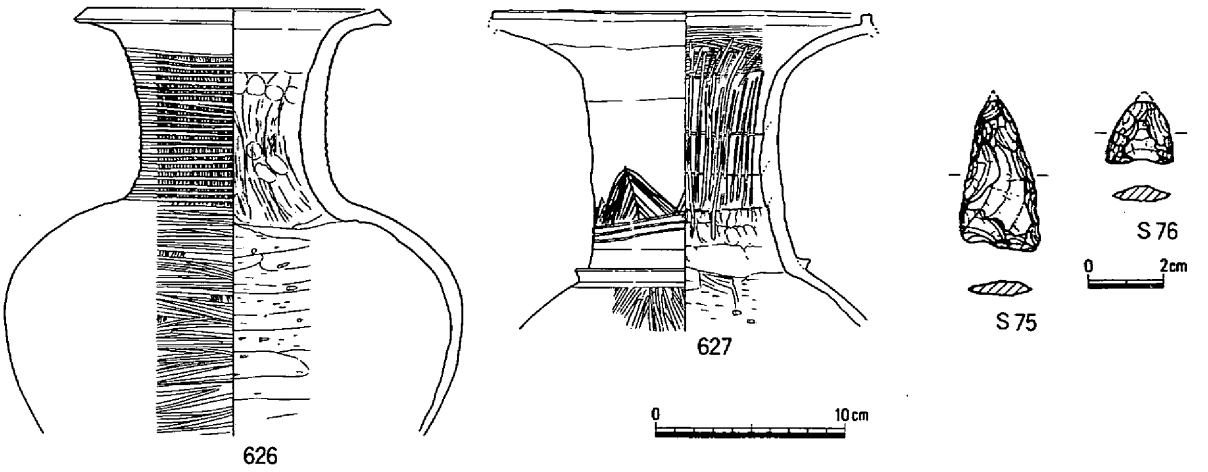
溝136（第339・343・344図、図版43）

34C区から34D区にかけて位置する畎畝の中で検出された。検出面は畎畝の上面である。東に接するように溝137が走っている。第339図の断面によれば二つの溝は切り合い関係にあり、溝136が新しいとされる。しかし、切り合い部分が上端部分であり、後述する溝139と溝140の例から考えて、溝136と溝137が同時に使用されていた可能性は高い。溝136の規模は、幅が260～280cm、深さは93cmを測る。断面形をみると、溝壁はゆるやかな曲線を描き、底部はかすかな凹面に近い。この溝の特徴は、

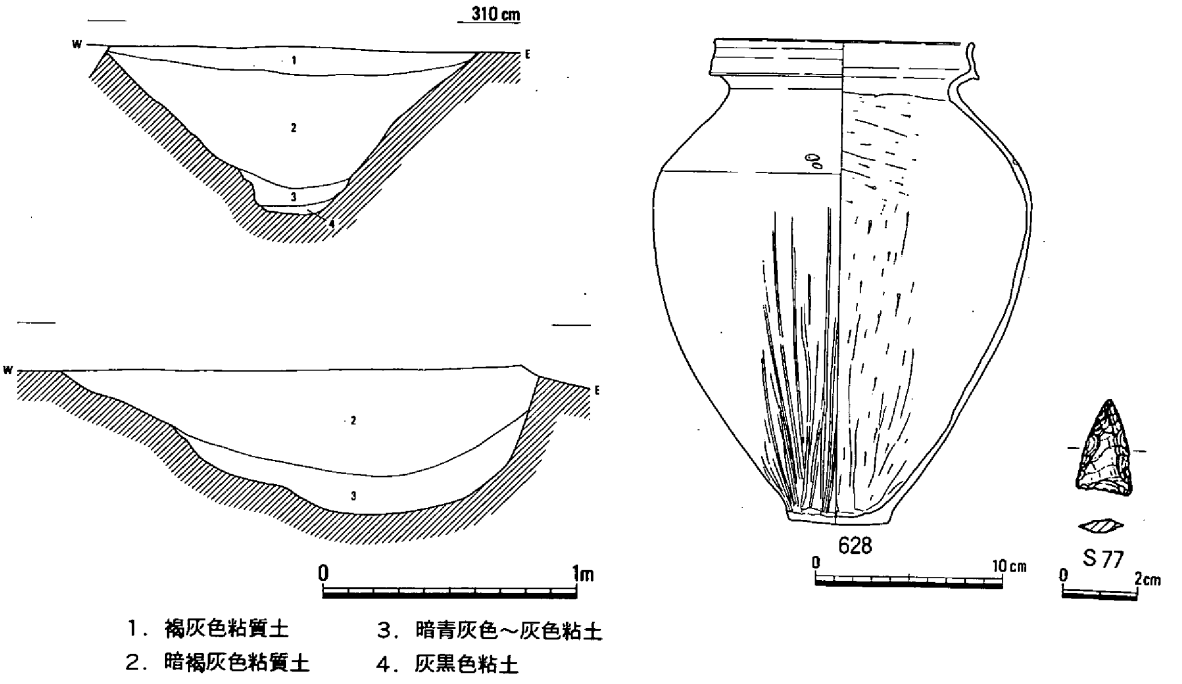


1．褐灰色粘質土
2．暗褐灰色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．暗灰色粘質土
5．褐灰色粘質土
6．暗灰色粘土
7．黄褐灰色粘質土
8．暗褐灰色粘質土

第343図　溝136



第344図　溝136出土遺物



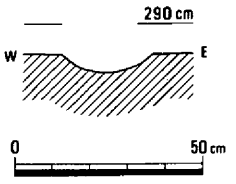
第345図　溝137・出土遺物

底面の中央に幅30～50cm、深さ10～20cmの溝がさらに掘られていることである。この小溝の断面は椀形を呈する。埋土を観察すると、第343図で、2層と3層、4層と5層の間に不連続が認められ、改修のなされたことが判る。溝壁の中程から図示した土器の大形破片が出土した。ともに長首壺で、百・後・Ⅱと考えられる。（岡本）

溝137（第339・345図、図版43）

溝136の東側を接するように流れている。幅は65～115cm、深さは70cmを測る。断面形は北側の上流部と南端部では異なっているが、第345図の上段のV字形がほとんどである。断面形にもみられるように、この溝も、溝136と同様に底部が一段落ち込んで、幅40cm前後の細い溝が掘られている。この細い溝は、溝137では溝の中心から片側に寄るため、上段の広い溝より強く蛇行している。この溝でも、

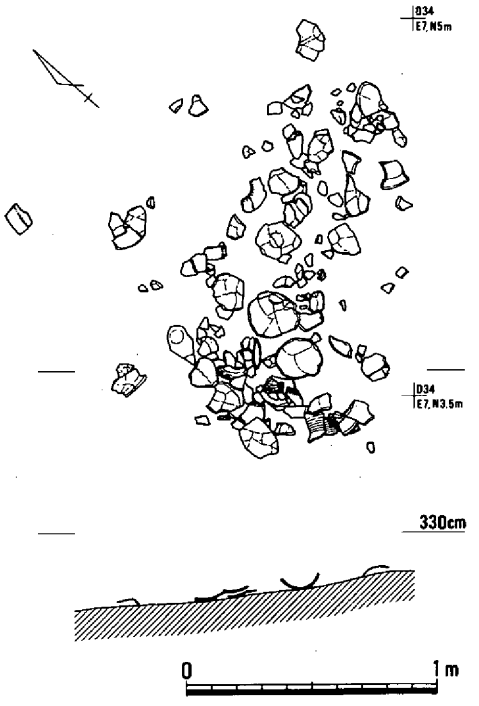
第345図の２層の中位から完形に近い土器が出土した。図示したものがそれで、煤が多量に付着した百・後・Ⅳ期の甕である。（岡本）



第346図　溝138

溝138（第346図）

35Ｃ区から36Ｃ区にかけて検出された不整形な溝状遺構である。水田層を除去した段階で検出され、埋土は水田層の粘土とよく類似していた。幅15～40cm、深さ６cmを測る。水田の小畦の方向とは平行せず、かなりずれる。遺物は出土していない。（岡本）

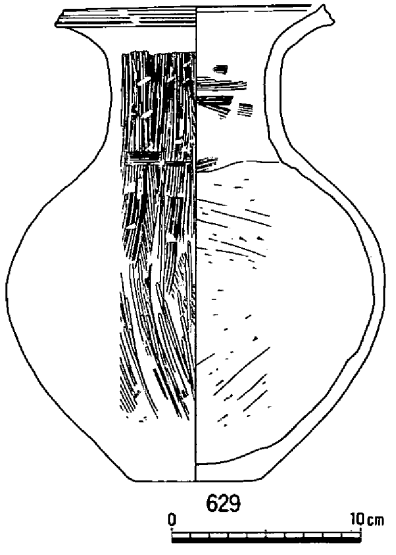


溝139（第340図、図版42）

34Ｃ区から35Ｄ区に延びる。溝140と平行し、畎畝の中央を流れる。弥生時代後期の水田を埋めた洪水堆積による砂層と同じ砂によって大部分が埋められていることから、洪水の発生時に水田と共存していたことは明らかである。幅180～210cm、深さは67cmを測る。溝壁の傾斜はかなり急で、底部との境は屈曲する。底部は平坦面とはならず、凹面を呈している。埋土は基本的には砂で、洪水発生時にはわずかに９層のみが堆積していたか、あるいはまったく堆積層がなかったものと思われる。溝139は溝136の真上にあって重なっていたが、第343図の１～４層を破壊しているため、掘り直されたものである。掘削後すぐに埋没したと思われる。後期の土器が少し出土している。（岡本）

溝140（第340図、図版42）

溝139の東を平行して流れる畎畝内の溝である。幅100～145cm、深さ29cmを測る。溝壁の傾斜は緩く、断面形は皿状を呈する。埋土を観察すると、弱い粘性の土が２層堆積し、間層として砂を挟んでいる。溝139とは明らかに異なり、洪水発生時には図示した部分はすでに埋まっていたものと考えられる。その位置関係から共存していた可能性は高いが、洪水時まで共に機能していたかは疑問がある。後期の土器が少量出土した。（岡本）



第347図　土器溜り２（畎畝内）・出土遺物

(3) 土器溜り

土器溜り２（第339・347図）

34Ｃ区の畎畝内で、溝136の西側から、東西・南北ともに1.7mの範囲で土器片の集中が認められた。第339図の６層の底面に接し、炭や焼土が共伴していた。近くに住居はなく、あるいは、水路の祭祀に伴うものであろうか。百・後・Ⅱの土器が出土している。（岡本）

５．古墳時代の遺構・遺物

(1)　土　　壙

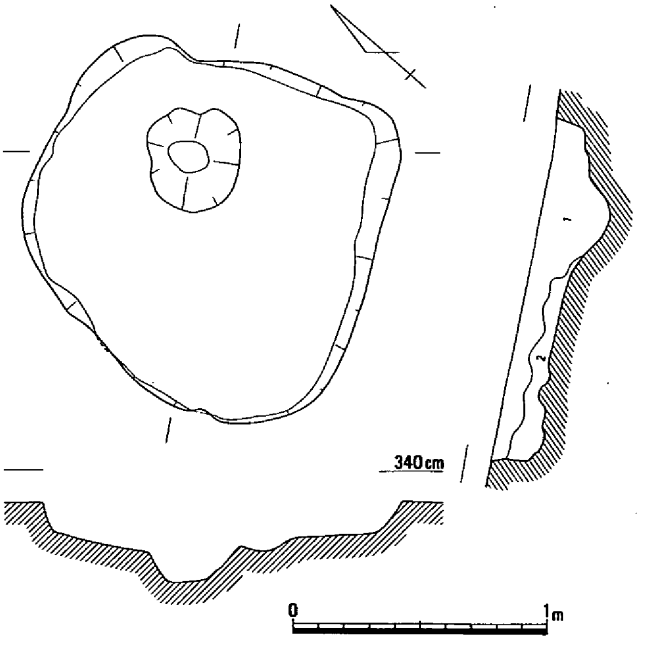
土壙91（第349図）

33D区に位置している。平面形は不整形な四角形を呈し、東半は方形に近い。南北方向の長径140㎝、東西方向も140㎝である。壙壁の傾斜は垂直に近く、底部は広い平坦面となる。この底面の中央から東寄りに不整形な楕円形の落ち込みが検出された。長径42㎝、短径38㎝で、底面からの深さは15㎝を測る。ちなみに、底面の検出面からの深さは22㎝である。埋土は２層で、上層が淡褐灰色砂質土、下層は暗褐灰色粘質土である。底面の落ち込みの存在から柱穴のような印象を受けるが、柱痕跡は確認されず、埋土の上層も土壙の上半全体から落ち込み内まで埋めている。埋土から判断して、古墳時代前期の遺構と考えられる。　　（岡本）

(2)　柱　穴　列

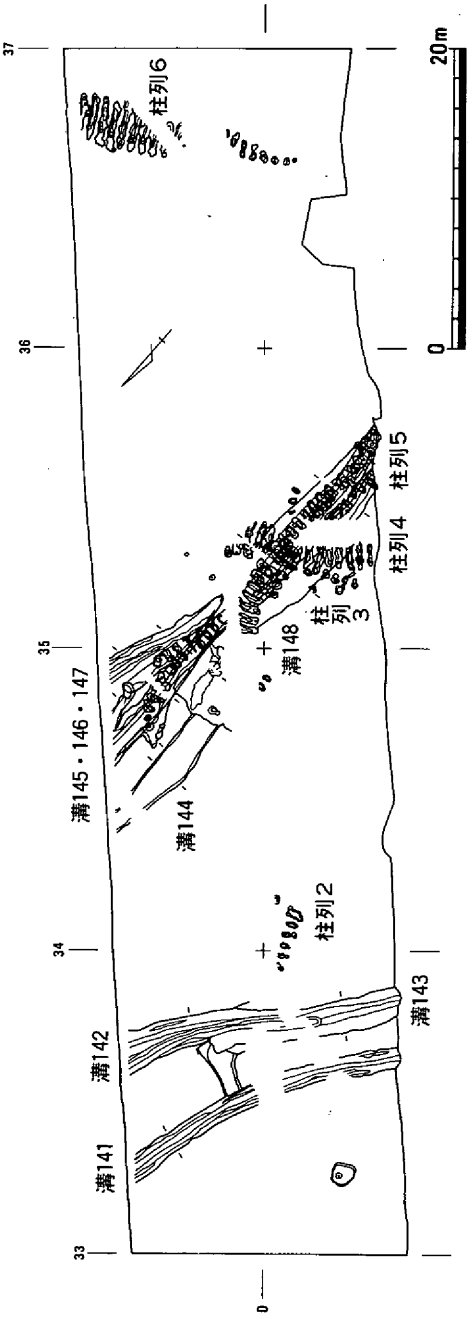
柱穴列２

33D区と34D区の境界に位置する。北西から南東の方向で４ｍにわたって６個の柱穴が並んで検出された。柱穴の形はきわめて不整形で細長く、底部は中央が浅くて両端が深くなっている。このために、北側の柱穴では本来１個の柱穴が２個の穴として存在していた。もっとも南の柱穴で長径119㎝、短径

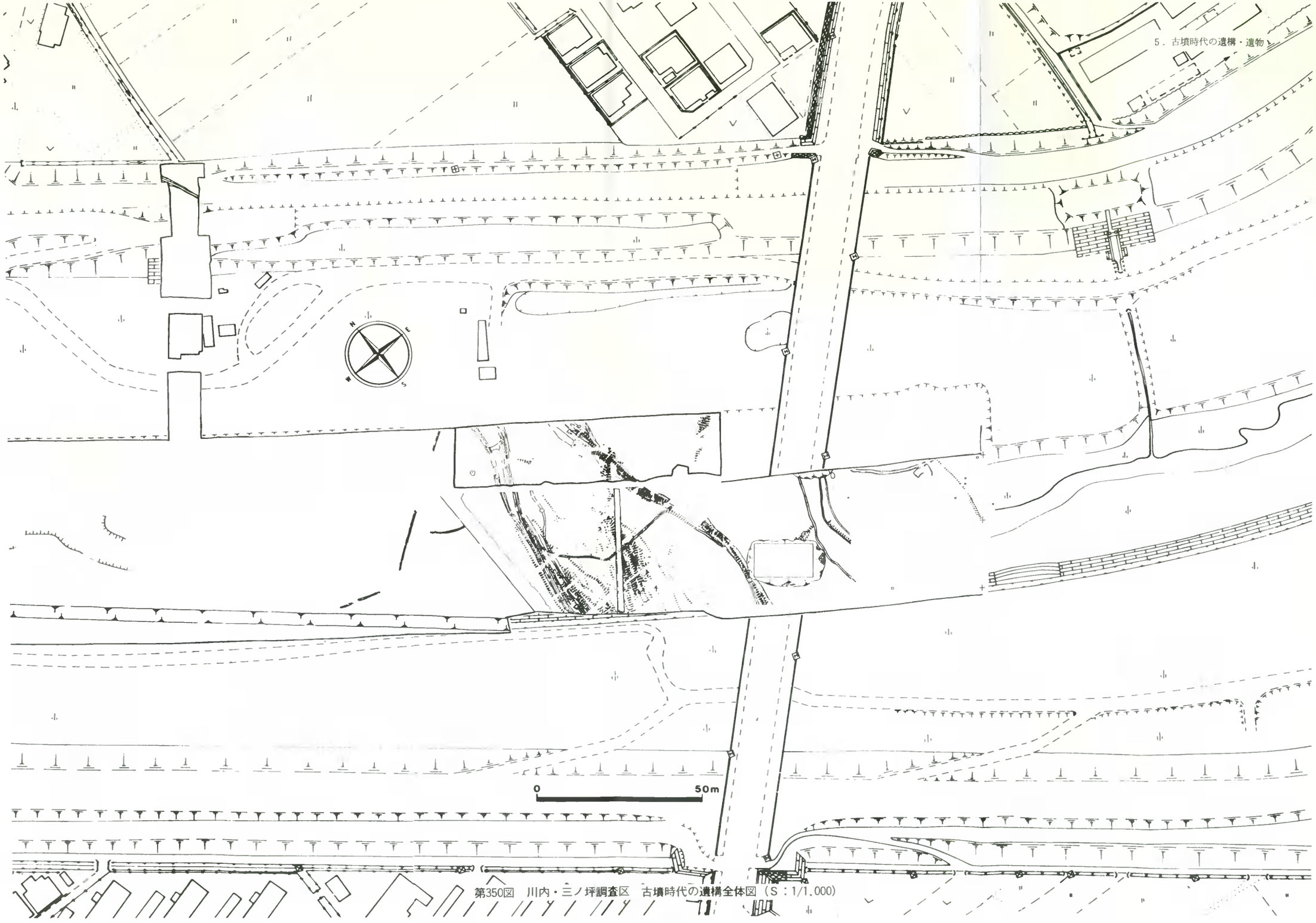


１．淡褐灰色砂質土　　２．暗褐灰色粘質土

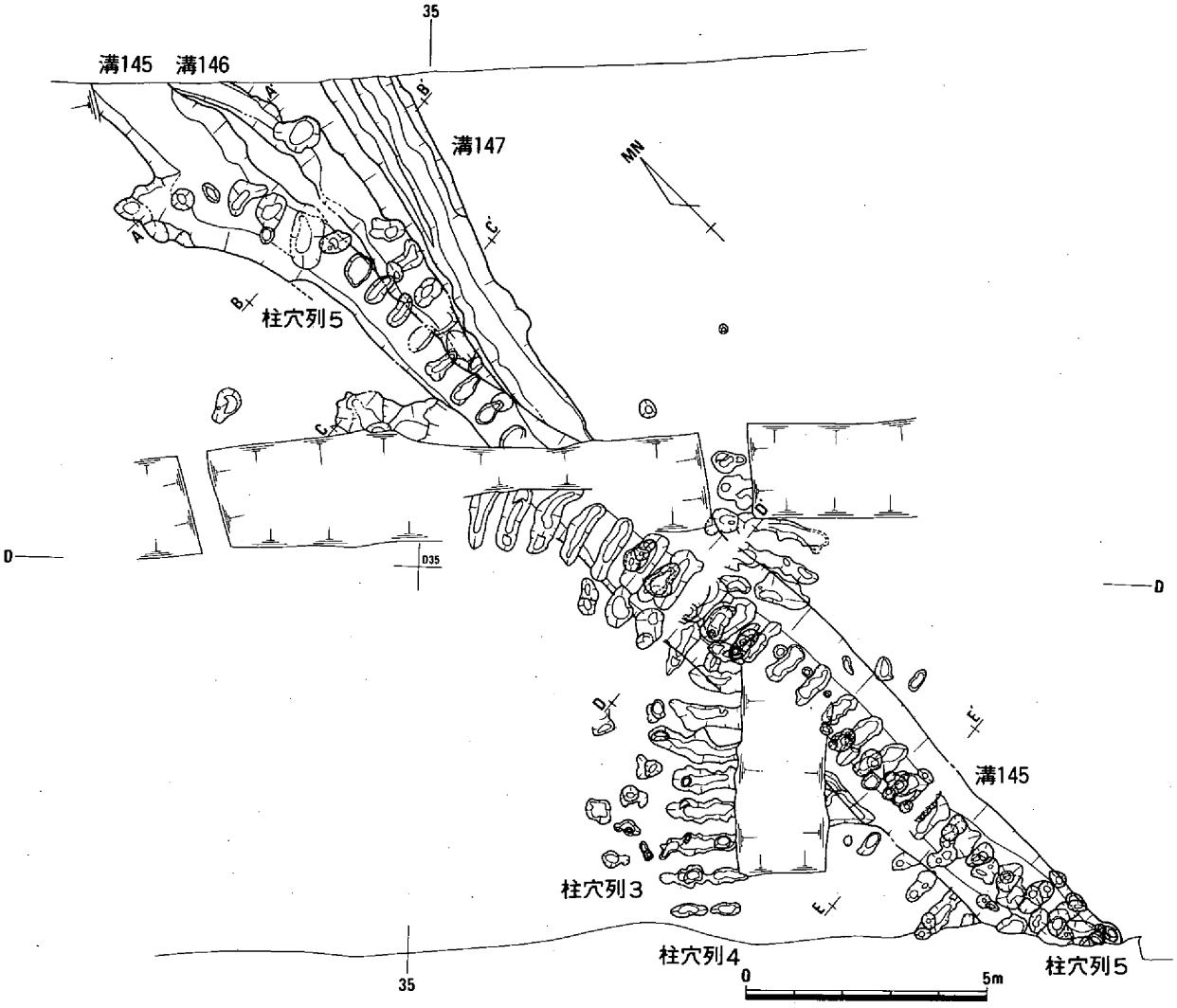
第349図　土壙91



第348図　川内・三ノ坪調査区　古墳時代遺構全体図（Ｓ：1/500）



第350図　川内・三ノ坪調査区　古墳時代の遺構全体図（S：1/1,000）



第351図　溝145・146・147，柱穴列3・4・5（S：1/150）

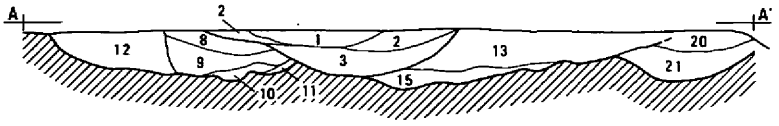
54cm、深さ3cmを測る。他の柱穴列と同じ施設で、時代も古墳時代後期である。　（岡本）

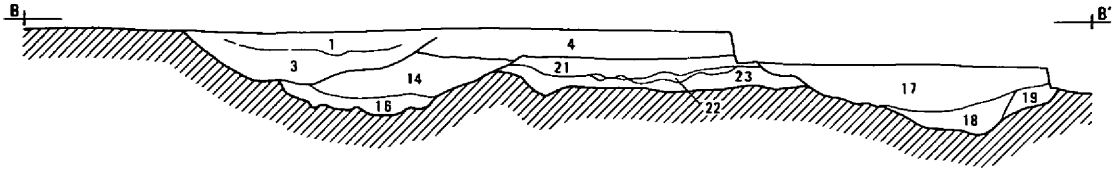
柱穴列3（第351図、図版44）

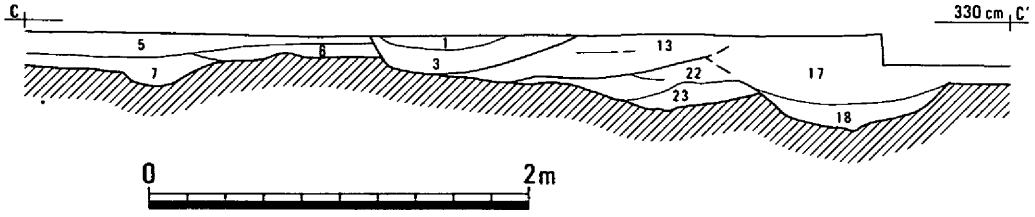
35D区で検出された。3.6mの間に6個の柱穴が並んでいる。方向は南西から北東である。柱穴の形状は不定型だが、一ヶ所深い部分があり、柱穴の断面はすり鉢状になる。柱穴の深さは北東側のものほど深くなっていく。南西から3番目の柱穴で長径59cm、短径50cm、深さは22cmを測り、深い部分の長径は38cmである。古墳時代後期と思われる。　（岡本）

柱穴列4（第351・352図、図版44）

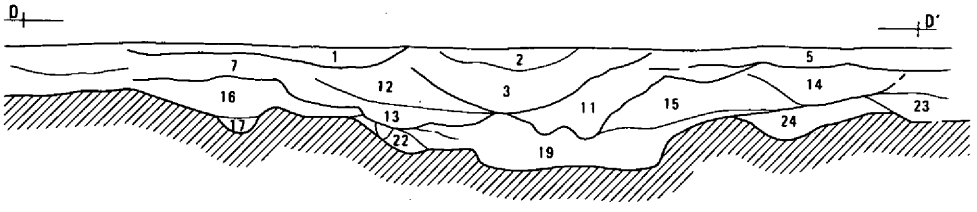
35C区から35D区まで続き、さらに『百間川原尾島2』の「柱穴列26」につながる。第352図の下段の24層がこの柱穴の断面と考えられ、周辺の柱穴列の中ではもっとも古く、柱穴列5や溝145によって破壊を受けている。検出部分で8.5mあり、14個の柱穴が確認された。柱穴列26からの全長は17mである。北東端付近になると少し南の方へ湾曲する。個々の柱穴の形状は不定型で、数個の柱穴が接合したような細長い形をしている。全体を観察すると、それぞれの柱穴に二ヶ所は深い部分があり、それが並んでいるようである。検出されたもっとも南西の柱穴は2個に分かれてしまっている。柱穴の深さは北東へむかうに従って深くなっていく。南西から2番目の柱穴の規模は、長径179cm、短径

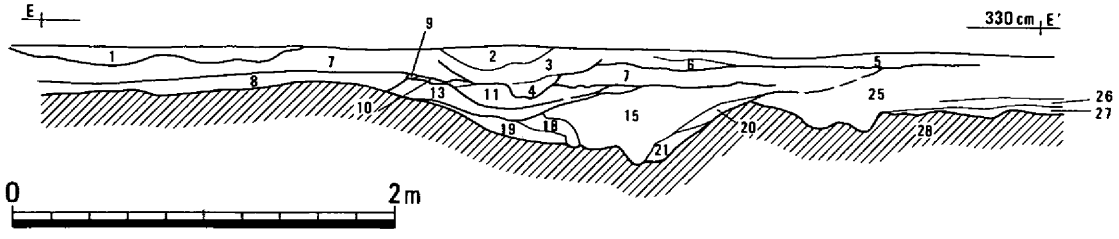






1．黄灰色粘土　2．灰色粘土　3．灰色粘土　4．灰色粘土
5．灰色粘土　6．暗灰色粘質土　7．暗灰色粘質土　8．灰色砂質土
9．灰色砂質土　10．暗灰色粘土　11．暗灰褐色粘土　12．灰色粘質土
13．暗灰褐色粘質土　14．淡褐灰色砂質土　15．灰黒色粘土　16．淡褐灰色砂質土
17．灰色粘土　18．暗灰色粘質土　19．灰褐色砂質土　20．灰色粘質土
21．暗褐灰色粘質土　22．暗灰色細砂　23．褐灰色砂質土





1．灰色粘土　2．明灰色粘土　3．灰色微砂　4．暗灰色砂質土
5．灰色粘土　6．暗灰色微砂　7．灰色粘土　8．灰色粘土
9．褐白色砂　10．褐白色砂質土　11．灰色微砂質土　12．灰色粘土
13．暗灰色砂質土　14．灰色微砂質土　15．白色砂斑白灰褐色砂質土　16．暗灰色砂質土
17．灰褐色粘質土　18．白灰褐色砂質土　19．暗灰色砂質土　20．灰色砂質土
21．暗灰色粘質土　22．暗灰色粘質土　23．暗灰色砂質土　24．暗灰色砂質土
25．暗灰色粘土　26．暗灰色粘土　27．暗灰色粘土　28．淡褐色砂質土

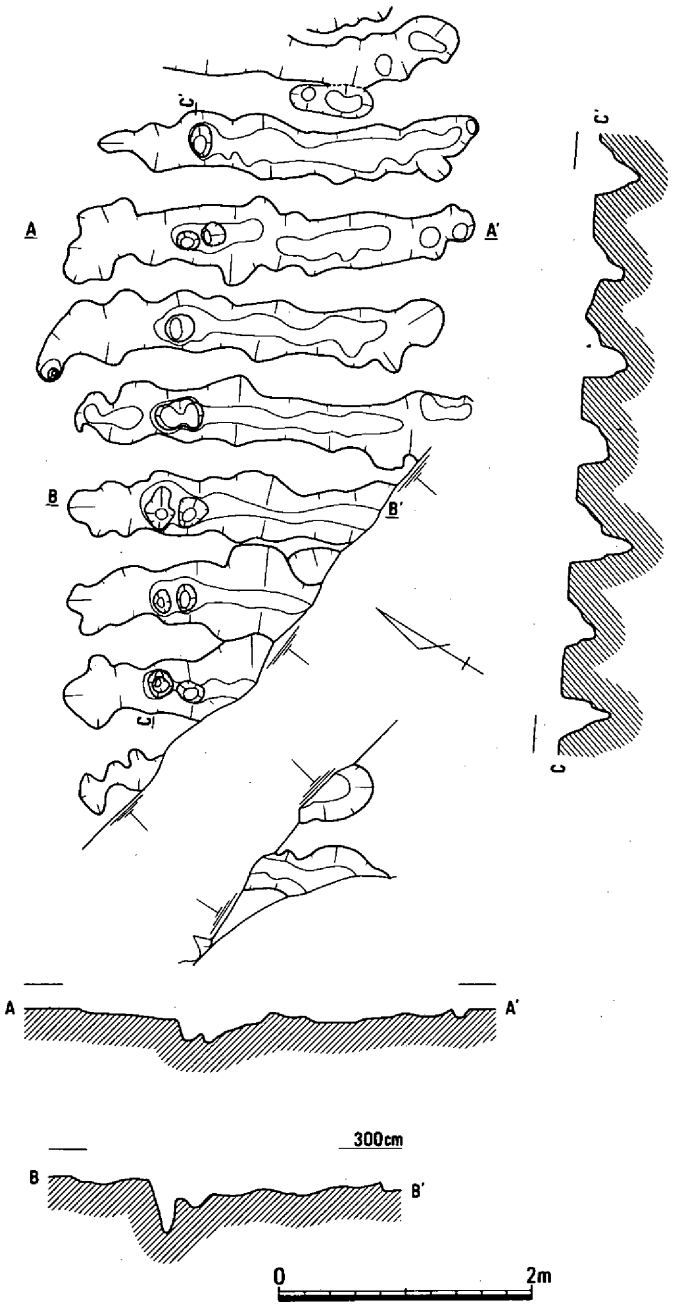
第352図　溝145・146・147・148，柱穴列4・5（S：1/40）

49cm、深さ24cmを測る。埋土は暗灰色砂質土で、古墳時代後期の遺構と考えられる。（岡本）

柱穴列５（第351・352図、図版44）

２列の柱穴列が重複していると考えられる。柱穴列は南北方向に並んでいるが、より古い１列は35Ｃ区と35Ｄ区の境界付近から北へ向かうと西へ湾曲して終わり、新しい柱穴列はこの地点からさらに４ｍ北に延びる。柱穴の底部の深さは南と北で大きくは違わない。これらの柱穴列は溝145と重なっているため『百間川原尾島２』では「溝225」として、溝と柱穴列を一体のものと解釈していたが、今回報告する調査区では柱穴列が湾曲して溝からはずれることが確認されたため、溝の底に掘られた柱穴列という考えは困難に思われる。なお、新しい柱穴列は溝145Ｂを除去した面で検出して発掘し、この面で同時に検出した溝145を掘り下げた後に古い柱穴列を検出・発掘した。

古い柱穴列は22個の柱穴からなり、柱穴間の距離は心々で35cmである。柱穴は細長い不定型な平面形を呈し、底部はかなり凹凸のある面となる。底面の中央部がもっとも深い柱穴が多いが、なかには、もっとも深い部分が底面の西に片寄ったり、底面の両端がもっとも深い柱穴もみられた。もっとも大きい柱穴で、長径176cm、短径55cm、深さ25cmを測る。

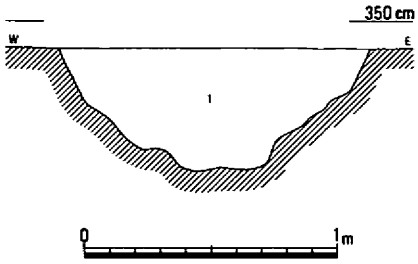


第353図　柱穴列６（Ｓ：1/60）

新しい柱穴列では27個の柱穴を確認した。柱穴の平面形はやはり細長く不定型であるが、古い柱穴列の柱穴よりは短い。また、調査区の北半と南半では形態が異なり、南半にある柱穴は小さな柱穴が３個ほど連なったような形で、底部の凹凸がはげしく、北半のものは底面の中央がもっとも深い単純な形をしている。北半のもっとも大きい柱穴で、長径77cm、短径35cm、深さ11cmを測る。（岡本）

柱穴列６（第353図、図版44）

36Ｃ区から36Ｄ区にかけて検出された。北半の遺存状況は良好で、この種の柱穴列の典型といえる。南西から北東方向にわずかに湾曲しながら15ｍにわたって18個の柱穴を確認した。柱穴間の距離は心々で70cmである。柱穴の平面形はきわめて細長く、肩部の線が複雑に入り組んだ不定型な形を呈



1．淡黄灰色粘質土

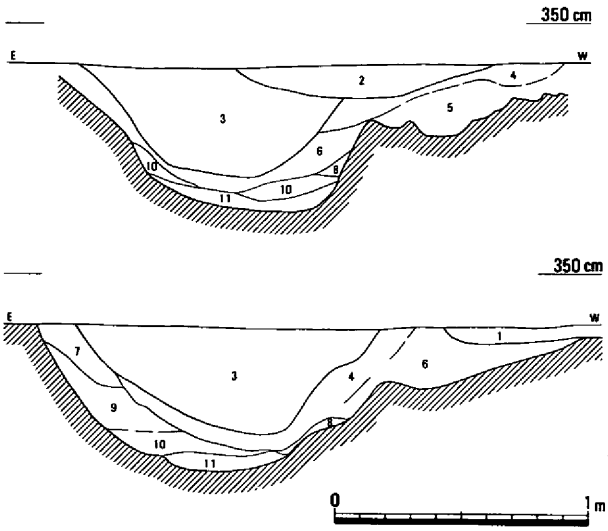
第354図　溝141

している。柱穴の壁は傾斜が急で、底部はかなり凹凸のはげしい面となる。底面の北西端にとくに深い部分があり、2本の柱を立てたような直径20cm前後の穴が2個接して検出された。ただ、柱痕跡は確認できなかった。A－A′の柱穴で長径326cm、短径62cmを測り。底面までの深さは10cm、北西端の柱穴の底の深さは26cmとなる。底面の北西端の柱穴がもっとも深いものは48cmを測る。埋土は暗灰色粘性砂質土で、他の柱穴列と同じである。古墳時代後期の遺構であろう。(岡本)

(3)　溝

溝141（第354図、図版45）

33C区から33D区に向かってゆるやかに湾曲して流れる。流路の方向は北から南で、下流は少し西に振れる。溝の断面形は椀形をなすが、底部付近が一段落ち込み、ちょうど椀の高台のような形状を示す。溝の幅は130～150cm、深さは50cmを測る。調査区北端の底部の高度は海抜292cm、南端は海抜287cmである。溝の底部はゆるやかな凹面となり、平坦な部分もみられる。底面の幅は30～40cm程度である。埋土は淡黄灰色粘質土であるが、微砂を含み、底部に近づくと黒っぽくなって粘性が増す。古墳時代後期の遺構で、7世紀代に埋没したと考えられる。　（岡本）

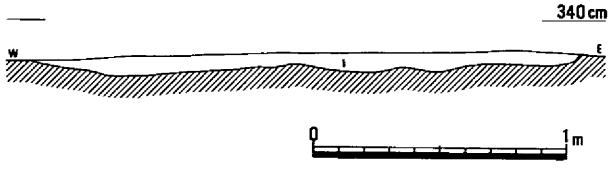


1．暗褐灰色粘質土　　2．灰白色粘質土（溝142）
3．淡黄灰色粘質土　　4．暗灰色粘質土
5．淡黄褐色砂質土　　6．暗褐灰色～暗青灰色粘質土
7．黄灰色粘質土　　8．暗褐灰色粘性砂
9．暗黄灰色粘性砂　　10．暗褐灰色～淡青灰色粘性砂
11．褐灰色細砂

第355図　溝142・143

溝142（第355図、図版45）

33C区から33D区にかけて位置する。溝143が埋没した後に、それに沿うように掘られている。調査区の北端では湾曲が強くなり、溝143の流路からはずれる。溝の幅は60～85cm、深さは15cm測る。断面形は皿状を呈する。底部の高度を測ると北側が低くなっているが、南端部は溝143とちょうど重なるため、あるいは掘りまちがえた可能性も否定できない。埋土は第355図に示すように、上段の2にあたる灰白色粘質土である。古墳時代後期の7世紀代の遺構であろう。（岡本）

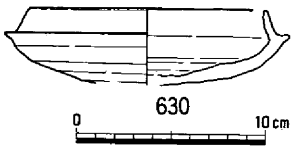


1．暗灰褐色土（黄褐色微砂含む）

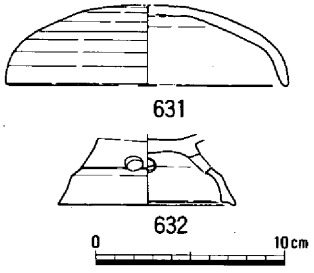
第356図　溝144

溝143（第355図）

33C区から33D区に向かってゆるやかに蛇



第357図　溝145出土遺物



第358図　溝147出土遺物

行して流れる。溝141と平行するようだが、北へ向かって離れていく。第355図の断面図からこの溝は一度掘り直されたことが考えられ、新しい段階の溝は溝141と同時に存在していたことが埋土の類似から推定される。むしろ、溝143が先に存在し、必要水量の増加に伴って溝141を新たに掘ったものであろう。当初の溝は幅が200～220cmと広いが、主流路は東に片寄り、西側には広い緩傾斜からなる浅い肩部をもっている。主流路の深さは60cmである。北端の底部は海抜276cm、南端は270cmを測る。底部の埋土には細砂が含まれ、流水のあったことが知られる。新しい溝は断面が椀形で、幅が120～140cm、深さは40cm前後を測る。埋土は淡黄灰色粘質土で、第355図の3が新しい溝にあたる。また、4の暗灰色粘質土も新しい溝の埋土である可能性が強い。溝141と溝143を繋ぐように幅110～130cm、深さ12cmの溝状遺構がある。流量の調節に関わる施設であろうか。7世紀代に埋没したと考えられる。（岡本）

溝144（第356図）

34C区にある溝状の浅い落ち込みである。最大幅220cm、深さ10cmを測る。走行方向は後期の溝145や柱穴列と平行しているが、埋土は黄褐色微砂を含む暗灰褐色土で前期と考えられる。（岡本）

溝145（第351・352・357図、図版45）

34C区から35D区へ直線的に延びる。幅180～260cm、深さ50cm程度を測る。第352図の上段では13～16層、下段では11～13層がこの溝の断面にあたると考えられる。埋土は灰色粘性微砂や白褐色砂質土で、部分的に砂の塊を含んでいた。埋土から考えると流水のあった溝とできそうだが、柱穴列の埋土にも砂の塊が含まれているため即断はできない。6世紀後半の須恵器杯身が出土している。

この溝が埋没した後に掘り直したか、埋没の最終段階にあたるのか、走行を同じくして、規模を小さくした溝（145B）が重複して存在する。第352図の上段の1～3層、下段の2・3層がこれにあたる。幅120～140cm、深さ35cmを測る。7世紀代に埋没したと考えられる。（岡本）

溝146（第351・352図、図版45）

34C区にあり、溝145の東に接して検出された。溝147によって破壊を受けている。34D区では溝145の下に重なってしまっているため良好な形で検出することができなかった。第352図の上段では20～23層、下段では14・15層がこの溝にあたる。埋土には砂の塊が多く含まれていた。（岡本）

溝147（第351・352・358図、図版45）

34C区と35C区の境界にあり、溝146のさらに東に接する。35D区では溝145と重なってしまい、明確に分離して発掘しえなかった。第352図の上段では17～19層が、下段では12・13層が対応する。幅90～140cm、深さ37cmを測る。検出部分では中央がもっとも深くなっているが、近接する他の溝と同様に北から南に流れていたと考えられる。6世紀後半の須恵器が出土している。（岡本）

溝148（第352図）

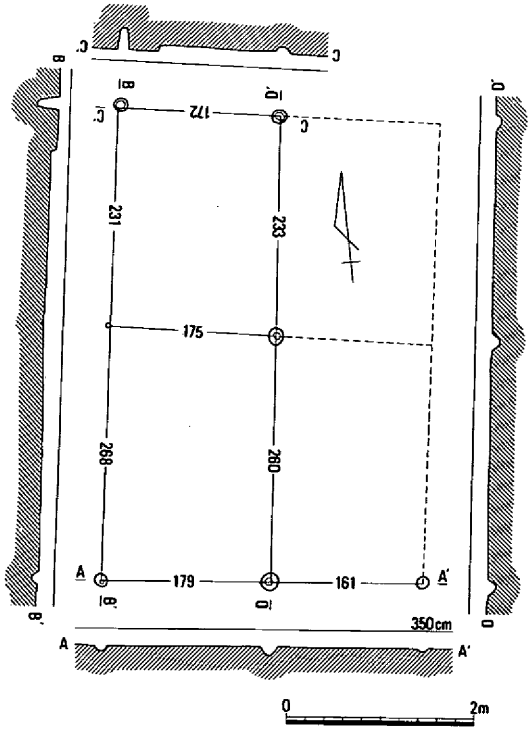
34C区から35D区へ延び、溝145Bと平行する。底部の傾斜から北から南に流れていたと考えられる。幅100～200cm、深さ14cmを測る。須恵器が出土し、7世紀代に埋没したか。第352図の下段の1層がこの溝にあたる。（岡本）

6．中世の遺構・遺物

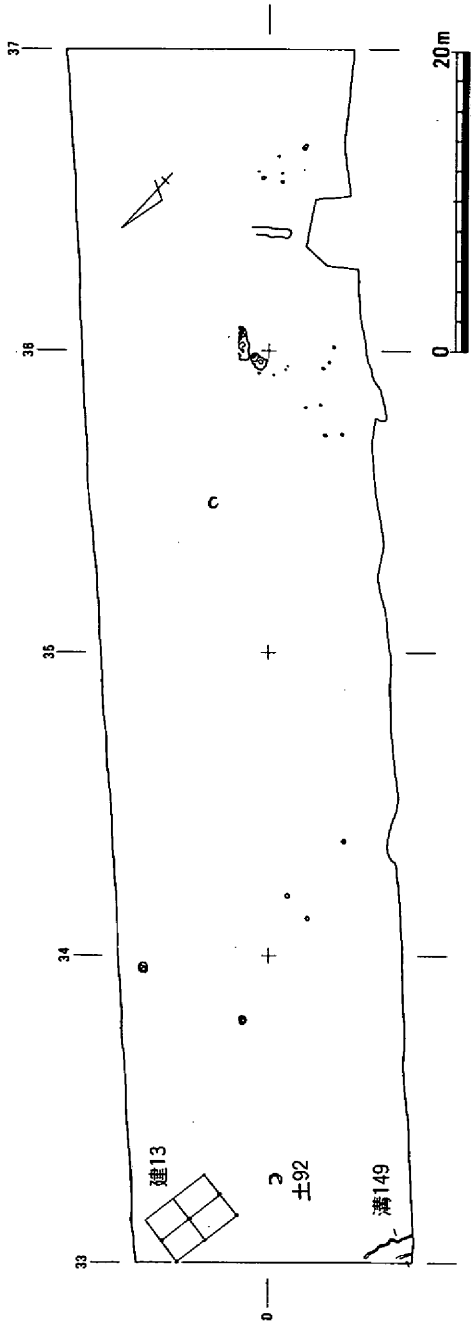
(1) 建　　物

建物13（第360図、図版46）

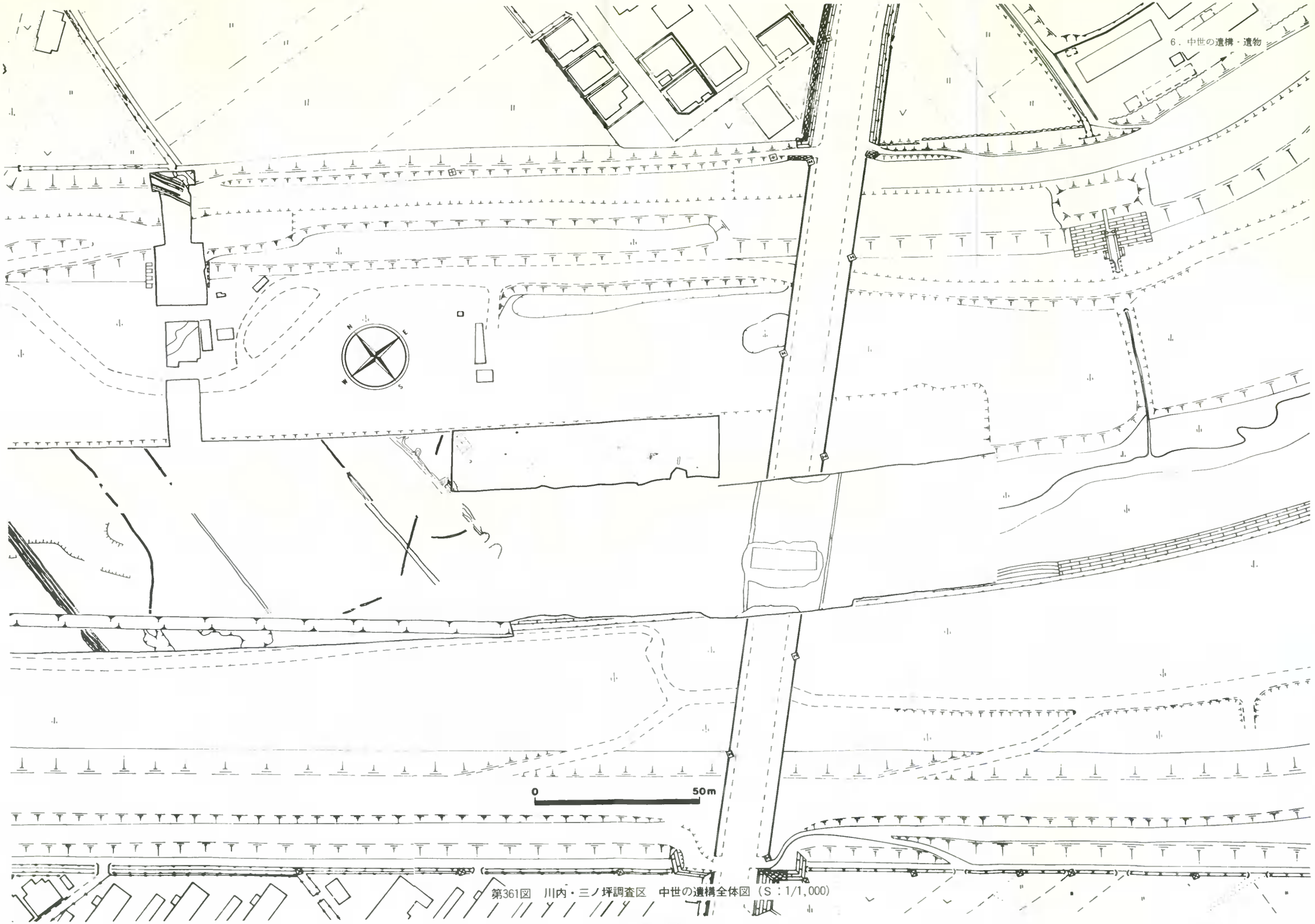
33C区で検出された。遺存状態がきわめて劣悪であったため完全ではないが、2×2間の掘立柱建物と考えられる。建物の中央にも柱穴が検出され、言えば総柱の建物となる。東側桁行の2柱穴は後世の削平によって消失している。平面形は長方形ではなく、少し歪んだ四角形となっている。南側梁間の全長は340cm、西側桁行の全長は499cm、面積は約17㎡を測る。南側梁間、西側桁行ともに、中央の柱穴は中点からはずれ、梁間の柱間は161cmと179cm、桁行は231cmと268cmというようにその差が大きく、かなり無造作に設置されている。柱穴は円形で、その規模は長径13～18cmと小さく、深さが10cmに満たないものがほとんどであることから、柱のめり込み部分のみの検出かもしれない。なお、北西角の柱穴は深さが22cmもあり、西側桁行の中央柱穴はかすかな痕跡にすぎない。柱穴の埋土は灰白色粘性砂質土で、後述する土壙92等と同様であり、このことから中世の遺構と判断している。柱穴からの遺物の出土はなかった。建物の桁行の方向は真北に近く現在遺跡周辺に残されている地割りと平行する。農作業のための小屋ではなかろうか。　　（岡本）



第360図　建物13



第359図　川内・三ノ坪調査区　中世遺構全体図（S：1/500）

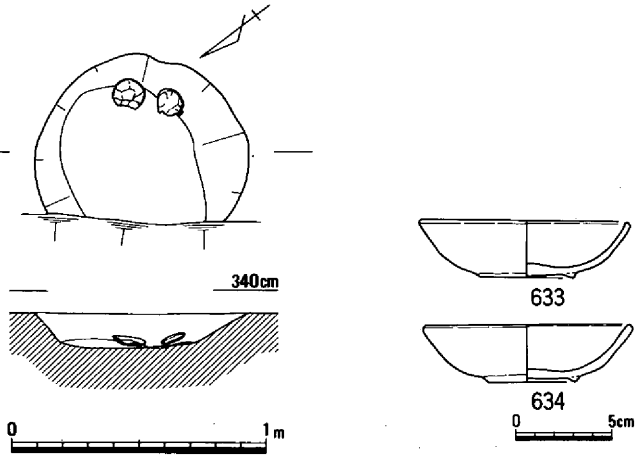


第361図　川内・三ノ坪調査区　中世の遺構全体図（S：1/1,000）

(2) 土　　壙

土壙92（第362図、図版46）

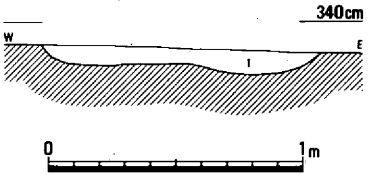
33D区の北端で検出された。建物13から3m離れている。北西部分を確認調査のトレンチで壊されている。平面形はほぼ円形で、長径84cm、深さ14cmを測る。壙壁の傾斜は緩やかで、底部はわずかに窪んだ平坦面となっている。埋土は灰白色粘性砂質土である。底面の南端から完形の土師器の椀が2点出土した。



第362図　土壙92・出土遺物

出土した2点の椀は同じ形態をもっている。きわめて低い貼り付け高台があり、底部内面は凸面となり、底部から口縁部にむかってゆるやかに湾曲する。口縁端部は丸くおさめている。かつて「早島式」と呼ばれた高台付き椀の最終形態で、高台が消失する直前の段階である。13世紀末頃と考えられる。

この土壙の類例として、百間川沢田遺跡高縄手A調査区で検出された土壙墓群がある。時代的にも接近していて、土壙92も墓と考えたい。群集はみられず、単独墓である。　（岡本）



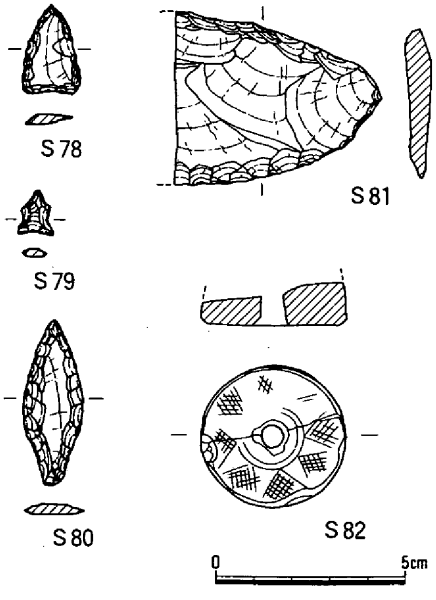
1．淡灰白色粘質土

第363図　溝149

(3) 溝

溝149（第363図）

33D区にあり、今回報告する調査区の西角で検出された。この部分は弥生時代後期水田の島状高まりの裾と重複するため、その影響が後世まで及んでできた地形のたわみの可能性もある。ここでは溝状の遺構として報告する。幅は110～140cmあり、深さは12cmと浅い。溝の肩部はジグザグしていて、そこも凹凸があり、流水のあった溝とは考えにくい。埋土は淡灰白色粘質土。　（岡本）



第364図　包含層出土遺物

7．包含層の遺物

図示した遺物はいずれも石器で、出土した層は第293図の3・8・9層である。S78～81は弥生時代の遺物。82は古墳時代後期の紡錘車である。　（岡本）

註

註1　正岡睦夫他「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　1984年

註2　間壁忠彦「備前沢田、備中田中、備後西国寺の瓦経をめぐる」『考古論集』　1993年

第4章　まとめ

第1節　遺構について

本報告書に掲載した調査地区は、幅80mの低水路掘削予定地のうち、すでに調査を終了して幅40mの低水路となっている部分の北側に接する幅20mを主に、一部高水敷護岸予定地を加えた6000㎡である。このうち上流部の丸田から三股ケ調査区には、百間川原尾島遺跡の中心となる安定した微高地が形成され、そこには遺構も集中する。しかし、下流部の川内・三ノ坪調査区は低位部となり、遺構は少ない。

縄文時代の遺構は少なく、丸田調査区で焼土塊の入った土壙や従来下調査区で土壙が認められるのみで、生活の痕跡をわずかに留めるにすぎない。

丸田調査区と川内・三ノ坪調査区で、縄文時代から弥生時代の河道が検出された。旧河道1は縄文時代晩期の土器が出土しており、少なくともその時期には河道として機能していたと思われる。その後弥生時代中期までにかなり土が堆積し、後期にはほぼ埋没した。旧河道2も弥生時代前期には機能していたと考えられるが、旧河道1同様後期にはほぼ埋没している。この旧河道2からは河道を横切るように2列の杭列が検出されたことから、当初井堰としての機能を推定していた。しかし、これを堰とすると、上昇させた水を取り込む溝と考えていた溝125は2列の杭列の中心に取り付くことになり、機能を果たし得ない。また杭列を見ると、1本1本が列をなすのではなく、数本のまとまりが対になって列をなしている。これらのことから杭列は井堰というより橋脚ではないかと考えられる。橋脚は下部しか残存していないが、上には樋が掛けられていたと思われる。この旧河道を横断する樋の存在によって、溝125と『百間川原尾島遺跡2』「溝163」（註1）とが繋がることになる。

ところで、同じような遺構が旧河道2の南側でも検出されている。前期では『百間川原尾島遺跡2』の「溝176」と「溝160」が「溝162」の両岸に取り付いている。ただこの場所では杭列などの施設は認められない。また、中期では『百間川原尾島遺跡2』「溝171」の井堰2の両岸に「溝176」が取り付き、また「溝173」の「井堰3」の両岸には「溝176」と「溝174・175」が取り付く。中期の井堰は旧河道2の杭列と異なり、護岸とかねて川幅を狭めるように杭を打ち込んでいるものの、その中心の両岸に枝溝が取り付く点では類似している。こうした類似遺構を含め、周辺に広がる水田および水路もあわせて再検討の必要がある。

弥生時代前期および中期の遺構は少なく、丸田調査区の微高地でも土壙などが僅かで、川内・三ノ坪調査区では溝を主体に土壙などが認められる。

後期になると丸田調査区の微高地には遺構が密集する。そのほとんどは土壙およびピットであるが、ピットの多くには柱痕跡が認められることから、掘立柱建物の存在が推定されるが、ここでは明確にし得なかった。『百間川原尾島遺跡3』（註2）においても竪穴住居と掘立柱建物が混在しており、同じような状況であったと考えて間違いないであろう。竪穴住居は2軒検出された。その分布状況を見ると未掘部があるため明確ではないが西から南側の微高地縁辺部を端とし、北から東側にかけ

て約50～60mの環状になるように思える。これらの住居がすべて同時期ではないが、中央に広場をもつように配置されていることが確実であるとするならば、後期を通じて強い規制が働いていたのであろう。

後期末の水田は丸田調査区と川内・三ノ坪調査区の低位部に広がっている。丸田調査区のうち、13～15C・D区の水田は大畦畔と小畦畔とで方形に整然と区画されているが、21～24C・D区では島状高まりに規制されやや不整形な区画が認められる。川内・三ノ坪調査区の水田は畎畝を境に畦畔の方向が変わっている。『百間川原尾島遺跡２』の成果を合わせてみると、畎畝は南西の水田に水を供給するだけでなく、大きな単位で水田を区画する役目も果たしている。

古墳時代の遺構としては竪穴住居、建物、井戸、土壙、溝などが認められる。竪穴住居は７軒が丸田調査区の10～12C・D区にまとまっているが、各時期にわたっているため同時期のものは１ないし２軒である。

中世の遺構は丸田調査区10～15C・D区に集中している。ここで特徴的な遺構は方形にめぐる溝群である。東西方向の溝87と南北方向の溝85はそれぞれ南側と西側を画し、また東側は数回の拡張を示す南北方向の溝89・90・91によって画されている。北側は調査区外のため不明であるが、西辺と北辺の一部が鍵形に検出されている溝84が東に延びるとすれば共有している可能性がある。この想定が正しいとすれば南北約20m、東西約20mの区画となる。この区画は屋敷地を画するものであるが、建物としてまとめることができなかった。しかし、区画内のピットをみると南北あるいは東西に並ぶものが多く、規則的に建物が配置されていたことを示唆している。さらに井戸18は建物に付随してこの区画内に設けられていたものと思われる。

溝84で区画された屋敷地内も建物をまとめることができなかったが、北西のコーナー近くに位置する井戸17はこの区画に伴うものと考えられる。なお、区画の南辺は溝87と共有していた可能性が強く、約20m四方を想定すると溝88が東辺にあたると推定されるが、確証はない。

溝94と溝96もそれぞれ屋敷地を画する溝である。このうち溝94は『百間川原尾島遺跡２』の「溝88」と繋がり、建物３棟と井戸が認められる。区画の規模は東西約18m、南北は南辺を画する溝が検出されていないため不明であるが、建物などの位置から最低25m以上あったものと思われる。

以上、一部重なり合うもののほぼ４つの屋敷地が推定されるが、これらは溝87と溝94・95のあいだを南北方向に貫く幅約５mの道路状遺構を挟んで北側と南側に配置される。

ところで屋敷地は調査区の東南側に集中するが、この北西側にも土壙やピットが多く認められる。ピットは柱痕跡の認められるものが多いことから、区画はされていないが建物の存在した可能性が高い。同時に土壙墓ないし土壙墓と考えられる土壙も多い。土壙と建物が同時存在であるという確証はないが、区画された屋敷地内にはほとんど存在しないことと比較すると対照的で、これが一般の集落の姿ではないかと考えられる。（平井）

第２節　弥生土器について

１．内面朱付着土器

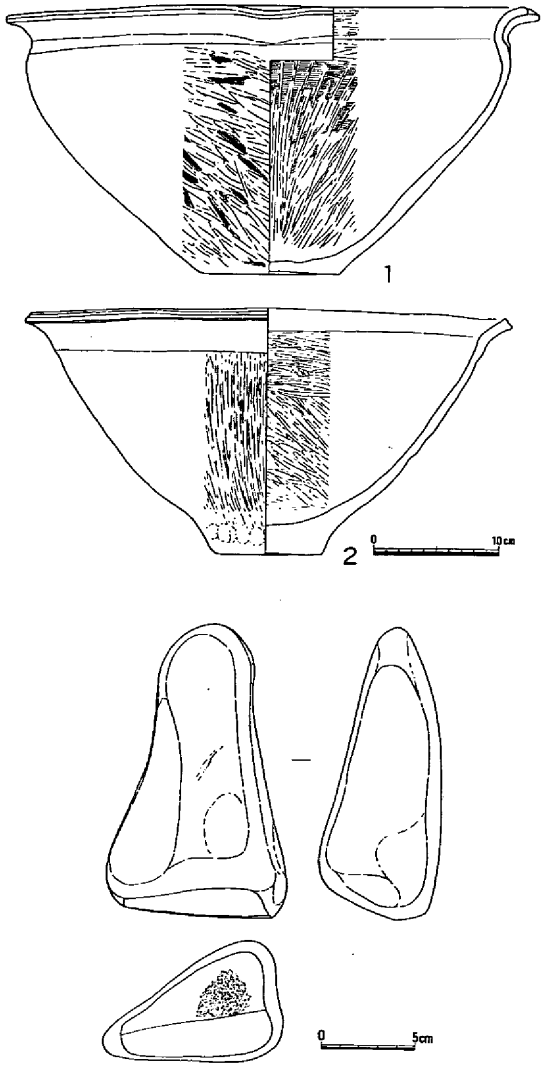
百間川原尾島遺跡から、内面に赤色顔料の付着した後期の土器が２点出土した。出土した遺構は異なるが、器種はいずれも鉢で、赤色顔料も１は魚島純一氏による蛍光Ｘ線分析によって、また２は本田光子氏による顕微鏡観察によって水銀朱（以下朱と記す）であることが確認された。

このような土器はこれまで県内であまり注意されていなかったことから、ここでは若干の評価をまじえて提示し、今後の資料の蓄積に向けて注意を喚起したい。

１は井戸９から出土した。井戸の中層には大量の土器が廃棄されており、１もその中に手の掌前後の破片となって分散していた。しかし、一部欠損するものの、ほぼ完形に復元された。器種は片口の鉢で口径40.9cm、器高21.4cmを測る。胴部外面には黒斑も認められるが、重要なことは煤が付着していることである。内面は底部から胴部の一部にかけて暗褐色を呈する部分がある。また、底部内面には使用による磨耗が認められる。朱は実体顕微鏡で観察すると、口縁部を除くほぼ内面全体に付着しているが、肉眼では器表から抜け落ちた砂粒の凹みに付着しているものしか見えない。

２が出土したＰ1610（旧遺構名）は、井戸２の北西約200mに所在する。最大長１ｍあまりの楕円形を呈するピットで、特に他のピットと異なるものではない。器種は鉢であるが、口縁部から底部近くまで約１／３程度を欠いており、片口の有無については明確にし得ない。法量は口径37.7cm、器高19.7cmを測る。胴部外面には黒斑を有するが、明瞭な煤の付着は認められない。胴部内面には手の掌より少し広い範囲で器表が黒褐色になる部分があり、それに重なるように有機物が付着している。なお、底部内面には使用による磨耗が認められる。朱は実体顕微鏡で観察すると、口縁部を除くほぼ内面全体に付着しているが、肉眼では部分的にしか見えない。

さて、２点の内面朱付着土器（註３）はいずれも鉢で、底部内面には使用によるものと考えられる磨耗が認められた。また１だけではあるが、通常あまり煤が付着することのない鉢に煤が認められることは、朱と火に掛ける行為とが無関係ではないことを示唆しているようである（註４）。おそらく２点の土器は、朱の保管や運搬などに用いられた単なる容器ではなく、精製された朱の使用に係わる過程で用



第365図　内面朱付着土器と石杵

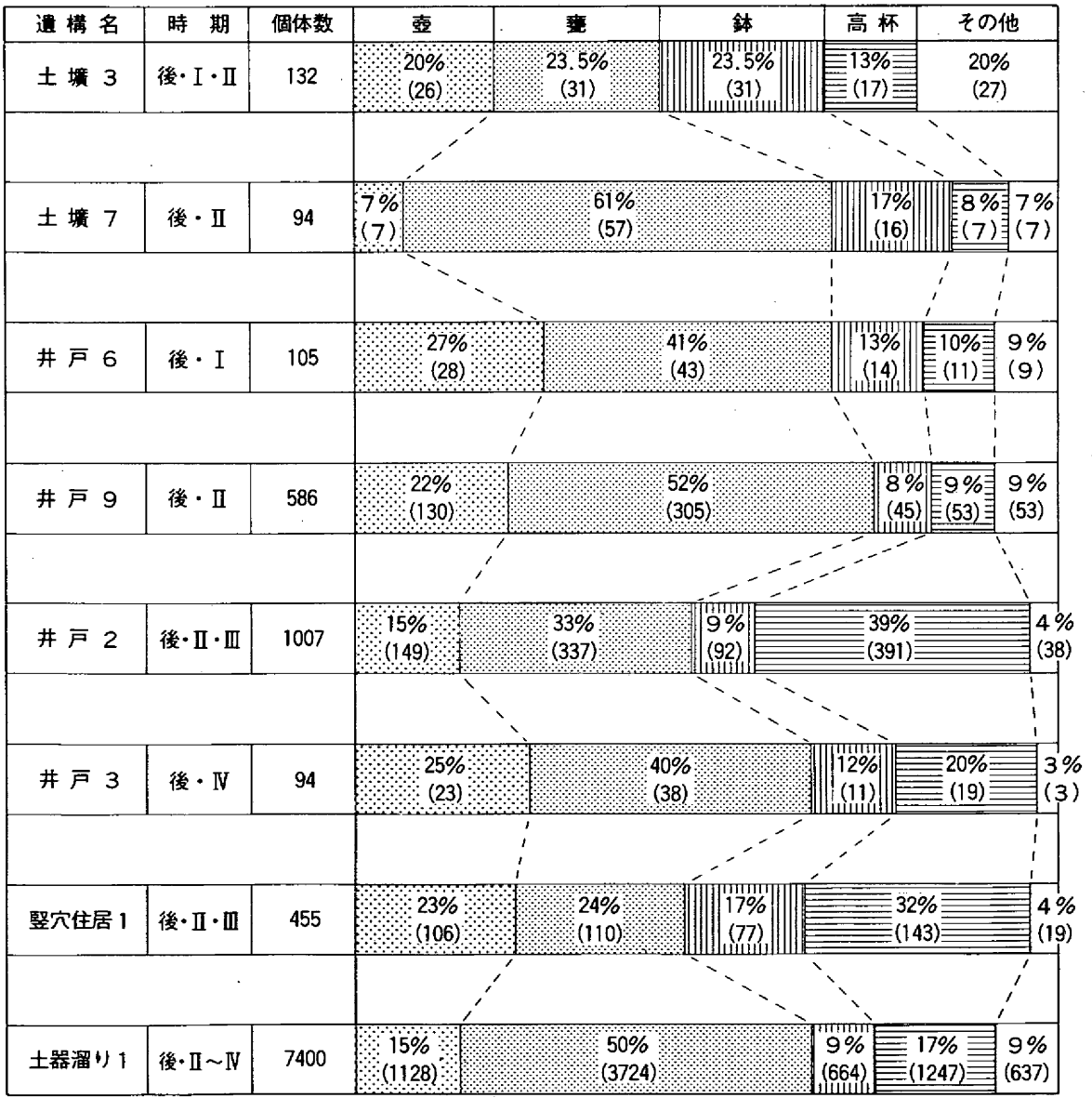
いられた道具の一つと考えられる。

これと関連して注目されるのは、P1610の南約20mに所在した『百間川原尾島遺跡2』「竪穴住居16」出土の石杵である。石杵は長さ15.5cmの安山岩製で、使用面には若干の朱（註5）が付着している。この石杵と内面朱付着土器とを合わせて考えるならば、先に述べた評価はさらに補強されよう。今後本資料と相前後して発見された資料の報告書刊行を待って、再度論じたい。（平井）

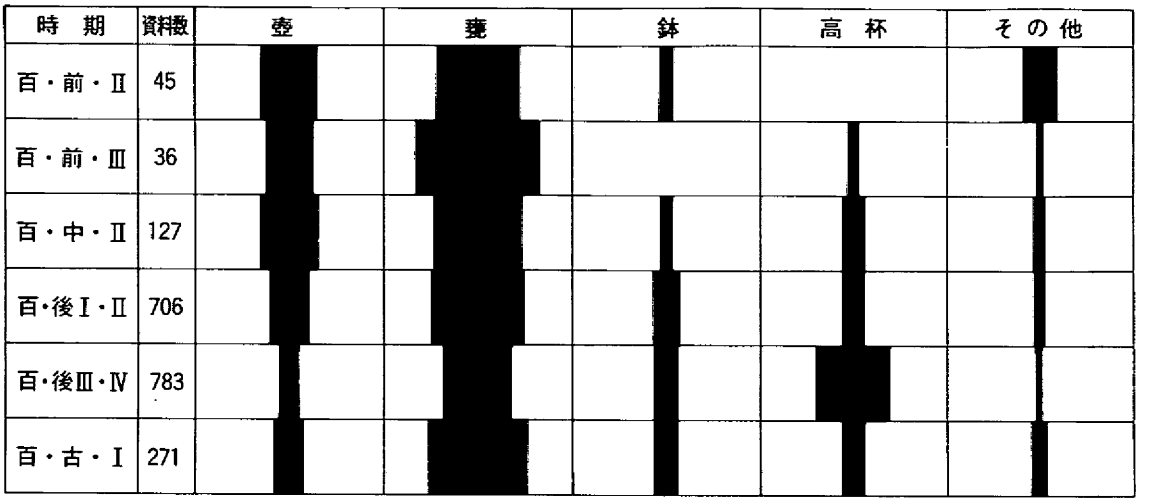
2．器種組成

本報告の原尾島遺跡で出土した土器は、コンテナ総数で680箱を数える。中でも多数を占めるのが弥生時代後期の土器である。その数は、遺構出土のものが370箱、包含層を含めると優に400箱を越えている。ここでは比較的まとまった出土数のある遺構ごとに器種組成を提示し、その時期的な変化等について考えてみたい。

出土した器種は、壺・甕・鉢・高杯・器台・製塩土器・蓋・台付直口壺・手捏ねである。数量化の



第366図　弥生時代後期の遺構別器種組成



第367図　百間川遺跡群の時期別器種組成

方法は、土器の復元作業を行なったのち、器種の判明する口縁部と底部のそれぞれを数え、その和を個体数とした。なお完形品については、口縁部と底部のそれぞれを数えることから、個体数としては2個体ということになる。また、高杯と器台については口縁部と脚端部の和を個体数とした。

次に、各遺構について個体数に占める各器種の割合を百分率で表した。その際の器種とは、主に壺・甕・鉢・高杯を指し、器台・製塩土器・蓋・台付直口壺・手捏ねについては、その他の器種として一括している。

以上の数量化の作業を経て得られた結果が第366図である。対象とした総個体数は9873個で、その内訳は壺1597個（16.2%）、甕4645個（47%）、鉢950個（9.6%）、高杯1888個（19.1%）、その他793個（8.1%）である。以下、各遺構ごとに若干の説明を加える。

土壙3は土器溜り1の下で検出した遺構である。ここで目立つのは、その他に含まれる製塩土器の多さで、17%（23個体）を占めている。その結果、壺・甕・鉢・製塩土器がほぼ等分の割合を示すこととなる。

土壙7は土器溜り1に接して検出した遺構で、炭とともに多くの土器が出土している。中でも甕は61%の高率で、15個の完形を含んでいる。

井戸6はその過半を調査区外にもつもので、南東方向から廃棄されたような土器の堆積が認められた。ここでは壺の比率が27%で、他の遺構と比べてやや目立っている。

井戸9は土壙34に近接し、その上部は一連の土器溜りを形成していた。ここではそれらの土器溜りの遺物を除いたものを井戸9の個体数として数えている。土器の出土状況は人為的な廃棄行為を示し、中～上層から炭や焼土とともにまとまって出土している。完形に近いものは中層に多く見られるが、上層と接合するものも認められる。器種組成では甕が52%で過半を占め、さらに鉢・高杯・製塩土器が8～9%とほぼ同率である。

井戸2は竪穴住居1の北側に接して検出したものである。高杯が30%を越え、甕の比率との逆転がみられるなど、器種組成で竪穴住居1との近似性が指摘できる。土器の出土状況は、最下層に完形品を主体にしたまとまりがみられ、その他はほぼ中位からまとまって出土している。

井戸3は後期の溝2～4の下で検出したものである。井戸底面の標高は高いものの、その形態から井戸として報告している。埋積状況は人為的であり、土器は井戸のほぼ中位にまとまって廃棄されて

いた。器種組成では高杯が20％を占め、やや高率である。

竪穴住居１は住居の拡張がみられ、百・後・Ⅱに属する土器の多くは拡張前の住居に伴う柱穴内から出土している。器種組成では高杯が32％と最も高い割合を占め、次いで甕（24％）、壺（23％）、鉢（17％）となっている。

土器溜り１は一部調査区外に拡がるものの、ほぼ10m×15mの範囲に形成されていた。百・後・Ⅱの時期の土器を中心に後期全般を含み、長期にわたって土器廃棄場所として使用されたことが窺われる。また土器の中には二次的な被熱により変色したもの、器表が剝離したもの等が目立っている。個体数は7400個で、本節で対象とした総数の約75％を占めていることもあり、総数の比率に近い。

次に後期の器種組成について整理する。まず、後期を通じて比率の変化の小さい器種は壺と鉢である。壺の割合は土壙７で７％とやや低いものの、他では15～27％とほぼ同様の比率である。また、鉢は土壙３で23.5％とやや高いものの、他では９～17％を示し、やはりほぼ同様の比率を占めている。なお、土壙３で製塩土器が目立ち、土壙７では甕が突出した様相を示すことから、それぞれにおける壺と鉢の偏差は、これら特徴的な器種との相関の可能性が考えられる。さらに、その他の器種に含んだ製塩土器は、土壙３と井戸３を例外として、他の遺構では３～８％の割合で存在する。このことは製塩土器が組成要素のひとつとなっていることを示し、土器製塩のみならず集落内での運搬等にも用いられた結果であろう。

以上の壺・鉢・製塩土器に対して、甕と高杯については後期の前半と後半で比率の変化が顕著に認められる。すなわち、前半を中心とする土壙７、井戸６・９、土器溜り１では甕がほぼ50％以上、高杯が８～17％を占めるのに対し、後半を中心とする井戸２・３、竪穴住居１では甕が24～40％に減り、高杯は20～39％を占めるようになる。特に井戸２と竪穴住居１では高杯の割合が勝っている。また第367図にみられるように、弥生前期～古墳初頭を通じても弥生後期後半の高杯の突出と甕の低率は顕著である。このような比率変化については、井戸２・３の埋没状況が人為的であるということ、特に井戸２では最下層に完形品の一括が認められ、井戸の廃棄時に高杯を中心とした祭祀が行なわれたと考えられることから、ここでは対象とした遺構の性格による可能性を指摘しておきたい。ただそれが時期的に集中するものか、あるいは別の要因であるかについても今後検討していく必要があろう。なお先述したように、壺・鉢・製塩土器の比率変化が後期を通じて小さいということから、甕と高杯の相関が指摘できる。これらについては、通常の機能的な相互補完は考えられないものの、比率変化の要因との密接な関係を検討する必要があろう。

ここに提示した器種組成は、あくまで土器の廃棄時のものであり、必ずしも使用時の組成ではない。よって遺構の性格等についても、遺構や土器の廃棄行為に関わるものに限って言及せざるを得なかった。また、土器の一括性や層位ごとの器種組成の詳細な検討を捨象したことから、器種組成の時期的な変化や遺構の性格についての傾向を事例的に提示したにすぎない。以上、今後の課題としたい。

（高田）

３．煤付着土器

土器の外面に煤が付着した土器を観察すると、煮炊きに使用する甕を中心に、少ないながらも各器種に認められ、また付着状況も多様である。ここでは最も資料の多い後期の甕を取り上げ、煤の付着する様相を整理しておく。なお、甕以外に壺や鉢にも付着するものが認められるが、量はわずかであ

る。

さて、ここで対象とした後期の土器は103個体で、このうちの多くは百・後Ⅰ・Ⅱに属するもので、百・後Ⅲ・Ⅳに属するものはわずかである。まずこれらの甕を煤の付着する部位および範囲によって類型化しておく。

Ⅰ類は外面全体に付着するものである。

Ⅱ類は底部から胴部に連続して付着するが肩部には付着しないもので、さらに口縁部に付着しないもの（A）と付着するもの（B）とに分かれる。そしてこれらはさらに胴部への付着範囲によって底部に近い部分のみ（a）と、最大径あたりまで（b）と、肩部あたりまで（c）とに細分される。この細分は各類とも共通である。

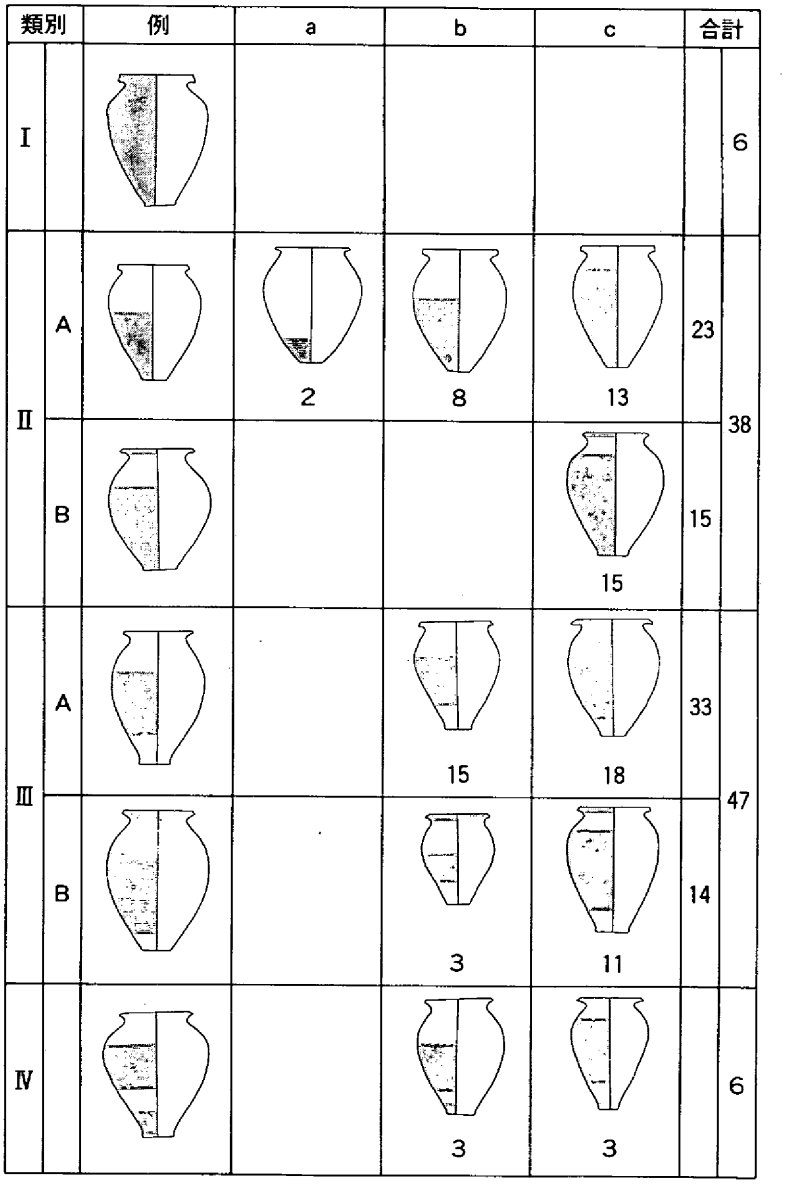
Ⅲ類は、底部付近には付着しないが胴部には付着するもので、さらに口縁部に付着しないもの（A）と付着するもの（B）とに分けられる。

Ⅳ類は底部および胴部に付着するが、胴下半に付着しない部分が認められるものである。

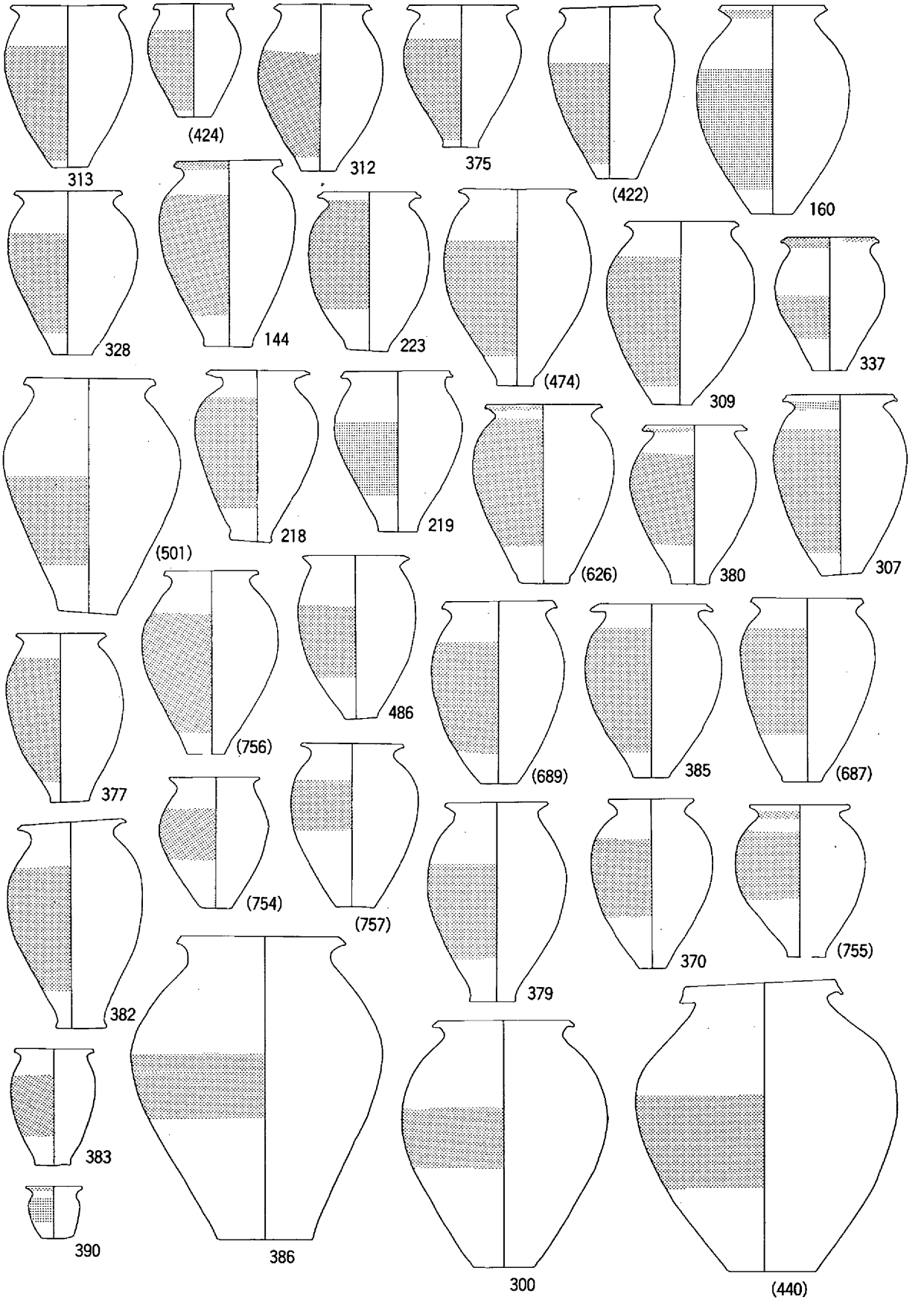
以上、煤の付着状態によって四類に大別したが、このうち最も多いのはⅢ類で47%、次いでⅡ類の38%、そしてⅠ類とⅣ類が各6%である。ただⅠ類はⅡ類の肩部にも煤が付着しただけで、本質的な差はないものと考えられるから、Ⅰ類とⅡ類を合わせると44%になり、Ⅲ類とほぼ拮抗する。したがって後期の甕に認められる煤の付着は、大きくⅡ類とⅢ類の二類型に収斂されよう。

ところで、こうした二類型の差が偶然の結果でないとすれば、煮炊における甕と火の接し方に二通りの方法があったことが推定されるし、また火所の構造とも関わってくる。Ⅰ・Ⅱ類から推定されることは、底部の下面に煤が認められないことから、底部を直接地面に置き、その周囲で燃料を燃やしたということである。この方法は、現在百間川遺跡群で判明している後期の竪穴住居内に認められる地床炉に対応して理解し得る。

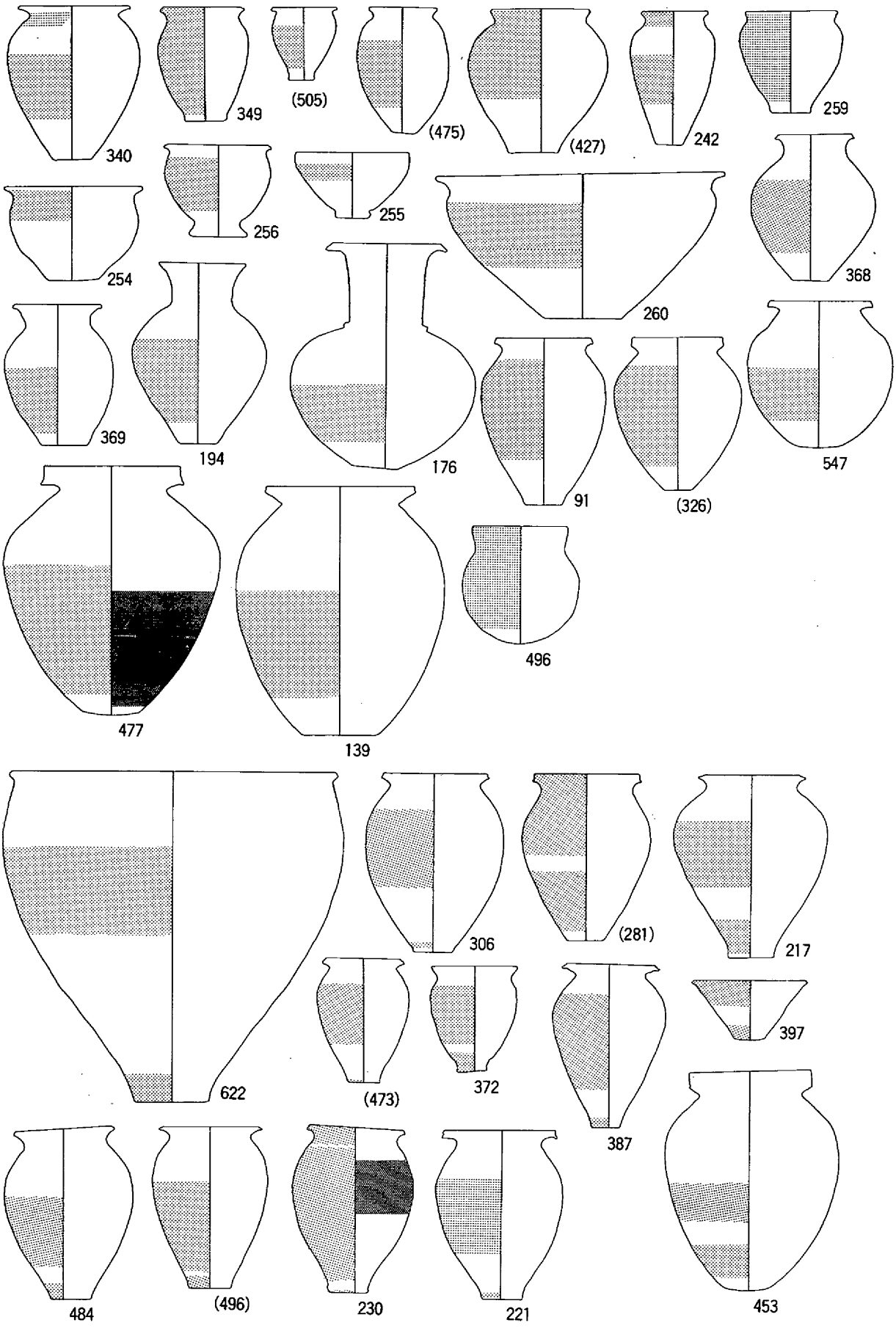
Ⅲ類は底部に接して煤の付着が



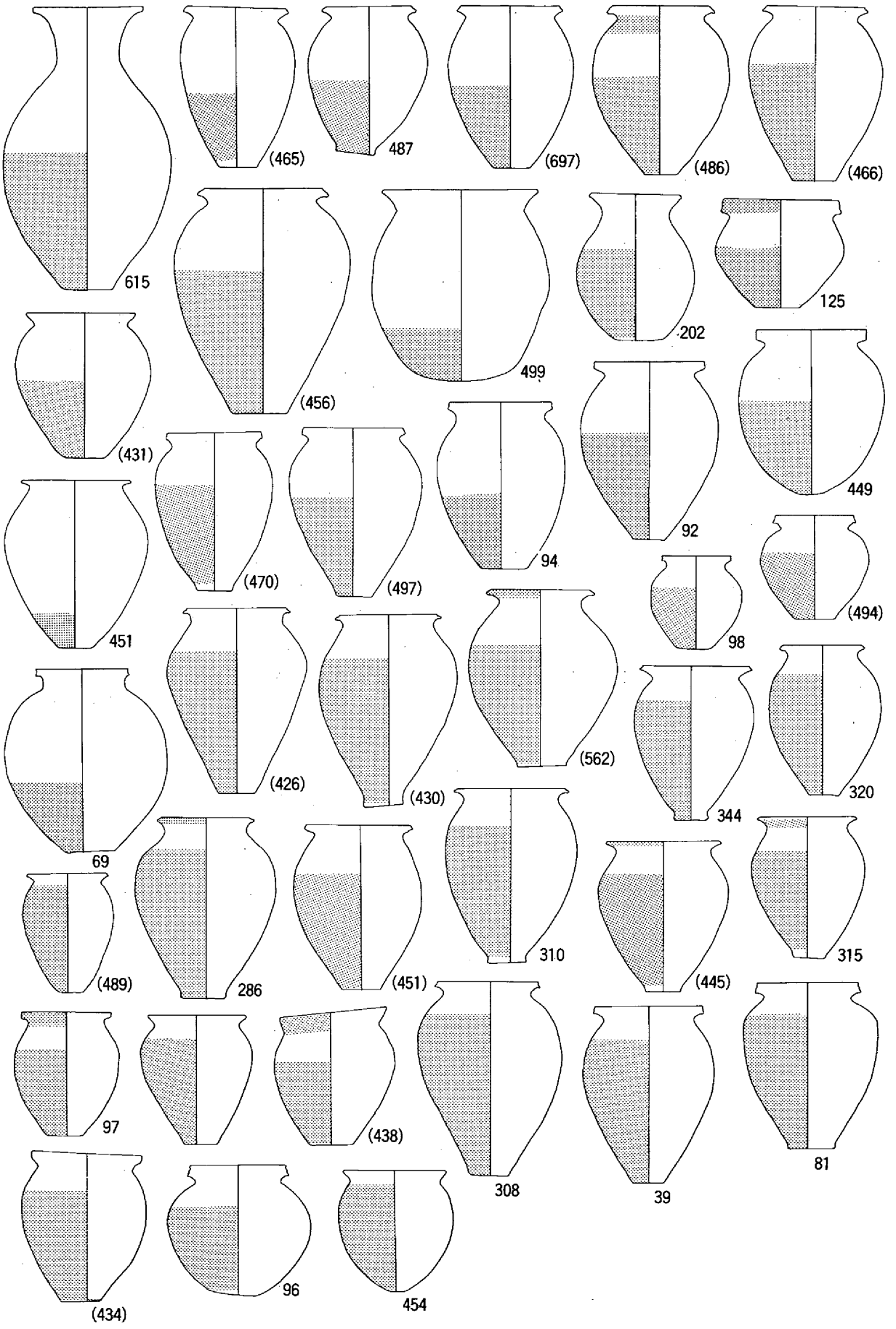
第368図　弥生時代後期の甕の煤付着類型　（数字は%）



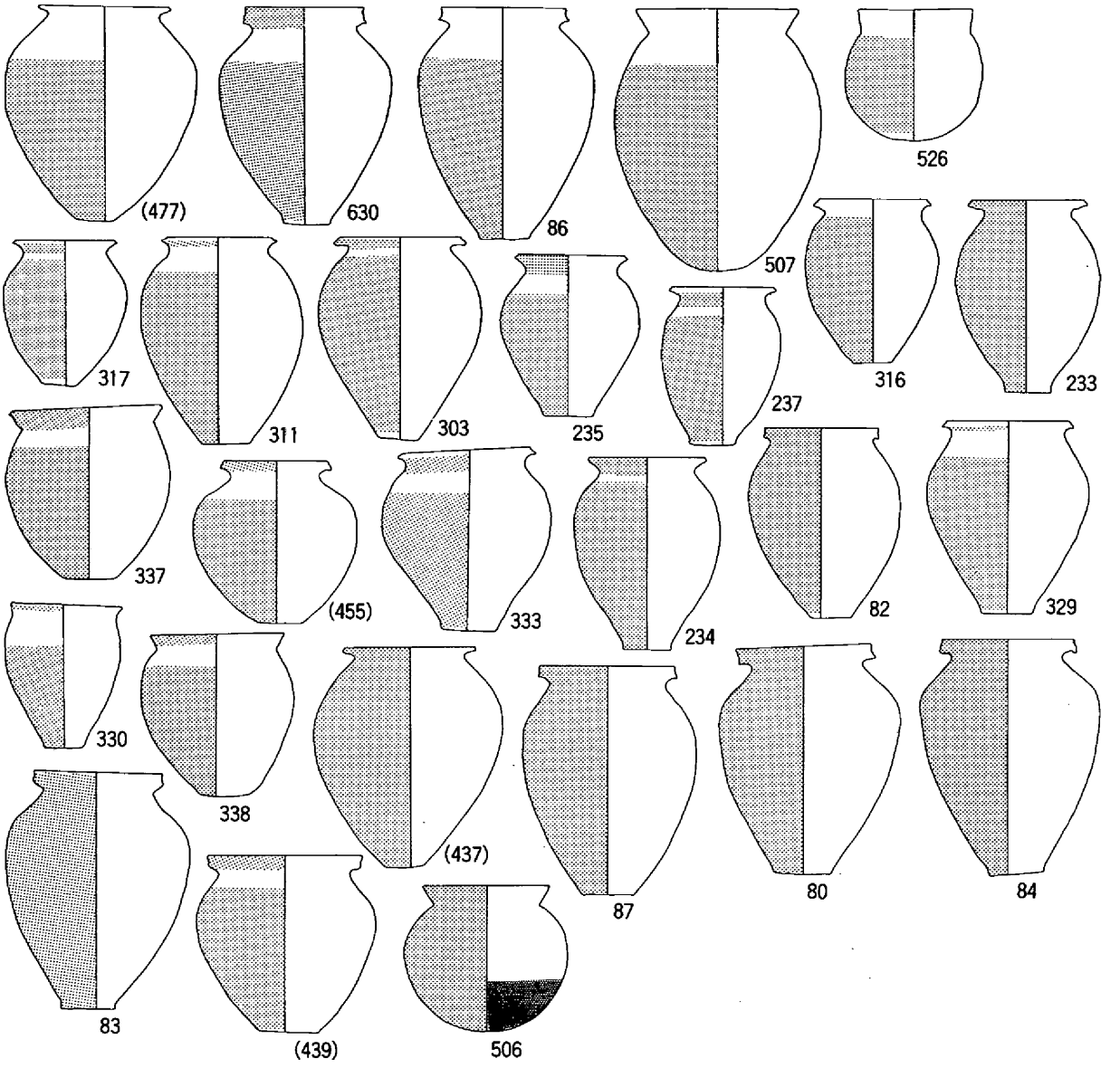
第369図　煤付着土器（1）



第370図　煤付着土器（２）



第371図　煤付着土器（3）



第372図　煤付着土器（4）

認められないが、その部分には被熱による赤化などの色調変化が多くのものに認められる。このことは、一番火力の強い部分に底部から胴下半が接していたことを示していると考えられる。すなわち甕は持ち上げられた状態にあり、底部の下で燃料が燃えていたことになる。ここで問題なのは、甕を支えていたものが何かということである。現状では百間川遺跡群において、土製ないし石製を問わず支脚状のものあるいは石囲いの炉は発見されていない。このことは県内に広げて見ても同様である。

奈良県の矢部遺跡から出土した古墳時代前期の煤付着土器を類型化した藤田至希子（註6）は、Ⅲ類のような付着状態を煤類型G・Hとし、いずれもカマド使用によるものとされた。しかし岡山県では後期のカマドは発見されておらず、まずカマドとの関係はあり得ない。

岡山県の古墳時代前期の甕、とりわけ下田所式・亀川上層式の甕を見ると、底面から胴部最大径を越えて、ほぼ全面に煤が付着するものが多く、管見する限りでは底部付近に付着しない部分があるということはない。この様相は後期の末、少なくとも百・後・Ⅳの時期の丸底化が始まった段階から認められる。したがって百・後・ⅣにはⅢ類はほとんどなくなり、底面から胴部へ連続して、あるいは

全面付着するものが主体となる。しかし、こうした変化にも関わらず、炉の構造的変化は百・古・Ⅲにおけるカマドの出現まで認められない。

なお、Ⅳ類についても一定量存在することから偶然ではなく、支脚状のものが煤の付着していない部分に接していた結果であろうと考えられるが、それを証明する遺構・遺物の発見はない。（平井）

4．黒　　斑

完形に復元された弥生土器のほとんどには、焼成時に形成された黒斑と呼ばれる黒色部が認められた。この黒斑部の破断面を見ると、表面のみ黒色を呈するものと、器壁中心部まで黒色を呈するものとがある。また黒斑が認められる部位や大きさも各種認められるが、後期の土器を中心に特徴あるいは何らかの傾向があるのかどうかを整理しておく。まず器種ごとに見ておこう。

壺は脚台付を除くと、その83％は60や62のように底部底面から胴部下半の一部に広がる。中には193のようにかなり広がるものもあるが、たいがいは底部付近で収まる。ついで多いのが189や194のような胴部最大径付近に認められるもので、55％を占める。この部位の範囲は基本的にあまり広い範囲に及ぶことはないが、中には195や203のように広がる場合もある。あと数は少ないが60のように口縁部や、（452）のように頸部に認められるものもある。黒斑の場所と数は底部付近と胴部最大径付近のどちらかに１箇所ずつ認められるものが60％あり、両方認められるのは40％あまりである。これに口縁部を加えた三箇所に認められるものなどがわずかに見られる。

脚台付壺は525のように胴部最大径付近に認められるものがほとんどである。

次に甕を見てみよう。甕は壺で特徴的に認められた底面から胴部下半に連続して見られるものは48％で、この部位に認められないものの方がわずかに多い。胴部最大径付近に認められるものは、壺と異なり72％を占める。その他口縁部や胴部下半などに認められるものも少量存在する。黒斑の部位の組合せは、底部付近ないし胴部最大径のどちらか一箇所だけが79％を占め、両方に認められるものは20％、これに口縁部などに認められるものがわずかに加わる。

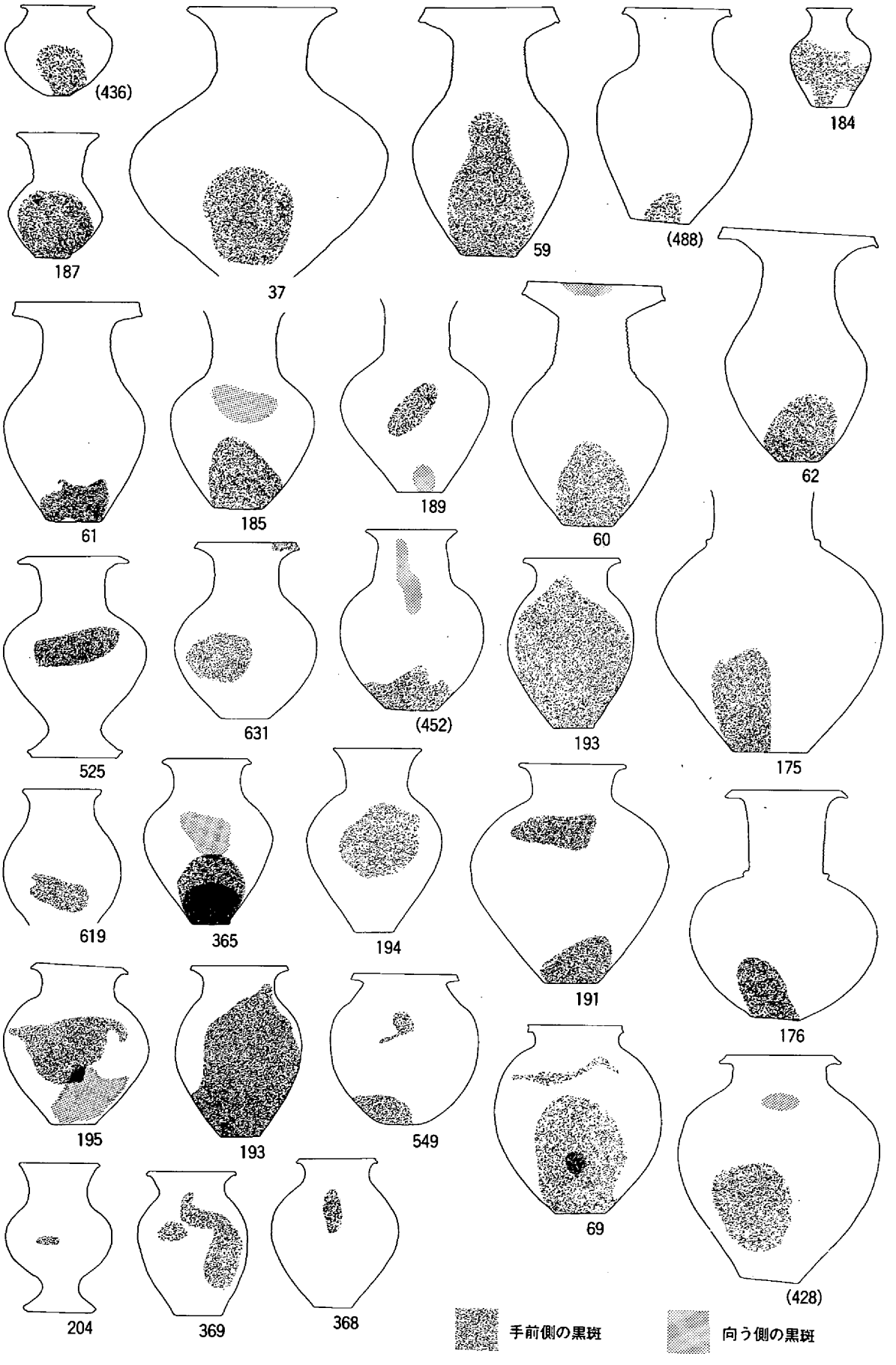
鉢は底部から胴部下半にかけてと、胴部上半から口縁部にかけての２箇所に認められる。量が少ないため明確でないが、底部付近に認められるものは約75％、胴部上半から口縁部に認められるものは約50％である。また両方に認められるものは約30％と少ない。

脚台付鉢は331のように胴部最大径付近に認められるもの、（454）のように脚端にみられるもの、また319のように口縁部に認められるものなどがある。

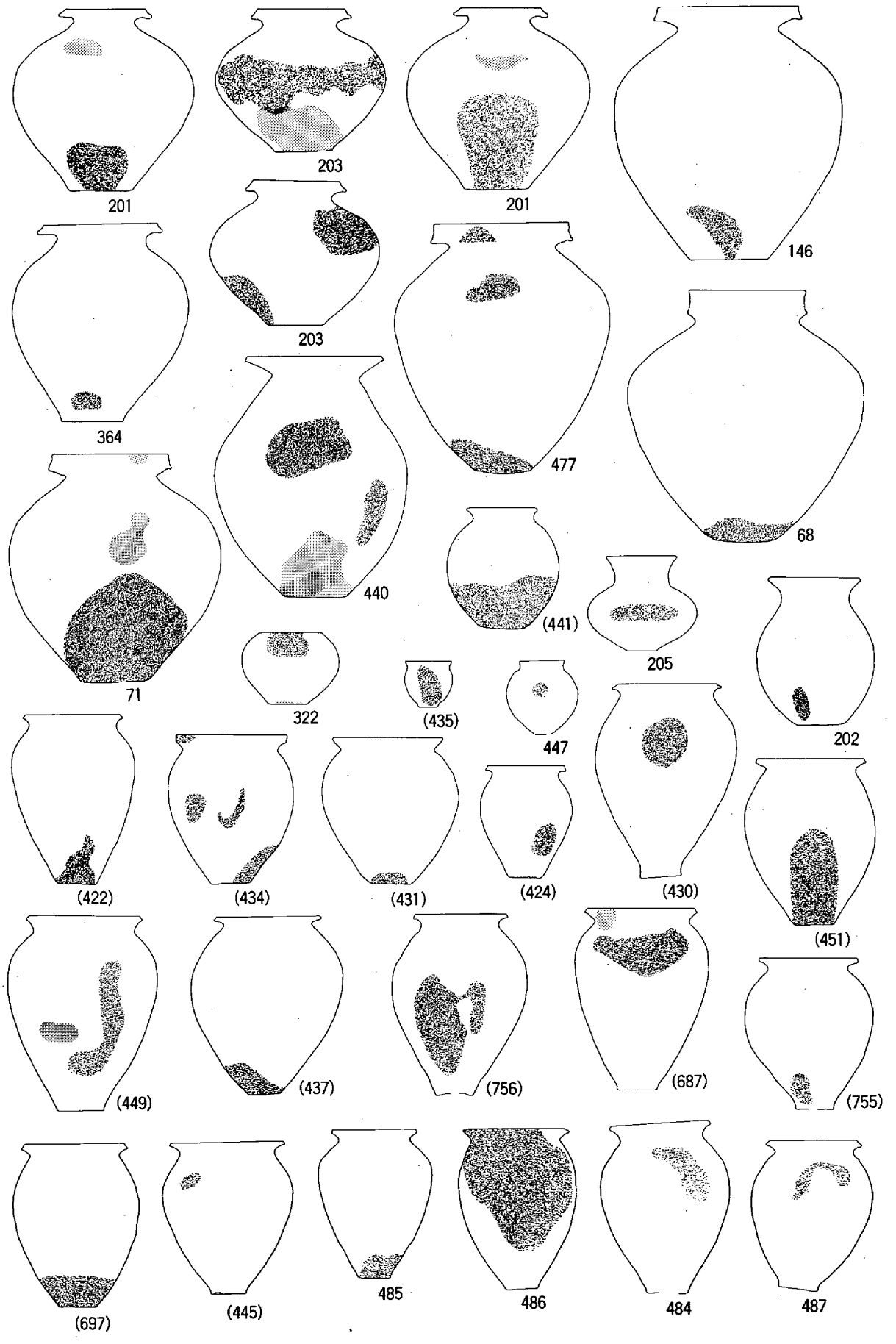
高杯は口縁部に認められるものが多く、脚端部あるいは脚柱部などにも認められるが、量が少ないため明確な傾向は不明である。

実際に土器を焼いて黒斑の形成を見たところ、壺や甕を普通に立並べて焼くと、床面に着いている底部底面および底部付近、そして土器どうしが接する胴部最大径付近に最も出来やすい。さらに燃料が最後までくすぶりながら残って、しかもそれが土器に接している場合、あるいは焼成直後でまだ木などが直接あたると燃え上がる状態のとき、木や草が直に接しても発生する。このような実例から黒斑の様相を見ると、壺や甕に認められる黒斑は、普通に立並べて焼かれた結果発生したものと理解される。また高杯にしても口縁部に認められる例が多いのは、口縁部が最大径を示し、そこが他の土器と接するからである。

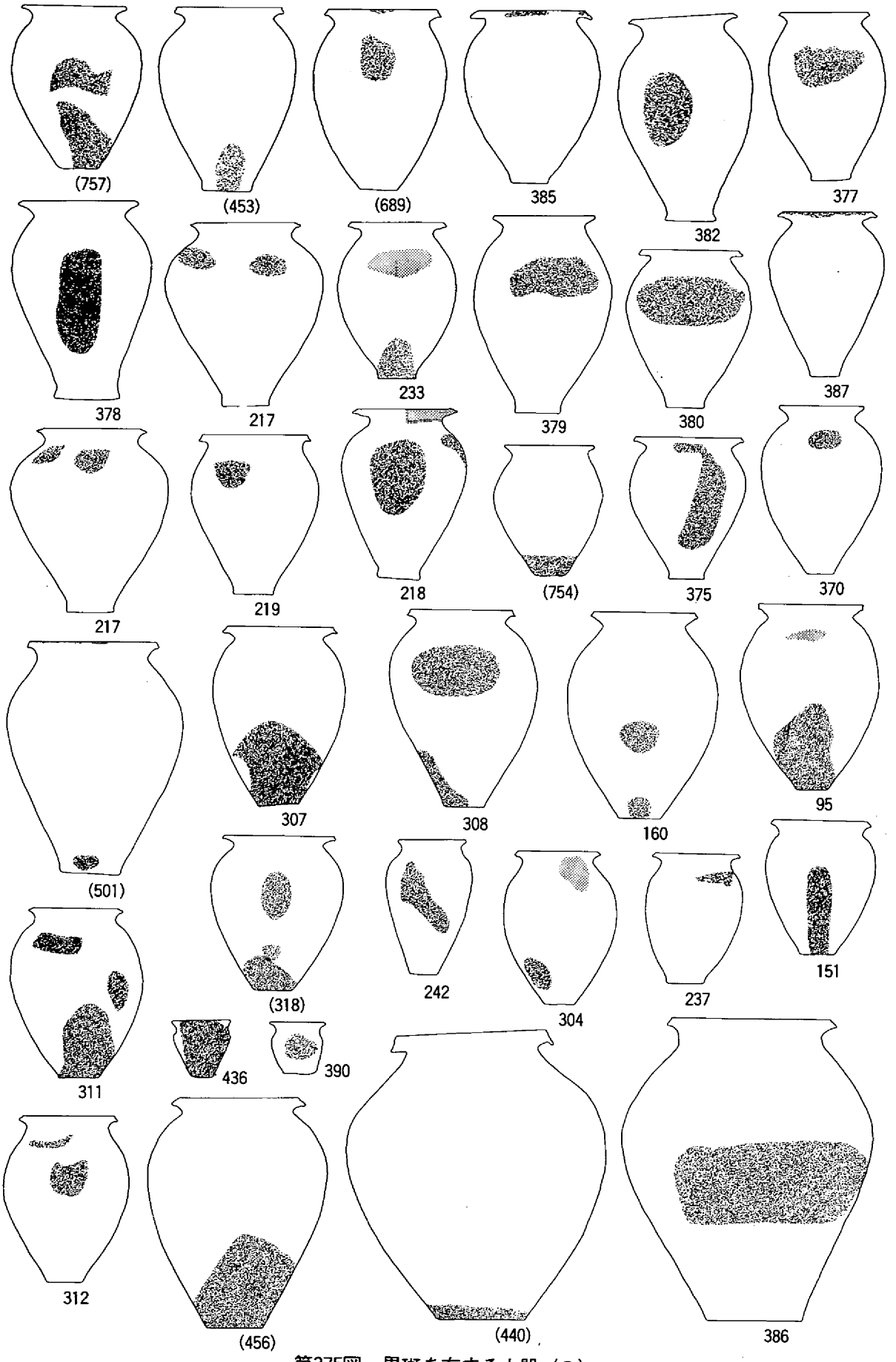
ただ壺と甕では底部付近に発生する黒斑の割合が異なっており、壺83％に対し甕は48％である。こ



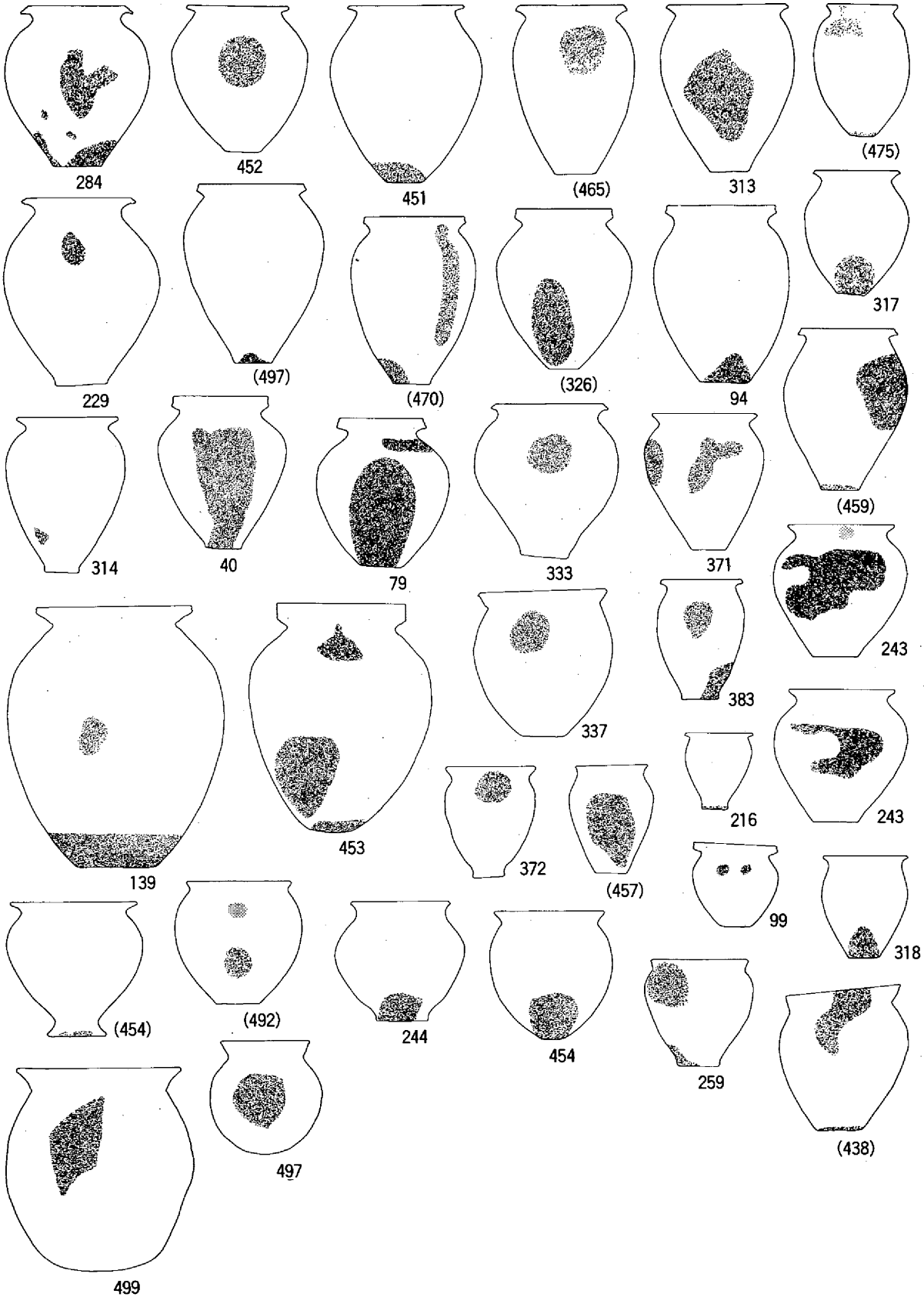
第373図　黒斑を有する土器（１）



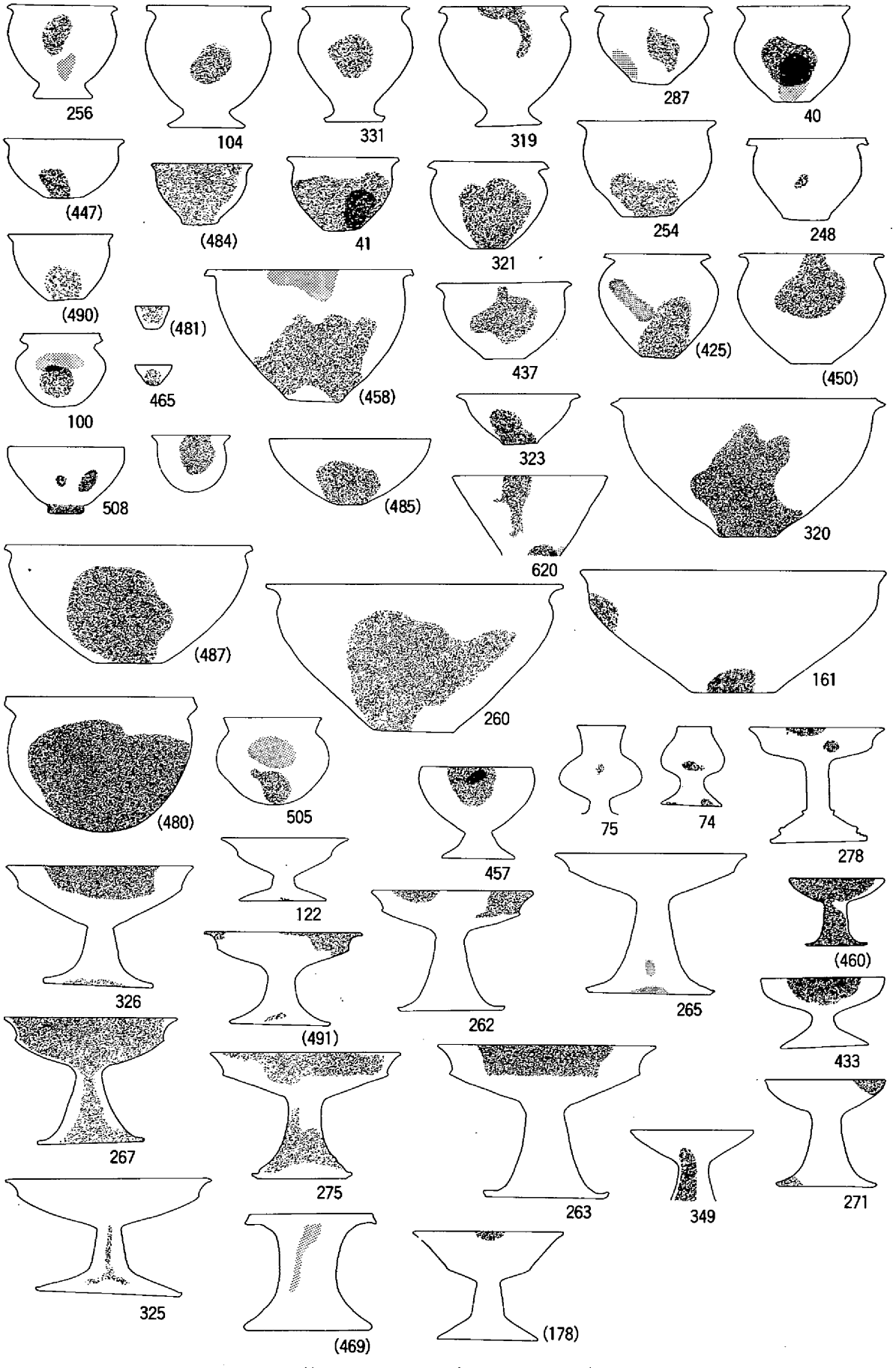
第374図　黒斑を有する土器（2）



第375図　黒斑を有する土器（３）



第376図　黒斑を有する土器（4）



第377図　黒斑を有する土器（5）

うした器種での違いが何に起因するものかは不明であるし、また他の遺跡あるいは他の時期のものでも共通する現象であるのかは今後の課題である。（平井）

註

註1　正岡睦夫他「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　1984年

註2　平井　勝・宇垣匡雅他「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　1994年

註3　内面朱付着土器については本田光子氏より多くの御教示を得た。なお、本田氏は内面朱付着土器の用途については仙薬製造に使用されたものと推定されている。
本田光子・成瀬正和「野方中原遺跡出土の土器に付着した赤色顔料について」『福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書』第348集　1993年

註4　福岡県辻垣畠田・長通遺跡の内面朱付着土器の大半は、外面に2次加熱による変色や煤が付着している。土器の実見については柳田康雄氏のお世話になった。
柳田康雄「辻垣畠田・長通遺跡」『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第2集　1994年

註5　徳島県立博物館の魚島純一氏に蛍光X線分析をお願いした結果、水銀朱であることが判明した。その際、天羽利夫氏からは若杉山遺跡等、朱に関する御教示を得た。

註6　藤田至希子「古墳時代前期の煮沸形態について－矢部遺跡を中心に－」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊　1986年

付載1　百間川原尾島遺跡から出土した弥生時代前期橋脚列の柱の樹種

森林総合研究所木材利用部
能　城　修　一

百間川遺跡群は岡山市の中央を流れる旭川の東岸に位置し、その最上流部にあるのが百間川原尾島遺跡である。当遺跡の南東部には弥生時代前期の流路が検出され、それを横断するように長さ15mにわたる柱列が見いだされた。柱列は、1m間隔で2列に平行するかたちとなっており、それぞれ約2mおきに数本ずつ密集しており、橋脚を形成していたと考えられている。ここでは柱列の柱77本の樹種を報告する。樹種同定用の顕微鏡標本は、片刃カミソリを用いて横断面・接線断面・放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。以下には、見いだされた樹種の木材解剖学的な記載を行い、それぞれの顕微鏡写真を示して、同定の根拠を明らかにする。

1．イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch　イヌガヤ科　1a-1c (OKF-7)

仮道管と樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はごくわずか。木部柔組織は年輪内に均一に散在し、接線断面でみると水平壁は結節状を呈する。仮道管の内壁には不揃いならせん肥厚がある。分野壁孔はごく小型のヒノキ型で、1分野に2－4個。

2．ヤナギ属　Salix　ヤナギ科　2a-2c (OKF-65)

やや小型で丸い管孔が単独あるいは2－3個放射方向に複合して散在する散孔材。管孔の直径は年輪界にむけて徐々に減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性で、道管との壁孔は大型の蜂の巣状に配列する。

3．クマシデ属イヌシデ節　Carpinus sect. Eucarpinus　カバノキ科　3a-3c (OKF-13)

中型の管孔が単独あるいは2－数個複合して散在する散孔材。管孔の直径は年輪界付近でやや急に減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は同性にちかい異性で1－2細胞幅、ときに大型の集合状となり、やや膨らんだ結晶細胞をもつ。

4．コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　4a-4c (OKF-21)

やや大型で径の不揃いな厚壁で丸い単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。木部柔組織は不揃いな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものと、集合状～複合状の大型のものとからなる。

5．コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　5a-5c (OKF-51)

年輪のはじめに大型で丸い単独管孔が1－2列配列し、晩材ではやや急に径を減じた薄壁の小管孔が幅のせまい火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は不揃いな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものと、大型の複合状のものとからなる。

6．コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　6a-6c (OKF-29)

年輪のはじめに大型で丸い単独管孔が1－3列配列し、晩材ではやや急に径を減じた厚壁の単独管孔が放射方向の塊をなして配列する環孔材。木部柔組織は不揃いな接線状。道管の穿孔は単一。

放射組織は同性で、単列のものと、大型の複合状のものとからなる。

7．ムクノキ　Aphananthe aspera (Thunb.) Planch.　ニレ科　7a-7c (OKF-73)

やや小型～中型で厚壁の管孔が単独あるいは放射方向に2個ほど複合して、ややまばらに散在する散孔材。木部柔組織は翼状～連合翼状。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で1－2細胞幅。

8．ヤマグワ　Morus australis Poir.　クワ科　8a-8c (OKF-77)

大型で丸い管孔が年輪のはじめに数列配列し、晩材では徐々に径を減じた管孔が単独あるいは数個複合して斜め方向に連なる傾向をみせて散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で8細胞幅くらいとなり、上下端の1－3細胞が直立細胞からなる。

9．シロダモ　Neolitsea sericea (Bl.) Koidz.　クスノキ科　9a-9c (OKF-52)

やや小型の角張った管孔が単独あるいは放射方向に2－3個複合して、ややまばらに散在する散孔材。木部柔組織は周囲状で、しばしば小型の油細胞をもつ。道管の穿孔は単一、ときに数本の横棒からなる階段状。放射組織は異性で2細胞幅くらい、上下端の1－3細胞が直立細胞からなり、ときに油細胞をもつ。

10．ヤブツバキ　Camellia japonica Linn.　ツバキ科　10a-1 (OKF-50)

小型で角張った単独管孔が年輪界にむけて径を減じながら均一に散在する半環孔材的な散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で2－3細胞幅、背が低く、単列部にしばしば大型の結晶をもつ。

11．サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　11a-1 (OKF-68)

小型で角張った管孔が均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状～短接線状。道管の穿孔は30－40本の横棒からなる階段状。放射組織は単列異性。

12．ヒサカキ　Eurya japonica Thunb.　ツバキ科　12a-1 (OKF-69)

やや小型で角張った単独管孔が均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状。道管の穿孔は20－40本の横棒からなる階段状。放射組織は異性で2細胞幅となり、かたちは不揃いである。

13．イボタノキ属　Ligustrum　モクセイ科　13a-1 (OKF-2)

やや小型の丸い単独管孔が年輪のはじめに断続的に配列し、そこから急に径を減じた管孔が単独あるいは2－3個放射方向に複合して散在する半環孔材的な散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2細胞幅、上下端の1－3細胞ほどが直立細胞からなる。

当遺跡の橋脚列の柱材77点中には13の分類群が見いだされた（表1）。その内訳はヤブツバキが27.3%ともっとも多く、コナラ属コナラ節（22.1%）、ヤマグワ（14.3%）、コナラ属アカガシ亜属（13.0%）、イヌガヤ（9.1%）、コナラ属クヌギ節（5.2%）と続き、それ以外の樹種はすべて1点ずつであった。樹種構成としては、当時の遺跡周辺に普通に生育していたと考えられるものばかりであり、耐久性の低いヤナギ属が入っているのが特異である。

当遺跡の柱の樹種を、岡山大学の鹿田地区（能城、1993）および津島地区（能城、1992）で調査された木材の樹種と比較してみると、イヌガヤ、アカガシ亜属、コナラ節などが多い点で、津島地区の縄文時代後期の自然木の組成に近く、平安時代の両地区の杭がマツ属複維管束亜属やモミ属をかなり含むのとは異なっている。鹿田地区の弥生時代中後期および古墳時代の木製品は点数は少ないが、いずれもマツ属複維管束亜属を伴っており、津島地区の縄文時代後期の自然木にもマツ属複

維管束亜属が含まれていたことから考えると、当遺跡の柱はマツ属複維管束亜属をまったく含まない点に特徴がある。今後は、資料点数を増やしていくなかで、周辺植生の変遷を明確にし、遺跡周辺の森林資源と人類による選択的な利用との関連を明らかにするべきであろう。

表 1　橋脚列の柱の集計表

樹種名	柱	
イヌガヤ	7	9.1%
ヤナギ属	1	1.3%
クマシデ属イヌシデ節	1	1.3%
コナラ属アカガシ亜属	10	13.0%
コナラ属コナラ節	17	22.1%
コナラ属クヌギ節	4	5.2%
ムクノキ	1	1.3%
ヤマグワ	11	14.3%
シロダモ	1	1.3%
ヤブツバキ	21	27.3%
サカキ	1	1.3%
ヒサカキ	1	1.3%
イボタノキ属	1	1.3%
総数	77	

引用文献

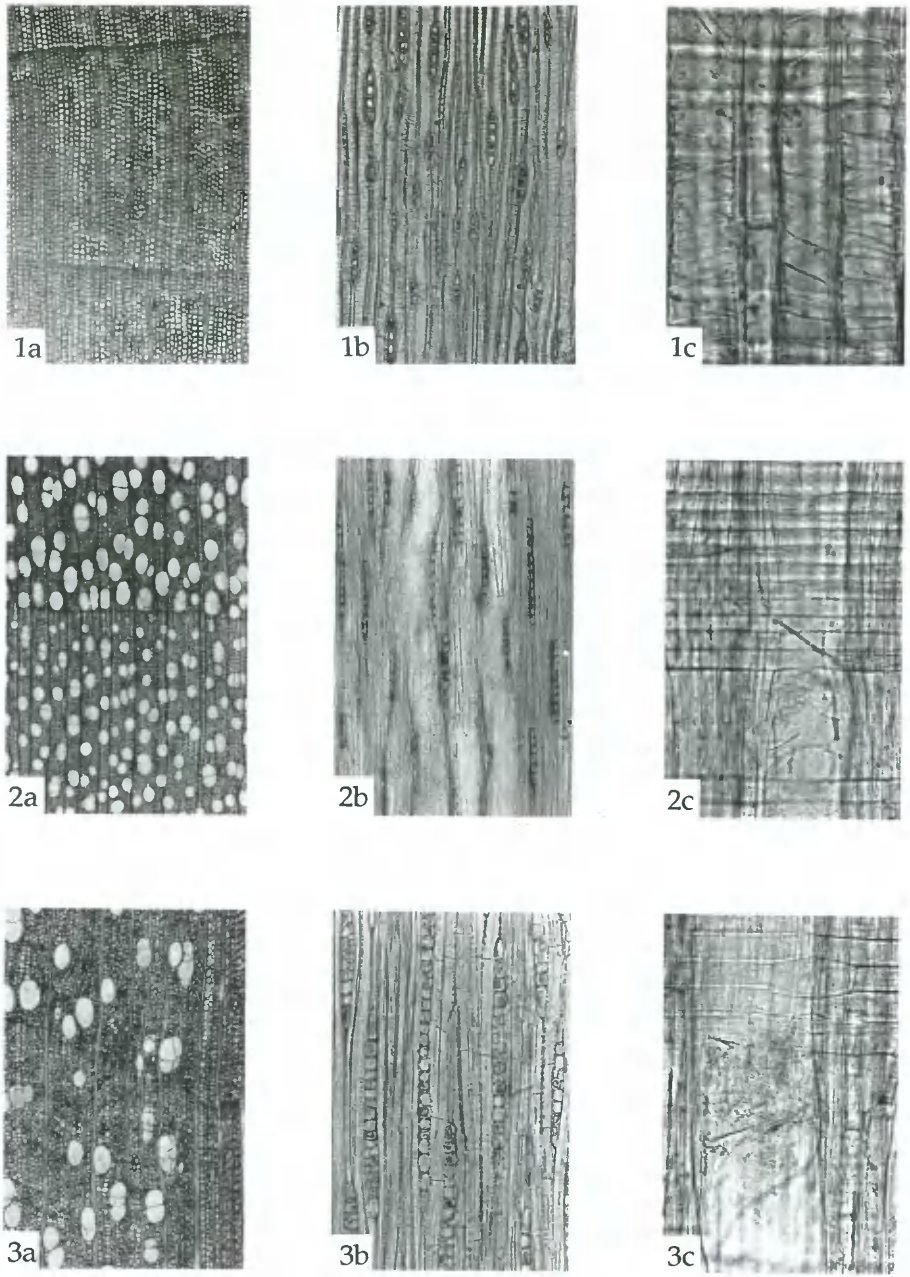
能城修一．1992．岡山大学津島地区から出土した木材化石の樹種．岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編「津島岡大遺跡 3 － 3 次調査－」，169－187．

能城修一．1993．岡山大学鹿田地区から出土した木製品の樹種．岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編「鹿田遺跡 3 －第 5 次調査－」，119－146．

表 2　百間川原尾島遺跡出土の弥生時代前期橋脚列の柱の樹種

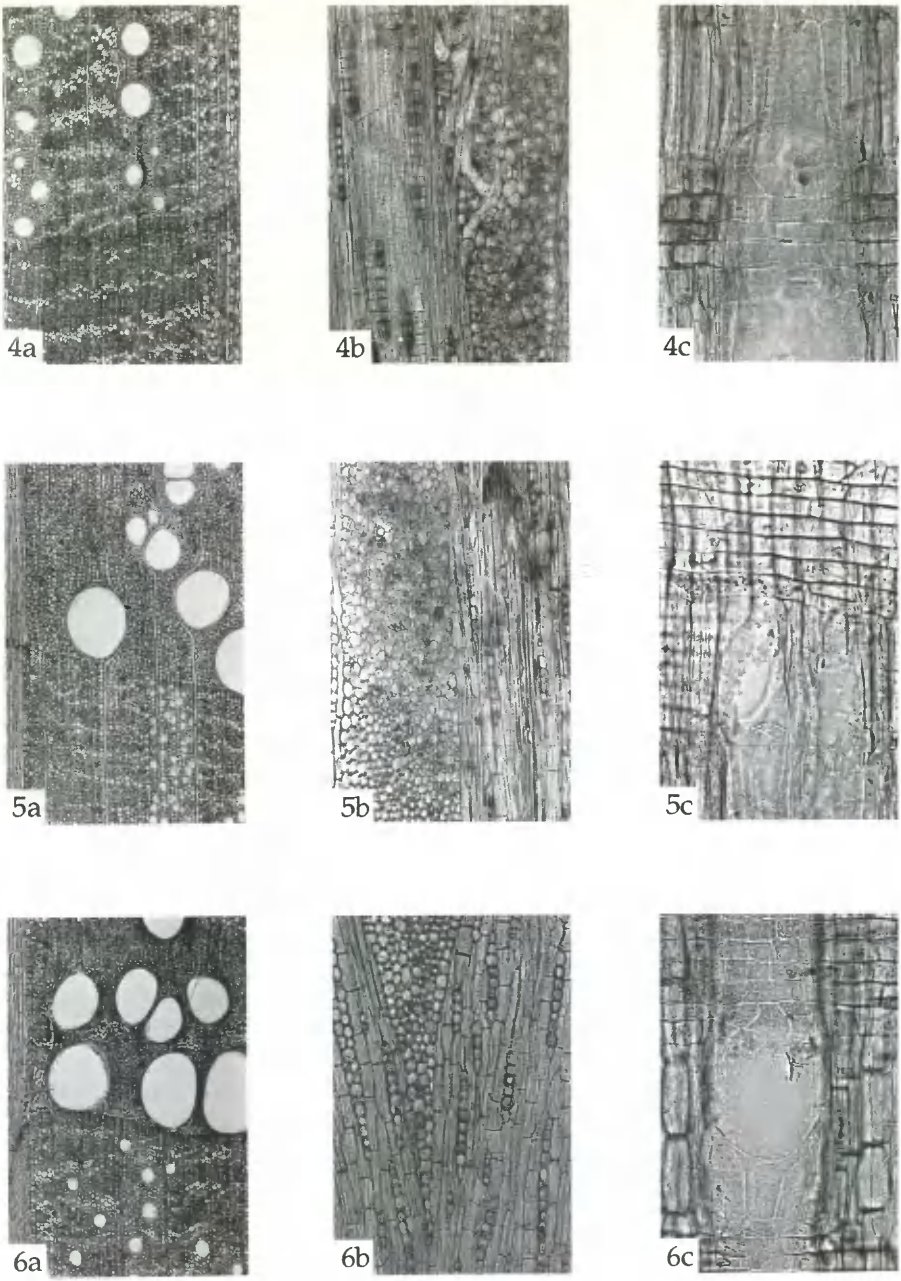
OKF-	No.	写真	樹種名	製品名	製品備考	地区	層準
OKF-	1		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N 1
OKF-	2*		イボタノキ属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N 3
OKF-	3		イヌガヤ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N 4
OKF-	4		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N 5
OKF-	5		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N 6
OKF-	6		イヌガヤ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N 7
OKF-	7*		イヌガヤ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N 8
OKF-	8		コナラ属クヌギ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N 9
OKF-	9		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N10
OKF-	10		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N10
OKF-	11		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N11
OKF-	12		イヌガヤ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N12
OKF-	13*		クマシデ属イヌシデ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N14
OKF-	14		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N14
OKF-	15		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N15
OKF-	16		イヌガヤ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N18
OKF-	17		イヌガヤ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N19
OKF-	18		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N20
OKF-	19		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N21
OKF-	20		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N22
OKF-	21*		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N23
OKF-	22		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N26
OKF-	23		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N28
OKF-	24		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N29
OKF-	25		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N30
OKF-	26		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N31

OKF-	No.	写真	樹種名	製品名	製品備考	地区	層準
OKF-	27		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N31
OKF-	28		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N32
OKF-	29*		コナラ属クヌギ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N33
OKF-	30		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N34
OKF-	31		コナラ属クヌギ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N35
OKF-	32		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N36
OKF-	33		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N37
OKF-	34		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N38
OKF-	35		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	N39
OKF-	36		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S39
OKF-	37		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S42
OKF-	38		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S 4
OKF-	39		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S 5
OKF-	40		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S 6
OKF-	41		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S 7
OKF-	42		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S 8
OKF-	43		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S 9
OKF-	44		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S10
OKF-	45		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S12
OKF	46		イヌガヤ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S12
OKF-	47		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S14
OKF-	48		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S15
OKF-	49		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S17
OKF-	50*		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S19
OKF	51*		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S20
OKF-	52*		シロダモ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S21
OKF-	53		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S22
OKF-	54		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S23
OKF-	55		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S24
OKF-	56		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S26
OKF-	57		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S27
OKF-	58		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S28
OKF-	59		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S29
OKF-	60		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S32
OKF-	61		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S33
OKF-	62		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S34
OKF-	63		コナラ属クヌギ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S35
OKF-	64		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S36
OKF-	65*		ヤナギ属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S37
OKF-	66		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S38
OKF-	67		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S40
OKF-	68*		サカキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S40
OKF-	69*		ヒサカキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S41
OKF-	70		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S41
OKF-	71		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S43
OKF-	72		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S44
OKF-	73*		ムクノキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S45
OKF-	74		ヤブツバキ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S47
OKF-	75		コナラ属アカガシ亜属	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	S50
OKF-	76		コナラ属コナラ節	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	43
OKF-	77*		ヤマグワ	柱	弥生前期橋脚列	35·36C·D	23



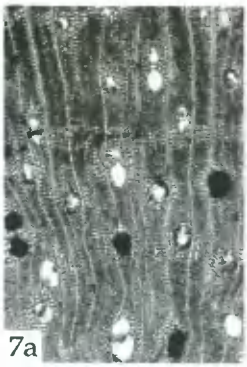
1a-1c：イヌガヤ（OKF-7），2a-2c：ヤナギ属（OKF-65），3a-3c：クマシデ属イヌシデ節（OKF-13）；a：横断面×40，b：接線断面×100，c：放射断面×400(1c)，×200(2c, 3c)。

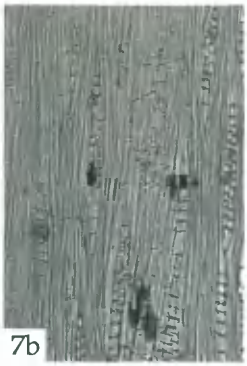
百間川原尾島遺跡の柱の顕微鏡写真（1）

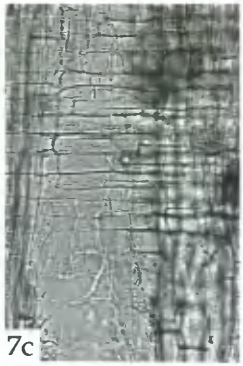


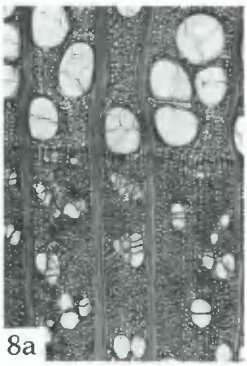
4a-4c：コナラ属アカガシ亜属（OKF-21）、5a-5c：コナラ属コナラ節（OKF-51）、6a-6c：コナラ属クヌギ節（OKF-29）；
a：横断面×40，b：接線断面×100，c：放射断面×200。

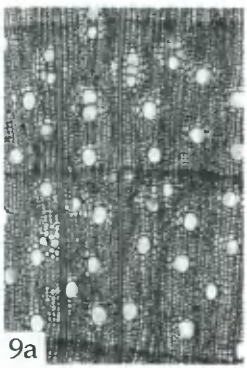
百間川原尾島遺跡の柱の顕微鏡写真（２）

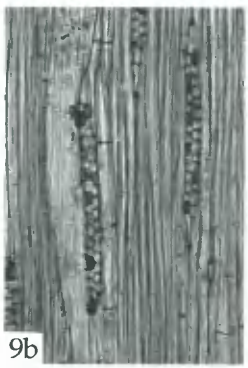






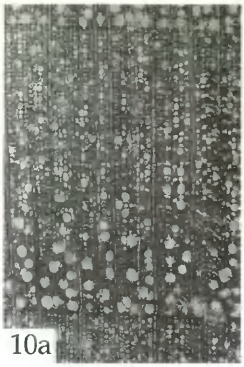






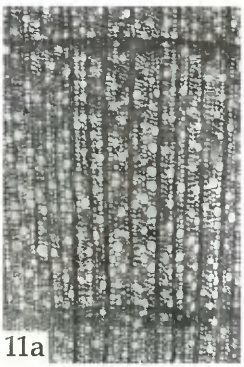
7a-7c：ムクノキ（OKF-73），8a-8c：ヤマグワ（OKF-77），9a-9c：シロダモ（OKF-52）；a：横断面×40，b：接線断面×100，c：放射断面×200。

百間川原尾島遺跡の柱の顕微鏡写真（3）


10a

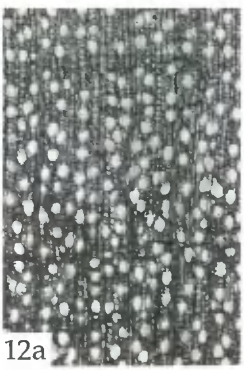
10b

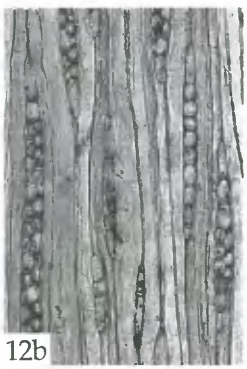
10c

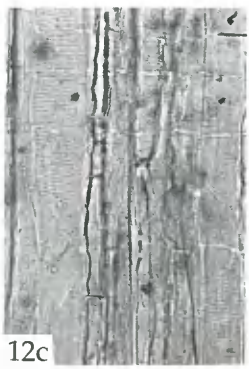

11a

11b

11c

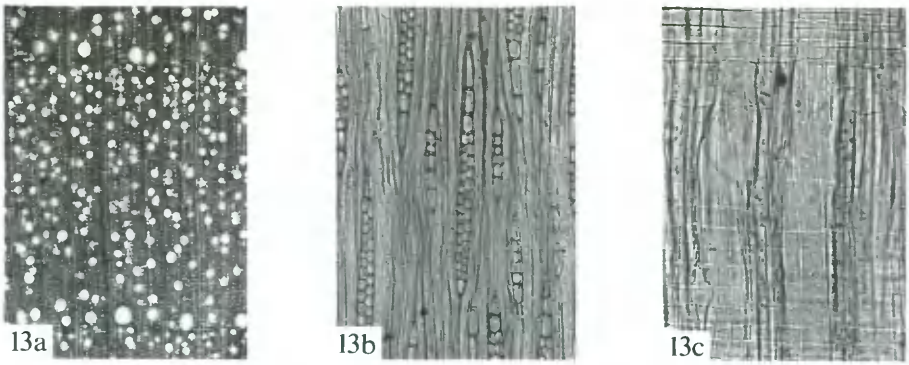

12a


12b


12c

10a-10c：ヤブツバキ（OKF-50），11a-11c：サカキ（OKF-68），12a-12c：ヒサカキ（OKF-69）；a：横断面×40，b：接線断面×100，c：放射断面×200。

百間川原尾島遺跡の柱の顕微鏡写真（４）



13a-13c：イボタノキ属（OKF-2）；a：横断面×40，b：接線断面×100，c：放射断面×200。

百間川原尾島遺跡の柱の顕微鏡写真（5）

付載２　百間川原尾島遺跡出土の棗玉、勾玉の産地分析

京都大学原子炉実験所
藁　科　哲　男

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。碧玉、ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋として用いる。

棗玉、勾玉の比重及び蛍光X線分析結果

今回分析した玉類は、岡山市原尾島の百間川原尾島遺跡の弥生時代後期の土器溜り１付近から出土した棗玉、古墳時代の12C区ピット689（旧遺構名）出土の勾玉である。これらの蛍光X線分析の結果を図１、２に示す。棗玉では珪素（Si）と微量の鉄（Fe）が観測されたにすぎないため純粋な石英鉱物で、比重が2.616であり、黄茶色の脂光沢を示すことから、瑪瑙製棗玉と考察された。瑪瑙の原石産地の場所および規模などが明確でなく、また、瑪瑙は不純物が少ないことが予想されるため、これら産地が元素組成で区別される可能が非常に低いと思われる。

勾玉ではマグネシュウム（Mg）、アルミニュウム（Al）、珪素、カリ（K）、カルシュウム（Ca）、チタニュウム（Ti）、鉄、ストロンチュウム（Sr）、バリュウム（Ba）の各元素が観測された。特にK、Sr、Baの含有量が相対的に大きく、これら主成分とする鉱物は硫酸塩鉱物が推測されるが、硫黄が検出限界以下であることから、また、勾玉の比重が2.544と軽く、この鉱物の可能性は低いと思われる。長石類のカリ長石、バリュウム長石（比重2.8）で構成され、含有されているSr元素はBa元素を置換して存在していると推測でき、勾玉の比重が軽いのは、純粋のバリュウム長石のみではなく、置換されたり、他の鉱物を含むためと推測される。勾玉の構成鉱物を明確にするには、勾玉を破壊し、薄片または微粉末を作り、顕微鏡とかX線回折計で鉱物組成を直接観測する必要がある。この勾玉の肉眼観察では、ヒスイに似る様に思われるため、ヒスイを意識して古代人が原材料を選択したのではないかと思われる。この勾玉を現在、調査されているヒスイ（硬玉、軟玉）の産地11ケ所、また碧玉の原産地10ケ所の原石と比較したが、何れの原石とも一致しなかった。

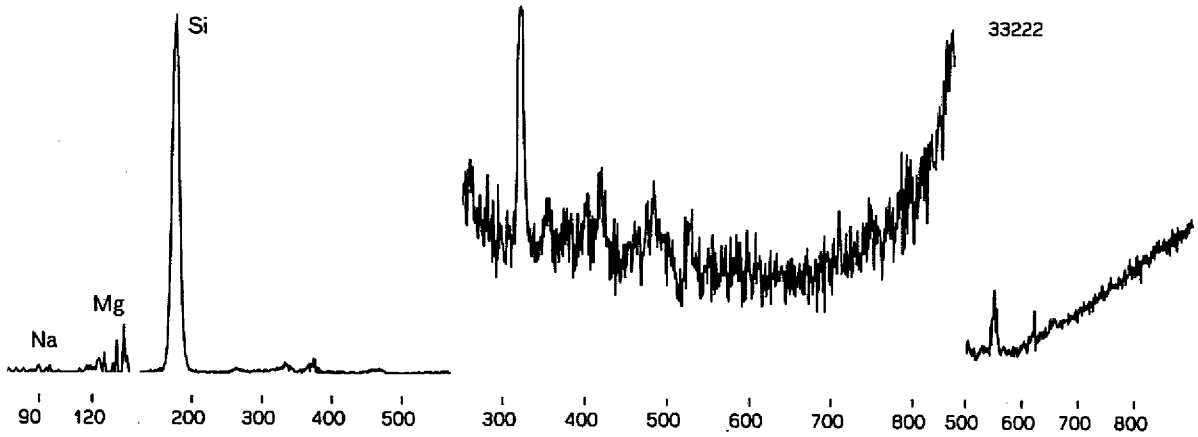


図１　棗玉の蛍光Ｘ線分析スペクトル

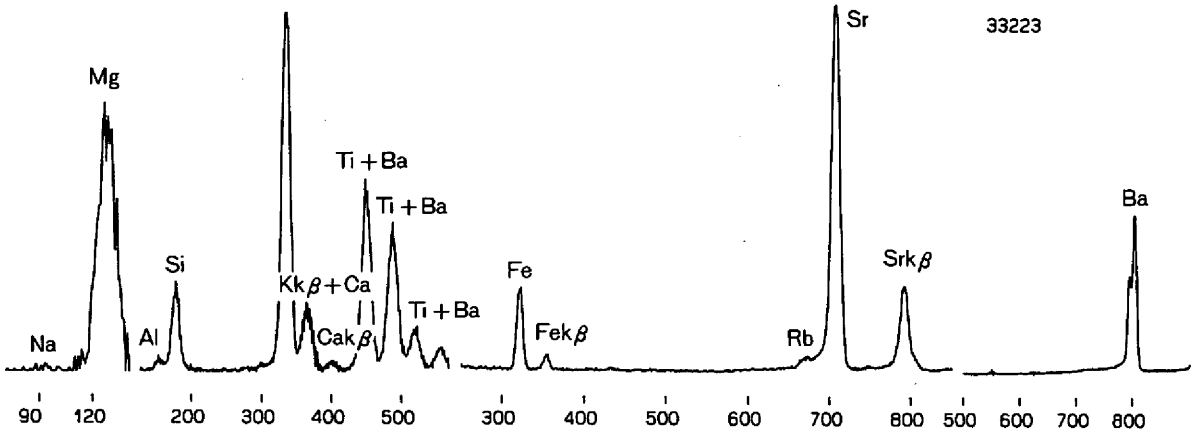


図２　勾玉の蛍光Ｘ線分析スペクトル

参考文献

1）茅原一也（1964)、長者ケ原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報)。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会，：63－73

2）藁科哲男・東村武信（1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要，６：１－18

3）藁科哲男・東村武信（1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』，14：95－109

4）Tetsuo Warashina (1992)、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science，19：357－373

5）藁科哲男・東村武信（1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学，16：59－89

6）番場猛夫（1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録，No.18：11－15

7）河野義礼（1939)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌，22：195－201

付載３　百間川原尾島遺跡出土の一中世人骨

京都大学名誉教授
池　田　次　郎

岡山県古代吉備文化財センターによる岡山市百間川原尾島遺跡の平成元年度の発掘調査で検出された中世の土壙墓（土壙墓１）から１体分の埋葬人骨が発見された。頭を北に向け、左を下にした横臥屈位で埋葬されていたが、人骨の残存状態は比較的良好であった。

保存状態

頭蓋骨：脳頭蓋は破損が著しいにもかかわらず、ほぼ完全に復元することができたが、顔面頭蓋は欠損部が多く、脳頭蓋に接続するのは右頬骨だけで、上顎骨は左右とも体の大部分と左前頭突起を欠くため顔面を復元することはできない。下顎骨は左右の下顎頭、左筋突起の先端、骨体底部の大部分を欠損する。４本の第３大臼歯を含め、すべての歯が上、下顎骨に釘植している。

胴骨：仙骨の破片以外にはほとんど残っていない。

上肢骨：右鎖骨は胸骨端を欠き、左鎖骨は骨体の約半分を残す。右肩甲骨の外側縁付近が残存するが、左肩甲骨は小破片である。右上腕骨は小頭の一部を破損するだけでほぼ完全であるが、左上腕骨は近位、遠位両骨端を欠く。右の橈骨は遠位端を、尺骨は両骨端を欠損し、左の橈骨は近位約半分、尺骨は近位の一部を残すだけである。手骨としては、左の小菱形骨のほか指骨の破片が残存する。

下肢骨：全体として右側の骨が比較的よく残っている。寛骨は左右とも腸骨、坐骨の一部の破片である。右大腿骨は大転子と遠位端を欠くだけであるが、左大腿骨は近位部の半分程度を残すだけで、しかも大・小転子を欠損する。膝蓋骨は右は膝蓋骨尖のみ破損、左は小破片である。右脛骨の遠位部約半分がよく残っているが、近位部は破損が著しく、右腓骨は近位端のみ欠損する。左の脛骨と腓骨はともに骨体破片を残すだけである。左右の足根骨全部と中足骨、指骨が残存するが、完形を保っているのは右の距骨、第２中足骨、第１基節骨だけで、それ以外はすべて破損している。

性、年齢の推定

寛骨の形状から男性骨と推定される。大臼歯の磨耗は軽度で、主要な頭蓋縫合に癒合が認められないので、壮年前半と推定される。

形態特徴（表１、２）

頭蓋最大長は、岡山古墳人、畿内現代人よりはるかに長く、津雲縄文人、鎌倉材木座、熊本尾窪の中世人の数値と一致する。最大幅は、縄文人よりはるかに、古墳人、現代人よりやや小さく、また材木座中世人よりやや大きいが、尾窪中世人と同程度である。したがって、長幅示数（75.5）は中型と長型の境に入り、縄文人、古墳人、現代人のいずれより著しく、尾窪中世人よりやや小さく、材木座、山口吉母浜の中世人の数値に近い。バジオン・ブレグマ高は縄文人、古墳人より大きく、現代人およびすべての中世人と大差ない。長高示数（75.0）は高型の下限にあり、現代人と縄文人の中間

で、古墳人よりやや大きく、材木座、尾窪中世人と一致する。高型に属す幅高示数（99.3）では、縄文人、古墳人よりはるかに大きく、材木座、尾窪中世人、および現代人の数値に近いが、吉母浜中世人よりやや小さい。それ以外の脳頭蓋計測値では、正中矢状頭頂弧長がきわめて長く、最小前頭幅、上顔幅など前頭骨前方の幅径が小さいのが特徴的である。

顔面頭蓋で計測できたのは鼻幅だけであるが、これは比較集団のいずれよりも大きい。歯槽側面角は耳眼窩面が設定できないので計測不能であるが、歯槽性突顎がきわめて強いことは確かである。

下顎骨は比較的頑丈で、下顎角幅は現代人、中世人より大きく、縄文人に匹敵し、下顎長、下顎枝幅は材木座中世人に近い。咬合型は鋏状で、ムシ歯はない。

上肢骨骨体の計測値、示数はほとんどすべて吉母浜中世人の平均値に近い。大腿骨骨体の中央周は、吉母浜中世人、縄文人とともに現代人より大きいが、矢状径が小さいため、横断示数（89.3）は著しく小さく、比較集団のなかでこれに最も近いのは西日本古墳人である。腓骨骨体の諸径も吉母浜中世人と大差なく、中央横断示数もそれと一致する。

以上、百間川原尾島遺跡土壙墓 1 出土の中世人男性骨は、長頭、突顎という中世人頭蓋の時代的特性を示しており、また四肢骨計測値においても吉母浜中世人の数値に近く、中世人の一般的形態を具えているといえよう。

表 1　頭蓋計測値

1.	頭蓋最大長	184	8/1	長幅示数		75.5
3.	グラベラ・ラムダ長	178	17/1	長高示数		75.0
7.	大後頭孔長	33	17/8	幅高示数		99.3
8.	頭蓋最大幅	139	20/1	長耳ブレグマ高示数		63.6
9.	最小前頭幅	87	20/8	幅耳ブレグマ高示数		84.2
10.	最大前頭幅	123	9/10	横前頭示数		70.7
16.	大後頭孔幅	30	9/8	横前頭頭頂示数		62.6
17.	バジオン・ブレグマ高	138	30/27	矢状頭頂示数		89.4
20.	耳ブレグマ高	117	31/28	矢状後頭示数		84.1
23.	水平周	532	31(1)/28(1)	矢状上鱗示数		98.3
24.	横弧長	(319)	43	上顔幅		101
27.	正中矢状頭頂弧長	141	54	鼻幅		(28)
28.	正中矢状後頭弧長	107	66	下顎角幅		105
28(1)	正中矢状上鱗弦長	60	68	下顎骨長		77
30.	正中矢状頭頂弦長	126	69(3)	下顎体厚	右	14
31.	正中矢状後頭弦長	90	71	下顎枝幅	右	37
31(1)	正中矢状上鱗弦長	59			左	37
			79	下顎枝角		127

表2　四肢骨計測値

上　肢　骨	右	左	下　肢　骨	右	左
鎖骨			大腿骨		
4．　中央垂直径	10	11	6．　中央矢状径	25	
5．　中央矢状径	12	11	7．　中央横径	28	
6．　中央周	37	38	8．　中央周	87	
4/5　中央横断示数	83.3	100.0	9'．　骨体上最大径	32	31
上腕骨			10'．　骨体上最小径	23	23
5．　中央最大径	21	21	15．　顎垂直径	31	30
6．　中央最小径	17	18	16．　顎矢状径	23	23
7．　最小周	63	63	17．　顎周	91	88
7 a　中央周	67	67	18．　頭垂直径	43	
9．　頭最大横径	42		19．　頭横径	49	
10．　頭最大矢状径	40		6/7　中央横断示数	89.3	
6/5　骨体横断示数	81.0	85.7	10'/9'骨体状部横断示数	71.9	74.2
橈骨			16/15 顎横断示数	25.3	26.1
3．　最小周	41		19/18 頭横断示数	102.3	
4．　骨体横径	14	14	脛骨		
4 a　中央横径	14		6．　最大下端幅	43	
5．　骨体矢状径	11	11	7．　下端矢状径	35	
5(a)　中央矢状径	12		腓骨		
5(5)　中央周	43		2．　中央最大径	14	
5/4　骨体横断示数	78.6	78.6	3．　中央最小径	10	
尺骨			4　中央周	43	
3．　最小周	35		4 a　最小周	37	
11．　前後径	13		3/2　中央横断示数	71.4	
12．　横径	14				
13．　上横径	18	19			
14．　上前後径	25	25			
11/12 骨体横断示数	92.9				
13/14 扁平示数	72.0	76.0			

付載 4　百間川原尾島遺跡出土の人骨について

岡山理科大学理学部
濱　田　　穣

百間川原尾島遺跡の溝98より出土した人骨は、下顎、椎骨、寛骨（右と左半）の4つであり、これからは、寛骨の形態や大臼歯の摩耗状況から、同一個体の30代の男性からのものであろうと思われる。以下、各骨について残存状況や特徴などを記す。

① 下顎

ほぼ全体が良好に残存しており、筋突起の先端などの骨の薄い部分まで残っている。欠損するのは左切歯歯槽部前面わずかの部分のみである。歯は永久歯がすべて萌出し、第三大臼歯にもいくらか磨耗が見られる。前歯部分が脱落しているが、すべて死後脱落である。右側歯列では、中切歯から第一小臼歯まで脱落している。第二小臼歯は歯根はのこるが、顎部で頬側三分の二が欠けている。左側歯列では、中切歯から犬歯まで脱落している。

表．　原尾島遺跡下顎骨計測値と関東人平均値からの偏差*

	原尾島	関東人からの偏差
下顎角幅［66］#	98.72㎜	0.283
頤高［69］	28.68	−2.200
下顎枝高［70］	57.14	−1.006
下顎枝幅［71］	31.22	−0.533
下顎枝示数［71/70］	54.64	0.271
下顎枝角［79］	123.8°	0.092

*：［原尾島計測値−関東人平均値］／関東人標準偏差

下表のようにいくつかの下顎計測項目について計測し、結果を関東人平均値（山口，1978）と比較した（[　] 内はマルティン計測項目ナンバー）。全体的には関東人平均値よりやや小さいが、下顎角幅、下顎枝示数などに関東人平均値をうわまわる項目がある。これらの項目は咀嚼力と関連すると考えられるが、頤隆起・頤結節が発達し頤下切痕が見られること、下顎角部内側面にある翼突筋粗面もよく発達していることは、この個体の咀嚼力が強力であったことを示唆する。下顎体厚は頤孔位置［69(3)］で12.46㎜、第二大臼歯位置［69ｂ］で16.30㎜である。

② 椎骨

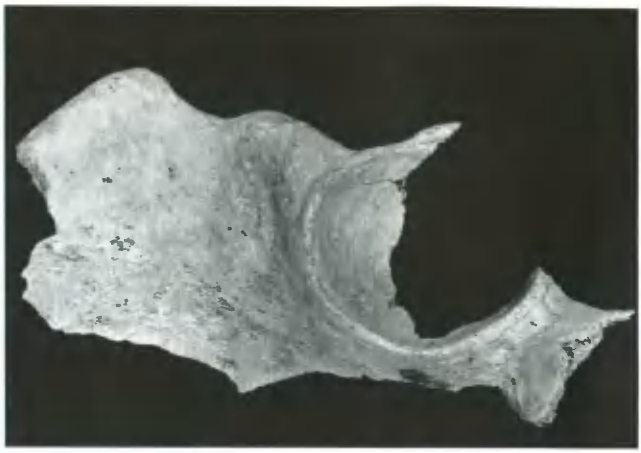
椎体の大きさと椎孔の形状より、第四腰椎と推定される。棘突起、下関節突起はよく残存するが、肋骨突起と上関節突起はその基部を残すのみで、その他椎骨頭方の小さな突起はすべて欠く。椎体はほぼ完全であるが、左側面で体の上縁と下縁で骨皮質を欠く。椎孔計測値は横径18.80㎜、矢状径9.54㎜である。

③ 寛骨：左半

腸骨部分は、部分的に欠けるところがあるが、外側面ではよく残存している。しかし、そこから下方の恥骨・坐骨部分は、ほとんど欠ける。腸骨前方では腸骨稜結節から前方は縁部を全て残し、上・下前腸骨稜から寛骨臼部までよく残存している。腸骨稜部の中央で円弧状に欠損があるが、そこから縁部は後方、上後腸骨稜すぐ上までを残す。上後腸骨稜から下後腸骨稜にかけての部分で内に向って約１㎝程度の幅で欠ける。そこから下後腸骨稜から下方はほぼ坐骨棘付近までを残し、性別判定に用いた大坐骨切痕も欠けなく観察できる。

腸骨内側面では、腸骨稜部分の欠損は稜の中ほど腸骨結節のすぐ後ろより欠け、そこから前下方に皮質部が欠損部し海綿状の骨質が見られる。腸骨の背側部での欠損は内側面ではほとんど広がらず、耳状面などはよく保存されている。

恥骨はまったく残存しない。坐骨は坐骨棘部分から斜め前方に坐骨枝の一部までの坐骨上側三分の一ほどを残す。寛骨臼は関節面部をほぼ全部残すが、恥骨部分から寛骨臼切痕部にかけて欠ける。



④ 寛骨：右半

外側面は前縁では、寛骨臼から腸骨稜結節付近までを残すが、腸骨稜より内側に五分の一程度の幅で欠け、さらに腸骨翼前方三分の一あたりで上下にほぼ綿状に欠ける。寛骨臼部分・坐骨・恥骨の残存状況は寛骨左半に似るが、坐骨後方は欠ける。内側面では、皮質の欠損が著しく、残存部の後方三分の二は海綿質や外側面骨皮質をのぞかせる。

参考文献

山口　敏，1978．日本人の骨。『人類学講座 6　日本人 II』（池田次郎編）、雄山閣、pp．143－174．

付載５　百間川原尾島遺跡出土ガラス玉およびガラス滓

株式会社ニコン・相模原製作所
苅　谷　道　郎

１．資料および実体顕微鏡観察結果

資料の色、重量、見掛け比重をその表面の組成分析値とともに表１に示す。比重はアルキメデス法で測定した。

実体顕微鏡観察によれば資料１は空色ガラス小玉であり、孔の軸方向に平行な泡の配列が観察される。また表面・孔内部に平滑な仕上げ加工の痕跡がある。資料２は淡緑色の円筒状ガラス玉で表面に筋状の凹凸がある。また偏心した位置に貫通孔があり、表面の筋状の凹部と孔の内面に白色粉末が付着している。資料３のガラス滓は灰色塊状で多孔質であり、圧着されたと推定される溝状（幅約６㎜）の痕跡がある。実体顕微鏡観察によれば内部に多量の泡と未溶融物を含有する暗緑色のガラス部分とガラス化が進んでいない焼結体部があり、表面に砂粒が多量に付着している。資料３は百間川今谷遺跡出土の「ガラス滓」あるいは鹿田遺跡出土の「ガラス滓」と同類の資料である。

２．分析結果と組成の推定

資料をエネルギー分散型Ｘ線分析装置（フィリップス　ＥＤＡＸPV9900）で分析した。分析は大森厚夫氏（株式会社ニコン技術工房・分析センター）に依頼した。分析結果を表１に示す。資料２のTiは本分析法ではBaLα線と重複し確認できないため螢光Ｘ線分析で確認した。

本分析法ではガラス表面の約１μｍまでの組成を半定量分析している。またガラスが地中埋蔵中に水に接触し表面の可溶成分が溶出し、表面組成は内部組成と異なっていることが予想される。そこで比重測定値と酸化物ガラスの水との反応をによる表面成分の変化を考慮し、資料１は$SiO_2-Al_2O_3-N_2O-K_2O$系ガラスであり、その内部組成の主成分はおおよそ$SiO_2$65％、N_2O12％、K_2O10％、MgO１％、CaO２％、$Al_2O_3$８％、FeO３％と推定される。

資料２は$SiO_2-PbO-BaO$系ガラスであり、その白色部は前記のガラス表面と水との反応をによる生成物である。ガラス部分析値は比重測定値から推定し、内部組成に近いと推定される。資料３のガラス滓のガラスは不均質であり、本分析法では表面の微小部分を分析しているため、組成として２点の分析値を示した。

３．着色原因の推定

表１に示す分析結果から着色原因は次のように推定される。

資料１の空色は主としてFeOによる着色である。Cuは発色に寄与していず、CuOとして存在する酸化条件下ではFeはFe_2O_3となり、本含有量では暗緑色となる。資料１は強還元条件下で溶融され、主としてFeOによって空色を呈すると推定される。

資料２の淡緑色は鉛ガラス中のCuOによる着色である。

資料３のガラス部の暗緑色はFe_2O_3による着色である。

表 1　百間川原尾島遺跡出土ガラス玉・ガラス滓の比重およびその表面の組成分析結果

資料	1（ガラス小玉）	2（ガラス玉）		3（ガラス滓）	
重量（g）	0.0659	0.982		3.696	
見掛け比重	2.29	3.30		1.25	
色	空色	淡緑色		灰色、ガラス部暗緑色	
組成（wt%）		ガラス部	白色部	部位a	部位b
SiO_2	73.0	38.2	74.1	61.3	57.2
Na_2O	0.8	3.2	0.8	6.1	5.4
K_2O	8.3	0.2	0.6	2.3	2.6
PbO	—	36.5	12.3	—	—
MgO	0.8	0.6	0.7	2.1	2.3
CaO	1.2	1.1	2.0	3.8	2.3
Al_2O_3	11.3	3.8	5.9	9.2	15.7
TiO_2	0.5	○	○	0.8	1.6
Fe_2O_3	2.8	0.6	0.9	12.7	11.7
BaO	—	11.5	2.5	—	—
CuO	0.8	1.1	0.3	—	—
S	0.2	—	—	—	—
Cl	0.3	3.2	0.4	1.0	0.8
MnO	—	—	—	0.8	0.5
出土地点	21C区溝25 弥生時代	33C・D区溝143 古墳時代		13・14C・D区溝16 弥生時代後期	

注）FeおよびCuの化学状態はそれぞれFe_2O_3およびCuOとして計算した。○印は1.0%以下

4．製造方法の推定

資料1は実体顕微鏡観察による泡の配列と加工痕から、ガラスを加熱し引伸し丸棒とし、冷却後切断し、中心に穿孔し、外形を荒削り研磨し、玉としたと推定される。

資料2の表面の筋状の凹凸は地中埋蔵中に水に接触し、ガラスの強い脈理部分が化学的耐久性の違いによって強調されたと推定される。したがってこの脈理から、離型材をつけた芯棒に溶融したガラスを巻きつけ、冷却後芯棒を抜き両端を切断し、玉としたと推定される。

5．ガラス滓に関する考察

資料3の主成分の組成を分析法は異なるが百間川今谷遺跡出土のガラス滓、鹿田遺跡出土のガラス滓[1]、および92年度分析の津寺遺跡中屋出土のガラス滓[2]、百間川原尾島遺跡9・10Z区出土ガラス滓[3]と比較し表2に示す。

資料3は92年度分析の百間川原尾島遺跡9・10Z区出土ガラス滓と同様の傾向を持ち、その他遺跡出土ガラス滓と比較しNa_2OおよびMgOが少なく、Fe_2O_3が多い。その他成分は中間値を示す。塊状の表面に圧着された溝状の痕跡があることも百間川今谷遺跡出土のガラス滓と類似している。

表2　ガラス滓の主成分の比較

資料	百間川原尾島遺跡 93年度分析	百間川原尾島遺跡 92年度分析	津寺遺跡中屋	鹿田遺跡	百間川今谷遺跡（岡山県埋文調報51）
SiO_2	59.2	50.6	55.0	60.7	62.6
Na_2O	5.7	2.5	8.9	9.4	11.5
K_2O	2.4	1.5	2.4	2.0	1.3
MgO	2.2	3.3	4.6	5.7	4.9
CaO	3.0	2.3	2.7	3.6	2.6
Al_2O_3	12.4	20.8	15.3	9.7	9.5
Fe_2O_3	12.2	14.7	9.6	5.1	4.2

注）単位　ｗｔ％、平均値を示す。

参考文献

1) 三浦定俊、苅谷道郎　岡山大学構内遺跡発掘報告第３冊　鹿田遺跡Ⅰ、ｐ463

2) 山陽自動車道建設に伴う発掘調査で出土した。報告書は未刊。

3) 苅谷道郎　「百間川原尾島遺跡９・10Ｚ区出土ガラス滓」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 1994年

付載6　百間川原尾島遺跡出土の種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

百間川は、1669（寛文9）年に岡山城下を旭川の洪水から守るために、岡山藩が構築した人工河川である。本河川は岡山市中島の付近で旭川より分岐して南東に流れ、同市原尾島付近で東方向に流れを変える。さらに同市米田付近で南に流れを変えて児島湾に注ぐ。

百間川流域や本河川底からは、縄文時代から中世の遺跡が多く分布し、百間川遺跡群として知られている。その中でも、百間川原尾島遺跡（岡山市原尾島所在）では、縄文時代晩期～中世にわたる遺構・遺物が検出され、自然堆積層（遺物包含層）や溝・井戸址埋積物から種実遺体が出土した。

今回の自然科学分析調査では、出土した種実遺体の種類を明らかにし、当時の植物利用について検討するために種実遺体同定を行うこととした。なお、本分析調査の試料は岡山県古代吉備文化財センターにより採取・選択された。

1．試料

試料は、弥生時代前期および後期の遺物包含層と古代および中世の溝や井戸址から出土した種実遺体9点（試料番号2・3・4・6・7・23・27・32・33）である。試料の一覧表を表1に示す。

2．同定方法

肉眼あるいは双眼実体顕微鏡下で種類を同定した。

3．結果

結果を表1に示す。以下に各種類の形態的特徴について記す。

- マツ属　*Pinus* sp.　マツ科

球果が得られた。側面観は卵形状の円錐状卵形。長さ3㎝、径約2㎝。種鱗は長楕円状の短形で、先端は肥厚する。外部に露出する部分の中央に「へそ」があるが突出しない。これらの形態からおそらく複維管束亜属（subgen. Diploxylon）であると考えられる。

- オニグルミ　*Juglans mandshurica Maxim.* subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura　クルミ科

核が検出された。褐灰色。大きさは2.5㎝程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。内部は子葉が入る2つの大きなくぼみがある。

- コナラ属コナラ亜属　*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sp.

核斗が検出された。大きさは径2㎝程度で半球状。核斗の鱗片は瓦状に並び互いに強く合着する。

- コナラ属　*Quercus* sp.　ブナ科

虫えいが検出された。黒褐色で大きさは2.5㎝程度。総包が異常に大型化し発達している。総包片は広線形で螺旋状に密につき、互いに圧着していない。虫の産卵などの影響により、組織が異常発達し

たものと思われる。

• モモ　*Prunus parsica* Batsch　バラ科

核（内果皮）が検出された。褐色。大きさは2㎝程度。核の形は楕円形でやや偏平である。下端には丸く大きな臍点がある。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られ、表面は不規則な線状のくぼみがあり全体としてあらいしわ状に見える。

• トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume.　トチノキ科

種子および果皮の破片が検出された。種子は黒褐色で、大きさは2.5㎝程度、種皮は薄く堅い。果皮は、褐色で大きさは3㎝程度。厚くて柔らかく弾力がある。

• ヒョウタン類　*Lagenaria siseraria* Standlay　ウリ科

種子が検出された。果実片は大きさ6㎝程度。色は褐色。肉厚で弾力がある。種子は淡褐色。長さ1㎝程度。長楕円形をしており、縦軸方向に深いしわが数本存在する。

4．考察

今回同定された種類のなかの多くは、人間にとって有用であり、古くから食料などに利用された植物である。

オニグルミは、生食が可能で貯蔵もきくことから古くから利用されていたとみられ、縄文時代以降の全国各地の遺跡から多数の検出例が知られている。コナラ属やトチノキ属についても長期保存が可能なために古くから食用とて利用されている。これらを食用にするためには何らかの方法での「あくぬき」が必要となるが、この技術については縄文時代中期以降に広く用いられるようになったといわれている（渡辺，1984）。モモは、栽培のために持ち込まれた植物といわれ、古くは縄文時代前期に検出例が知られているが（長崎県伊木力遺跡）、検出例・個体数が増加するは弥生時代以降である（粉

表　種子同定結果

試料番号	出土地区	出土遺構・層位	時　代	同　定　結　果
2	36D	旧河道2	弥生時代	トチノキ（種子；1）
				ヒョウタン類（果皮；2）
3	15C・D	旧河道1の灰黒色粘土層下	弥生時代前期	トチノキ（種子；5，果皮；6）
				コナラ亜属（殻斗；1）
4	15C・D	旧河道1の灰黒色粘土層下	弥生時代前期	オニグルミ（核；7）
				ヒョウタン類（果皮；12）
6	11D	井戸16	中世	コナラ属（虫えい；1）
7	19D	古代溝（旧）	古代	マツ属（球果；1）
				モモ（核；1）
				トチノキ（果皮；1）
23	13C	溝1（旧）	近世	ヒョウタン（種子；1）
27	15C・D	旧河道1の灰黒色粘土層	弥生時代前期	同定不能
32	18H	溝113	古墳時代後期	モモ（核；2）
33	11D	井戸2	弥生時代後期	モモ（核；1）

川，1988)。花の観賞用のほか果実を食用にし、また種子も食べられる（薬用)。ヒョウタン類は、栽培のために持ち込まれた植物であるといわれている。日本での検出例は縄文時代前期にまでさかのぼることができるが（千葉県富津市の貝塚、福井県の鳥浜貝塚)、多くの検出例が知られるようになるのは弥生時代以降である（粉川，1988)。ヒョウタン類には、果皮を容器として利用されるヒョウタンのほか、果肉を食用とする（干瓢）ユウガオがある。

このように今回同定された種実遺体も、これまで述べたような用途で利用されていたものと考えられる。

〈引用文献〉

渡辺　誠（1984）縄文時代の植物食．ｐ．247.,雄山閣

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．弥生文化の研究２　「生業」，ｐ112－115.,雄山閣.

1．マツ属　球果（試料番号３）
2．オニグルミ　核（試料番号４）
3．コナラ属コナラ亜属　殻斗（試料番号３）
4．コナラ属　虫えい（試料番号６）
5．モモ　核（試料番号７）
6．ヒョウタン類　種子（試料番号23）
7．トチノキ　果皮（試料番号３）
8．トチノキ　種子（試料番号３）
9．ヒョウタン類　果皮（試料番号４）

付載７　百間川原尾島遺跡出土の木器樹種同定、種子同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

○1985年度樹種同定分（抄）

１．試料

試料は39点で、原尾島遺跡より出土した木製品と自然木である。試料の用途や推定される時代などを試料表にまとめた（表１）。このうち、試料番号40～54の橋脚列の柱は、付載１と同じ遺構から出土したものである。

表１　試料表（抜粋）

試料番号	用　　途	地区	時代	試料番号	用　　途	地区	時代
1	石斧柄	原尾島	弥生前期	21	彫刻板材	原尾島	弥生前期
2	鍬	原尾島	弥生前期	22	鋤？	原尾島	弥生前期
3	鉢形容器	原尾島	弥生前期	23	杵	原尾島	古墳後期
4	？	原尾島	弥生前期	40	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
5	鉢形容器	原尾島	弥生前期	41	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
6	舟形容器	原尾島	弥生前期	42	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
7	広鍬	原尾島	弥生前期	43	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
8	木片	原尾島	弥生後期	44	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
9	又鍬	原尾島	弥生前期	45	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
10	鉢	原尾島	弥生前期	46	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
11	梯	原尾島	弥生前期	47	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
12	広鍬未製品	原尾島	弥生前期	48	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
13	鋤	原尾島	弥生前期	49	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
14	？未製品	原尾島	弥生前期	50	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
15	杵	原尾島	弥生前期	51	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
16	？刺突具	原尾島	弥生前期	52	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
17	鋤？鍬？	原尾島	弥生前期	53	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
18	匙形容器	原尾島	弥生前期	54	橋脚の柱	原尾島	弥生前期
19	板（鍬？）	原尾島	弥生前期	65	流木	原尾島	弥生前期
20	鍬？	原尾島	弥生前期				

２．方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版も作成した。

３．結果

同定結果を一覧表で示す（表２）。

表２　同定結果（抜粋）

試料番号	種　　名
1	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.　［コナラ属（アカガシ亜属）の一種］
2	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
3	環孔材
4	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp.　［コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種］
5	Zelkova serrata　（ケヤキ）
6	Prunus sp.　（サクラ属の一種）
7	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
8	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.　［コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種］
9	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
10	Z. serrata
11	cf. Actinodaphne SP.　（カゴノキ属類似種）
12	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
13	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
14	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
15	Camellia japonica　（ヤブツバキ）
16	Cepholotaxus harringtonia　（イヌガヤ）
17	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
18	Morus bombycis　（ヤマグワ）
19	Castanopsis sp.　（シイノキ属の一種）
20	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
21	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.
22	散孔材？
23	Ca. japonica
40	Ca. japonica
41	Ca. japonica
42	Ca. japonica
43	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp.
44	Actinodaphne sp.
45	Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp.
46	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.
47	Salix sp.　（ヤナギ属の一種）
48	Ca. japonica
49	M. bomhycis
50	Ca. japonica
51	Ca. japonica
52	Ca. japonica
53	Ca. japonica
54	Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp.
65	Salix sp.

4．考察

考察は、同時に同定した百間川沢田、百間川米田遺跡から出土した26点を含めて行う。同定した65点のうち自然木は1点のみで残る64点は加工材である。使用樹種はアカガシ亜属（カシ類）が最も多く、次いでヤブツバキ（10点）、コナラ節（コナラと考える）（6点）、クスノキ科（5点）などとなっている。この結果から、これらの材料を供給したであろう森林は暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）であったと考える。ただし、木製品およびその原木は、時にかなりの遠方からも搬入されることがあり、出土地周辺に照葉樹林が成立していたとは断言できない。

次に、主な用材をみてみよう。

● 柄

石斧と鋤の柄各1点があるが、ともにカシ類を用いている。

● 鍬・鋤

未製品、不確定のものを含め8点があるが、7点がカシ類であり、カシ材を選択しているといえる。鍬・鋤は上記の柄とともに強度の要求されるものであるが、比較的大径木が入手しやすく、強度的に優れるカシ類の特長をいかした用材選択といえる。カシ類製の鋤や鍬の出土例は西南日本に多く見られるが（松田　1984）、東京でも知られている。その出土地は、現在の極相林が照葉樹林であると考えられる地域（照葉樹林帯）内にあり、当時の遺跡周辺には照葉樹林があった可能性は大きいと考える。このようにカシ類が入手できる状況下にありながら、あえて別種を用いているようにみえるNo.22（鋤？）は、その用途を再検討する必要があるかもしれない。

● 容器

鉢、鉢形など5点がある。使用樹種はケヤキ（2点）、ヤマグワ・サクラ属・種類不明（各1点）であった。

● 杵

2点があるが、ともにヤブツバキであった。使用されたと考えられる時代は、弥生時代前期と古墳時代後期と500年以上の差がありながら同一樹種が用いられている。

● 橋脚の柱・杭

縦・横木合せて26点があり、その内訳は弥生時代前期の橋脚の柱（15点）と同後期の杭（11点）である（表3）。使用樹種はヤブツバキが最も多く、コナラ・カシ類などがこれに次ぐ。杭の材は、他の加工材と比べると遠隔地からの搬入の可能性はかなり小さく、遺跡の周辺に成立していた照葉樹林から採取した材を用いているものと考えられる。

ヤブツバキの材は、割裂・加工は困難であるが耐朽性が高く、杭材として用いるには適した樹木である。ただ、前期に全体の半数を占めるほど使用されていたものが後期には全く使用されていない。後期にもカシ類・クスノキ・モッコク・ヒサカキなどの暖温帯性樹種が使用されていることから、周辺には引続き照葉樹林が成立していたものと

表3　弥生時代の柱と杭の用材

種　　名＊	前　期	後　期	合　計
ニヨウマツ		1	1
ヤナギ属	1		1
カシ類	1	3	4
コナラ	2	3	5
クヌギ類	1	1	2
ヤマグワ	1		1
クスノキ		1	1
カゴノキ	1		1
ヤブツバキ	8		8
モッコク		1	1
ヒサカキ		1	1
合　　計	15	11	26

＊：亜属・節は省略し通称を用いたものもある。

考えられ、植生的にはヤブツバキが少なくなったとは思われない。使用場所が百間川原尾島遺跡旧河道２の橋脚（前期）と、百間川沢田遺跡水田の畔（後期）と異なるが、これがヤブツバキを用いない理由であろうか。あるいは、ヤブツバキは剪定には耐えないとされることから、切りすぎたものであろうか。針葉樹の使用例は、４種類（Taxa）６点しかなく、広葉樹では代用できないような特殊な用途に用いられたものかもしれない。

以上みてきたように、弥生～古墳時代を通して、遺跡周辺には照葉樹林が成立していたことは、ほぼ確実と考える*（奈良時代以降は試料数が少なく判断できない）。試料の多くは、その森林から採取されたものであろう（ただし、弥生時代後期以降、ヤブツバキの使用例がほとんどなくなる点には、疑問が残る）。そして、それぞれの樹種の材質・特性を熟知した上で、用材を選択していることがうかがえる。

＊：当遺跡の約70㎞東に位置する姫路市長越遺跡（弥生時代後期後半～古墳時代前期中葉と推定される）では、スギ・ヒノキ材の検出数が多く（嶋倉　1978）、花粉分析結果でもスギなど温帯性のものがかなり出現し、典型的な暖帯林の要素がやや少ないことから、現在よりやや冷涼な気候が推定され（中西・前田・松下　1978）、当遺跡での推定とはやや異なっている。この問題の解明には、今後のデータの蓄積が必要である。

５．引用文献

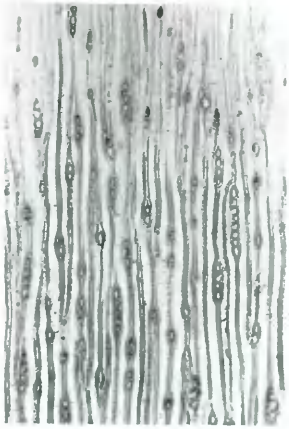
松田　隆嗣（1984）　山賀（その３）遺跡より出土した木製遺物の樹種について，「山賀（その３）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター，pp.429－436.

中西　哲・前田　保夫・松下　まり子（1978）　総合的考察による古環境の復元．兵庫県文化財調査報告書第12冊「姫路バイパス建設工事に伴う播磨・長越遺跡－昭和49・50年度調査報告書－（本文編）」，兵庫県教育委員会，pp.378－382.

嶋倉　巳三郎（1978）　長越遺跡から出土した木質物の樹種の説明，兵庫県文化財調査報告書　第12冊「姫路バイパス建設工事に伴う播磨・長越遺跡－昭和49・50年度調査報告書－（本文編）」，兵庫県教育委員会，pp.357－371.

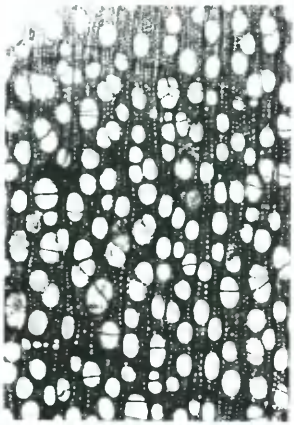
木口　×36

柾目　×90



板目　×90

Cephalotaxus harringtonia No.16

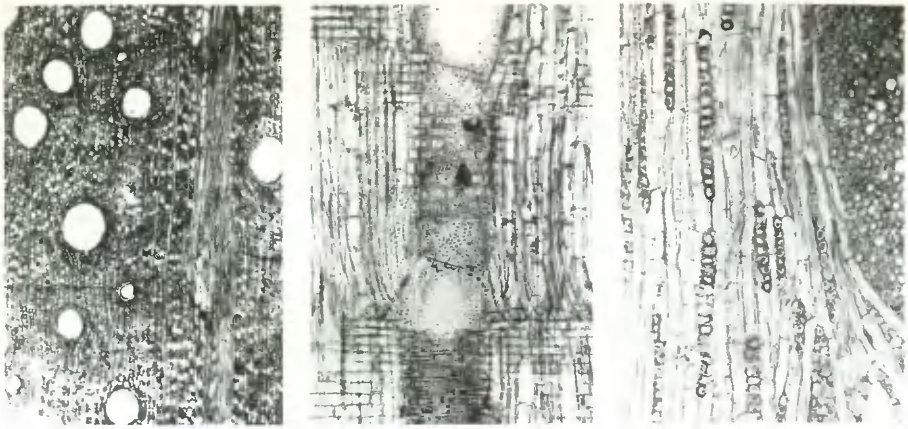


木口　×36

柾目　×90

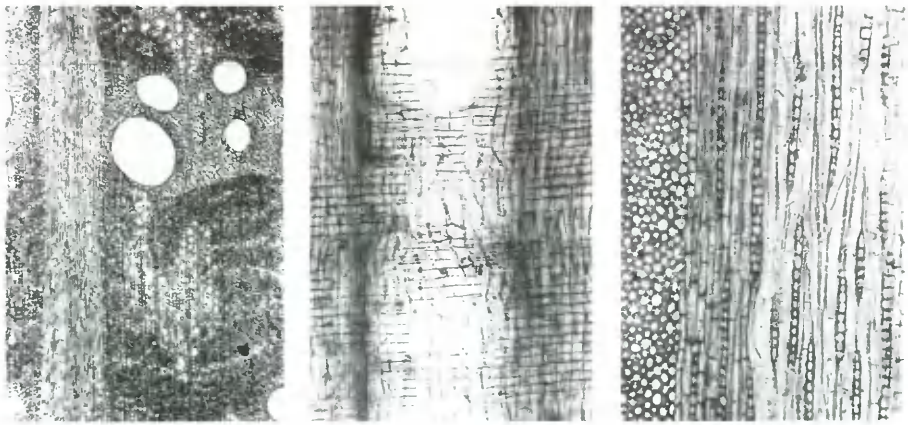
板目　×90

Salix sp. No.65



木口　×36　　柾目　×90　　板目　×90

Quercus (subgen. Cyclobalanopsis) sp. No.17

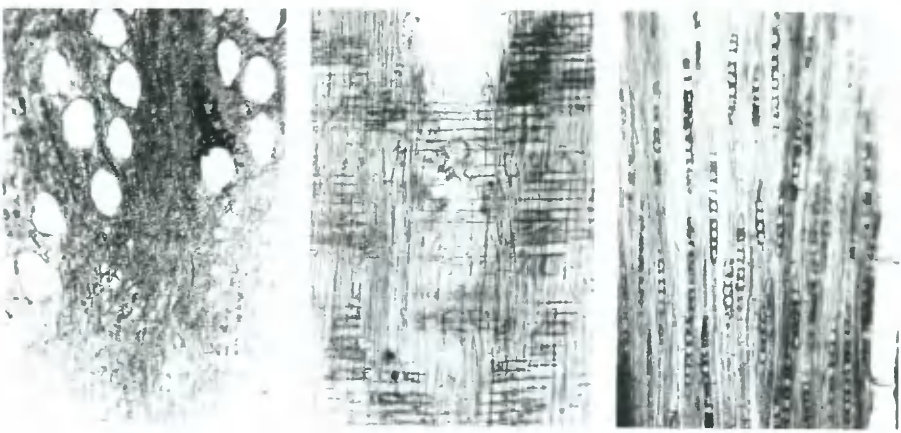


木口　×36　　柾目　×90　　板目　×90

Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp. No.43

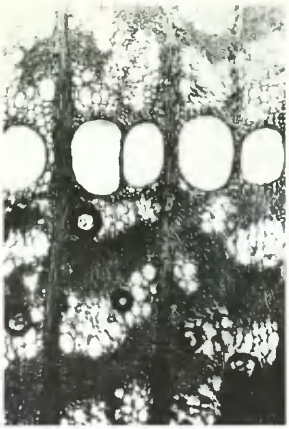
木口 ×36　　柾目 ×90　　板目 ×90

Quercus (subgen. Lepidobanus sect. Cerris) sp. No.21



木口 ×36　　柾目 ×90　　板目 ×90

Castanopsis sp. No.19

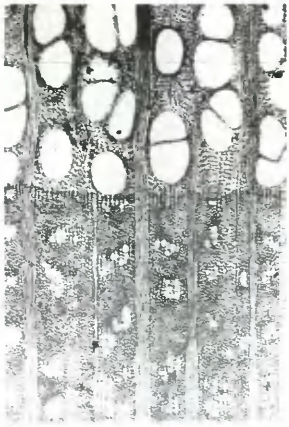


木口　×36

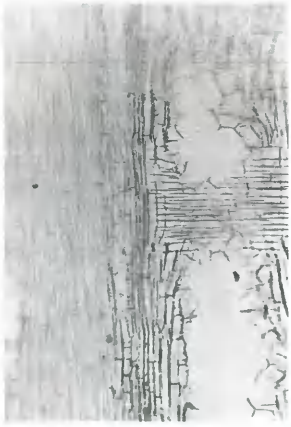
柾目　×90

板目　×90

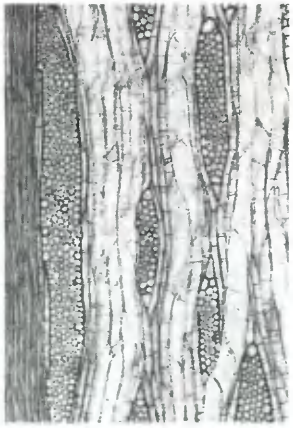
Zelkova serrata No.5



木口　×36

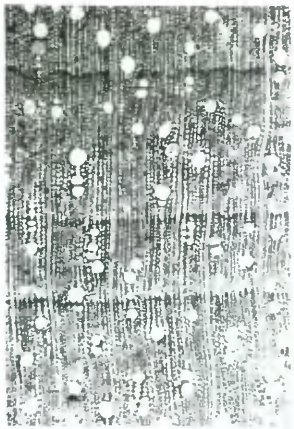


柾目　×90

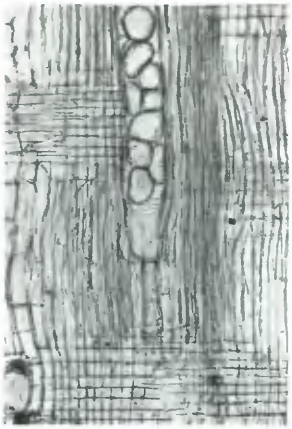


板目　×90

Morus bombycis No.49



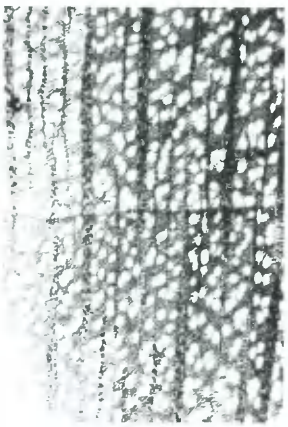
木口　×36



柾目　×90

板目　×90

Actinodaphne sp. No.44

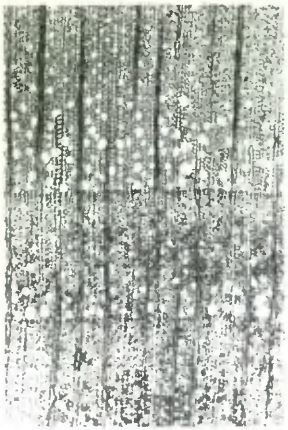


木口　×36

柾目　×90

板目　×90

Prunus sp. No.6



木口　×36

柾目　×90

板目　×90

Camellia japonica No.48

○1986年度種子同定分（抄）

1．試料

試料は、原尾島遺跡から検出された14点である。各試料は、弥生時代前期から古墳時代後期のものとされている（表1）。

表1　百間川遺跡出土種子試料表

試料番号	遺　跡	地　区	遺　構	時　代
11	原尾島	34C	No. 17－A（溝）〈旧〉	古墳時代後期
12	〃	35C	No. 17－B（溝）〈旧〉	〃
13	〃	34C	No. 17－B Pit C〈旧〉	〃
14	〃	34・35C	溝147	〃
19	〃	34C	No. 33（溝）〈旧〉	弥生時代後期
21	〃	36D	旧河道2	弥生時代前期
22	〃	36C・D	旧河道2	〃
27	〃	36D	旧河道2	〃

2．方法及び結果

試料を肉眼及び双眼実体鏡で観察し同定した。同時に写真図版も作成した。同定結果を一覧表で示す（表2）。

表2　百間川遺跡出土種子同定結果

試料番号	種　名	部位
11	*T. Kirilowii* var. *japonica*	種子
12	*T. Kirilowii* var. *japonica*	〃
13	*P. salicina*　（スモモ）	〃
14	*Cornus controversa*　（ミズキ）	〃
19	*T. Kirilowii* var. *japonica*	種子
21	*Styrax* sp.　（エゴノキ属の一種）	〃
22	*A. turbinata*	果皮
27	*L. siceraria*	種子

1：Prunus salicina No.13　2：Styrax sp.　No.21　3：Cornus controversa No.14

4：A. turbanata No.22　5：L. siceraria No.27

スケール：1，2は5mm．3は2mm．4は10mm．5は50mm．

付載８　百間川原尾島遺跡から出土した鉄剣形銅剣についての自然科学的研究

東京国立文化財研究所保存科学部
平　尾　良　光
鈴　木　浩　子
榎　本　淳　子

１　はじめに

岡山県古代吉備文化財センターの依頼により、岡山市百間川原尾島遺跡から出土した鉄剣形の銅剣について、蛍光Ｘ線分析法による化学組成と鉛同位体比法による材料の産地推定を行なった。

２　分析法

１）蛍光Ｘ線分析法

蛍光Ｘ線分析はフィリップス社製の波長分散形蛍光Ｘ線分析装置で行った。機器の使用条件はスカンジウム管球を用い、60kV、50mAで一次Ｘ線を発光させて、試料に照射した。試料から発生する二次Ｘ線は元素ごとに波長が異なるため、フッ化リチウムの結晶でＸ線を角度ごとに分散させ、分散角度におけるＸ線強度を測定した。

２）鉛同位体比法

産地推定のために鉛同位体比法を利用した*[1]。鉛同位体比はＶＧ社製全自動表面電離型質量分析計Sector-Jで測定した。資料の錆の一部を採取し、溶解し、含まれている鉛を電気分解法で精製分離した。この鉛の一定量を質量分析計に装着し、鉛の同位体比を測定した。値はNBS-SRM-981で規格化した*[2]。

３　資　料

この資料に関する古代吉備文化財センターからの情報によれば、百間川原尾島遺跡の丸田調査区10～13Ｃ・Ｄ区竪穴住居９から出土しており、推定された時代は古墳時代初頭とのことである。形式・出土状況などの考古学的な知見はここでは省略する。

４　蛍光Ｘ線分析の測定と結果

１）蛍光Ｘ線分析の測定

試料は古代吉備文化財センターから少量がポリエチレン袋で送られてきた。錆の採取箇所は不明である。この試料の一部に関して蛍光Ｘ線法で化学組成を測定した。

２）測定値

得られた蛍光Ｘ線スペクトル図を図１ａと図１ｂで示した。これらは全体像の（ａ）図と、縦軸を10倍に拡大した（ｂ）図で表されている。これらのスペクトル強度を表１としてまとめた。

図２のスペクトルから判断すると、鉄剣形銅剣の主成分は銅、スズ、鉛であり、少量の鉄と微量の

表１　百間川原尾島遺跡から出土した鉄剣形銅剣が示す蛍光Ｘ線スペクトルの強度比*1

角　度*2	アンチモン (13.5)	スズ (14.0)	銀 (16.0)	鉛 (28.3)	ヒ素 (34.0)	亜鉛 (41.8)	銅 (45.0)	ニッケル (48.7)	鉄 (57.5)	銅強度 (cpm)*3
鉄剣形銅剣 (ＦＬ250)	1.0	30	1.6	28	＋	－	100	－	14	2300

＊１）数値は角度45.0度におけるＸ線強度を100としたときの各元素の強度比

＊２）２θで表された各元素の励起Ｘ線の位置

＊３）１分間に測定されたＸ線の強さ

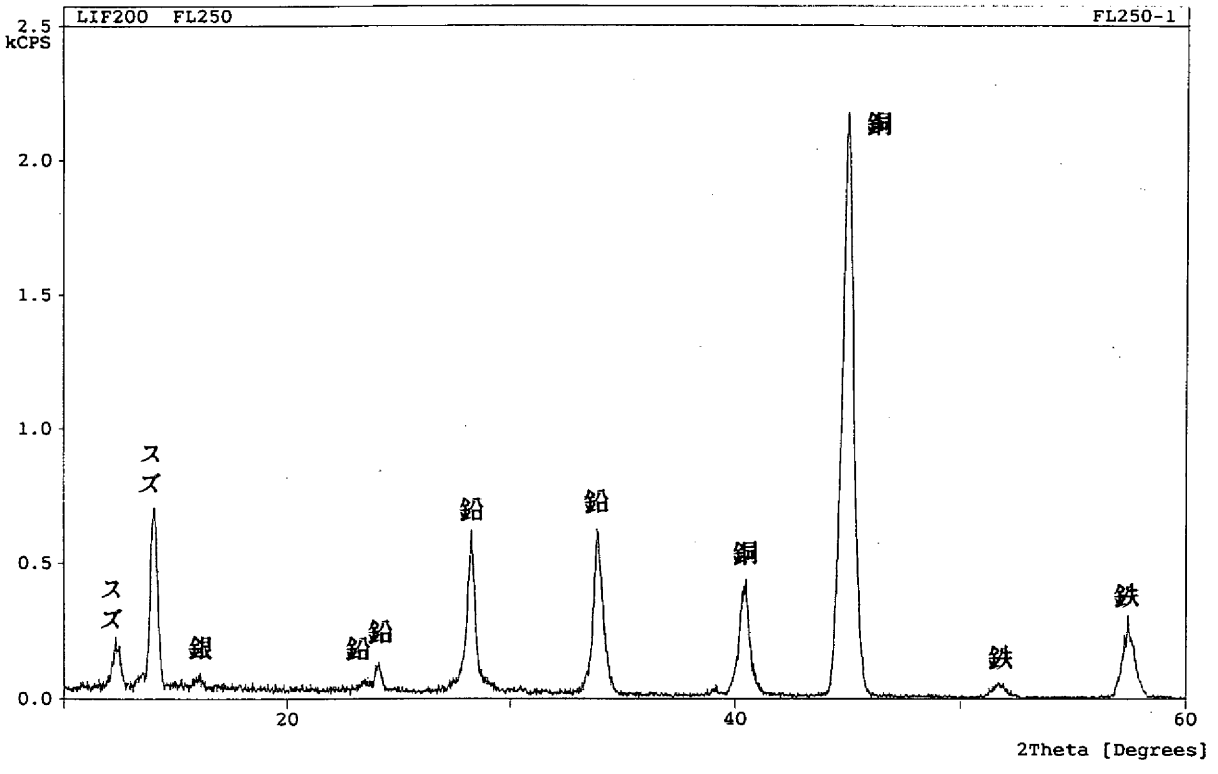


図１ａ　鉄剣形銅剣の蛍光Ｘ線スペクトル図

アンチモン、銀が含まれていた。これらの微量成分が含まれるということは、古代青銅の成分としてよく見られることであり、典型的な古代の鉛入り青銅と理解できる。表面の錆を測定しているゆえに、鉛、スズが見かけ上多く見えるが、これも土中埋蔵環境において銅が流失したと推定され、一般的な傾向である。この組成からだけでは、弥生・古墳などの時代判定はできない。

5　鉛同位体比の測定と考察

１）鉛同位体比の測定

試料は蛍光Ｘ線分析で用いた微少量の錆を使用した。この試料に関して、鉛同位体比を測定した。試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解し、蒸留水で希釈した。この溶液を白金電極を用

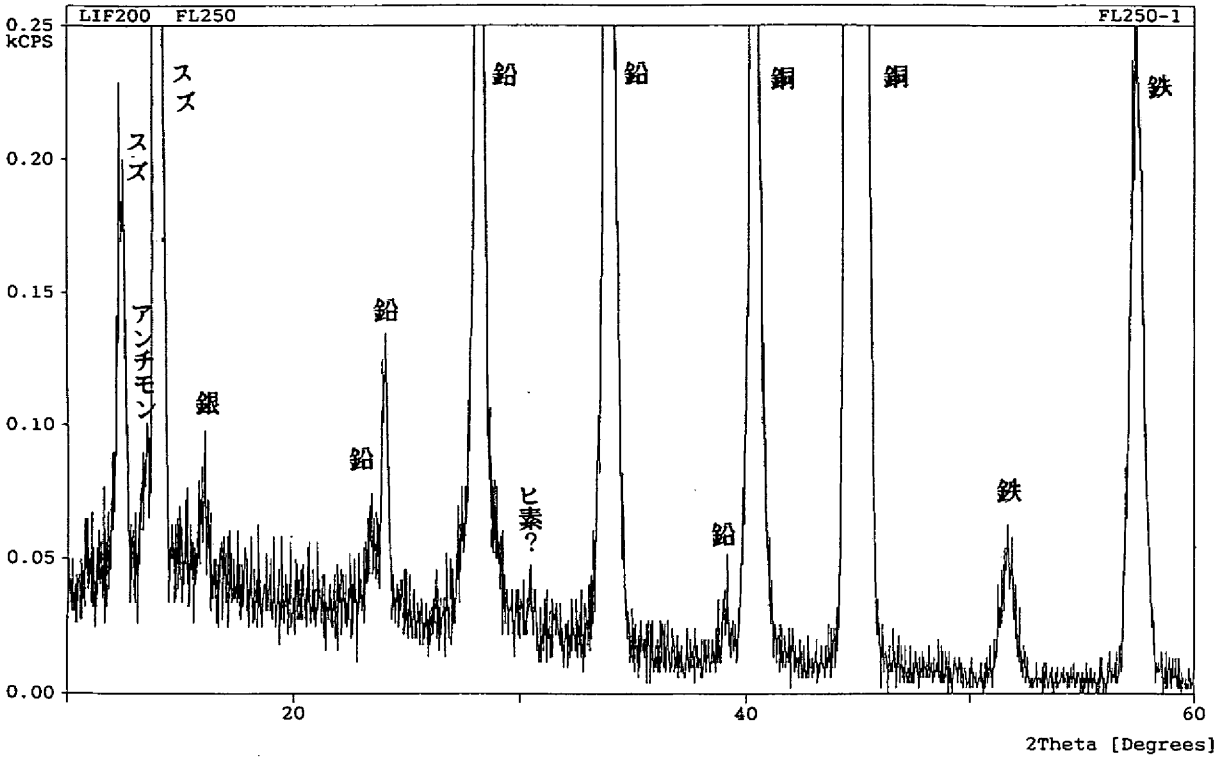


図１ｂ　鉄剣形銅剣の蛍光Ｘ線スペクトル図

いて２Ｖで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、希釈した。0.2μｇの鉛をリン酸－シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、ＶＧ社製の全自動表面電離型質量分析計Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

表２　百間川原尾島遺跡から出土した鉄剣形銅剣の鉛同位体比

	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
鉄剣形銅剣 (HS056)	17.733	15.543	38.398	0.8765	2.1654
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

２）鉛同位体比測定値

測定された鉛同位体比を表２で示した。鉛同位体比による産地推定の原理および応用については省略する。得られた値を今までに測定された値と比較してみると、図２と３のようになった[*3)*4)*5)*6)*7)]。

図2は縦軸が^{208}Pb／^{206}Pbの値、横軸が^{207}Pb／^{206}Pbの値である。この図をA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした。すなわち日本の弥生時代における東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域。Dは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布するラインとして示されることが判っている。またaは弥生時代の後期銅鐸が示した画一的な鉛を意味する領域である。

この図の中に、本測定値を「●」で示した。

この鉄剣形銅剣はa領域に含まれた。即ち華北産の鉛であり、しかも後期銅鐸にみられた画一的な鉛であると見ることができる。そこで、もう一つの鉛同位体比の図を調べた。これを図3で表わした。この図では縦軸が^{207}Pb／^{204}Pbの値、横軸が^{206}Pb／^{204}Pbの値である。この図をB式図と呼ぶこととする。図2の中で、A’ B’ C’ D’は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。ここでも鉄剣形銅剣の値は「●」の印で表され、A’領域に含まれた。結果として、この鉛同位体比の値からすると、用いられた鉛は中国華北産の材料である。

今までの鉛同位体比の研究から、古墳時代の青銅製品は測定値がB領域に出ることが多い。しかし、この鉄剣形銅剣はその時代が古墳時代初頭と推定されているのに、a領域、つまり弥生時代後期銅鐸に見られる画一的な鉛を材料として使っていることが示された。ということは、この銅剣が弥生時代後期の資料であり、それが古墳時代にもたらされたと見てもいいし、弥生時代後期の材料が、古墳時代にもたらされたという可能性もある。銅剣の型式分類に関連して、弥生時代と古墳時代の過渡的な時代の資料である可能性を含んでいる。大切な例である。

引用文献

(1) 平尾良光：古代日本の青銅器；Material Analysis and Characterization Science　4，22－33（1991）

(2) 平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計VG-Sectorの規格化について；保存科学　28，17－24（1989）

(3) 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM　No.370，4－10（1982a）

(4) 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌　68，42－62（1982b）.

(5) 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）；MUSEUM　No.382，16－26（1983）

(6) 馬淵久夫，平尾良光：東アジア鉛鉱石の同位体比－青銅器との関連を中心に－；考古学雑誌　73，199－210（1987）

(7) 馬淵久夫，平尾良光：福岡県出土青銅器の鉛同位体比；考古学雑誌　75，385－404（1991）

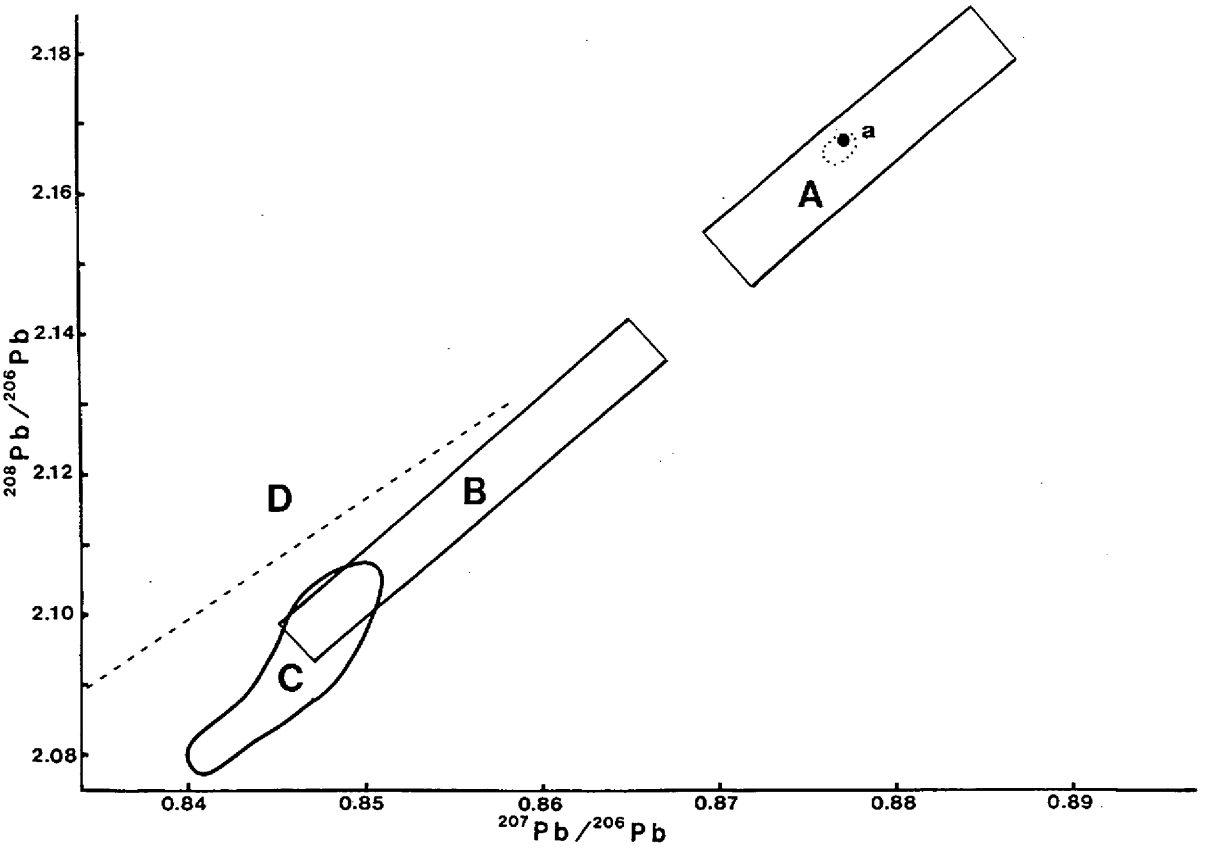


図２　鉄剣形銅剣が示す鉛同位体対比（Ａ式図）

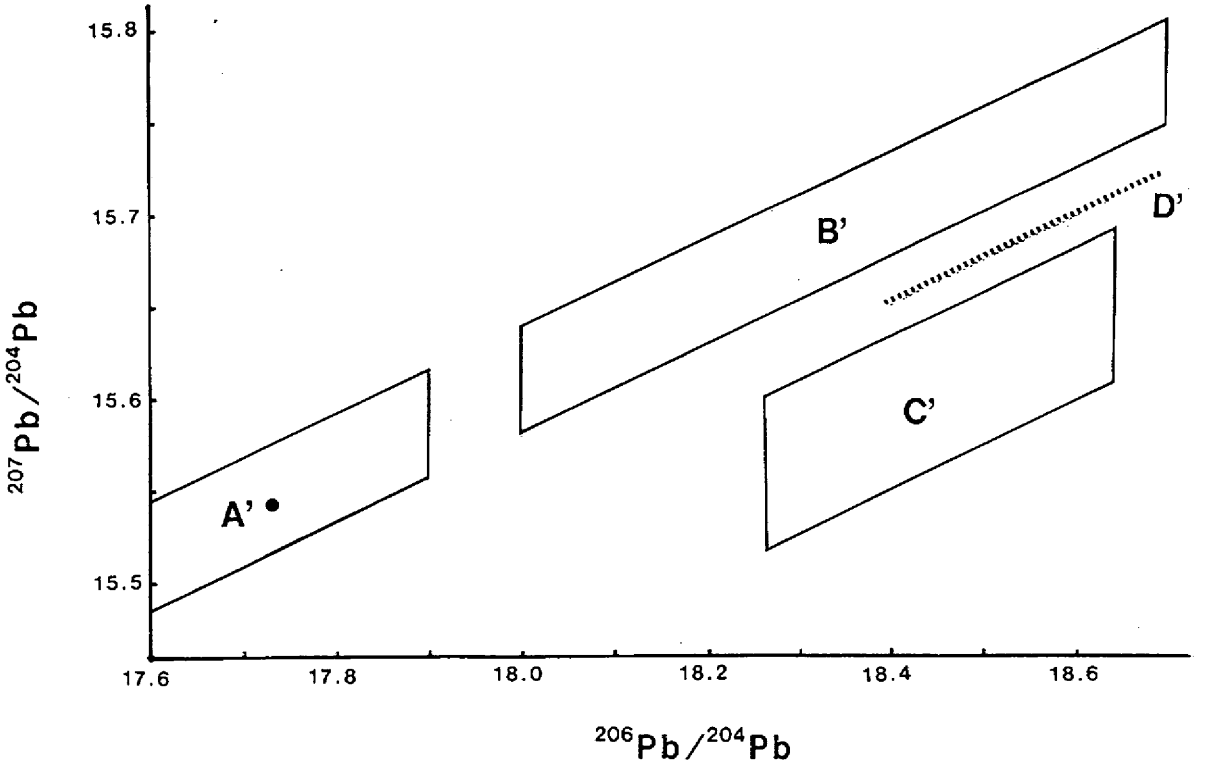


図３　鉄剣形銅剣が示す鉛同位体対比（Ｂ式図）

付載９　百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白石　純

１．はじめに

この分析では、原尾島遺跡（丸田調査区）出土の弥生時代後期前半から後半の土器を分析し、以下の点について検討した。

（１）遺跡内出土土器で、時期および器種が異なるもので、胎土の分析値に違いがみられるかどうか。また、1993年度に分析した原尾島遺跡の三股ヶ・丸田調査区[1]土器溜り・溝からの出土資料との比較をおこなった。

（２）現在までに、筆者が分析データを蓄積している備中南部の足守川流域の足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡[2]（古墳時代初頭）、矢部南向遺跡[3]（弥生時代後期後半）および周辺遺跡の総社市窪木薬師遺跡[4]（古墳時代初頭）との比較をおこなった。

２．分析方法および測定資料

分析は、波長分散型蛍光Ｘ線分析装置で測定し、測定方法・条件・資料などは、現在までにおこなっている方法である[5]。

測定した資料は、表１の弥生時代後期前半および後半の壺・甕・高杯・鉢・製塩土器、計51点の土器である。

３．分析結果

分析の結果、（１）の検討課題である同一遺跡内での時期ごとにより胎土の分析値に差がみられるかどうかでは、第１図K／Ca-Fe／Tiの散布図から、後期前半の壺（35，37，39，48）、甕（１～10）、高杯（23～26）、鉢（31～34）がほぼ一つにまとまる傾向を示した。一方後期後半の土器は前半の土器を包み込むように広く散漫な分布をした。このことから、前半の土器の胎土の方が特定の場所の土または、特定の土を意識的に選別している可能性が推測される。

また、器種別により差があるかどうかではほとんど差がみられなかった。ただ、高杯（21，22，28，29）の精製された粘土を使用しているものとそうでない高杯（23～27）とでは別々のグループをつくるようである。

次に、1993年度に分析した三股ヶ・丸田調査区の土器溜り・溝出土の弥生時代後期および古墳時代初頭の土器との比較をおこなった。

この結果、第１図K／Ca-Fe／Ti、第２図K／Ca-Sr／Rbの各散布図に見られるように、1993年度に分析した三股ヶ・丸田調査区の土器は弥生時代後期の前半および後半の土器ともほぼ重複し、明確な差はみられなかった。ただ、壺（36，38）・甕（51）・高杯（49）・製塩土器（41）は弥生時代後期と古墳時代初頭の甕（ボウフラ）の領域の間にプロットされ、別のグループをつくる可能性がある。また、甕（20）は1993年度の分析の古墳時代初頭の領域にプロットされた。この甕は、表面に赤色顔

料が塗られた特異な甕である。

甕（45，47，50）は讃岐系土器の領域と一部重なる。これらは従来言われている讃岐からの搬入土器と考えられる。また、この甕の胎土の肉眼観察ではいずれも胎土中に角閃石、雲母の鉱物を多く含んでいる。そして、47は肉眼観察で他の土器とあまり差異が見られないが、分析値からは他の讃岐系土器の中でも離れてプロットし、讃岐系の土器の中でも別グループをつくる可能性がある。

（２）の検討課題である備中南部の足守川周辺地域の遺跡との比較検討では、足守川矢部南向遺跡（弥生時代後期後半）、足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡（古墳時代初頭）、窪木薬師遺跡（古墳時代初頭）の各遺跡と比較した。この結果、第３図K／Ca-Fe／Ti、第４図K／Ca-Sr／Rbの各散布図から、原尾島遺跡の土器が、加茂Ａ・Ｂ遺跡の胎土に角閃石を含まないＡグループの土器群とほぼ重なる以外は、他の矢部南向、加茂Ａ・Ｂ（Ｂグループ）、窪木薬師の各遺跡と識別でき、大きく二つのグループに別れるようである。

４．まとめ

この分析でわかったことをまとめると、

（１）　原尾島遺跡出土土器で、器種により胎土の分析値に差があるかどうかでは、特に差がなかった。ただ、高杯のうち胎土に精製した粘土を使用しているものは、他の器種と少し異なる分布をした。なお、弥生時代後期の矢部南向遺跡の高杯を分析したときも、精製したものとそうでないものに、分析値に違いがみられた[6]。

また、以前分析した三股ヶ・丸田調査区出土土器との比較では、一部の土器をのぞいてほぼ重なった。ただ、一部の土器（20，36，38，41，49，51）は古墳時代初頭の甕（ボウフラ）の領域に近いところに分布する。これらの土器の胎土には、角閃石などの特徴ある砂粒が少々含まれている。（２）備中南部の足守川流域の遺跡との比較では、足守川Ａ・Ｂ遺跡の古墳時代初頭のＡグループと原尾島遺跡の弥生時代後期（前半、後半）の土器とが重なる以外は、矢部南向遺跡（弥生時代後期後半）および古墳時代初頭の加茂Ａ・Ｂ遺跡（Ｂグループ）、窪木薬師遺跡のグループと分布する領域が異なっている。

このように現段階では、分析した遺跡数（地域ごとの数も含めて）の制約もあるが、岡山県南部地方の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器に使用されている粘土は、大きく二つに別れる可能性がある。一つは備中南部の足守川流域の胎土に角閃石を含むグループ、もう一つは百間川原尾島遺跡を含む旭川流域のグループである（ただ、足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡の角閃石を含まないＡグループは原尾島の領域に入る例外をのぞけば）。そして、これらの土器の分析値の差が角閃石の有無による違いの可能性もあるが、今後さらなる資料の蓄積をおこなう必要がある。また、これらの問題点の解決策の一方法として、分析資料となる壺・甕・鉢など、器形的に地域差がある程度わかる器種に限定し、分析対象地域も広範囲の地域・水系ごとのデータを比較する必要がある。

讃岐系土器に関しても今回の分析で３点ほど、前回（1993年度分析）の分析値と同じものが見られたが、47の甕が一点離れて分布した。今後の検討を必要とするが、讃岐地方の出土土器も地域により、胎土の分析値に差があることが推測され、讃岐平野の土器を分析することにより、どの地域からの搬入品であるかが今後の分析で可能かもしれない。

この胎土分析をおこなうにあたり、亀田修一先生には終始御指導頂いた。また、資料収集では、岡

山県古代吉備文化財センターの職員の方々にお世話になりました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

註

(1) 白石　純「百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88　百間川原尾島遺跡３』岡山県教育委員会　1994．３．

(2) 白石　純「足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡、矢部南向遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会　1995．３．

(3) 註(2)文献．

(4) 白石　純「窪木薬師遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86　窪木薬師遺跡』岡山県教育委員会　1993．３．

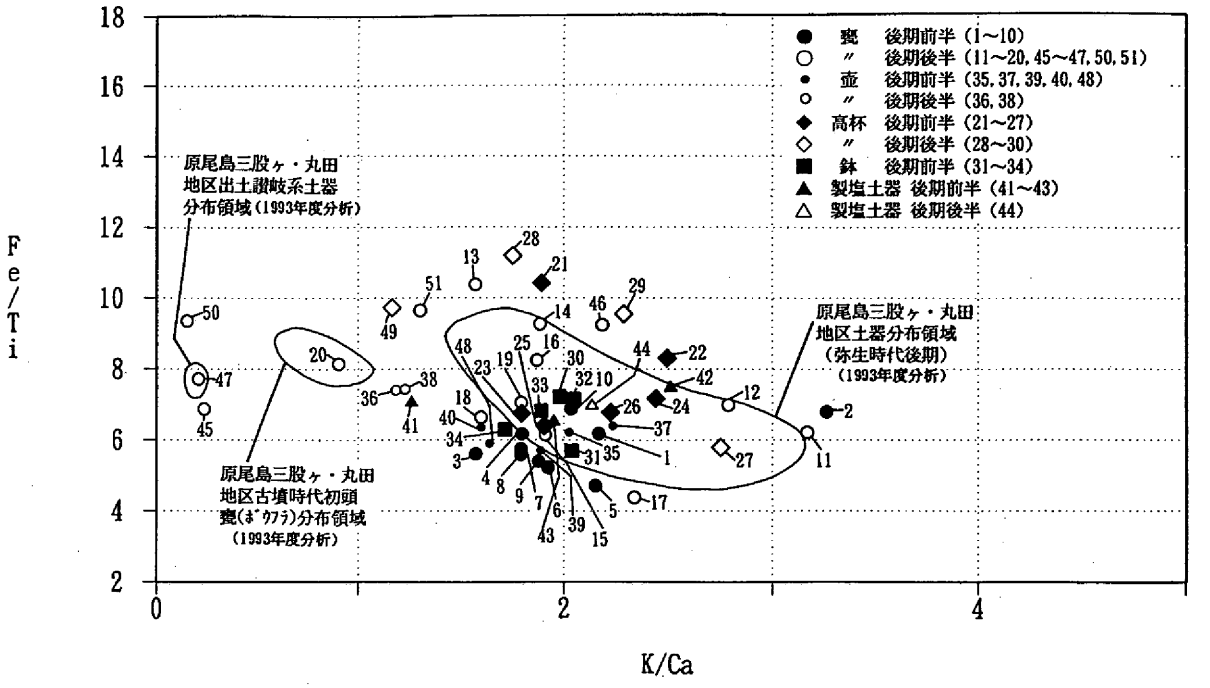
(5) 白石　純「蛍光Ｘ線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅱ）」『蒜山研究所研究報告』第12号　岡山理科大学　1986．

(6) 註(2)文献．

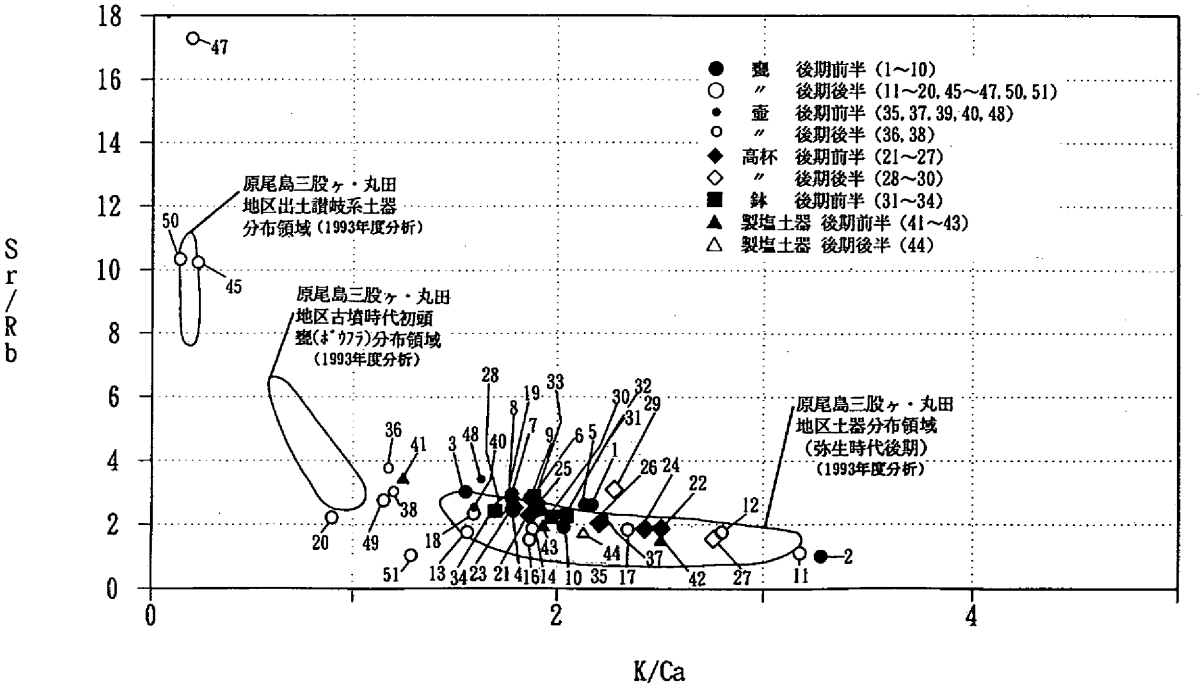
表1　百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析一覧表

資料番号	器種（部位）	出土地区	出土遺構・層　位	時代・時期	備　考
1	甕(口縁部)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期前半	
2	〃	〃	〃	〃	
3	〃	〃	〃	〃	
4	〃	〃	〃	〃	
5	〃	〃	〃	〃	
6	〃	〃	〃	〃	
7	〃	〃	〃	〃	
8	〃	〃	〃	〃	
9	〃	〃	〃	〃	
10	〃	〃	〃	〃	
11	甕(口縁部)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期後半	
12	〃	〃	〃	〃	
13	〃	〃	〃	〃	
14	〃	〃	〃	〃	
15	〃	〃	〃	〃	
16	〃	〃	〃	〃	
17	〃	〃	〃	〃	
18	〃	〃	〃	〃	
19	〃	〃	〃	〃	
20	〃	〃	〃	〃	表面：丹塗り
21	高杯(口縁部)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期前半	精製粘土使用
22	〃	〃	〃	〃	〃
23	〃	〃	〃	〃	
24	〃	〃	〃	〃	
25	〃	〃	〃	〃	
26	〃	〃	〃	〃	
27	〃	〃	〃	〃	
28	高杯(口縁部)	11C・D	包含層(L=3.6mまで)	弥生時代後期後半	精製粘土使用
29	〃	〃	〃	〃	〃
30	〃	〃	〃	〃	〃
31	鉢(口縁部)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期前半	
32	〃	〃	〃	〃	
33	〃	〃	〃	〃	
34	〃	〃	〃	〃	
35	壺(口縁部)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期前半	
36	〃	〃	土器溜り1	弥生時代後期後半	
37	〃	〃	土器溜り1	弥生時代後期前半	
38	壺(頸部)	11D	包含層(L=3.6mまで)	弥生時代後期後半	
39	〃	11・12C・D	包含層(L=3.65mまで)	弥生時代後期前半	
40	壺(口縁部)	12D	包含層(L=3.57mまで)	〃	
41	製塩土器(脚)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期前半	
42	〃	〃	〃	〃	
43	〃	〃	〃	〃	
44	〃	〃	〃	弥生時代後期後半	
45	甕(胴部)	11C	P996	弥生時代後期後半	
46	〃	11D	P997	〃	
47	〃	10D	P1295	〃	
48	壺(口縁部)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期前半	
49	高杯(口縁部)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期後半	
50	甕(口縁部)	10C・D	土器溜り1	弥生時代後期後半	
51	甕(底部)	11C・D	包含層(L=3.4mまで)	〃	

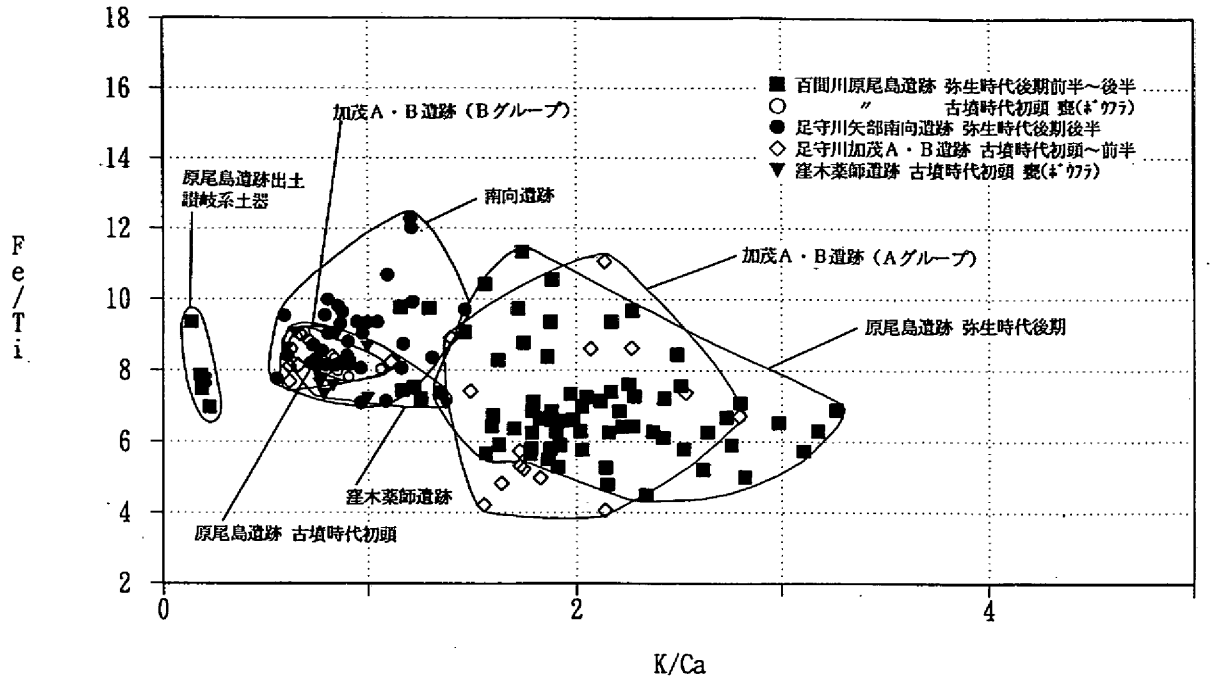
※備考欄は分析者が記載し、その他は資料提供者による。



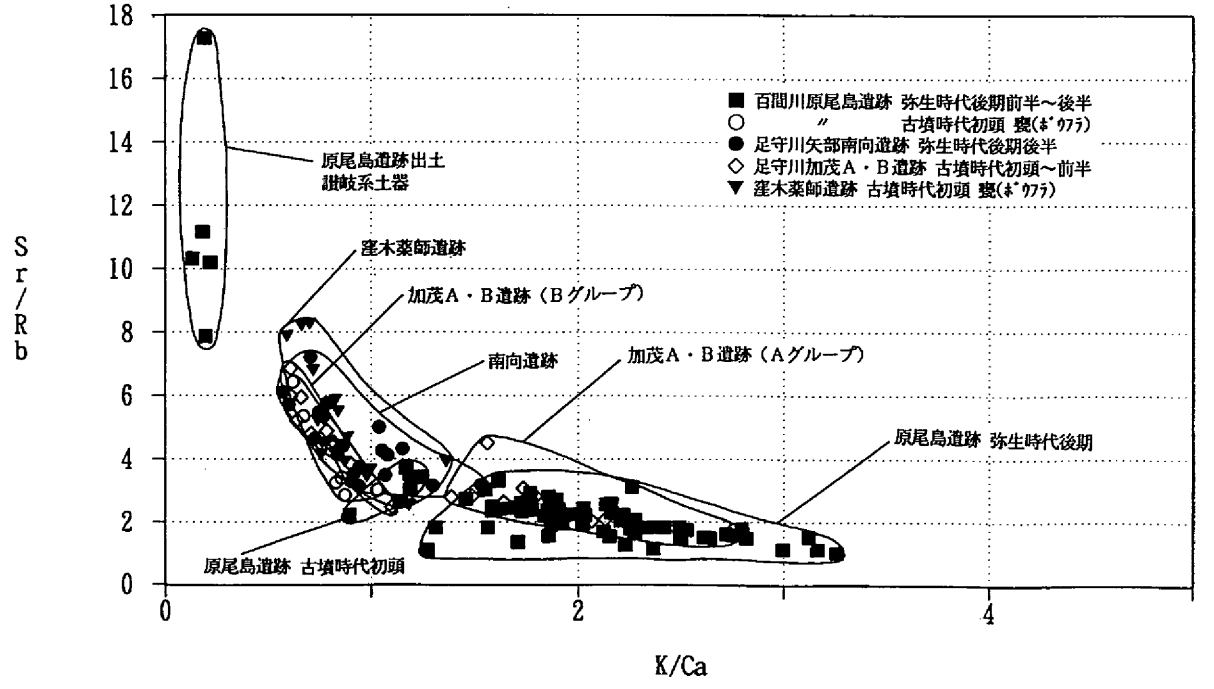
第１図　K/Ca-Fe/Ti 散布図
原尾島遺跡時期，器種別の分布状況



第２図　K/Ca-Sr/Rb 散布図
原尾島遺跡時期，器種別の分布状況



第３図　K/Ca-Fe/Ti 散布図
岡山県南部地方の弥生・古墳時代遺跡土器分布領域



第４図　K/Ca-Sr/Rb 散布図
岡山県南部地方の弥生・古墳時代遺跡土器分布領域

付載10　百間川原尾島遺跡出土の鉄滓の調査

和鋼博物館

弥生時代後期～中世に至る遺構より出土した鉄滓について岡山県古代吉備文化財センターより調査の依頼を受けたので金属学調査を行なった。その結果と若干の考察を加えたので併せて報告する。

1．資　　料

資料の明細を表1に示す。

表1　各資料の明細

番号	資　料　名	明　　細	重量(g)
No.1	12C・D落ち込み2 鉄　　滓	表面黒色であるがやや軽い感じのもので、炉壁のように思われる。	20
No.2	11D竪穴住居7 鉄　　滓	表面黒色なるも、軽い感じのもので、底面側に赤色の土状のものが溶着している。	15
No.3	13C井戸14上層 鉄　　滓	表面側は黒色、底面側はやや赤味がある。やや重たい感じ。	15
No.4	13C鍛冶炉1 鉄　　滓	表面やや赤味を帯び、粒子状のものを溶着している。重たい感じ。	55 20
No.5	12C井戸13 鉄　　滓	約15mmφのもので表面黒色、気泡があって軽い感じ。	2
No.6	11D井戸12炭層以下 鉄　　滓	表面黒色で、軽い感じのもので、気泡があり、底面側に炉材粒子状のもの溶着。	6
No.7	11・12C溝48 鉄　　滓	表面やや赤味を帯び凹凸で鍛冶滓様な鉄滓	22
No.8	10C・D土器溜り1 鉄　　滓	表面黒色で光沢があり流出滓的な感じのもの。	16
No.9	20A溝5（旧） 鉄　　滓	表面黒色で光沢があり、凹凸状、大きな気泡あり、やや軽い感じ。	115
No.10	13C溝83 鉄　　滓	表面やや赤味があり凹凸状で鍛冶滓様な鉄滓	16 8
No.11	20A溝73 鉄　　滓	表面黒色で軽い感じのもの、土状のものが溶着している。	12
No.12	13C・D落ち込み1 鉄　　滓	表面黒色でやや光沢があり流出滓様のもの。	55 12

2．化学組成

各資料から試料を採取し、化学分析を行なった。各資料の化学組成を表2に示す。このうち炭素および硫黄は堀場製作所EMIA-1200型C・S同時定量装置による赤外線吸収法により、その他の元素は島津製作所高周波誘導プラズマ発光分光分析装置（ICPV-1012型）により定量した。

表２　各資料の化学組成（重量%）

	C	SiO_2	MnO	P	S	Ni	Cr_2O_3	Na	K	CaO	MgO	V_2O_5	TiO_2	Cu	Al_2O_3	T.Fe	FeO	Fe_2O_3	M.Fe
No.1(A) 12C・D落ち込み2鉄滓 黒色部	0.102	50.08	0.24	0.25	0.004	0.01	0.03	0.99	1.60	2.24	1.24	0.032	0.33	0.01	12.90	17.74	15.35	8.35	0.07
No.1(B) 12C・D落ち込み2鉄滓 粘土部	0.105	50.29	0.18	0.30	0.004	0.01	0.02	1.23	2.37	2.39	1.68	0.032	0.33	0.01	16.60	13.18	10.96	6.70	0.17
No.2(A) 11D竪穴住居7鉄滓 黒色部	0.039	41.62	0.30	0.14	0.001	0.01	0.03	1.23	2.36	3.70	0.78	0.032	0.13	0.01	14.43	11.26	4.31	11.32	0.20
No.2(B) 11D竪穴住居7鉄滓 粘土部	0.048	60.50	0.74	0.12	0.001	0.01	0.03	1.25	2.64	1.54	0.45	0.023	0.14	0.01	18.30	3.20	1.48	2.94	0.06
No.3 13C井戸14上層 鉄滓	0.14	18.50	0.14	0.062	0.028	0.01	0.03	0.72	0.63	2.72	2.15	0.021	0.11	0.02	4.34	48.42	46.66	17.52	0.33
No.4 13C鍛冶炉1 鉄滓	0.18	18.10	0.20	0.18	0.039	0.01	0.03	0.54	0.68	3.48	1.39	0.021	0.12	0.02	7.10	47.95	38.93	25.41	0.37
No.5 12C井戸13 鉄滓	-	50.96	0.38	0.40	-	0.01	0.03	1.02	1.52	4.09	1.00	0.025	0.30	0.01	14.40	16.29	20.36	0.03	0.44
No.6 11D井戸12炭層以下鉄滓	0.073	51.29	0.30	0.25	0.003	0.01	0.03	0.98	1.15	5.30	1.70	0.027	0.28	0.02	8.81	16.60	12.20	10.21	0.09
No.7 11・12C溝48 鉄滓	0.17	21.25	0.30	0.19	0.040	0.01	0.02	0.65	0.55	3.23	0.98	0.021	0.094	0.04	5.45	44.57	33.78	26.29	0.20
No.8 10C・D土器溜り1鉄滓	0.104	21.10	0.18	0.17	0.022	0.01	0.02	0.83	0.58	1.90	0.81	0.021	0.14	0.03	7.54	48.47	49.11	14.87	0.25
No.9 20A溝5（旧） 鉄滓	0.046	26.30	0.55	0.15	0.026	0.01	0.02	1.19	1.08	4.22	1.39	0.021	0.17	0.01	9.55	40.52	44.91	8.16	0.30
No.10 13C溝83 鉄滓	0.39	14.87	0.18	0.25	0.015	0.01	0.02	0.46	0.40	1.84	0.61	0.021	0.12	0.01	7.60	46.80	21.19	43.43	0.41
No.11 20A溝73 鉄滓	0.086	58.90	0.17	0.13	0.001	0.01	0.02	0.97	2.31	1.32	0.95	0.030	0.37	0.01	9.84	10.52	9.02	5.04	0.17
No.12 13C・D落ち込み1鉄滓	0.11	16.18	0.23	0.12	0.025	0.01	0.02	0.39	0.36	1.81	0.60	0.019	0.096	0.01	4.97	52.44	49.26	20.38	0.48

注　1. 資料No.7，8は若干Cuが高い

　　2. 資料No.6，9は若干CaOが高い

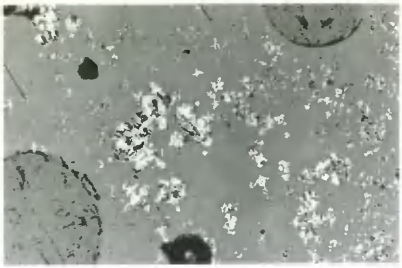
　　3. 資料No.5のC，Sは試料不足にて分析せず

3．顕微鏡組織

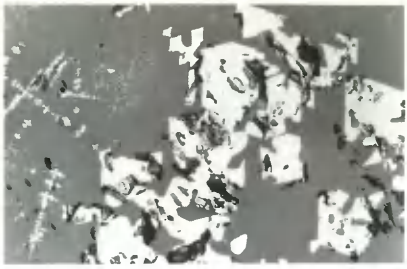
資料の顕微鏡組織を写真１～12に示す。

資料No.1，No.2，No.5，No.6，No.11は炉壁であり溶融黒色部から採取した試料の組織を示す。またマグネタイトが主体である。

資料No.3，No.4，No.7，No.8，No.9，No.10，No.12はファイヤライト，ヴスタイトおよびマグネタイトの結晶が主体である。

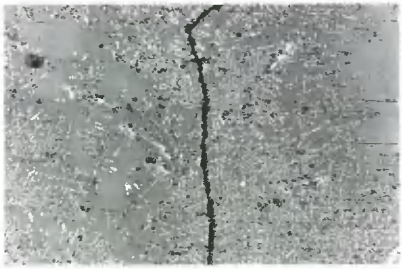


(×100)

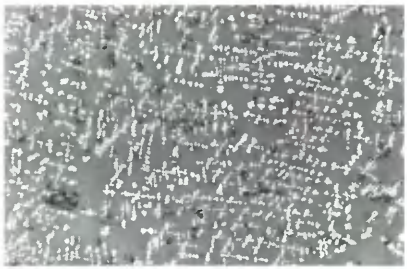


(×400)

写真１　資料No. 1 白色の結晶物はマグネタイト

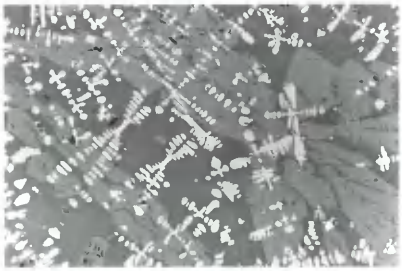


(×100)

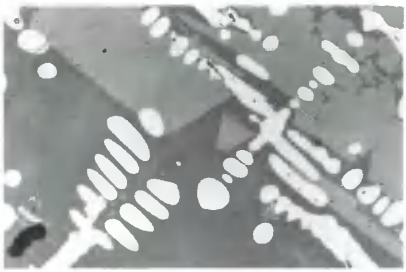


(×400)

写真２　資料No. 2 白色の結晶物はマグネタイト

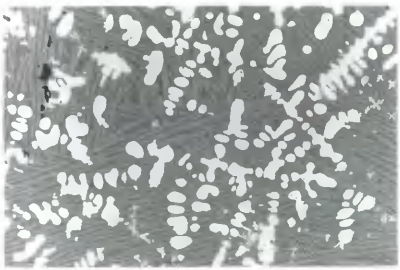


(×100)



(×400)

写真３　資料No. 3 淡灰色の棒状結晶はファイヤライト 白色の樹枝状結晶はヴスタイト



(×100)

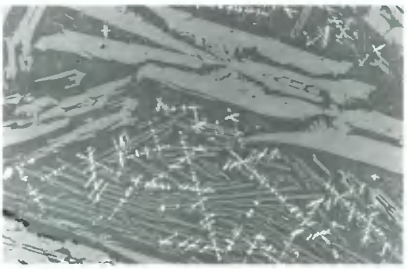
(×400)

写真４　資料No. 4 淡灰色の小さな棒状結晶はファイヤライト 白色の小豆状結晶はヴスタイト

(×100)

(×400)

写真５　資料No. 5 淡灰色の小さな棒状結晶はファイヤライト



(×100)

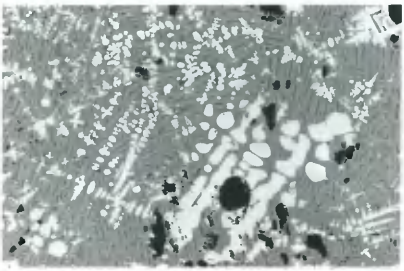
(×400)

写真６　資料No. 6 淡灰色の大きな棒状結晶はファイヤライト 白色の小さな樹枝状結晶はヴスタイト

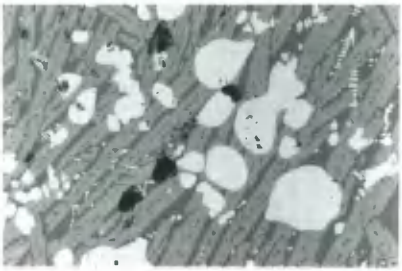
(×100)

(×400)

写真７　資料No. 7 淡灰色の棒状結晶はファイヤライト 白色結晶物はヴスタイト

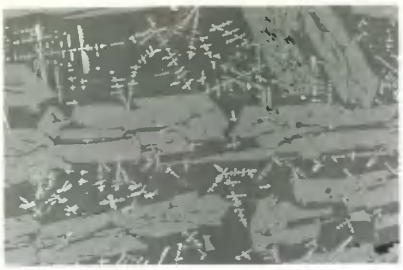


(×100)

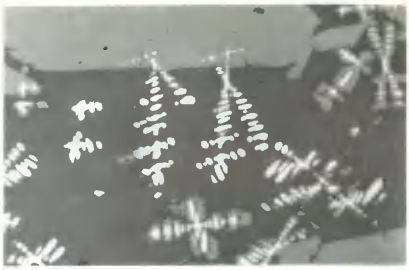


(×400)

写真８　資料No. 8 淡灰色の小さな棒状結晶はファイヤライト 白色結晶物はヴスタイト

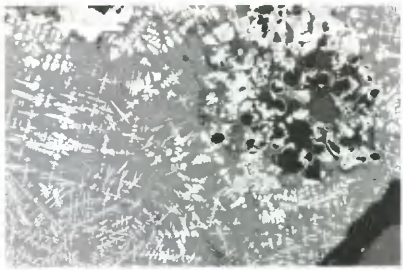


(×100)



(×400)

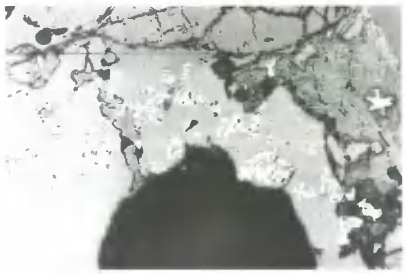
写真９　資料No. 9 淡灰色の棒状結晶はファイヤライト 白色の小さな樹枝状結晶はヴスタイト



(×100)

(×400)

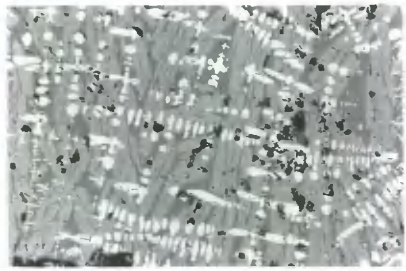
写真10　資料No. 10 白色の小さな樹枝状結晶はヴスタイト



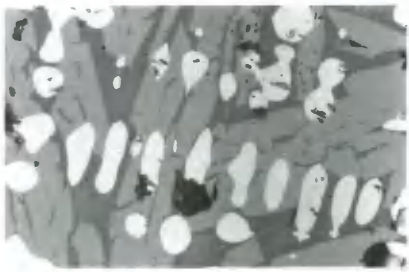
(×100)

(×400)

写真11　資料No. 11 白色の結晶物はマグネタイト



(×100)



(×400)

写真12　資料No. 12 淡灰色の棒状結晶はファイヤライト 白色の小豆状結晶はヴスタイト

4．構相成の解析

前項で観察した試料を用い、走査型電子顕微鏡（SEM）による微細組織の観察ならびにEDX（エネルギー分散型X線分析）による局部的な定性分析を、また粉砕試料を用いてX線回折を行ない構成結晶の同定を行なった。

またこれらの結果を総括し、各資料の構成相を示すと表3のようになる。

表3　資料のX線回折による相解析

番号	資　料　名	ファイヤライト Fe_2SiO_4	ヴスタイト FeO	マグネタイト Fe_3O_4	ヘマタイト Fe_2O_3	シリカ SiO_2	基　地（ガラス質）
No.1	12C・D落ち込み2鉄滓	◎		◎		○	Si-Al-Ca-Fe-K-Ca-Mg
No.2	11C・D竪穴住居7鉄滓			◎	○	◎	Si-Ca-Al-K-Fe-Mg
No.3	13C井戸14上層鉄滓	◎	◎	○			Si-Al-K-Ca-Fe-Na
No.4	13C鍛冶炉1鉄滓	◎	◎	○			Si-Al-Ca-Fe-K-Ti-Na
No.5	12C井戸13鉄滓	◎				◎	Si-Ca-Al-Fe-Na-Ti
No.6	11D井戸12炭層以下鉄滓	◎			◎	○	Si-Al-Ca Fe-K-Na
No.7	11・12C溝48鉄滓	◎	○	◎			Si-Al-Ca Fe-K-Na
No.8	10C・D土器溜り1鉄滓	◎	○	◎			Si-Al-Fe-Ca-K-Na
No.9	20A溝5（旧）鉄滓	◎					Si-Ca-Al-Fe-K-Na-Ti
No.10	13C溝83鉄滓		◎	◎			Si-Fe-Ca-Al-K-Mg-Na-Mn
No.11	20A溝73鉄滓	◎		◎			Si-Ca-Al-Fe-K-Mg
No.12	13C・D落ち込み1鉄滓	◎	◎				Si-Ca Fe-Al-K-Na

5．考　　察

大沢正巳氏[1]が調査された古墳出土鉄滓の化学組成，構成相に本鉄滓との比較を表4に示す。

表4により資料が製錬滓か、鍛冶滓かあるいは使用原料が砂鉄か鉱石（岩鉄）かについて考察してみる。

(1)　資料NO.3，NO.4，NO.7，NO.8，NO.9，NO.10，NO.12について

鉄分が40.52％～52.44％とやや高く、造滓成分23.56％～41.46％はやや多いが、TiO_2量：0.094％～0.17％，V量：0.011％～0.012％はともに低く、また顕微鏡組織がファイヤライト＋ヴスタイトであることから製錬滓ではなく鍛冶滓と思われるが、鉄分が低いことから精錬鍛冶滓と推定される。

表4　資料の化学組成および構成相の比較

名　　称		化学組成（重量%）				構成相
		造滓成分	TiO_2	V	T.Fe	
製錬滓（砂鉄）	福岡地方	16.8 ～39.8	1.1 ～8.2	0.006 ～0.576	37.5 ～57.6	W+F, W+M+F, M+F
〃　〃	岡山地方	17.1 ～25.9	5.03 ～19.8	0.02 ～0.18	32.1 ～41.8	W+F, U+I+F
鉱石系製錬滓		44.5 ～54.9	0.35 ～0.57	0.007 ～0.010	27.5 ～38.0	F+(W, M) 微量
精錬鍛冶滓（砂鉄系）	福岡地方	21.0 ～33.5	0.22 ～0.9	0.009 ～0.010	49.1 ～55.6	W+F
〃　〃	岡山地方	21.4	5.6	0.12	51.7	W+M+F
鍛錬鍛冶滓（砂鉄系）	福岡地方	10.1 ～12.6	0.1 ～0.7	0.013 ～0.288	62.2 ～64.0	W+F
〃　〃	岡山地方	7.52	0.06 ～0.19	0.06	50.1 ～64.0	W+F
No.1 12C・D落ち込み2鉄滓	岡山県原尾島	66.46	0.33	0.018	17.74	F+M+S
No.2 12C・D竪穴住居7鉄滓	〃	60.53	0.13	0.018	11.26	M+H+S
No.3 13C井戸14上層鉄滓	〃	27.71	0.11	0.012	48.42	F+W+M
No.4 13C鍛冶炉1鉄滓	〃	30.07	0.12	0.012	47.95	F+W+M
No.5 12C井戸13鉄滓	〃	70.45	0.30	0.014	16.29	F+S
No.6 11D井戸12炭層以下鉄滓	〃	67.1	0.28	0.015	16.60	F+H+S
No.7 11・12C溝48鉄滓	〃	30.91	0.094	0.012	44.57	F+M
No.8 10C・D土器溜り1鉄滓	〃	31.35	0.14	0.012	48.47	F+W+M
No.9 20A溝5（旧）鉄滓	〃	41.46	0.17	0.012	40.52	F
No.10 13C溝83鉄滓	〃	24.92	0.12	0.012	46.80	W+M
No.11 20A溝73鉄滓	〃	71.01	0.37	0.017	10.52	F+M
No.12 13C・D落ち込み1鉄滓	〃	23.56	0.096	0.011	52.44	F+W

注：造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）
W：Wustite.　F：Fayalite.　M：Magnetite.　U：Ulvospinel.　H：Hematite
I：Ilumenite.　S：Silica

表５　各種釜土の化学組成比較（重量％）

資　料　名	SiO_2	Al_2O_3	TiO_2	CaO	MgO	T. Fe
№１　12C・D落ち込み２ 溶　融　部 (A)	50.08	12.90	0.33	2.24	1.24	17.74
№１　粘　土　部 (B)	50.29	16.60	0.33	2.39	1.68	13.18
№２　11C・D竪穴住居７ 溶　融　部 (A)	41.62	14.43	0.13	3.70	0.78	11.26
№２　粘　土　部 (B)	60.50	18.30	0.14	1.54	0.45	3.20
№５　12C井戸13	50.96	14.40	0.30	4.09	1.00	16.29
№６　11D井戸12炭層以下	51.29	8.81	0.28	5.03	1.70	16.60
№11　20A溝73	58.90	9.84	0.37	1.32	0.95	10.52
(1)　(製錬炉) 座王古墳出土鉄滓付着土	68.00	25.00	0.49	0.31	0.38	2.61
(2)　(製錬炉) 屋床たたら炉壁（№３－２）	69.20	22.37	0.90	0.38	1.33	3.13
(3)　(製錬炉) 下大仙子製鉄遺跡炉壁№14	69.40	23.71	0.60	1.20	1.13	3.66
(4)　(製錬炉) 砥波炉元釜土（古来の砂鉄製錬法）	65.59	18.63	－	0.23	Tr	3.37
(4)　(製錬炉) 石見国価谷炉元釜土（　〃　）	67.16	14.91	－	0.03	Tr	1.91
(5)　(製錬炉) 靖国たたら釜土	68.54	13.12	－	0.25	0.26	3.10
(6)　(製錬炉) 日本鉄鋼協会復元たたら釜土	64.44	13.60	－	0.20	0.38	2.83
(7)　(鍛冶炉) 鳥上作刀鍛練場火床羽口取付粘土	54.28	19.10	0.89	1.17	1.33	4.62
(8)　(鍛冶炉) 庄原市則清遺跡鍛冶炉壁	55.30	19.10	0.14	1.00	0.95	7.07
(9)　(鍛冶炉) 益田市上久々茂土居跡遺跡鍛冶炉壁	58.30	19.31	0.20	0.10	0.41	2.80

注：(1)和鋼記念館：座王古墳出土鉄滓の調査　昭和59年７月28日
(2)和鋼記念館：島根県野波屋床たたらの鉄滓及び炉材の調査　昭和59年６月20日
(3)和鋼記念館：下大仙子製鉄遺跡より出土した鉄滓，炉壁，炉床及び木炭の調査　昭和60年１月31日
(4)俵　国一：古来の砂鉄製錬法、丸善　1933
(5)小塚寿吉：日本古来の製鉄製錬法“たたら”について，鉄と鋼　第52年第12号
(6)日本鉄鋼協会：たたら製鉄の復元とその鈩について　昭和46年２月27日
(7)和鋼記念館：鳥上作刀鍛錬場鍛冶滓の調査　昭和63年６月30日
(8)和鋼記念館：庄原市則清遺跡出土鉄滓の調査　平成５年１月13日
(9)和鋼博物館：益田市上久々茂土遺跡出土鉄滓，鉄釘の調査　平成６年３月11日

(2)　資料NO.1，NO.2，NO.5，NO.6，NO.11について

各資料いずれも造滓成分60.53～71.01と高く、鉄分10.52%～17.74%と低いことから炉壁と推定される。本資料の化学組成と従来調査した釜土の組成比較を表5に示す。

組成的にみると本資料のNO.2粘土部(B)はT.Feが低いことからこれが元来の釜土組成と見做して比較を行なうと製錬炉釜土よりSiO_2が低く、鍛冶炉用炉壁の組成に近いことから、本資料は鍛冶炉用炉壁と推定される。またBに対するAの鉄分富化率を資料NO.2でみると$\frac{T.Fe(A)}{T.Fe(B)}=3.5$であり、従来調査した製錬炉炉壁の鉄分富化率：2.37～3.06より本資料が高いことからかなり高い温度で鍛冶が行なわれたものと推定される。

(3)　使用原料は砂鉄か鉱石か

使用原料を区別する指標となるものはTiとV量[2]である。表4より砂鉄を原料とした精錬鍛冶滓の〔TiO_2〕／〔Fe〕の比を求めると0.01～0.11である。これに対し本資料0.00183～0.0042と低い。またVについて表4から砂鉄系精錬鍛冶滓における〔V〕／〔Fe〕の値を求めると福岡で0.0012，岡山で0.0023となる。一方本資料では0.00021～0.000296であり、ともに低い値を示すことから砂鉄系ではなく鉱石（岩鉄）系を原料とした精錬鍛冶滓と推定される。

6．結　　言

岡山県百間川原尾島遺跡出土鉄滓および炉壁について調査を行なった。結果を要約すると次の通りである。

(1)　資料NO.3，4，7，8，9，10，12鉄滓は鉱石（岩鉄）系精錬鍛冶滓と推定した。

(2)　資料NO.1，2，5，6，11は鍛冶用炉壁と推定した。

以上の調査は日立金属株式会社冶金研究所で実施し、日立金属テクノクス清永取締役に御指導を賜わった。

参考文献

(1)　大沢正巳：古代出土鉄滓からみた古代製鉄，日本製鉄史論集119P（たたら研究会1984）

(2)　和鋼博物館：大田市円城寺前遺跡出土鉄滓の調査　平成6年3月31日

付載11　百間川原尾島遺跡出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター
本　田　光　子
宮内庁正倉院事務所
成　瀬　正　和

百間川原尾島遺跡で出土した土壙内埋土中の赤色物と赤色塗彩の土器１点について顕微鏡観察とＸ線分析（土壙出土赤色物についてのみ）を行い、赤色顔料の種類や特徴を調査した。墳墓出土例や土器・木器等の彩色例に関する現在までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄Fe_2O_3を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の２種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。試料の一覧と分析結果及び推定される赤色顔料の種類を表に示した。

試料

土壙11出土の赤色物は「赤味を帯びた土」である。赤色物が凝集した小塊は認められない。これを実体顕微鏡下で観察すると、この「赤味を帯びた土」は何等かの有機物が腐朽したものと思われ、赤色物は全体に拡散している。土と赤色物の明確な分離は無理であったが、出来る限り土を除去し、針先に付く程度を検鏡用に、残りをＸ線分析に供した。

一般に丹塗磨研土器と呼ばれる焼成前塗彩の赤彩の残りは良好である。本資料は焼成前塗彩なので良好な状態である。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の三種の赤色顔料（朱、ベンガラ、鉛丹）は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。

No２土器片はそのままで落射光により40～100倍で検鏡し、赤色顔料の有無、その種類、付着残存状態を観察した。また、赤色部分から針先に付く程度の量を採取しプレパラートを作製し、透過光・落射光40～400倍で検鏡した。

No２は赤色顔料としては、はっきりしたベンガラ粒子は認められず、いわゆる広義のベンガラと呼ぶ赤土に近い状態であった。ベンガラにはいわゆるパイプ状粒子と呼ばれている管状の粒子が含まれることがあり、産地を示すものかと議論を呼んでいるが、今回の試料には見い出せなかった。

蛍光Ｘ線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所の理学電機工業（株）製蛍光Ｘ線分析装置を用い、Ｘ線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、

分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

鉛は検出されなかったので、表には鉄と水銀の有無のみ記した。赤色顔料の主成分元素としては鉄が検出された。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として土部分に由来するものなので、省略した。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機（株）製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4㎜、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～66°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。表には辰砂（Cinnabar赤色硫化水銀）、赤鉄鉱（Hematite酸化第二鉄）の有無のみについて記した。赤色顔料の主成分鉱物としては赤鉄鉱（Hematite）が同定された。そのほかに石英、長石などが確認されたが、それは主として混入土砂に由来するものなので、やはり省略している。

ま と め

No 1の土壙出土赤色顔料の種類はベンガラであり、パイプ状粒子は含まない。ベンガラは土壙内全体に拡散していたと見られ、遺構の性格を考える上で興味深いものである。

No 2の土器は焼成前塗彩であり「丹塗磨研土器」の赤色は、当然のことであるが焼成による鉄分の酸化による発色である。そのため、本来的に酸化鉄含有量の多い「ベンガラ」が使われる場合と、本来の酸化鉄含有量は少ないが適度の焼成条件により明るい赤色に発色するような「赤土」を用いる場合がある。前者はベンガラという赤色顔料が必要であるが後者は「赤土」があれば良く、磨きの状態ではそれさえ必要でない場合がある。No 2の赤色はいわゆる丹塗であり酸化鉄による発色であるが、検鏡において顕著なベンガラ粒子は見いだせず、赤い土砂である。つまり、No 2は赤色顔料としてのベンガラは使用していない可能性が高く、赤い土砂を使ったかあるいは使っていないかも知れない。しかし実際には赤く発色している。このような状態の酸化鉄系赤色顔料を筆者は広義のベンガラと呼んでおり、表中では（ベンガラ）で示した。

表　試料の一覧と分析結果及び推定される赤色顔料の種類

	出土遺構	遺物	蛍光X線分析			X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	挿図
			鉄	水銀	鉛	赤鉄鉱	辰砂			
1	11C　土壙11	赤色土	＋	－	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	第75図
2	10CD土器溜り1	壺形土器	‥‥	‥‥	‥‥	‥‥	‥‥	（ベンガラ）	（ベンガラ）	／

‥‥：未測定　＋：検出　－：未検出

付載12　百間川原尾島遺跡出土の赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果

百間川原尾島遺跡出土の赤色顔料については、徳島県立博物館の魚島純一氏に蛍光Ｘ線による分析を依頼し、その結果を頂いたので抜粋して掲載する。なお、分析にあたっては徳島県立博物館および同館の天羽利夫氏には格別の御配慮を得た。あわせて厚く御礼申し上げます。

表　蛍光Ｘ線分析試料と結果

掲載番号	遺　構　名	器種	時代・時期	結　果	備　　考
260	井戸９	鉢	百・後・Ⅱ	水銀朱	
28	竪穴住居16	石杵	百・後・Ⅲ	水銀朱	『百間川原尾島遺跡２』
15	旧河道１	壺	百・前・Ⅱ	ベンガラ	
17	旧河道１	壺	百・前・Ⅱ	ベンガラ	
76	井戸２	壺	百・後・Ⅲ	ベンガラ	
446	溝13	壺	百・後・Ⅳ	ベンガラ	

ベンガラは本来のベンガラと、赤土を含むもので、蛍光Ｘ線では明確に区分することができないため、広義の意味で使用している。

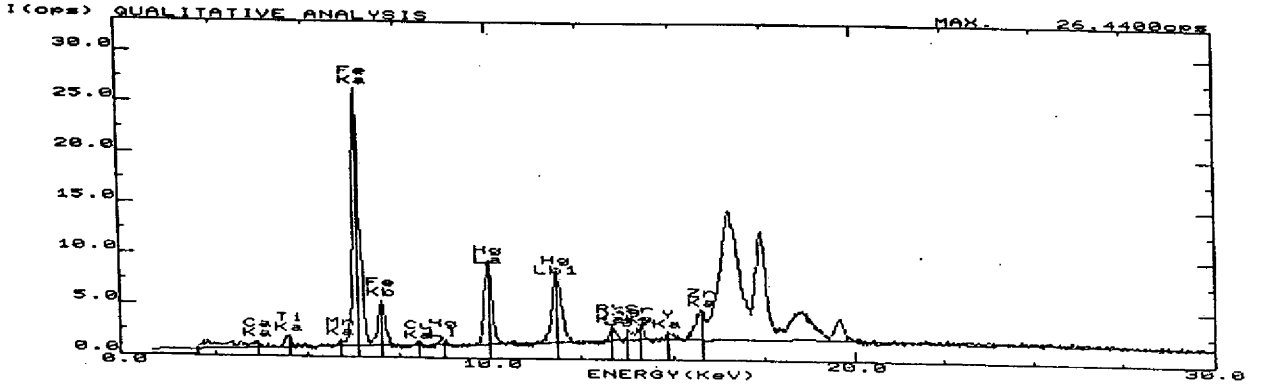


図１　井戸９出土の鉢〈260〉

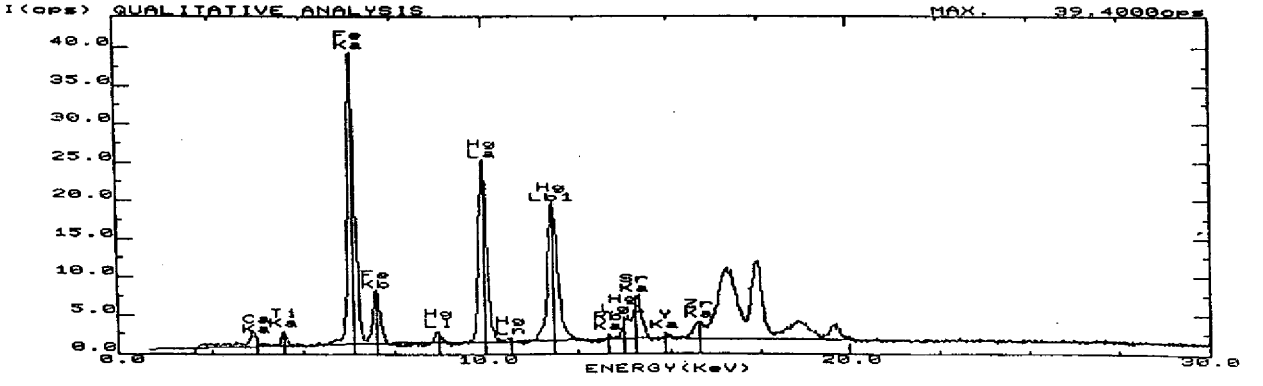


図２　「竪穴住居16」・『百間川原尾島遺跡２』出土の石杵〈28〉

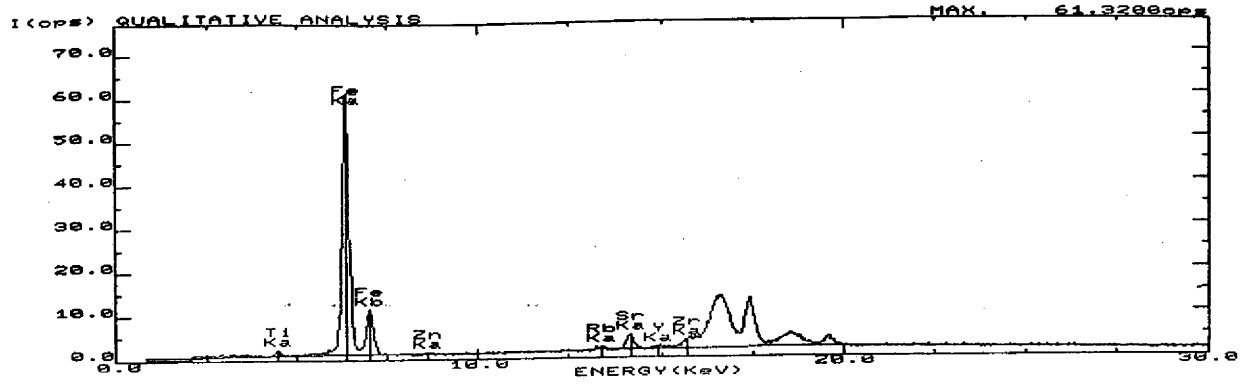


図３　旧河道１出土の彩文壺〈15〉

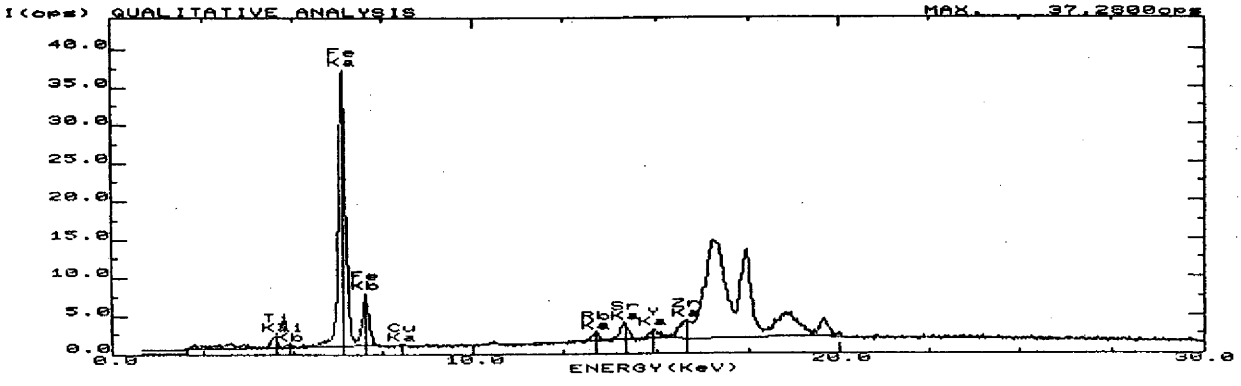


図４　旧河道１出土の彩文壺〈17〉

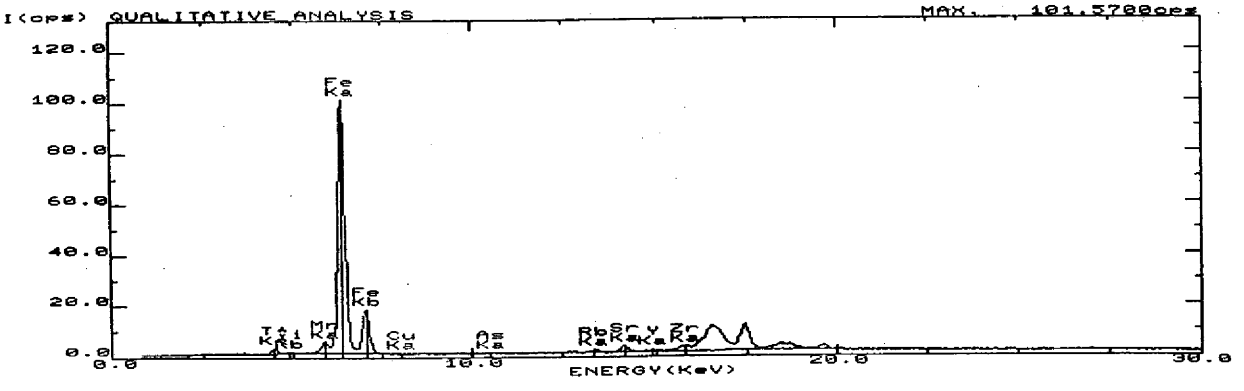


図５　井戸２出土の壺〈76〉

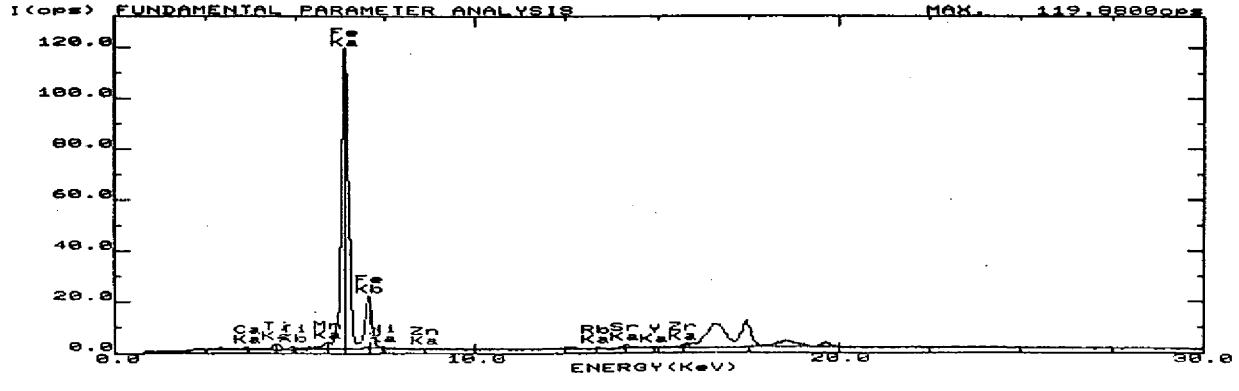


図６　溝13出土の壺〈446〉

出土遺物一覧（観察）表

１．土器観察表

２．石製品一覧表

３．土製品一覧表

４．金属製品一覧表

５．木製品一覧表

６．玉類一覧表

７．新旧遺構名称対照表

凡　　例

1．土器観察表の実測番号は、実測時の整理番号であり、掲載番号が本報告書掲載図の番号にあたる。

2．土製品、石製品、金属製品、木製品、玉類一覧表の番号は整理番号であり、掲載番号が本報告書掲載図の番号にあたる。

3．遺構名の欄は新（報告書作成時）遺構名であるが、（　）を付すものは旧遺構名である。

4．各一覧表の時代・時期は遺構の時期を示しており、必ずしもその遺物の時期を示すものではない。

5．石製品の形式は、石鏃についてのみ以下の分類を行なっている。

Ⅰ．平基式　Ⅱ．凹基式　Ⅲ．凸基Ⅰ式　Ⅳ．有茎式　Ⅴ．抉り入り式　Ⅵ．凸基Ⅱ式

Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅳ　Ⅴ　Ⅵ

6．土製品の形式は、土錘についてのみ以下の分類で行なっている。

A．ずん胴で穴が中央を貫通	Ⅰ	長80㎜以上、幅30㎜以上、若干不正形
	Ⅱ①	Ⅰよりも細目、長80㎜近い
	Ⅱ②	長70㎜程、幅30㎜未満、中形
	Ⅱ③	長70㎜未満、幅30㎜未満、小形
	Ⅲ	長60㎜未満、幅30～35㎜、長丸
	Ⅳ	長60㎜程、幅50㎜程
B．上下の口部分が細い中太の紡錘形	Ⅰ	中太で長い大形品
	Ⅱ	先細で長い
	Ⅲ	中太で短い
	Ⅳ	先細で中位の長さ
	Ⅴ	先細で短い

C．楕円形、長軸にそって溝がある

D．球形で溝と穴がある

E．両端に穴のある腕骨形

7．新旧遺構名称対照表の新名称は報告書作成時に付したもので、旧名称は発掘調査時のものである。

土器観察表

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	備考
1	368	旧河道 1	縄文土器	深鉢	44.2			頸部ナデ・胴部ケズリ
2	359	旧河道 1	縄文土器	深鉢				口縁部横ナデ・頸部ナデ
3	366	旧河道 1	縄文土器	深鉢				口縁部横ナデ・頸部 2 枚貝条痕・胴部ケズリ
4	371	旧河道 1	縄文土器	深鉢		2.0		内外面ナデ・外面接合痕顕著
5	354	旧河道 1	縄文土器	深鉢				頸部外面ナデ・胴部外面ヘラケズリ
6	350	旧河道 1	縄文土器	深鉢				内面ナデ
7	357	旧河道 1	弥生土器	壺				外傾接合・砂粒多く含む・外面煤付着
8	367	旧河道 1	弥生土器	壺				
9	365	旧河道 1	弥生土器	蓋	23.2		9.7	
10	370	旧河道 1	弥生土器	蓋	18.8		10.0	
11	356	旧河道 1	弥生土器	壺				内外面ヘラミガキ・砂粒多く含む
12	369	旧河道 1	弥生土器	壺				頸部下端と胴部に削り出し突帯
13	360	旧河道 1	弥生土器	壺	13.8			胴部削り出し突帯・砂粒多く含む
14	363	旧河道 1	弥生土器	壺				彩文・砂粒多く含む
15	364	旧河道 1	弥生土器	壺				彩文・砂粒多く含む
16	351	旧河道 1	弥生土器	壺				外面ヨコヘラミガキ・砂粒多く含む
17	362	旧河道 1	弥生土器	壺				外面黒色物塗布・彩文・砂粒多く含む
18	376	旧河道 1	弥生土器	壺				胴部に削り出し突帯・外面ヘラミガキ・内面ナデ
19	377	旧河道 1	弥生土器	壺				胴部に削り出し突帯・外面ヘラミガキ・内面ナデ
20	348	旧河道 1	弥生土器	壺				外面ヘラミガキ・内面ナデ・砂粒多く含む
21	352	旧河道 1	弥生土器	壺				外面黒色物塗布・内外面ヘラミガキ
22	353	旧河道 1	弥生土器	壺				内外面ヘラミガキ・砂粒多く含む
23	375	旧河道 1	弥生土器	壺				胴部に削り出し突帯・内外面ヘラミガキ
24	349	旧河道 1	弥生土器	甕				胴部内面ナデ・砂粒多く含む
25	358	旧河道 1	弥生土器	甕				口縁部横ナデ・胴部内外面ナデ・砂粒多く含む
26	343	旧河道 1	弥生土器	甕				口縁部内外面横ナデ・胴部内外面ナデ
27	342	旧河道 1	弥生土器	甕	21.1			胴部内外面ナデ・砂粒多く含む
28	344	旧河道 1	弥生土器	甕				胴部内外面ナデ・砂粒多く含む
29	361	旧河道 1	弥生土器	鉢	11.0	5.1	9.5	砂粒多く含む
30	347	旧河道 1	弥生土器	甕				口縁部横ナデ・砂粒多く含む
31	345	旧河道 1	弥生土器	甕				胴部外面タテハケ・内面ヘラミガキ・砂粒多く含む
32	372	旧河道 1	弥生土器	甕				外面煤付着・砂粒多く含む
33	373	旧河道 1	弥生土器	壺？		8.8		底部には焼成後の穿孔・砂粒多く含む
34	374	旧河道 1	弥生土器	壺				内外面ヘラミガキ・砂粒多く含む
35	355	旧河道 1	弥生土器	壺				内外面ヘラミガキ・砂粒多く含む
36	346	旧河道 1	弥生土器	甕				砂粒多く含む
37	315	土壙 1	弥生土器	壺	20.0			
38	690	土壙 2	弥生土器	甕				
39	159	竪穴住居 1	弥生土器	甕	15.3	4.5	25.6	底部赤色化している。
40	166	竪穴住居 1	弥生土器	甕	12.9	5.0	21.0	底面ヘラミガキ
41	162	竪穴住居 1	弥生土器	鉢	15.4	4.9	10.6	調整不明瞭
42	160	竪穴住居 1	弥生土器	鉢	15.3	5.2	13.8	口縁部下に円孔一対あり
43	165	竪穴住居 1	弥生土器	壺？				
44	161	竪穴住居 1	弥生土器	台付鉢	8.5	3.7	5.5	
45	163	竪穴住居 1	弥生土器	高杯		11.0		水濾し粘土
46	164	竪穴住居 1	弥生土器	高杯		16.7		
47	175	竪穴住居 2	弥生土器	甕	14.8			
48	179	竪穴住居 2	弥生土器	鉢	33.3			
49	167	竪穴住居 2	弥生土器	鉢	18.2	4.7	8.4	
50	108	井戸 1	弥生土器	台付長頸壺	12.9	11.0	28.5	口縁部内面に 5 条の凹線めぐる。
51	117	井戸 1	弥生土器	鉢	23.7			
52	118	井戸 1	弥生土器	鉢	16.0			
53	116	井戸 1	弥生土器	甕				
54	114	井戸 1	弥生土器	高杯				
55	112	井戸 1	弥生土器	高杯		10.8		脚台部
56	119	井戸 1	弥生土器	器台	15.6			口縁端部上面に 3 の字状半裁竹管文めぐる
57	111	井戸 1	弥生土器	器台				
58	113	井戸 1	弥生土器	台付鉢		4.6		
59	21	井戸 2	弥生土器	長頸壺	17.7	7.5	35.4	口縁端部外面に記号状の刺突
60	29	井戸 2	弥生土器	長頸壺	18.9	7.0	34.8	口縁端部外面に記号状刺突
61	30	井戸 2	弥生土器	長頸壺	17.8	7.7	31.2	
62	24	井戸 2	弥生土器	長頸壺	21.2	5.8	31.9	胴部外面に籠目痕
63	78	井戸 2	弥生土器	長頸壺	16.2			口縁端部外面に 4 条の記号状線刻
64	76	井戸 2	弥生土器	長頸壺	18.3			口縁端部上面に 3 条の沈線めぐる
65	53	井戸 2	弥生土器	長頸壺		7.0		

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	備考
66	82	井戸2	弥生土器	壺	16.3			
67	39	井戸2	弥生土器	壺	18.2	9.0	32.9	
68	40	井戸2	弥生土器	壺	18.2	9.0	36.2	底面ヘラミガキ
69	22	井戸2	弥生土器	壺	13.15	7	26.6	
70	87	井戸2	弥生土器	壺		9.5		
71	52	井戸2	弥生土器	壺	16.3	9.3	33	
72	19	井戸2	弥生土器	直口壺	8.6	6.2	12.6	水濾し粘土
73	16	井戸2	弥生土器	直口壺	7.2	4.1	12.3	底部ヘラミガキ・水濾し粘土
74	50	井戸2	弥生土器	台付直口壺	4.6	8.1	11.3	
75	65	井戸2	弥生土器	台付直口壺	6.9			水濾し粘土
76	64	井戸2	弥生土器	直口壺	6.8			水濾し粘土
77	41	井戸2	弥生土器	台付直口壺	8.8			水濾し粘土
78	42	井戸2	弥生土器	台付直口壺	7.3			水濾し粘土
79	15	井戸2	弥生土器	壺	11.2	5.4	20.6	
80	89	井戸2	弥生土器	甕	15.8	6.8	26.9	底面ヘラミガキ
81	86	井戸2	弥生土器	甕	14.4	6.7	24.1	底部煤付着
82	25	井戸2	弥生土器	甕	13.2	4.7	22.2	焼成後底部穿孔
83	33	井戸2	弥生土器	甕	14.6	6.2	27.9	底部に焼成後穿孔
84	32	井戸2	弥生土器	甕	15.2	6.3	22.7	底面ヘラミガキ
85	47	井戸2	弥生土器	甕	14.2	6.4	24.3	底面ヘラミガキ
86	34	井戸2	弥生土器	甕	14.6	5.7	27.0	底面ヘラミガキ
87	46	井戸2	弥生土器	甕	15.5	5.9	26.8	底面ヘラミガキ
88	84	井戸2	弥生土器	甕	14.2			
89	85	井戸2	弥生土器	甕	16.5			
90	91	井戸2	弥生土器	甕	17.1			
91	94	井戸2	弥生土器	甕	13.4	5.0	24.0	胴部外面被熱による剝離顕著
92	23	井戸2	弥生土器	甕	15.7	4.6	25.9	底部は焼成後穿孔
93	93	井戸2	弥生土器	甕	17.1			肩部に記号状の刺突4箇
94	18	井戸2	弥生土器	甕	14.6	6.2	24.2	底面ナデ
95	28	井戸2	弥生土器	甕	14.4	4.5	26.5	胴部外面タタキ
96	35	井戸2	弥生土器	甕	3.7		18.9	
97	37	井戸2	弥生土器	甕	5.1	5.1	18.0	底部焼成後穿孔
98	38	井戸2	弥生土器	甕	9.8	4.9	13.6	
99	66	井戸2	弥生土器	鉢	11.2	4.2	11.6	調整不明
100	20	井戸2	弥生土器	鉢	10.5	3.9	10.2	底面ヘラミガキ
101	27	井戸2	弥生土器	鉢	16.2	6.5	15.8	
102	92	井戸2	弥生土器	鉢	20.6			
103	90	井戸2	弥生土器	鉢	22.0	8.5	17.8	
104	31	井戸2	弥生土器	台付鉢	17.2	10.0	17.3	
105	88	井戸2	弥生土器	鉢	29.0	9.8	15.5	
106	72	井戸2	弥生土器	鉢				胴部外面煤付着
107	73	井戸2	弥生土器	鉢				胴部外面ハケメ後ヘラミガキ
108	75	井戸2	弥生土器	鉢				
109	69	井戸2	弥生土器	製塩土器		3.5		
110	70	井戸2	弥生土器	製塩土器		3.6		
111	71	井戸2	弥生土器	製塩土器		5.0		
112	74	井戸2	弥生土器	鉢				胴部外面ヨコヘラミガキ
113	62	井戸2	弥生土器	鉢	10.9	4.0	4.4	底面ハケメ・水濾し粘土
114	80	井戸2	弥生土器	鉢	14.5	4.3	6.3	
115	51	井戸2	弥生土器	鉢	13.1	3.25	5.9	
116	54	井戸2	弥生土器	高杯				
117	55	井戸2	弥生土器	高杯				
118	68	井戸2	弥生土器	高杯				
119	67	井戸2	弥生土器	高杯				
120	81	井戸2	弥生土器	高杯	37.2			口縁部内面に8条の沈線めぐる
121	58	井戸2	弥生土器	高杯	16.6			
122	48	井戸2	弥生土器	高杯	17.5	11.8	8.8	水濾し粘土
123	36	井戸2	弥生土器	高杯	24.3	13.8	11.6	水濾し粘土
124	45	井戸2	弥生土器	高杯	17.0	10.5	8.7	水濾し粘土
125	26	井戸2	弥生土器	高杯	16.3	11.5	8.9	水濾し粘土
126	61	井戸2	弥生土器	高杯	16.5	11.0	9.1	調整不明・水濾し粘土
127	49	井戸2	弥生土器	高杯	16.2			水濾し粘土
128	63	井戸2	弥生土器	高杯	9.2			水濾し粘土
129	44	井戸2	弥生土器	高杯	17.9			水濾し粘土
130	60	井戸2	弥生土器	高杯	18.2			水濾し粘土
131	43	井戸2	弥生土器	高杯	16.4	10.8	10.0	水濾し粘土

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
132	56	井戸 2	弥生土器	高杯	15.5			水濾し粘土
133	57	井戸 2	弥生土器	高杯	18.1			水濾し粘土
134	59	井戸 2	弥生土器	高杯	16.5			
135	17	井戸 2	弥生土器	高杯	11.5	10.2	6.9	
136	77	井戸 2	弥生土器	器台	9.4			水濾し粘土
137	79	井戸 2	弥生土器	器台				
138	83	井戸 2	弥生土器	器台				
139	138	井戸 3	弥生土器	甕	20.9	10.6	35.7	
140	123	井戸 3	弥生土器	甕	14.2			
141	121	井戸 3	弥生土器	甕	13.5			
142	128	井戸 3	弥生土器	高杯	18.9	13.4	11.5	水濾し粘土
143	127	井戸 3	弥生土器	高杯	12.9			水濾し粘土
144	153	井戸 4	弥生土器	甕				
145	154	井戸 4	弥生土器	高杯				内外面ともにヘラミガキ
146	134	井戸 5	弥生土器	壺	19.6	11.0	36.4	
147	124	井戸 5	弥生土器	長頸壺	19.2			
148	135	井戸 5	弥生土器	甕	21.1	8.0		149と同一個体
149	133	井戸 5	弥生土器	甕		8.3		
150	122	井戸 5	弥生土器	甕	12.6			胴部内面ナデ
151	126	井戸 5	弥生土器	甕	13.1	4.7	19.0	調整不明
152	131	井戸 5	弥生土器	鉢	16.0	4.5	7.8	
153	130	井戸 5	弥生土器	製塩土器		4.0		
154	125	井戸 5	弥生土器	高杯	11.8			
155	132	井戸 5	弥生土器	高杯	17.8			
156	129	井戸 5	弥生土器	高杯		12.7		
157	151	井戸 6	弥生土器	壺	8.8			
158	136	井戸 6	弥生土器	壺	14.0			
159	145	井戸 6	弥生土器	甕	15.3			胴部外面にタタキ残る
160	137	井戸 6	弥生土器	甕	14.2	5.9	29.4	底面ヘラミガキ
161	146	井戸 6	弥生土器	鉢	42.8	11.5	17.3	
162	148	井戸 6	弥生土器	器台	35.4			
163	140	井戸 6	弥生土器	高杯	25.0			口縁端部上面 3 条の凹線めぐる
164	139	井戸 6	弥生土器	高杯	13.1			
165	147	井戸 6	弥生土器	高杯	16.7	11.2	12.5	粗雑なつくり
166	141	井戸 6	弥生土器	高杯	10.5			
167	144	井戸 6	弥生土器			7.4		脚台部
168	142	井戸 6	弥生土器	製塩土器		4.7		調整不明
169	143	井戸 6	弥生土器	製塩土器		5.5		
170	155	井戸 7	弥生土器	長頸壺	16.1	5.8	29.3	
171	149	井戸 7	弥生土器	長頸壺	18.5			
172	150	井戸 7	弥生土器	甕	14.4			
173	152	井戸 7	弥生土器	鉢	16.3	4.0	8.6	
174	327	井戸 8	弥生土器	鉢	44.0			
175	607	井戸 9	弥生土器	長頸壺		10.4		
176	581	井戸 9	弥生土器	長頸壺	15.37	6.55	32.5	頸部の沈線はラセン状
177	550	井戸 9	弥生土器	壺	18.6			
178	744	井戸 9	弥生土器	長頸壺	18.3			
179	605	井戸 9	弥生土器	長頸壺	15.2			
180	543	井戸 9	弥生土器	長頸壺	15.0			
181	606	井戸 9	弥生土器	長頸壺	16			
182	546	井戸 9	弥生土器	長頸壺	13.2			
183	539	井戸 9	弥生土器	長頸壺	14.2			口縁部上端面に 3 条の凹線めぐる
184	506	井戸 9	弥生土器	壺	6.2	4.9	13.9	
185	553	井戸 9	弥生土器	長頸壺		6.8		
186	534	井戸 9	弥生土器	長頸壺		6.4		外面調整不明
187	509	井戸 9	弥生土器	長頸壺	10.8	4.5	17.7	
188	603	井戸 9	弥生土器	壺	11.8			
189	536	井戸 9	弥生土器	長頸壺		6.2		外面調整不明
190	537	井戸 9	弥生土器	壺	18.4	10.8	37.8	底部ナデ
191	580	井戸 9	弥生土器	壺	14.5	7.6	31.2	外面丹塗り
192	579	井戸 9	弥生土器	長頸壺	13.1			
193	532	井戸 9	弥生土器	壺	13.2	5.5	24.1	底部には焼成後の穿孔
194	551	井戸 9	弥生土器	壺	12.1	5.4	26.1	頸部に 4 条の線刻
195	741	井戸 9	弥生土器	壺				底面はナデ
196	538	井戸 9	弥生土器	壺	11.7			頸部に線刻
197	583	井戸 9	弥生土器	壺	13.7			内外面調整不明

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	備考
198	588	井戸9	弥生土器	壺	11.0			
199	544	井戸9	弥生土器	壺	12.6			肩部に記号状の刺突
200	585	井戸9	弥生土器	短頸壺	11.1			砂粒わずかに含む・口縁下部に一対の円孔
201	535	井戸9	弥生土器	壺	11.4	9.1	26.1	
202	533	井戸9	弥生土器	壺	12.6	6.7	21.3	
203	530	井戸9	弥生土器	壺	12.3	8.0	20.9	底面ヘラミガキ・頸部に記号状刺突1箇
204	743	井戸9	弥生土器	台付壺	10.8	9.0	21.1	
205	531	井戸9	弥生土器	台付壺	9.8			
206	545	井戸9	弥生土器	台付壺		10.0		脚部に4方向の円孔
207	554	井戸9	弥生土器	台付壺？		13.6		脚部の円孔は6方向
208	595	井戸9	弥生土器	壺	13.4			口縁部内面に記号状の刺突4箇
209	598	井戸9	弥生土器	壺	15.3			
210	599	井戸9	弥生土器	壺	16.1			
211	604	井戸9	弥生土器	壺	15.8			
212	601	井戸9	弥生土器	壺	14.3			
213	587	井戸9	弥生土器	壺	12.0			
214	549	井戸9	弥生土器	壺	16.4			
215	542	井戸9	弥生土器	甕？	19.9			
216	505	井戸9	弥生土器	甕	9.0	3.4	10.4	
217	576	井戸9	弥生土器	甕	13.7	6.5	26.4	底部には焼成後の穿孔
218	568	井戸9	弥生土器	甕	13.4	5.5	24.5	
219	569	井戸9	弥生土器	甕	14.6	5.5	22.8	底面ナデ
220	540	井戸9	弥生土器	甕	16.8			
221	572	井戸9	弥生土器	甕	15.9	5.5	24.3	底面ナデ
222	548	井戸9	弥生土器	甕	22.6			
223	573	井戸9	弥生土器	甕	12.8	5.8	22.4	底部には焼成後の穿孔
224	592	井戸9	弥生土器	甕	13.4			
225	586	井戸9	弥生土器	甕	15.9			
226	541	井戸9	弥生土器	甕	17.3			
227	600	井戸9	弥生土器	甕	14.2			
228	597	井戸9	弥生土器	甕	13.2			
229	562	井戸9	弥生土器	甕？	14.2	6.9	25.8	
230	564	井戸9	弥生土器	甕	13.4	5.4	24.1	
231	578	井戸9	弥生土器	甕	12.6			胴部はハケメ後下半のみヘラミガキ
232	563	井戸9	弥生土器	甕	13.2			
233	577	井戸9	弥生土器	甕	13.1	5.3	22.3	底面ヘラミガキ
234	566	井戸9	弥生土器	甕	13.2	5.6	22.5	噴きこぼれ痕あり
235	571	井戸9	弥生土器	甕	12.1	5.5	18.8	
236	596	井戸9	弥生土器	甕	14.1			
237	574	井戸9	弥生土器	甕	11.8	5.3	18.5	底面はナデ
238	594	井戸9	弥生土器	甕	10.7			
239	593	井戸9	弥生土器	甕	12.2			
240	565	井戸9	弥生土器	甕	12.7			
241	591	井戸9	弥生土器	甕	11.4			
242	567	井戸9	弥生土器	甕	9.3	3.8	19.3	
243	556	井戸9	弥生土器	甕	14.1	6.2	18.1	口縁部の穿孔は1箇
244	575	井戸9	弥生土器	甕？	13.1	7.0	16.5	口縁部下には2箇一対の円孔
245	590	井戸9	弥生土器	鉢	14.8			口縁部下には2箇一対の円孔
246	510	井戸9	弥生土器	鉢	14.5	6.3	13.0	
247	559	井戸9	弥生土器	鉢	16.0	5.8	15.9	焼成後に底部穿孔
248	555	井戸9	弥生土器	鉢	16.4	6.5	11.6	
249	589	井戸9	弥生土器	鉢	15.8			
250	584	井戸9	弥生土器	鉢	16.4	6.8	10.9	
251	582	井戸9	弥生土器	鉢	15.8			
252	523	井戸9	弥生土器	製塩土器	9.7	3.9	12.7	
253	507	井戸9	弥生土器	台付鉢	9.1	3.5	8.0	外面ナデ
254	557	井戸9	弥生土器	鉢	19.0	7.0	13.7	口縁部の穿孔は2箇一対
255	508	井戸9	弥生土器	鉢	16.0	4.0	9.4	底部に一対の穿孔
256	558	井戸9	弥生土器	台付鉢	14.2	7.7	13.2	口縁部下に2箇一対の穿孔
257	512	井戸9	弥生土器	高杯	13.0	6.6	10.1	
258	561	井戸9	弥生土器	鉢	41.8			
259	570	井戸9	弥生土器	甕	12.9	5.4	14.6	口縁部内外面とも指押さえ
260	560	井戸9	弥生土器	片口鉢	41.0	10.9	21.8	内面には水銀朱付着
261	514	井戸9	弥生土器	高杯	23.4	15.4	16.5	透しは脚柱部3方向・脚部2箇一組が3方向
262	516	井戸9	弥生土器	高杯	22.3	14.4	17.0	透しは脚柱部の2箇1組で3方向・脚部は9方向
263	520	井戸9	弥生土器	高杯	30.4	16.6	21.5	透しは脚柱部6方向・脚部2箇1組で4方向

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	備考
264	524	井戸 9	弥生土器	高杯		16.6		
265	521	井戸 9	弥生土器	高杯	26.5	17.1	20.0	透しは脚柱部 4 方向・脚部 2 箇 1 組で 3 方向
266	518	井戸 9	弥生土器	高杯		14.3		透しは脚柱部 3 方向・脚部 5 方向
267	529	井戸 9	弥生土器	高杯	23.9	14.5	17.9	透しは脚柱部 4 方向・脚部 5 方向
268	511	井戸 9	弥生土器	高杯	11.7	9.5	10.0	脚部の透しは 2 箇一組が 4 方向
269	526	井戸 9	弥生土器	高杯	15.7			
270	513	井戸 9	弥生土器	高杯	14.1	12.0	14.0	
271	515	井戸 9	弥生土器	高杯	16.7	13.0	15.0	
272	519	井戸 9	弥生土器	高杯		12.1		
273	527	井戸 9	弥生土器	高杯		12.0		
274	517	井戸 9	弥生土器	高杯		10.9		
275	522	井戸 9	弥生土器	高杯	26.5	12.2	17.7	透しは脚柱部 3 方向・脚部 2 箇 1 組で 3 方向
276	528	井戸 9	弥生土器	高杯	22.9			
277	745	井戸 9	弥生土器	高杯		21.5		
278	525	井戸 9	弥生土器	高杯	18.6	13.2	16.4	
279	742	井戸 9	弥生土器	器台	20.0	20.0	17.3	
280	552	井戸 9	弥生土器	器台	25.3	24.1	20.8	透し 5 方向・脚部に 4 条の線刻
281	302	土壙 3	弥生土器	壺		11.8		底部は上げ底
282	298	土壙 3	弥生土器	壺				胴部の突帯間に棒状浮文が 3 本一単位
283	293	土壙 3	弥生土器	壺	10.8			
284	299	土壙 3	弥生土器	壺	13.0	6.2	22.0	口縁部に補修粘土
285	301	土壙 3	弥生土器	甕	12.2	4.7	18.8	底部は上げ底
286	300	土壙 3	弥生土器	甕	12.7	6.2	26.2	底面はヘラミガキ
287	288	土壙 3	弥生土器	鉢	15.5	5.0	11.0	口縁部下に円孔一対
288	294	土壙 3	弥生土器	鉢	27.2	10.0	13.5	
289	291	土壙 3	弥生土器	鉢	50.0			口縁端部上面に 5 条の凹線めぐる
290	295	土壙 3	弥生土器	高杯	24.7			
291	292	土壙 3	弥生土器	高杯	12.8			
292	289	土壙 3	弥生土器	高杯	16.8			杯底部は円板充塡
293	287	土壙 3	弥生土器	高杯	12.2	10.4	10.2	
294	290	土壙 3	弥生土器	台付鉢	9.8	3.5	6.4	
295	297	土壙 3	弥生土器	台付鉢	10.1	6.7	11.1	
296	296	土壙 3	弥生土器	製塩土器		3.4		砂粒多く含む
297	305	土壙 4	弥生土器	甕	13.7			
298	306	土壙 4	弥生土器	甕	14.0			
299	317	土壙 5	弥生土器	壺	23.9			頸部から胴部外面は細かなヘラミガキ
300	279	土壙 7	弥生土器	壺	18.5	8.2	34.8	底部わずかに上げ底
301	277	土壙 7	弥生土器	壺	15.0			
302	261	土壙 7	弥生土器	壺？	15.6			
303	253	土壙 7	弥生土器	甕	13.7	4.4	23.7	
304	274	土壙 7	弥生土器	甕	11.1	4.2	21.8	底部に焼成後の穿孔あり
305	260	土壙 7	弥生土器	？		6.3		
306	273	土壙 7	弥生土器	甕	14.7	5.4	25.8	底部はわずかに上げ底
307	263	土壙 7	弥生土器	甕	14.7	5.5	25.6	
308	262	土壙 7	弥生土器	甕	14.3	5.6	23.3	
309	276	土壙 7	弥生土器	甕	14.9	5.5	25.9	
310	267	土壙 7	弥生土器	甕	15.3	5.3	25.3	底部はわずかに上げ底
311	257	土壙 7	弥生土器	甕	11.8	5.6	24.1	
312	258	土壙 7	弥生土器	甕	12.7	5.0	23.6	底部はわずかに上げ底
313	275	土壙 7	弥生土器	甕	15.7	5.0	23.0	底面はナデ
314	259	土壙 7	弥生土器	甕	13.4	4.3	21.4	底部は上げ底
315	268	土壙 7	弥生土器	甕	13.5	4.2	20.6	底部は上げ底
316	272	土壙 7	弥生土器	甕	12.3	4.3	19.1	底面はハケメ
317	266	土壙 7	弥生土器	甕	11.2	3.6	17.0	底面ナデ
318	256	土壙 7	弥生土器	甕	11.1	4.0	14.0	
319	254	土壙 7	弥生土器	台付鉢	16.8	8.2	12.2	
320	278	土壙 7	弥生土器	鉢	36.2	7.8	19.9	口縁部のヒビ割れを粘土で補修
321	252	土壙 7	弥生土器	鉢	15.2	4.7	12.6	調整不明
322	270	土壙 7	弥生土器	無頸壺	8.5	5.4	10.3	口縁部に一対の穿孔
323	255	土壙 7	弥生土器	鉢	16.4	4.5	12.5	底部わずかに上げ底
324	271	土壙 7	弥生土器	製塩土器		4.4		
325	265	土壙 7	弥生土器	高杯	27.6	19.8	16.9	口縁端部上面に凹線めぐる
326	264	土壙 7	弥生土器	高杯	26.0	14.8	17.5	水濾し粘土
327	251	土壙 8	弥生土器	甕	14.53			
328	286	土壙11	弥生土器	甕	14.8	5.6	23.2	底面はナデ
329	282	土壙11	弥生土器	甕	14.2	5.9	22.5	口縁部にヒビ割れ補修 2 箇所

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	備考
330	284	土壙11	弥生土器	甕	12.4	4.4	17.0	
331	285	土壙11	弥生土器	台付鉢	13.8	7.8	16.5	
332	283	土壙11	弥生土器	高杯		14.1		脚柱部の透し3方向・脚部の透し6方向
333	310	土壙11	弥生土器	甕	14.5	6.5	21.6	
334	314	土壙12	弥生土器	高杯	15.9			
335	314	土壙12	弥生土器	高杯	15.8	12.4		水濾し粘土
336	311	土壙12	弥生土器	台付鉢	11.5	3.0	7.2	
337	304	土壙13	弥生土器	甕	16.8	6.0	20.4	
338	307	土壙13	弥生土器	甕	15.2	5.7	19.2	肩部にヘラ描あり
339	303	土壙13	弥生土器	直口壺	10.0			水濾し粘土・脚台が付く
340	318	土壙17	弥生土器	甕	15.4	5.2	21.9	
341	312	土壙17	弥生土器	鉢	18.0	5.8	10.9	調整不明
342	313	土壙17	弥生土器	高杯	26.1			
343	316	土壙17	弥生土器	器台				
344	652	土壙21	弥生土器	甕	15.4	4.3	22.5	
345	619	土壙21	弥生土器	台付鉢	15.4			
346	618	土壙21	弥生土器	高杯		11.1		
347	616	土壙23	弥生土器	甕	10.7	5.3	16.4	底部は被熱による赤化
348	614	土壙23	弥生土器	鉢	10.3	3.3	7.6	
349	611	土壙24	弥生土器	甕	11.3			
350	612	土壙24	弥生土器	甕	13.2			
351	615	土壙24	弥生土器	高杯	17.2			脚柱部に5方向の円孔
352	617	土壙25	弥生土器	長頸壺	12.1	7.2		肩部に線刻あり
353	751	土壙25	弥生土器	鉢	33.4	9.0	18.8	
354	628	土壙28	弥生土器	壺	14.8			調整不明
355	610	土壙28	弥生土器	長頸壺	13.4			
356	623	土壙28	弥生土器	壺	11.6			
357	609	土壙29	弥生土器	長頸壺	18.5			
358	608	土壙29	弥生土器	甕	18.8			
359	651	土壙34	弥生土器	長頸壺	16.3			
360	664	土壙34	弥生土器	長頸壺	12.9			
361	676	土壙34	弥生土器	壺	12.5	7.1	20.7	
362	658	土壙34	弥生土器	壺	15.4			
363	696	土壙34	弥生土器	壺	16.6			
364	655	土壙34	弥生土器	壺	16.4	8.8	28.6	
365	642	土壙34	弥生土器	壺	11.1	5.0	23.6	
366	672	土壙34	弥生土器	長頸壺	14.5			
367	684	土壙34	弥生土器	壺		9.2		
368	621	土壙34	弥生土器	壺	10.5	5.1	21.1	
369	637	土壙34	弥生土器	壺	11.9	6.4	20.4	胴部外面被熱による剝離と赤化
370	646	土壙34	弥生土器	甕	11.8	3.7	24.0	
371	629	土壙34	弥生土器	甕	13.8	4.6	18.8	胴部に被熱による剝離
372	635	土壙34	弥生土器	甕	11.9	4.3	15.2	胴部外面は被熱による剝離と赤化
373	631	土壙34	弥生土器	甕	10.2	4.5	11.5	底部わずかに上げ底
374	677	土壙34	弥生土器	甕	15.5			
375	647	土壙34	弥生土器	甕	15.1	5.0	20.2	
376	668	土壙34	弥生土器	甕	13.3			
377	645	土壙34	弥生土器	甕	12.2	5.4	23.9	胴下半は被熱による赤化
378	653	土壙34	弥生土器	甕	15.8	9.2	28.5	
379	654	土壙34	弥生土器	甕	14.1	6.1	28.3	
380	638	土壙34	弥生土器	甕	13.4			
381	683	土壙34	弥生土器	甕	17.8			
382	656	土壙34	弥生土器	甕	14.2	6.8	29.7	
383	632	土壙34	弥生土器	甕	10.8	4.9	16.5	底面はナデ
384	666	土壙34	弥生土器	甕	12.5			
385	657	土壙34	弥生土器	甕	15.1			
386	649	土壙34	弥生土器	甕	22.4	13.6	43.0	
387	624	土壙34	弥生土器	甕	12.5	4.0	23.7	底面ヘラミガキ
388	641	土壙34	弥生土器	鉢	12.4	4.2	9.6	口縁部には一対の円孔
389	663	土壙34	弥生土器	鉢	10.2			
390	650	土壙34	弥生土器	鉢	7.7	4.6	7.3	
391	640	土壙34	弥生土器	鉢	13.7	6.0	16.2	底面はナデ
392	639	土壙34	弥生土器	台付鉢	20.0	14.0	17.0	脚部には6方向の円孔
393	636	土壙34	弥生土器	台付鉢	14.7	5.1	12.8	
394	669	土壙34	弥生土器	鉢	16.1			
395	682	土壙34	弥生土器	片口鉢	30.0	6.8	17.7	

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
396	630	土壙34	弥生土器	鉢	13.0	7.0	12.1	口縁部に一対の円孔
397	643	土壙34	弥生土器	鉢	16.0	4.2	8.6	
398	678	土壙34	弥生土器	高杯		15.6		
399	644	土壙34	弥生土器	台付鉢？		15.6		
400	673	土壙34	弥生土器	高杯		15.3		
401	675	土壙34	弥生土器	高杯		14.0		
402	671	土壙34	弥生土器	高杯		14.1		
403	681	土壙34	弥生土器	高杯	26.0			
404	633	土壙34	弥生土器	高杯	25.4	17.6	23.8	脚部の透しは３方向
405	680	土壙34	弥生土器	高杯	28.1			
406	662	土壙34	弥生土器	高杯	11.6			
407	670	土壙34	弥生土器	高杯	24.8			
408	648	土壙34	弥生土器	高杯	28.4	17.0	17.9	
409	674	土壙34	弥生土器	高杯	13.0			
410	634	土壙34	弥生土器	高杯	25.0	13.8	18.9	透しは脚部４方向・脚端部７方向
411	679	土壙34	弥生土器	器台	14.0	15.8	14.9	
412	665	土壙34	弥生土器	製塩土器	11.0	4.7	16.08	
413	660	土壙34	弥生土器	製塩土器		4.9		
414	659	土壙34	弥生土器	製塩土器		5.1		
415	661	土壙34	弥生土器	製塩土器		4.5		
416	625	土壙35	弥生土器	壺	11.9	4.8		口縁部内外面に櫛描波状文
417	622	土壙35	弥生土器	甕	14.4			
418	627	土壙35	弥生土器	高杯		15.4		脚部の穿孔は２箇１組
419	693	土壙35	弥生土器	製塩土器	10.5			
420	694	土壙35	弥生土器	製塩土器		4.5		
421	695	土壙35	弥生土器	製塩土器		4.8		
422	692	土壙37	弥生土器	台付直口壺	7.5			
423	230	溝７	弥生土器	長頸壺	14.3			調整不明
424	231	溝７	弥生土器	台付鉢		6.6		
425	225	溝４．５	弥生土器	甕	18.0			
426	224	溝４．５	弥生土器	壺	10.6			
427	227	溝４．５	弥生土器	高杯		18.7		
428	229	溝２	弥生土器	甕	17.0			
429	228	溝３	弥生土器	高杯	18.6			
430	233	溝５	弥生土器	甕	14.0			
431	222	溝５	弥生土器	高杯	22.7	13.8	13.0	脚部の円形透し穴５方向
432	190	溝９	弥生土器	台付鉢	16.1	8.3	20.8	
433	185	溝９	弥生土器	高杯	17.3	11.8	10.9	
434	234	溝12	弥生土器	壺	14.8			
435	223	溝12	弥生土器	壺	19.6			
436	226	溝12	弥生土器	ミニチュア	8.0	3.3	8.1	
437	212	溝13	弥生土器	長頸壺		8.0		胴部外面には籠目痕
438	221	溝13	弥生土器	壺	21.2	8.5	37.1	
439	208	溝13	弥生土器	壺		7.5		底面ミガキ・胴部外面タタキ
440	210	溝13	弥生土器	壺	19.3	8.2	35.0	肩部にタタキメ残る
441	214	溝13	弥生土器	壺	22.5			
442	197	溝13	弥生土器	壺	19.0			
443	219	溝13	弥生土器	壺	27.3			
444	199	溝13	弥生土器	壺	18.0			
445	216	溝13	弥生土器	壺	16.6			
446	191	溝13	弥生土器	壺	13.8			外面丹塗り
447	203	溝13	弥生土器	壺	6.4	2.4	10.5	
448	218	溝13	弥生土器	甕		3.6		外面タタキメ
449	207	溝13	弥生土器	甕	15.7		23.9	肩部に記号状の刺突３箇
450	209	溝13	弥生土器	台付直口壺	10.3	13.3	21.1	水濾し粘土
451	213	溝13	弥生土器	甕	15.4	4.8	24.4	チョコレート色の胎土・角閃石多く含む
452	211	溝13	弥生土器	甕	13.6	5.0	20.1	チョコレート色の胎土・角閃石含む
453	215	溝13	弥生土器	甕	17.5	31.6	31.4	底面ヘラミガキ
454	195	溝13	弥生土器	甕	14.7	3.0	17.6	胴部外面下半ヘラミガキ
455	217	溝13	弥生土器	鉢	15.8	5.7	13.8	底部穿孔
456	193	溝13	弥生土器	鉢	15.1	3.3	7.6	
457	206	溝13	弥生土器	台付鉢	15.0	9.7	13.0	
458	204	溝13	弥生土器	鉢	21.4	7.5	15.3	底面ハケメ
459	205	溝13	弥生土器			18.9		脚台部
460	196	溝13	弥生土器	鉢	10.7		8.01	
461	220	溝13	弥生土器	高杯	17.3	12.2	10.5	調整不明

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	備考
462	194	溝13	弥生土器	高杯	17.4			
463	198	溝13	土師器	高杯	20.8	13.6	15.4	杯部調整不明
464	201	溝13	弥生土器	手捏ね	5.3	1.8	2.5	
465	202	溝13	弥生土器	手捏ね	4.9	1.7	2.9	
466	200	溝13	弥生土器	手捏ね	4.4	3.2	1.6	
467	192	溝13	弥生土器	器台	14.2			
468	386	溝13	弥生土器	長頸壺	22.2			頸部の沈線はラセン状
469	387	溝13	弥生土器	壺				
470	385	溝13	弥生土器	甕	14.6			胴部内面下半指頭圧痕
471	383	溝13	弥生土器	甕	13.3			
472	379	溝13	弥生土器	鉢	18.4	5.8	10.4	
473	382	溝13	弥生土器	甕	12.6			チョコレート色・胎土に角閃石含む
474	380	溝13	弥生土器	台付鉢	11.4	3.0	9.4	
475	381	溝16	弥生土器	甕	22.8			
476	378	溝16	弥生土器	甕	14.2			
477	752	溝17	弥生土器	甕	19.1	8.0	35.9	底面はヘラミガキ
478	388	溝17	弥生土器	甕	14.1	7.2		底部は上げ底
479	700	溝25	弥生土器	壺	12.6			
480	699	溝25	弥生土器	壺	11.7	5.3	20.7	全体的に被熱による赤化
481	708	溝25	弥生土器	壺	10.6	6.0	24.4	
482	707	溝25	弥生土器	高杯	23.8	11.3	17.0	
483	702	溝25	弥生土器	甕	10.6	4.8	19.6	口縁部外面には強い横ナデによる凹凸がめぐる
484	705	溝25	弥生土器	甕	13.3	5.6	24.8	底部に焼成後の穿孔
485	698	溝25	弥生土器	甕	11.9	4.6	21.3	胴部外面ハケ後ヘラミガキ
486	704	溝25	弥生土器	甕	13.3	4.4	23.2	
487	709	溝25	弥生土器	甕	12.1	5.4	21.6	底面はナデ
488	701	溝25	弥生土器	鉢	10.7	3.2	8.7	
489	703	溝25	弥生土器	鉢	13.0	6.0	15.0	口縁部に円孔が一対
490	180	竪穴住居6	土師器	高杯	15.5			
491	182	竪穴住居7	土師器	甑	25.6			
492	181	竪穴住居7	土師器	甕	12.3			
493	183	竪穴住居7	須恵器	杯身	10.7			底部ヘラケズリ右
494	158	竪穴住居10	土師器	甕	13.3		16.9	
495	184	竪穴住居10	土師器	甕	11.9			胴部内面ナデアゲ
496	186	竪穴住居10	土師器	甕	13.3			
497	157	竪穴住居10	土師器	甕	22.0	13.25	27.7	口縁部外面に記号状の円形刺突
498	187	竪穴住居10	土師器	鉢	12.5			
499	156	竪穴住居10	土師器	甑	20.6	9.9	25.0	底部近くに1対の円孔あり
500	174	建物8	須恵器	杯蓋				
501	10	井戸11	土師器	直口壺	10.2			胎土は水濾し粘土
502	13	井戸11	土師器	甕	17.1			口縁上端部に凹部めぐる
503	3	井戸11	土師器	甕	13.5		12.5	胴部内面は指押え後ナデ
504	2	井戸11	土師器	甕	14.7		17	胴部内面は指押え後ヘラケズリ
505	14	井戸11	土師器	甕	18.6			胴部内面粘土紐接合痕あり
506	11	井戸11	土師器	甕	17			口縁端部上面に凹部めぐる
507	1	井戸11	土師器	鍔甕	15.1		22.4	焼成後底部穿孔
508	8	井戸11	須恵器	杯蓋	12.9		4.4	口縁端部に凹部めぐる
509	4	井戸11	須恵器	杯蓋	13.1			口縁端部に凹部めぐる
510	9	井戸11	須恵器	杯身	10.6		4.7	底部ヘラケズリは左
511	7	井戸11	須恵器	杯身	9.8			
512	6	井戸11	須恵器	杯身				口縁上端部に凹部めぐる
513	99	井戸12	土師器	壺	11.8			調整不明
514	100	井戸12	土師器	カマド？				
515	95	井戸12	須恵器	杯蓋	13.0		4.5	
516	96	井戸12	須恵器	杯蓋	11.9			
517	97	井戸12	須恵器	杯身	11.9		3.9	底部ヘラケズリ左
518	98	井戸12	須恵器	杯身	10.4		4.1	底部ヘラケズリ右
519	102	井戸12	須恵器	高杯	11.3	8.6	12.5	長方形透し2方向
520	105	井戸12	須恵器	高杯		13.8		長方形透し2段2方向
521	101	井戸12	須恵器	高杯	12.7	9.1	7.4	
522	103	井戸12	須恵器	高杯		8.9		
523	104	井戸12	須恵器	高杯		9.2		
524	115	井戸13	土師器	甕	13.0		15.3	全体的に赤色化している
525	120	井戸13	土師器	甑	22.3	11.4	26.9	把手が一対つく。底部近くに円形穿孔あり
526	110	井戸13	須恵器	杯蓋	13.9		3.9	天井部ヘラケズリ
527	109	井戸13	須恵器	高杯	11.8			

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	備考
528	325	井戸13	須恵器	杯身	11.0			底部ヘラケズリ右
529	324	井戸13	須恵器	甕				
530	240	土壙40	土師器	甕	14.7			
531	244	土壙48	須恵器	杯身	11.6		4.3	底部ヘラ切り未調整
532	243	土壙48	須恵器	高杯		9.0		
533	403	落ち込み1	土師器	壺	19.7			
534	404	落ち込み1	土師器	壺	11.7			
535	407	落ち込み1	須恵器	甕	18.8			
536	410	落ち込み1	須恵器	短頸壺	9.7			
537	409	落ち込み1	須恵器	杯蓋	11.4			天井部ヘラケズリ左
538	406	落ち込み1	須恵器	杯身	11.0			底部ヘラケズリ左
539	414	落ち込み1	須恵器	杯身	10.9		3.3	底部はヘラ切り未調整
540	405	落ち込み1	須恵器	杯身	10.8			
541	415	落ち込み1	須恵器	杯身	12.1		3.7	底部はヘラケズリ右
542	416	落ち込み1	須恵器	杯身	12.5			底部はヘラケズリ左
543	417	落ち込み1	須恵器	杯身	12.6		4.2	底部はヘラ切り未調整
544	408	落ち込み1	須恵器	横瓶	11.5			口縁部にヘラ描
545	176	溝46	須恵器	高杯	14.0			
546	177	溝47	須恵器	杯身	10.6		4.7	
547	319	溝53	土師器	壺	14.2		21.1	底面ヘラミガキ
548	686	溝63	須恵器	杯身	13.1		5.1	
549	107	井戸16	備前焼	摺鉢	38.3			
550	106	井戸16	備前焼	甕				
551	322	井戸17	備前焼	摺鉢	26.2			
552	323	井戸17	備前焼	摺鉢	31.5			
553	321	井戸18	備前焼	甕				
554	320	井戸18	土師質	小皿	11.8	7.1	2.4	
555	238	土壙55	土師質	高台付椀	14.6	6.6	5.3	
556	250	土壙55	土師質	皿	13.2	6.4	3.1	底部ナデ
557	249	土壙55	瓦器	小皿	9.4	4.5	1.8	
558	308	土壙55	備前焼	甕				
559	239	土壙55	白磁	椀	15.9			
560	235	土壙57	土師質	小皿	9.8		1.8	
561	242	土壙59	土師質	土鍋	30.0			
562	245	土壙59	備前焼	擂鉢				
563	248	土壙65	瓦器	小皿	9.4	3.8	1.9	暗文あり
564	246	土壙70	備前焼	甕				
565	173	溝75	備前焼	摺鉢				
566	172	溝76.78	備前焼	甕				
567	171	溝76.78	土師質	土鍋				胴部外面タテハケ
568	170	溝77	備前焼	摺鉢				
569	338	溝85	備前焼	壺	15.2			
570	339	溝85	備前焼	摺鉢				
571	341	溝85	備前焼	摺鉢		14.0	11.3	
572	340	溝86	備前焼	摺鉢	29.8	14.8	11.6	
573	335	溝87	備前焼	壺	10.6			
574	330	溝87	亀山焼	甕				胴部外面格子目タタキ・内面ナデ
575	333	溝87	備前焼	甕				
576	331	溝87	備前焼	摺鉢				
577	328	溝87	備前焼	摺鉢				
578	329	溝87	備前焼	摺鉢				
579	332	溝87	土師質	小皿	10.7	7.0	2.6	底部糸切り
580	334	溝87	瓦質	火舎	11.0	8.8	4.5	
581	337	溝91	備前焼	甕				
582	336	溝91	備前焼	摺鉢	28.6			
583	428	(P995)	弥生土器	壺	14.8	8.1	32.1	
584	429	(P995)	弥生土器	台付鉢	11.5	5.0	10.1	
585	430	(P995)	弥生土器	甕	14.0	5.5	27.8	胴部下半被熱による赤化
586	427	(P995)	弥生土器	甕	13.7	7.0	20.6	胴部下半から底部は被熱による赤化
587	422	(P996)	弥生土器	甕	13.0	5.4	24.5	
588	423	(P996)	弥生土器	高杯	21.5	15.8	14.8	
589	426	(P996)	弥生土器	甕	14.4	5.2	26.7	底部やや上げ底でハケメ
590	424	(P996)	弥生土器	甕	10.6	4.6	16.0	
591	425	(P996)	弥生土器	鉢	14.5	4.5	14.8	底面ハケメ
592	401	土壙81	縄文土器	浅鉢				
593	396	溝110	弥生土器	長頸壺	26.2			

掲載番号	実測番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	備考
594	390	溝110	弥生土器	長頸壺	18.8			籾痕付着
595	395	溝110	弥生土器	長頸壺	17.4			
596	389	溝110	弥生土器	壺				胴部の突帯のみ丹塗り
597	402	溝110	弥生土器	甕	14.4			
598	394	溝110	弥生土器	高杯	10.6	9.2	9.2	
599	397	溝110	弥生土器	高杯	25.4			
600	391	溝110	弥生土器	高杯	37.5			
601	392	溝110	弥生土器	器台				脚柱部に6方向の円孔が2段
602	399	溝113	須恵器	杯蓋	11.2		4.3	天井部はヘラ切り未調整
603	400	溝113	須恵器	杯蓋	10.8		4.3	天井部はヘラ切り未調整
604	739	旧河道2	弥生土器	壺	13.0	8.1	25.7	頸部下端は削り出し突帯
605	723	旧河道2	弥生土器	甕				胴部内面ナデ・胎土に砂粒多く含む
606	728	旧河道2	弥生土器	甕				胴部内面ヘラミガキ・外面煤付着・胎土に砂粒多く含む
607	724	旧河道2	弥生土器	壺				胎土に砂粒多く含む
608	730	旧河道2	弥生土器	壺		8.0		
609	733	旧河道2	弥生土器	壺				粘土紐は外傾接合
610	729	旧河道2	弥生土器	壺?		9.6		底面ナデ・胎土に砂粒多く含む
611	735	旧河道2	弥生土器	壺	11.5	6.3	22.0	底面はナデ
612	726	旧河道2	弥生土器	壺	15.5			胎土に砂粒多く含む
613	737	旧河道2	弥生土器	壺	15.6	6.5	41.4	底部はやや上げ底・胴部下半煤付着
614	736	旧河道2	弥生土器	壺	14.9	11.9	56.5	
615	722	土壙85	弥生土器	甕	20.7			外面煤付着・胎土に砂粒多く含む
616	732	溝122	弥生土器	壺	15.6			胎土に砂粒多く含む
617	731	溝122	弥生土器	壺	10.4			胎土に砂粒多く含む
618	734	溝122	弥生土器	蓋	21.3			胎土に砂粒多く含む
619	727	溝127	弥生土器	鉢	24.2			籾圧痕・外面煤付着
620	738	溝127	弥生土器	甕	46.1	10.5	47.7	外面煤付着
621	714	溝128	弥生土器	甕				胴部外面ハケメ・内面ヘラミガキ
622	719	溝128	弥生土器	甕				胴外面ハケメ・内面ナデ・胎土に砂粒多く含む
623	713	溝128	弥生土器	甕	20.5			調整不明
624	710	溝128	弥生土器	高杯	20.0			口縁端部上面には2条の凹線めぐる
625	725	溝132	弥生土器	長頸壺	16.4			口縁部横ナデ
626	720	溝136	弥生土器	壺	15.0			
627	721	溝136	弥生土器	長頸壺	19.6			粘土紐の接合は内傾
628	715	溝137	弥生土器	甕	13.3	5.2	25.4	肩部には記号状の刺突2箇
629	740	土器溜り2	弥生土器	壺	13.8	6.6	25.0	底面はナデ
630	716	溝145	須恵器	杯身	12.3		4.1	底部のヘラケズリ左
631	718	溝147	須恵器	杯身	14.6		4.2	天井部のヘラケズリ左
632	717	溝147	須恵器	高杯		9.2		4方向の円孔
633	711	土壙92	土師質	小皿	10.7	4.7	3.0	内外面横ナデ
634	712	土壙92	土師質	小皿	10.5	4.5	3.0	内外面横ナデ

石製品一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大値（cm） 長	幅・径	厚	重量（g）	石材	残存	備考
1		23·24C·D	（下層水田埋土）	弥生	石鏃	Ⅱ	19.5	14.5	2.8	0.6	サヌカイト	完形	
2	S29	21D	（土壙50）	古墳	石錐		32.5	14.0	5.0	2.1	サヌカイト	欠損	
3		22D	（下層水田埋土）	弥生	石鏃	Ⅳ	36.5	14.0	5.5	2.9	サヌカイト	完形	
4	S20	21C	溝25	弥生後期	石庖丁		135.0	41.0	11.0	52.6	サヌカイト	完形	打製
5		21D	黄灰褐色土層		石鏃	Ⅵ	35.0	14.5	3.5	2.0	サヌカイト	欠損	
6	S12	21D	土壙35	弥生後期	石鏃	Ⅵ	46.5	17.0	7.0	5.7	サヌカイト	欠損	
7	S11	21C·D	土壙34	弥生後期	石錘		105.0	89.0	67.0	21.7	花崗岩	完形	有溝
8		21D	黄灰褐色土層		石庖丁		38.0	42.5	12.0	913.2	サヌカイト	破片	打製
9		22・23D	（下層水田層）	弥生	削器		27.5	26.0	5.5	4.6	サヌカイト	完形	
10		14·15C·D	溝87	中・近世	礎石？			179.5	90.4	3.95kg	花崗岩	完形	
11	S14	13D	溝9と13の合流部礫床	弥生後期	敲石		71.5	61.0	44.0	267.2	花崗岩	完形	
12	S82	36D	暗灰色粘土層		紡錘車		38.0	38.0	11.5	21.2	滑石	欠損	
13	S60	35D	旧河道2抉れ部砂層	弥生前期	敲石		101.0	101.0	32.0	512.3	花崗岩	完形	
14	S77	34C	溝137	弥生後期	石鏃	Ⅰ	25.0	14.5	3.3	1.0	サヌカイト	完形	
15	S76	34C	溝136	弥生後期	石鏃	Ⅱ	16.0	17.5	4.0	1.1	サヌカイト	欠損	
16	S75	34C	溝136断面	弥生後期	石鏃	Ⅰ	40.0	21.0	5.2	3.5	サヌカイト	完形	
17	S74	33D	溝135	弥生後期	石鏃	Ⅴ	14.0	13.0	3.0	0.3	サヌカイト	完形	
18	S61	33D	溝120	弥生前期	石鏃	Ⅴ	16.5	12.5	2.4	0.7	サヌカイト	完形	
19	S70	34C	溝128断面	弥生中期	石錐		32.0	11.0	5.0	1.9	サヌカイト	欠損	
20	S67	34C	溝128溝底	弥生中期	石庖丁		108.0	50.5	10.8	62.8	サヌカイト	欠損	打製
21	S68	34C	溝128溝底	弥生中期	石鏃	Ⅱ	27.0	16.5	3.0	1.3	サヌカイト	完形	
22	S69	34C	溝128下層粗砂層	弥生中期	石鏃	Ⅱ	21.5	17.0	3.8	1.0	サヌカイト	完形	
23	S65	34C·D	溝127	弥生前期	石鏃	Ⅰ	18.0	14.5	2.7	0.6	サヌカイト	完形	
24	S66	34C·D	溝127	弥生後前期	石鏃	Ⅱ	19.0	17.0	2.8	0.7	サヌカイト	完形	
25	S64	34C·D	溝127	弥生前期	削器		57.5	32.5	6.5	13.4	サヌカイト	完形	
26	S57	36D	旧河道2腐蝕土	弥生前期	石鏃	Ⅱ	23.0	23.0	4.3	2.1	サヌカイト	欠損	
27	S58	36C	旧河道2	弥生前期	石庖丁		99.0	52.0	11.0	60.1	サヌカイト	欠損	打製
28		34C	土器溜り2No19	弥生後期	削器		41.5	22.0	5.0	5.0	サヌカイト	完形	
29	S63	34C	溝122	弥生前期	石鏃	Ⅱ	14.5	15.5	3.0	0.5	サヌカイト	完形	
30	S62	33D	溝121	弥生前期	石鏃	Ⅱ	18.0	15.0	4.0	0.9	サヌカイト	完形	
31	S71	35D	溝131	弥生中期	石錐		37.5	10.0	5.5	2.2	サヌカイト	完形	
32		33D	（No59）灰色粘土		石鏃	Ⅱ	17.5	14.5	2.5	0.5	サヌカイト	完形	
33	S79	33D	島状高まり上面暗褐色粘土	弥生	石鏃	Ⅴ	11.5	9.0	2.1	0.2	サヌカイト	完形	
34		33D	島状高まり上面暗褐色粘土	弥生	石鏃	Ⅱ	18.5	13.0	2.0	0.5	サヌカイト	完形	
35		33C	水田層？	弥生	石鏃	Ⅱ	22.0	16.0	3.0	0.9	サヌカイト	完形	
36		35C·D	弥生後期水田層	弥生後期	石鏃	Ⅰ	19.0	18.5	4.5	1.2	サヌカイト	完形	
37		35D	水田層	弥生	石鏃	Ⅱ	19.0	14.0	3.5	0.7	サヌカイト	完形	
38		34C·D	弥生後期水田層灰黒色粘土	弥生後期	石鏃	Ⅳ	36.0	14.0	4.0	2.3	サヌカイト	完形	
39		35D	弥生後期水田層	弥生後期	石鏃	Ⅵ	34.5	13.5	6.0	2.1	サヌカイト	完形	
40		34D	弥生後期水田層	弥生後期	石鏃	Ⅳ	36.5	16.0	5.5	2.9	サヌカイト	完形	
41	S80		灰黄褐色粘質土畝畝上層	弥生	石鏃	Ⅳ	43.5	16.0	3.5	2.4	サヌカイト	完形	
42	S72	36D	後期水田層	弥生後期	石庖丁		82.0	37.0	10.0	40.4	サヌカイト	完形	打製
43		33～36C·D	表採		削器		75.0	46.5	5.0	26.8	サヌカイト	完形	
44	S59	36C	旧河道2灰色粘質土層上面		石錘		80.5	58.5	16.5	114.5	流紋岩の熔岩	完形	打欠
45	S73	34D	畝畝上面	弥生	石庖丁		87.0	53.5	8.5	48.4	サヌカイト	完形	打製
46		34D	畝畝上層	弥生	石鏃	Ⅰ	25.0	11.5	4.0	1.0	サヌカイト	完形	
47		34D	黄褐色粘土	弥生	石鏃	Ⅱ	26.0	16.0	3.0	1.1	サヌカイト	完形	
48		35D	灰褐色粘性土水田層直下	弥生	石鏃	Ⅱ	18.5	17.0	3.0	0.9	サヌカイト	欠損	
49	S78	34C	暗褐色粘性土畝畝西肩	弥生	石鏃	Ⅱ	24.0	15.5	2.8	1.1	サヌカイト	完形	
50		35C	灰色粘土（上層）		削器		56.0	33.0	7.0	11.7	サヌカイト	欠損	
51	S81	35C	微高地東端斜面上面		石庖丁		54.0	46.0	8.5	21.9	サヌカイト	破片	打製
52	S23	10C·D	土器溜り1	弥生後期	砥石		50.0	26.5	18.5	41.2	流紋岩の凝灰岩	欠損	
53	S43	10～13C	北側溝		砥石		120.0	38.0	43.5	159.6	流紋岩の凝灰岩	欠損	
54	S32	11D	（P162）	中世	砥石		78.0	22.5	29.0	92.5	流紋岩の凝灰岩	欠損	
55	S45	12C·D	包含層		砥石		93.5	42.0	8.5	48.7	頁岩	欠損	
56	S26	12C	井戸13	古墳後期	砥石		92.0	45.0	32.0	126.4	流紋岩の凝灰岩	欠損	
57	S44	11C·D	包含層		砥石		72.0	41.0	35.0	69.0	流紋岩の凝灰岩	欠損	
58	S27	12C·D	落ち込み3	中世	砥石		62.0	28.0	14.0	55.8	流紋岩の熔岩	欠損	
59	S53	18H	溝102	弥生後期	石庖丁		51.5	13.0	10.0	68.4	サヌカイト	完形	打製
60	S21	19・20A	溝36	弥生後期	石鏃	Ⅱ	24.0	17.0	3.5	0.9	サヌカイト	欠損	
61		19H	北側溝		削器		41.5	27.0	6.0	6.5	サヌカイト	欠損	
62	S55	19H	溝110	弥生後期	楔形石器		38.5	39.0	14.0	26.2	サヌカイト	完形	
63	S56	19H	溝110	弥生後期	楔形石器		29.0	24.5	7.5	6.3	サヌカイト	完形	
64	S54	19H	溝109	弥生後期	楔形石器		25.0	24.0	5.0	3.7	サヌカイト	完形	
65	S19	14C	溝19b	弥生後期	石鏃	Ⅳ	61.0	14.0	5.2	3.9	サヌカイト	完形	

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大値（mm） 長	幅・径	厚	重量（g）	石材	残存	備考
66	S50	14D	中世洪水砂層	中世	石庖丁		81.0	41.5	10.0	43.5	サヌカイト	完形	打製
67		13C・D	微高地東水田層中	弥生後期	石鏃	Ⅳ	30.0	12.0	4.0	1.4	サヌカイト	欠損	
68	S48	14D	中世洪水砂層下層	中世	砥石		40.0	16.0	14.0	13.6	流紋岩の凝灰岩	破片	
69	S1	15C・D	旧河道1灰黒色粘土層	弥生前期	石庖丁		81.5	42.0	7.5	27.4	サヌカイト	完形	打製
70		13C	黄褐色基盤上	弥生	石鏃	Ⅱ	20.5	13.5	3.0	0.7	サヌカイト	欠損	
71	S28	13C・D	（微高地東水田層下の溝）	弥生後期	砥石		61.0	51.5	23.0	142.5	安山岩	破片	
72	S47	13・14C・D	中世包含層	中世	砥石		45.0	32.0	20.5	41.6	流紋岩の凝灰岩	破片	
73	S25	12C	井戸13	古墳後期	敲石		103.0	90.0	61.0	821.3	安山岩？	完形	
74	S9	11D	土壙9	弥生後期	石錘		77.0	67.0	49.0	344.5	花崗岩	完形	
75		10C・D	表土		石錘		82.0	62.0	48.0	320.0	花崗岩	欠損	
76	S38	11C・D	黄色土層まで	弥生	石錘		69.0	63.0	25.0	150.0	流紋岩の熔岩	完形	打欠
77	S22	10C・D	土器溜り1	弥生後期	石錘		83.0	64.0	51.0	317.7	花崗岩	欠損	有溝
78	S15	13D	溝9と13の合流部の礫床	弥生後期	石錘		99.5	80.0	50.0	580.0	花崗岩	完形	有溝
79	S7	11D	井戸2	弥生後期	石錘		62.0	50.0	38.0	152.7	花崗岩	完形	有溝
80	S41	10D	包含層		石錘		45.5	43.0	36.0	91.9	花崗岩	完形	有溝
81	S42	12D	中世洪水	中世	石斧		117.5	68.0	44.0	540.1	安山岩？	欠損	磨製
82		13C	（土壙22）	古墳	紡錘車			39.5	13.0	14.0	滑石	破片	
83	S46	13C	中世落ち込み	中世	紡錘車			36.0	11.5	16.5	滑石	欠損	
84		10D	（P1642）	弥生後期	石鏃	Ⅲ	28.0	16.0	3.5	1.7	サヌカイト	完形	
85		12C	（P725）	中世	削器		39.0	33.5	8.0	11.1	サヌカイト	完形	
86	S3	11D	竪穴住居1P4	弥生後期	石鏃	Ⅱ	25.0	19.0	3.0	0.9	サヌカイト	完形	
87		11D	井戸9灰黄色層	弥生後期	石鏃	Ⅱ	18.0	10.5	2.7	0.4	サヌカイト	破片	
88	S8	12・13C	井戸7（ドテ）	弥生後期	石庖丁		68.0	51.0	10.0	31.0	サヌカイト	破片	打製
89		11C	土壙64	中世	石鏃		31.5	21.5	3.5	2.0	サヌカイト	欠損	
90		13C	（溝1）		石鏃	Ⅱ	18.0	15.5	3.0	0.5	サヌカイト	完形	
91	S18	13C	溝13	弥生後期	石鏃	Ⅰ	20.0	15.5	3.0	2.8	サヌカイト	完形	
92		12C	（溝27）		石鏃	Ⅲ	25.5	15.0	4.0	1.5	サヌカイト	欠損	
93	S17	13D	溝9と13の合流部の礫床	弥生後期	石庖丁		59.0	38.0	9.0	24.7	サヌカイト	完形	打製
94		10～13C・D	側溝		削器		48.5	30.0	3.5	5.6	サヌカイト	完形	
95		11C	（P48）	中世	石鏃	Ⅱ	27.0	19.0	3.5	1.5	サヌカイト	欠損	
96		11D	（P1009）	弥生後期	石鏃	Ⅱ	30.5	15.0	4.3	1.4	サヌカイト	欠損	
97		12C	（P1049）	弥生後期	石鏃	Ⅰ	28.5	21.0	4.0	3.0	サヌカイト	欠損	
98		11C	（P1116）	弥生後期	石鏃	Ⅰ	31.0	16.0	4.0	1.5	サヌカイト	欠損	
99		11C	（P1227）	弥生後期	石鏃	Ⅱ	19.0	13.0	4.0	0.9	サヌカイト	欠損	
100	S30	12D	（P1403）	弥生後期	石鏃	Ⅳ	22.5	12.0	3.5	1.1	サヌカイト	完形	
101	S49	11・12C・D	包含層		石庖丁		76.5	37.5	9.5	36.5	サヌカイト	完形	打製
102		12D	表土		石庖丁		57.0	50.0	8.5	30.0	サヌカイト	破片	打製
103		11C・D	表採		石鏃	Ⅳ	32.5	17.0	5.0	2.8	サヌカイト	完形	
104		10C・D	表土		石鏃	Ⅳ	48.5	16.5	4.5	3.1	サヌカイト	完形	
105		13C・D	表土		石錐		29.5	31.5	5.5	6.3	サヌカイト	欠損	
106	S35	11D	包含層		石錐		49.0	34.0	8.0	9.6	サヌカイト	完形	
107	S33	10C・D	包含層		石鏃	Ⅰ	24.0	14.0	3.5	0.9	サヌカイト	完形	
108		10C・D	包含層		石鏃	Ⅱ	13.5	11.0	2.8	0.4	サヌカイト	欠損	
109	S34	13C	包含層		石鏃	Ⅱ	17.0	16.5	2.8	0.7	サヌカイト	完形	
110	S36	11・12C・D	古墳包含層	古墳	石錐		26.5	11.5	4.8	1.4	サヌカイト	欠損	
111	S5	11D	井戸2	弥生後期	砥石		43.5	39.0	13.0	18.4	安山岩？	破片	
112	S4	11D	井戸2	弥生後期	エンドスクレイパー		42.5	55.5	10.0	19.6	サヌカイト	完形	
113	S51	23～25C・D	包含層		石鏃	Ⅰ	23.0	13.0	4.0	1.2	サヌカイト	完形	
114	S52	20C・D	包含層		敲石		220.2	78.0	74.0	1659.6	花崗岩	完形	
115		19C・D	黄色土の上層	弥生	UF		41.0	25.0	6.0	6.0	サヌカイト	破片	
116		11D	（P538）	中世	削器		27.5	34.5	9.5	8.6	サヌカイト	破片	
117		CD	土壙51北半上層	中世	UF		55.0	41.0	7.0	16.6	サヌカイト	欠損	
118	S10	11D	土壙13	弥生後期	削器		36.5	24.5	8.0	7.3	サヌカイト	破片	
119	S24	10C・D	土器溜り1	弥生後期	削器		53.0	44.0	9.5	14.4	サヌカイト	破片	
120		10D	土壙53	中世	UF		36.5	22.5	5.0	4.7	サヌカイト	欠損	
121	S2	12D	土壙1	弥生前期	削器		32.0	49.0	7.0	13.5	サヌカイト	欠損	
122	S16	13C	溝13	弥生後期	削器		41.0	38.0	11.0	15.8	サヌカイト	欠損	
123	S6	11D	井戸2	弥生後期	石核		107.0	141.0	19.3	322.8	サヌカイト	完形	
124	S37	10C・D	包含層		楔形石器		37.0	40.0	13.0	27.6	サヌカイト	完形	
125		13・14C・D	表土		削器		74.5	40.5	10.0	27.5	サヌカイト	完形	
126	S39	10D	古墳包含層	古墳	削器		68.0	45.5	11.0	36.3	サヌカイト	欠損	
127		15C	旧河道1東トレンチ	弥生前期	エンドスクレイパー		22.5	38.5	7.0	6.6	サヌカイト	欠損	
128		10D	古墳包含層	古墳	楔形		26.5	26.0	6.0	5.0	サヌカイト	完形	
129		13～15C・D	中世面清掃中		削器		36.0	32.0	4.5	5.4	サヌカイト	欠損	
130		10C・D	表土		石庖丁		42.0	33.5	8.5	16.6	サヌカイト	破片	打製
131		12・13C	北側溝		UF		29.0	38.0	5.0	6.4	サヌカイト	欠損	

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大値（cm）			重量（g）	石材	残存	備考
							長	幅・径	厚				
132		13D	（P1079）	弥生後期	削器		31.0	25.0	5.5	5.1	サヌカイト	欠損	
133		11C	（P1128）	弥生後期	UF		47.5	23.5	3.5	4.8	サヌカイト	欠損	
134		10～13C・D	包含層		石鏃	I	18.0	16.5	3.5	1.4	サヌカイト	欠損	
135		12・13C	（P1629）	弥生後期	削器		25.0	28.5	4.0	3.0	サヌカイト	欠損	
136	S40	10～13C・D	包含層		UF		54.5	46.0	7.5	15.7	サヌカイト	完形	
137		10CD	表土		削器		47.5	26.5	3.0	5.4	サヌカイト	欠損	
138	S13	12C	溝5	弥生後期	石鏃	III	29.5	18.5	4.5	2.3	サヌカイト	欠損	
139	S31	11D	P961	弥生	石鏃	III	40.0	23.5	10.0	8.8	サヌカイト	完形	
140		19CD	包含層		削器		33.0	54.0	6.5	10.9	サヌカイト	欠損	
141		11D	井戸2	弥生後期	浮子？		42.5	26.5		4.7	軽石	完形	
142		35C	微高地東端斜面上面		石斧		126.0	44.0	18.0	109.1	結晶片岩	完形	打製
143		35・36D	旧河道2トレンチ部	弥生前期	楔形石器		43.0	29.0	6.0	10.2	サヌカイト	完形	
144		35C	溝131	弥生中期	楔形石器		41.5	13.0	7.5	7.8	サヌカイト	欠損	
145		34D	弥生後期水田層	弥生後期	楔形石器		19.5	26.5	8.0	4.3	サヌカイト	破片	
146		33D	島状高まり上面	弥生	楔形石器		36.0	28.5	5.5	6.1	サヌカイト	完形	
147		35D	微高地東端斜面上面		楔形石器		17.5	30.5	9.0	5.2	サヌカイト	完形	
148		34・35C・D	（№148）	古墳	スポール		28.0	5.0	5.0	0.7	サヌカイト	完形	
149		34C	溝128断面	弥生	削器		37.0	17.5	9.5	10.1	サヌカイト	破片	
150		35C	溝128中層	弥生中期	削器		67.5	47.0	6.0	15.0	サヌカイト	欠損	
151		34C	溝138粗砂層	弥生中期	削器		29.0	29.5	8.0	6.8	サヌカイト	欠損	
152		35C	溝128下層粗砂層	弥生中期	削器		34.0	36.5	12.0	18.3	サヌカイト	欠損	
153		34・35C・D	溝127	弥生前期	楔形石器		59.0	53.0	9.0	27.7	サヌカイト	欠損	

土製品一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大値（mm） 長	幅・径	厚	重量（g）	残存	備考
1	C44	15C	溝87	中・近世	瓦経		68.2	46	21		欠損	
2	C104	23C・D	近現代攪乱		土錘	BⅤ	39.5	9		2	欠損	
3	C105	20・21C・D	近現代攪乱		土錘	BⅤ	39	10		3	欠損	
4			近現代攪乱		土錘	B	20	13.5		3	欠損	
5	C107	21C	北側溝		土錘	B	30	10		2	欠損	
6			表土（砂層）		土錘	B	26	12		2	欠損	
7			表土（砂層）		土錘	BⅤ	33.5	9		3	欠損	
8			（№1）	近世	土錘	B	36	10		3	欠損	
9	C109	34C	溝127底部	弥生前期	紡錘車		47	10		28	完形	
10	C96	13～15C・D	中世面清掃中	中世	土錘	B	45	27		33	欠損	
11		12C・D	包含層掘下げ中		土錘	B	20.5	12		1	欠損	
12	C65	11・12C・D	古墳包含層	古墳	土錘	BⅢ	33	11		4	完形	
13	C61	12・13C	北側溝		土錘	B	33	23		16	欠損	
14	C48	10D	（P495）	中世	土錘	BⅢ	34	10		3	完形	
15	C82	10C・D	表土		土錘	BⅤ	43	9.5		3	完形	
16	C52	11C	（P893）		土錘	B	30.5	14		5	欠損	
17	C20	10D	土壙52	中世	土錘	BⅢ	35	13		6	欠損	
18	C21	10D	土壙52	中世	土錘	BⅢ	36	12		5	欠損	
19		13D	（近世溝1）	近世	土錘	B	50	10.5		4	欠損	
20	C70	12D	表採		土錘	BⅢ	41	15		7	欠損	
21	C76	12D	表採		土錘	B	35.5	12		4	欠損	
22	C62	12D	表採		土錘	BⅠ	70	20		26	欠損	
23	C73	12D	表採		土錘	BⅣ	48.5	11		4	完形	
24	C79	12D	表採		土錘	B	40	11.5		4	欠損	
25	C22	11C	土壙57	中世	土錘	B	24	12		3	欠損	
26	C84	12D	中世洪水層	中世	土錘	BⅤ	38.5	9.5		3	完形	
27	C47		（P706）	中世	土錘	B	39	10		3	欠損	
28		12C・D	（近世溝1）	近世	土錘	B	35.5	10		3	欠損	
29	C88	10C・D	表土		土錘	B	37.5	11		4	欠損	
30	C86	12C・D	包含層		土錘	BⅤ	33.5	8		2	欠損	
31	C25	12C・D	落ち込み2	中世	土錘	BⅣ	44	12		4	完形	
32	C24	12C・D	落ち込み2	中世	土錘	BⅣ	47.5	9.5		4	欠損	
33	C17	11D	土壙41	古墳	土錘	B	41.5	12		5	欠損	
34	C85	10・11C・D	表土		土錘	BⅤ	37	9		2	欠損	
35	C26	12C・D	落ち込み2	中世	土錘	B	37	12.5		6	欠損	
36	C3	13C・D	溝13	弥生後期	土錘	B	27.5	13		4	欠損	
37	C29	13C	落ち込み2	中世	土錘	BⅢ	61	17		15	欠損	
38	C28	13C	落ち込み2	中世	土錘	B	43	11		4	欠損	
39	C31	11D	溝79	中世	土錘	B	24	10.5		2	欠損	
40		12・13D	（近世溝1）	近世	土錘	BⅢ	49	13.5		7	欠損	
41	C77	10C・D	表土		土錘	BⅣ	44	9.5		5	完形	
42	C60	12C・D	表土		土錘	B	41	28		28	欠損	
43	C75	12C・D	表土		土錘	BⅣ	47	10		4	完形	
44	C64	12C・D	表土		土錘	BⅢ	48	14.5		10	完形	
45	C58	10C・D	表土		土錘	AⅡ①	63.5	41		109	完形	
46	C78	11・12C・D	（近世溝5）	近世	土錘	BⅡ	53	11		5	完形	
47	C81	12D	表採		土錘	BⅤ	41	10.5		4	完形	
48	C4	13D	溝13	弥生後期	土錘	AⅢ	63	38		91	完形	
49	C30	11C	溝76	中世	土錘	B	62	26		34	欠損	
50	C56	11・12C・D	古墳包含層	古墳	土錘	BⅠ	67	24		38	完形	
51	C13	11D	竪穴住居7	古墳後期	土錘	BⅠ	68	19		24.6	欠損	
52	C16	12C	井戸13	古墳後期	土錘	BⅠ	59.2	19.4		21.6	完形	
53	C50	11D	（P140）	中世	土錘	BⅠ	41	10		3	欠損	
54		13C	（溝1）		土錘	B	20	9		1	欠損	
55		13C	（溝1）		土錘	B	31	10		2	欠損	
56	C83	13C・D	表土		土錘	B	38	10		4	欠損	
57		11C	（P645）	中世	土錘	B	46.5	11		5	欠損	
58	C14	11D	井戸11	古墳後期	土錘	BⅢ	51	17.5		12.6	完形	
59	C15	11D	井戸11	古墳後期	土錘	BⅠ	64.4	21		31.7	完形	
60		12D	（P417）	中世	土錘	B	11.5	8.5		1	欠損	
61	C49	11D	（P171）	中世	土錘	BⅢ	38	13		5	欠損	
62			表土		土錘	BⅢ	52	18.5		12	欠損	
63			表土		土錘	B	28.5	11		3	欠損	
64	C71	13CD	表土		土錘	BⅢ	41	12		6	欠損	
65	C66	13CD	表土		土錘	BⅢ	36	12		3	欠損	

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大値（mm）			重量（g）	残存	備考
							長	幅・径	厚			
66	C63	13C・D	表土		土錘	BⅢ	61	18		14	完形	
67	C87	10C・D	表土		土錘	C	41.5	31.5		18	欠損	
68	C68	13C・D	表土		土錘	BⅢ	44	16		9	欠損	
69		12・13C・D	表土		土錘	BⅤ				2	欠損	
70	C80	12・13C・D	表土		土錘	B	34.5	15		8	完損	
71	C67	11・12C・D	包含層		土錘	B	33.5	11		2	欠損	
72	C59	11・12C・D	包含層		土錘	AⅠ	95	52		289	欠損	
73	C57	11D	古墳包含層		土錘	AⅣ	64	40		93	完形	
74		10D	土壙54	中世	土錘	B	36	25.5		17	欠損	
75	C53		（P627）		土錘	B	72	24		37	欠損	
76	C5	13C	溝13	弥生後期	土錘	AⅣ	68.5	45		144.3	完形	
77	C6	13C	溝13	弥生後期	土錘	AⅢ	58.4	38.3		94.8	完形	
78	C69	13D	中世洪水砂	中世	土錘	BⅢ	38	15		8	欠損	
79	C74	13D	中世洪水砂	中世	土錘	BⅣ	46	11		4	完形	
80	C72	13D	中世洪水砂	中世	土錘	B	47.5	11		5	欠損	
81	C108	19H	溝112	弥生後期	土錘	B	25.5	10		2	欠損	
82	C94	15C・D	表土		土錘	BⅤ	39	9		2	欠損	
83	C8	13C	溝19a	弥生後期	土錘	BⅣ	49	11		4	完形	
84	C7	13C・D	溝15	弥生後期	土錘	AⅢ	60.5	35		84.6	完形	
85	C18	14D	溝55	古墳	土錘	B	80.5	24		50	欠損	
86	C43	14・15C・D	溝87	中・近世	土錘	BⅣ	46	12		5.4	完形	
87	C33	14C・D	溝85	中世	土錘	B	46	12		4	欠損	
88	C100	13・14C・D	表土		土錘	BⅢ	46	17		13	欠損	
89	C90	13・14C・D	表土		土錘	BⅠ	75	24		44	欠損	
90	C102	14C	表採		土錘	BⅢ	34.5	13		6	完形	
91	C99	13・14C・D	古墳時代遺構清掃中		土錘	BⅣ	45	12		5	欠損	
92	C92	14D	中世洪水砂	中世	土錘	BⅤ	41	10		3	完形	
93	C93	14D	洪水砂	中世	土錘	BⅤ	41	10		4	完形	
94	C32	14C・D	溝85	中世	土錘	BⅣ	49.5	12		4.8	完形	
95	C97	13～15C・D	古墳時代包含層	古墳	土錘	B	36	24		20	欠損	
96	C91	13～15C・D	古墳時代包含層	古墳	土錘	B	54	23.5		26	欠損	
97	C95	13・14C・D	中世包含層	中世	土錘	B	27	11.5		3	欠損	
98	C101	13・14C・D	中世包含層	中世	土錘	B	40	10.5		3	欠損	
99	C89	15C・D	中世包含層	中世	土錘	BⅠ	96	37		92	欠損	
100	C98	14C・D	中世包含層	中世	土錘	B	68	24		36	欠損	
101		14C	（溝2）		土錘	B	30	10		2	欠損	
102	C46	15D	（P195）		土錘	AⅢ	56	35		77	欠損	
103	C19	13・14C	井戸17	中世	土錘	B	57	23		30	欠損	
104	C42	14C・D	溝87	中・近世	土玉		18	20.5		6	完形	
105	C35	14C・D	溝85	中世	円板状土製品			33	10.5	13	完形	備前焼片
106	C36	14C・D	溝85	中世	円板状土製品			33	11	16	完形	亀山焼片
107	C34	14C・D	溝85	中世	円板状土製品			31	9.5	12	完形	備前焼片
108	C55	10D	（P36）	弥生後期	?		64	72		337	欠損	
109	C2	10C	土壙5	弥生後期	土錘	E	53	22	16	20	欠損	
110	C9	10CD	土器溜り1	弥生後期	分銅形土製品		54	89	10.5	54.6	欠損	
111	C12	10C・D	土器溜り1	弥生後期	土玉		35		22	20	完形	
112		11C	（P271）	中世	土錘	B	32	13		4	欠損	
113		10～13C・D			円板状土製品			26.5	6	5	完形	
114	C106	19・20C・D	表土攪乱		土錘	BⅤ	41	10		3	完形	
115	C1	11D	竪穴住居1	弥生後期	土錘？	BⅢ	21	10		2.3	完形	
116		13C	（溝1）		土錘	B	39	11		4.7	欠損	
117	C23	14D	土壙77	中世	円板状土製品			32	12.5	16	完形	備前焼片
118	C10	10C・D	土器溜り1	弥生後期	分銅形土製品					8.9	欠損	
119	C11	10C・D	土壙溜り1	弥生後期	土錘	AⅢ	67.5	41.5		125.3	完形	
120	C103	22D	下田所層	古墳	土錘	BⅠ	87	24.5		54.0	完形	
121	C45	15C	溝90	中世	円板状土製品			33.7	19.5	29.2	完形	備前焼片
122	C27	12C・D	落ち込み2	中世	円板状土製品			32.5	18	21.5	完形	瓦片
123	C54	12C	（P744）	中世	円板状土製品			25.5	11	10	完形	備前焼片
124	C51	10C	（P863）	中世	土錘	B	34.7	10.5		3.2	欠損	
125	C39	14・15C・D	溝87	中・近世	円板状土製品			25	9	7	完形	備前焼片
126	C37	14・15C・D	溝87	中・近世	円板状土製品			30	8.5	9.9	完形	備前焼片
127	C38	14C・D	溝87	中・近世	円板状土製品			34	8	11.5	完形	亀山焼片
128	C40	15C・D	溝87	中・近世	円板状土製品			35.5	14.5	23.6	完形	備前焼片
129	C41	14・15C・D	溝87	中・近世	円板状土製品			57.3	14	60.2	完形	備前焼片

金属製品一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値（mm） 長	幅・径	厚	重量（g）	材質	残存	備考
1	M7	15C	井戸18	中世	刀子	267	22.5	4	77.21	鉄	完形	木柄残
2		13C	（P954）		?	84	29	8	14.91	鉄	欠損	
3 a		20D	西側溝		鉄片	48.5	10.5	4.5	4.71	鉄	欠損	
3 b		20D	西側溝		鉄片	55	10.3	4.4	5.12	鉄	欠損	
4	M1	21D	土壙26	弥生後期	鏃	44.4	25.5	4.5	5.72	鉄	欠損	
5		23C・D	灰色粘土		鉄片	32	27.3	4.2	4.03	鉄	欠損	
6	M2	21C・D	土壙34	弥生後期	鉋？	50.5	12.5	5	6.51	鉄	欠損	
7		22D	古墳包含層	古墳	釘？	41.7	5	4.5	1.34	鉄	欠損	
8		20D	（P27・28）		鉄片	23	14.6	4	1.74	鉄	欠損	
9		33D	表土砂層		銭		25	1.5	3.75	銅	完形	開元通宝
10			表土砂層		銭		23.1	1	1.66	銅	完形	寛永通宝
11			表土砂層		銭		22.0	1.5	2.15	銅	完形	
12		20A	（溝2）	近世	銭		22.7	1	1.48	銅	完形	寛永通宝
13		14C・D	溝87	中・近世	銭		22.5	1.4	1.8	銅	完形	熙寧元宝
14		14C・D	溝87	中・近世	銭		25.1	1.5	1.88	銅	欠損	永楽通宝
15		14C・D	溝87	中・近世	銭		24	1.3	1.17	銅	破片	
16	M9	13D	（P192）	中世	銭		24.7	1.3	3.3	銅	完形	熙寧元宝
17		14C	溝85	中世	釘	29	4.5	3.2	0.85	鉄	欠損	
18		13・14C・D	中世包含層	中世	釘	26.2	5.5	5.8	1.17	鉄	欠損	
19		14D	土壙76・77	中世	釘？	24.5	5.9	4.5	0.84	鉄	欠損	
20		14C	（土11）	中世	釘	33	8	5.2	1.65	鉄	欠損	
21		14C	（P65）		釘	34.3	5.2	5.2	1.45	鉄	欠損	
22		14C	（土壙13）	中世	釘	37.3	5.8	5.3	1.38	鉄	欠損	
23a		15C・D	溝87	中・近世	釘	43	9.8	5.4	2.75	鉄	欠損	
23b		15C・D	溝87	中・近世	釘	25	9.3	6.7	1.15	鉄	欠損	
24		14C	（P64）	中世	釘	54.4	6	6	3.37	鉄	欠損	
25		13・14C	井戸17（上層）	中世	釘	16.4	6.4	5.7	0.84	鉄	欠損	
26		14・15C・D	溝87	中・近世	釘	28.8	8.1	8.3	2.77	鉄	欠損	
27		14CD	溝87	中・近世	釘	60	10.8	5	4.59	鉄	欠損	
28		13D	中世洪水	中世	釘	37.2	7	7	2.54	鉄	欠損	
29		14C・D	溝87	中・近世	釘	47.8	9.2	9.2	8.08	鉄	欠損	
30		14C・D	溝87	中・近世	釘	50.9	5.7	7	2.90	鉄	欠損	
31		14C・D	溝87	中・近世	釘	36	7.2	6.8	2.46	鉄	欠損	
32a		14C・D	溝87	中・近世	釘	26.4	14.4	10	4.20	鉄	欠損	
32b		14C・D	溝87	中・近世	釘	26	6.3	6.2	1.91	鉄	欠損	
32c		14C・D	溝87	中・近世	釘	17.4	4	4.4	0.37	鉄	欠損	
33	M8	11D	（土49）	弥生	鏃	22.4	13.1	3.6	1.34	銅	欠損	
34	M10	11D	（P980）	弥生	鏃	37.2	12.5	3.4	2.79	銅	完形	
35		11D	包含層		環		25.8	4	6.19	銅	完形	
36		11D	表土		銭		23.8	1.3	2.47	銅	完形	聖宋元宝
37		11C	（P45）	中世	銭		23.8	1.3	2.98	銅	完形	
38	M5	12C	竪穴住居9	古墳	?	95	41.5	6.5	37.18	鉄	欠損	
39		11C	竪穴住居5	古墳前期	鉄片	31.2	12.6	3.7	2.47	鉄	欠損	
40a		10D	建物8	古墳後期	鏃	91.3	15.4	3.1	12.52	鉄	完形	
40b		10D	建物8	古墳後期	?	44.3	21	7.3	6.38	鉄	完形	
41		11D	井戸2	弥生後期	釘？	44.5	5.2	4.4	3.35	鉄	欠損	
42		11D	井戸2	弥生後期	鉄片	36.4	29.1	3.2	7.17	鉄	欠損	
43		10C	土壙51北半上層	中世	釘	76.3	17	14.9	14.09	鉄	?	
44		11D	土壙59	中世	釘	24.3	5.1	4.7	1.02	鉄	欠損	
45		11C	（土32）		刀子	73.7	8.5	3.9	4.69	鉄	欠損	
46		11C	土壙17	弥生後期	鉄片	50	20.2	11.4	6.64	鉄	欠損	
47		11・12C	溝48	古墳	釘？	25.4	5.1	5.9	1.72	鉄	欠損	
48	M3	11D	溝9	弥生後期	鉋	36.5	15	4	1.85	鉄	欠損	
49	M4	13C	溝13	弥生後期	鉄片	34.5	8	3.8	1.61	鉄	欠損	
50		11D	（P107）	中世	鉄片	22.7	16.9	4.7	3.78	鉄	欠損	
51		11C	（P249）	中世	鉄片	33.3	14	14	6.49	鉄	欠損	
52		12C	（P296）		鉄片	20.5	17.3	11.5	6.77	鉄	欠損	
53		12D	（P379）	中世	鉄片	16.5	19.2	12	6.58	鉄	欠損	
54		12D	（P391）		鉄片	83	44.3	5	23.77	鉄	欠損	
55		11C	（P618）	中世	釘？	49.7	7	6.6	4.37	鉄	欠損	
56		12C	（P688）	中世	釘？	33.2	6.5	6	2.24	鉄	欠損	
57		11C	（P1249）	中世	釘？	30	8	7.5	2.7	鉄	欠損	
58		11D	（P1439）		釘？	56.5	9.7	7	9.01	鉄	欠損	
59		12C	（土壙）		環		37.3	6.3	12.23	鉄	完形	
60a		12C・D	落ち込み3	中世	鉄片	38.9	13.8	4.1	3	鉄	欠損	

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	材質	残存	備考
						長	幅・径	厚				
60b		12C・D	落ち込み 3	中世	鉄片	26.5	9.4	8.8	2.09	鉄	欠損	
61		11C・D	包含層		鉄片	31.5	14.1	4	3.16	鉄	欠損	
62		13D	中世洪水砂		鉄片	22.7	26.5	3.5	5.56	鉄	欠損	
63		10C	土器溜 1	弥生後期	鉄片	84.7	13.4	6.7	16.39	鉄	欠損	
64	M11	13C	北側溝		鉄斧	93	45	6.8	64.75	鉄	欠損	
65		13C	落ち込み 1	古墳後期	釘	47.5	8	6.7	16.39	鉄	欠損	
66a		11C・D			釘	52	6.5	5	2.68	鉄	欠損	
66b		11C・D			釘	42.7	4.7	4.5	1.52	鉄	欠損	
67		11D	古墳包含層	古墳	釘	47.4	8.5	7.7	5.44	鉄	欠損	
68		10C・D	表土		鉄斧	47	49	9	81.67	鉄	欠損	
69		19C・D	表土攪乱		銭		23	0.9	1.39	銅	完形	寛永通宝
70		19・20C・D	表土攪乱		銭		25	1.3	3.34	銅	完形	寛永通宝
71		13C	表土		銭		24	1.4	2.45	銅	完形	元祐通宝
72	M6	12C	竪穴住居 9	古墳前期	鉄剣形銅剣	207	31.5	4.5	87.93	銅	完形	
73		14C	（P108）		?	118.6	86.5	9.5	117.67	鉄	欠損	
74		11D	竪穴住居 7	古墳後期	刀子	30	12.6	8.1	2.78	鉄	欠損	

木製品一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	樹種	残存	備考
						長	幅・径	厚				
1	W7	36D	旧河道２橋脚実測面	弥生前期	広鍬未製品	419.0	215.0	56.0		アカガシ亜属	完形	
2		36D	旧河道２橋脚検出面	弥生前期	斧柄未製品							
3		36D	旧河道２橋脚検出面	弥生前期	斧柄未製品							
4	W15	36D	旧河道２橋脚実測面	弥生前期	浅鉢	298.0	67.0	72.8		ケヤキ	1/3	
5	W11	35D	旧河道２	弥生前期	鋤	214.5	91.0	30.0		アカガシ亜属	先端部	
6		36D	旧河道２	弥生前期	鋤					アカガシ亜属	柄取付部	
7	W17	36D	旧河道２	弥生前期	容器	116.0	144.0	43.0		環孔材	1/3	
8	W13	35D	旧河道２	弥生前期	舟形	198.0	71.0	57.5		サクラ材	1/3	
9	W16	35D	旧河道２砂層	弥生前期	容器		80.0	100.0		ヤマグワ	底部完存	
10		35・36D	旧河道２	弥生前期	鋤					散孔材？	小破片	
11	W19	36C	旧河道２砂層・腐蝕土層Ⅱ	弥生前期	容器		65.0			ケヤキ		
12	W22	36D	旧河道２腐蝕土層Ⅰ	弥生前期	篦状木器	144.0	25.0	4.0			完形	
13	W21	35・36D	旧河道２	弥生前期	鏃	119.0	15.0	8.5			ほぼ完形	
14	W18				容器		64	54.0				
15	W12				ほぞ穴材	204.5	102.0	22.5				
16	W1	15C・D	旧河道１	弥生前期	柄	181.0	75.0	38.59			1/2	
17	W6	15C	井戸18下層	中世	曲物底板		130.0	5.5			完形	
18		15C	井戸18下層	中世	椀							
19	W4	15C	井戸18下層	中世	底板		196.0	8.0			ほぼ完形	
20	W5	15C	井戸18下層	中世	札？	189.5	14.5	5.5			完形	
21	W3	13・14C	井戸17	中世	曲物底板		92.0	7.0			1/2	
22	W2	13・14C	井戸17	中世	曲物底板		67	7.0			完形	
23		19D	（古代溝）	古代	加工木							
24	W24	35D	旧河道２橋脚実測面下砂層	弥生前期	梯	1150.0	106.5	94.5		カヂノキ属類似種	1/6？	
25		19・20C・D	溝99	中世	椀						底部1/3	
26	W23	35D	旧河道２橋脚下砂層中	弥生前期	杵	912.5	68.0			ヤブツバキ	1/2	
27	W14	36D	旧河道２橋脚打込面	弥生前期	石斧柄	361.5	189.5	49.5		アカガシ亜属	完形	
28	W8	36C	旧河道２腐蝕土層	弥生前期	鋤	408.5	126.0	15.0		カシ		
29	W20	35D	旧河道２橋脚下砂層中	弥生前期	蓋？	278.5	241.0	25.0		イヌガヤ	ほぼ完形	
30	W25	36D	旧河道２	弥生前期	広鍬	418.5	78.0	8.5		アカガシ亜属	1/2強	
31	W10	35D	旧河道２砂層	弥生前期	又鋤	154.0	53.0	9.0		アカガシ亜属	先端部	
32		36C	旧河道２	弥生前期	鍬	174.0	63.0	30.5		カシ		
33		35・36D	旧河道２	弥生前期								
34		35D	旧河道２砂層	弥生前期								
35		35D	旧河道２橋脚下砂層中	弥生前期								
36		35・36C・D										
37		35・36D	旧河道２	弥生前期								
38		35D	旧河道２抉部分砂層	弥生前期								
39		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期								
40		35D	旧河道２砂層	弥生前期	薄板							
41		36D	柱穴列６№４	古墳								
42		36C	旧河道２腐蝕土層底	弥生前期								
43		35・36D	旧河道２	弥生前期								
44		36C・D	旧河道２腐蝕土層２	弥生前期								
45		36C・D	旧河道２腐蝕土層	弥生前期								
46		36C・D	旧河道２粒砂層	弥生前期								
47		34D	溝127暗灰色粘土層	弥生前期								
48		35D	旧河道２橋脚杭－Ｎ４	弥生前期	杭先					イヌガヤ		
49		35D	旧河道２橋脚杭－Ｎ12	弥生前期	杭先					イヌガヤ		
50		35D	旧河道２橋脚杭－Ｎ19	弥生前期	杭先					イヌガヤ		
51		36D	旧河道２橋脚杭－Ｎ23	弥生前期	杭先		98.5			アカガシ亜属		
52		35D	旧河道２橋脚杭－Ｎ42	弥生前期	杭先		114.5			コナラ節		
53		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先		83.0					
54		35・36D	旧河道２橋脚杭－Ｓ２	弥生前期	杭先		107.5			ヤブツバキ		
55		35・36D	旧河道２橋脚杭－Ｓ12	弥生前期	杭先		107.5			ヤブツバキ		
56		35・36D	旧河道２橋脚杭－Ｓ32	弥生前期	杭先		121.0			ヤブツバキ		
57		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先		94.0					
58		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先		100.0					
59		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先		110.0					
60		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
61		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
62		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
63		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
64		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
65		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	樹種	残存	備考
						長	幅・径	厚				
66		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
67		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
68		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
69		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
70		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
71		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
72		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
73		35・36D	旧河道２橋脚	弥生前期	杭先							
74		15D	（P？）		柱							
75		21D	（P114）		柱							
76		15C	井戸18下層	中世	枝材・竹							
77		15C	井戸18	中世	竹？							
78		12C	（P757）	中世	柱							
79		35D	旧河道２橋脚実測面上	弥生前期	加工材？							
80		35・36D	旧河道２橋脚下砂層	弥生前期	割木							
81		15D	旧河道１灰黒色粘土	弥生前期								
82		12C	土壙44	古墳								
83		35D	旧河道２橋脚検出面	弥生前期								

玉類一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	材質	残存	備考
						長・高	幅・径	内径				
1	J1	21C	溝25	弥生後期	小玉	3	4.2		0.07	ガラス	完形	
2		21C	溝25	弥生後期	小玉					ガラス	破片	
3		33D	溝143溝底	古墳	小玉					ガラス	完形	
4	J6	10D	土器溜り1付近	弥生後期	棗玉	15	8.8	1.5	1.8	瑪瑙	完形	
5	J4	12C	（P689）		勾玉	17	6	2	0.2	蛇紋岩	完形	
6	J2	13C	落ち込み1	古墳後期	臼玉	3	6.5	2	0.07	滑石	完形	
7	J3	12D	土壙42	古墳	臼玉	2.6	5	1.3	0.1	滑石	完形	
8	J5	11C	（P1025）	弥生後期	小玉	3.1	5.1	2	0.13	滑石	完形	
9		11D	中世面清掃中		臼玉	2.1	5.1		0.07	滑石	破片	
10		11D	中世面清掃中		臼玉	3	4	1	0.05	滑石	完形	
11		11D	中世面清掃中		臼玉	4	2.4	1.5	0.04	滑石	完形	

新旧遺構名称対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
焼土土壙	焼土土壙	10C	平・藤・高	1989
旧河道1	溝34	14・15C・D	平・藤・高	1989
土壙1	土壙68	12D	平・藤・高	1989
土壙2	土壙21	21D	平・岡・高・阿	1988
溝1	溝21	21・22C・D	平・岡・高・阿	1988
竪穴住居1	住8	11D	平・藤・高	1989
竪穴住居2	住9	11・12C・D	平・藤・高	1989
竪穴住居3	溝4・5	20D	平・藤・村	1990
建物1	建物2	20D	平・藤・村	1990
建物2	建物5	20D	平・藤・村	1990
建物3	建物4	20C	平・藤・村	1990
建物4	建物1	20D	平・藤・村	1990
建物5	建物5	20D	平・岡・高・阿	1988
建物6	建物7	20・21D	平・岡・高・阿	1988
建物7	建物6	21D	平・岡・高・阿	1988
井戸1	井戸6	11D	平・藤・高	1989
井戸2	井戸5	11D	平・藤・高	1989
井戸3	井戸7	12C	平・藤・高	1989
井戸4	井戸10	12C	平・藤・高	1989
井戸5	井戸8	12D	平・藤・高	1989
井戸6	井戸9	12C	平・藤・高	1989
井戸7	井戸11	12・13C・D	平・藤・高	1989
井戸8	井戸4	14D	平・藤・高	1989
井戸9	井戸2	20C・D	平・岡・高・阿	1988
井戸10	井戸3	21・22D	平・岡・高・阿	1988
土壙3	土壙61	10C	平・藤・高	1989
土壙4	土壙63	10D	平・藤・高	1989
土壙5	土壙76	10D	平・藤・高	1989
土壙6	土壙75	10C	平・藤・高	1989
土壙7	土壙60	10・11C	平・藤・高	1989
土壙8	土壙58	11C	平・藤・高	1989
土壙9	土壙56	11D	平・藤・高	1989
土壙10	土壙64	11C	平・藤・高	1989
土壙11	土壙73	11C	平・藤・高	1989
土壙12	土壙62	11C	平・藤・高	1989
土壙13	土壙70	11D	平・藤・高	1989
土壙14	土壙71	11D	平・藤・高	1989
土壙15	土壙72	11D	平・藤・高	1989
土壙16	土壙69	12C	平・藤・高	1989
土壙17	土壙67	12D	平・藤・高	1989
土壙18	土壙25	13C	平・藤・高	1989
土壙19	土壙2	19D	平・藤・村	1990
土壙20	土壙4	20D	平・藤・村	1990
土壙21	土壙3	20D	平・岡・高・阿	1988
土壙22	土壙20	20C	平・岡・高・阿	1988
土壙23	土壙2	20D	平・岡・高・阿	1988
土壙24	土壙5	20C	平・岡・高・阿	1988
土壙25	土壙4	20D	平・岡・高・阿	1988
土壙26	土壙16	20・21D	平・岡・高・阿	1988
土壙27	土壙18	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙28	土壙9	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙29	土壙7	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙30	土壙6	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙31	土壙22	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙32	土壙23	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙33	土壙24	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙34	土壙14	21C・D	平・岡・高・阿	1988
土壙35	土壙13	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙36	土壙27	21D	平・岡・高・阿	1988
土壙37	土壙33	22D	平・岡・高・阿	1988
柱穴列1	柱穴列	21C	平・岡・高・阿	1988
炉1	炉	11C	平・藤・高	1989
溝2	溝33	11・12C	平・藤・高	1989
溝3	溝32	12C	平・藤・高	1989
溝4	溝31	12C	平・藤・高	1989
溝5	溝26	12C	平・藤・高	1989

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
溝6	溝29	12C	平・藤・高	1989
溝7	溝30	12C	平・藤・高	1989
溝8	溝34	12C	平・藤・高	1989
溝9	溝19	11～13D	平・藤・高	1989
溝10	溝21	11D	平・藤・高	1989
溝11	溝28	12D	平・藤・高	1989
溝12	溝23	12D	平・藤・高	1989
溝13	溝20	13C・D	平・藤・高	1989
溝14	溝22	13D	平・藤・高	1989
溝15	溝25	13C・D	平・藤・高	1989
溝16	溝30	13・14C・D	平・藤・高	1989
溝17	溝29	13・14C・D	平・藤・高	1989
溝18	溝36	13C	平・藤・高	1989
溝19	溝26a・溝27b	13・14C・D	平・藤・高	1989
溝20	溝28	14C・D	平・藤・高	1989
溝21	溝33	15C	平・藤・高	1989
溝22	溝35	15C	平・藤・高	1989
溝23	溝7・15	19・21C・D	平・藤・村	1990
溝24	溝6	20C	平・藤・村	1990
溝25	溝12	21C	平・岡・高・阿	1988
溝26	溝13	21C	平・岡・高・阿	1988
溝27	溝14	21D	平・岡・高・阿	1988
溝28	溝20a・溝20b	21・22C・D	平・岡・高・阿	1988
溝29	溝16	22C・D	平・岡・高・阿	1988
溝30	溝17	22C・D	平・岡・高・阿	1988
溝31	溝22	22・23C・D	平・岡・高・阿	1988
溝32	溝18	23C・D	平・岡・高・阿	1988
溝33	溝19	23C・D	平・岡・高・阿	1988
溝34	溝13	19・20A	平・藤・高	1989
溝35	溝14	20A	平・藤・高	1989
溝36	溝11	20A	平・藤・高	1989
溝37	溝15	20A	平・藤・高	1989
溝38	溝18	20A	平・藤・高	1989
溝39	溝19	20A	平・藤・高	1989
溝40	溝16	20A	平・藤・高	1989
溝41	溝17	20A	平・藤・高	1989
溝42	溝20	20・21A	平・藤・高	1989
溝43	溝12	20・21A	平・藤・高	1989
土器溜り1	土器溜り	10・11C・D	平・藤・高	1989
竪穴住居4	住1	10・11C	平・藤・高	1989
竪穴住居5	住2	10・11C	平・藤・高	1989
竪穴住居6	住3	11C	平・藤・高	1989
竪穴住居7	住4	11C・D	平・藤・高	1989
竪穴住居8	住6	12D	平・藤・高	1989
竪穴住居9	住7	12D	平・藤・高	1989
竪穴住居10	住5	12C	平・藤・高	1989
建物8	建物1	10C	平・藤・高	1989
建物9	建物2	20C・D	平・岡・高・阿	1988
建物10	建物3	20C	平・岡・高・阿	1988
建物11	建物1	20C・D	平・岡・高・阿	1988
建物12	建物4	20D	平・岡・高・阿	1988
井戸11	井戸3	11D	平・藤・高	1989
井戸12	井戸2	11D	平・藤・高	1989
井戸13	井戸4	12C	平・藤・高	1989
井戸14	井戸3	13C	平・藤・高	1989
井戸15	井戸1	22D	平・岡・高・阿	1988
土壙38	土壙29	11C	平・藤・高	1989
土壙39	土壙26	11D	平・藤・高	1989
土壙40	土壙25	11D	平・藤・高	1989
土壙41	土壙38	11D	平・藤・高	1989
土壙42	土壙50	12D	平・藤・高	1989
土壙43	土壙44	12C	平・藤・高	1989
土壙44	土壙37	12C	平・藤・高	1989
土壙45	土壙46	12C	平・藤・高	1989
土壙46	土壙43	12C	平・藤・高	1989
土壙47	土壙53	13D	平・藤・高	1989

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壙48	土壙48	13D	平・藤・高	1989
土壙49	土壙20	14C・D	平・藤・高	1989
土壙50	土壙1	21D	平・岡・高・阿	1988
鍛冶炉1	鍛冶炉	13C	平・藤・高	1989
落ち込み1	古墳落ち込み	13C・D	平・藤・高	1989
溝44	溝17	10・11D	平・藤・高	1989
溝45	溝16	11C・D	平・藤・高	1989
溝46	溝13	11D	平・藤・高	1989
溝47	溝15	11D	平・藤・高	1989
溝48	溝8	11・12C	平・藤・高	1989
溝49	溝10	11・12C	平・藤・高	1989
溝50	溝11	12C・D	平・藤・高	1989
溝51	溝12	11・12C	平・藤・高	1989
溝52	溝12	12C	平・藤・高	1989
溝53	溝24	13C	平・藤・高	1989
溝54	溝22	13C・D	平・藤・高	1989
溝55	溝21	13・14C・D	平・藤・高	1989
溝56	溝19	14・15C・D	平・藤・高	1989
溝57	溝20	15D	平・藤・高	1989
溝58	土壙1	19D	平・藤・村	1990
溝59	溝8	21C	平・岡・高・阿	1988
溝60	溝7	21C・D	平・岡・高・阿	1988
溝61	溝6	21C・D	平・岡・高・阿	1988
溝62	溝9	21C・D	平・岡・高・阿	1988
溝63	溝5	21・22C・D	平・岡・高・阿	1988
溝64	溝10	22C・D	平・岡・高・阿	1988
溝65	溝4	22C・D	平・岡・高・阿	1988
溝66	溝3	22C・D	平・岡・高・阿	1988
溝67	溝11	23C・D	平・岡・高・阿	1988
溝68	溝7	20A	平・藤・高	1989
溝69	溝8	20A	平・藤・高	1989
溝70	溝6	20A	平・藤・高	1989
溝71	溝10	20A	平・藤・高	1989
溝72	溝9	20A	平・藤・高	1989
溝73	溝4	20A	平・藤・高	1989
溝74	溝3	21A	平・藤・高	1989
井戸16	井戸1	11D	平・藤・高	1989
井戸17	井戸2	13・14C	平・藤・高	1989
井戸18	井戸1	15C	平・藤・高	1989
土壙51	土壙4	10C	平・藤・高	1989
土壙52	土壙1	10D	平・藤・高	1989
土壙53	土壙2	10D	平・藤・高	1989
土壙54	土壙3	10D	平・藤・高	1989
土壙55	土壙13	11D	平・藤・高	1989
土壙56	土壙12	11D	平・藤・高	1989
土壙57	土壙19	11C	平・藤・高	1989
土壙58	土壙7	11D	平・藤・高	1989
土壙59	土壙14	11D	平・藤・高	1989
土壙60	土壙5	11C	平・藤・高	1989
土壙61	土壙6	11C・D	平・藤・高	1989
土壙62	土壙8	11C	平・藤・高	1989
土壙63	土壙15	11D	平・藤・高	1989
土壙64	土壙23	11C	平・藤・高	1989
土壙65	土壙9	11C	平・藤・高	1989
土壙66	土壙28	11C	平・藤・高	1989
土壙67	土壙10	12C	平・藤・高	1989
土壙68	土壙11	12C	平・藤・高	1989
土壙69	土壙20	12C・D	平・藤・高	1989
土壙70	土壙50	13C	平・藤・高	1989
土壙71	土壙17	13C	平・藤・高	1989
土壙72	土壙16	14C	平・藤・高	1989
土壙73	土壙22	14D	平・藤・高	1989
土壙74	土壙15	14C	平・藤・高	1989
土壙75	土壙6	14C	平・藤・高	1989
土壙76	土壙5	14D	平・藤・高	1989
土壙77	土壙4	14D	平・藤・高	1989
土壙78	土壙14	15C	平・藤・高	1989
土壙79	土壙1	15C	平・藤・高	1989

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壙80	土壙2	15D	平・藤・高	1989
土壙墓1	土壙墓33	12C	平・藤・高	1989
土壙墓2	土壙墓1	20C	平・岡・高・阿	1988
落ち込み2	中世落ち込み3	12C・D	平・藤・高	1989
落ち込み3	中世落ち込み1	11・12D	平・藤・高	1989
溝75	溝6	10D	平・藤・高	1989
溝76	溝5	10・11C・D	平・藤・高	1989
溝77	溝4	11D	平・藤・高	1989
溝78	溝3	11D	平・藤・高	1989
溝79	溝14	11D	平・藤・高	1989
溝80	溝9	11C	平・藤・高	1989
溝81	溝2	13C	平・藤・高	1989
溝82	溝6・17	13C	平・藤・高	1989
溝83	溝23	13C	平・藤・高	1989
溝84	溝16	13・14C	平・藤・高	1989
溝85	溝14	14C・D	平・藤・高	1989
溝86	溝6	14C	平・藤・高	1989
溝87	溝1	14・15C・D	平・藤・高	1989
溝88	溝8	14・15C	平・藤・高	1989
溝89	溝12	14・15C	平・藤・高	1989
溝90	溝13	15C	平・藤・高	1989
溝91	溝3	15C	平・藤・高	1989
溝92	溝11	15C	平・藤・高	1989
溝93	溝9	15C	平・藤・高	1989
溝94	溝5	14・15D	平・藤・高	1989
溝95	溝5	14・15D	平・藤・高	1989
溝96	溝7	15C・D	平・藤・高	1989
溝97	溝1・2	19～21D	平・藤・村・高	1989・90
溝98	溝2	19C・D	平・藤・村	1990
溝99	溝3	19・20C・D	平・藤・村	1990
溝100	中世溝	21・22C・D	平・岡・高・阿	1988
土壙82	土壙3	18H	平・藤・高	1989
溝101	溝14	18H	平・藤・高	1989
溝102	溝8	18H	平・藤・高	1989
溝103	溝15	18H	平・藤・高	1989
溝104	溝16	18H	平・藤・高	1989
溝105	溝9	18H	平・藤・高	1989
溝106	溝10	18H	平・藤・高	1989
溝107	溝13	19H	平・藤・高	1989
溝108	溝11	19H	平・藤・高	1989
溝109	溝12	19H	平・藤・高	1989
溝110	溝7	19H	平・藤・高	1989
溝111	土壙2	19H	平・藤・高	1989
溝112	溝4	19H	平・藤・高	1989
溝113	溝6	18H	平・藤・高	1989
溝114	溝1	18・19H	平・藤・高	1989
溝115	溝2	18・19H	平・藤・高	1989
溝116	溝5	19H	平・藤・高	1989
溝117	なし	19H	平・藤・高	1989
溝118	土壙6	19H	平・藤・高	1989
旧河道2	No.43d	35・36C・D	岡・山	1984
土壙83	No.49	33C・D	岡・山	1984
土壙84	No.58	33D	岡・山	1984
土壙85	No.62	34D	岡・山	1984
土壙86	No.63	34D	岡・山	1984
土壙87	No.44	35D	岡・山	1984
土壙88	No.64	35D	岡・山	1984
土壙89	No.61	35D	岡・山	1984
溝119	No.38	33D	岡・山	1984
溝120	No.39	33D	岡・山	1984
溝121	No.48	33D	岡・山	1984
溝122	No.45	34C・D	岡・山	1984
溝123	No.46	34C・D	岡・山	1984
溝124	No.50	34C・D	岡・山	1984
溝125	No.51・56	34・35C・D	岡・山	1984
溝126	No.41・54	34・35C・D	岡・山	1984
溝127	No.40c	34・35C・D	岡・山	1984
土壙90	No.57	35D	岡・山	1984

報告書遺構名	調査時遺構名	調 査 区	担 当 者	年 度
溝128	№40 a	34C・D	岡・山	1984
溝129	№60	34D	岡・山	1984
溝130	№53	34・35C・D	岡・山	1984
溝131	№52	35C・D	岡・山	1984
溝132	№55	35C・D	岡・山	1984
溝133	№37	33D	岡・山	1984
溝134	№35	33D	岡・山	1984
溝135	№36	33D	岡・山	1984
溝136	№34	34C・D	岡・山	1984
溝137	№33 b	34C・D	岡・山	1984
溝138	№42	35・36C	岡・山	1984
溝139	畎畝内の溝24	34C・D	岡・山	1984
溝140	畎畝内の溝25	34C・D	岡・山	1984
土器溜り 2	畎畝内土器溜り	34C	岡・山	1984
土壙91	№19	33D	岡・山	1984
柱穴列 2	№20	33・34D	岡・山	1984
柱穴列 3	№33 a	35D	岡・山	1984
柱穴列 4	№32	35C・D	岡・山	1984
柱穴列 5	№26	34・35C・D	岡・山	1984
柱穴列 6	№18	36C・D	岡・山	1984
溝141	№14	33C・D	岡・山	1984
溝142	№16	33C・D	岡・山	1984
溝143	№15	33C・D	岡・山	1984
溝144	№23	34C	岡・山	1984
溝145	№27	34・35C・D	岡・山	1984
溝146	№28	34C	岡・山	1984
溝147	№29	34・35C	岡・山	1984
溝148	№22	35C・D	岡・山	1984
建物13	№11	33C	岡・山	1984
土壙92	№ 8	33D	岡・山	1984
溝149	№13	33D	岡・山	1984

担当者欄の文字は平＝平井、岡＝岡本、藤＝藤田、高＝高田、阿＝阿部、村＝村田、山＝山本　の略語である。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひゃっけんがわはらおじまいせき
書名	百間川原尾島遺跡　4
副書名	旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査
巻次	10
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	97
編著者名	平井　勝・岡本寛久・高田恭一郎
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　℡　086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　℡　086-224-2111
発行年月日	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひゃっけんがわはらおじま 百間川原尾島	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 はらおじま 原尾島	33201		34度 40分 12秒	133度 57分 23秒	丸田・低水路 10～13C・D 19890901～ 19891115 19891226～ 19900524	1254	旭川放水路（百間川）河川改修に伴う事前調査
						丸田・低水路 13～15C・D 19890401～ 19890918	972	
						丸田・低水路 19・20C・D 19900509～ 19900618	422	
						丸田・低水路 20～23C・D 19880401～ 19880819	1178	
						丸田・低水路 23・24C・D 19880304～ 19880331	200	
						丸田・高水敷護岸 19～21A 19891212～ 19891227	190	
						従来下・高水敷護岸 18・19H 19891118～ 19891207	184	
						川内・三ノ坪・低水路 33～36C・D 19840402～ 19850122 19850312～ 19850416 19850501～ 19850530	1600	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百間川原尾島	集落 生産遺跡	弥生時代前期	旧河道　2条 土壙　9基 溝　10条	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、輸入陶磁器、石製品（石庖丁・石鏃・石斧・石錘・紡錘車・砥石）、木製品（広鍬・鋤・杵・斧柄・木鏃・梯・蓋・鉢・椀・底板）、金属器（鉄斧・鉄鏃・銅鏃・鉄剣形銅剣・刀子・銅銭）、土製品（土錘・瓦経）、玉類（棗玉・勾玉・ガラス小玉）	旧河道内から弥生時代前期の木製農具・工具等が出土 旭東平野における弥生時代後期の母村的大集落の一端を検出 弥生時代後期の井戸・土壙から内面に水銀朱の付着した鉢が出土 古墳時代前期の竪穴住居内から鉄剣形銅剣が出土 県内で6カ所めとなる瓦経片の出土
		弥生時代中期	土壙　1基 溝　5条		
		弥生時代後期	竪穴住居　3軒 建物　7棟 井戸　10基 土壙　36基 炉　1基 柱穴列　1列 溝　62条 土器溜り　2カ所 水田		
		古墳時代	竪穴住居　7軒 建物　5棟 井戸　5基 土壙　14基 鍛冶炉　1基 柱穴列　5列 落ち込み　1基 溝　62条		
		中世	建物　1棟 井戸　3基 土壙　31基 土壙墓　2基 落ち込み　2基 溝　32条		

1．10～13C・D区
作業風景
（西から）

2．13～15C・D区
作業風景
（北東から）

3．10～13C・D区
作業風景
（南東から）

図版２

１．11Ｃ区北壁断面
（南から）

２．14Ｃ区北壁断面
（南から）

３．14Ｃ区北壁断面
（南から）

４．22Ｃ区北壁断面
（南西から）

１．焼土土壙
（南西から）

２．旧河道１
（北から）

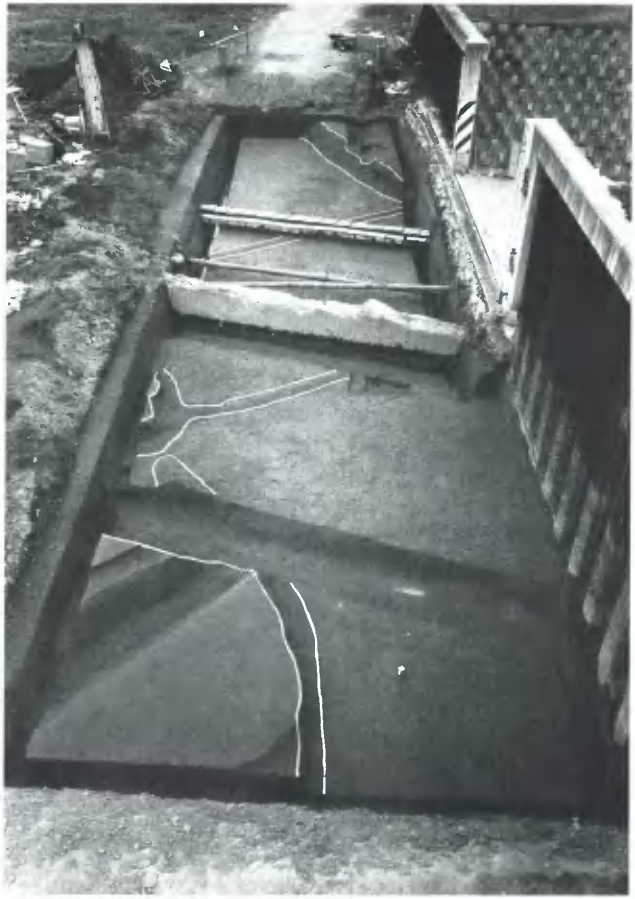
３．溝１
（北東から）

図版４

１．13～15Ｃ・Ｄ区弥生時代後期の水田（北西から）

２．21～24Ｃ・Ｄ区弥生時代後期の水田（北西から）

１．23・24Ｃ・Ｄ区
弥生時代後期の
水田
（北東から）



２．19～21Ａ区弥生
時代後期の水田
（南東から）

図版６

１．10～13C・Ｄ区弥生時代後期の遺構（北西から）

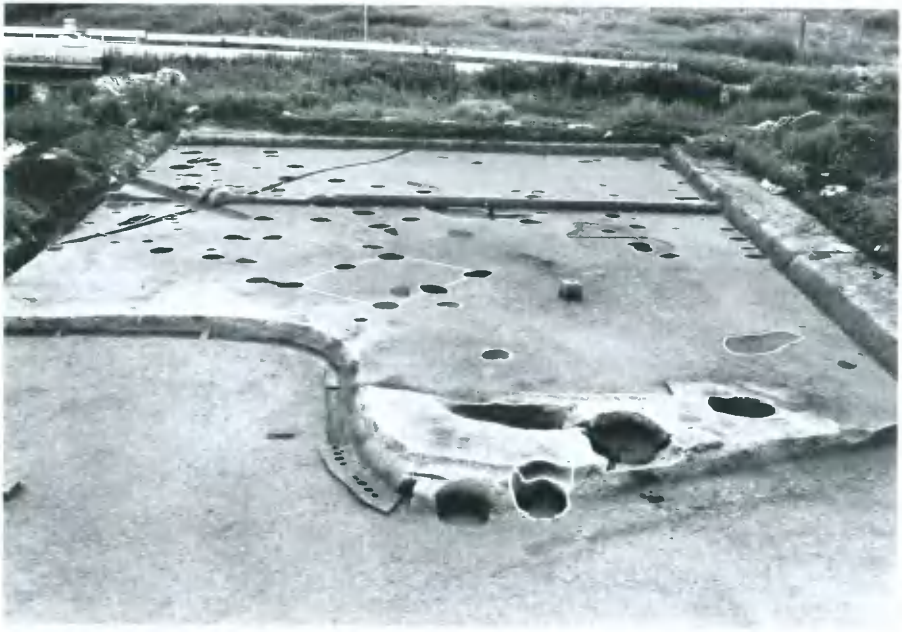
２．竪穴住居１（北東から）

１．竪穴住居２（北東から）

２．19C・Ｄ区弥生時代の遺構（北東から）

図版８

１．20Ｃ・Ｄ区弥生時代の遺構（北東から）



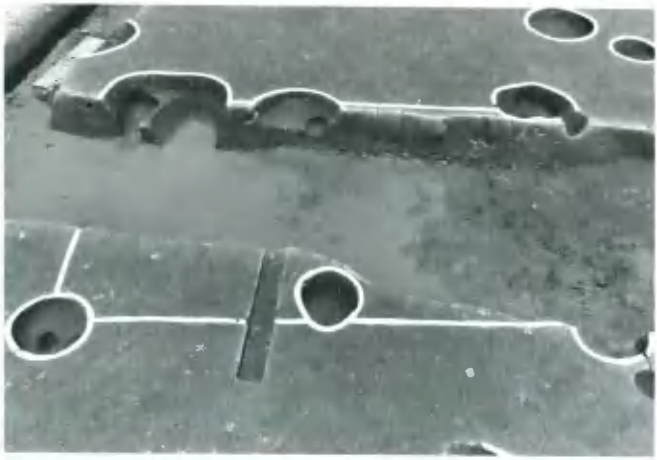
２．20・21Ｃ・Ｄ区弥生時代の遺構（南東から）

1．21～24C・D区
弥生時代後期の
遺構
（南東から）

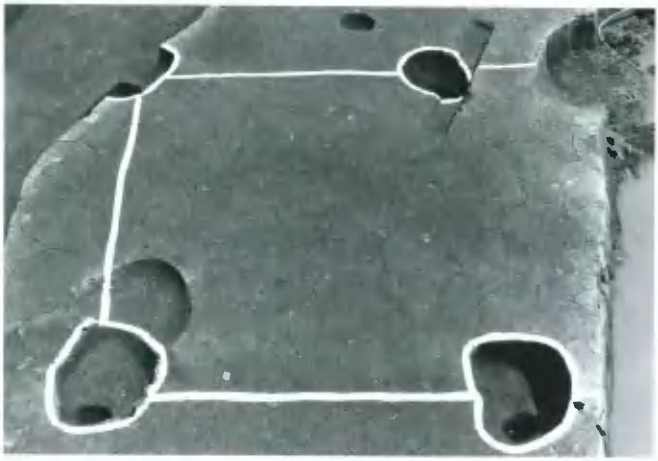
2．19～21A区弥生時代
の遺構
（南東から）

図版10

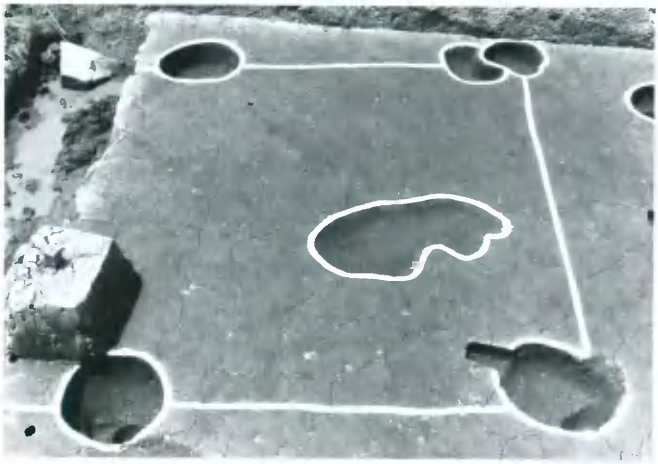
1．建物1・2
（南東から）



2．建物3
（南西から）

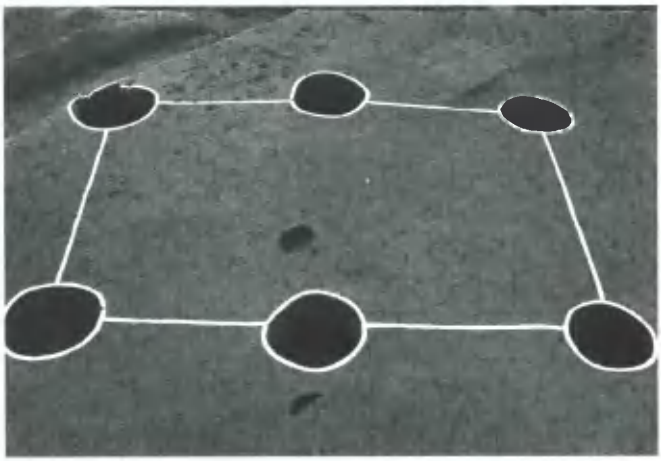


3．建物4
（北東から）



1．建物5・6・7
（北西から）

2．建物5
（北東から）



3．井戸1
（北東から）

図版12

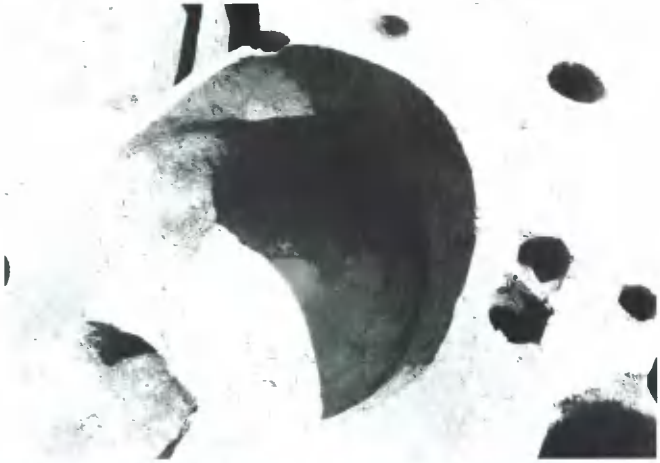
1．井戸２
（北東から）

2．井戸２の断面
（南東から）

3．井戸２の遺物出土
状況
（東から）

1．井戸３
（西から）

2．井戸４
（西から）



3．井戸６
（南西から）

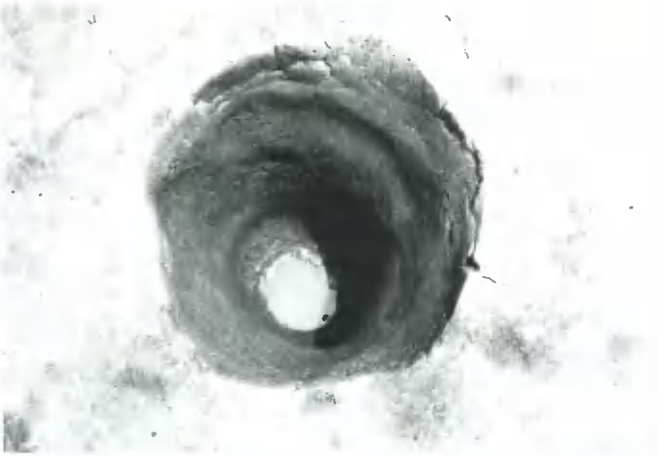
図版14

1．井戸７
（南西から）

2．井戸７の井戸枠
出土状態
（南西から）

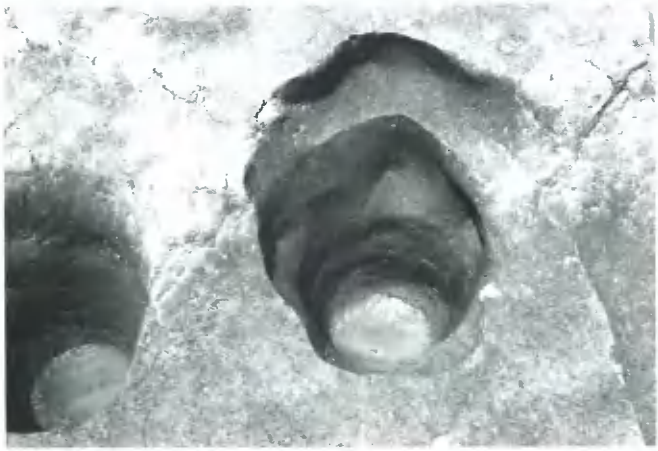
3．井戸８
（南西から）

1．井戸９
（南西から）



2．井戸９の遺物出土状況
（北西から）

3．井戸10
（南東から）



図版16

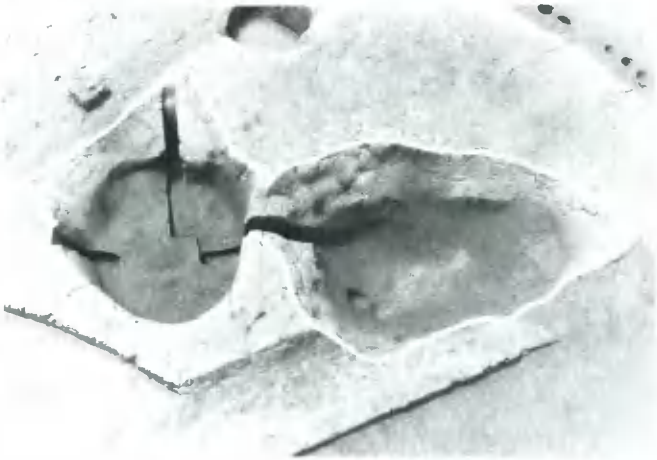
1．土壙11の断面
（西から）

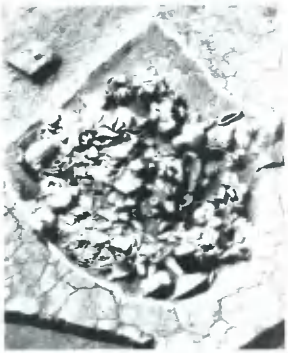
2．土壙21
（北西から）

3．土壙23
（東から）

1．土壙28
（北から）

2．土壙34〈左〉・
35〈右〉
（北西から）



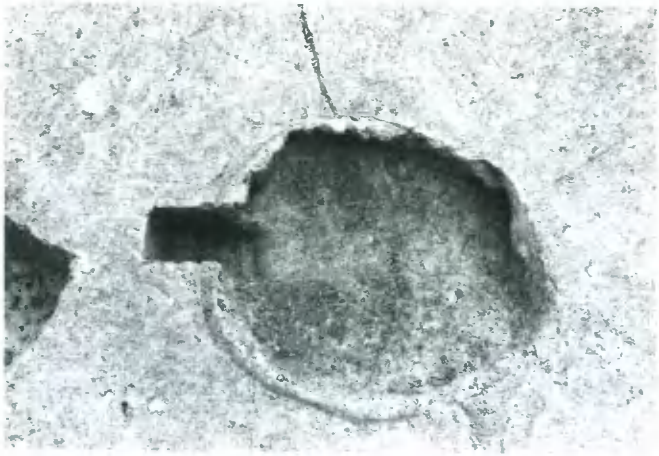


3．土壙34遺物出土状態（北から）

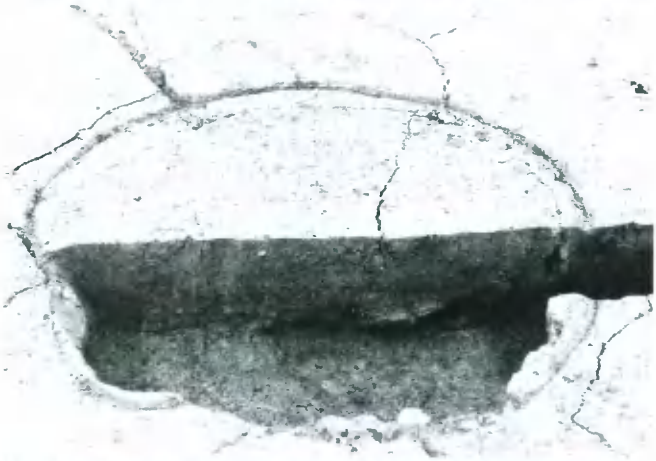
4．土壙35の断面（南西から）

図版18

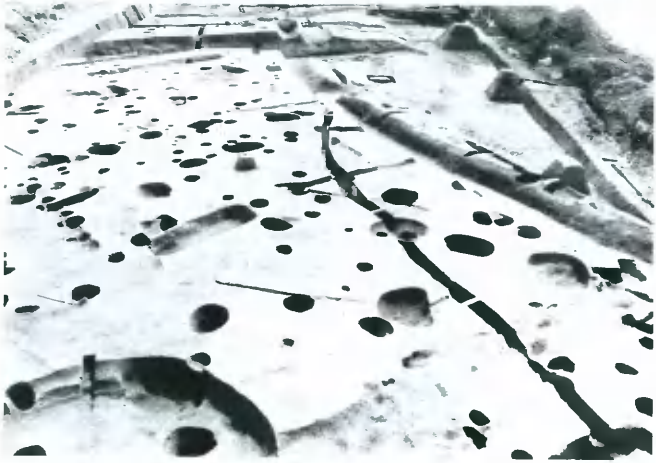
1．炉1
（北西から）



2．炉1の断面
（南東から）



3．溝9
（北西から）



1．溝13
（北東から）

2．溝９と溝13の合流部の礫床
（東から）

3．溝13・15・16
（北東から）

図版20

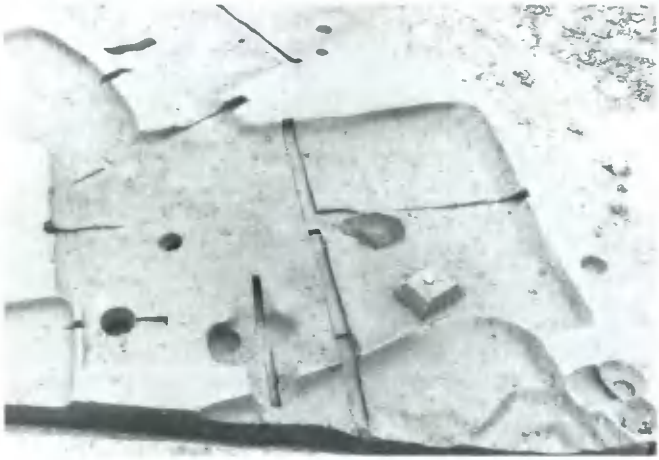
1．溝17・18・19・20
（北東から）

2．溝25
（南東から）

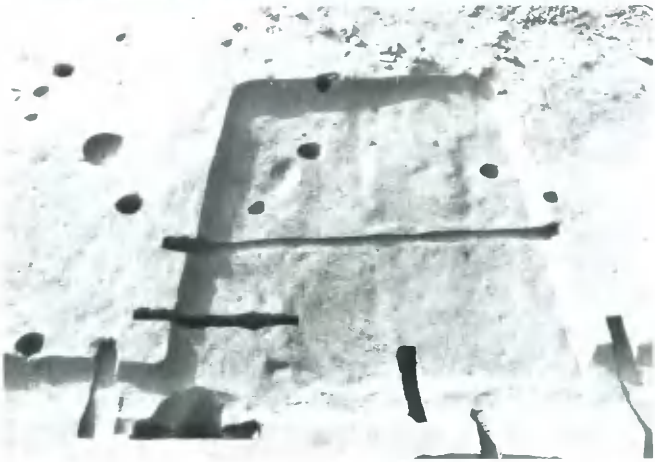
3．溝28a・28b
（北東から）

1．土器溜り１
（北西から）

2．竪穴住居４・５
（北東から）

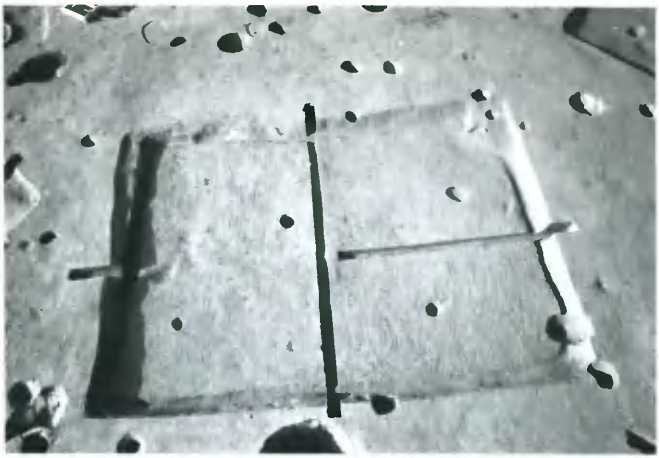


3．竪穴住居６
（東から）

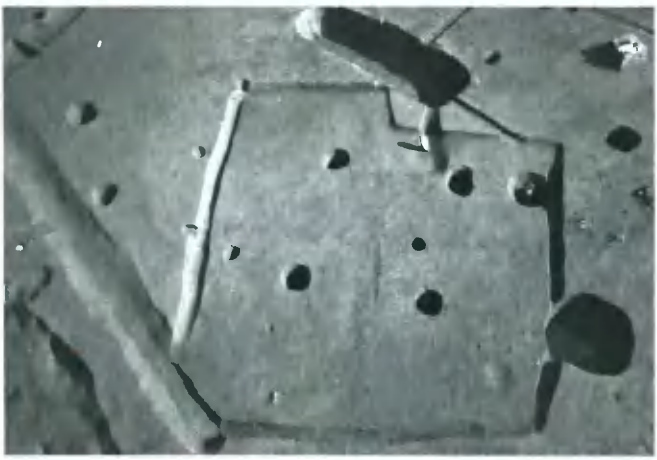


図版22

1．竪穴住居７
（南東から）



2．竪穴住居８
（南西から）

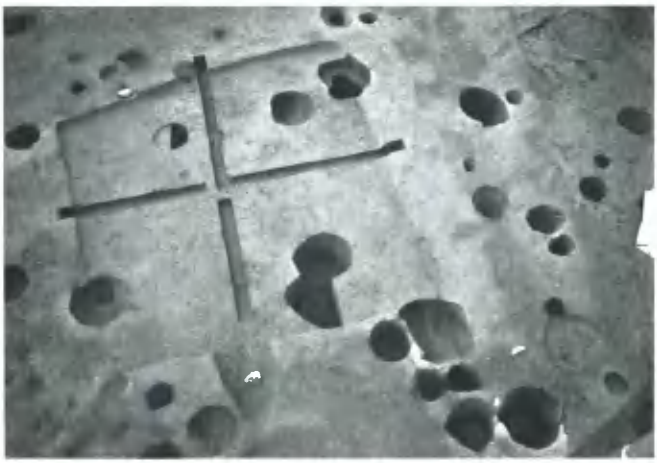


3．竪穴住居８の
カマド
（南西から）

1．竪穴住居９
（南西から）

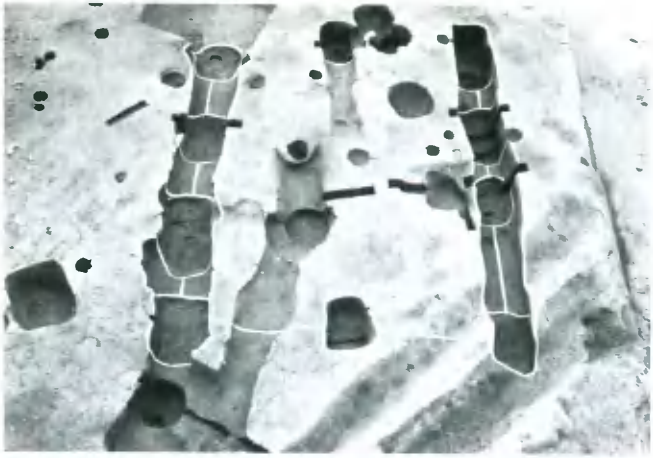
2．竪穴住居９の鉄剣
形銅剣出土状況
（北東から）

3．竪穴住居10
（北東から）



図版24

1．建物8
（北西から）



2．建物9・10・11
（北東から）

3．井戸11
（北東から）

1．井戸11の遺物出土状況
（北東から）

2．井戸12の遺物出土状況
（西から）

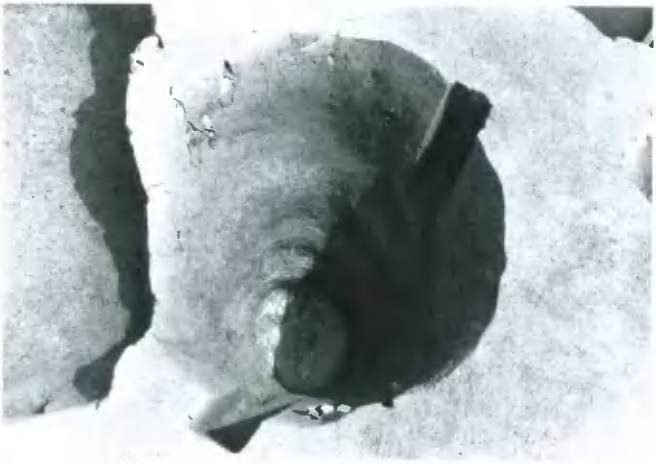
3．井戸12の断面
（南西から）

図版26

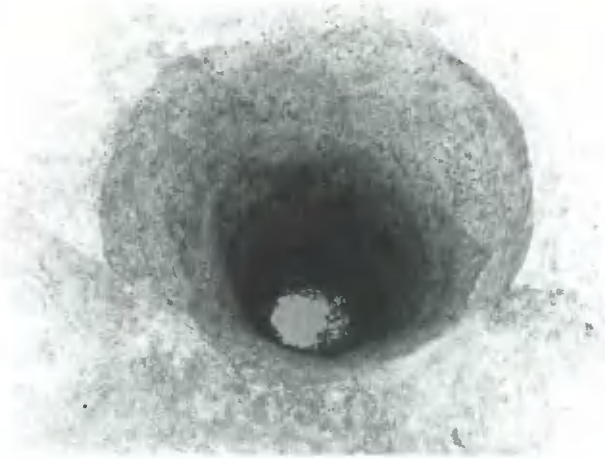
1．井戸13遺物出土状態（西から）

2．井戸13（北から）

3．井戸14（南から）



1．井戸15
（南東から）

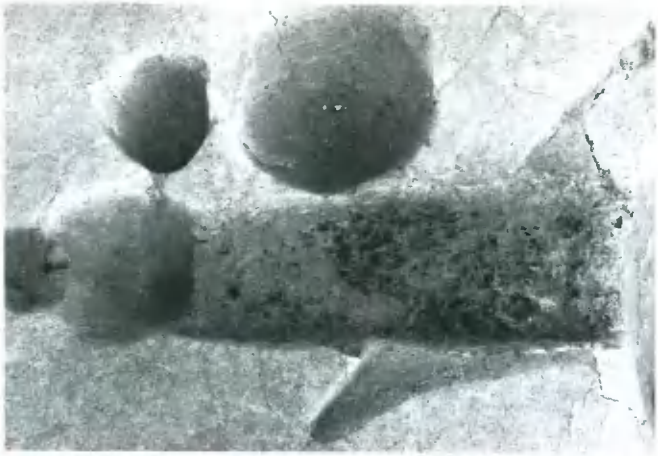


2．井戸15の断面
（南東から）

3．土壙42の断面
（南西から）

図版28

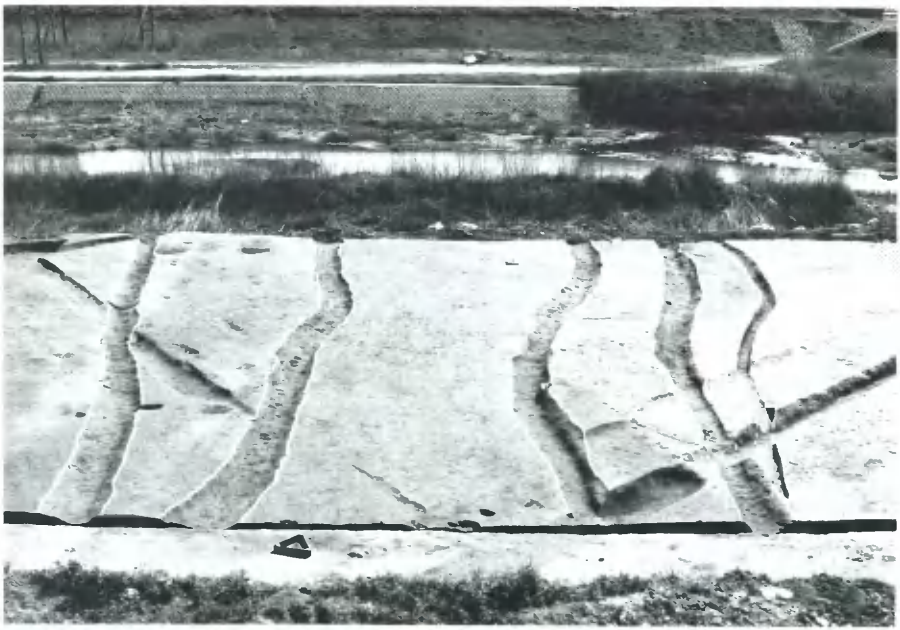
1．土壙44
（西から）



2．溝54・55
土壙49
（北から）

3．鍛冶炉1
（北西から）

1．溝45
（北東から）



2．溝60・61・63・65・66（北東から）

1．10～13C・D区の中世遺構（南東から）

2．10～13C・D区の中世遺構（北から）

1．井戸16
（北から）

2．井戸16の礫出土状態

3．13～15C・D区の中世遺構（北西から）

1．井戸17
（南から）

2．井戸17の遺物出土状態
（東から）

3．井戸18
（北から）

4．井戸18の遺物出土状態
（南から）

1. 土壙51
(北東から)

2. 土壙68
(北から)

3. 土壙69
(西から)

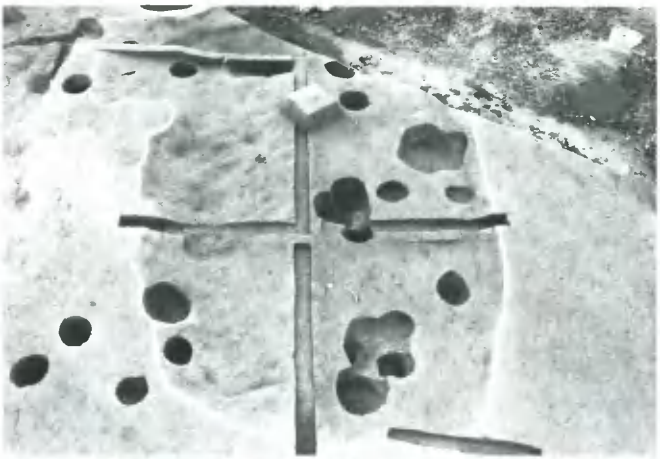
図版34

1．土壙76（手前）・77（向う側）（西から）

2．土壙墓１の石組（東から）

3．土壙墓１の人骨出土状況（東から）

1．落ち込み２
（北から）



2．溝87遺物出土状況
（東から）

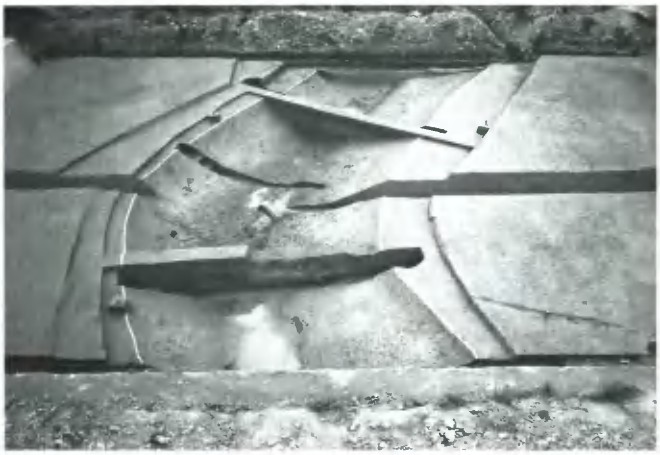
3．溝98
（北東から）

図版36

1．19H区弥生時代の
遺構〈溝110〉
（北東から）

2．18H区弥生時代の
遺構
（北西から）

1．旧河道２
（北東から）



2．旧河道２の橋脚列
検出状態
（北東から）

3．旧河道２の橋脚列周辺の木製品出土状態

4．旧河道２の橋脚列周辺の木製品出土状態

図版38

1．旧河道２の橋脚列（南東から）

2．旧河道２の橋脚列
（南から）

3．旧河道２の断面

1．土壙84
（東から）

2．土壙89
（南から）

3．溝122（右）・
溝123（左）
（北東から）

図版40

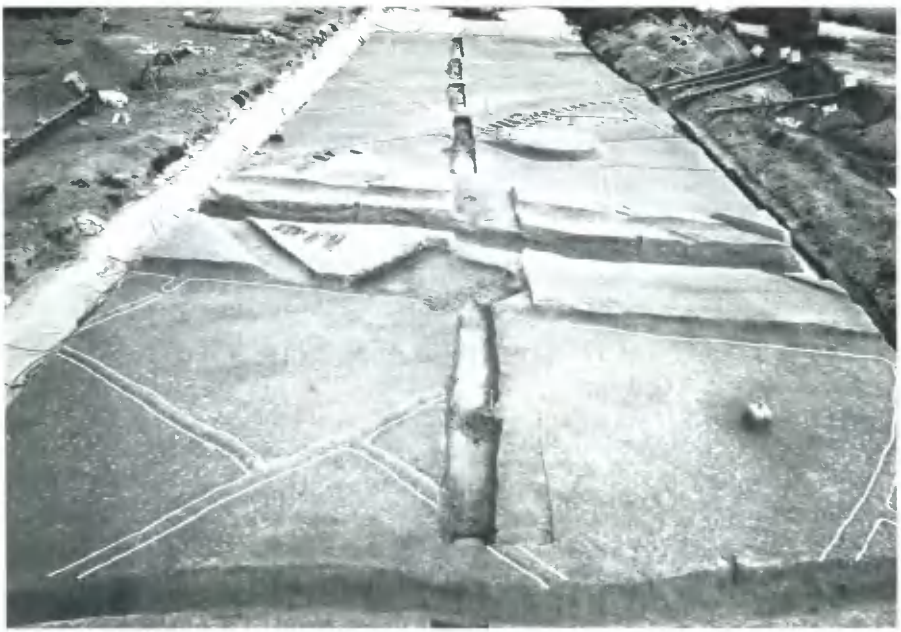
1．溝127
（北東から）

2．溝127の断面
（北東から）

3．溝127の断面
（北東から）

4．土壙90
（南東から）

1．34・35C・D区の溝群（北東から）



2．33～36C・D区弥生時代後期の水田（北西から）

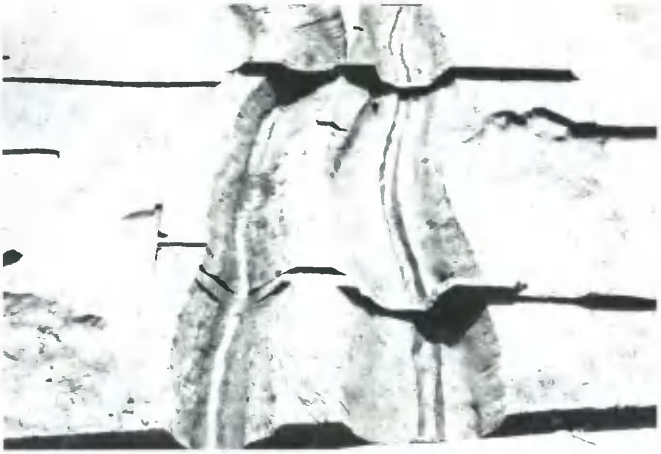
図版42

1．34・35D区の稲株痕
（北東から）

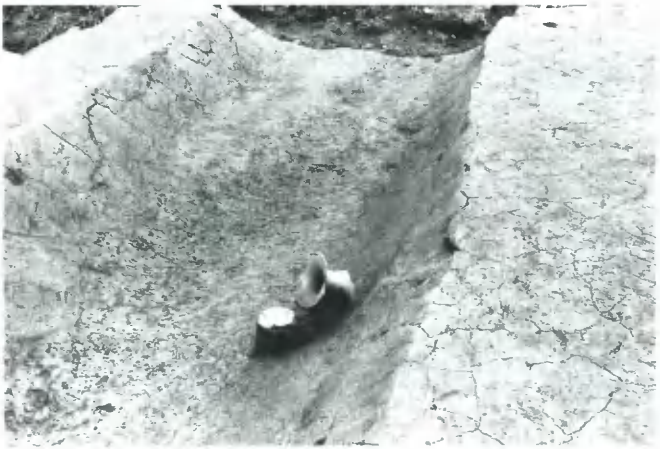
2．畎畝〈溝138・139〉
（北東から）

3．溝133・134・135
（北東から）

1．溝136〈右〉・137〈左〉
（北東から）



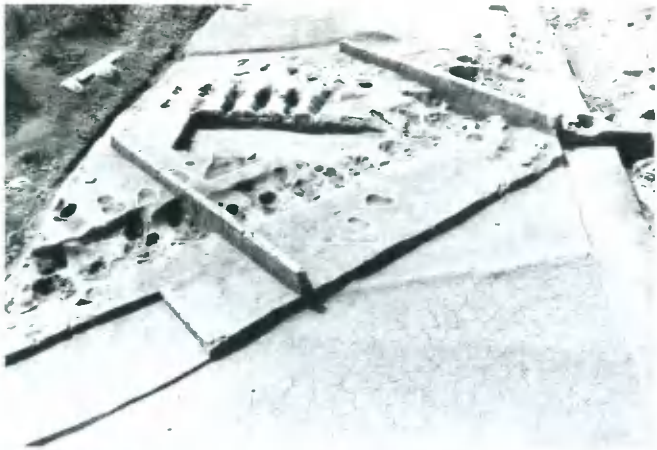
2．溝136の遺物出土状態
（北東から）



3．溝137の遺物出土状態
（南西から）

図版44

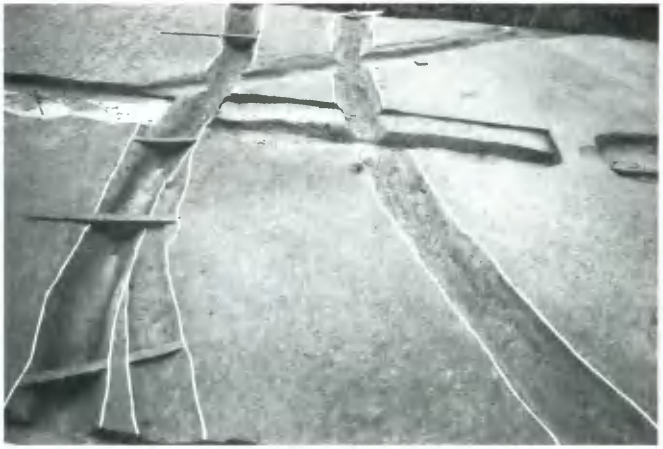
1．柱穴列3・4・5
（南東から）



2．柱穴列5
（南東から）

3．柱穴列6
（北東から）

1. 溝141〈右〉・142〈左〉（北東から）

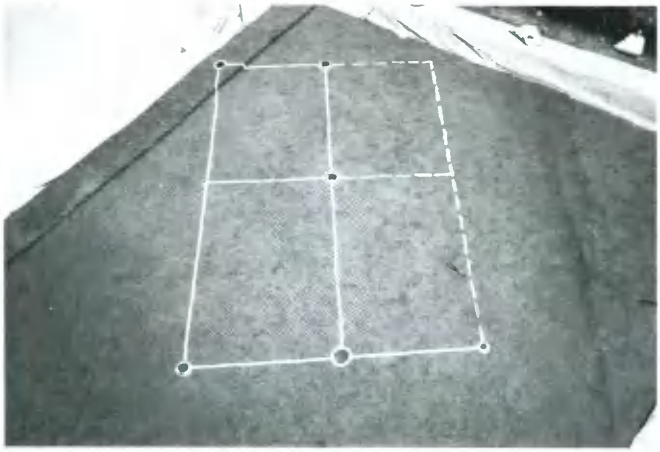


2. 溝145・146・147（南東から）

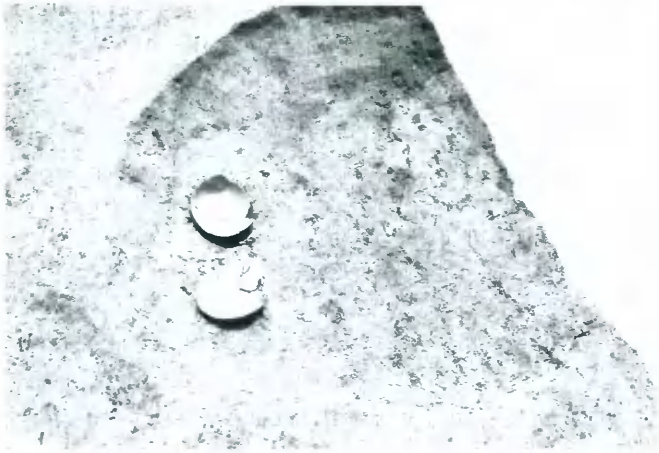
3. 溝145（南東から）

図版46

1．建物13
（南から）



2．土壙92
（東から）



3．33～36C・D区
作業風景
（南東から）

旧河道１出土遺物

1．旧河道１出土遺物

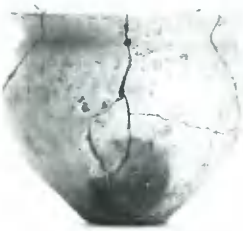
2．旧河道２出土遺物

3．土壙１出土遺物

40

39

41


42

44

50

60

59

61

62

62

65

竪穴住居１・井戸１・井戸２出土遺物

69

67

68

71

79

84

98

85

80

87

81

83

井戸２出土遺物

91

92

95

86

82

97

94

96

100

99

101

103

井戸２出土遺物

104

105

124

125

131

122

135

123

74

77

75

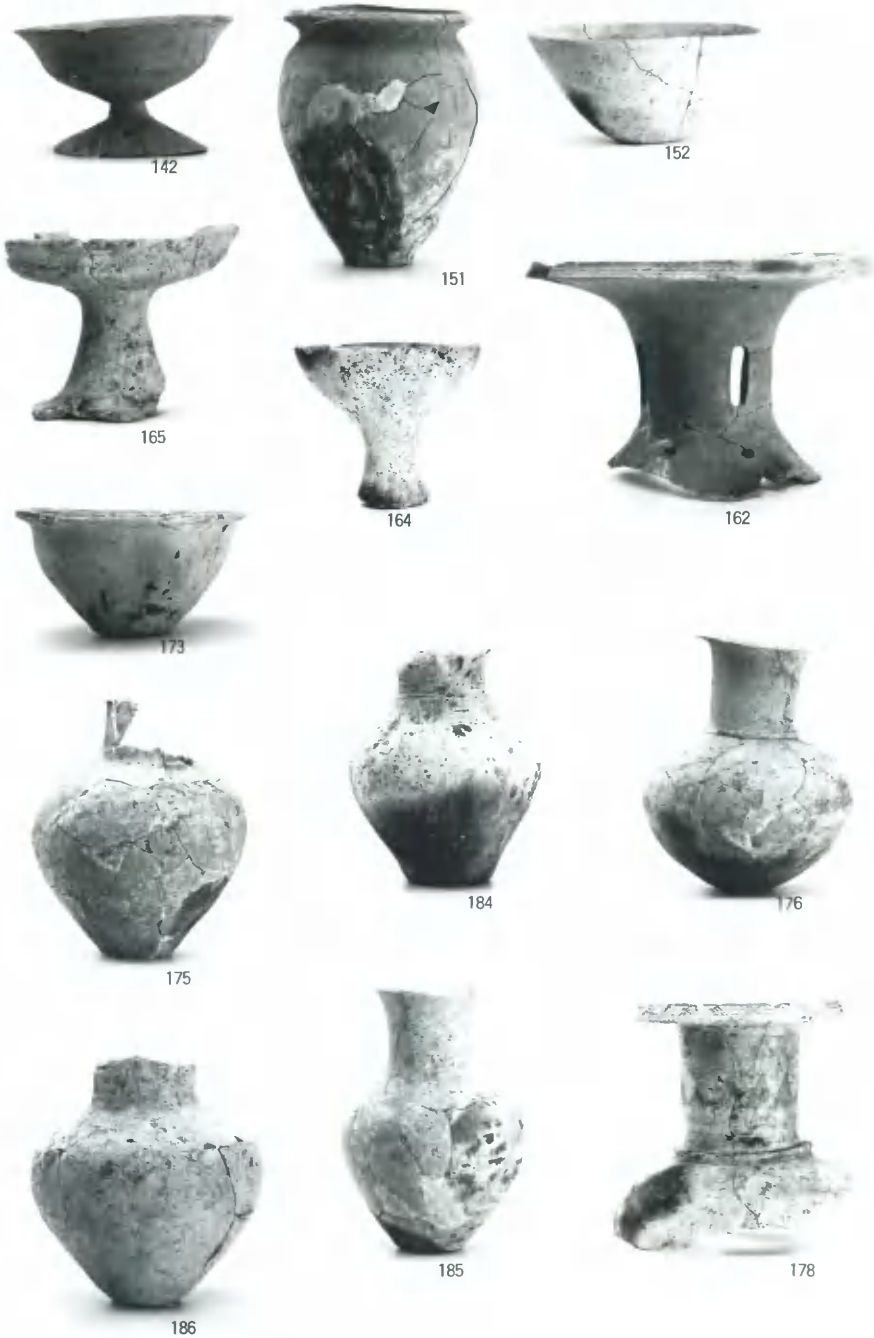
78

72

73

139

井戸２・３出土遺物



井戸３・５・６・７・９出土遺物

191

189

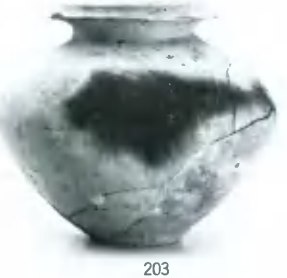
187

190

194

195

193


203

201

202

204

205

井戸９出土遺物

242

219

223

218

217

221

230

229

223

235

259

244

井戸９出土遺物

247

243

216

256

248

246

254

260

257

253

255

278

267

270

井戸９出土遺物

271

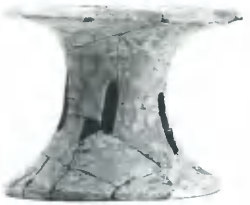
265

261

262

275

263


280

279

286

287

295

307

井戸９・土壙３・７出土遺物

303

307

314

304

312

306

308

311

310

315

316

317

土壙７出土遺物

313

318

321

320

323

326

325

319

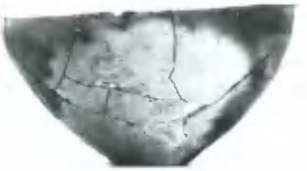
322

337

土壙７・13出土遺物

338

339


353

347

364

365

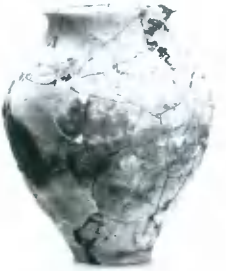
369

385

380

379

378


386

土壙13・23・34出土遺物

370

377

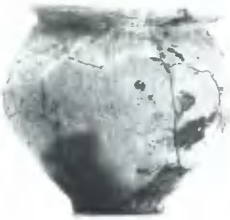
375

383

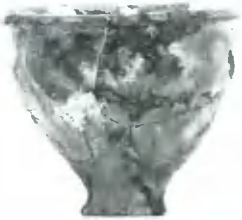
372

412

373


(685)

391


393

388

392

土壙34出土遺物

395

404

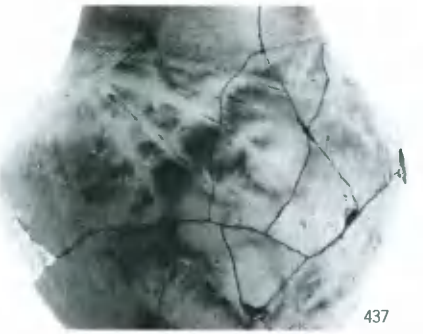
410

408

422

438

437


437

439

440

441

土壙34・37・溝13出土遺物

449

453

452

454

455

457

458

460

463

461

477

481

溝13・17・25出土遺物

487

486

484

483

488

482

489

494

495

497

498

499

溝25・竪穴住居10出土遺物

504

503

507

506

510

517

518

520

521

529

539

546

548

井戸11・12・14・落ち込み1・溝47・63出土遺物

W1

W2

W3

W6

W4

W5

W7

W8

W25

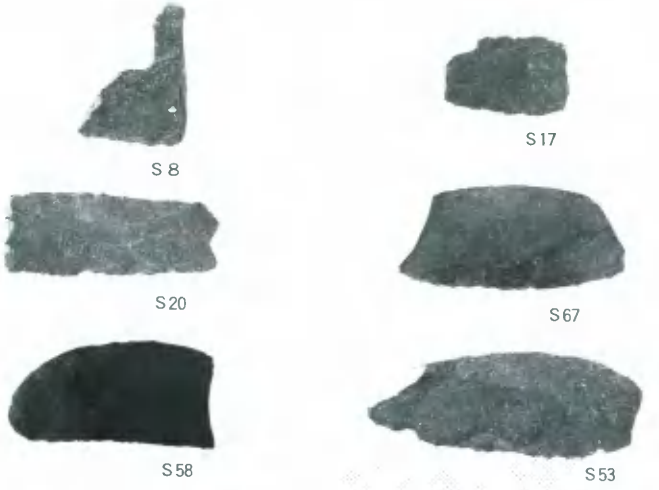
W9

W11

旧河道１・井戸17・18・旧河道２出土木製品

旧河道２出土木製品

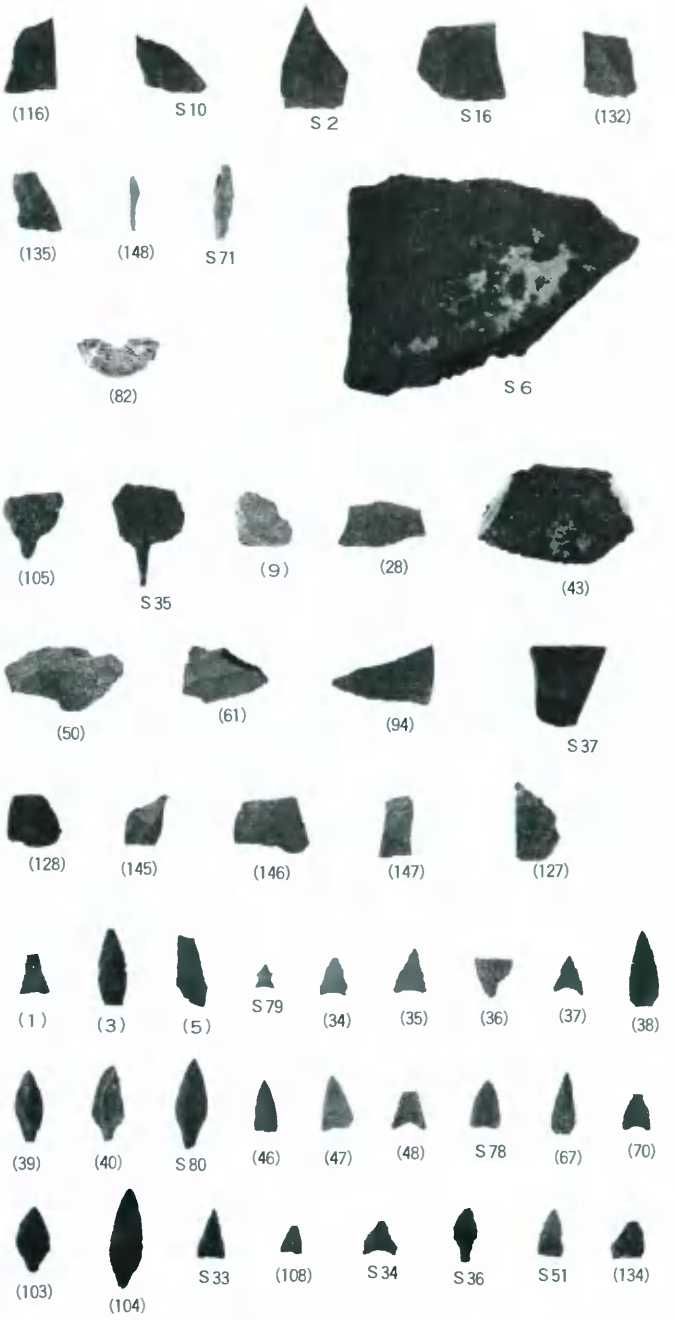
1．金属製品



2．石製品(1)

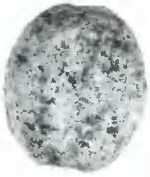
(8)
S 72
S 73
S 81
S 50
S 1
S 49
(102)
S 64
S 55
S 56
(85)
(149)
(150)
(152)
(153)
S 54
(143)
(151)
(144)
(117)
(120)
(133)
S 24
S 39
(129)
S 42
(142)
(140)
S 46

石製品(2)

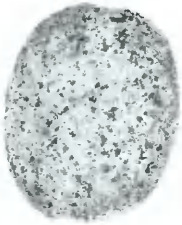

(116)
S10
S2
S16
(132)
(135)
(148)
S71
(82)
S6
(105)
S35
(9)
(28)
(43)
(50)
(61)
(94)
S37
(128)
(145)
(146)
(147)
(127)
(1)
(3)
(5)
S79
(34)
(35)
(36)
(37)
(38)
(39)
(40)
S80
(46)
(47)
(48)
S78
(67)
(70)
(103)
(104)
S33
(108)
S34
S36
S51
(134)

石製品(3)

S7

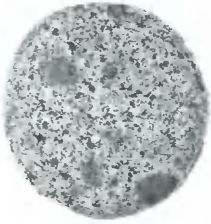

S9

S14


S15

S25

S11


S60

S59

S27

S26

C 10

C 44

C 9

(62)

(63)

C 80

C 67

C 69

C 74

C 72

C 85

C 11

C 12

C 42

C 94

C 100

C 90

C 102

C 41

C 38

C 37

C 39

C 40

C 45

C 54

C 34

C 36

C 35

C 42

土製品

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97

百間川原尾島遺跡 4

旭川放水路（百間川）改修
工事に伴う発掘調査　X

1995年３月20日　印刷
1995年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発　行　建設省岡山河川工事事務所
岡山市鹿田町2-4-36
岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印　刷　友野印刷株式会社
岡山市高柳西町1-23